吉武遺跡群

XII

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 6

－弥生時代墳墓の報告３－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集

2000

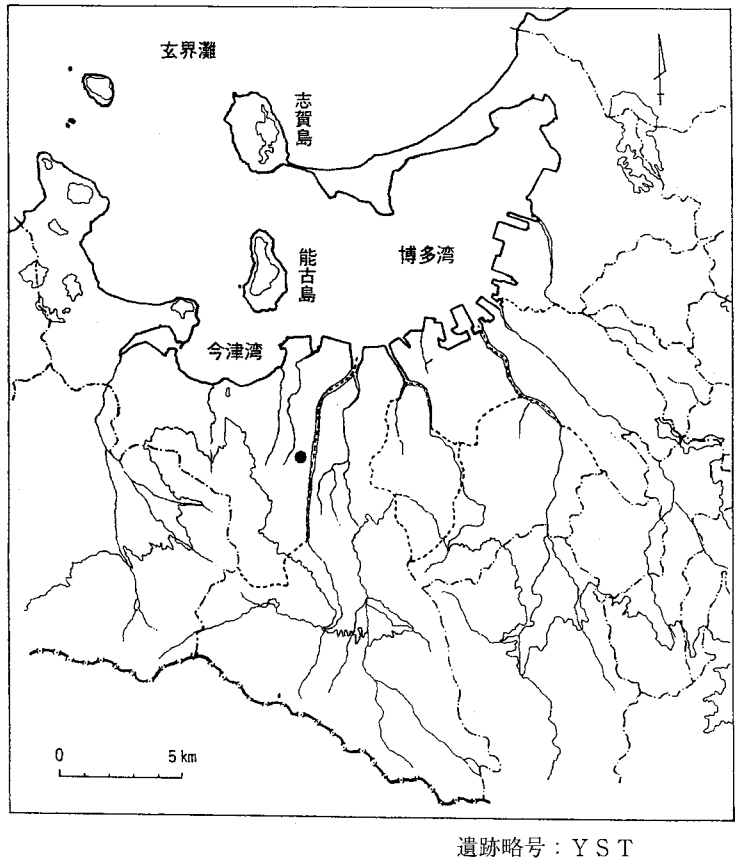
福　岡　市　教　育　委　員　会

吉武遺跡群

XII

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 6

福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集



遺跡略号：ＹＳＴ
1・2・4・6・8・9次
調査番号：8102,8234,8335
8416,8518,8535

2 0 0 0

福 岡 市 教 育 委 員 会

2号支線道路の調査
（正面遠方は能古島）

序

古来より大陸交易の門戸であった福岡市域には、中国・朝鮮半島をはじめとする東アジア地域との交流を示す数多くの遺跡が残されております。

このうち、市域の西部に位置する早良平野では、北流して博多湾に注ぐ室見川の中流一帯を中心に弥生時代から古代までの長期に亘る遺跡群が分布しており、なかでも吉武遺跡群はこれらの中心をなす遺跡群と考えられます。

さて、今年度報告しますのは、昭和５６年度から６０年度まで調査された弥生時代全期に亘る墓地・生活跡についての報告と成果についての総括であります。

本遺跡群の調査成果は、弥生時代に始まる我が国の初期的な『クニ』の実態を追究するうえで非常に重要な意味を持つものと理解されます。

最後に本報告書が市民の方々の文化財に対する認識と理解につながり、更に学術研究の分野にいささかでも貢献することが出来ましたならば幸甚に存じます。

また、本報告書の作成にあたり、ご協力をいただきました関係者の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成12年3月15日

福岡市教育委員会

教育長　西　　憲一郎

例　言

1．本書は、飯盛・吉武地区土地改良事業に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字吉武・飯盛地内に所在する吉武遺跡群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和56(1981)年度から昭和60(1985)年度までの間、福岡市教育委員会が実施した。

3．検出した各遺構は、土壙－ＳＫ・溝状遺構－ＳＤ・竪穴住居跡－ＳＣ・掘立柱建物－ＳＢ・柱穴－ＳＰ・木棺墓－Ｍ・甕棺墓－Ｋ・石棺墓－ＳＳ・石蓋土壙墓－ＳＧの略号を付した。

4．本書に掲載した遺構実測図は、各年度の調査担当者及び調査補助員が作成した。また、遺物実測図は、第３・４次調査分を横山邦継、第６次調査分を力武卓治で作成した。
また、甕棺復元は、第３・４次調査分を臨時職員小森佐和子・土斐崎つや子・安野良・副田則子、第６次調査分を臨時職員池田由美・宮崎マリ子・渡辺敦子・生垣綾子で行った。

5．本書に使用した図面類の整図および製図は、調査担当者の他に、第３・４次分を臨時職員 安野良・副田則子、第６次調査分を調査補助員の北村幸子・羽方　誠で行った。

6．本書に使用した写真は、第３・４次調査の遺構を下村　智(現別府大学助教授)、同６次調査の遺構を力武で撮影した。また、第３．４次調査遺物を横山、同６次調査遺物を力武で撮影した。

7．本書に使用した方位は、全て磁北で、標高はＴＰ(東京湾平均潮位)による。

8．本書の執筆は、第一章・第二章。第三章第一節・二節を横山、第三章第三節を力武、第四章を担当者で討議して行った。また、編集は、関係者の協力を得て力武・横山で行った。

9．本書に収録された出土遺物、写真・図面などの記録類は、平成１２年度に埋蔵文化財センターに搬入・収蔵する予定である。

10.　表紙題字は、埋蔵文化財センター 杉山悦子氏にお願いした。記して感謝します。

本　文　目　次

第一章　はじめに
　1．調査報告書作成に至る経過と刊行計画 …… 1
　2．報告書作成の組織 …… 1

第二章　遺跡の立地と環境 …… 3

第三章　調査の報告 …… 7
　第一節　第3次調査報告 …… 7
　　1．H・I地区 …… 7
　　2．G・H12地区 …… 9
　　3．G12地区 …… 17
　第二節　第4・5次調査報告 …… 29
　　1．1号幹線道路2区墓地 …… 29
　　2．LM地区墓地 …… 46
　　3．MN地区墓地 …… 81
　第三節　第6次調査報告 …… 107
　　・2号支線道路 …… 107
　　・大石地区 …… 129

第四章　おわりに …… 167～182
　1．各期おける遺構の移り変わり …… 167
　2．遺跡群出土の副葬遺物について …… 173

挿 図 目 次

Fig. 1 吉武遺跡群位置図 …… 3
Fig. 2 吉武遺跡群調査区配置図(1/5,000) …… 4
Fig. 3 第3～5次調査区位置図(1/4,000) …… 5
Fig. 4 第3次調査区弥生時代遺構全体図(1/450) …… 6
Fig. 5 第3次HI地区K100～108号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 8
Fig. 6 第3次HI地区K104・107号甕棺実測図(1/6,1/10) …… 9
Fig. 7 第3次GH12地区K109～114・K116～120・142号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 10
Fig. 8 第3次GH12地区K121・122・124～133号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 11
Fig. 9 第3次GH12地区K121・129号甕棺実測図(1/10) …… 12
Fig. 10 第3次GH12地区K132号甕棺実測図(1/10) …… 14
Fig. 11 第3次GH12地区K134・136～141・143・K145・146号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 15
Fig. 12 第3次G12地区K06～17号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 16
Fig. 13 第3次G12地区K13・37号甕棺実測図(1/10) …… 18
Fig. 14 第3次G12地区K18～30号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 19
Fig. 15 第3次G12地区K31～40号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 20
Fig. 16 第3次G12地区K41～47・49～57号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 21
Fig. 17 第3次G12地区K58～60・74・80～85号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 22
Fig. 18 第3次G12地区SS01号石棺墓・SG01石蓋土壙墓出土状況実測図(1/30) …… 23
Fig. 19 第3次G12地区SG01石蓋土壙墓副葬ガラス玉実測図(実大) …… 23
Fig. 20 第3次調査弥生時代遺構変遷図 …… 24
Fig. 21 第4次1号幹線道路2区弥生時代遺構全体図(1/200) …… 30
Fig. 22 第4次1号幹線道路2区K01～12号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 31
Fig. 23 第4次1号幹線道路2区K13～29号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 32
Fig. 24 第4次1号幹線道路2区K15・62号甕棺実測図(1/10) …… 34
Fig. 25 第4次1号幹線道路2区K30～44号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 35
Fig. 26 第4次1号幹線道路2区K45～54号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 36
Fig. 27 第4次1号幹線道路2区K55～65・K68号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 37
Fig. 28 第4次1号幹線道路2区K66・69～77号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 38
Fig. 29 第4次1号幹線道路2区K78～84号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 39
Fig. 30 第4次1号幹線道路2区K85～93号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 40
Fig. 31 第4次1号幹線道路2区K94～100号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 41
Fig. 32 第4次1号幹線道路2区SS01・02石棺出土状況実測図(1/30) …… 42
Fig. 33 第4次1号幹線道路2区弥生時代遺構変遷図 …… 43
Fig. 34 第4次LM地区弥生時代遺構全体図(1/200) …… 46
Fig. 35 第4次LM地区K101～105・108～111・270号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 47
Fig. 36 第4次LM地区K104号甕棺実測図(1/3) …… 48
Fig. 37 第4次LM地区K112・114・116・117・119～123号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 49
Fig. 38 第4次LM地区K124～132・K135～137号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 50
Fig. 39 第4次LM地区K134・158号甕棺実測図(1/10) …… 52
Fig. 40 第4次LM地区K133・134・138～144・147号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 53
Fig. 41 第4次LM地区K145・146・148・149・151・153号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 54
Fig. 42 第4次LM地区K150・152・154～156・159・K160号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 55
Fig. 43 第4次LM地区K157・158・161～165号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 56
Fig. 44 第4次LM地区K163・164号甕棺実測図(1/6,1 /10) …… 58
Fig. 45 第4次LM地区K166～171・175号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 59
Fig. 46 第4次LM地区K172～174・267・176～180・183～187号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 60
Fig. 47 第4次LM地区K181・182・188～192・194・203号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 61
Fig. 48 第4次LM地区K193・195～200号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 62
Fig. 49 第4次LM地区K202・204～208号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 63
Fig. 50 第4次LM地区K209～212・214・215号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 64
Fig. 51 第4次LM地区K213・216～219・221号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 65
Fig. 52 第4次LM地区K220・K222～225・227・235号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 66
Fig. 53 第4次LM地区K226・228・230・231・234・236号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 67
Fig. 54 第4次LM地区K232・233・237・239・242・243・K255・K266・K268・269号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 68
Fig. 55 第4次LM地区K238・240・244・245・247・248号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 69
Fig. 56 第4次LM地区K246・249～253号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 70
Fig. 57 第4次LM地区K254・256～261号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 71

Fig. 58 第４次LM地区K262・263号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……72
Fig. 59 第４次LM地区SS03～06号石棺墓出土状況実測図(1/30) ……73
Fig. 60 第４次LM地区SS07・08・10号石棺墓、SX03号土壙墓出土状況実測図(1/30) ……74
Fig. 61 第４次LM地区SK01・06・12・14～16・20・23・26号土壙墓出土状況実測図(1/30) ……75
Fig. 62 第４次LM地区SK14号土壙出土土器実測図(1/3) ……76
Fig. 63 第４次LM地区弥生時代遺構変遷図 ……77
Fig. 64 第４次MN地区弥生時代遺構全体図(1/200) ……82
Fig. 65 第４次MN地区K01～04・06・07・10～21号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……83
Fig. 66 第４次MN地区K22～34号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……84
Fig. 67 第４次MN地区K35・37・39～50号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……85
Fig. 68 第４次MN地区K52～60・63～67号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……86
Fig. 69 第４次MN地区K56・72号甕棺実測図(1/10) ……88
Fig. 70 第４次MN地区K68～79号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……89
Fig. 71 第４次MN地区K80～83・85～94号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……90
Fig. 72 第４次MN地区K95～104号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……91
Fig. 73 第４次MN地区K104号甕棺実測図(1/3) ……92
Fig. 74 第４次MN地区K104号甕棺墓副葬土器実測図(1/3) ……93
Fig. 75 第４次MN地区K105～114号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……94
Fig. 76 第４次MN地区K115～125号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……95
Fig. 77 第４次MN地区K126～134・137号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……96
Fig. 78 第４次MN地区K131号甕棺実測図(1/6) ……97
Fig. 79 第４次MN地区K140～149号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……99
Fig. 80 第４次MN地区K140・146号甕棺実測図(1/10,1/6) ……101
Fig. 81 第４次MN地区SK11号土壙出土状況実測図(1/30) ……102
Fig. 82 第４次MN地区弥生時代遺構変遷図 ……103
Fig. 83 ２号支線道路遺構配置図(1/200) ……108
Fig. 84 Ｋ１～３号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……110
Fig. 85 Ｋ３号甕棺実測図(1/10) ……110
Fig. 86 Ｋ４・５号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……111
Fig. 87 Ｋ５号甕棺実測図(1/10) ……111
Fig. 88 Ｋ６・７号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……112
Fig. 89 Ｋ６号甕棺実測図(1/10) ……112
Fig. 90 Ｋ８号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……113
Fig. 91 Ｋ７・８号甕棺実測図(1/10) ……113
Fig. 92 Ｋ９・10号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……114
Fig. 93 K10号甕棺実測図(1/10) ……114
Fig. 94 K11・12号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……115
Fig. 95 K11号甕棺実測図(1/10) ……115
Fig. 96 K13号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……116
Fig. 97 K13号甕棺実測図(1/10) ……116
Fig. 98 K14号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……117
Fig. 99 K14号甕棺実測図(1/10) ……117
Fig.100 K15号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……118
Fig.101 K15号甕棺実測図(1/10) ……118
Fig.102 K16・17号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……119
Fig.103 K16号甕棺実測図(1/10) ……119
Fig.104 K18～20号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……120
Fig.105 K18号甕棺実測図(1/５) ……120
Fig.106 K21～24号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……121
Fig.107 K21・22号甕棺実測図(1/10) ……121
Fig.108 K25～27号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……122
Fig.109 K25～27号甕棺実測図(1/10) ……122
Fig.110 K28号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……123
Fig.111 K28号甕棺実測図(1/10) ……123
Fig.112 K28号甕棺遺物実測図(1/２) ……124
Fig.113 K29号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……125
Fig.114 K29号甕棺実測図(1/10) ……125
Fig.115 K31・32号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……126
Fig.116 K31号甕棺実測図(1/10) ……126
Fig.117 K33～36号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……127
Fig.118 K34号甕棺実測図(1/10) ……127

Fig.119 K30祭祀遺構出土状況実測図(1/30) ……128
Fig.120 K30祭祀遺構出土遺物実測図(1/5) ……128
Fig.121 第6次大石地区弥生墓地全体図 ……130
Fig.122 K3・5・7号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……131
Fig.123 K8・9・11～13号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……132
Fig.124 K16・19～23号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……133
Fig.125 K24・28～32号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……134
Fig.126 K33・34・36・39・40号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……135
Fig.127 K44・48・49・54・55号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……136
Fig.128 K57・58・61・63・66号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……137
Fig.129 K69・72・75・78・79号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……138
Fig.130 K80号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……139
Fig.131 K80号甕棺実測図(1/10) ……139
Fig.132 K83・85・88・93～95号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……140
Fig.133 K96～99号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……141
Fig.134 K100～102号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……142
Fig.135 K103～107号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……143
Fig.136 K108～112・114号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……144
Fig.137 K116～118・120～122号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……145
Fig.138 K123・124・126・127号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……146
Fig.139 K128・129・131・138号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……147
Fig.140 K139・143～145・147号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……148
Fig.141 K152・153・155～157号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……149
Fig.142 K158～161・163・164号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……150
Fig.143 K167・169・170号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……151
Fig.144 K173～177号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……152
Fig.145 K178・179・182号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……153
Fig.146 K183・184・189・190号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……154
Fig.147 K191～193号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……155
Fig.148 K194～199号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……156
Fig.149 K200～202号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……157
Fig.150 SA1～4号祭祀土壙(1/30) ……158
Fig.151 SA5号祭祀土壙(1/30) ……159
Fig.152 筒形器台の出土状況 ……159
Fig.153 M2・3・7号木棺墓実測図(1/30) ……160
Fig.154 M8号木棺墓，D1・2号土壙墓実測図(1/30) ……161
Fig.155 D3・4・5号土壙墓実測図(1/30) ……162
Fig.156 D6・7号土壙墓実測図号(1/30) ……163
Fig.157 D8～10号土壙墓実測図号(1/30) ……164
Fig.158 D11・12号土壙墓実測図(1/30) ……165
Fig.159 第6次大石地区全景　北東より ……166
Fig.160 吉武遺跡群弥生時代遺構変遷図 ……168
Fig.161 吉武高木・大石遺跡における木棺墓副葬品図 ……169
Fig.162 吉武遺跡群における甕棺副葬品図(吉武高木・大石、第1次調査) ……170
Fig.163 樋渡墳丘墓における甕棺副葬品図 ……171
Fig.164 吉武高木・大石遺跡、飯倉唐木遺跡、比恵遺跡6次出土細形銅剣図(1/4) ……172
Fig.165 樋渡墳丘墓出土銅剣図(1/4) ……173
Fig.166 吉武高木・大石遺跡出土銅矛図(1/4) ……174
Fig.167 吉武高木・大石遺跡出土銅戈図(1/4) ……174
Fig.168 吉武高木遺跡出土勾玉図(1/2) ……175
Fig.169 吉武高木・宇木汲田・梶栗浜・名柄・大県遺跡出土多鈕細紋鏡図(1/2) ……176
Fig.170 有田遺跡177次・樋渡墳丘墓出土銅鏡図(1/2) ……177
Fig.171 吉武遺跡群出土甕棺図(その1)(吉武高木遺跡、1/30) ……178
Fig.172 吉武遺跡群出土甕棺図(その2)(吉武大石遺跡・第1～2次調査、1/30) ……179
Fig.173 吉武遺跡群出土甕棺図(その3)(樋渡墳丘墓、1/30) ……180
Fig.174 吉武遺跡群出土甕棺図(その4)(第1・3・4次調査、1/30) ……181

図 版 目 次

PL. 1　第３次調査地区全景(航空写真、南から)・Ｇ12地区全景(西から)
PL. 2　第３次Ｇ12地区全景(西から)・Ｋ15～21・26～30・35～41・51号甕棺墓出土状況(西から)
PL. 3　第３次Ｇ12地区Ｋ49～51号甕棺墓出土状況(東から)・Ｋ12・14～20・21・28号甕棺墓出土状況(西から)
PL. 4　第３次Ｇ12地区Ｋ13・27号甕棺墓出土状況(北から)・Ｋ36・37号甕棺墓出土状況(南から)
PL. 5　第３次Ｇ・Ｈ12地区全景(東から)・Ｋ128・129・134号甕棺墓出土状況(北東から)
PL. 6　第３次Ｇ・Ｈ12地区Ｋ132・133号甕棺墓出土状況(東から)・Ｋ121・122・136号甕棺墓出土状況(西から)
PL. 7　第３次Ｇ・Ｈ12地区Ｋ127～129・134号甕棺墓出土状況(南東から)・Ｉ12地区Ｋ104・106・107号甕棺墓出土状況
PL. 8　第４次調査地区１号幹線道路２区全景(南西から)
PL. 9　第４次１号幹線道路２区全景(東から)・１号幹線道路２区全景(南から)
PL.10　第４次１号幹線道路２区近景(南から)・Ｋ14～18号甕棺墓出土状況(西から)
PL.11　第４次１号幹線道路２区Ｋ08号甕棺墓出土状況(南から)・Ｋ20・62号甕棺墓出土状況(南から)
PL.12　第４次１号幹線道路２区Ｋ09号甕棺墓出土状況(北東から)・Ｋ12～18号甕棺墓出土状況(南から)
PL.13　第４次１号幹線道路２区Ｋ29～31・34号甕棺墓出土状況(北から)・Ｋ47号甕棺墓出土状況(南東から)
PL.14　第４次１号幹線道路２区Ｋ55号甕棺墓出土状況(北から)・Ｋ22・23・42・57～60・63号甕棺墓出土状況(東から)
PL.15　第４次１号幹線道路２区Ｋ52・64号甕棺墓出土状況(南東から)・Ｋ36・67～69号甕棺墓出土状況(東から)
PL.16　第４次１号幹線道路２区SS01石棺墓出土状況(北から)・SS02石棺墓出土状況(北西から)
PL.17　第４次調査ＬＭ地区全景(西から)・ＬＭ地区全景(北から)
PL.18　第４次調査ＬＭ地区全景(北から)・ＬＭ地区全景(西から)
PL.19　第４次調査ＬＭ地区Ｋ104号甕棺墓出土状況(南から)・Ｋ134号甕棺墓出土状況(北から)
PL.20　第４次調査ＬＭ地区Ｋ154・157・158号甕棺墓出土状況(北から)・Ｋ163～165号甕棺墓出土状況(西から)
PL.21　第４次調査ＬＭ地区調査状況(昼間作業)・第４次調査ＬＭ地区調査状況(夜間作業)
PL.22　第４次調査ＭＮ地区全景(東から)
PL.23　第４次調査ＭＮ地区作業風景(北西から)・ＭＮ地区Ｋ56号甕棺墓出土状況(北から)
PL.24　第４次調査ＭＮ地区Ｋ13・15・16・69・71・72号甕棺墓出土状況(南西から)・Ｋ104号甕棺墓出土状況(南から)
PL.25　第４次調査ＭＮ地区Ｋ13・69・69・71・72号甕棺墓出土状況(北東から)・Ｋ130・131号甕棺墓出土状況(西から)
PL.26　第４次調査ＭＮ地区Ｋ140・141号甕棺墓出土状況(北から)・Ｋ145・146号甕棺墓出土状況(南から)
PL.27　第３次調査Ｋ13・37・104・107上棺・129号甕棺
PL.28　第３次調査Ｋ121・132号甕棺・第４次調査15・56・62号甕棺
PL.29　第４次調査Ｋ72・104・131・140・146号甕棺
PL.30　第４次調査Ｋ104・134・158・163・164号甕棺・SK14土壙出土土器
PL.31　２号支線道路発掘作業風景
PL.32　２号支線道路甕棺墓出土状況①
PL.33　２号支線道路甕棺墓出土状況②
PL.34　２号支線道路甕棺墓出土状況③
PL.35　２号支線道路甕棺墓出土状況④
PL.36　２号支線道路甕棺墓出土状況⑤
PL.37　２号支線道路出土甕棺①
PL.38　２号支線道路出土甕棺②
PL.39　２号支線道路出土甕棺③
PL.40　２号支線道路出土甕棺④
PL.41　２号支線道路出土甕棺⑤
PL.42　大石地区甕棺墓出土状況①
PL.43　大石地区甕棺墓出土状況②
PL.44　大石地区甕棺墓出土状況③
PL.45　大石地区甕棺墓出土状況④
PL.46　大石地区甕棺墓出土状況⑤
PL.47　大石地区祭祀土壙出土状況
PL.48　大石地区木棺墓・土壙墓出土状況

表　目　次

Tab.1　吉武遺跡群調査一覧表 …… 2
Tab.2　第３次調査弥生時代墳墓一覧表 ……26～28
Tab.3　第４次調査弥生時代墳墓一覧表(１)(1号幹線道路2区) ……44・45
Tab.4　第４次調査弥生時代墳墓一覧表(２)(LM16･17地区) ……78～80
Tab.5　第４次調査弥生時代墳墓一覧表(３)(MN16･17地区) ……104～106
Tab.6　第６次調査弥生時代墳墓一覧表 ……109

付　図　目　次

吉武遺跡群調査区全体図

第一章　はじめに

1．調査報告書作成に至る経過と刊行計画

吉武遺跡群は、昭和56～60年度の調査で弥生時代前期末～後期にかけての大規模な墓地と集落が発見され、我が国の『クニ』の成立を考える上で非常に重要な遺跡と認知された。また、平成４・５年度の国史跡指定化を契機に、遺跡の将来の整備像を明らかにしていくために、平成５年度に『吉武高木遺跡調査研究指導委員会』が発足した。そこでは今後の検討スケジュールを確定するなかで本遺跡の弥生時代遺構に関する調査報告書の作成計画が決定され、平成６年度から報告書の刊行作業が開始された。弥生時代遺構の報告は今年度で完結し、来年度からの予定は以下のようである。

【既　刊】

平成６年度　『吉武遺跡群　Ⅶ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書　１－弥生時代掘立柱建物の報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集　１９９５

平成７年度　『吉武遺跡群　Ⅷ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書　２－弥生時代墳墓の報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集　１９９６

平成８年度　『吉武遺跡群　Ⅸ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書　３－弥生時代生活遺構の調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集　１９９７

平成９年度　『吉武遺跡群　Ⅹ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書　４－弥生時代の墓地の調査報告書 1－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集　１９９８

平成10年度　『吉武遺跡群　Ⅺ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書　５－弥生時代墓地の調査報告 2－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集　１９９９

平成11年度　『吉武遺跡群　Ⅻ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書　６－弥生時代墓地の調査報告 3－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集　２０００

【平成１２年度以降の刊行計画】

年　度	報告書名	報告内容
平成12年度	吉武遺跡群　ⅩⅢ	第１・２次調査旧石器・縄文・古墳時代集落の調査報告
平成13年度	吉武遺跡群　ⅩⅣ	第６次調査旧石器・縄文時代集落の調査報告
平成14年度	吉武遺跡群　ⅩⅤ	第３・４・６次調査古墳の調査報告
平成15年度	吉武遺跡群　ⅩⅥ	第３・４・６次調査古墳時代集落の調査報告①
平成16年度	吉武遺跡群　ⅩⅦ	第３・４・６次調査古墳時代集落の調査報告②
平成17年度	吉武遺跡群　ⅩⅧ	第４・６次調査古代寺院の調査報告
平成18年度	吉武遺跡群　ⅩⅨ	第４・６次調査古代・中世集落の調査報告

2．報告書作成の組織

【整理主体】　福岡市教育委員会　教育長　西憲一郎

【整理総括】　埋蔵文化財課長 山崎純男、第一調査係長 山口譲治、第二調査係長 力武卓治

【整理庶務】　文化財整備課

【整理業務】　力武卓治、横山邦継

【整理補助】　北村幸子、羽方　誠

【整理作業員】　小森佐和子、土斐崎つや子、安野　良、副田則子、池田由美、宮崎マリ子
渡辺敦子、生垣綾子

Tab.1　吉武遺跡群調査一覧表

次数	調査番号	次数名	所在地	調査期間	調査面積(m²)	担当者	報告書
1	8102	圃場整備第1次	西区大字飯盛字本名地内	19811101～19820315	12,000	二宮忠司・小林義彦 田中寿夫	②・⑥ ⑧～⑪
2	8234	圃場整備第2次	西区大字飯盛地内	19820901～19830215	21,000	二宮忠司	②・⑥ ⑧～⑪
3	8235	田・飯盛線第1次	西区大字飯盛字トイ他地内	19820922～19830212	5,200	山崎龍雄	①
4	8335	圃場整備第3次	西区大字吉武字桜町110他地内	19830912～19840324	25,000	横山邦継 下村 智	② ⑧～⑪
5	8415	田・飯盛線第2次	西区大字飯盛地内	19840413～19840531	1,600	浜石哲也	④
6	8416	圃場整備第4次	西区大字吉武字高木194他地内	19840701～19850320	26,000	横山邦継・下村 智 常松幹雄	②・⑥ ⑧～⑪
7	8426	野方・金武線第2次	西区大字吉武字三十六146他地内	19850326～19850531	2,300	横山邦継 下村 智	③
8	8518	圃場整備第5次	西区大字吉武字高木地内	19850702 19850724	470	横山邦継	② ⑧～⑪
9	8535	圃場整備第6次	西区大字吉武字大石地内	19850801～19860331	28,000	力武卓治・下村 智 常松幹雄・加藤良彦	② ⑧～⑪
10	8650	圃場整備第7次	西区大字吉武字大石36他地内	19861116～19870227	5,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
11	8662	野方・金武線第6次	西区大字飯盛地内	19860301～19860510	23,000	二宮忠司 佐藤一郎	⑤
12	8714	野方・金武線第7次	西区大字飯盛字トイ地内	19870601～19870909	2,810	二宮忠司 佐藤一郎	⑤
13	8752	圃場整備第8次	西区大字吉武地内	19880301～19880331	1,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
14	8838	圃場整備第9次	西区大字吉武高木地内	19880725～19880916	724	山崎龍雄	未刊

〔該当報告書〕①『吉武遺跡群 Ⅰ』市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告 Ⅰ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986
②『吉武高木』－弥生時代埋葬遺跡の調査概要－　福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986
③『吉武遺跡群』－市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査－　福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988
④『吉武遺跡群 Ⅳ』市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告 Ⅱ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 1989
⑤『吉武遺跡群』－市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査－　福岡市埋蔵文化財調査報告書第303集 1991
⑥『吉武遺跡群 Ⅶ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 1－弥生時代掘立柱建物の報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 1995
⑦『吉武遺跡群 Ⅷ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 2－弥生時代墳墓の報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集 1996
⑧『吉武遺跡群 Ⅸ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 3－弥生時代生活遺構の調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集 1997
⑨『吉武遺跡群 Ⅹ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 4－弥生時代の墓地の調査報告書 1－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集 1998
⑩『吉武遺跡群 Ⅺ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 5－弥生時代墓地の調査報告 2－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集 1999
⑪『吉武遺跡群 Ⅻ』飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 6－弥生時代墓地の調査報告3－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集 2000

第二章　遺跡の立地と環境

吉武遺跡群は、福岡市西郊の早良平野に展開する弥生時代から古代を中心とする遺跡である。

遺跡群は、平野の中央を南西から北東に貫流する室見川の中流域左岸に位置し、背振山塊から派生した飯盛山の裾部を辿る日向川の自然営力によって形成された扇状地上に展開する。標高は、海抜20～35m程度で、ほぼ南西から北東方向に緩く傾斜する。その規模は約40haであるが、このうち昭和56～60年度にかけての圃場整備に伴う６次の調査で約10haが発掘調査された。調査の結果、特に弥生時代前期後半から中期にかけての大規模な墓地(甕棺墓・木棺墓)と集落が検出され、該期の豊富な朝鮮製青銅利器や鏡・装身具を副葬する前期末から中期前半までの墓地や前漢鏡・鉄製利器などの中国製品を副葬する中期中頃に築造された墳丘墓などが検出された。

また、竪穴住居跡は各時期を通じて少ないが、中期初頭期の大型掘立柱建物や中期前半から後半にかけては倉庫を主とする掘立柱建物と考えられる遺構が顕著である。更に、これ以降の古墳時代中期～後期にかけては樋渡前方後円墳を初出とする円墳に続く古墳群と同時期の集落跡が遺跡群全体に広がりを見せる。

Fig.1　吉武遺跡群位置図(1.吉武遺跡群 2.羽根戸遺跡群 3.野方久保遺跡 4.田村遺跡群 5.四箇遺跡群 6.有田遺跡群)

特に集落内の住居跡・掘立柱建物(倉庫)に付帯する廃棄土壙や自然流路からは多量の初期須恵器や陶質土器などが出土した。また、奈良末から平安初期かけては多くの鍛治遺構とともに越州青磁・墨書土器・円面硯などを伴った建物・溝遺構が検出され、寺院と考えられる。このように吉武遺跡群では、弥生時代以降、各時期に亘る遺構が密度の高く営まれている。

ところで、本遺跡群を含む早良平野には弥生時代前期の環濠集落を有する有田遺跡などの拠点集落

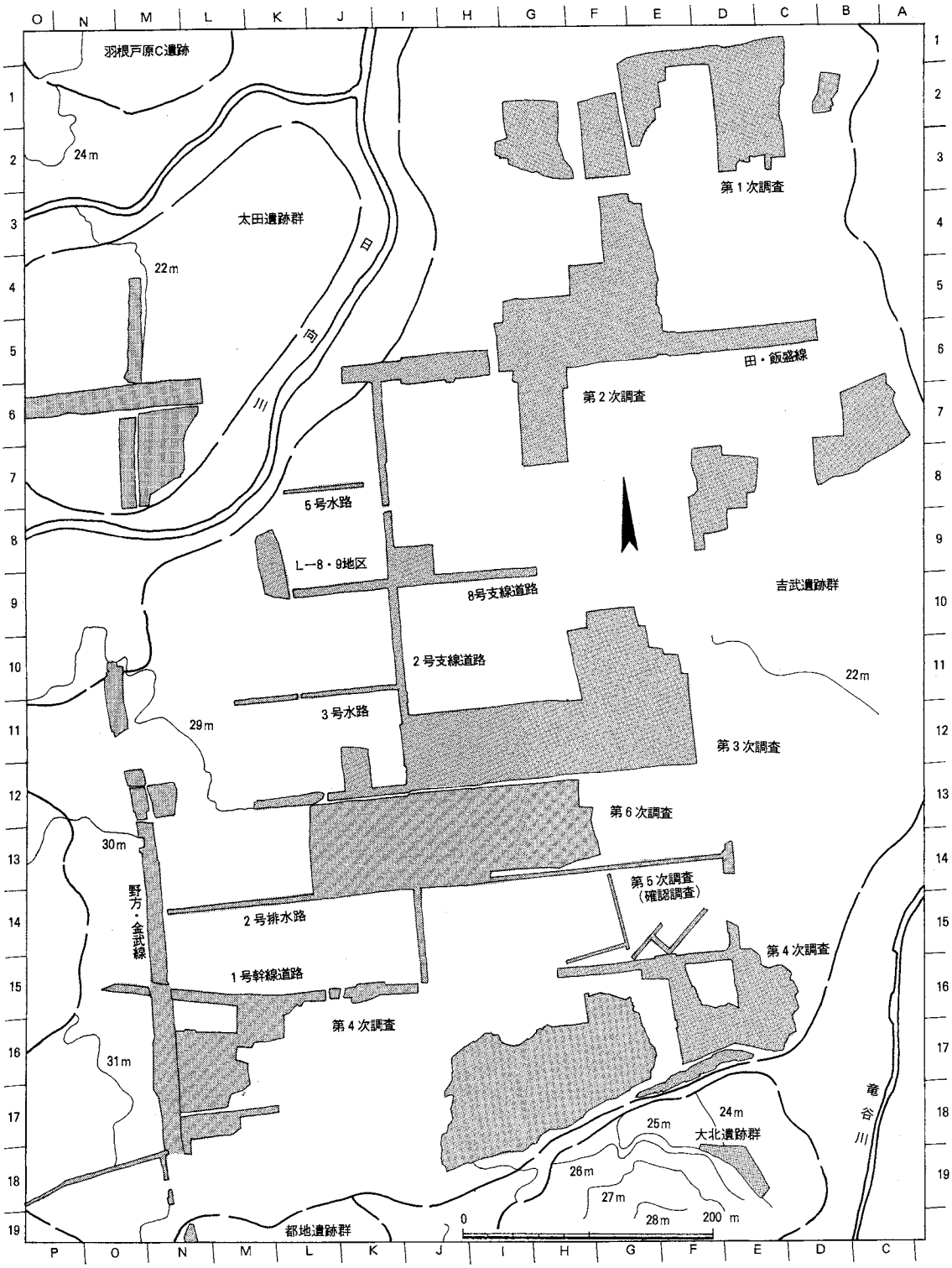


Fig.2　吉武遺跡群調査区配置図(1/5,000)

が数多く分布している(Fig.1)。室見川左岸では、金海式甕棺から細形銅剣・翡翠製勾玉を出土した野方久保甕棺遺跡(3)があるが、吉武遺跡群を除くと副葬遺物を出土する遺跡は少ない。

また、右岸の北東3kmには、弥生時代前期初頭の環濠集落にはじまる有田遺跡群(4)があり、南北約1km、東西約0.7km規模の洪積台地上に、弥生前期末～中期末までの甕棺墓から絹布の付着した細形銅戈、前漢鏡・倣製鏡等を副葬した墓地が複数地点で見つかっている。比較的大規模な集落は右岸地域に多く見られ、有田遺跡の東側に対峙する飯倉丘陵の唐木遺跡でも前期末～中期末までの墓地から細形銅剣・鉄器を副葬した甕棺が見られる。

一方、有田遺跡の南側では田村遺跡群(5)や四箇遺跡群(6)などが知られ、中期前半代の小規模な甕棺墓地を形成する。また、早良平野の東側を縁どる緩斜面には中期後半期を主体にした小規模な甕棺墓地が点在している。そして早良平野の狭隘部にあたる東入部遺跡では、前期末の金海式甕棺から中期末に亘る大規模な墓地が検出され、細形銅剣・銅釧・鉄製武器がまとまって見つかった。特に、鉄器を副葬した中期後半期の墓地は、浅い不整形な方形の溝によって囲まれる区画墓であり、併行する吉武遺跡群の墳丘墓のあり方と比較検討することが必要である。

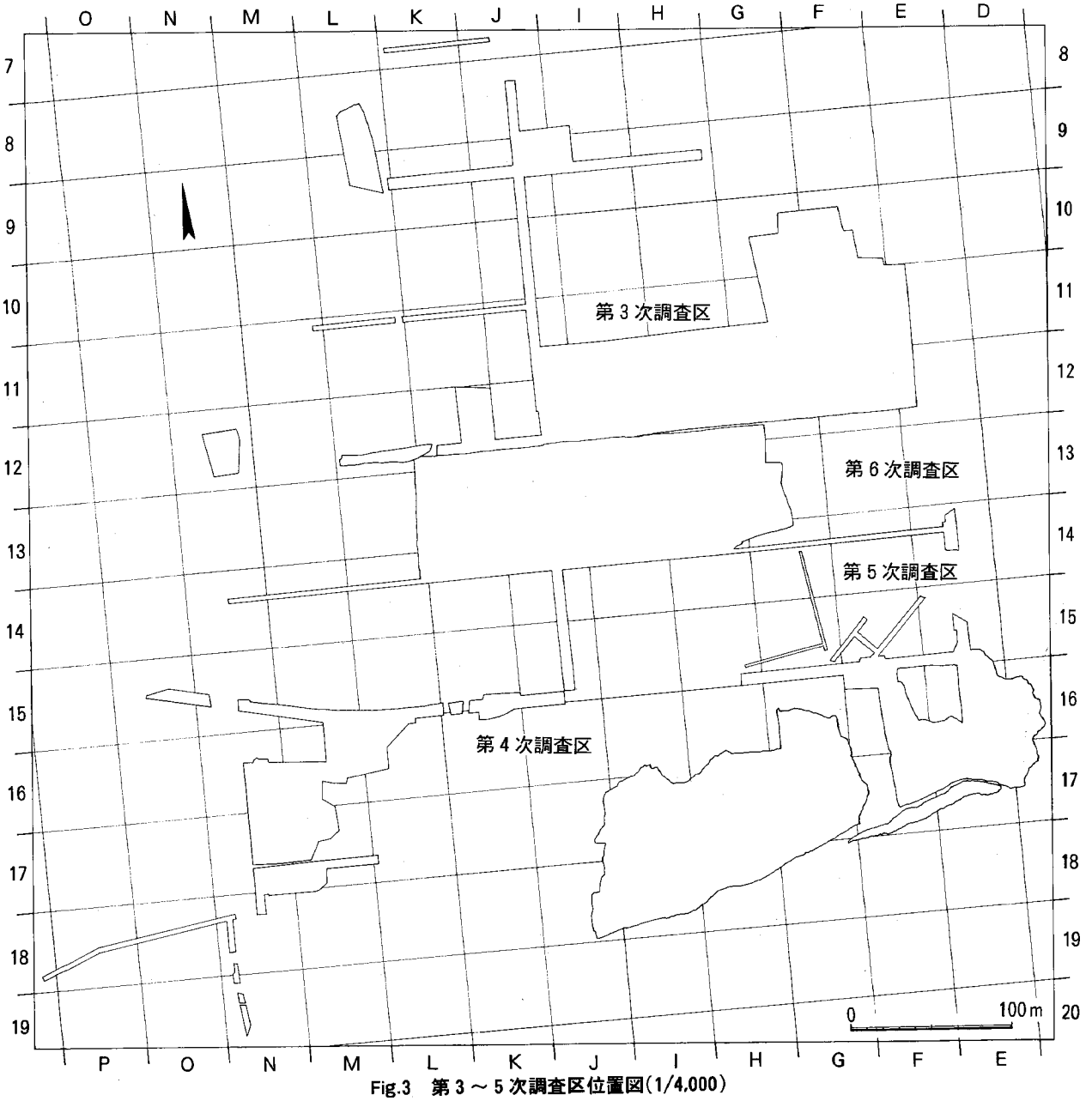


Fig.3 第3～5次調査区位置図(1/4,000)

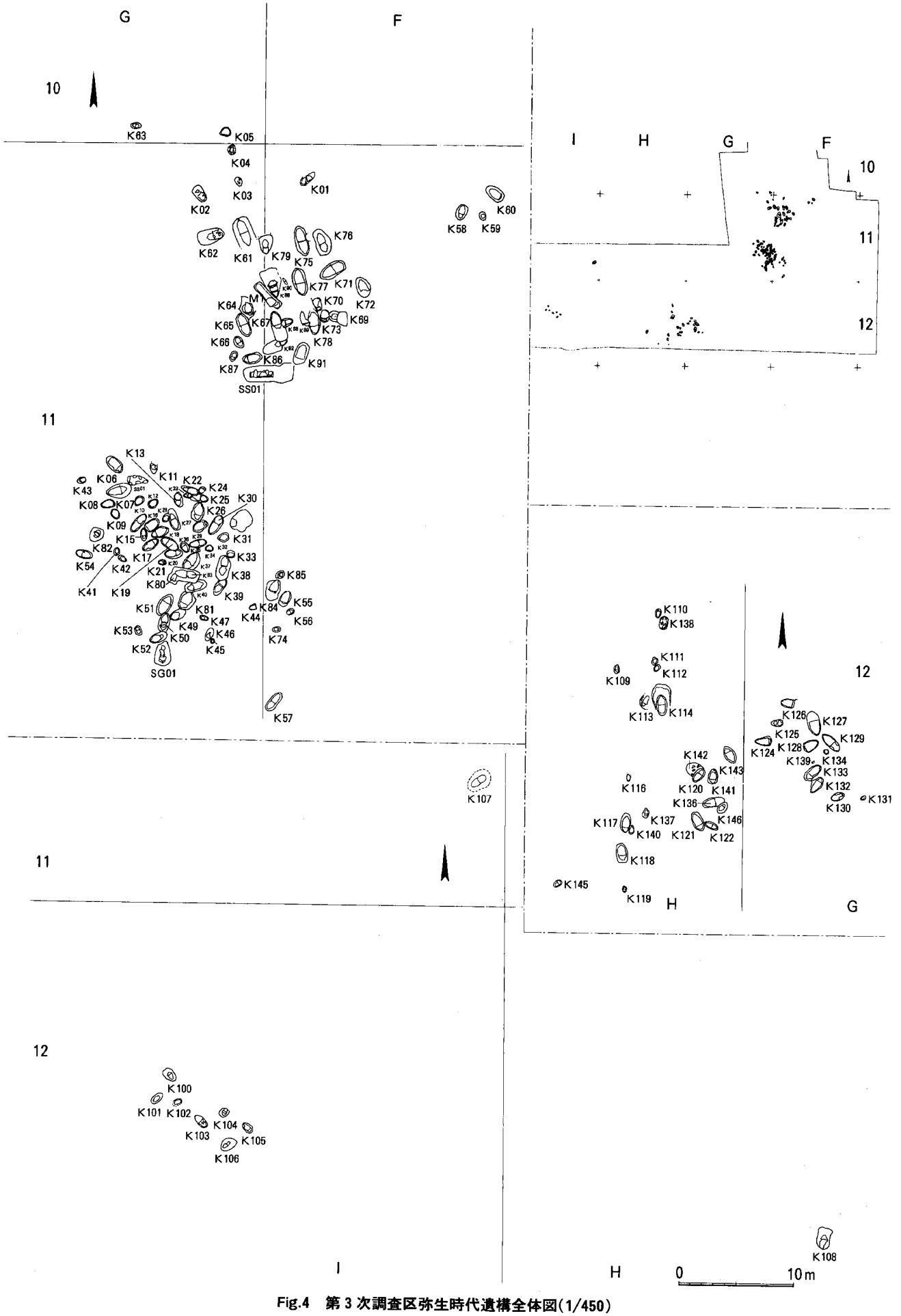


Fig.4　第 3 次調査区弥生時代遺構全体図(1/450)

第三章　調査の報告

第一節　第３次調査報告

概　要　第３次調査では、ほぼ４群に区別される墓地群があり、弥生時代の中期前半から後期前半の時期にかけての甕棺墓103基、石棺墓１基、石蓋土壙墓１基、土壙墓１基が検出された。これまでは特に調査区北端に位置する樋渡墳丘墓の出土全甕棺と副葬遺物について報告してきたが、今回は残りの他の群について紙面の許す限り報告を行うことにしたい。

今回報告の３群は、調査区北端近くに見つかった樋渡墳丘墓の南側に隣接する一群（Ｇ-12地区）、調査区南西隅に位置する一群（ＧＨ-12地区）及び調査区西側で見つかった一群（ＨＩ地区）の三地点である。このうち、最大規模のＧ-12地区墓地は、南北に長いまとまった分布を示す中期前半から後半期の甕棺墓63基、石棺墓１基、石蓋土壙墓１基で構成される。また、ＧＨ-12地区墓地は、散漫な分布を示す中期前半から後半にかけての墓地で、甕棺墓３６基の規模である。更にＨＩ地区では、中期前半期の小型棺を主とする散漫な分布を示す甕棺墓９基が検出された。これらの墓地では副葬品を持つものは少なく、僅かにＧ-12地区墓地の南端で弥生後期と考えられるＳＧ01石蓋土壙墓にガラス小玉の副葬があった。

以下では各地点の墓地の甕棺墓等について個別の説明を加えていくこととしたい。なお、紙面の都合から各甕棺墓の出土状況についてはすべて掲載した。しかし、各甕棺の個別実測図については、大半が甕棺の復元作業の期間が限られているため、それぞれの群の特徴ある甕棺を選択して実測を作成し、掲載している。

１．ＨＩ地区墓地

〔甕棺墓〕

Ｋ100号甕棺墓(Fig.5)　上下棺ともに小型の甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

Ｋ101号甕棺墓(Fig.5)　上棺に壷の打欠き、下棺に小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

Ｋ102号甕棺墓(Fig.5)　下棺のみを残す小児甕棺墓である。単棺か。墓壙・甕棺共に削平が著しい。

Ｋ103号甕棺墓(Fig.5)　上下棺ともに小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。急角度に埋置され、上棺はスタンプのみを残す。

Ｋ104号甕棺墓(Fig.5・6)　上下棺ともに小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。埋置は急角度になされ、小児甕棺の埋置法の一つの特徴を示している。

上　棺　内外面共に磨滅が著しい小型甕である。口縁は内傾し、直下に低い三角突帯１条を巡らす。底部はよくしまり、肥厚して上底となる。器色は、外面暗赤褐色、内面暗褐色を呈し、外面に細かい縦ハケメが残る。焼成は堅緻で、 胎土に粗砂を多く混入する。口縁部径34cm、底部径7.2cm、復元器高36cmを測る。

下　棺　器面の荒れが著しい小型甕である。口縁はほぼ水平で、断面Ｌ字形をなし、胴部最大径部に低い三角突帯１条を巡らす。外面暗赤褐色、内面暗褐色を呈し、口唇に右下がりの刻み目を施す。焼成は堅緻で、 胎土はやや粗く、粗砂を多く混入する。口縁部径32.5cm、底部径5.8cm、器高35～36cmを測る。内面の下半は黒斑か。

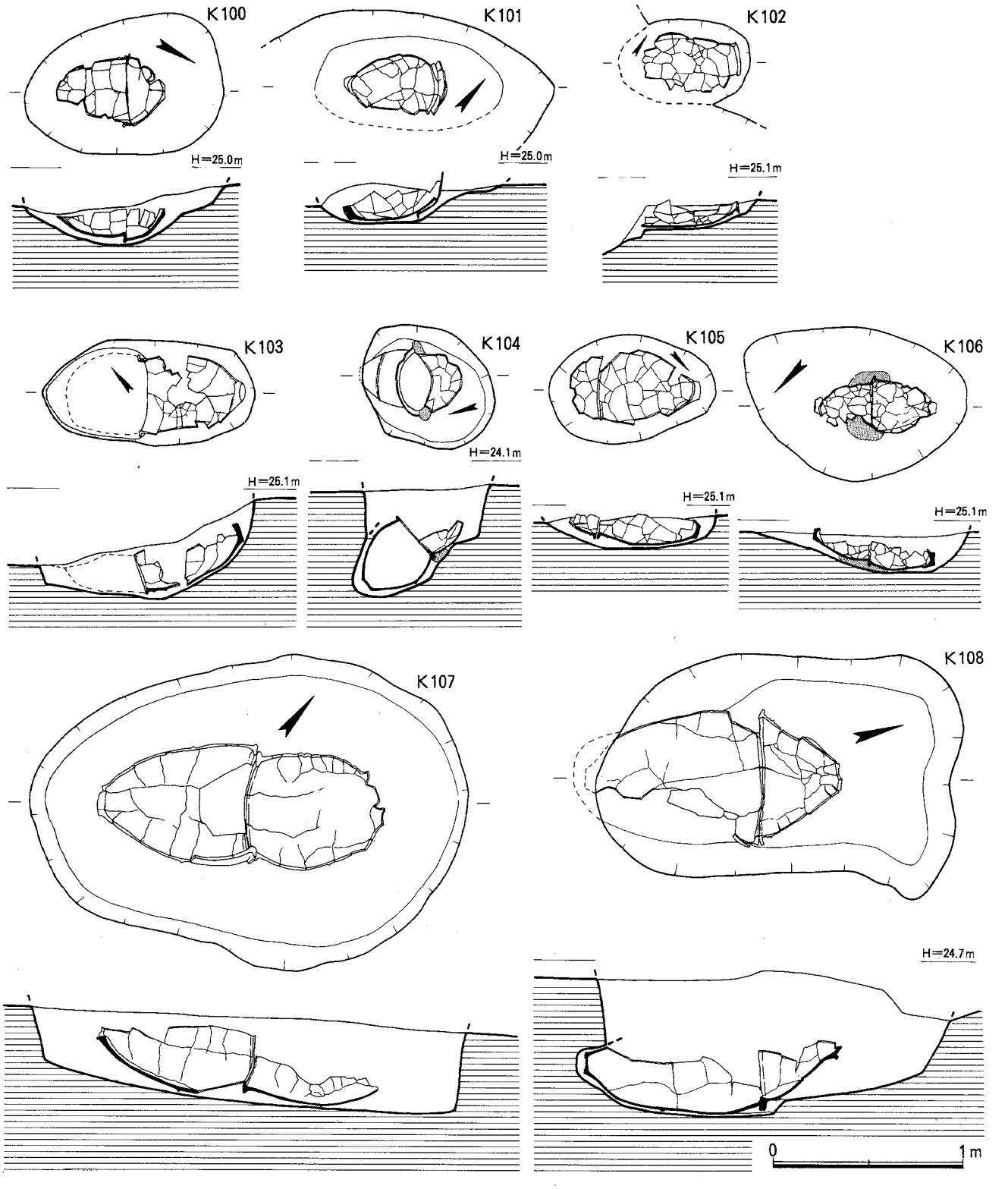


Fig.5　第3次HI地区K100～108号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K105号甕棺墓(Fig.5)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K106号甕棺墓(Fig.5)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K107号甕棺墓(Fig.5・6)　上下共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。群中では1基のみひどく離れた位置で見つかっている。墓壙の掘り方は厳密に確定しがたいが、墓壙のほぼ中央に、水平に近く埋置される。上棺に人骨片が一部残っていた。

上 棺　底部の大半を欠損する大型甕である。口縁は断面T字形を呈し、胴部中位よりやや下がった位置に低い三角突帯1条を巡らす。器色は、外面暗褐～暗赤褐色、内面黒褐色を呈する。器面調整

は、内外面共に横方向のヘラナデが残る。また、外面には、黒色顔料の塗布の痕跡が残る。焼成は非常に堅緻で、胎土は密で、石英粗砂の混入が多い。口縁部径は58.4cmで、底部径12.2cm、器高78.3cmを測る。

下棺 砲弾形の胴部を呈し、口縁部は口唇が内面に張り出す。胴部中位よりやや上がった位置に低い1条の三角突帯を巡らす。器面の荒れが著しいが、口縁上端から胴部下端まで黒色顔料が塗布されている。器面調整は、内外面共にヘラナデか。器色は、外面淡赤褐色、内面暗褐～淡褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土も密である。口縁部径61.8cm、底部径10.6cm、器高84.3cmを測る。

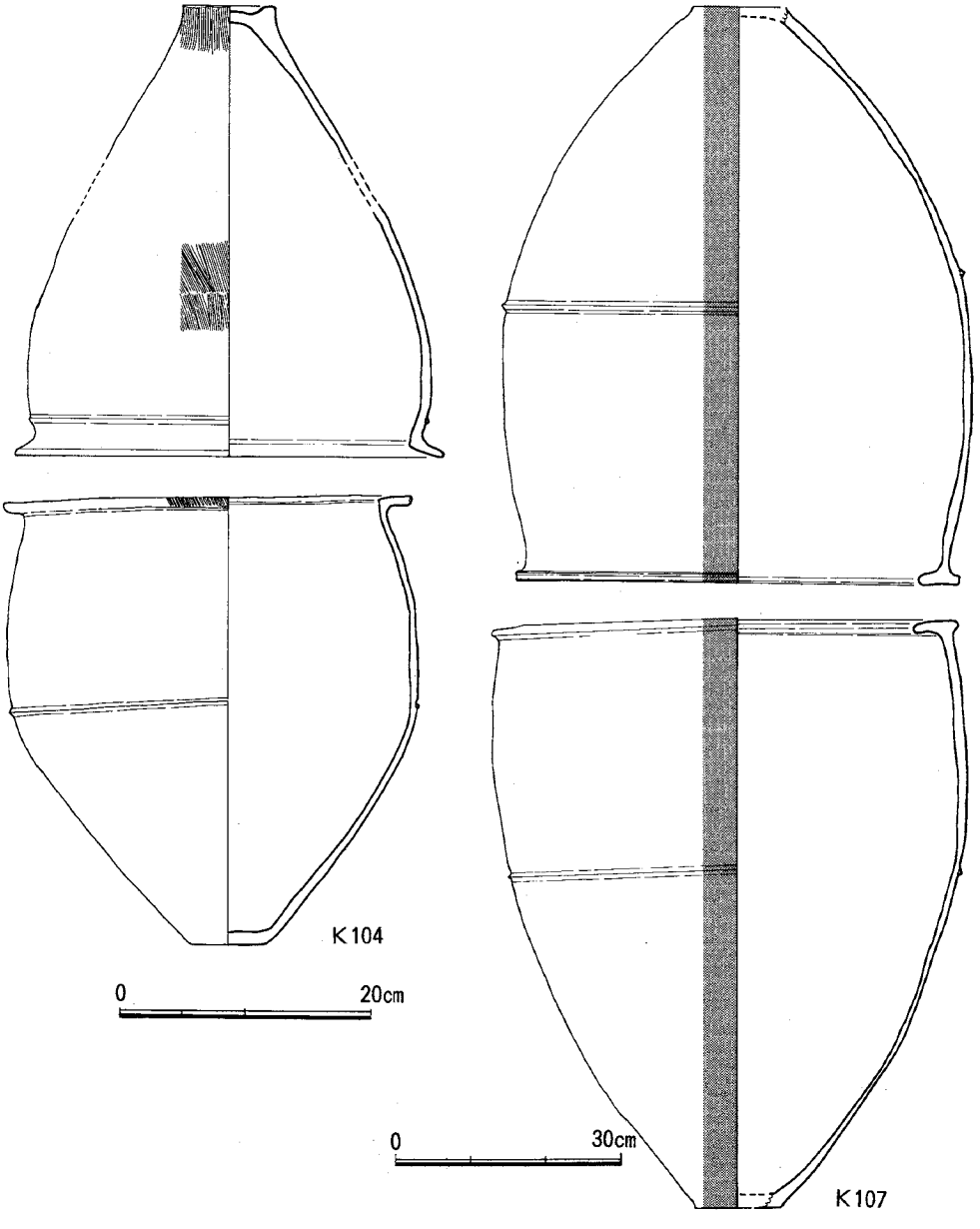


Fig.6 第3次HI地区K104・107号甕棺実測図(1/6,1/10)

K108号甕棺墓(Fig.5) 上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。墓壙の状況から下棺を横穴に挿入した状況がよく判る。

2. GH12地区墓地

〔甕棺墓〕

K109号甕棺墓(Fig.7) 上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。残りは悪い。

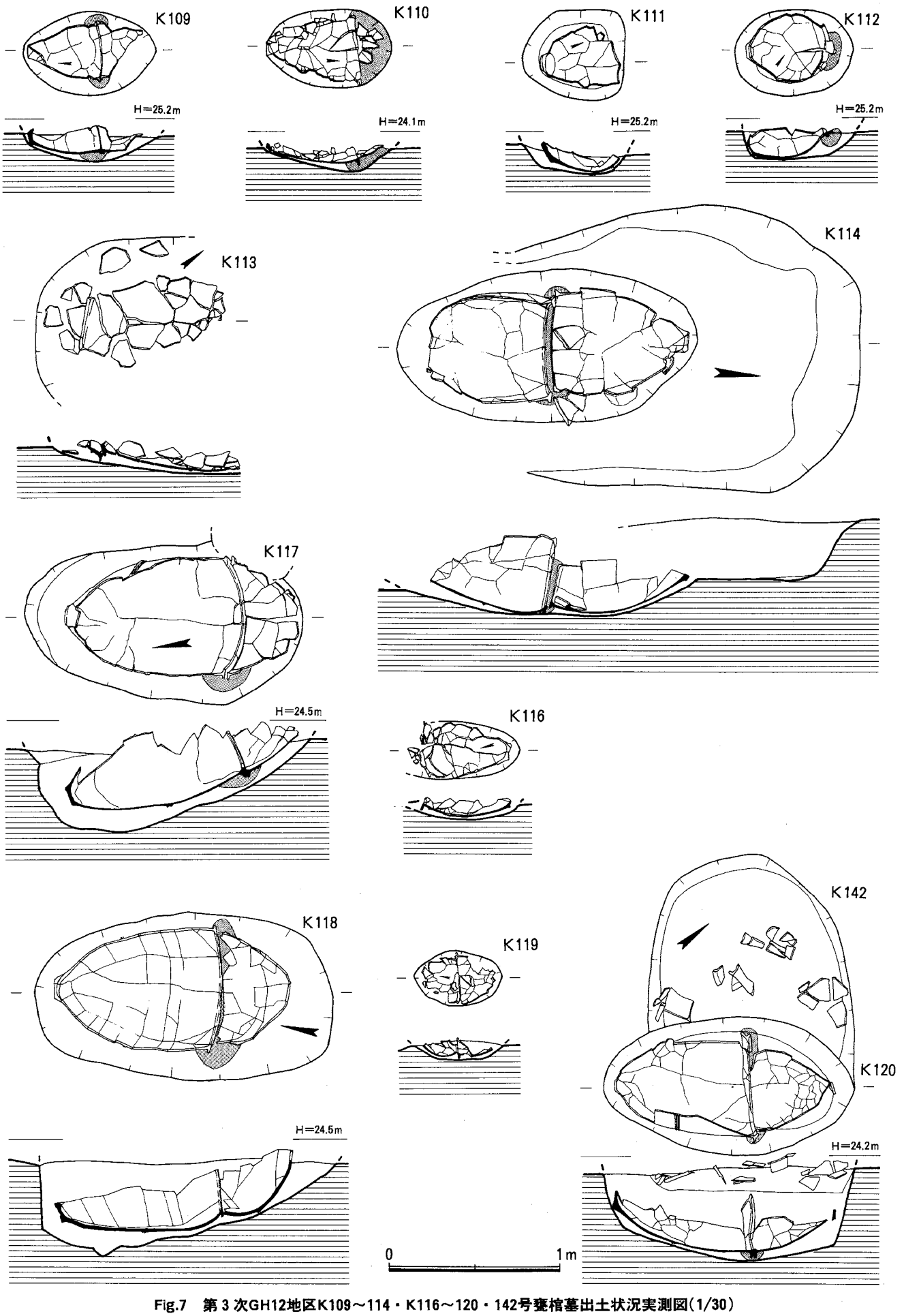


Fig.7　第３次GH12地区K109～114・K116～120・142号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

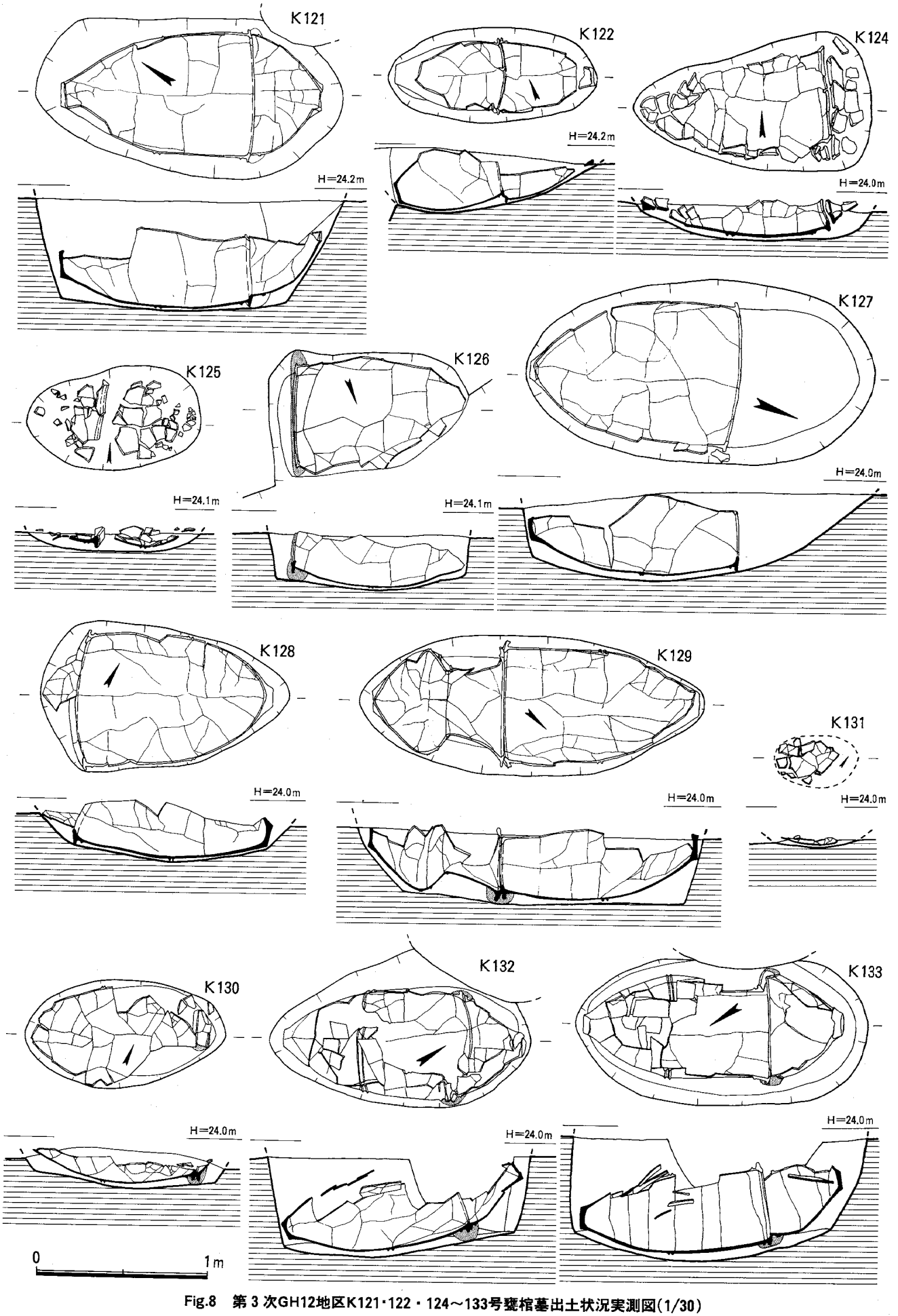


Fig.8　第３次GH12地区K121・122・124～133号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

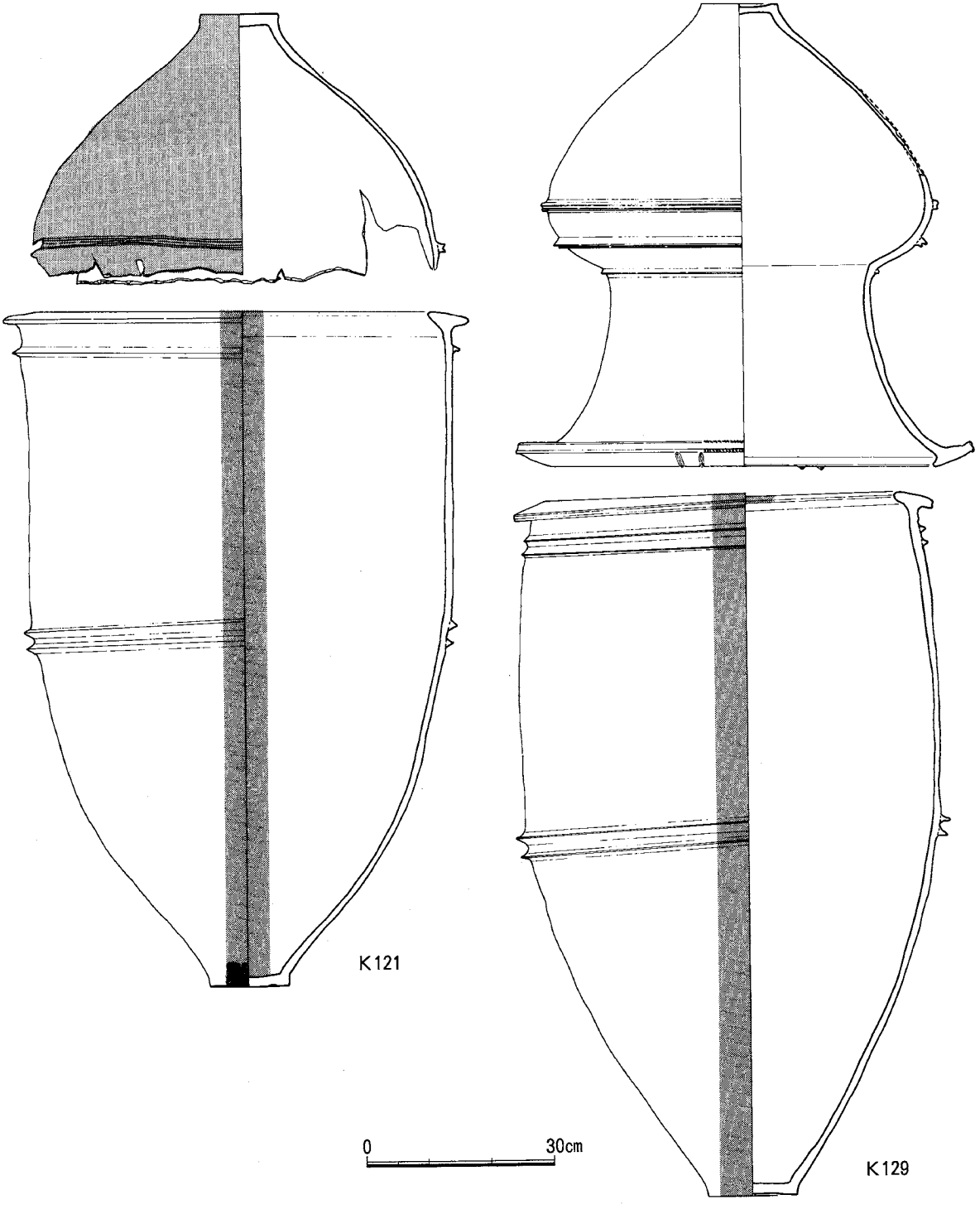


Fig.9　第3次GH12地区K121・129号甕棺実測図(1/10)

K110号甕棺墓(Fig.7)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。接口部下面の粘土貼りが顕著である。

K111号甕棺墓(Fig.7)　小型壷の口縁部を打欠いて使用する小児甕棺墓である。単棺か。

K112号甕棺墓(Fig.7)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。接口下部に白色粘土の張り付けが見られる。

K 113号甕棺墓(Fig.7)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。削平による破壊が著しく、殆ど底面のみしか残っていない。

K 114号甕棺墓(Fig.7)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。削平によって墓壙の横穴部を殆ど失っている。

K 116号甕棺墓(Fig.7)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。削平のために墓壙及び上棺の殆どを失っている。

K 117号甕棺墓(Fig.7)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。埋置は比較的急傾斜になされるが、削平のために上棺の半分以上を失っている。

K 118号甕棺墓(Fig.8)　削平によって墓壙の大半を失っているが、上棺に口縁部付近を打欠いた大型壷、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。接口部下面には黄色味を帯びた淡褐色の目張り粘土が分厚く残る。

K 119号甕棺墓(Fig.7)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 120号甕棺墓(Fig.7)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。祭祀遺構と考えられるK142号を切っている。上部はかなりの削平をうけており、接口部の目張り粘土が顕著に残る。

K 121号甕棺墓(Fig,8・9)　隅丸長方形の墓壙にほぼ水平に埋置される。上棺に大型の壷打欠き、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。接口部の目張り粘土は顕著である。

上 棺　大型壷の胴部中位のM字形突帯よりやや上がった部分以上をほぼ水平に打欠いて上棺としている。細かい調整のための打欠きは外側から内側方向になされる。器色は、内外面ともに淡灰褐色を呈す。器面調整は、内外共にヘラナデを施す。外面は丹塗りで、内面には一部に丹が飛沫状に点在する。焼成は堅緻で、胎土は密である。胴部最大径67cm、底部径12.7cm、残存器高43.2～41.8cmを測る。

下 棺　胴部中位からほぼ垂直に立ち上がる胴部を有する大型甕で、やや肥厚するT字形口縁直下に比較的高い1条の三角突帯を巡らす。また、中位にはしっかりした2条の三角突帯を巡らす。器色は、外面淡黄褐色～暗褐色、内面淡褐色を呈する。器面調整は、胴部下端にタテハケメが一部残る以外は内外共にヘラナデか。胴部突帯より10～20cm上部位置に直径が10cm程度の黒斑があり、全周で現存3ケ所、推定で4ケ所あったと考えられる。これらはほぼ対向する位置にあり、焼成時の倒壊を防ぐ支え材であった可能性が高い。また、内外面ともに黒色顔料を施す。焼成は堅緻で、胎土は非常に密である。口縁部径73cm、底部径13cm、器高109cmを測る。

K 122号甕棺墓(Fig.8)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。埋置は比較的に急角度である。削平により全体のほぼ半分を失う。

K 124号甕棺墓(Fig.8)　削平と土圧のために細かい破片となっている。上棺は大型の鉢と考えられ、下棺は大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に近い埋置である。

K 125号甕棺墓(Fig.8)　本体の殆ど下面近くまで削平をうけ、遺存状態は悪い。墓壙の全体に破片が散らばる状態である。上棺に小型の鉢、下棺に小型壷の打欠いたものを使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 126号甕棺墓(Fig.8)　上面の削平と側辺の攪乱によって殆ど上半部を失っている。単独棺である。大型甕の口縁部側には殆ど空間が無いところから木板などを蓋として使用した可能性が高い。

K 127号甕棺墓(Fig.8)　大型の甕を使用する単独の成人甕棺墓である。墓壙は長楕円形を呈し、口縁側は緩く傾斜することから他土器との合わせは無く、木板を蓋として使用した可能性が高い。

K128号甕棺墓(Fig.8)　墓壙の掘り方の大部分まで削平が進んでおり、上棺は殆ど痕跡しか残っていない。上棺には大型甕の胴部突帯以上を打欠いたもの、下棺に大型甕を使用した接口式の成人甕棺墓である。

K129号甕棺墓(Fig.8・9)　削平が著しい長楕円形の墓壙にほぼ水平に埋置された接口式の成人甕棺墓である。上棺に鋤先状口縁をもつ大型壷、下棺には大型の甕を使用する。接口部下面には青黄色粘土が厚く敷かれている。

上 棺　扁球状に膨らむ胴部最大径部とその上部にM字形突帯を1条巡らす。また良くしまった頸部には低い三角突帯1条を巡らす。やや垂れる口縁外端部には上下に分かれる刻み目を同時に施す。また、口縁上端部には2本単位の平行粘土帯を2対貼付している。器色は内外共に淡褐～淡黄褐色を呈し、胴部突帯に黒斑がある。胴部突帯下に内部からの二次穿孔がある。器面調整は、外面がタテ・ヨコ・ナナメ方向のヘラナデとなる。焼成は非常に堅緻である。胎土は密で、石英粗砂多く、赤色粒を少量含む。口縁部径72.6cm、底部径12.2cm、器高75.6cmを測る。

下 棺　上端が垂れるT字形口縁直下に2条の三角突帯、胴部中位に高い三角突帯2条を巡らす大型甕である。胴部は全体に緩く砲弾形に膨らむ特徴をもつ。器色は、外面淡黄褐色、内面暗褐～暗赤褐色を呈する。また、外面には黒色顔料が全面に塗布されている。器面調整は、内外面共にヘラナデか。焼成は堅緻で、胎土は密である。
口縁部径66.5cm、底部径14.2cm、器高114cmを測る。

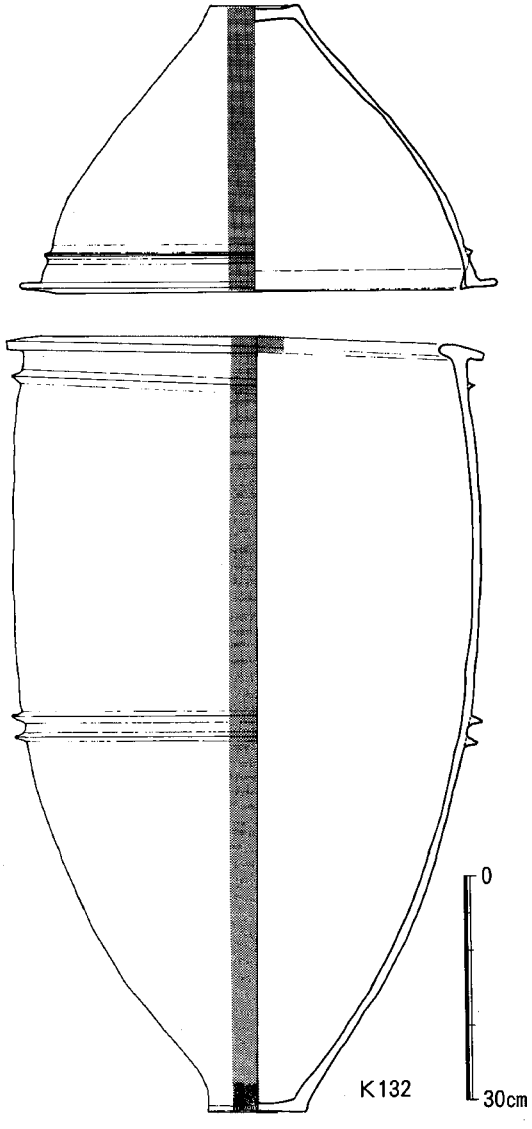


Fig.10　第3次GH12地区K132号甕棺実測図(1/10)

K130号甕棺墓(Fig.8)　削平のため本体の殆どを失っている。上棺に小型？の鋤先口縁をもつ壷、下棺に中型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K131号甕棺墓(Fig.8)　非常な削平をうけており、小型の甕の一部を残す。小児甕棺墓と考えられるが、詳細を明らかにしえない。

K132号甕棺墓(Fig.8・10)　他の甕棺との切り合いや上部の削平によって改変をうけている。上棺に大型の鉢、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に近く埋置される。接口部下面には目張りの粘土が分厚く巻かれている。

上 棺　平坦口縁下に三角突帯1条を巡らす大型鉢である。口縁内唇は打欠き箇所が多い。外面は黒塗りである。また、口縁から突帯部に大黒斑あり。器色は内外面共に暗黄褐色を呈する。焼成は堅緻で、 胎土は密である。口径62.6cm、底部径11.6cm、器高38.4cmを測る。

下 棺　やや垂れるT字形口縁下に１条の三角突帯、胴部中位に高い２条の三角突帯を巡らす大型甕である。内外面共にヘラナデで、胴部下端にタテハケメが残る。外面と内面の一部は黒塗りである。器色は淡褐色を呈し、焼成堅緻、 胎土密である。口縁部径63cm、底部径13cm、器高104.5cmを測る。

K 133号甕棺墓(Fig.8)　上棺に胴部突帯以上を打欠いた大型甕、下棺に大型甕を使用した接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置されるが、下棺の内面には幅10～15cmの規模の平行する亀裂が見られ、製作時の粘土の接合ラインを反映していると考えられる。

K 134号甕棺墓(Fig.11)　扁球状胴部の突帯以上を打欠いた小型？壷を使用する小児甕棺墓である。

K 136号甕棺墓(Fig.11)　木蓋使用と思われる単独の大型甕を使用する成人甕棺墓である。

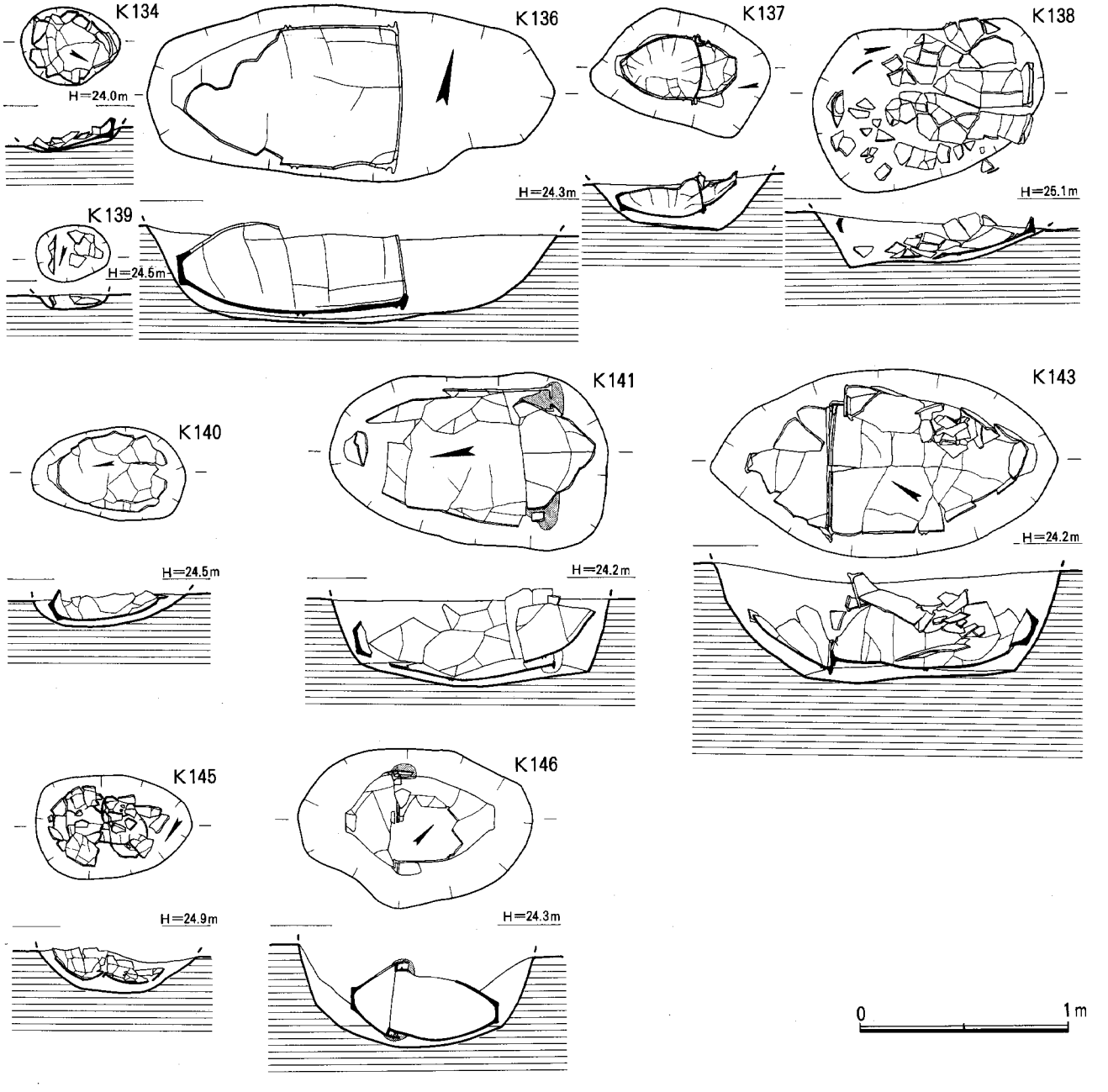


Fig.11　第３次GH12地区K134・136～141・143・K145・146号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

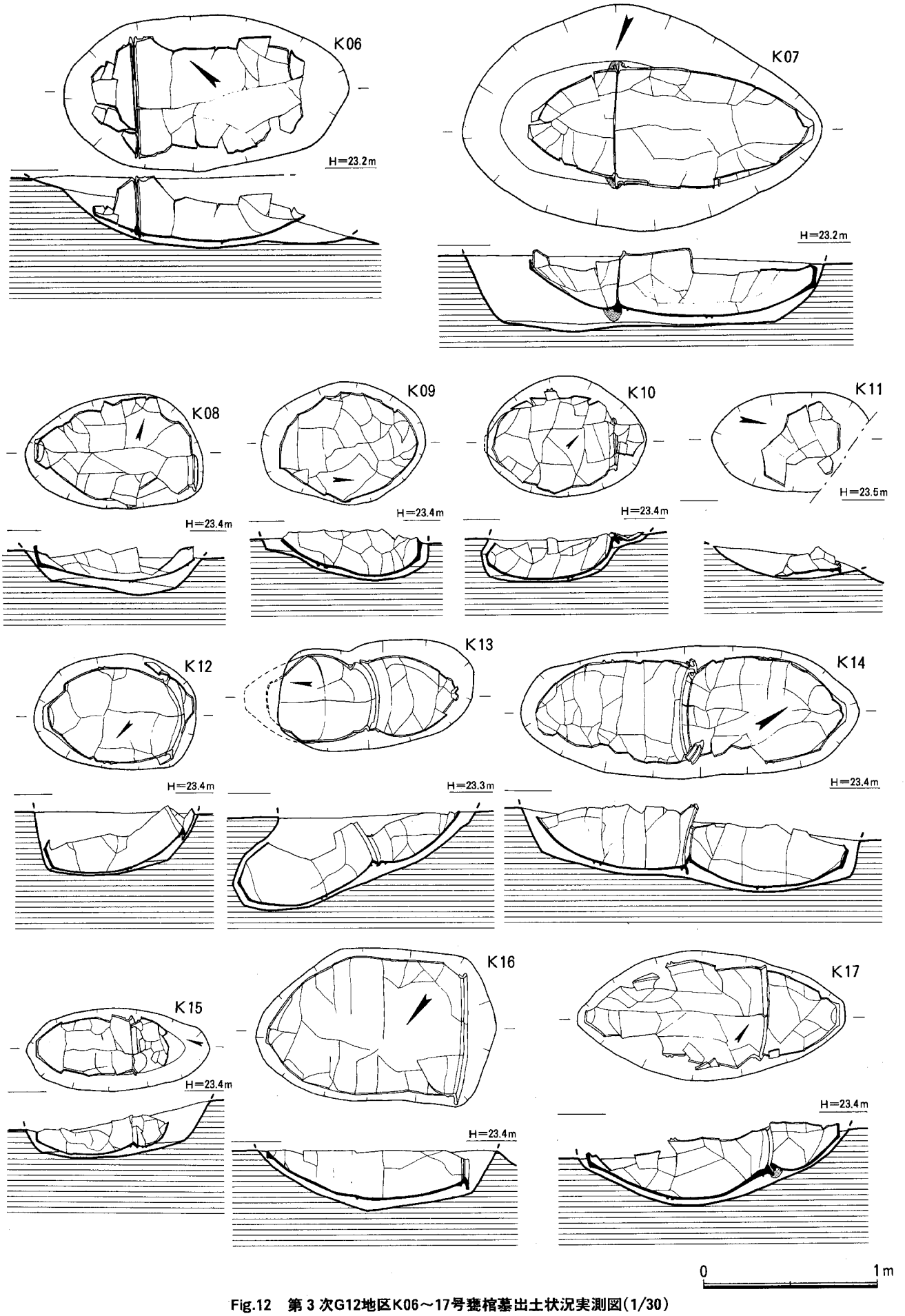


Fig.12　第３次G12地区K06～17号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K 137号甕棺墓(Fig11)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する小児甕棺墓である。残りが悪い。

K 138号甕棺墓(Fig.11)　土圧と削平のため砕片となるが、大型の甕を使用する成人甕棺墓か。

K 139号甕棺墓(Fig.11)　上棺小型壷、下棺小型甕を使用する小児甕棺墓と推定される。

K 140号甕棺墓(Fig.11)　小型甕を使用する小児甕棺墓と推定される。単独棺かは不詳である。

K 141号甕棺墓(Fig.11)　上棺に大型甕の打欠き、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K 143号甕棺墓(Fig.11)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 145号甕棺墓(Fig.11)　上棺に小型壷の打欠き、下棺に小型甕を使用する小児甕棺墓である。

K 146号甕棺墓(Fig.11)　埋置状況を良く残す小児甕棺墓である。上棺に小型壷の胴部最大径部以上を打欠いたもの、下棺に小型甕を使用して、覆口となっている。下面に目張り粘土が良く残る。

3．G12地区墓地

〔甕棺墓〕

K 06号甕棺墓(Fig.12)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。削平による上部の破壊が著しい。

K 07号甕棺墓(Fig.12)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置され、接口部下面の粘土目張りが顕著に残る。

K 08号甕棺墓(Fig.12)　中型の甕を使用する単式の甕棺墓と考えられる。削平のために明確でない。

K 09号甕棺墓(Fig.12)　小型甕を使用する甕棺墓で、削平のために下甕のみしか残っていない。

K 10号甕棺墓(Fig.12)　上棺に小型鉢？、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K 11号甕棺墓(Fig.12)　著しい削平のために胴部破片しか残らない。中型甕を使用の単棺か。

K 12号甕棺墓(Fig.12)　上棺に小型壷の打欠き、下棺に小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。削平のため大部分は失われているが、埋置は比較的急角度である。

K 13号甕棺墓(Fig.12・13)　墓壙の上部を削平によってかなり失っているが、甕棺の挿入状態を良く残す。上棺に中型の甕、下棺にも中型甕を使用する覆口式の甕棺墓である。埋置は急角度である。

上 棺　口縁が垂直に近く立ち、く字形に屈曲する中型甕で、器面の荒れが著しい。外面に粗いタテハケメが残る。器色は、内外面共に淡赤褐色で、外面下半は大黒斑である。焼成は堅緻で、 胎土はやや粗である。口縁部径42.2cm、残存高52.3cmを測る。

下 棺　く字形に屈曲する口縁部直下に低い三角突帯を巡らし、収縮する胴部中位にコ字形突帯2条を巡らす中型甕である。器色は、内外面共に暗褐色を呈し、口縁下・突帯下の下半にかけて黒斑が多い。外面に粗いタテハケメを残し、内面はヘラナデである。焼成は堅緻で、 胎土は密である。口縁部径39.5cm、底部径8.5cm、器高80.5～81.7cmを測る。

K 14号甕棺墓(Fig.12)　上下棺に大型の甕を使用する覆口式の成人甕棺墓である。

K 15号甕棺墓(Fig.12)　上棺に打欠きの小型壷、下棺に小型の甕を使用する呑口式の甕棺墓である。

K 16号甕棺墓(Fig.12)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。木蓋使用と考えられる。

K 17号甕棺墓(Fig.12)　上棺に小型の鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。接口部下面に目張りの粘土が残る。

K 18号甕棺墓(Fig.14)　上棺に大型の鉢、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 19号甕棺墓(Fig.14)　上棺に大型の鉢、下棺に大型の甕を使用する成人甕棺墓である。

K 20号甕棺墓(Fig.14)　上棺に中型壷打欠き、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

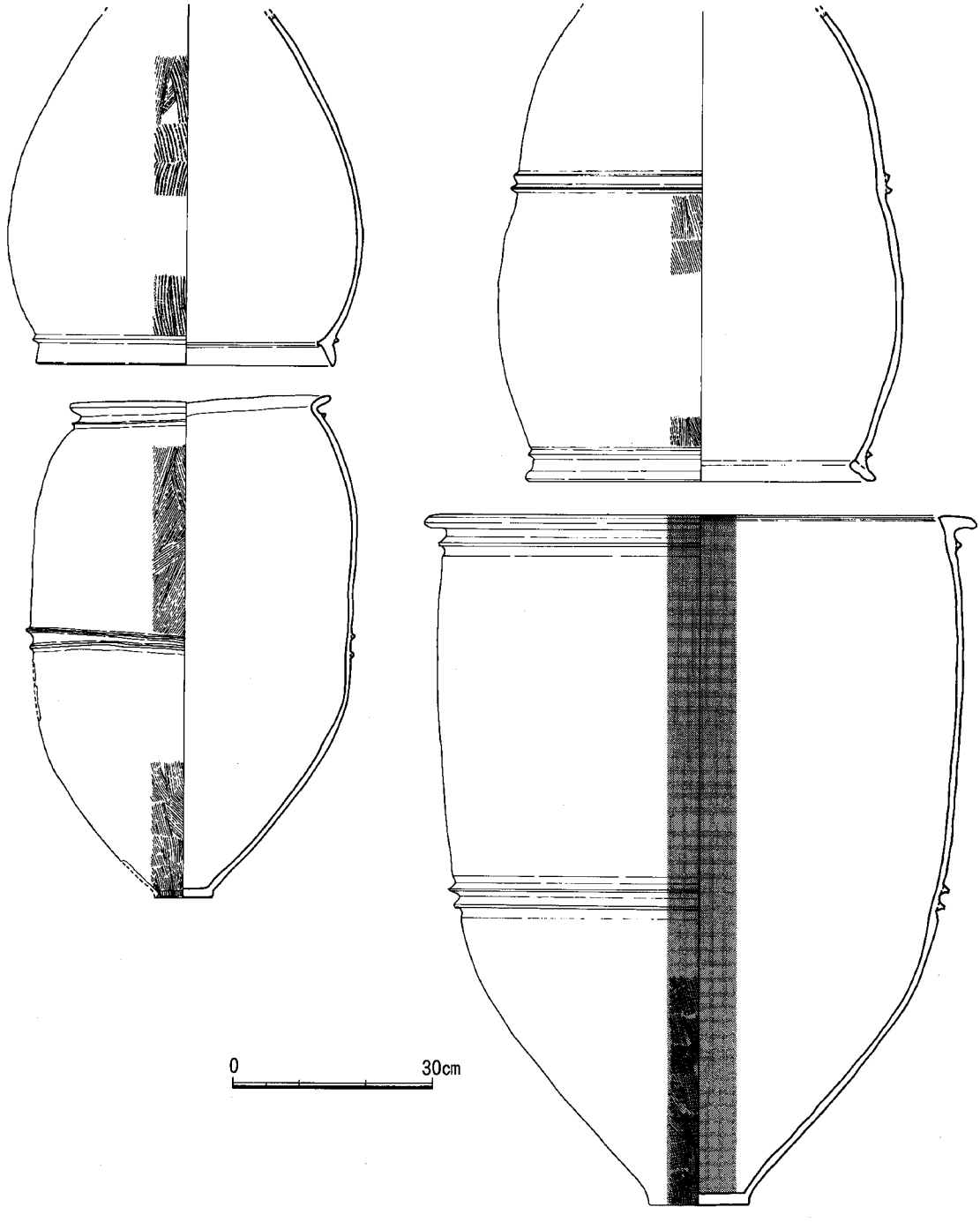


Fig.13　第３次G12地区K13・37号甕棺実測図(1/10)

K21号甕棺墓(Fig.14)　削平が大きいが、上下棺共に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K22号甕棺墓(Fig.14)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K23号甕棺墓(Fig.14)　小型壷の打欠きを使用する三連式の小児甕棺墓である。

K24号甕棺墓(Fig.14)　上棺の残りが悪いが、上下棺共に小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K25号甕棺墓(Fig.14)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。ほぼ水平に埋置。

K26号甕棺墓(Fig.14)　上棺に大型甕の胴部突帯部以上の打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置される。

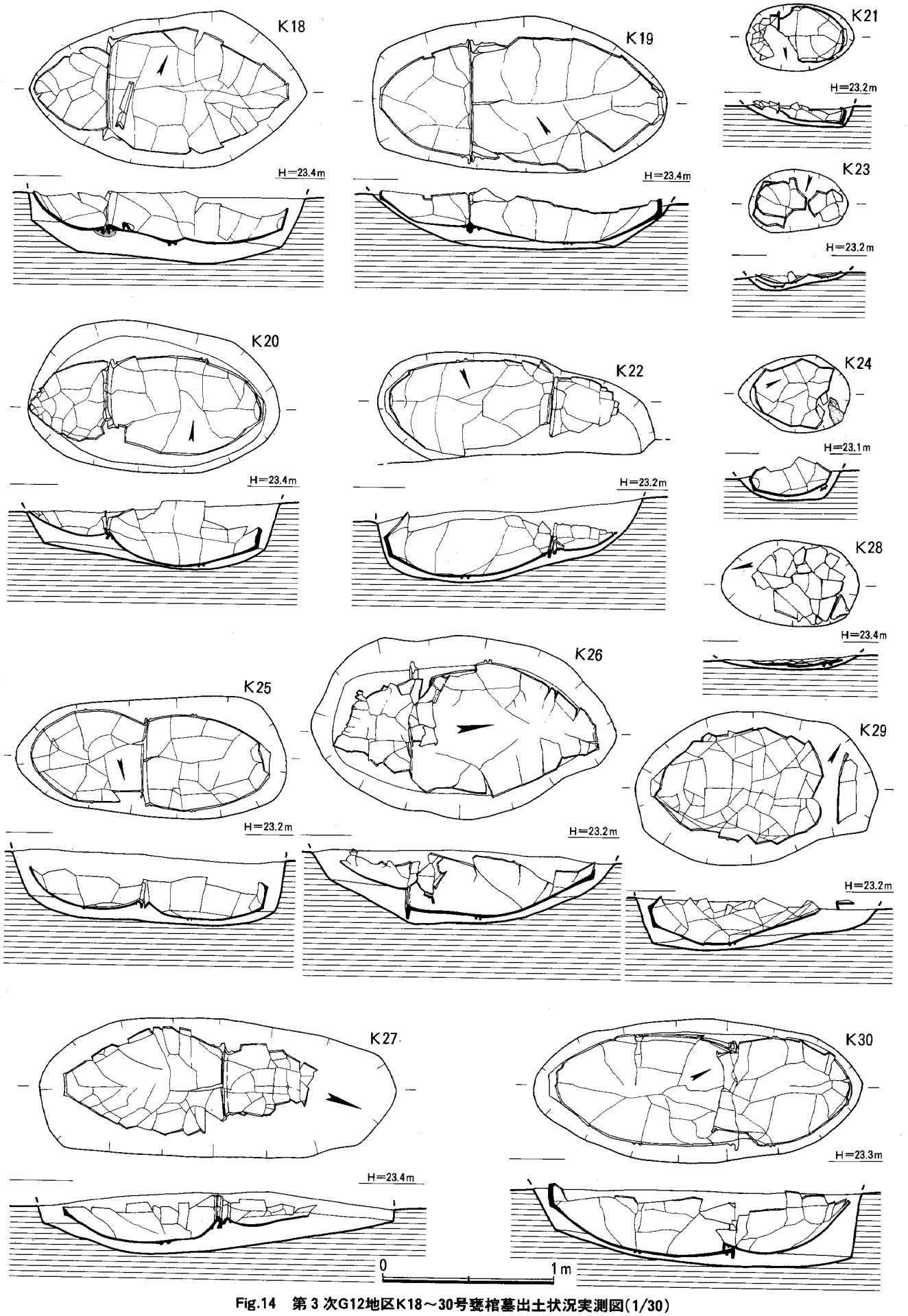


Fig.14　第３次G12地区K18～30号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

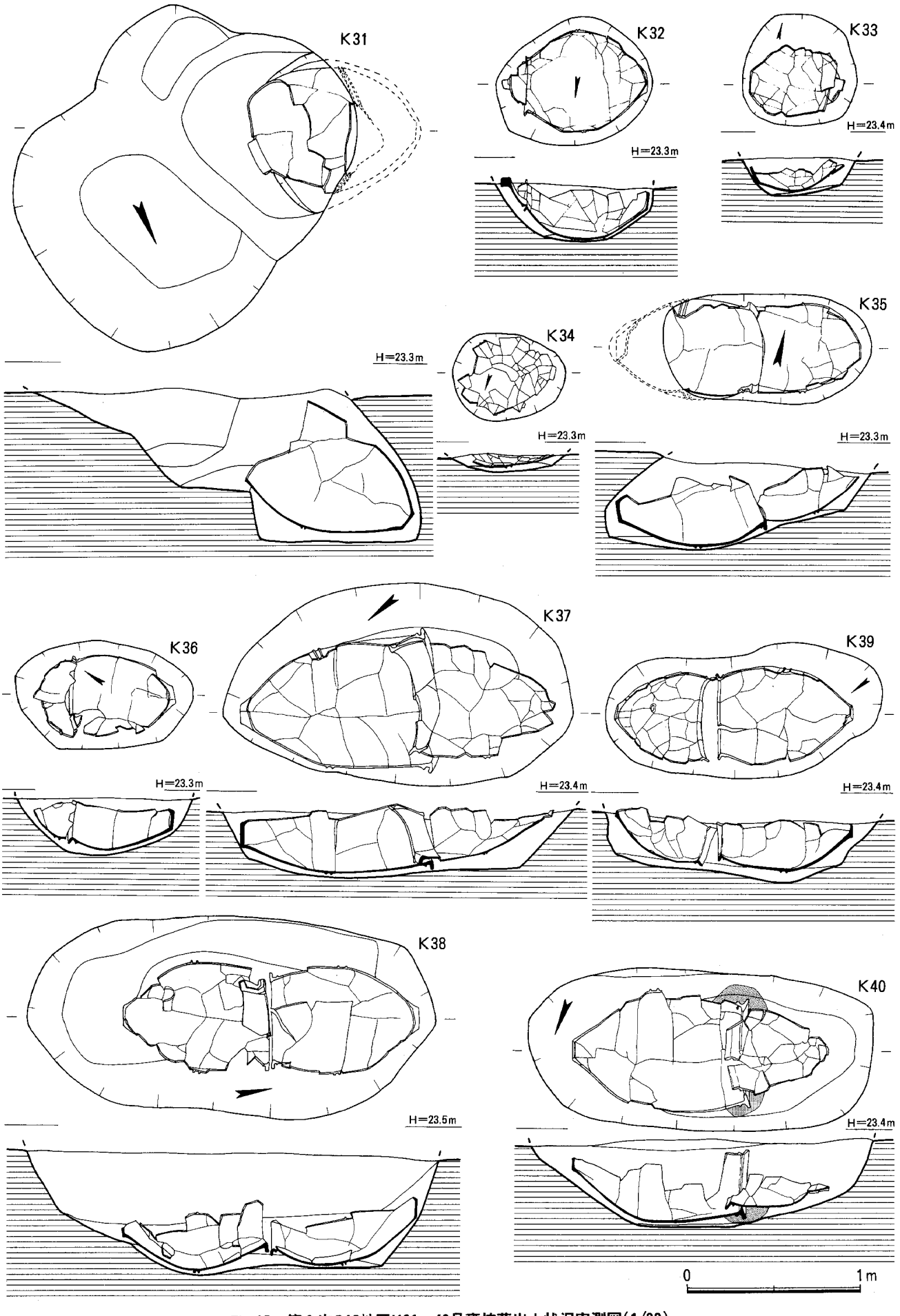


Fig.15　第３次G12地区K31～40号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

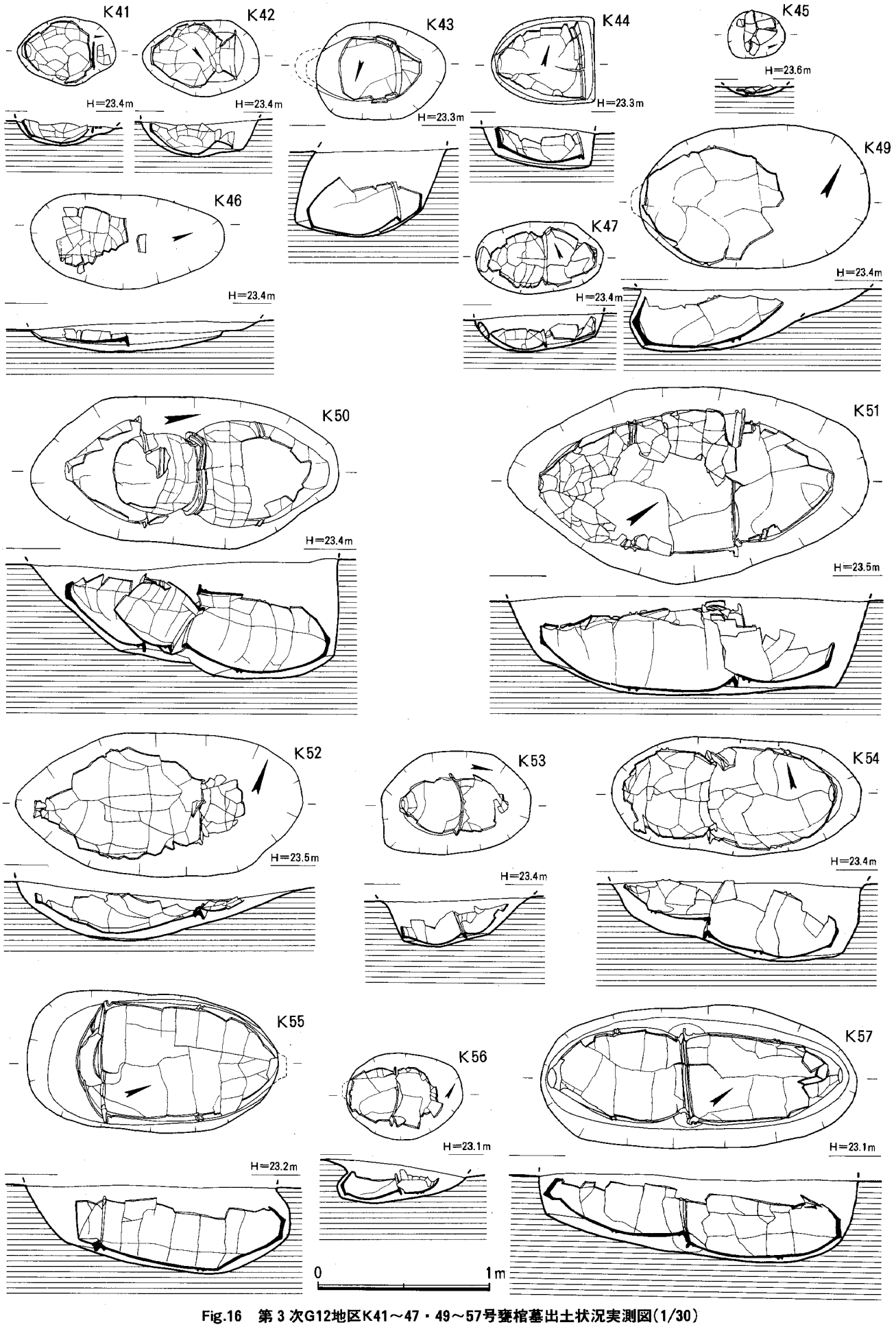


Fig.16　第３次G12地区K41～47・49～57号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

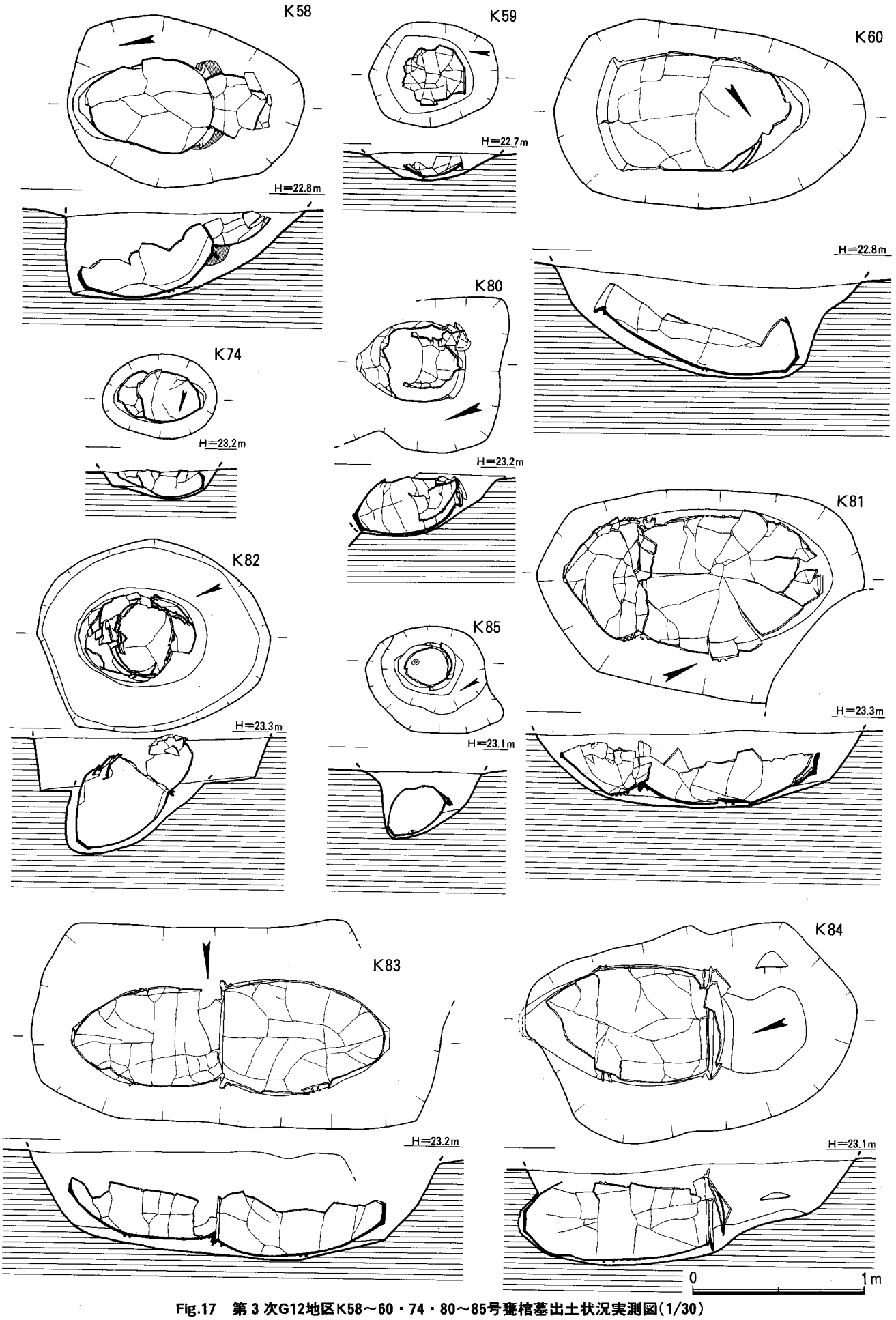


Fig.17　第3次G12地区K58～60・74・80～85号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

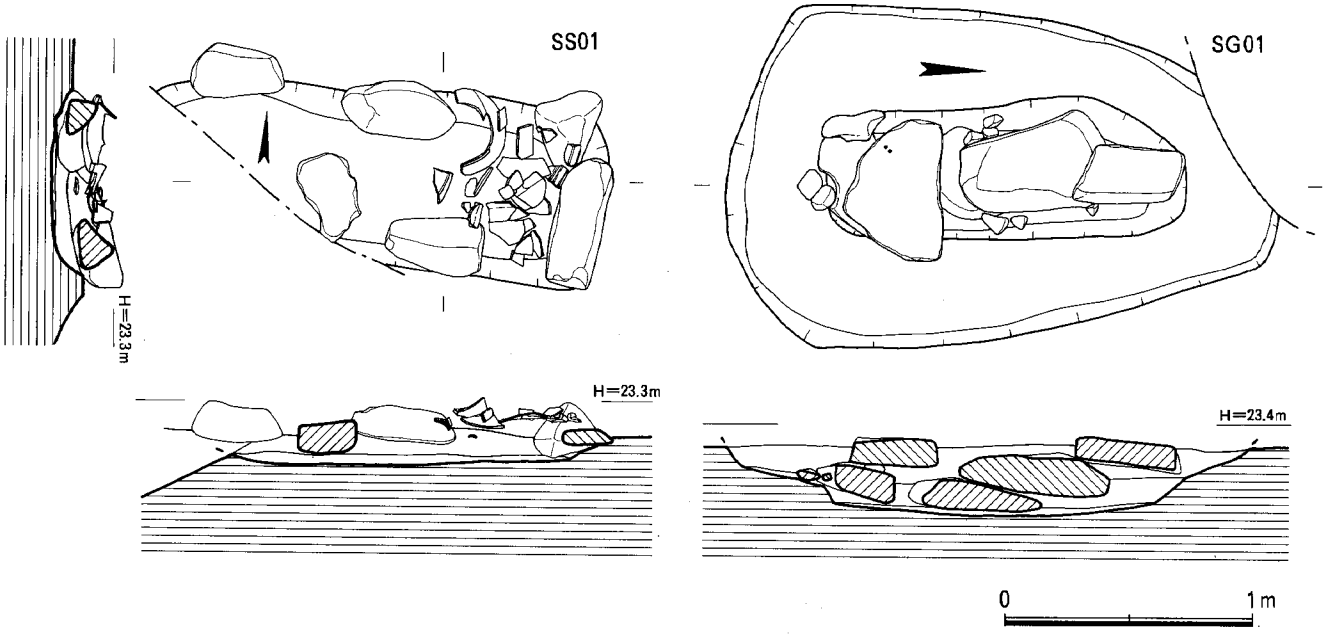


Fig.18　第３次G12地区SS01号石棺墓・SG01石蓋土壙墓出土状況実測図(1/30)

K27号甕棺墓(Fig.14)　削平が著しく上棺に小型甕、下棺に中型甕を使用する接口式甕棺墓である。

K28号甕棺墓(Fig.14)　削平のため破壊され、中型甕の胴部の一部を残す。単独棺か。

K29号甕棺墓(Fig.14)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓と考えられる。残りは悪い。

K30号甕棺墓(Fig.14)　上下棺共に大型の甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K31号甕棺墓(Fig.15)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。木蓋を使用か。

K32号甕棺墓(Fig.15)　上棺に高杯、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K33号甕棺墓(Fig.15)　下棺に小型壷、上棺には小型壷？の打欠きを使用する覆口式甕棺墓である。

K34号甕棺墓(Fig.15)　削平が著しいが、中型甕の破片が残る。単独棺か。

K35号甕棺墓(Fig.15)　上棺に中型甕打欠き、下棺に中型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K36号甕棺墓(Fig.15)　上棺に小型壷打欠き、下棺に小型甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K37号甕棺墓(Fig.13・15)　上下棺に大型の甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置する。墓壙の上部はかなり削平をうけている。

上 棺　く字形に屈曲する口縁部直下に低い三角突帯、収縮した胴部中位に２条の三角突帯を巡らす中型甕である。器面の荒れが著しい。器色は、内外面淡褐色を呈し、共に黒塗りである。外面の一部に粗いタテハケメを残す。焼成は堅緻で、 胎土は密である。口縁部径52.7cm、残存器高71.3cmを測る。

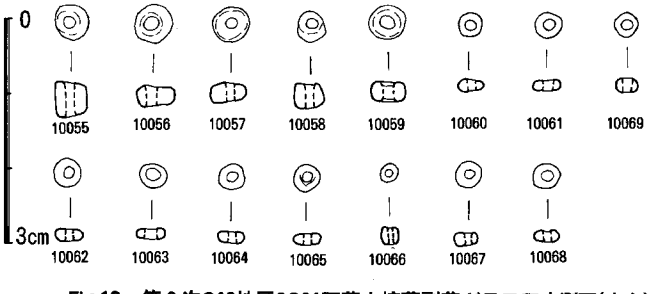


Fig.19　第３次G12地区SG01石蓋土壙墓副葬ガラス玉実測図(実大)

下 棺　平坦口縁直下に三角突帯１条、胴部中位よりやや下った位置にコ字形突帯２条を巡らす大型甕である。胴部中位以上はほぼ垂直に立ち上がる。器色は、外面赤褐色、内面淡灰～淡黄褐色で、内外共に黒塗りである。外面突帯部下に粗いタテハケメが残る。焼成は堅緻で、 胎土は密である。口縁部径83cm、底部径14.4cm、器高105cmを測る。

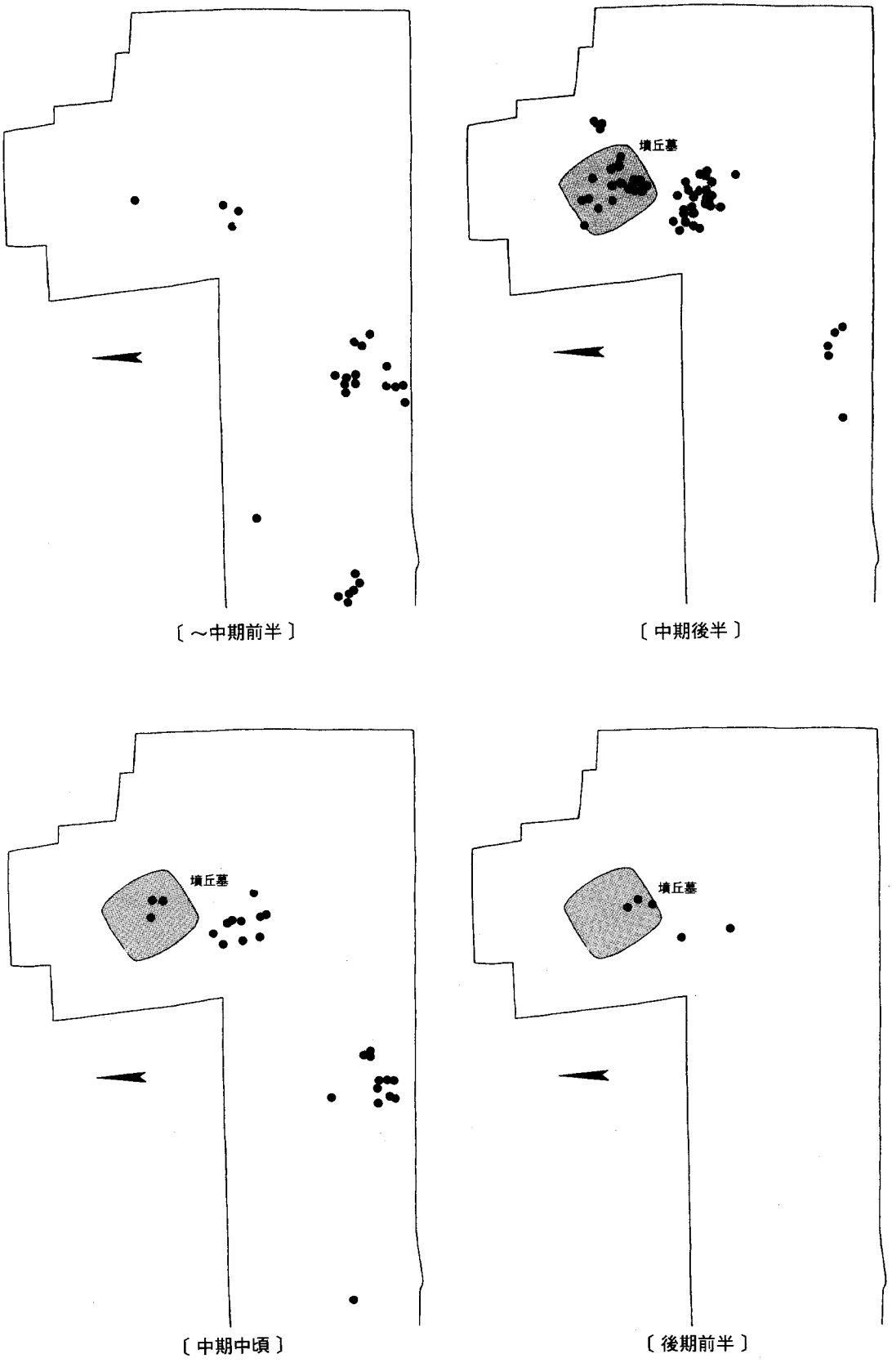


Fig.20　第 3 次調査弥生時代遺構変遷図

K 38号甕棺墓(Fig.15)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K 39号甕棺墓(Fig.15)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。
K 40号甕棺墓(Fig.15)　上棺に小型甕、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。
K 41号甕棺墓(Fig.16)　上棺に小型甕、下棺に壷打欠きを使用する接口式の小児甕棺墓である。
K 42号甕棺墓(Fig.16)　鋤先口縁を有する小型壷を使用する単式の小児甕棺墓である。
K 43号甕棺墓(Fig.16)　上下棺共に小型の甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。
K 44号甕棺墓(Fig.16)　小型甕を使用する単式の小児甕棺墓と考えられる。
K 45号甕棺墓(Fig.16)　小型甕？の破片が僅かに残る。単式の小児甕棺墓か。
K 46号甕棺墓(Fig.16)　上棺に小型甕？、下棺に小型甕を使用する接口式？の小児甕棺墓である。
K 47号甕棺墓(Fig.16)　上棺に小型壷の打欠き、下棺に小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。
K 49号甕棺墓(Fig.16)　中型の甕を使用する単式甕棺墓である可能性がある。
K 50号甕棺墓(Fig.16)　上棺に中型甕2個と下棺に中型甕を使用する覆口式の三連甕棺墓である。
K 51号甕棺墓(Fig.16)　上棺に大型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する呑口式成人甕棺墓である。
K 52号甕棺墓(Fig.16)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。
K 53号甕棺墓(Fig.16)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。
K 54号甕棺墓(Fig.16)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。
K 55号甕棺墓(Fig.16)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K 56号甕棺墓(Fig.16)　上棺に小型壷の胴部以上の打欠き、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。
K 57号甕棺墓(Fig.16)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K 58号甕棺墓(Fig.17)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。
K 59号甕棺墓(Fig.17)　小型甕を使用する小児甕棺墓か。遺存が極端に悪い。
K 60号甕棺墓(Fig.17)　大型甕を使用する単式の成人甕棺墓か。木蓋の可能性が高い。
K 74号甕棺墓(Fig.17)　上棺に小型壷の打欠き、下棺に小型壷の打欠きを使用する覆口式の小児甕棺墓である。
K 80号甕棺墓(Fig.17)　上棺に小型壷の打欠き、下棺には小型甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。
K 81号甕棺墓(Fig.17)　上棺に大型壷打欠き、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。
K 82号甕棺墓(Fig.17)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。
K 83号甕棺墓(Fig.17)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K 84号甕棺墓(Fig.17)　上棺に大型甕の打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。上棺の破損が著しい。
K 85号甕棺墓(Fig.17)　上棺に小型甕？、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

〔石棺墓・石蓋土壙墓〕

S S01号石棺墓(Fig.18)　墓地北端に位置し、上部の削平等によりかなりの改変をうけており、西側小口及び南半の側石を失い、側壁にも欠落が多くある。石材は、長短長が0.5×0.2m、厚さ0.2m程度の転石を使用している。石棺の規模は、内法で長径1.5m以上、内径0.35～0.4mを測る。東側の小口覆土中に中期後半の鋤先状口縁を有する壷破片が落ち込んでいるが、構築時期は後期と考えられる。

Tab.2　第３次調査弥生時代墳墓一覧表

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期（型式）	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K01		●			甕	甕	大型	N-58-E	－	中期後半	G-12地区 埋文報告600所収
K02	●				／	甕	大型	N-22-W	－	中期後半	埋文報告600所収
K03		●			甕	甕	大型	N-11-W	－	中期初頭	埋文報告600所収
K04	●				／	甕	大型	N-17-W	－	中期後半	埋文報告600所収
K05				●	甕	甕	大型	N-66-W	－	中期末	副葬品。埋文報告461所収
K06		●			鉢	甕	大型	N-42-W	0	中期後半	
K07		●			鉢	甕	大型	N-73-E	7	中期中葉	
K08	●				／	甕	中型	N-74-E	14	中期後半	
K09	●				／	甕	小型	N-6-W	10	中期後半	
K10		●			鉢？	甕	中型	N-44-E	19	中期後半	
K11	●				／	甕	大型	N-10-W	－	中期中葉	破片
K12			●		壷	甕	小型	N-47.5-E	21	中期後半	
K13			●		甕	甕	中型	N-3-W	25	中期後半	
K14			●		甕	甕	大型	N-32-E	－18	中期後半	
K15				●	壷	甕	小型	N-6-W	3	中期後半	
K16	●				／	甕	大型	N-52-E	0	中期後半	
K17		●			鉢	甕	中型	N-55-E	10	中期後半	
K18		●			鉢	甕	中型	N-67-E	13	中期後半	
K19		●			鉢	甕	中型	N-57-W	0	中期後半	
K20		●			壷	甕	小型	N-84-E	10	中期後半	
K21		●			甕	甕	小型	N-83.5-W	－	中期前半	
K22		●			鉢	甕	中型	N-70-W	14.5	中期後半	
K23			●		壷	壷 壷	小型	N-75-E	－	中期前半	三連甕棺
K24			●		甕	甕	小型	N-19-E	20	中期後半	
K25		●			甕	甕	中型	N-74-W	12	中期後半	
K26		●			甕	甕	大型	N-8-E	7	中期中葉	
K27		●			甕	甕	中型	N-19.5-W	0	中期後半	
K28	●				／	甕	小型	N-17-E	－	中期後半	
K29		●			甕	甕	中型	N-62-E	13	中期中葉	
K30				●	甕	甕	大型	N-29-E	2	中期後半	
K31	●				／	甕	大型	N-81-W	35	中期後半	
K32		●			高杯	甕	中型	N-83.5-E	5	中期後半	
K33			●		？	壷	小型	N-78.5-E	24	？	
K34	●？				／	甕	中型	N-75-E	－	中期後半	
K35		●			甕	甕	大型	N-78.5-E	9	中期後半	
K36				●	甕	甕	中型	N-37-W	8	中期後半	
K37				●	甕	甕	大型	N-40-E	6	中期中葉	
K38		●			甕	甕	大型	N-10-E	4	中期後半	
K39		●			甕	甕	中型	N-42.5-E	－	中期後半	
K40				●	甕	甕	大型	N-70-E	0	中期後半	
K41		●			甕	壷	小型	N-3-E	－	中期前半	
K42	●				／	壷	小型	N-48-W	7	中期中葉	
K43			●		甕	甕	小型	N-71-E	10	中期後半	
K44	●				／	甕	小型	N-73.5-E	8	中期後半	
K45	●？				／	甕？	小型	N-20-E	－	中期中葉	
K46		●？			甕？	甕	小型	N-18-E	－	中期中葉	
K47		●			壷	甕	小型	N-66-W	－	中期後半	
K48											
K49	●				／	甕	大型	N-61-E	25	中期後半	
K50			●		甕	甕 甕	中型	N-11-E	13	中期後半	
K51				●	甕	甕	大型	N-32-E	－3	中期後半	
K52				●	甕	甕	中型	N-69-E	－	中期後半	
K53		●			甕	甕	小型	N-10-W	17	中期中葉	
K54				●	甕	甕	中型	N-77-W	28	中期後半	
K55		●			鉢	甕	大型	N-22-E	10	中期後半	
K56		●			壷	甕	小型	N-60-E	7	中期中葉	
K57		●			甕	甕	大型	N-38-E	13.5	中期後半	
K58		●			鉢	甕	中型	N-15-E	26	中期後半	
K59	●				／	甕	小型	N-3-W	－	中期後半	
K60	●				／	甕	大型	N-53-W	37	中期後半	
K61		●			甕	甕	大型	N-23-W	－	中期中葉	副葬品。埋文報告461所収
K62		●			甕	甕	大型	N-110-W	－	中期後半	副葬品。埋文報告461所収
K63		●			甕	甕	小型	N-78-W	－	中期後半	埋文報告600所収

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K64		●			甕	甕	大型	N-27-W	—	中期末	副葬品。埋文報告461所収
K65		●			甕	甕	大型	N-23-W	9	中期後半	埋文報告600所収
K66		●			甕	甕	小型	N-35-W	5	中期末	埋文報告600所収
K67		●			鉢	甕	大型	N-20-W	10	中期後半	埋文報告600所収
K68		●			甕	甕	小型	N-72-E	1	後期前半	埋文報告600所収
K69	●				／	甕	大型	N-82-W	—	中期後半	埋文報告600所収
K70		●			甕	甕	大型	N-25-W	37	中期後半	埋文報告600所収
K71		●			甕	甕	大型	N-92-E	10	中期後半	埋文報告600所収
K72	●				／	甕	大型	N-18-W	7	中期後半	埋文報告600所収
K73		●			壷	甕	大型	N-13-W	29	後期前半	埋文報告600所収
K74			●		壷	壷	小型	N-78-E	8	?	
K75		●			甕	甕	大型	N-17-W	0	中期中葉	副葬品。埋文報告461所収
K76		●			甕	甕	大型	N-23-W	3	中期後半	
K77		●			甕	甕	大型	N-14-W	0	中期中葉	副葬品。埋文報告461所収
K78				●	甕	甕	大型	N-10-W	—	中期後半	埋文報告600所収
K79		●			甕	甕	中型	N-2-W	—	中期末	下棺に多量の赤色顔料あり。埋文報告600所収
K80				●	壷	甕	小型	N-22-E	29	中期後半	
K81				●	壷	甕	大型	N-30-E	—	中期後半	
K82		●			鉢	甕	中型	N-29-E	54	中期後半	
K83		●			甕	甕	大型	N-86.5-W	5	中期後半	
K84		●			甕	甕	大型	N-21-E	0	中期後半	
K85		●			甕?	甕	小型	N-32-E	38	中期後半	
K86		●			鉢	甕	大型	N-83-E	19	中期後半	埋文報告600所収
K87		●			壷	甕	小型	N-23-W	—	中期後半	
K88		●			鉢	甕	大型	N-22-W	23	中期後半	埋文報告600所収
K89		●			鉢	甕	大型	N-13-W	—	中期後半	埋文報告600所収
K90		●			甕	甕	小型	／	15	中期後半	埋文報告600所収
K91	●				／	甕	大型	N-21-E	10	中期後半	埋文報告600所収
K92		●			甕	甕	小型	N-61-E	—	中期末	埋文報告600所収
M 1								N-11-W	—	後期	木棺墓。埋文報告461所収
SK93								N-47-W	—	後期	土壙。埋文報告600所収
SG01								N-1.5-E	—	後期	石蓋土壙墓。副葬品
SS01								N-87-E	—	後期	石棺墓
S 01									—	後期	石棺墓。埋文報告600所収
K100			●		甕	甕	小型	N-31-W	—	中期前半	H・I地区
K101			●		甕	甕	小型	N-50-E	23.5	中期前半	
K102	●				／	甕	小型	N-58-E	—	?	
K103		●			甕	甕	小型	N-50-W	21	中期前半	
K104		●			甕	甕	小型	N-15-E	42	中期中葉	
K105		●			鉢	甕	小型	N-50-W	18	中期前半	
K106		●			甕	甕	小型	N-46-E	13	中期前半	
K107		●			甕	甕	中型	N-50-E	−10	中期前半	
K108		●			鉢	甕	大型	N-17-E	3	中期後半	
K109		●			甕	甕	小型	N-2-W	10	中期前半	G・H12地区
K110		●			甕	甕	小型	N-3.5-E	—	中期中葉	
K111	●				／	壷	小型	N-22-E	26	中期前半	
K112		●			甕	甕	小型	N-52-E	30	中期前半	
K113		●			鉢	甕	大型	N-37.5-E	—	中期前半	
K114		●			甕	甕	大型	N-5-W	−7	中期前半	
K115											
K116		●			甕	甕	小型	N-18-E	—	中期中葉	
K117		●			鉢	甕	大型	N-5-E	26	中期前半	
K118		●			壷	甕	大型	N-9.5-W	6	中期前半	
K119		●			甕	甕	小型	N-10-W	—	中期前半	
K120		●			甕	甕	中型	N-40-E	5	中期中葉	
K121		●			壷	甕	大型	N-32-W	6	中期前半	
K122		●			甕	甕	中型	N-69-W	14.5	中期中葉	
K123											
K124		●			甕	甕	中型	N-88.5-W	—	中期後半	
K125		●			鉢	壷	小型	N-86.5-E	—	中期前半	
K126	●				／	甕	大型	N-69-W	—	中期前半	
K127	●				／	甕		N-20-W	0	中期中葉	
K128		●			甕	甕	大型	N-60-E	17	中期中葉	
K129		●			壷	甕	大型	N-40-W	0	中期中葉	
K130		●			壷	甕	中型	N-69-E	—	中期後半	

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K131	●?				／	甕	小型	N-54-E	—	?	
K132		●			鉢	甕	大型	N-35-E	18	中期中葉	G·H12地区
K133		●			鉢	甕	大型	N-46-E	10	中期後半	
K134	●				／	壷	小型	N-30-W	—	中期前半	
K135											
K136	●				／	甕	大型	N-79-E	4	中期中葉	
K137		●			鉢	甕	小型	N-6-E	16	中期中葉	
K138	●				／	甕	大型	N-12-E	—	中期前半	
K139		●			壷?	甕	小型	N-74-E	—	?	破片のみ
K140	●				／	甕	小型	N-5-E	29	中期中葉	
K141				●	甕	甕	大型	N-10-E	11	中期中葉	
K142											
K143		●			鉢	甕	中型	N-31-W	—	中期後半	
K144											
K145		●			壷	甕	小型	N-56.5-E	—	中期前半	
K146			●		壷	甕	小型	N-46-E	6	中期中葉	

ＳＧ01号石蓋土壙墓(Fig.18・19)　墓地南端に位置し、ほぼ南北に長軸をとる。墓壙は２段に掘られ、外側は南側に広いばち形の長方形をなす。また、内側は長径1.5m、幅0.5m、深さ0.2ｍ程度を測る。蓋には花崗岩の扁平板石５枚を使用したと考えられるが、殆ど原位置をとどめていない。内側掘り方は、南側が小口幅が広く、通例であれば頭部は南側にあったと考えられる。また、転落した蓋石下より副葬品と考えられるガラス小玉15個が出土した。

出土ガラス小玉　小玉は何れもスカイブルー色のもので、径が0.5cmから0.2cmのものまでが見られ、大きくは径の大・小の２種類に区別される。

４．小結

これまで第３次調査で検出したＨＩ地区・ＧＨ12地区・Ｇ12地区の弥生時代埋葬遺構の個別について略述した。第３次調査区での弥生時代墓地は、先述のように大きく４地点ほどに区別でき、時期的には中期前半から後期前半に及んでいる。ところでこれらの墓地は各時期においてどのような分布の変遷を辿ったのかを簡単に見ることにしたい。

〔**中期前半期**〕　まず後の樋渡墳丘墓下の中期初頭の小型棺を初源とするが、調査区中央のＧＨ12地区墓地を最大にして、小児棺を主とするＨＩ地区墓地それからＧ12地区墓地の各地点に墓地のコアができあがるようである。

〔**中期中頃**〕　既成のＧ12地区・ＧＨ１２地区墓地は、ほぼ前時期の分布を踏襲しながら存続する。また、ＨＩ地区墓地は、殆ど終焉となる。そしてこの時期になってＧ12地区墓地の北側に隣接して樋渡墳丘墓の造営使用が始まる。

〔**中期後半期**〕　この時期が各墓地とも最も埋葬数の増大する様相となる。樋渡墳丘墓では、埋葬甕棺が前時期のものを避けるように墳丘全域に広がるほか、これの南側、Ｇ12地区墓地でもやや北側に片寄って、東西方向に長い分布を見せる。また、ＧＨ12墓地でも散発的ではあるが、墓地は存続するようである。

〔**後期前半期**〕　後期になると樋渡墳丘墓でも甕棺墓・土壙墓・石棺墓が僅かに残り、隣接するＧ12地区墓地でも石棺墓・石蓋土壙墓などが散発的に見られるのみとなり、ここに墓地が終焉となるものと考えられる。

さて、第３次調査地区における墓地の変遷について見たが、これらの動向は、更に南側に広がる同時代墓地(第４～６次調査区)との関係を抜きにして理解することは不十分であり、また、多くの生活遺構との関わりも合わせて報告末尾で述べることにしたい。

第二節　第４・５次調査報告

概　要　第４次調査では、これまで青銅製武器などを多く副葬した吉武高木遺跡とその南辺のＥ-16～Ｉ-18地区で検出された前期末から中期前半期までの甕棺墓について報告を行ってきた。今回はこれ以降の時期にあたる中期中頃から後期前半期の甕棺墓について各調査地点においてその一部を選択して報告することにしたい。

今回報告する第４次調査は、地区で大きく３地点に区別される。それは遺跡群の南端近くを東西に走る１号幹線道路、その南側のＬＭ地区とこれの南西側に連続するＭＮ地区である（Fig.3参照）。これらの調査区は、これまで、いわゆる「甕棺ロード」と呼んできた北東から南西方向に延長が約450mほど延びる甕棺墓群の西側端にあたり、一連の墳墓群にあたるが、広大なため便宜的に分けて報告する。

１号幹線道路調査区は、今回西側の第２区について報告を行うが、ここでは幅７ｍ、延長1,000mの道路敷きの範囲に中期前半から後期前半までの甕棺墓100基、石棺墓２基が検出された。また、隣接するＬＭ地区では中期前半から後期前半期の甕棺墓156基、石棺墓８基、祭祀遺構９基が見つかった。更に隣接するＭＮ地区では、中期前半～後期前半期の甕棺墓137基が検出された。

以下では各地点毎に報告を行うこととしたい。

１．１号幹線道路２区墓地

〔甕棺墓〕

Ｋ01号甕棺墓（Fig.22）　上棺に大型壷の打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺である。

Ｋ02号甕棺墓（Fig.22）　上下共に中型の甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

Ｋ03号甕棺墓（Fig.22）　上棺に小型壷打欠き、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

Ｋ04号甕棺墓（Fig.22）　削平のため全体を失うが、大型の甕を使用する成人甕棺墓である。単棺か。

Ｋ05号甕棺墓（Fig.22）　小型の壷の底部付近が僅かに残る。小児甕棺墓と考えられる。

Ｋ06号甕棺墓（Fig.22）　上下棺とも小型の壷の打欠きを使用する覆口式の小児甕棺墓で、下棺に２次的穿孔がなされている。

Ｋ07号甕棺墓（Fig.22）　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

Ｋ08号甕棺墓（Fig.22）　上棺に中型甕、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

Ｋ09号甕棺墓（Fig.22）　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。木蓋の可能性が高い。

Ｋ10号甕棺墓（Fig.22）　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

Ｋ11号甕棺墓（Fig.22）　上棺に鋤先状口縁を有する大型壷、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。接口部下面の目張り粘土が顕著に残る。

Ｋ12号甕棺墓（Fig.22）　大型の甕を使用する成人甕棺墓である。単独棺と考えられ、木蓋使用か。

Ｋ13号甕棺墓（Fig.23）　口縁外唇に刻み目を有する壷形土器の胴部突帯破片が浅い土壙内に見られ、小児甕棺墓以外に祭祀の可能性も残る遺構である。

Ｋ14号甕棺墓（Fig.23）　上棺に大型壷打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

Ｋ15号甕棺墓（Fig.23・24）　上下棺共にほぼ同規模の大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置される。

上　棺　外面淡褐色を呈し、全面に大黒斑あり。調整は、全面ヘラナデで、焼成は堅緻、 胎土密である。口縁部径64.4cm、底部径12.8cm、器高100.5cmを測る。

下　棺　外面淡褐色を呈し、全面丹塗り。調整は、胴部端にタテハケメを一部残す。焼成は堅緻で、

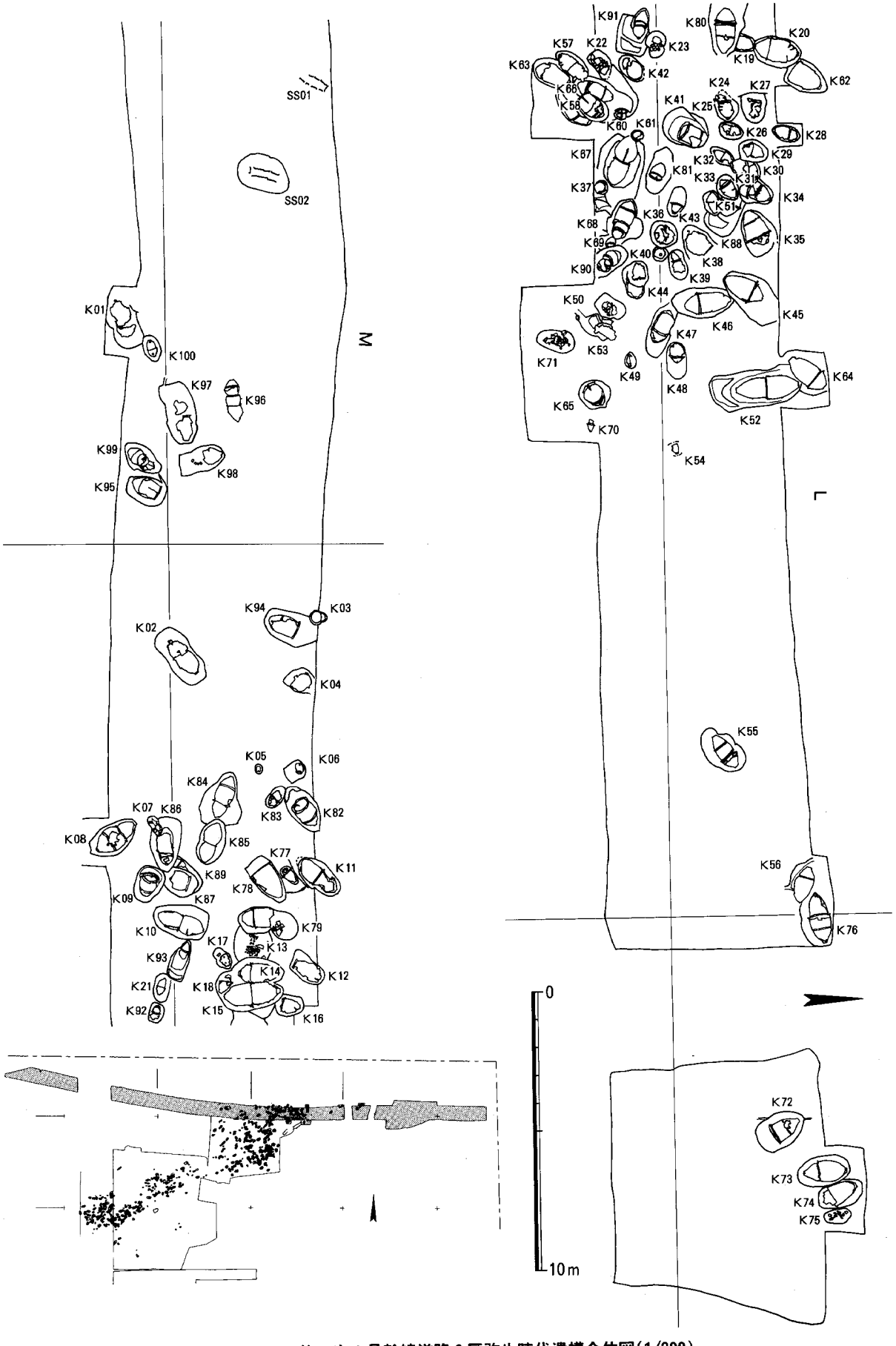


Fig.21　第４次１号幹線道路２区弥生時代遺構全体図(1/200)

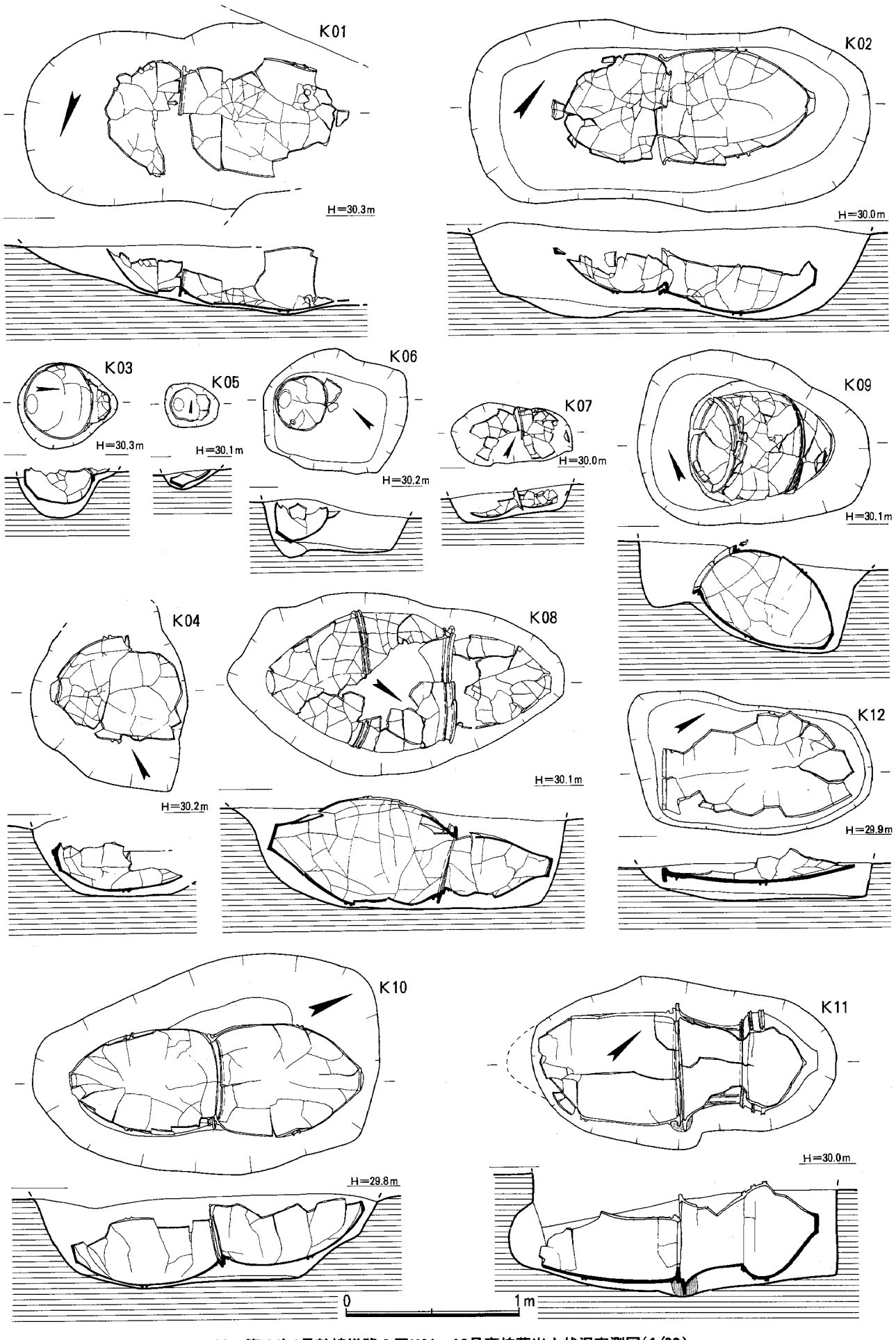


Fig.22　第４次1号幹線道路２区K01～12号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

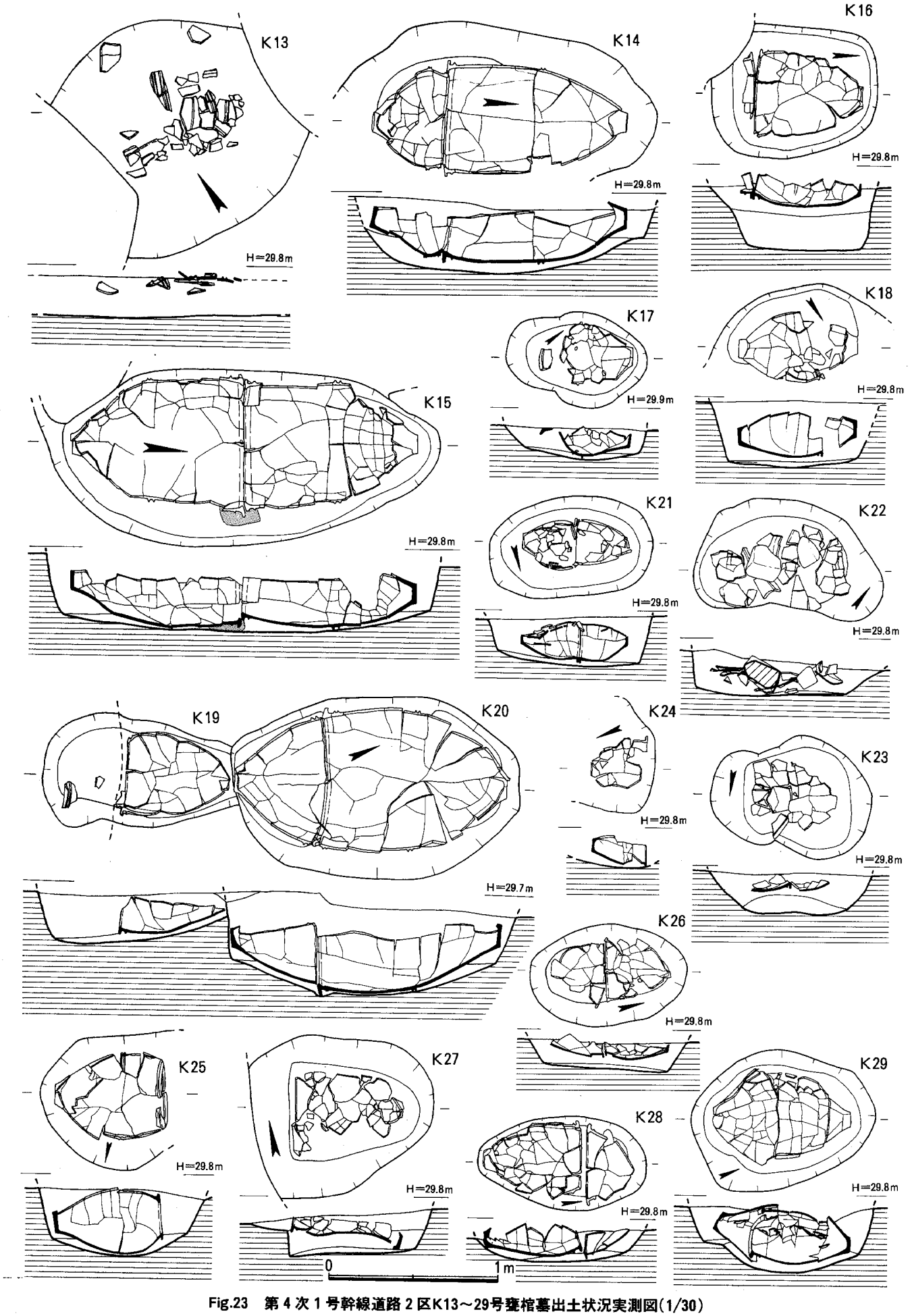


Fig.23　第４次１号幹線道路２区K13～29号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

胎土も密である。口縁部径61.6cm、底部径13.0cm、器高97.2cmを測る。

K 16号甕棺墓(Fig.23)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K 17号甕棺墓(Fig.23)　鋤先状口縁を有する小型壷を使用する小児甕棺墓か。

K 18号甕棺墓(Fig.23)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 19号甕棺墓(Fig.23)　中型の甕を使用する単式の甕棺墓か。複式の可能性も残る。

K 20号甕棺墓(Fig.23)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 21号甕棺墓(Fig.23)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 22号甕棺墓(Fig.23)　丹塗り広口壷破片・円礫などが混在し、祭祀の可能性がある。また、小児棺墓の標石が落ち込んだ可能性もある。

K 23号甕棺墓(Fig.23)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 24号甕棺墓(Fig.23)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。複棺の可能性もある。

K 25号甕棺墓(Fig.23)　中型甕を使用する単式甕棺墓である。木蓋の可能性が高い。

K 26号甕棺墓(Fig.23)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 27号甕棺墓(Fig.23)　中型甕を使用する甕棺墓である。削平のため複棺であった可能性もある。

K 28号甕棺墓(Fig.23)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 29号甕棺墓(Fig.23)　上棺は中型甕打欠き、下棺に中型甕を使用する覆口式の成人甕棺墓である。

K 30号甕棺墓(Fig.25)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 31号甕棺墓(Fig.25)　中型甕を使用する単式の甕棺墓である。削平をうけ、複棺の可能性もある。

K 32号甕棺墓(Fig.25)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 33号甕棺墓(Fig.25)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 34号甕棺墓(Fig.25)　上下棺共に大型の甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K 35号甕棺墓(Fig.25)　上棺に中型鉢、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K 36号甕棺墓(Fig.25)　中型壷の打欠きを使用する甕棺墓である。土圧で氷裂状に細かくつぶれる。

K 37号甕棺墓(Fig.25)　上下棺共に小型の壷打欠きを使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K 38号甕棺墓(Fig.25)　大型甕を使用する単式の成人甕棺墓であろう。複棺の可能性も残る。

K 39号甕棺墓(Fig.25)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 40号甕棺墓(Fig.25)　上棺に小型甕？打欠き、下棺に小型壷打欠きを使用する覆口式？の小児甕棺墓である。埋置は殆ど直立した状態と考えられる。

K 41号甕棺墓(Fig.25)　大型甕を使用する典型的な単式成人甕棺墓である。木蓋の可能性が高い。

K 42号甕棺墓(Fig.25)　上棺に小型鉢、下棺に中型甕を使用する覆口式の甕棺墓である。

K 43号甕棺墓(Fig.25)　小型甕を使用する小児甕棺墓か。西側に空間があり、複棺の可能性もある。

K 44号甕棺墓(Fig.25)　中型の甕を使用する単式の甕棺墓であろう。

K 45号甕棺墓(Fig.26)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 46号甕棺墓(Fig.26)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 47号甕棺墓(Fig.26)　上棺に大型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する覆口式の成人甕棺墓である。

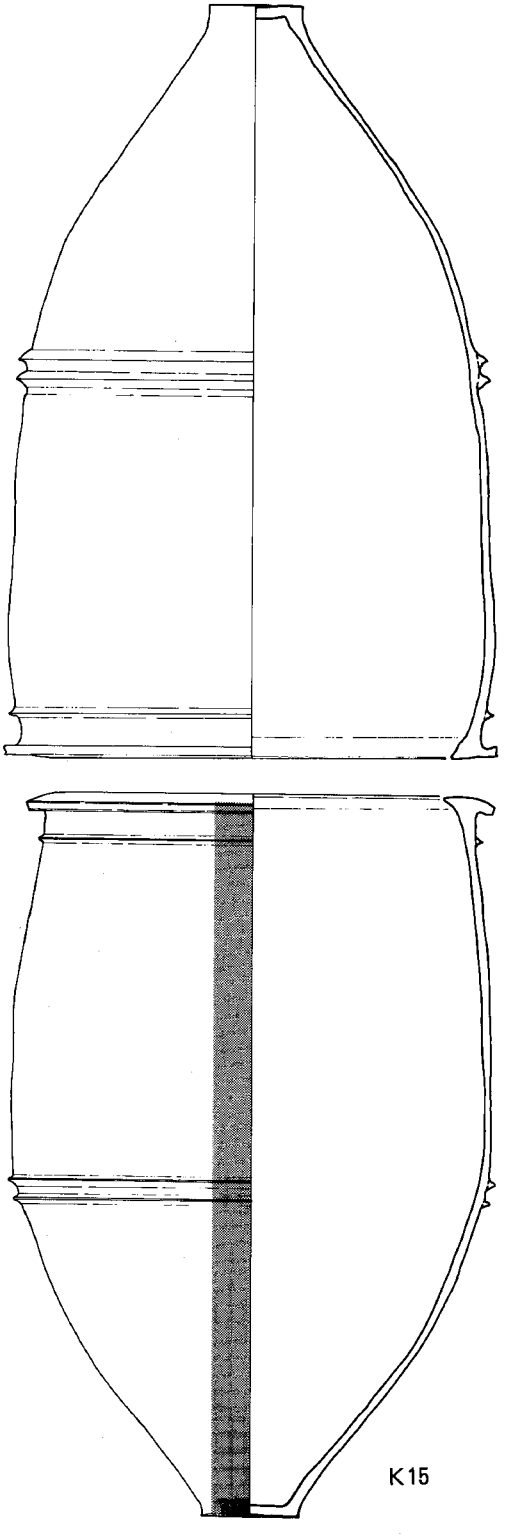
K 48号甕棺墓(Fig.26)　上棺に小型甕打欠き、下棺に小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K 49号甕棺墓(Fig.26)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。削平のため複棺の可能性を残す。

K 50号甕棺墓(Fig.26)　中型甕が墓壙内で破砕状態にあり、単式の小児甕棺墓の可能性がある。

K 51号甕棺墓(Fig.26)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 52号甕棺墓(Fig.26)　上下棺共に大型の甕を使用する典型的な接口式の成人甕棺墓である。



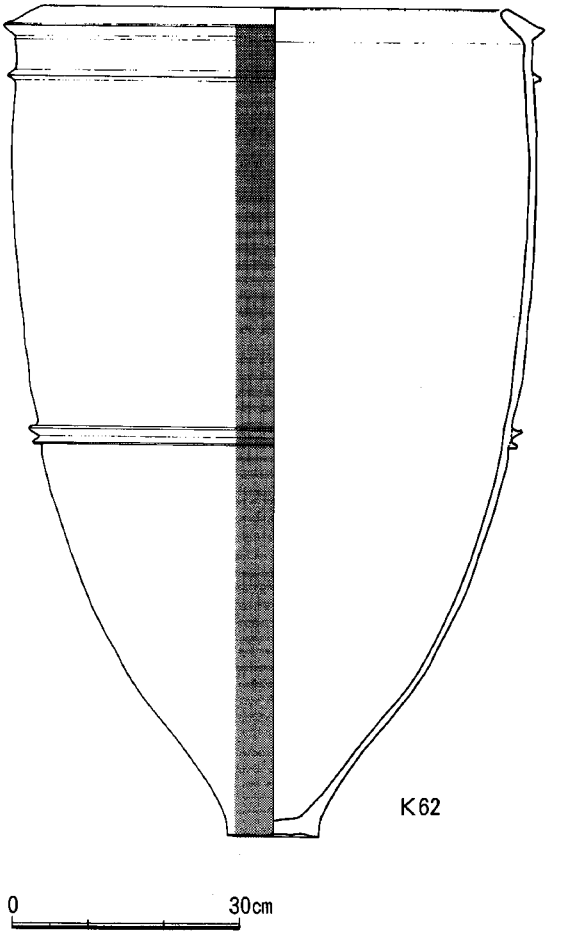


Fig.24　第４次１号幹線道路２区K15・62号甕棺実測図(1/10)

K53号甕棺墓(Fig.26)　中型の甕を使用した単式の甕棺墓である。口縁部付近の余地の状況から首肯される。

K54号甕棺墓(Fig.26)　小型甕を使用する小児甕棺墓か。削平から複棺の可能性がある。

K55号甕棺墓(Fig.27)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K56号甕棺墓(Fig.27)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K57号甕棺墓(Fig.27)　上下棺ともに中型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K58号甕棺墓(Fig.27)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓と考えられる。

K59号甕棺墓(Fig.27)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K60号甕棺墓(Fig.27)　小型甕を使用する小児甕棺であろう。削平から複棺の可能性がある。

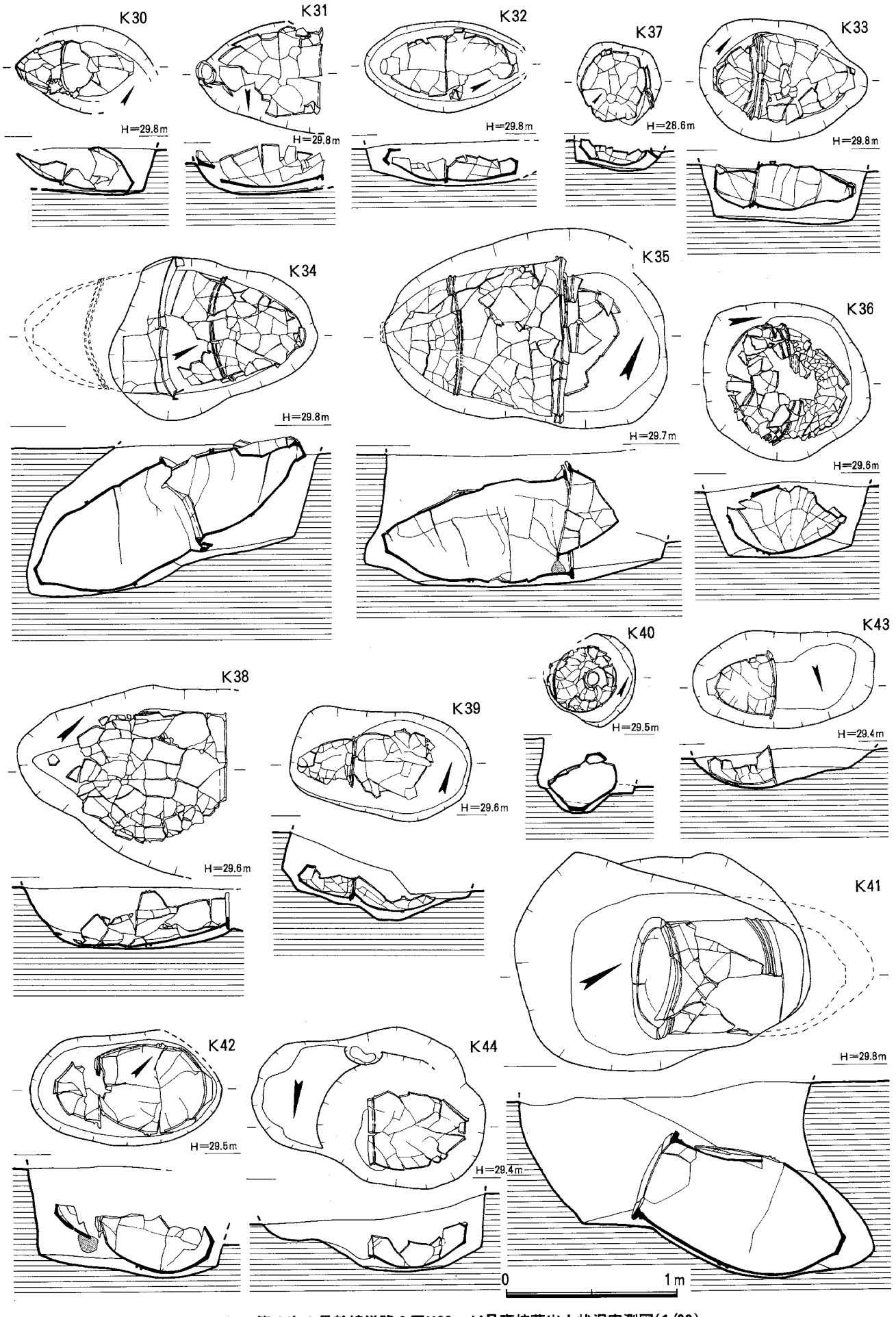


Fig.25　第４次１号幹線道路２区K30～44号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

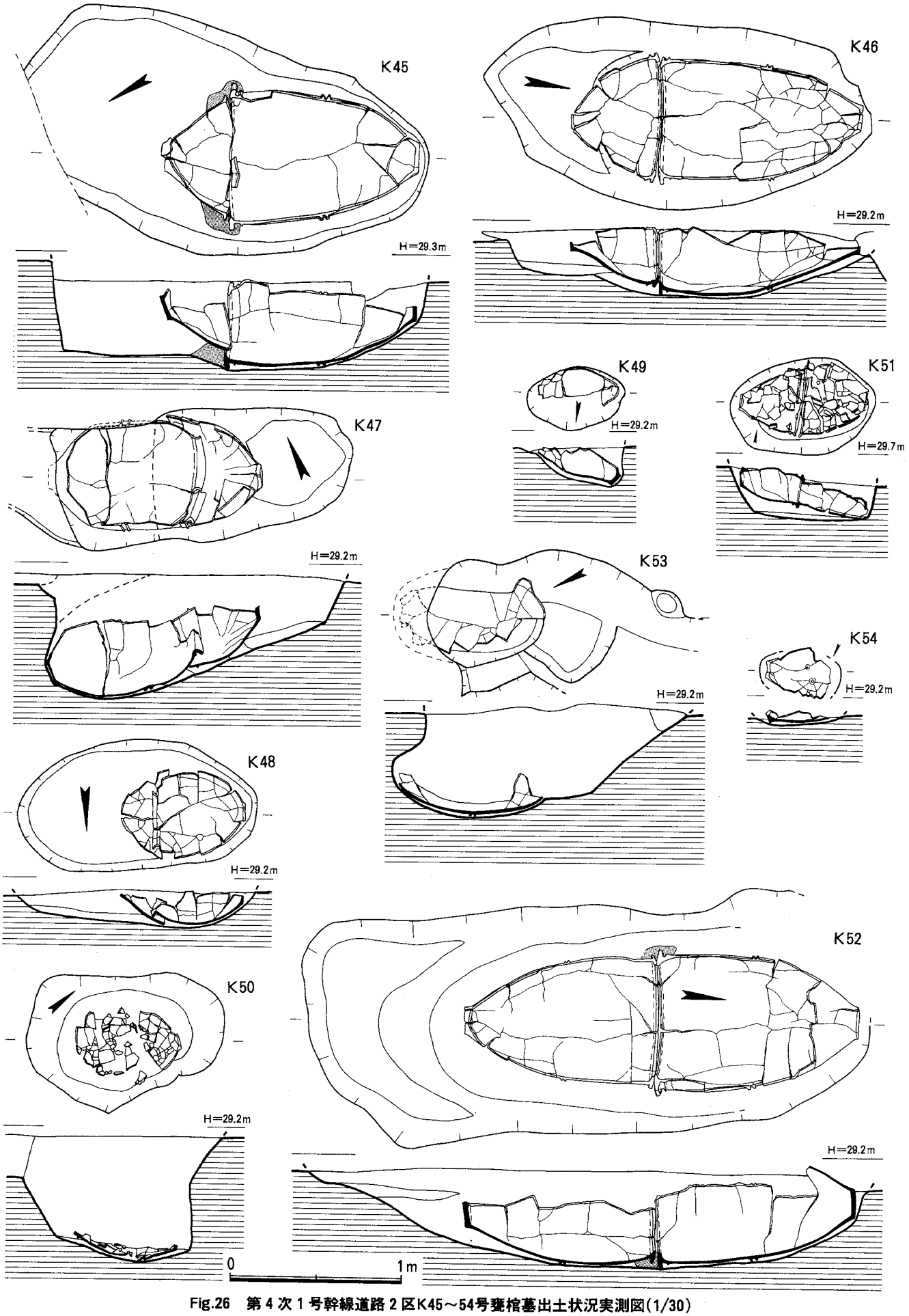


Fig.26　第４次１号幹線道路２区K45～54号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

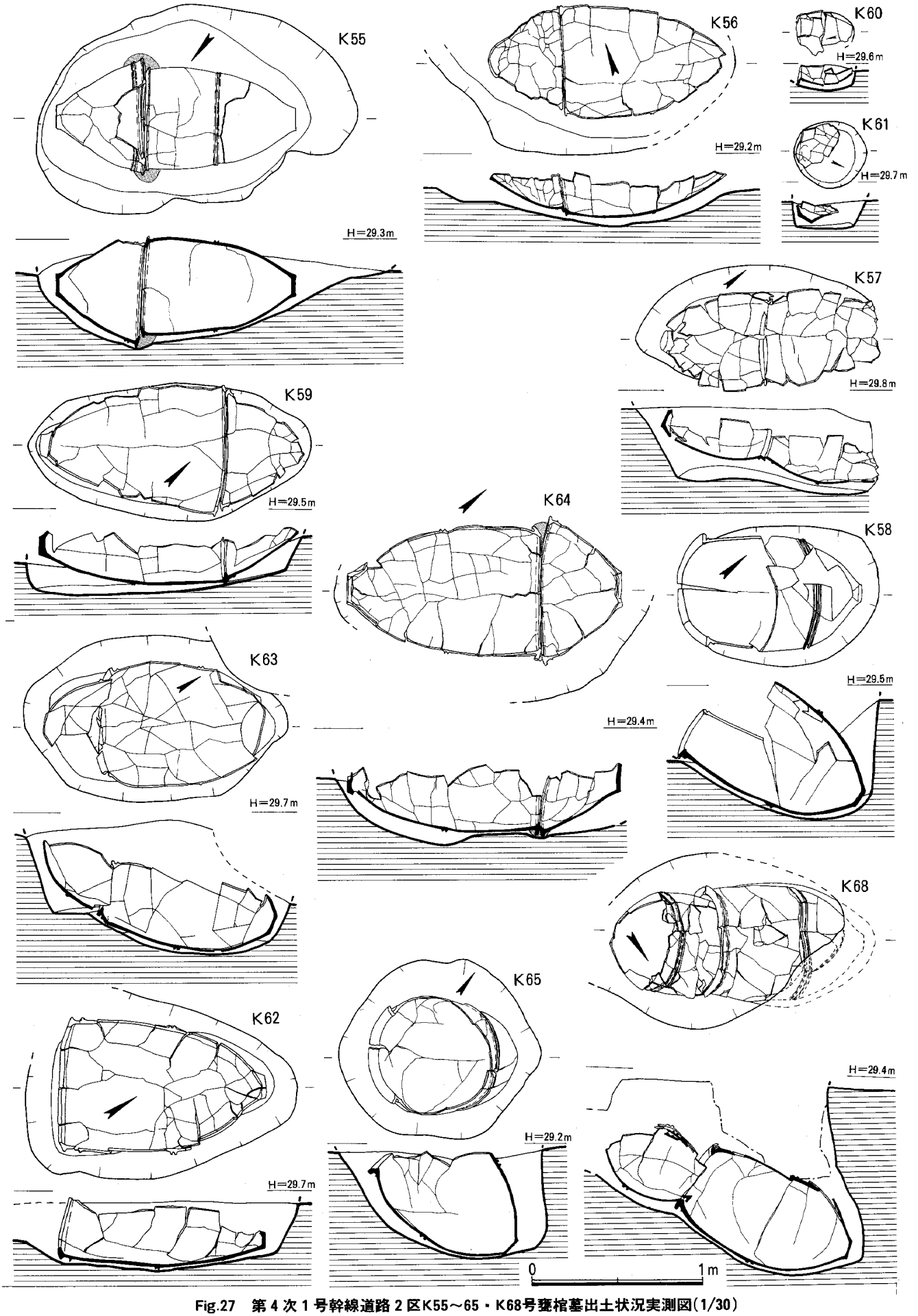


Fig.27　第４次１号幹線道路２区K55～65・K68号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

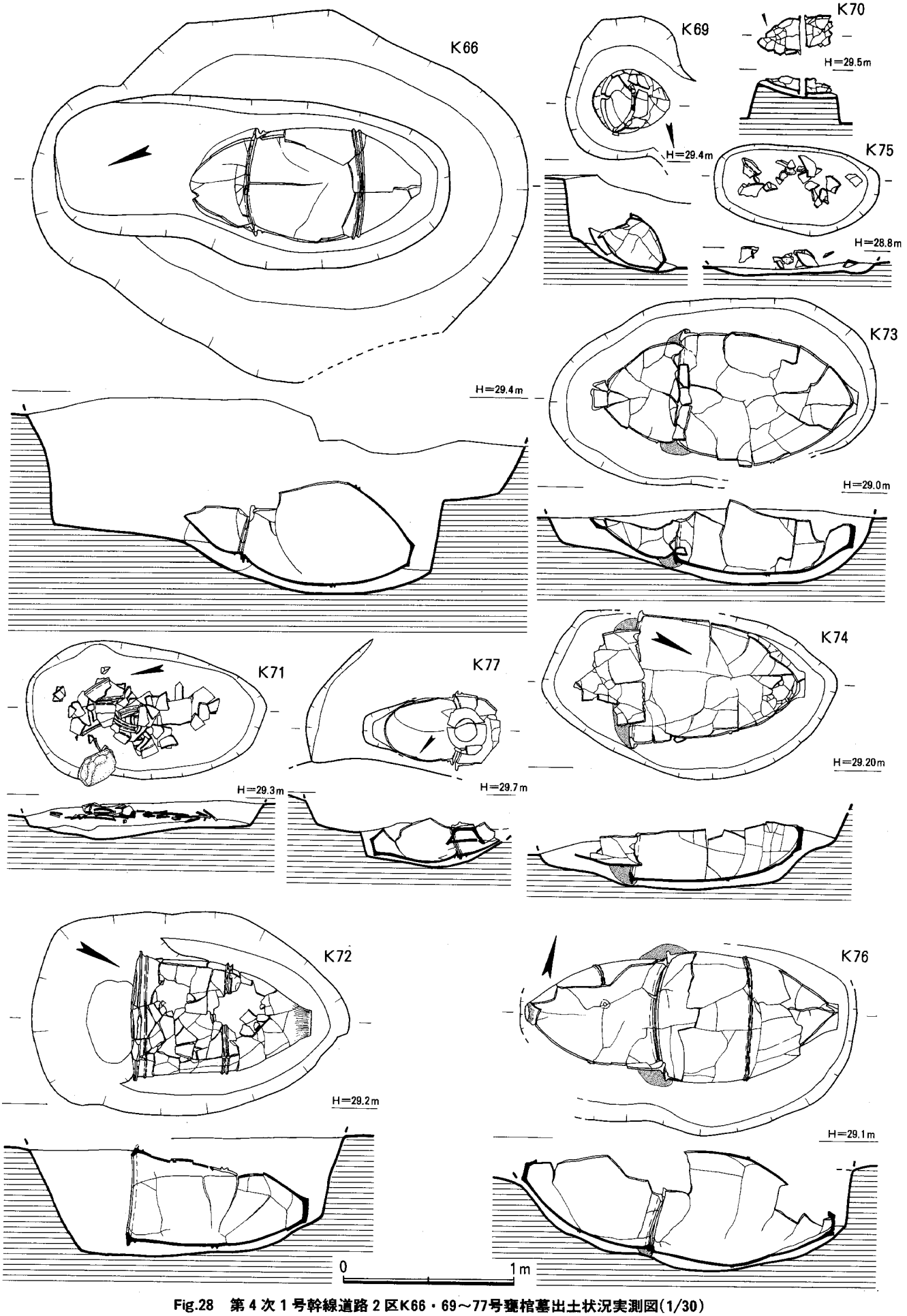


Fig.28　第４次１号幹線道路２区K66・69～77号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

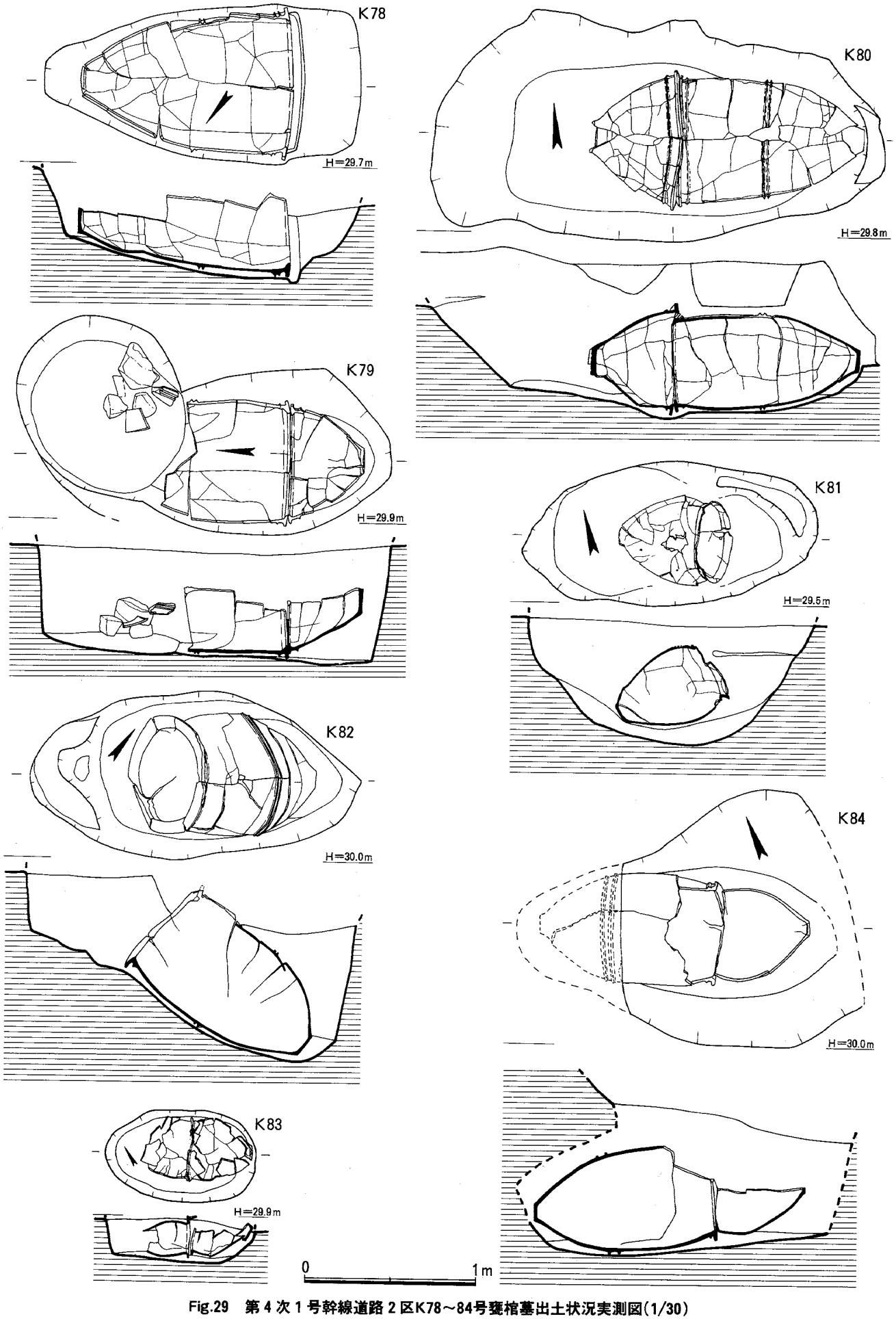


Fig.29　第４次１号幹線道路２区K78～84号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

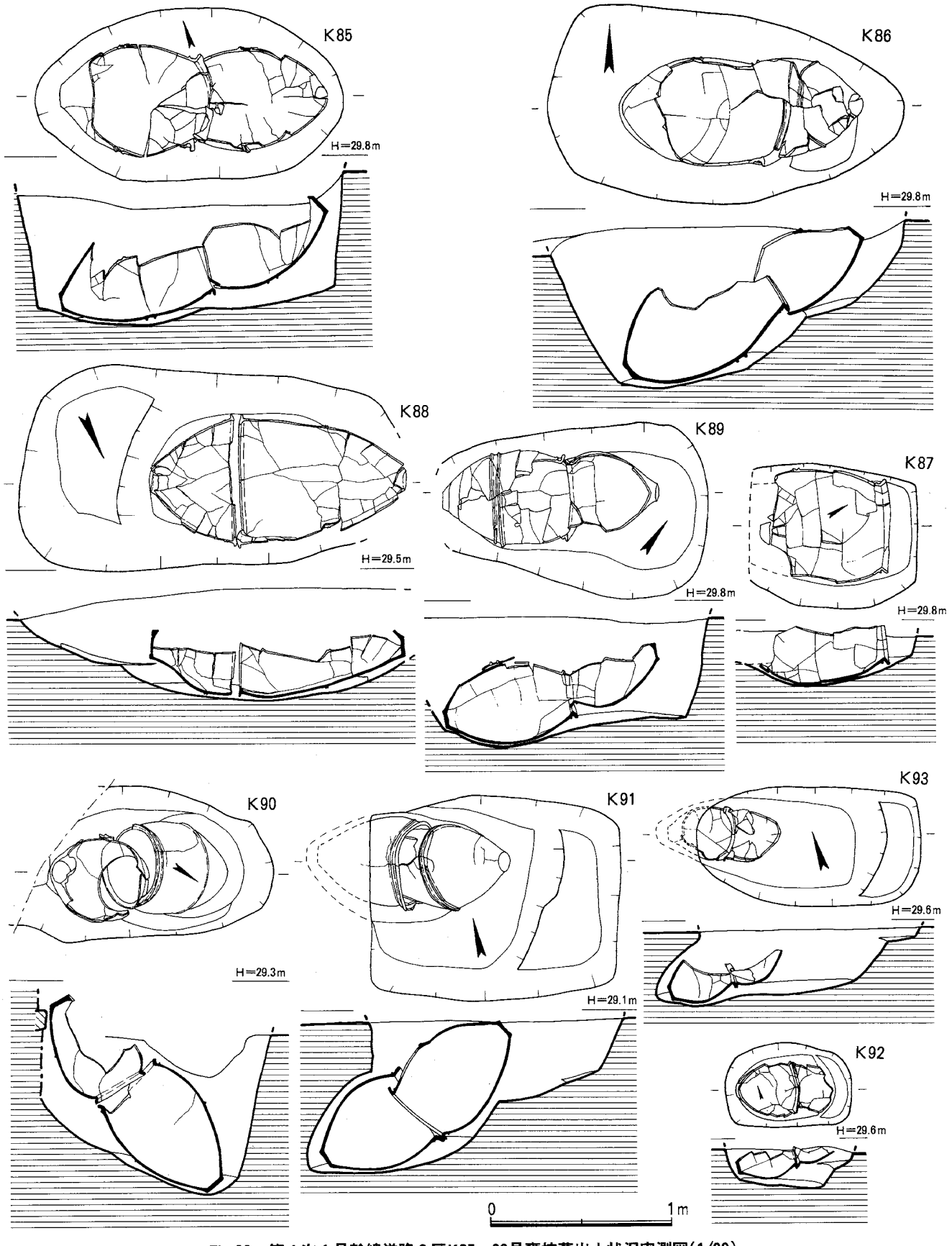


Fig.30　第４次１号幹線道路２区K85～93号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

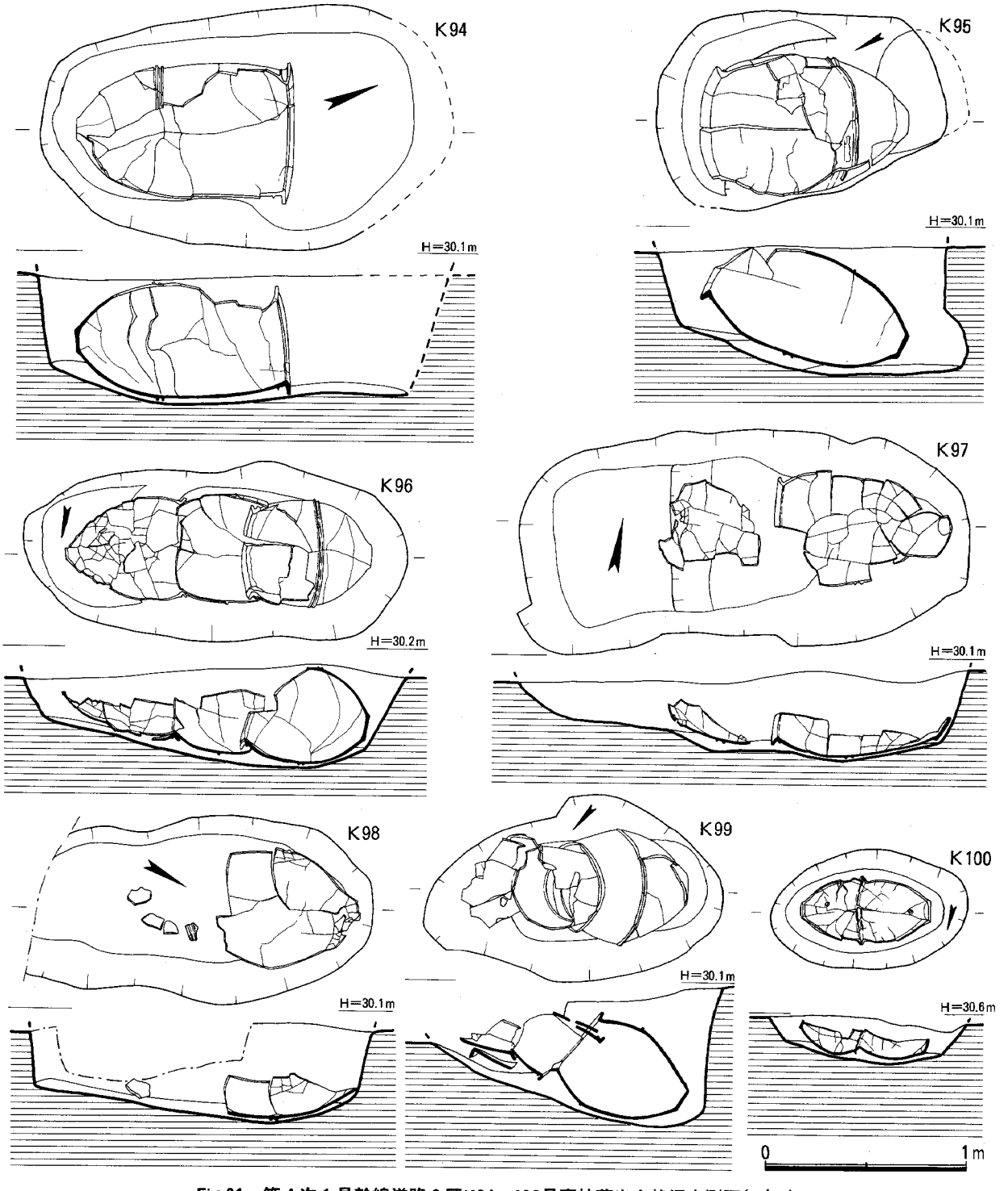


Fig.31　第４次１号幹線道路２区K94～100号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K61号甕棺墓(Fig.27)　小型の甕破片が残る。削平のため上棺が失われた可能性が高い。

K62号甕棺墓(Fig.24・27)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。木蓋の可能性が高い。

出 土 甕　口縁上端部が伸び上がり、口縁下に１条の三角突帯、胴部中位に不揃いのいびつな突帯２条を巡らす。外面は淡褐色を呈し、全面黒塗りである。胴部突帯付近に大黒斑あり。焼成は堅緻で、胎土は密である。口縁部径71cm、底部径12cm、器高111.3cmを測る。

K63号甕棺墓(Fig.27)　上棺に大型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

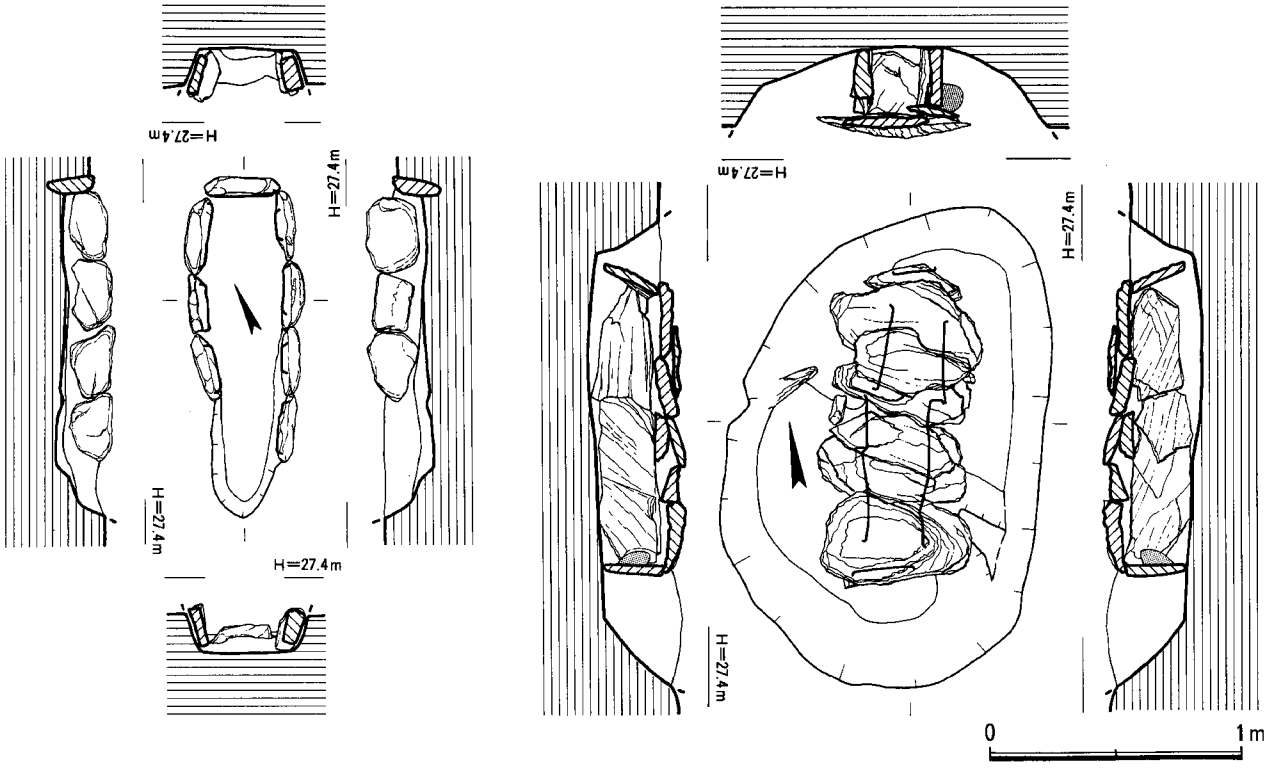


Fig.32　第４次１号幹線道路２区SS01・02石棺出土状況実測図(1/30)

K64号甕棺墓(Fig.27)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K65号甕棺墓(Fig.27)　急角度に埋置される大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。
K66号甕棺墓(Fig.28)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K68号甕棺墓(Fig.27)　上棺に中型甕、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。
K69号甕棺墓(Fig.28)　上棺に小型甕打欠き、下棺に小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。
K70号甕棺墓(Fig.28)　上下棺共に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。
K71号甕棺墓(Fig.28)　小型の甕破片・角礫が投入された状況から祭祀土壙の可能性が高い。
K72号甕棺墓(Fig.28)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。木蓋の可能性が高い。
K73号甕棺墓(Fig.28)　上棺に中型壷打欠き、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。
K74号甕棺墓(Fig.28)　上棺に大型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺である。
K75号甕棺墓(Fig.28)　小型甕の破片が浅い土壙内に僅かに残る。小児甕棺墓の可能性がある。
K76号甕棺墓(Fig.28)　上下棺共に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K77号甕棺墓(Fig.28)　上下棺共に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。
K78号甕棺墓(Fig.29)　大型の甕を使用する典型的な単式の成人甕棺墓である。
K79号甕棺墓(Fig.29)　平安以降の土壙に切られるが大型甕を使用する単式の成人甕棺墓である。
K80号甕棺墓(Fig.29)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
K81号甕棺墓(Fig.29)　急角度に埋置される中型甕を使用する単式の甕棺墓である。
K82号甕棺墓(Fig.29)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓と考えられる。
K83号甕棺墓(Fig.29)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。
K84号甕棺墓(Fig.29)　上棺は中型甕打欠き、下棺は大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

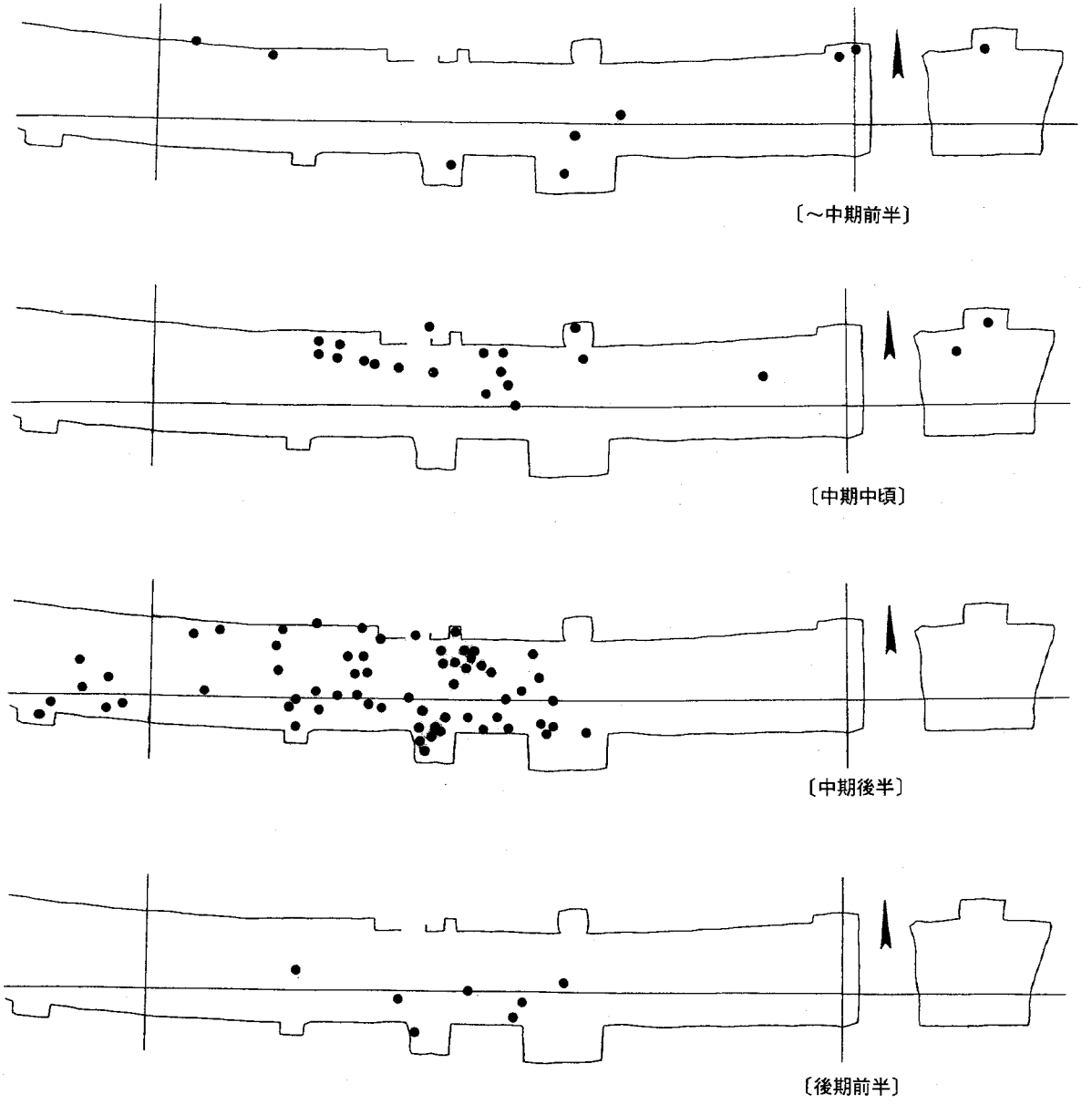


Fig.33　第４次１号幹線道路２区弥生時代遺構変遷図

Ｋ85号甕棺墓(Fig.30)　上棺に大型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。
Ｋ86号甕棺墓(Fig.30)　上棺に中型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する覆口式の成人甕棺墓である。
Ｋ87号甕棺墓(Fig.30)　胴部下半を失うが、中型甕を使用する単式の甕棺墓である。
Ｋ88号甕棺墓(Fig.30)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。
Ｋ89号甕棺墓(Fig.30)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。
Ｋ90号甕棺墓(Fig.30)　上下棺共に中型甕を使用し、急角度で埋置される接口式の甕棺墓である。
Ｋ91号甕棺墓(Fig.30)　上下棺共に中型甕を使用し、急角度で埋置される接口式の甕棺墓である。
Ｋ92号甕棺墓(Fig.30)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。
Ｋ93号甕棺墓(Fig.30)　上下棺共に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓で、横穴埋置が良く残る。
Ｋ94号甕棺墓(Fig.31)　大型甕を使用する単式の成人甕棺墓である。木製蓋の利用が考えられる。

Tab.3　第４次調査弥生時代墳墓一覧表

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期（型式）	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K01		●			壷	甕	大型	N-69-E	－	中期後半	１号幹線道路２区
K02				●	甕	甕	大型	N-50-E	8	中期後半	
K03		●			鉢	壷	小型	N-1-E	42	中期前半	
K04	●?				／	甕	大型	N-61-W	15	中期後半	
K05	●				／	壷	小型	N-80-E	64	?	
K06			●		壷	壷	小型	N-44-W	50.5	中期前半	
K07		●			甕	甕	小型	N-66-E	－	中期後半	
K08		●			甕	甕	大型	N-36-W	27	中期後半	
K09	●				／	甕	中型	N-66-W	33	中期後半	
K10		●			甕	甕	大型	N-24-E	15	中期後半	
K11		●			壷	甕	大型	N-42-E	0	中期後半	
K12	●				／	甕	大型	N-32-E	0?	中期後半	
K13		?							－	中期後半	祭祀遺構か。
K14		●			壷	甕	大型	N-1-W	0	中期中葉	
K15		●			甕	甕	大型	N-6-W	4	中期中葉	
K16		●			鉢	甕	中型	N-6-E	0	中期後半	
K17	●				／	壷	小型	N-37-E	－	中期後半	
K18		●			甕	甕	小型	N-55-W	4	中期後半	
K19	●				／	甕	中型	N-28-E	－	中期後半	
K20		●			甕	甕	大型	N-28-E	0	中期後半	
K21		●			甕	甕	小型	N-72-W	0	中期後半	
K22		●?			甕?	甕?	小型	N-51-E	－	中期後半	祭祀か
K23		●			甕	甕?	小型	N-85-E	－	中期後半	
K24	●				／	甕	小型	N-25-E	5	中期中葉	
K25	●				／	甕	中型	N-80-E	5	中期後半	
K26		●			甕	甕	小型	N-17-E	0	中期後半	
K27	●				／	甕	中型	N-77.5-E	－	中期後半	
K28		●			甕	甕	小型	N-14-E	13	中期後半	
K29			●		甕	甕	小型	N-24-E	11	中期後半	
K30		●			甕	甕	小型	N-62-E	30	中期後半	
K31	●				／	甕	中型	N-86.5-W	－	中期後半	
K32		●			甕	甕	小型	N-31-E	7.5	中期後半	
K33		●			鉢	甕	中型	N-50-E	6	中期後半	
K34				●	甕	甕	大型	N-29-E	26	中期中葉	
K35				●	鉢	甕	大型	N-65-E	8	中期中葉	
K36	●				／	壷	中型	N-10-E	－	中期後半	
K37		●			壷	壷	小型	N-50-E	－	中期後半	
K38	●				／	甕	大型	N-50-E	－	中期中葉	
K39		●			鉢	甕	小型	N-72-E	－	中期後半	
K40			●?		甕?	壷	小型	N-60-E	86	中期中葉	
K41	●				／	甕	大型	N-29-E	25	中期後半	
K42		●			鉢	甕	中型	N-50-E	19	中期後半	
K43	●				／	甕	小型	N-74-W	10	中期中葉	
K44	●				／	甕	中型	N-82-E	4	後期前半	
K45		●			鉢	甕	大型	N-31-E	1	中期後半	
K46		●			鉢	甕	大型	N-10-W	0	中期後半	
K47			●		甕	甕	大型	N-65.5-W	16	中期後半	
K48			●		甕	甕	小型	N-89-W	－	後期初頭	
K49	●				／	甕	小型	N-84-E	47	中期前半	
K50	●?				／	甕	中型	N-38-E	－	中期後半	
K51		●			甕	甕	小型	N-84-E	－10	中期後半	
K52		●			甕	甕	大型	N-7-W	2.5	中期中葉	
K53	●?				／	甕	大型	N-22.5-E	－	中期後半	
K54	●?				／	甕	小型	N-68-E	－	中期前半	
K55		●			鉢	甕	大型	N-54-E	0	中期中葉	
K56		●			鉢	甕	大型	N-71-W	－	中期前半	
K57		●			甕	甕	中型	N-38.5-E	－10	後期前半	
K58	●				／	甕	大型	N-40-E	34	中期後半	
K59		●			鉢	甕	大型	N-43-E	3	中期前半	
K60	●					甕	小型	N-15-E	26	中期後半	
K61	●					壷	小型	N-23-W	－	中期？	
K62	●					甕	大型	N-33-E	8	中期中葉	
K63		●			甕	甕	大型	N-29.5-E	23	中期後半	

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K64		●			鉢	甕	大型	N-39-E	—	中期中葉	
K65	●				／	甕	大型	N-50-E	54	中期末	
K66		●			鉢	甕	大型	N-22-E	14.5	中期後半	
K67		●			甕	甕	大型	N-80-W	9	中期後半	素環頭太刀副葬
K68				●	甕	甕	大型	N-54-W	27	中期後半	
K69			●		甕	甕	小型	N-77-W	37	中期後半	
K70		●			甕	甕	小型	N-66-W	—	中期後半	
K71								N-12.5-E	—	中期前半	破片。祭祀か。
K72	●				／	甕	大型	N-27-W	3	中期中葉	
K73		●			甕	甕	大型	N-4-W	5	中期前半	
K74				●	甕	甕	大型	N-26-W	3.5	中期中葉	
K75	●?				／	甕	小型		—	?	破片。
K76		●			甕	甕	大型	N-78-E	9	中期前半	
K77		●			甕	甕	小型	N-49-E	17	中期中葉	
K78	●				／	甕	大型	N-53-E	2	中期中葉	木蓋痕跡。
K79		●			鉢	甕	大型	N-S	2	中期中葉	
K80		●			鉢	甕	大型	N-85-W	1	中期中葉	
K81	●				／	甕	中型	N-76-W	31.5	後期初頭	
K82	●				／	甕	大型	N-52-E	37	中期後半	
K83		●			甕	甕	小型	N-57-W	—	中期後半	
K84		●			甕	甕	大型	N-68-W	6	中期後半	
K85		●			甕	甕	大型	N-70-W	21	後期末	
K86			●		甕	甕	大型	N-88.5-W	32	中期後半	
K87	●				／	甕	中型	N-30-E	—	中期後半	
K88		●			鉢	甕	大型	N-66-W	2	中期中葉	
K89		●			甕	甕	中型	N-53-E	17	後期前半	
K90		●			甕	甕	中型	N-34-E	32	後期前半	
K91		●			甕	甕	中型	N-78-W	35	後期前半	
K92		●			甕	甕	小型	N-72-W	13	中期後半	
K93		●			甕	甕	小型	N-73-W	22	中期後半	
K94	●				／	甕	大型	N-20-E	2	中期後半	
K95	●				／	甕	大型	N-29-E	26	中期後半	
K96		●			甕	甕 甕	中型	N-81-E	13	中期末	三連
K97		●?			甕	甕	大型	N-81-E	—	中期末	
K98	●?				／	甕	大型	N-30-W	—	中期後半	
K99		●			甕	甕 甕	中型	N-46-E	32	中期末	三連
K100		●			甕	甕	小型	N-76-E	12	中期後半	
SS-01								N-26-E	—		石棺墓
SS-02								N-9-E	—		石棺墓

K95号甕棺墓(Fig.31)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。

K96号甕棺墓(Fig.31)　中型甕3個体を使用する三連式の甕棺墓である。下棺以外は打欠きである。

K97号甕棺墓(Fig.31)　上棺に大型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する成人甕棺墓である。両棺の合わせ部は接していないが、接口式として良いかと思われる。

K98号甕棺墓(Fig.31)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓か。後世の破損が著しい。

K99号甕棺墓(Fig.31)　中型甕3個体を使用する三連式の甕棺墓である。

K100号甕棺墓(Fig.31)　上下棺共に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

〔石棺墓〕

SS01号石棺墓(Fig.32)　墓地西側端に検出された小型の石棺である。墓壙掘り方は頭部と考えられる北側に広く、南側ですぼまる。長径1.3m、短径0.5mで深さ0.2m程度の規模となる。北側小口部と両側辺に外開きに石材を立てている。蓋石材も失われている。

SS02号石棺墓(Fig.32)　長楕円形の墓壙中央に内法が長辺長1.2m、幅0.2m、深さ0.25m程度の小型の石棺を築いている。石材はすべて青灰色をした変成岩を使用する。遺物などの出土はない。

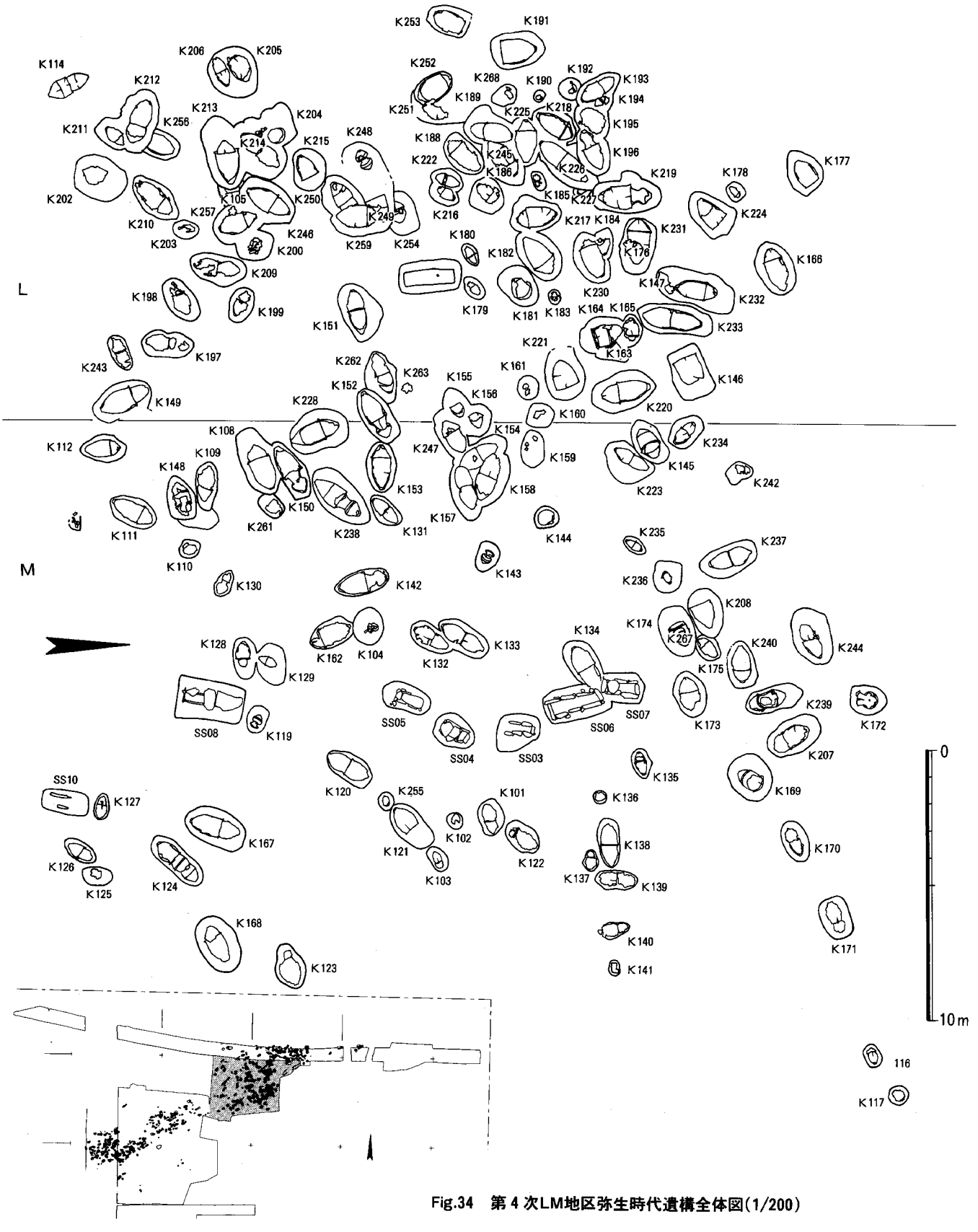


Fig.34　第４次LM地区弥生時代遺構全体図(1/200)

２．ＬＭ地区墓地

〔甕 棺 墓〕

Ｋ101号甕棺墓(Fig.35)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

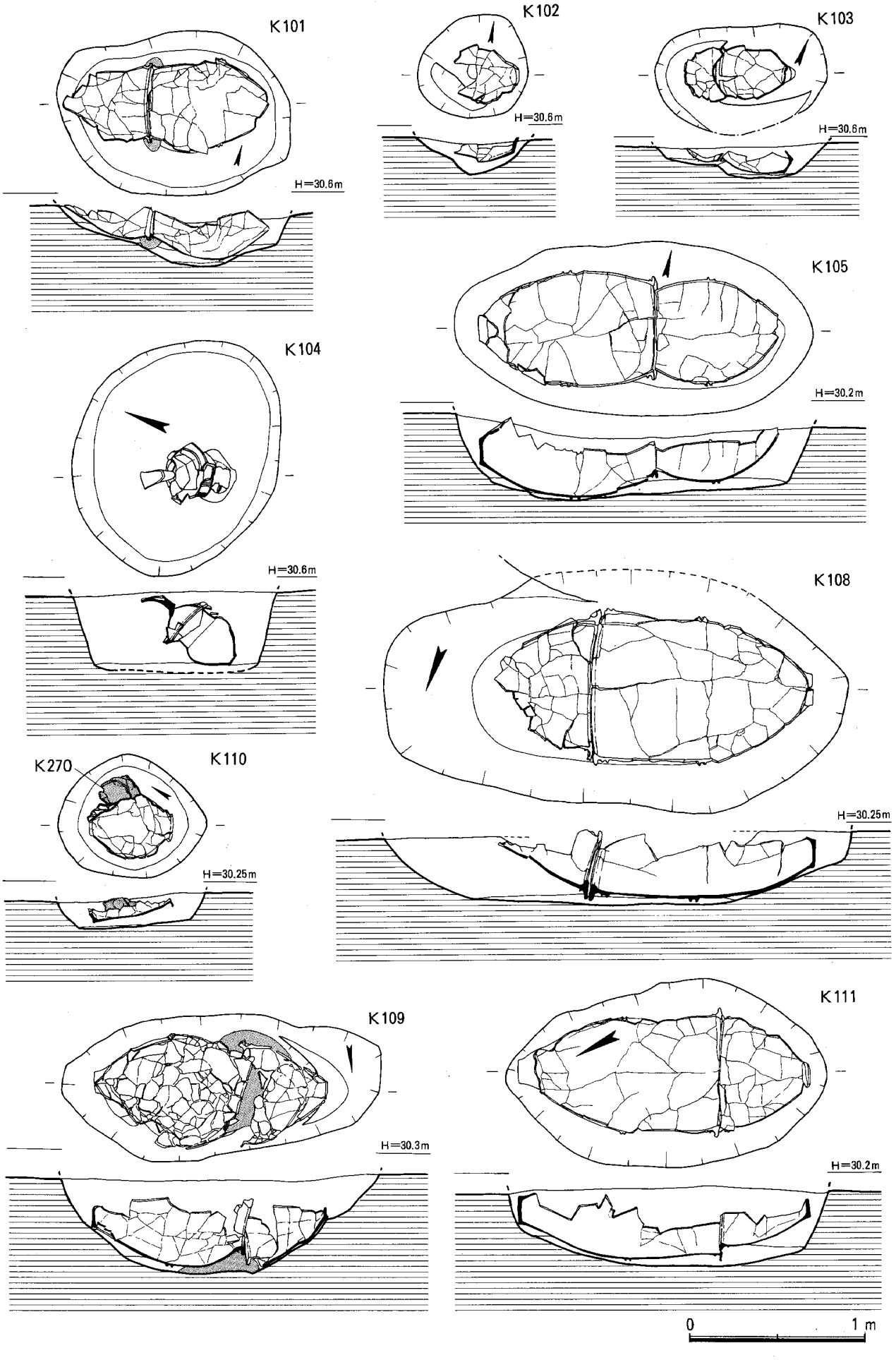


Fig.35　第４次LM地区K101～105・108～111・270号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K102号甕棺墓(Fig.35)

小型の壷を使用する小児甕棺墓である。削平から複棺の可能性も高い。

K103号甕棺墓(Fig.35)

上棺に小型壷打欠き、下棺に小型壷を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K104号甕棺墓(Fig.35・36) 上棺に高杯、下棺に広口の中型壷を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

上棺 脚部内面を除く全面に丹塗りを施す高杯である。外面ヘラミガキ、口縁上端部全面に平行線の暗文を施す。また、杯部中位に外部からの二次穿孔がある。焼成は堅緻で、胎土は密である。口縁部径35.5

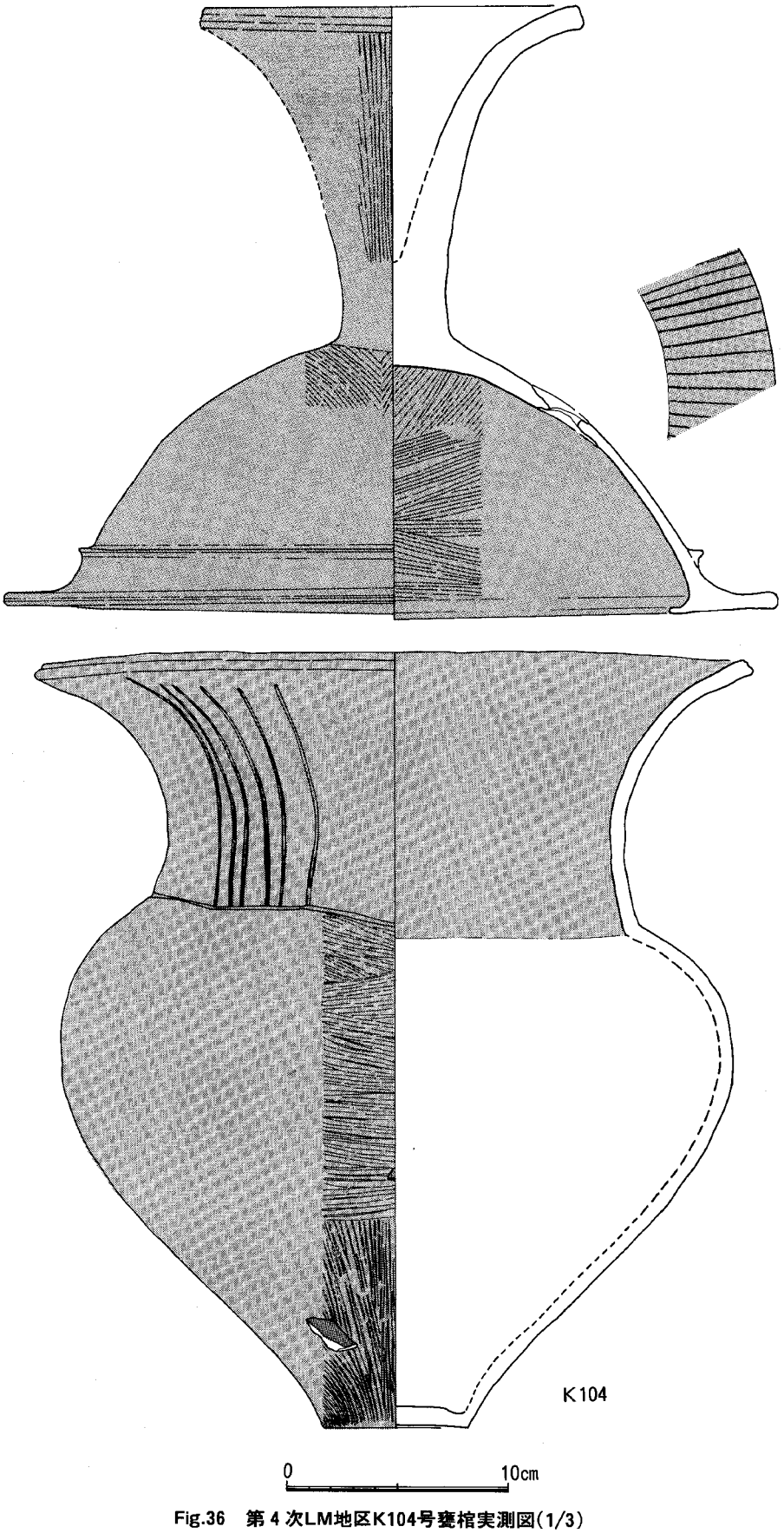


Fig.36 第4次LM地区K104号甕棺実測図(1/3)

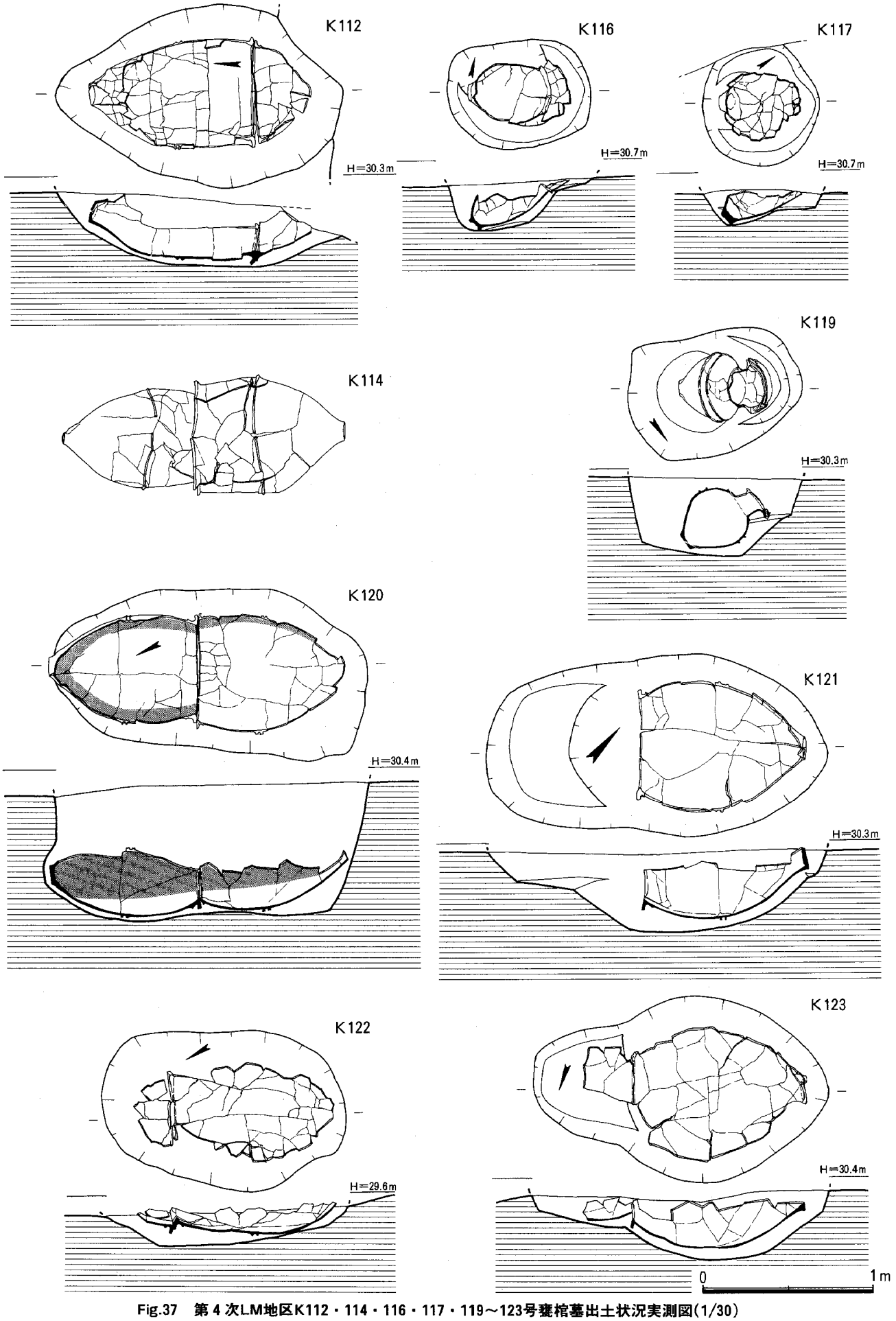


Fig.37　第4次LM地区K112・114・116・117・119～123号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

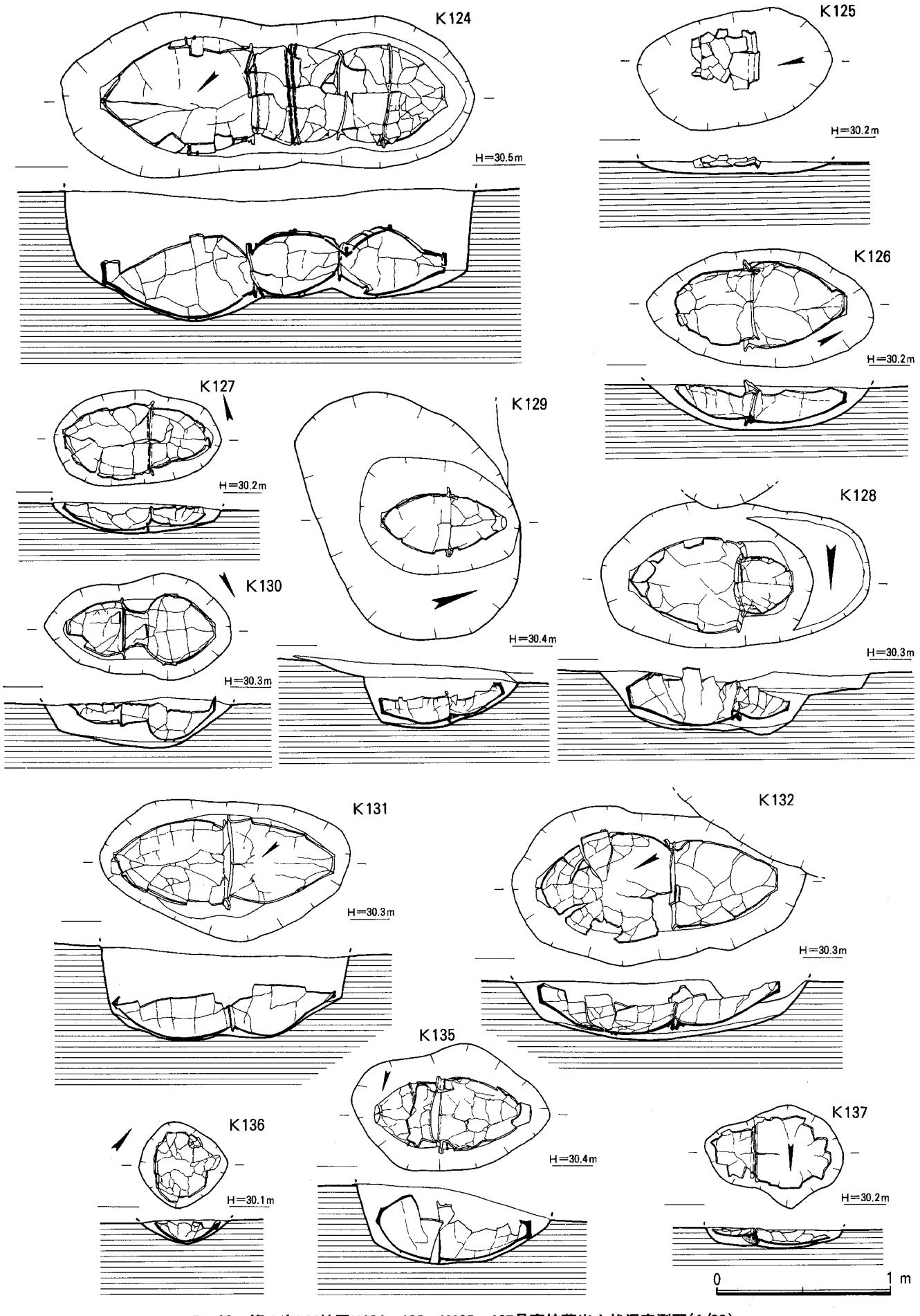


Fig.38　第４次LM地区K124～132・K135～137号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

cm、脚部径17.3cm、器高28～28.3cmを測る。

下 棺　底部付近に二次穿孔を有する広口壷である。口縁部の7ケ所に6～7本単位の平行沈線状の暗文が施される。器面調整は、脚部・胴部ほかも丁寧なヘラミガキである。焼成は堅緻で、胎土も非常に密である。口縁部径33.4cm、底部径6.6cm、器高35.5cmを測る。

K105号甕棺墓(Fig.35)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K108号甕棺墓(Fig.35)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K109号甕棺墓(Fig.35)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。接口部の下面には黄灰色粘土を分厚く敷いている。

K110号甕棺墓(Fig.35)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。削平のため複棺の可能性が高い。

K111号甕棺墓(Fig.35)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K112号甕棺墓(Fig.37)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K114号甕棺墓(Fig.37)　上下棺共に大型の甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K116号甕棺墓(Fig,37)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K117号甕棺墓(Fig.37)　小型の甕を使用する小児甕棺墓である。上部が削平され、複棺か。

K119号甕棺墓(Fig.37)　上棺に小型壷打欠き、下棺に鋤先状口縁を有する中型壷を使用する小児甕棺墓と考えられる。

K120号甕棺墓(Fig.37)　上下棺ともに大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K121号甕棺墓(Fig.37)　大型の甕を使用する単式の甕棺墓である。木蓋が想定される。

K122号甕棺墓(Fig.37)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K123号甕棺墓(Fig.37)　上棺に中型甕の打欠き、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K124号甕棺墓(Fig.38)　中型甕3個体を使用する三連式甕棺墓である。中間の甕は下棺と接口式で、外側甕は中間甕の底を抜いてその口縁部を当てている。

K125号甕棺墓(Fig.38)　小型甕を使用する小児甕棺墓であろう。削平から複棺の可能性が高い。

K126号甕棺墓(Fig.38)　上下棺共に小型の甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K127号甕棺墓(Fig.38)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K128号甕棺墓(Fig.38)　上下棺共に小型の甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K129号甕棺墓(Fig.38)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K130号甕棺墓(Fig.38)　上棺に小型甕、下棺に鋤先口縁を有する小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K131号甕棺墓(Fig.38)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K132号甕棺墓(Fig.38)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K133号甕棺墓(Fig.40)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K134号甕棺墓(Fig.39・40)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

上 棺　口縁が緩く絞まる大型甕で、胴部中位よりやや上に2条の低い三角突帯を巡らす。外面は、淡黄褐色を呈し、黒塗りである。器面調整は、主にタテ方向のヘラナデである。焼成は堅緻で、胎土は密である。口縁部径59.5cm、底部径11.3cm、器高84.8cmを測る。

下 棺　口縁部がやや内径し、胴部中位に1条の三角突帯を巡らす。器色は、内外面共に暗赤褐色を呈し、黒塗りである。器面調整は、外面の一部に粗いタテハケメが残るが、他はナデである。焼成は堅緻で、胎土は密であるが砂質で石英細砂を多く含む。口縁部径64cm、底部径13.4cm、器高98.7～99.5cmを測る。

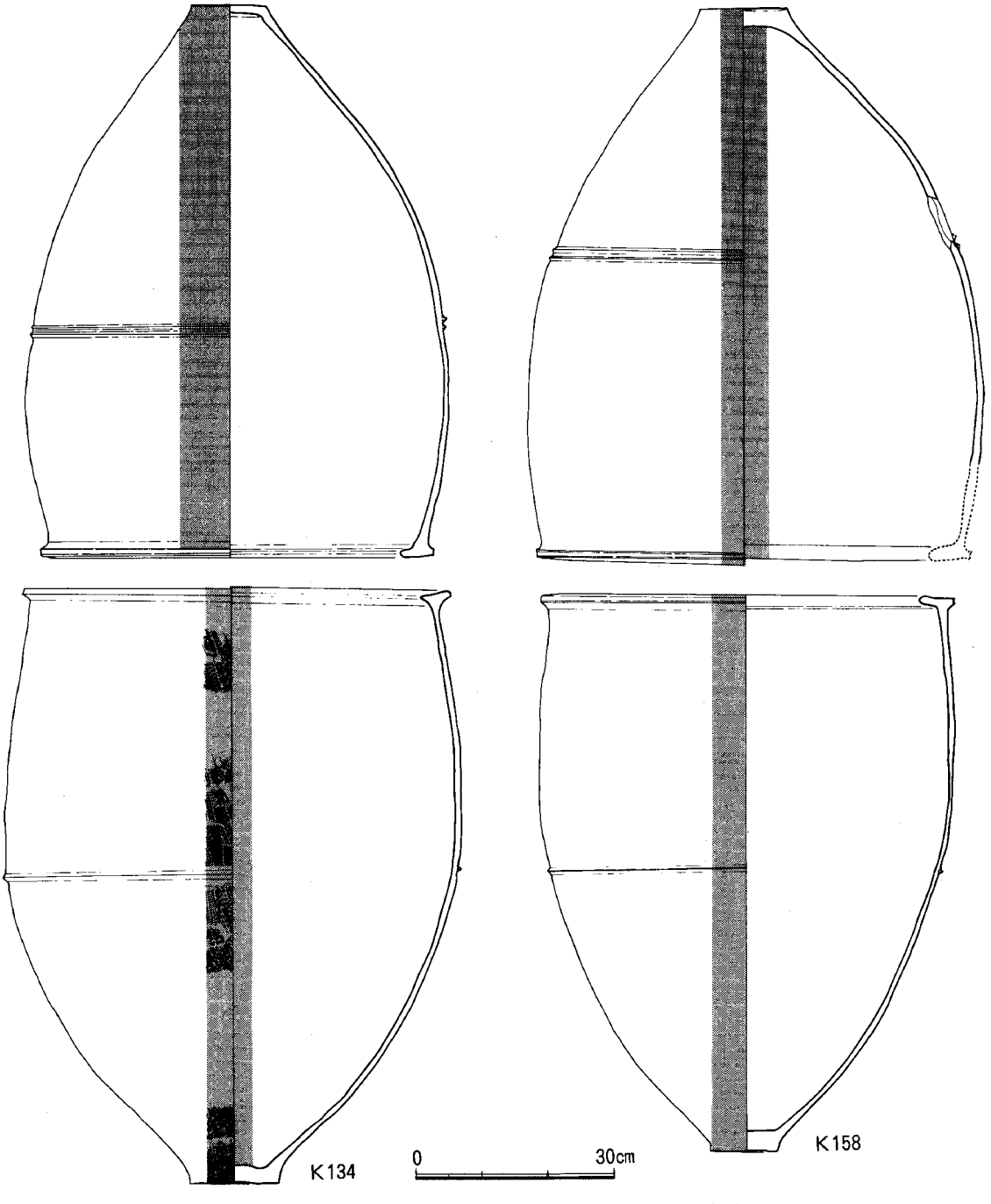


Fig.39　第４次ＬＭ地区K134・158号甕棺実測図(1/10)

K135号甕棺墓(Fig.38)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K136号甕棺墓(Fig.38)　小型の壷を使用する小児甕棺墓である。削平で複棺の可能性がある。

K137号甕棺墓(Fig.38)　上棺は小型鉢、下棺は小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K138号甕棺墓(Fig.40)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K139号甕棺墓(Fig.40)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K140号甕棺墓(Fig.40)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K141号甕棺墓(Fig.40)　小型甕を使用する小児甕棺墓であろう。削平をうけ、複棺の可能性あり。

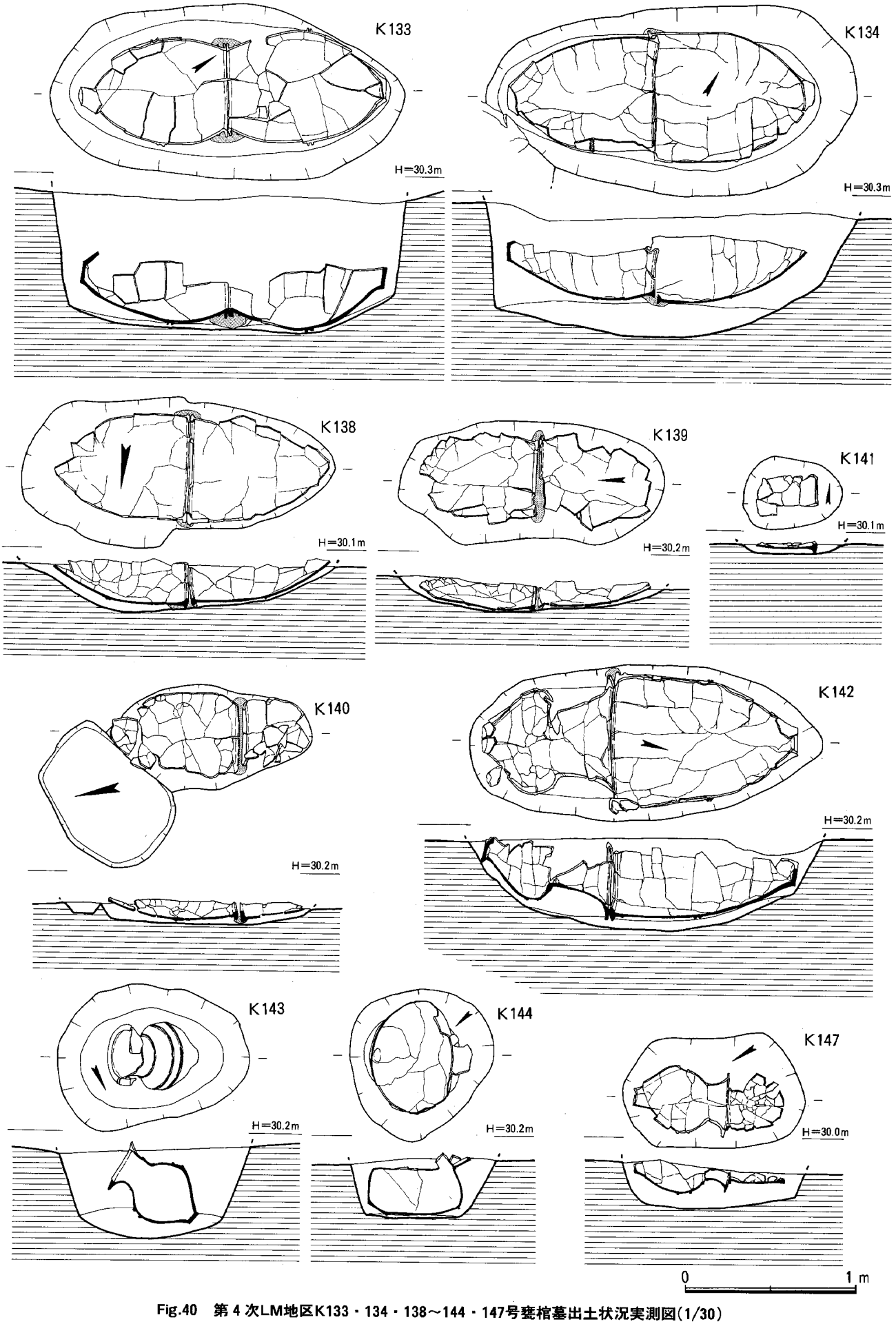


Fig.40　第４次LM地区K133・134・138～144・147号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

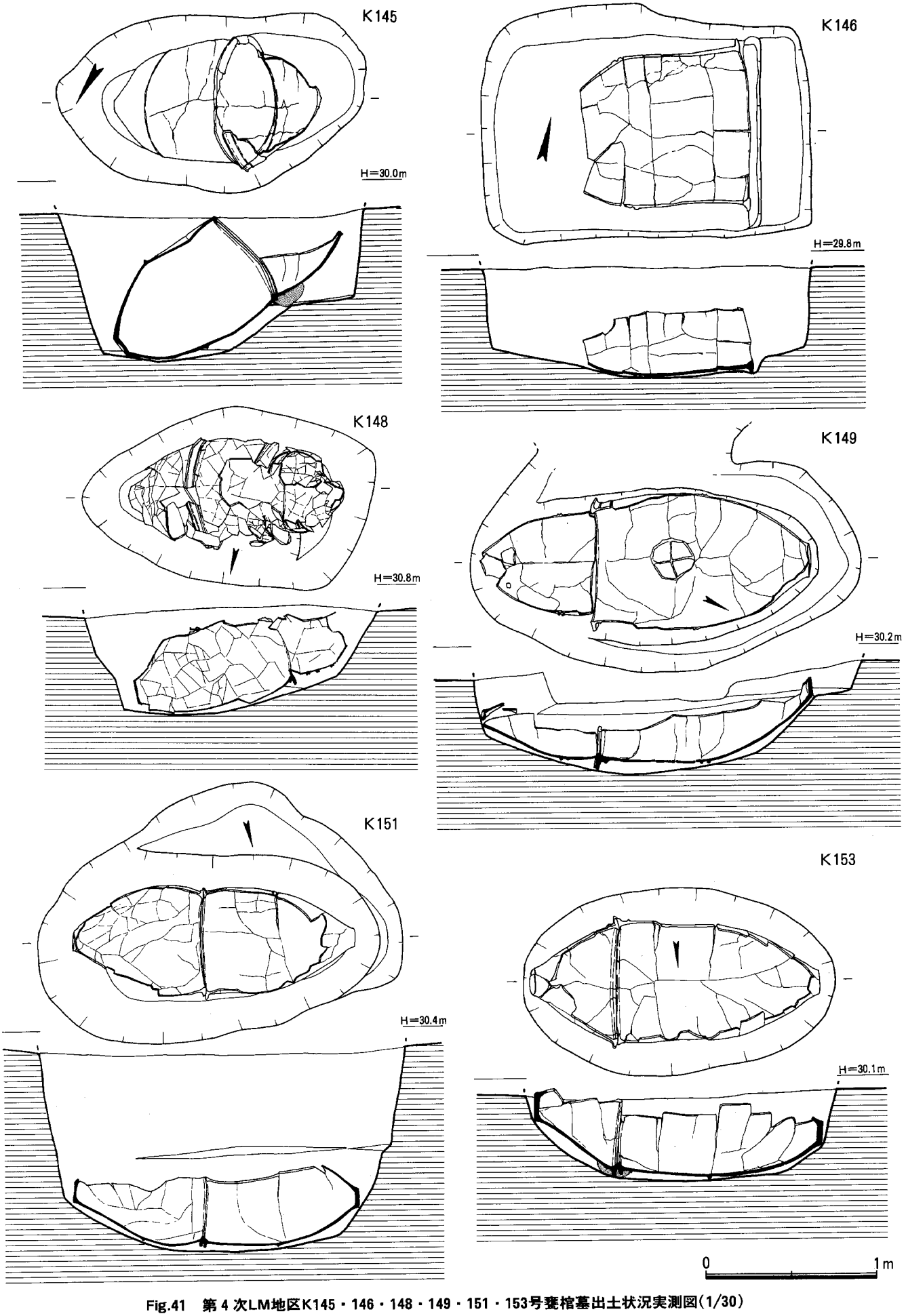


Fig.41　第4次LM地区K145・146・148・149・151・153号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

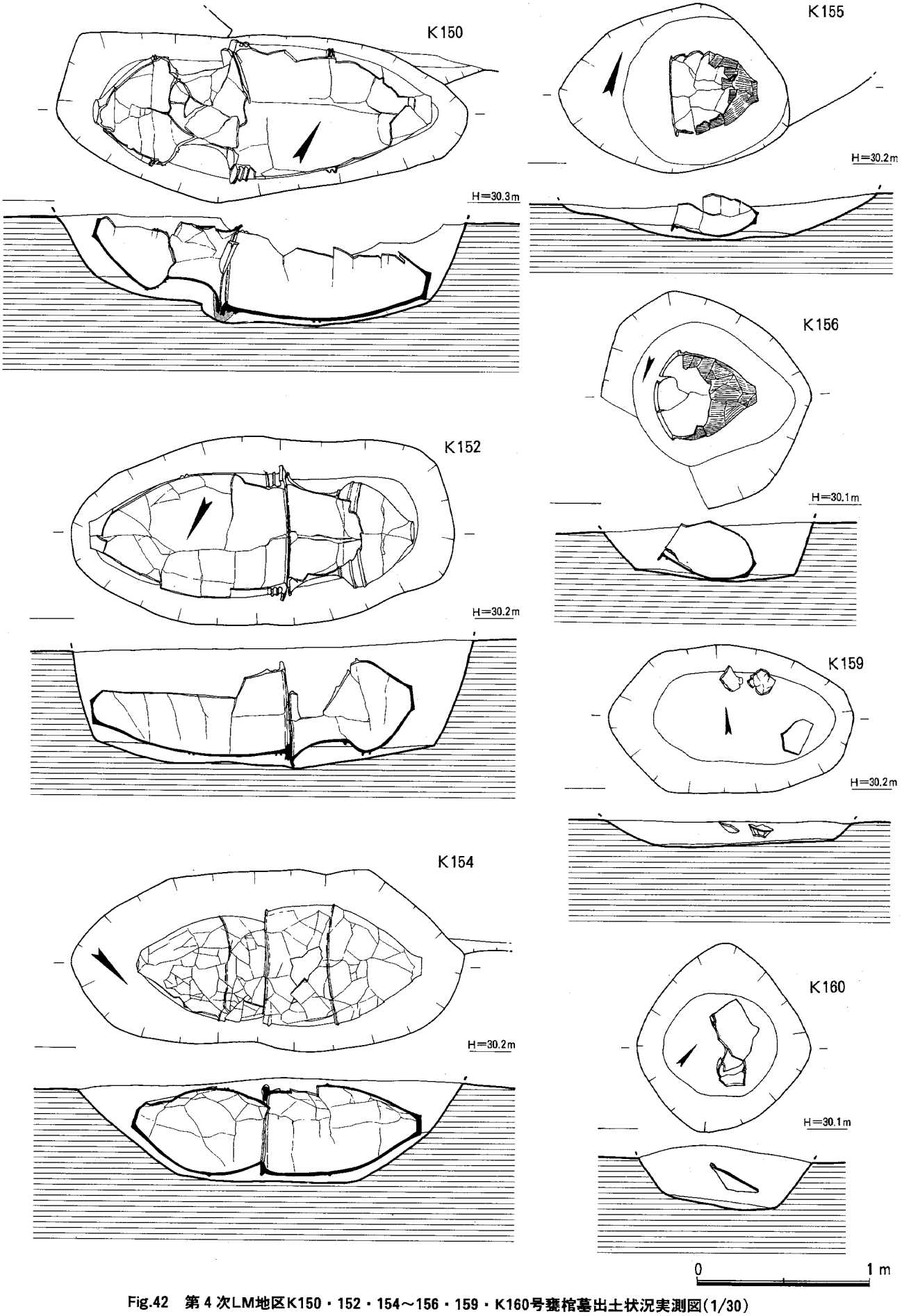


Fig.42　第４次LM地区K150・152・154～156・159・K160号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

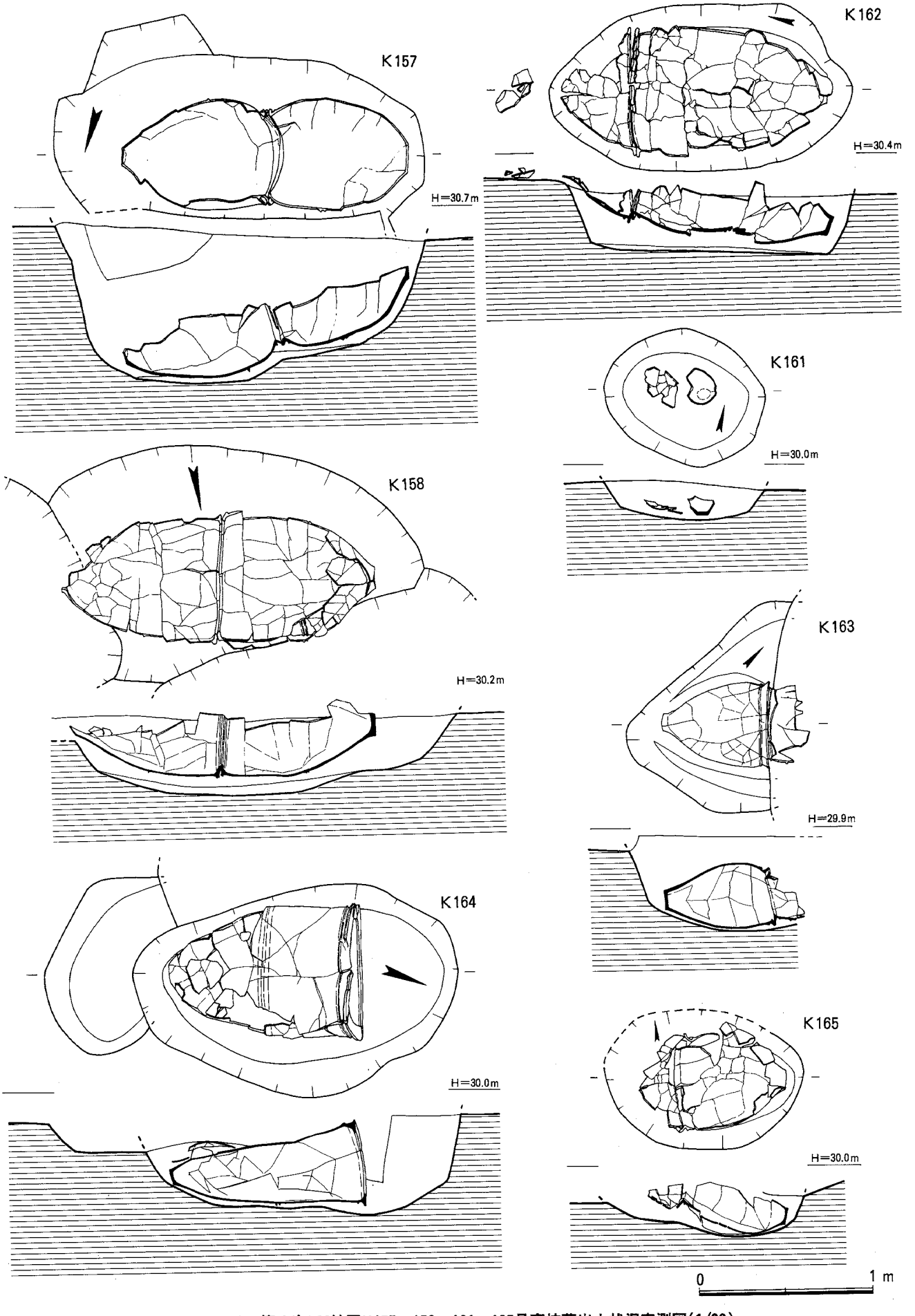


Fig.43　第４次LM地区K157・158・161～165号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K 142号甕棺墓(Fig.40)　上棺に鋤先状口縁を有する大型壷、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 143号甕棺墓(Fig.40)　鋤先状口縁を有する小型壷を使用する単式の小児甕棺墓と考えられる。

K 144号甕棺墓(Fig.40)　鋤先状口縁を有する小型壷を使用する小児甕棺墓と考えられる。

K 145号甕棺墓(Fig.41)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 146号甕棺墓(Fig.41)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。

K 147号甕棺墓(Fig.40)　上棺に小型甕、下棺に鋤先状口縁を有する小型壷を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 148号甕棺墓(Fig.41)　上棺に壷打欠き、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K 149号甕棺墓(Fig.41)　上棺に中型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 150号甕棺墓(Fig.42)　上棺に鋤先状口縁を有する大型壷、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 151号甕棺墓(Fig.41)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K 152号甕棺墓(Fig.42)　上棺に鋤先状口縁を有する大型壷、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 153号甕棺墓(Fig.41)　上棺に中型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。接口部下面に目張りの黄灰色粘土が残る。

K 154号甕棺墓(Fig.42)　上棺に中型甕打欠き、下棺に中型甕を使用する接口式甕棺墓である。

K 155号甕棺墓(Fig.42)　小型甕を使用する小児甕棺墓である。削平のため複棺の可能性がある。

K 156号甕棺墓(Fig.42)　小型甕を使用する小児甕棺墓と考えられる。複棺の可能性がある。

K 157号甕棺墓(Fig.43)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K 158号甕棺墓(Fig.43)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。埋置は殆ど水平に近い。

上 棺　平坦口縁端部の内側への張り出しが著しい大型の甕で、胴部中位よりやや下った位置に2条の三角突帯を巡らす。突帯部に外からの二次穿孔が残る。器色は、外面淡灰褐色、内面暗褐色を呈し、両面共に黒塗りである。内底付近に大黒斑、口縁上端にも小黒斑あり。焼成は堅緻で、 胎土も密である。口縁部径65.5cm、底部径13.3cm、器高91.3～90.5cmを測る。

下 棺　口縁端部の内面への張り出しが著しい大型甕で、胴部中位に1条の低い三角突帯を巡らす。器色は、外面淡赤褐色、内面淡赤褐～淡褐色を呈し、外面黒塗りである。内側からの二次穿孔で径1mm程の小孔を穿つ。器面調整は、外面がヨコ・ナナメ方向のヘラナデである。焼成は堅緻で、胎土は密である。細砂を多量に混入する。口縁部径62.3cm、底部径10cm、器高85.7cmを測る。

K 159号甕棺墓(Fig.42)　長楕円形土壙に小型甕底部破片などが出土している。祭祀の可能性あり。

K 160号甕棺墓(Fig.42)　不整円形土壙に突帯を巡らす小型壷破片が出土している。祭祀か。

K 161号甕棺墓(Fig.43)　円形土壙に小型甕底部破片が出土している。小児甕棺墓の残骸か。

K 162号甕棺墓(Fig.43)　上棺に中型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 163号甕棺墓(Fig.43)　上下棺共に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

上 棺　頸部の良く絞まった甕で、平坦口縁直下とやや下った胴部に鈍い三角突帯を巡らす。外口唇にナナメの刻み目を施す。外面ヘラミガキで口縁下は強いヨコナデである。器色は、暗褐色を呈し、焼成堅緻、胎土はやや粗である。口縁部径39.2cm、残存器高18.5cmを測る。

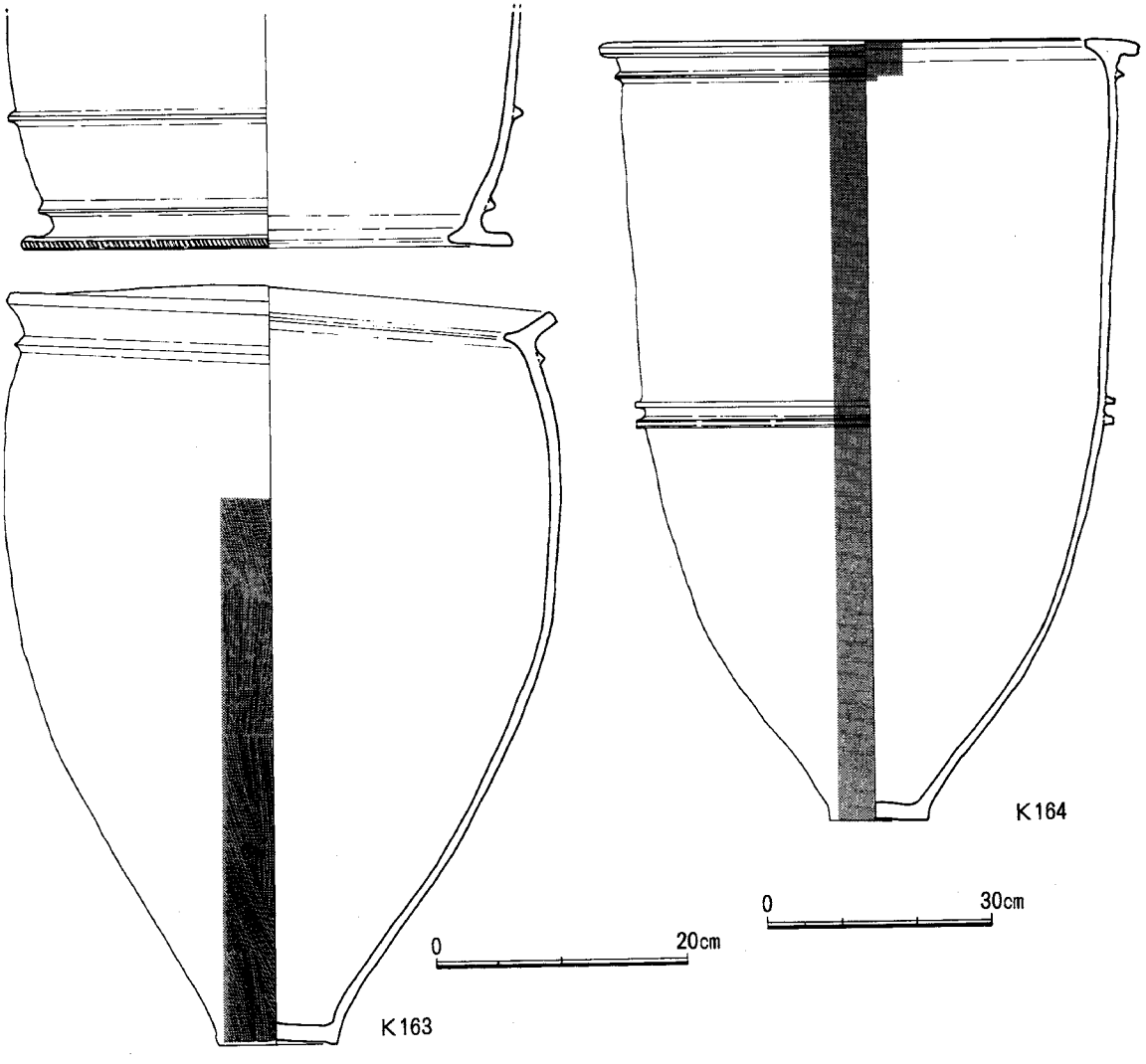


Fig.44　第４次LM地区K163・164号甕棺実測図(1/6,1/10)

下 棺　く字形に強く屈曲する口縁部を有する中型甕である。器色は、淡黄褐色を呈し、外面黒塗りで、大黒斑を残す。器面調整は、外面粗いタテハケメで、上部はヘラナデを施す。焼成は堅緻で、胎土はやや粗である。粗砂を多く混入する。口縁部径43.7cm、底部径9.5cm、器高58～61cmを測る。

K164号甕棺墓(Fig.43・44)　大型甕を使用する単式の成人甕棺墓である。木蓋利用が考えられる。

出 土 甕 棺　肥厚する平坦口縁直下に三角突帯を１条、胴部中位にコ字形突帯２条を巡らす。器色は、外面赤褐色を呈し、外面全面と内面の一部が黒塗りである。調整は全面ヘラナデである。焼成は堅緻で、 胎土密である。口縁部径71.5cm、底部径13cm、器高105.5cmを測る。

K165号甕棺墓(Fig.43)　上棺に中型甕打欠き、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K166号甕棺墓(Fig.45)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K167号甕棺墓(Fig.45)　上棺に大型甕打欠き、下棺大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K168号甕棺墓(Fig.45)　上棺に中型壷打欠き、下棺に中型甕を使用する呑口式の甕棺墓である。

K169号甕棺墓(Fig.45)　大型甕を使用する単式の甕棺墓である。木蓋を使用したと考えられる。

K170号甕棺墓(Fig.45)　上棺に中型甕打欠き、下棺には中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K171号甕棺墓(Fig.45)　上棺に小型甕、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

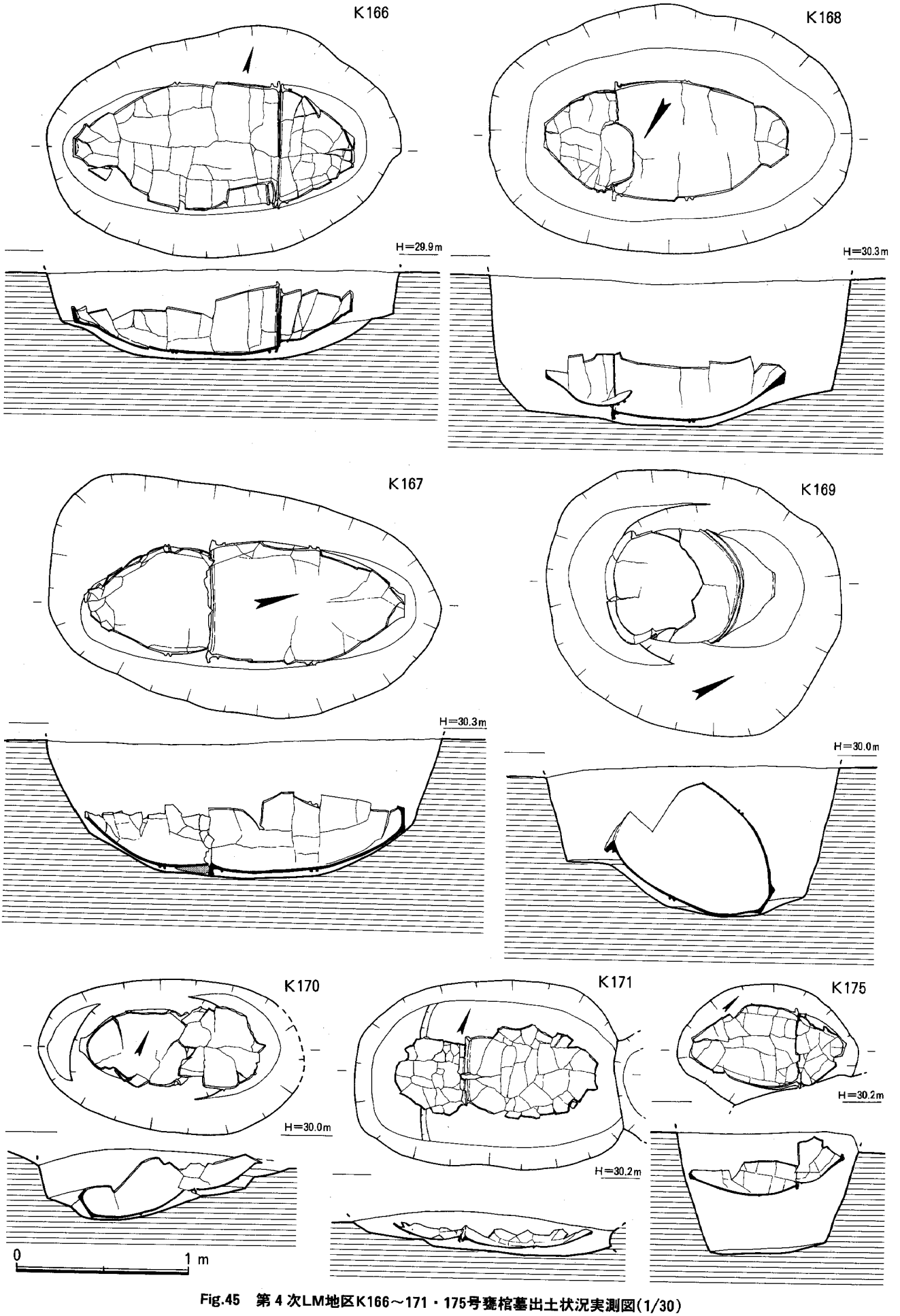


Fig.45　第４次LM地区K166～171・175号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

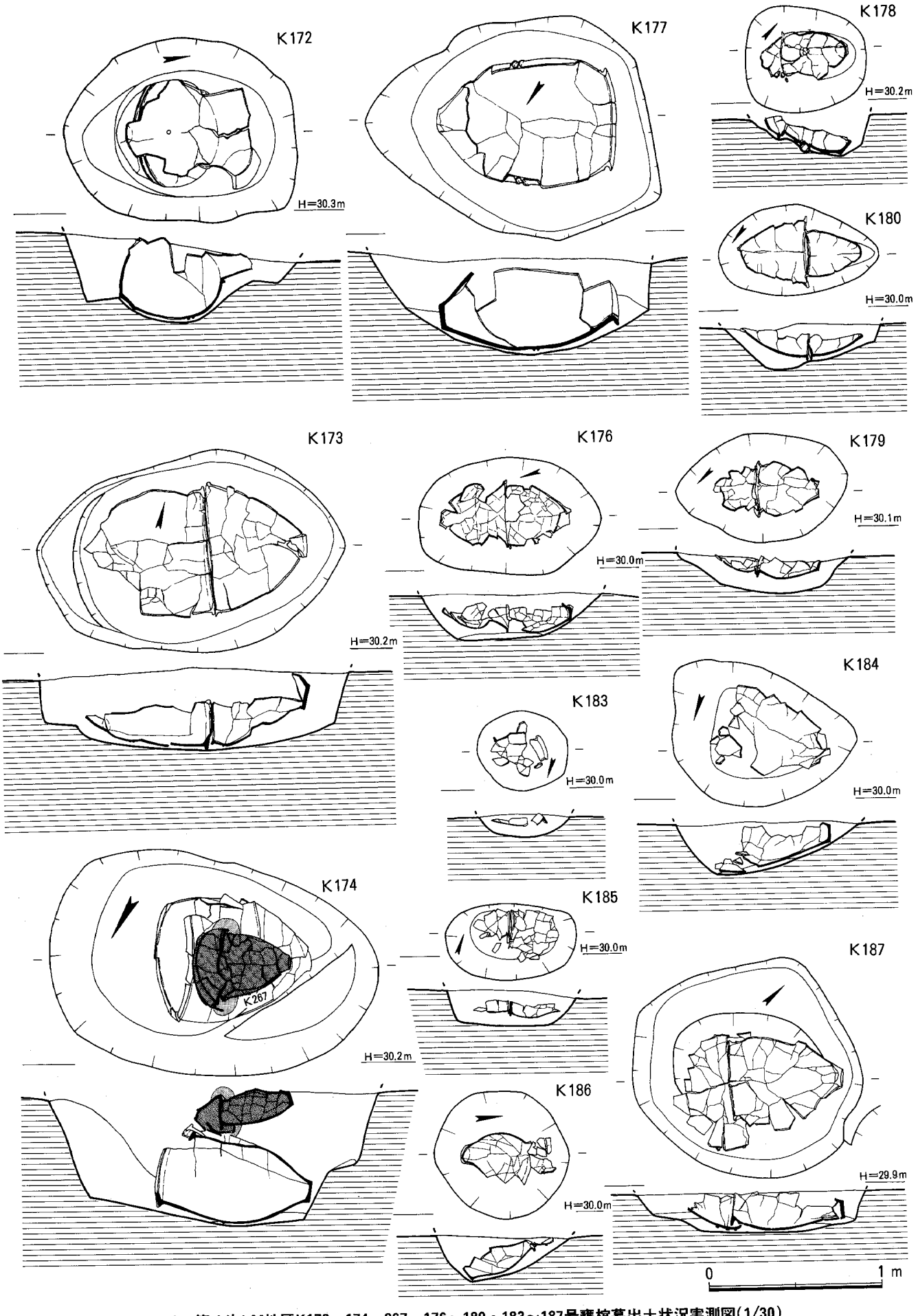


Fig.46　第４次LM地区K172～174・267・176～180・183～187号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

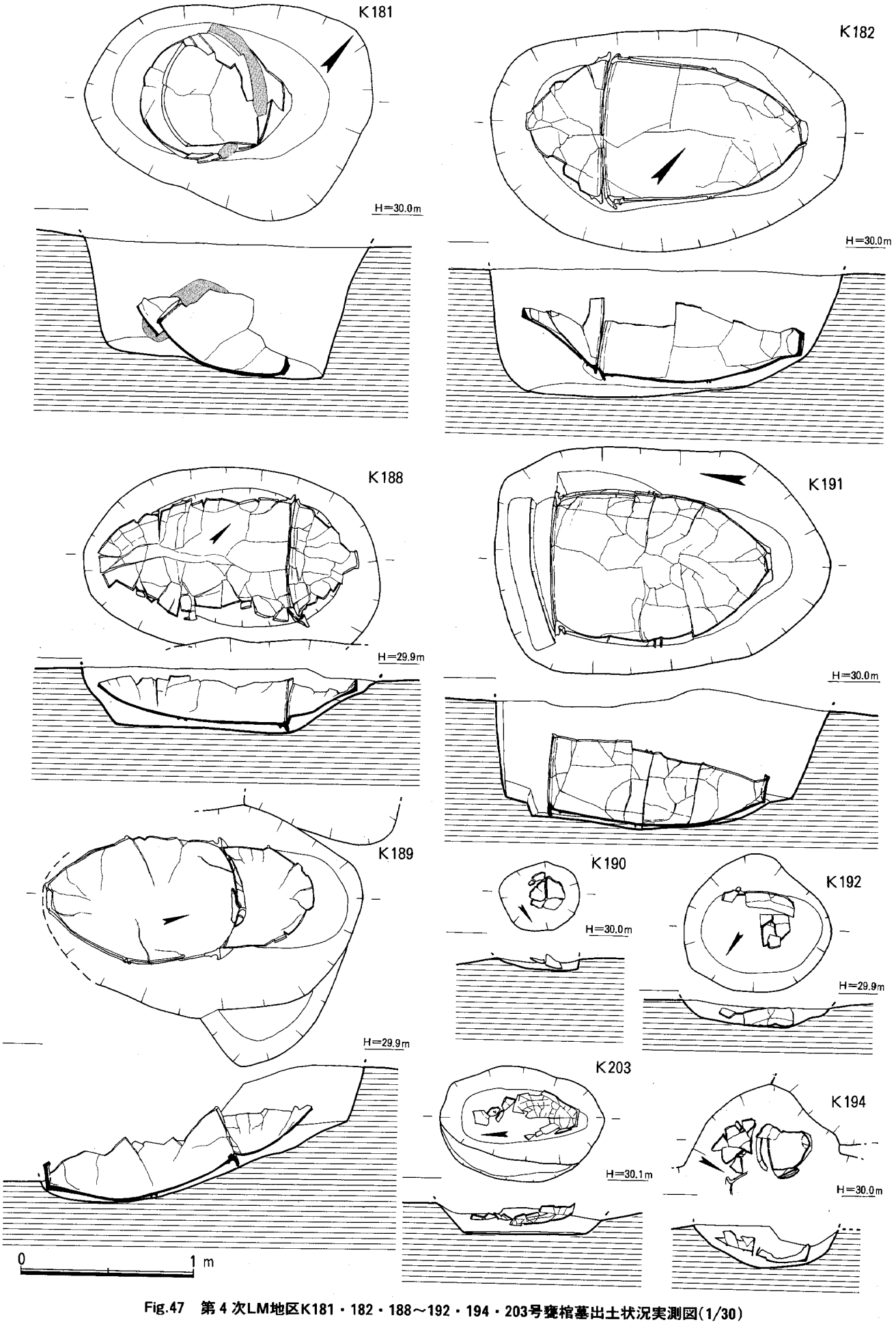


Fig.47　第４次LM地区K181・182・188～192・194・203号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

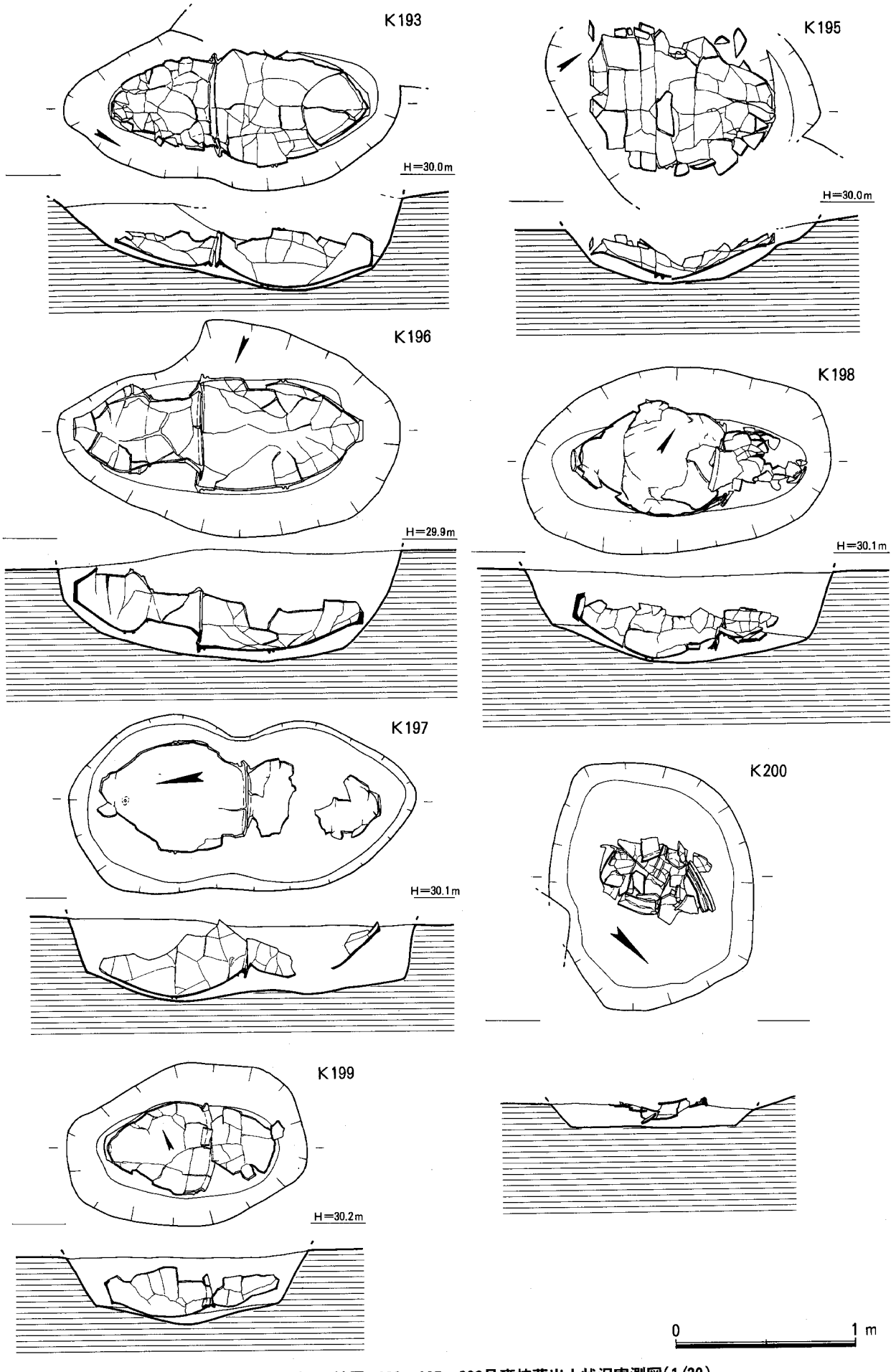


Fig.48　第４次LM地区K193・195～200号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

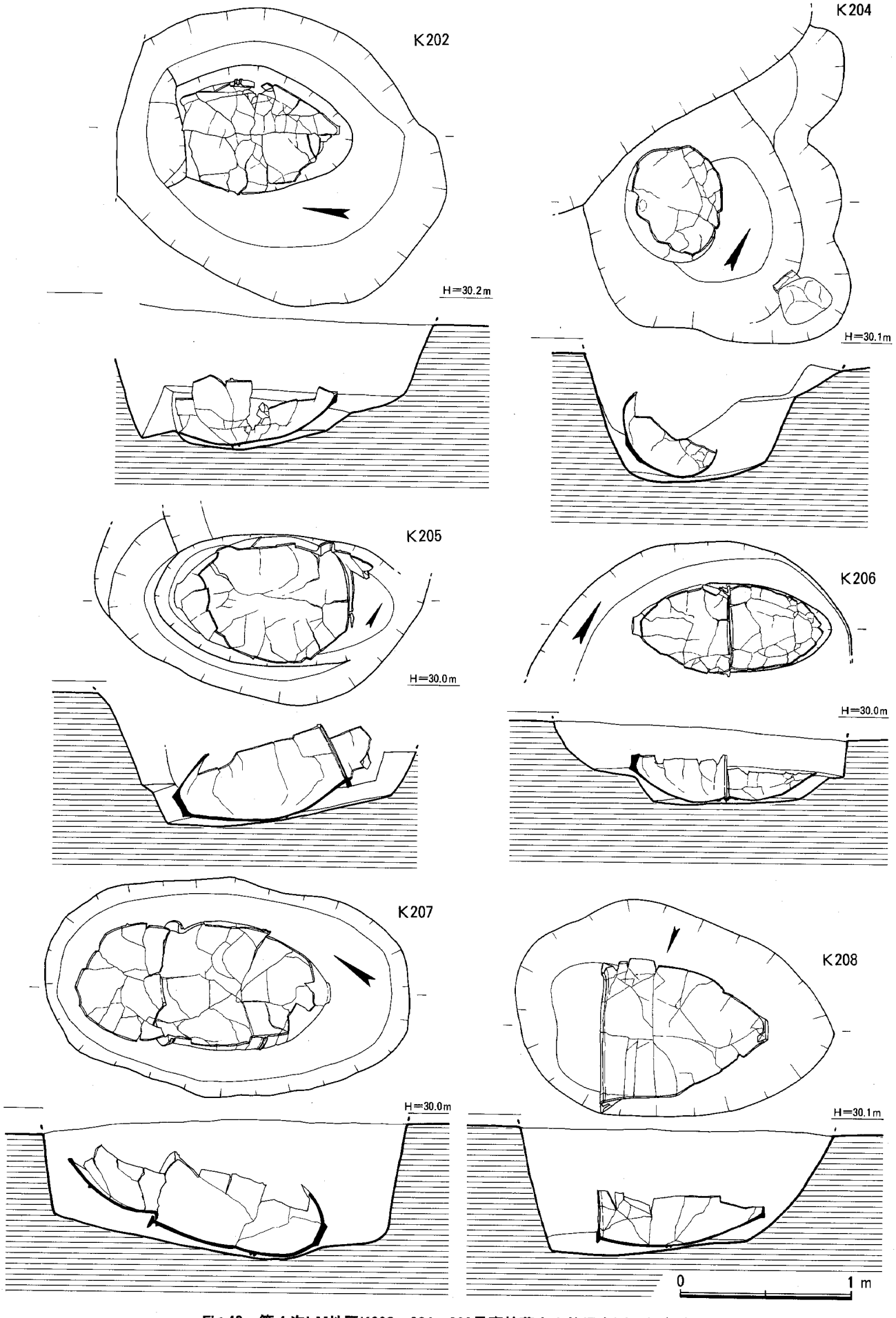


Fig.49　第４次LM地区K202・204～208号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

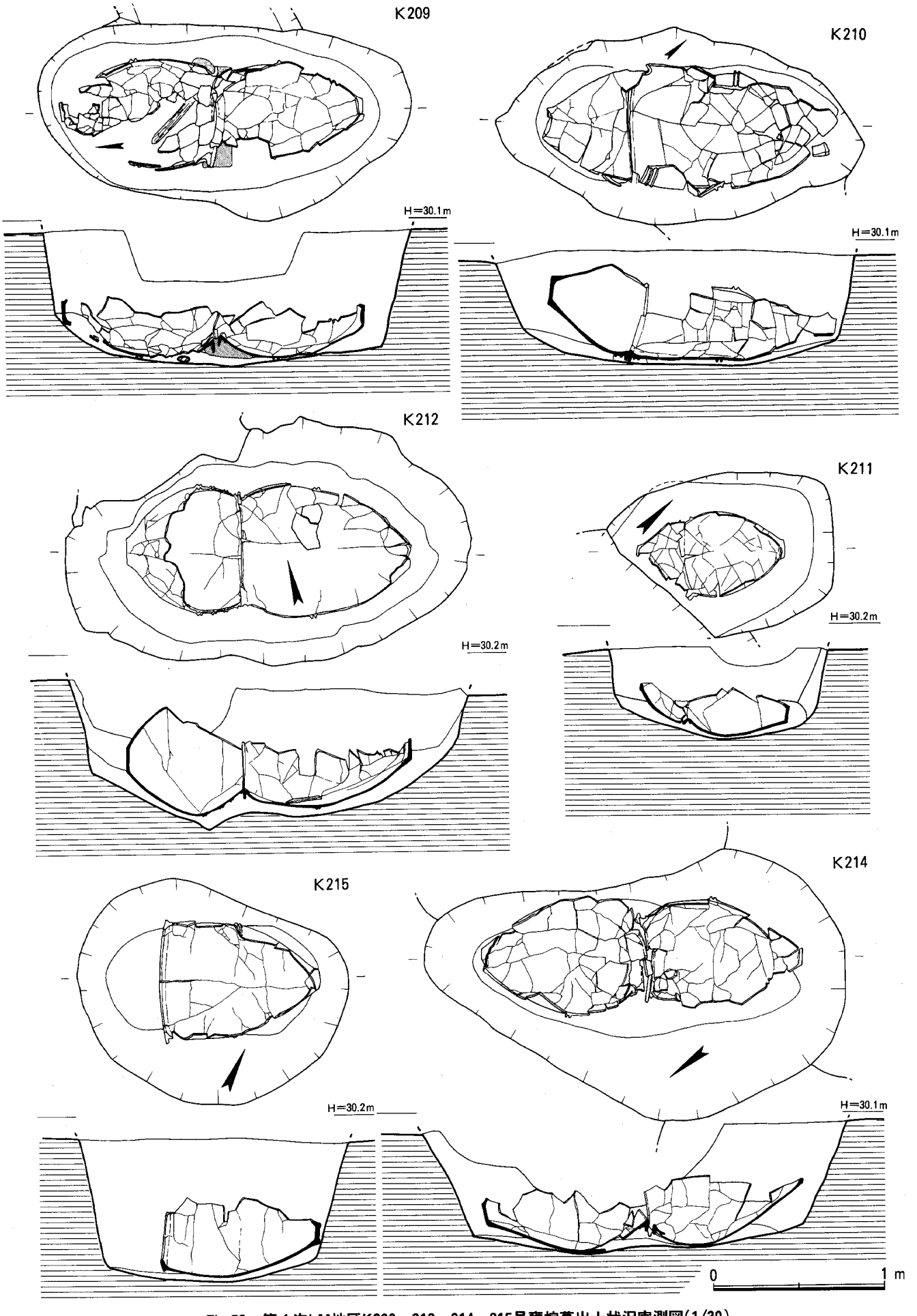


Fig.50　第４次LM地区K209～212・214・215号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

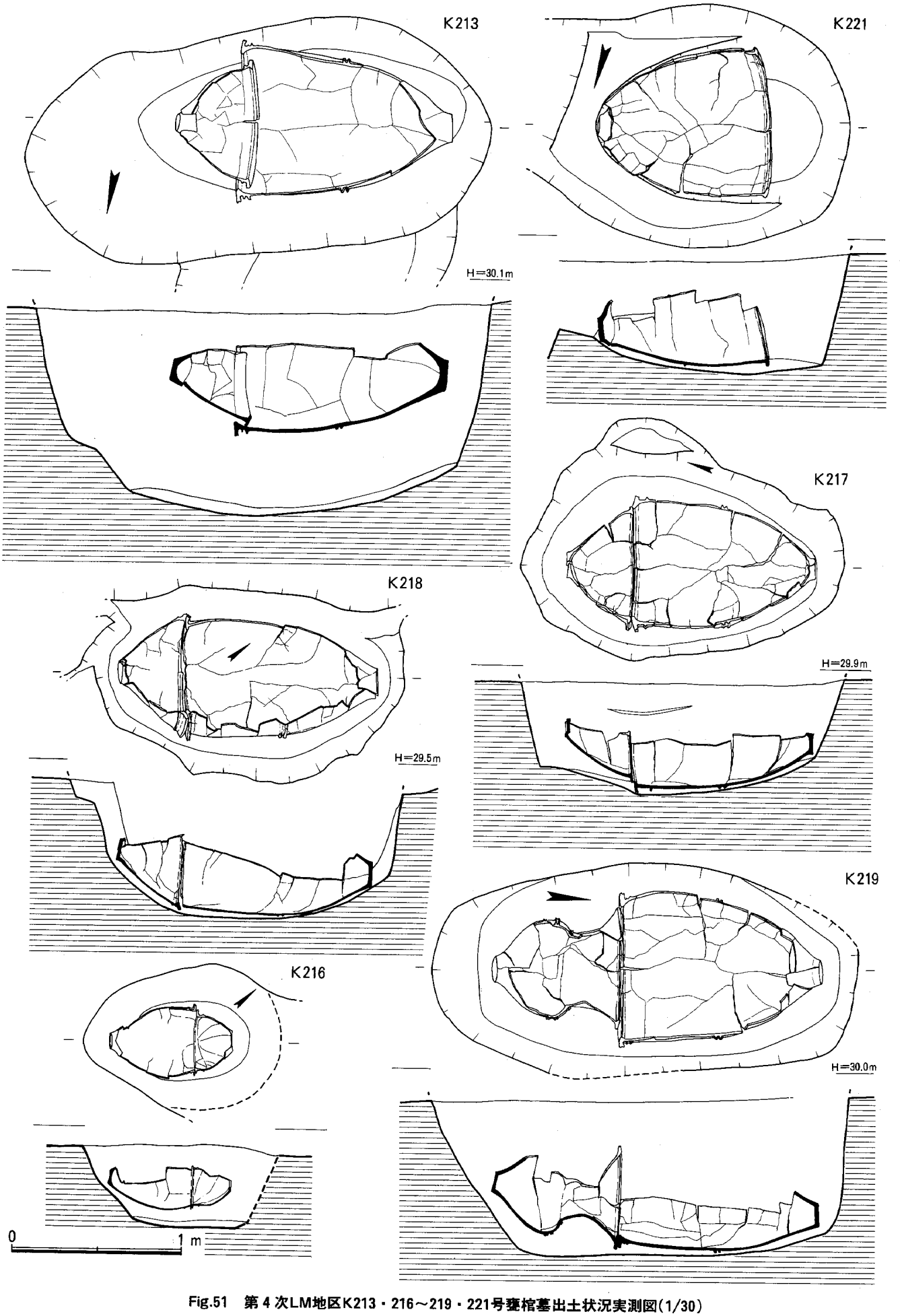


Fig.51　第４次LM地区K213・216～219・221号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

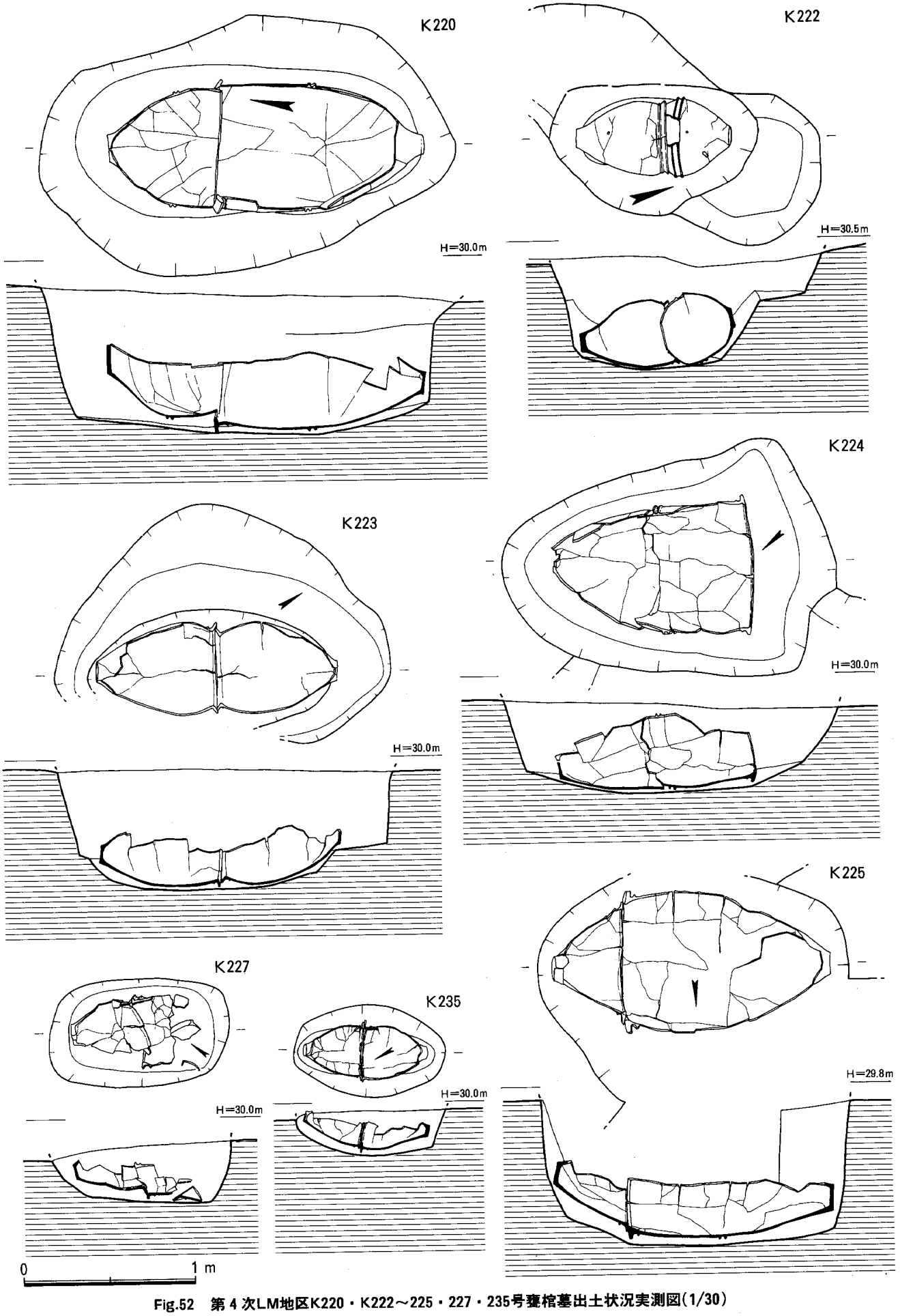


Fig.52　第４次LM地区K220・K222～225・227・235号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

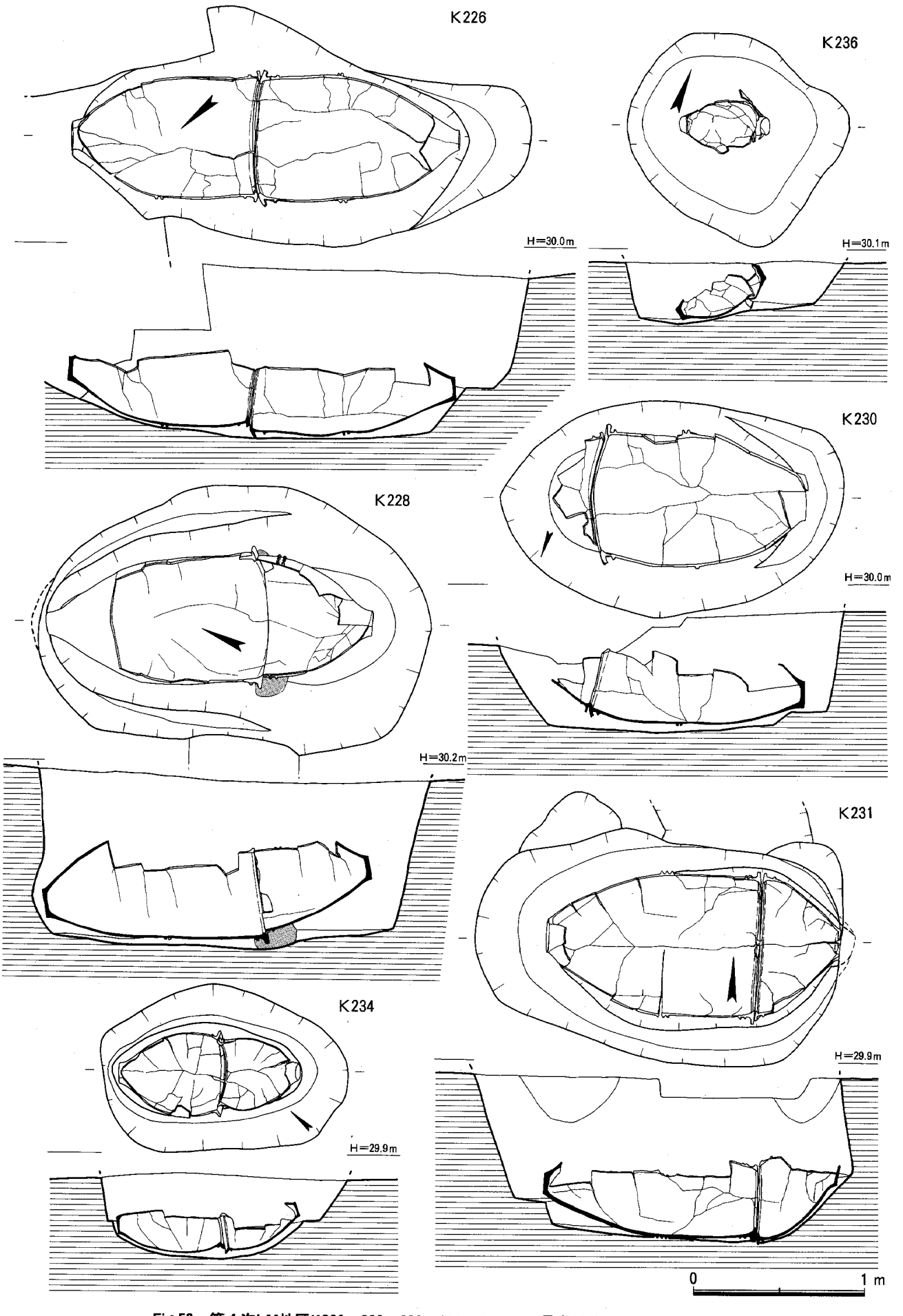


Fig.53　第４次LM地区K226・228・230・231・234・236号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

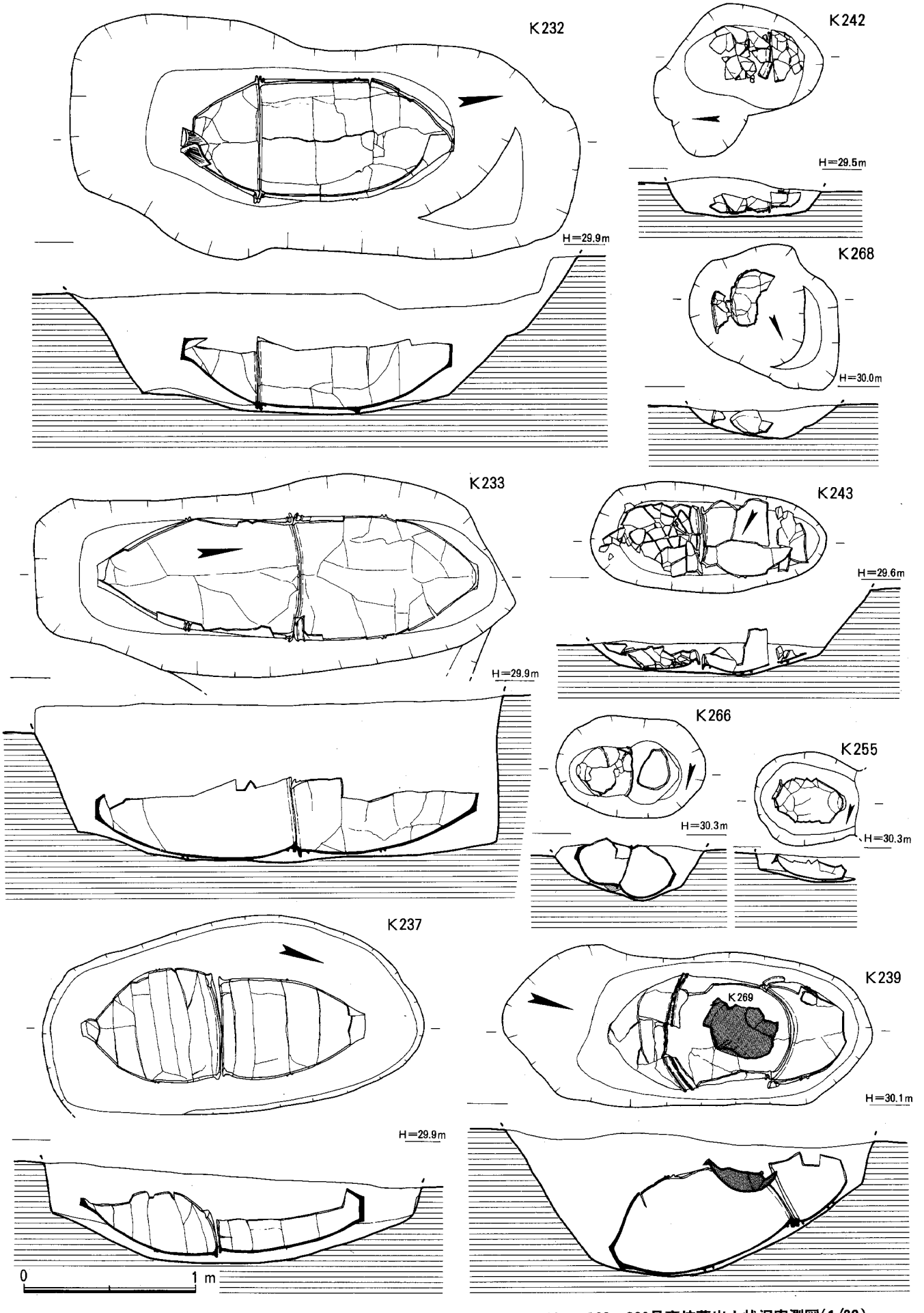


Fig.54　第４次LM地区K232・233・237・239・242・243・K255・K266・K268・269号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

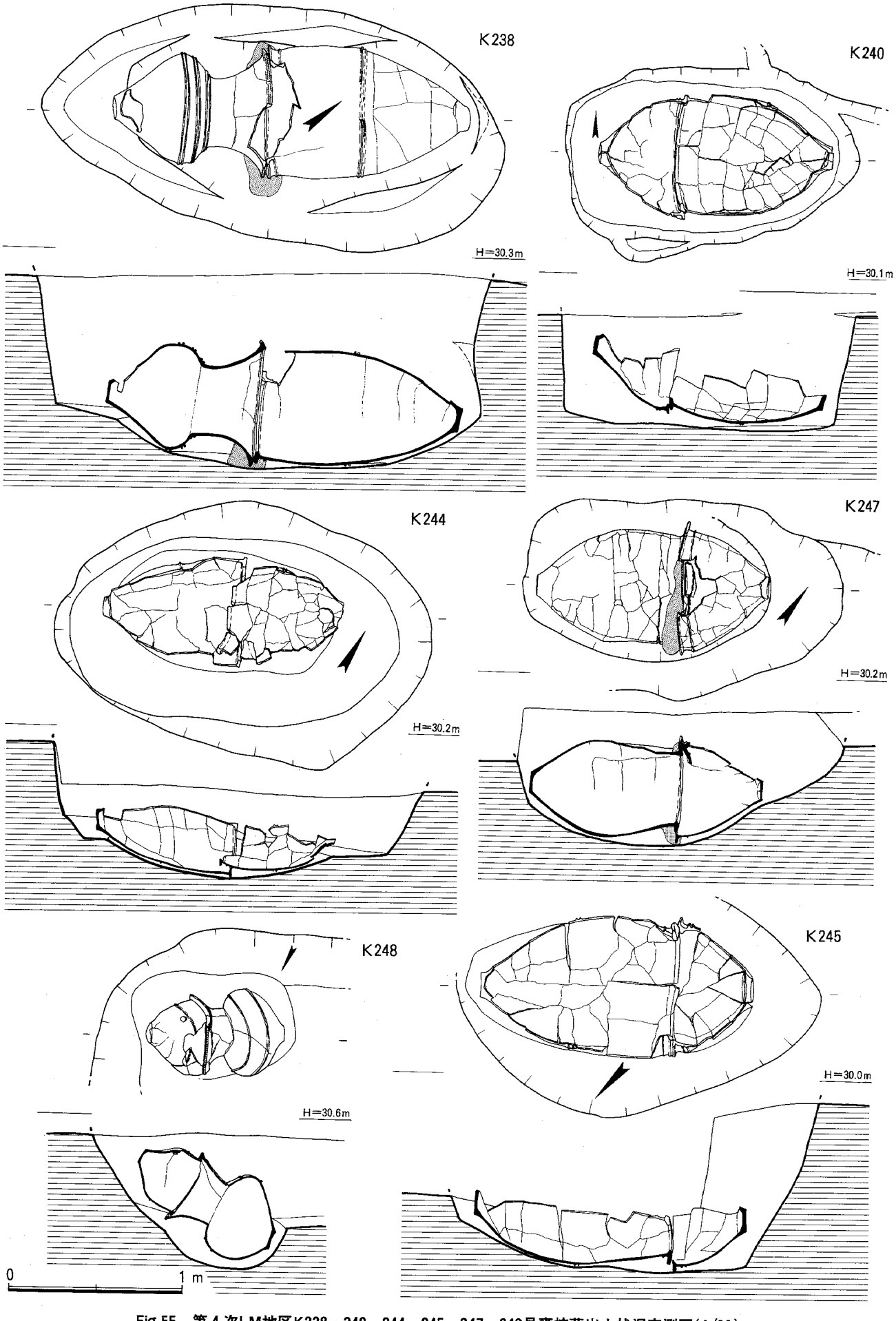


Fig.55　第４次LM地区K238・240・244・245・247・248号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

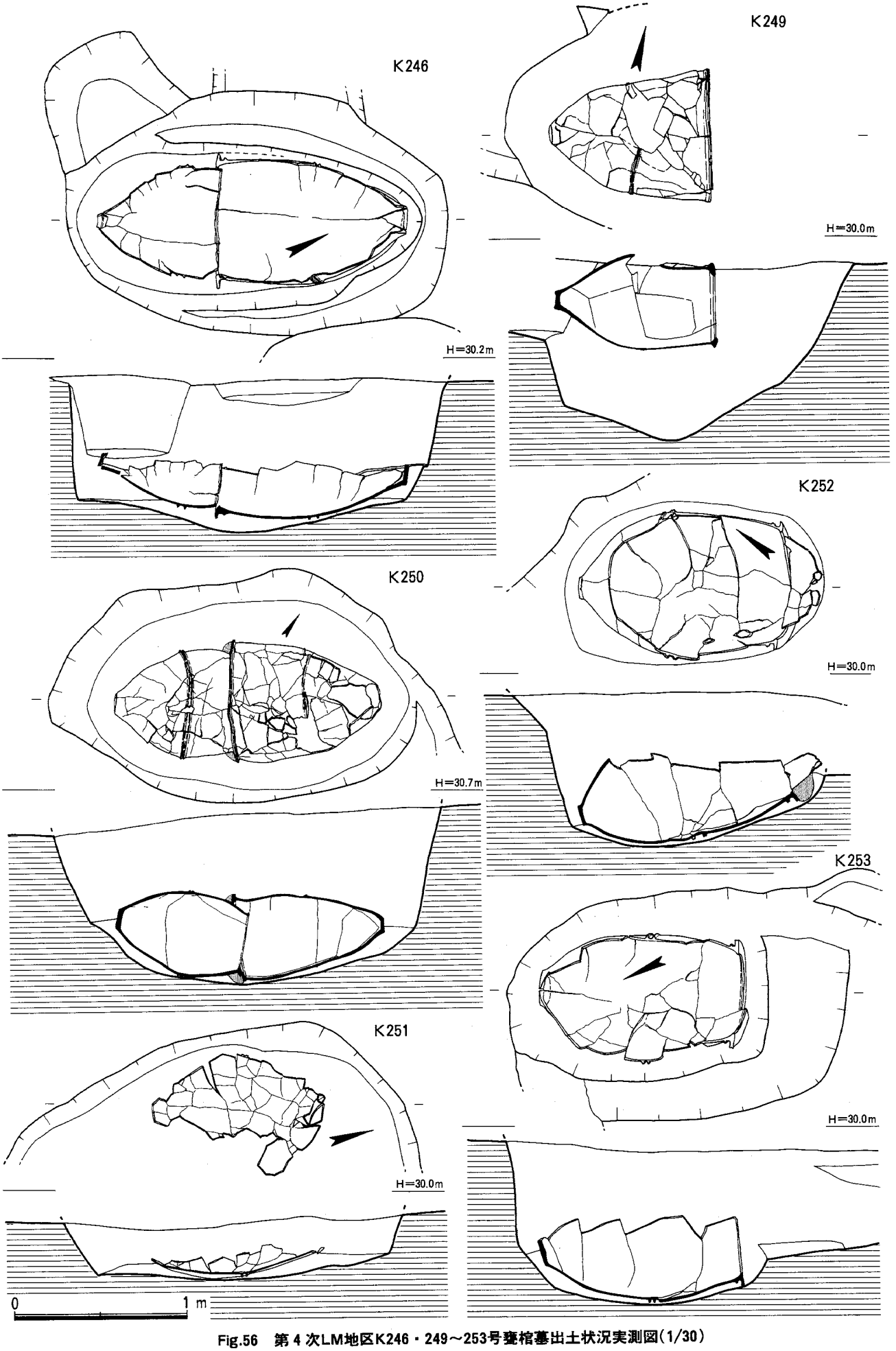


Fig.56　第４次LM地区K246・249～253号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

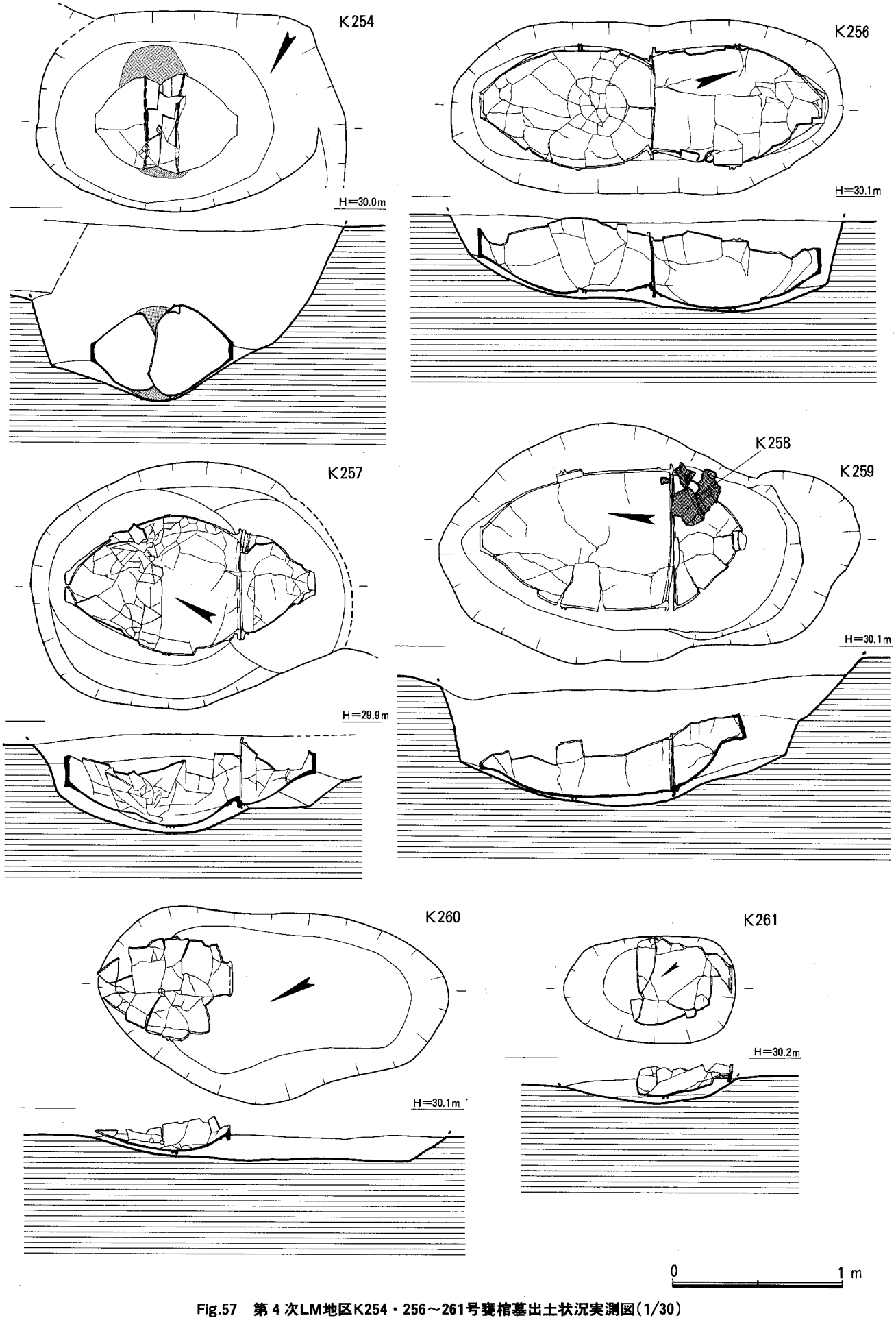


Fig.57　第４次LM地区K254・256～261号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

以下の各甕棺墓については紙面の都合から各出土状況図と一覧表を参考にされたい。

K171・175号甕棺墓(Fig.45、Tab.3)

K172・173・174・176・177・178・179・180・183・184・186・187・267号甕棺墓(Fig.46、Tab.3)

K181・182・188・189・190・191・192・194・203号甕棺墓(Fig.47、Tab.3)

K193・195・197・198・199・200号甕棺墓(Fig.48、Tab.3)

K209・210・211・212・214・215号甕棺墓(Fig.50、Tab.3)

K213・216・217・218・219・221号甕棺墓(Fig.51、Tab.3)

K220・222・223・224・225・227・235号甕棺墓(Fig.52、Tab.3)

K226・228・230・231・234・236号甕棺墓(Fig.53、Tab.3)

K232・233・237・239・242・243・255・266・268・269号甕棺墓(Fig.54、Tab.3)

K238・240・244・245・247・248号甕棺墓(Fig.55、Tab.3)

K246・249・250・251・252・253号甕棺墓(Fig.56、Tab.3)

K254・256・257・258・259・260・261号甕棺墓(Fig.57、Tab.3)

K262・263号甕棺墓(Fig.58、Tab.3)

〔石棺墓・土壙墓〕

SS03号石棺墓(Fig.59)　南北に長軸をとる石棺で角礫を用い、蓋材は残らない。墓壙は西側で切り合うが、本来は長辺が1.5m、短辺0.8m規模の長方形プランと考えられ、南側の側辺・小口は石材が失われている。石棺の内法サイズは、長辺で1.2m、短辺0.3m程度で、北側の小口が広いことから頭部はこちらであろう。床面に小円礫を敷く。遺物は出土していない。

SS04号石棺墓(Fig.59)　石棺の墓壙は、長辺が1.56m、短辺1.25mを測る長楕円形をなし、石棺は軸線中央に築かれている。腰石は、長方形の転石を使用し、蓋材は扁平な変成岩板石を用いている。全体に側辺・小口の腰石は内傾気味で、内法は長辺0.85m、短辺0.35～0.4mを測る。副葬遺物は出土していない。

SS05号石棺墓(Fig.59)　石棺の墓壙は、長辺1.85m、短辺0.9m程度のいびつな隅丸長方形で、北側小口には一部石材がおかれる。石棺は、腰石に小型の転石を用い、墓壙南側に片寄って構築される。

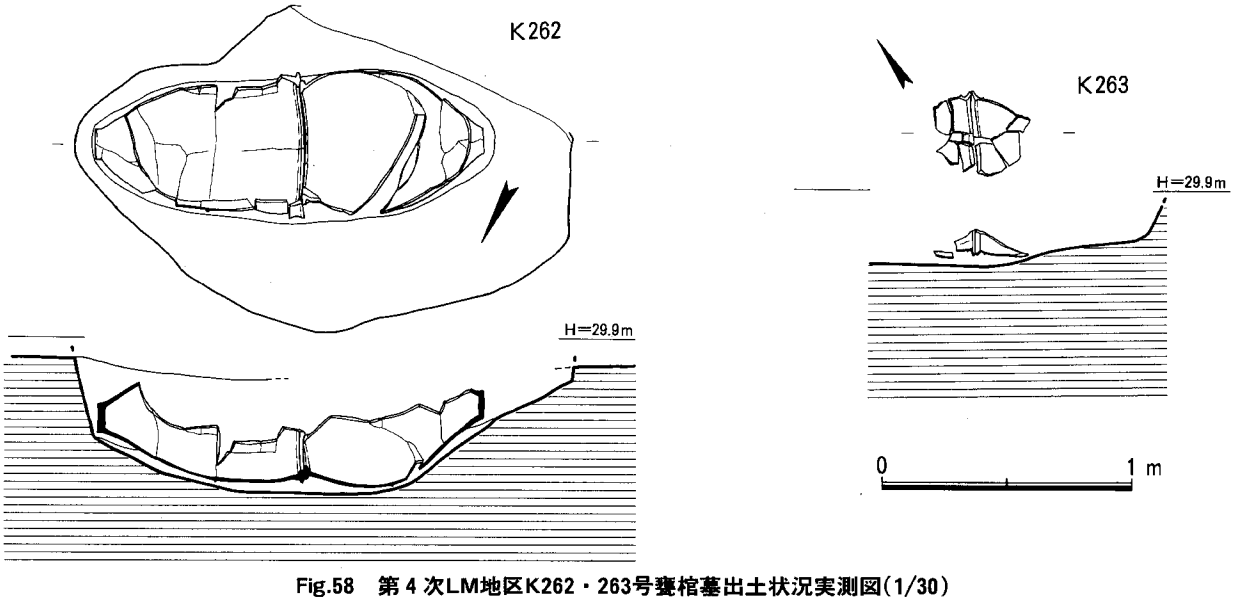


Fig.58　第4次LM地区K262・263号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

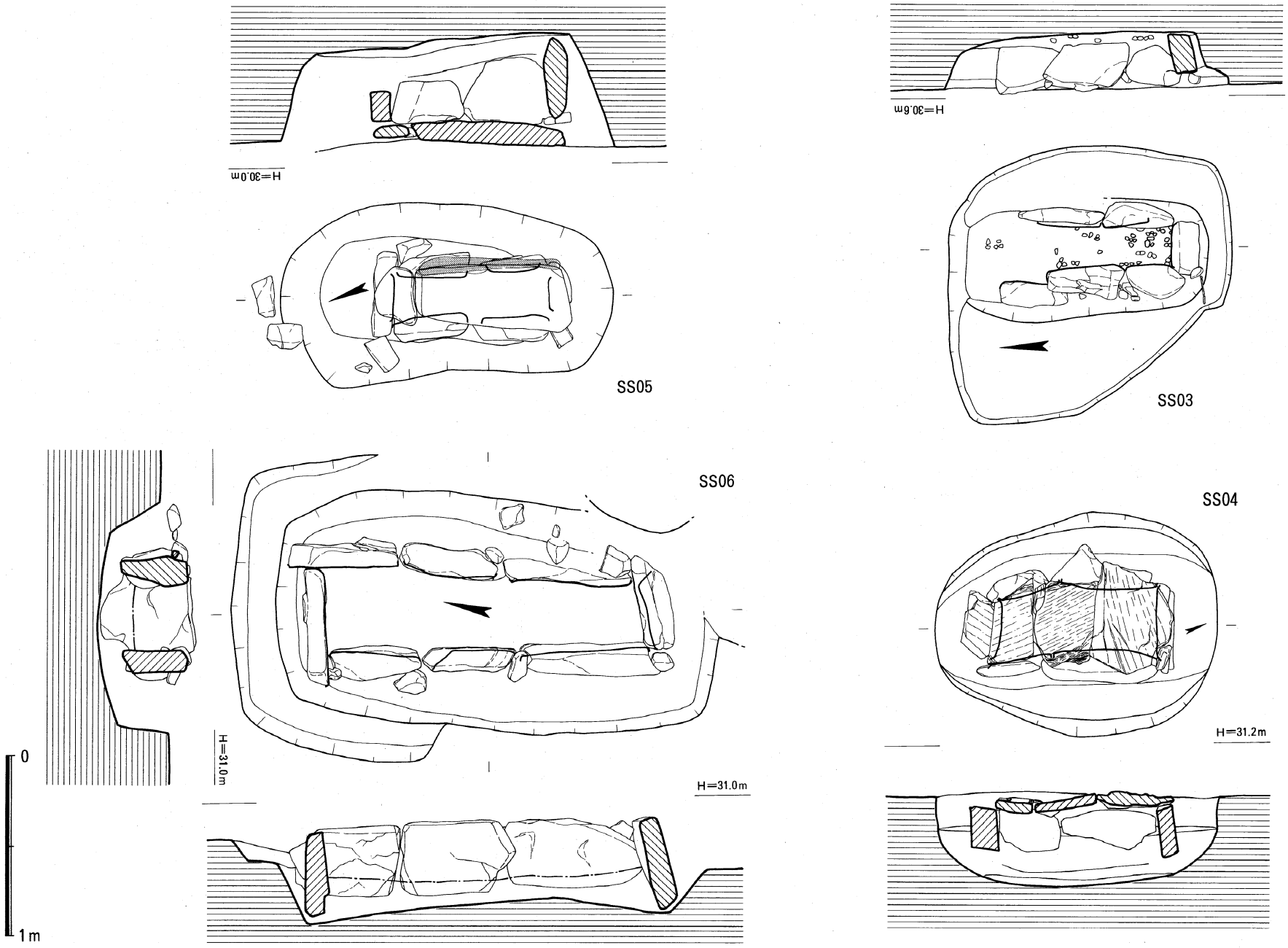


Fig.59　第４次LM地区SS03～06号石棺墓出土状況実測図(1/30)

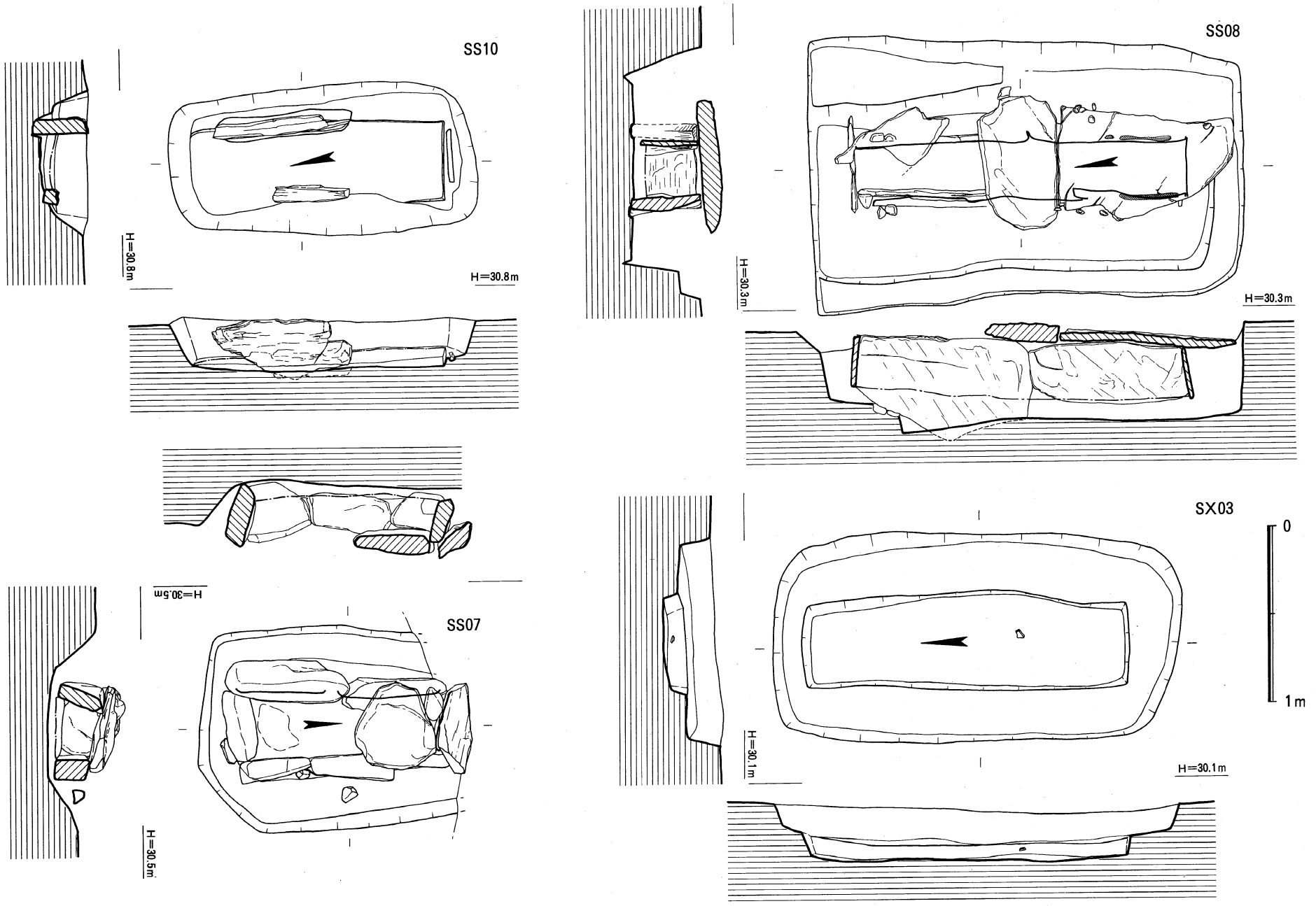


Fig.60　第４次LM地区SS07・08・10号石棺墓、SX03号土壙墓出土状況実測図(1/30)

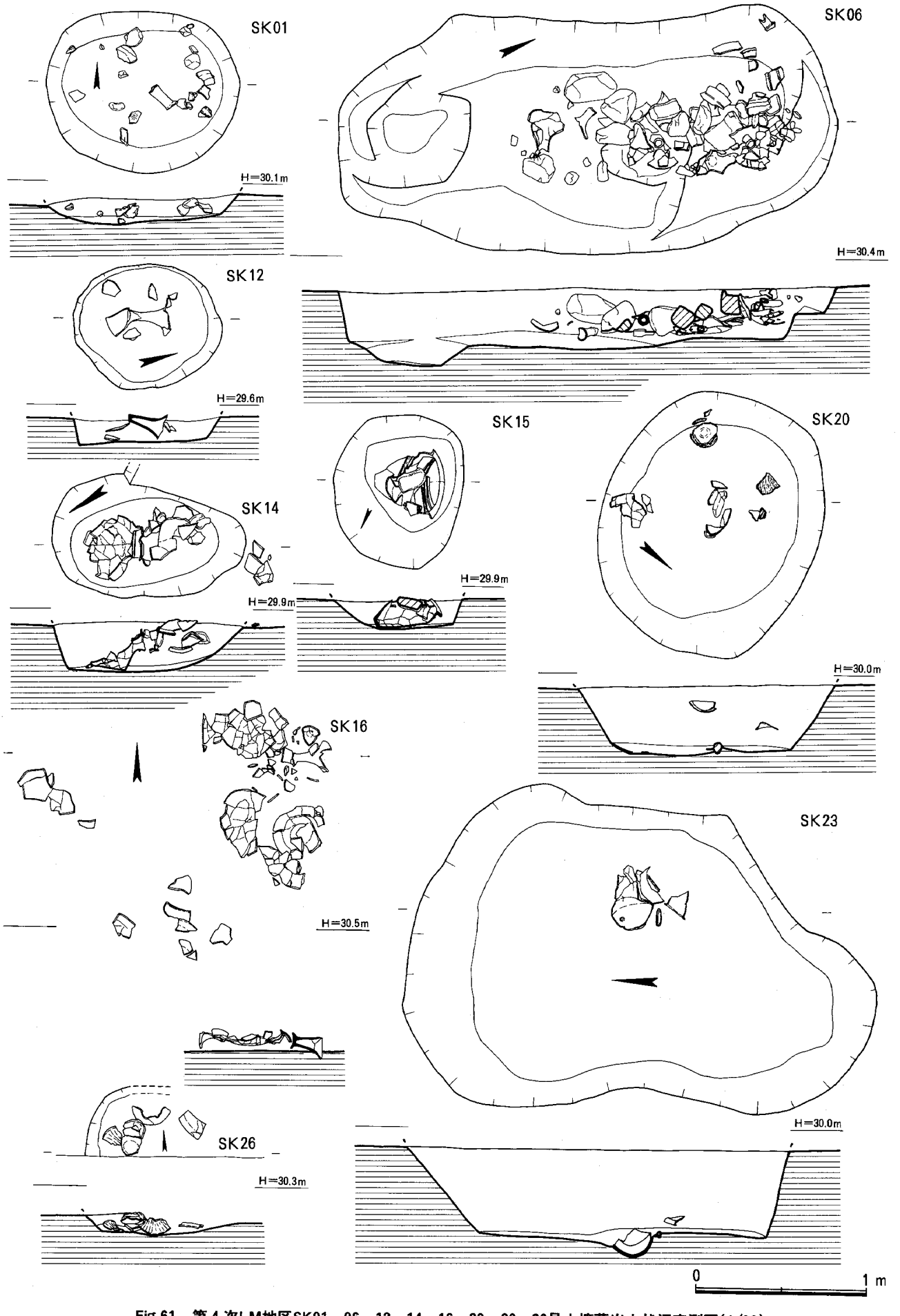


Fig.61　第４次LM地区SK01・06・12・14～16・20・23・26号土壙墓出土状況実測図(1/30)

蓋材は２枚を被せている。石棺内法は、長辺で0.84m、短辺0.3m程度で、頭部は南側であろう。

ＳＳ06号石棺墓(Fig.59)　墓壙は、北側で二段構造となる。幅1.5m、長さ約１ｍの浅い段状の掘り方がつき、内側の墓壙は、長辺が2.43m、短辺1.3m規模の長方形を呈し、蓋材は失われている。

石棺は、側辺が各３枚、小口に各１枚の扁平な転石を使用する。小口材は側辺材の外側に配置され、各石材の接合部には小礫が添えられる。内法規模は、長辺1.7m、短辺0.48mで北側に頭部が想定される。

ＳＳ07号石棺墓(Fig.60)　墓壙北側を失っているが、蓋材２枚程度を除いて全体が良く残っている小型の石棺である。

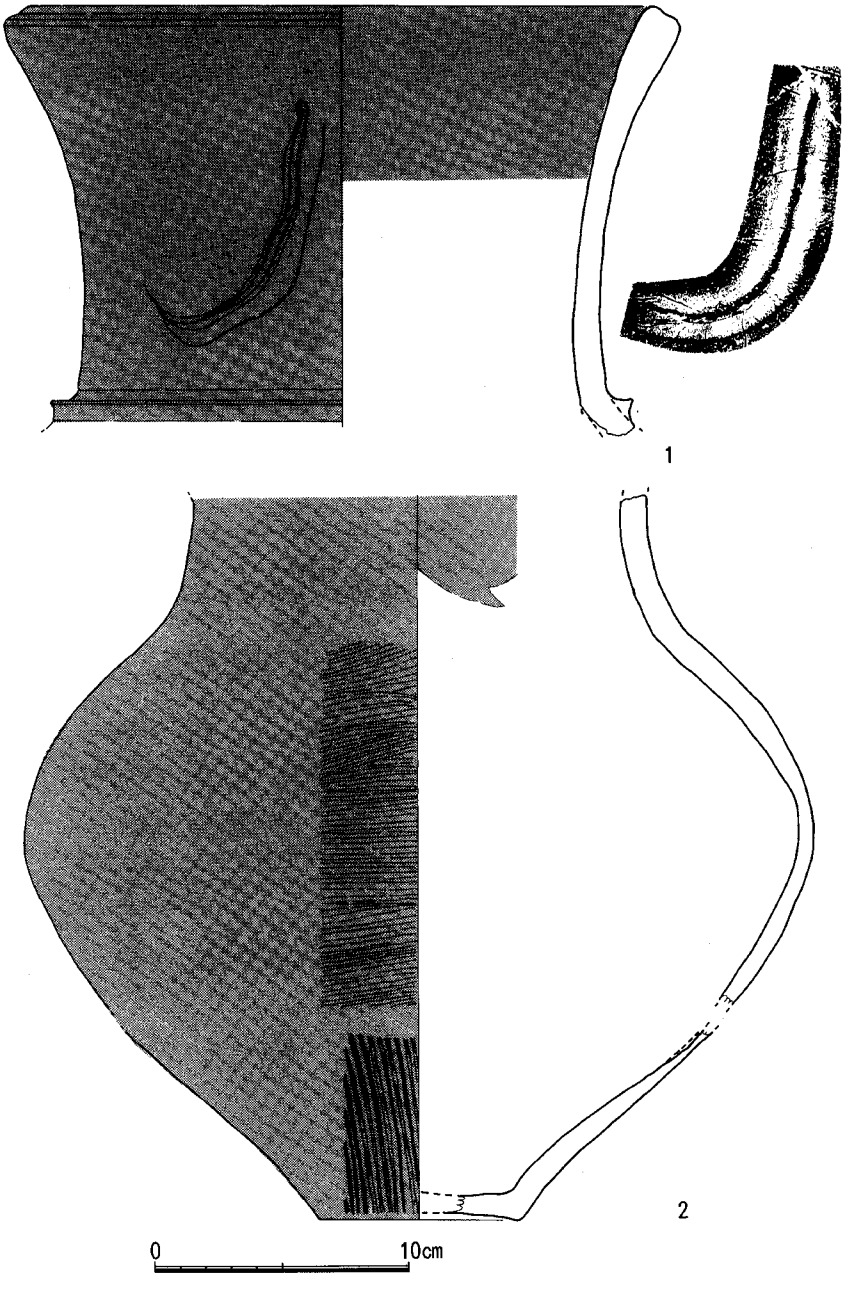


Fig.62　第４次LM地区SK14号土壙出土土器実測図(1/3)

墓壙は、長辺が1.5m以上、短辺1.2m規模の長方形である。また、石棺の内法は、長辺１ｍ、短辺0.3m、高さ0.3mを測る。

ＳＳ08号石棺墓(Fig.60)　墓壙の掘り方規模が長辺で1.75m、短辺0.9mの長方形を呈する。石棺石材は、側辺に変成岩板石が２石残るのみである。

ＳＳ10号石棺墓(Fig.60)　石棺は、一部が二段状に掘られた墓壙の長軸線上の中央に構築される。墓壙は、長辺2.45m、短辺1.4～1.6mを測る長方形である。石棺内法は非常に細身で、長辺1.9m、短辺0.3m、高さ0.3m規模となる。使用石材は、薄い変成岩の板石である。

ＳＸ03号土壙墓(Fig.60)　二段の掘り方を有する土壙墓と考えられる。外側の掘り方は、長辺2.3m、短辺1.2mの長方形をなす。また、内側の掘り方は、長辺1.85m、短辺0.55m、深さ0.2mの長方形である。蓋は、石材が見つからないことから木蓋の可能性が高いと考えられる。

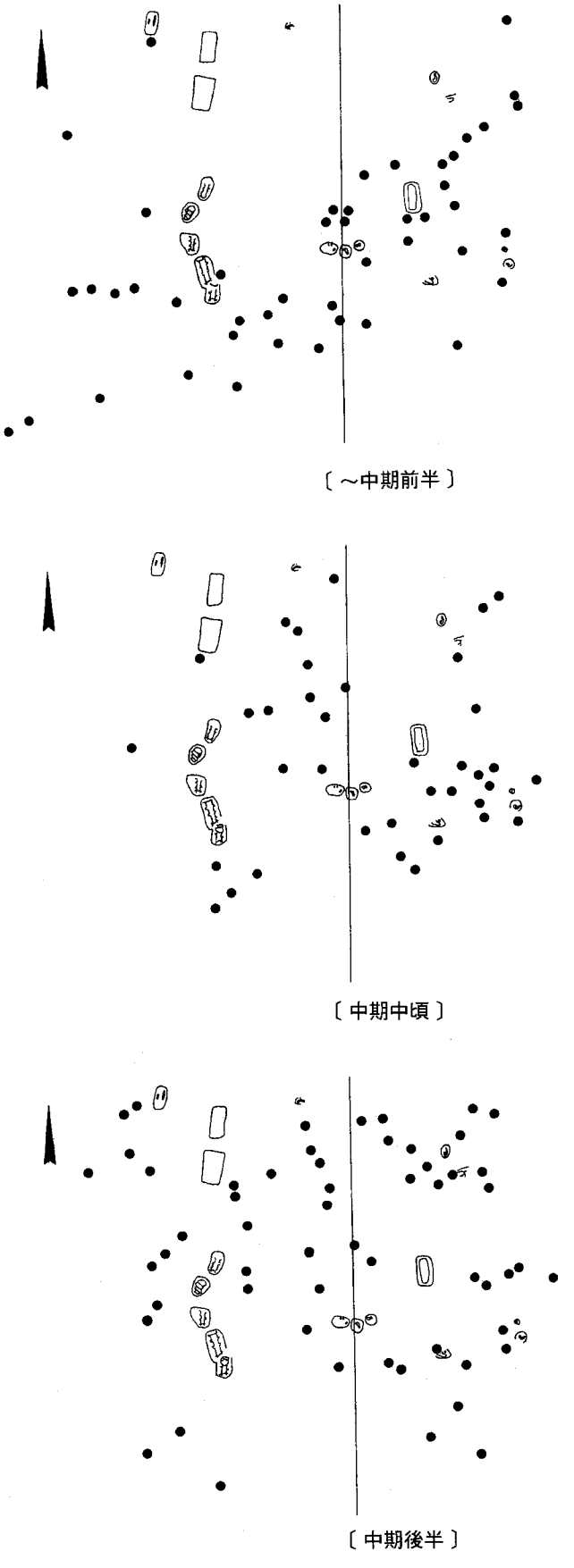


Fig.63　第４次LM地区弥生時代遺構変遷図

〔祭祀土壙〕

ＳＫ01号土壙(Fig.61)　径が1.1m程の円形土壙内に丹塗高杯脚破片が投入されている。

ＳＫ06号土壙(Fig.61)　2.9×1.3m程度の浅い長方形土壙に丹塗高杯・甕・壷破片と共に６個以上の転石が投入されている。

ＳＫ12号土壙(Fig.61)　径が0.8m程の浅い円形土壙内に丹塗高杯脚破片が投入されている。

ＳＫ14号土壙(Fig.61・62)　径が1.1m程度の楕円形土壙に丹塗壷２個体以上が投入されている。１は、頸部に突帯を巡らす直口壷で、外面にタテ方向に「ノ」字形の粘土張り付け文を２～３カ所施す。口縁部径26.5cmを測り、胎土・焼成共に良好である。２は器面に丁寧なヘラミガキ調整を施す中型の長頸壷で、残存高28.7cmを測る。何れも破砕されている。

ＳＫ15号土壙(Fig.61)　径0.9m程度の長方形土壙内に小型丹塗甕・転石１個が重ねて投入されている。

ＳＫ16号土壙(Fig.61)　土壙は無いが、1.5m四方の範囲に丹塗高杯・鋤先状口縁を有する壷などが破砕されておかれている。

ＳＫ20号土壙(Fig.61)　土壙は径が1.3×1.5m、深さ0.4m程度で、出土土器量は少なく、丹塗の小型甕破片が投入されている。

ＳＫ23号土壙(Fig.61)　土壙は不整な長方形をなし、長・短径2.7×1.6m、深さ0.5mを測る。破砕された小型壷破片が投入されている。

ＳＫ26号土壙(Fig.61)　僅かに残る土壙内にヘラミガキの顕著な丹塗広口壷口縁破片などを投入している。

Tab.4　第４次調査弥生時代墳墓一覧表

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期（型式）	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K101		●			甕	甕	中型	N-75-E	－	中期後半	L・M-16・17
K102	●				／	壷	小型	N-83-E	－	中期前半	
K103		●			壷	甕	小型	N-63-E	29	中期中葉	
K104		●			高杯	壷	小型	N-22-W	39	中期中葉	丹塗り。
K105		●			甕	甕	大型	N-75-E	4	中期後半	
K106											
K107											
K108		●			鉢	甕	大型	N-67.5-E	10	中期後半	
K109		●			鉢	甕	中型	N-85-W	2	中期後半	
K110	●				／	甕	小型	N-24-W	24	中期中葉	
K111		●			鉢	甕	大型	N-28-E	0	中期後半	
K112		●			鉢	甕	大型	N-4-W	－6	中期中葉	
K113											
K114				●	甕	甕	中型		－	中期前半	
K115											
K116		●			甕	甕	小型	N-74-E	46	中期初頭	
K117	●				／	甕	小型	N-34-E	42	中期初頭	
K118											
K119		●			壷	壷	小型	N-57-W	35	中期中葉	丹塗り。
K120		●			甕	甕	大型	N-27-E	8	中期後半	
K121	●				／	甕	中型	N-46.5-E	1	中期後半	
K122		●			鉢	甕	中型	N-28-E	0	中期後半	
K123		●			甕	甕	中型	N-70-E	－	中期前半	
K124		●			甕	甕 甕	中型	N-46-E	2	中期後半	3連
K125	●				／	甕	小型	N-13-E	－	中期後半	
K126				●	甕	甕	小型	N-32-E	6	中期後半	
K127		●			甕	甕	小型	N-77-W	－	中期前半	
K128				●	甕	甕	小型	N-89-W	9	中期後半	
K129		●			甕	甕	小型	N-21-E	8	中期後半	
K130		●			甕	壷	小型	N-60-W	0	中期後葉	
K131		●			甕	甕	中型	N-40-E	4	中期後半	
K132		●			甕	甕	中型	N-26-E	3	中期後半	
K133		●			甕	甕	中型	N-31-E	0	中期後半	
K134			●		甕	甕	大型	N-60-E	4	中期前半	
K135		●			鉢	甕	小型	N-75-E	7	中期初頭	
K136	●				／	壷	小型	N-50-E	－	前期末？	
K137		●			鉢	甕	小型	N-88-W	－	中期中葉	
K138		●			甕	甕	中型	N-84.5-E	0	中期前半	
K139		●			甕	甕	中型	N-S	－	中期前半	
K140		●			甕	甕	中型	N-13-E	－	中期前半	
K141	●				／	甕	小型	N-85-E	－	中期前半	
K142		●			壷	甕	大型	N-73.5-E	6	中期中葉	
K143	●				／	壷	小型	N-60-W	40	中期中葉	
K144	●				／	壷	小型	N-43-E	53	中期後半	
K145		●			鉢	甕	大型	N-58-E	39	中期前半	
K146	●				／	甕	大型	N-77-E	－	中期前半	
K147		●			甕	壷	小型	N-32.5-E	0	中期中葉	
K148		●			壷	甕	中型	N-74-E	14	中期後半	
K149		●			甕	甕	大型	N-28-W	－6	中期後半	
K150		●			壷	甕	大型	N-59-E	11	中期後半	
K151		●			甕	甕	大型	N-76-W	7	中期前半	
K152		●			壷	甕	大型	N-60-E	4	中期後半	
K153		●			鉢	甕	大型	N-85-W	－3	中期中葉	
K154		●			甕	甕	中型	N-46-W	0	中期前半	
K155	●				／	甕	小型	N-69-E	14	中期前半	
K156	●				／	甕	小型	N-70-E	33	中期前半	
K157		●			甕	甕	中型	N-69-E	16	中期後半	
K158		●			甕	甕	大型	N-84-W	5	中期中葉	
K159							小型	N-86-W	－	？	破片のみ。
K160						壷	小型	N-46-E	－	？	破片のみ。
K161						壷	小型	N-75.5-E	－	？	破片のみ。
K162		●			鉢	甕	大型	N-17-W	14	中期後半	
K163		●			甕	甕	中型	N-44-E	3	中期末	

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K164	●				／	甕	大型	N-18-W	14	中期中葉	
K165		●			甕	甕	中型	N-88-W	15	中期後半	
K166		●			鉢	甕	大型	N-73-E	5	中期後半	
K167		●			甕	甕	大型	N-13-E	2	中期後半	
K168				●	壷	甕	中型	N-60-E	4	中期後半	
K169	●				／	甕	大型	N-28-E	37	中期後半	
K170		●			甕	甕	中型	N-63-E	33	中期後半	
K171		●			甕	甕	中型	N-67-E	—	中期前半	
K172	●				／	壷	小型	N-7-E	42	中期後半	
K173		●			鉢	甕	中型	N-76-E	—	中期中葉	
K174	●				／	甕	中型	N-65-E	14	中期前半	K267と墓壙は同一
K175				●	壷	甕	中型	N-42-E	7	中期前半	
K176		●			甕	壷	小型	N-18-E	3	中期中葉	
K177	●				／	甕	中型	N-53.5-E	13	中期後半	
K178		●			鉢	甕	小型	N-47-E	41	中期前半	
K179		●			鉢	甕	小型	N-43-E	15	中期中葉	
K180		●			甕	甕	小型	N-55-E	—	中期前半	
K181			●		甕	甕	中型	N-47-E	30	中期前半	
K182		●			鉢	甕	大型	N-50-E	8	中期中葉	
K183	●				／	甕	小型	N-72-E	—	中期中葉	
K184	●				／	甕	中型	N-70-E	—	?	
K185		●			甕	甕	小型	N-68-E	—	中期前半	
K186				●	壷	甕	小型	N-8-E	37	中期中葉	
K187			●		壷	甕	小型	N-40-E	—	中期中葉	
K188		●			鉢	甕	大型	N-44-E	3	中期後半	
K189		●			甕	甕	大型	N-15-E	16	中期中葉	
K190	●?				／	壷	小型		—	?	
K191	●				／	甕	大型	N-7-W	10	中期中葉	
K192	●?				／	甕	小型		—	?	
K193		●			甕	甕	中型	N-32-W	11	中期中葉	
K194		●			甕	甕	小型	N-32-W	—	中期前半	
K195	●				／	甕	中型	N-37-E	—	中期後半	
K196		●			壷	甕	大型	N-67-E	6	中期中葉	
K197		●			甕	甕	中型	N-11-E	—	中期後半	
K198		●			甕	甕	中型	N-55-E	—	中期後半	
K199		●			甕	甕	小型	N-63-W	16	中期末	
K200	●				／	甕			—	中期後半	
K201											土師器
K202	●				／	甕	中型		—	中期後半	
K203	●?				／	甕	小型	N-4-E	—	?	
K204	●				／	壷	小型	N-62-E	39	中期前半	
K205		●			鉢	甕	中型	N-58-E	27	中期前半	
K206		●			甕	甕	中型	N-61-E	4	中期前半	
K207				●	甕	甕	中型	N-34-W	22	中期前半	
K208	●				／	甕	中型	N-69-E	7	中期中葉	
K209		●			甕	甕	中型	N-3-E	1	中期後半	
K210		●			鉢	甕	大型	N-38-E	—	中期後半	
K211		●			甕	甕	小型	N-44-E	16	中期末	
K212		●			壷	甕	大型	N-74-W	−3	中期中葉	
K213				●	鉢	甕	大型	N-81-E	0	中期後半	
K214		●			甕	甕	中型	N-38-E	7	中期後半	
K215	●				／	甕	中型	N-65-E	3	中期前半	
K216		●			鉢	甕	小型	N-43-E	−5	中期前半	
K217		●			鉢	甕	中型	N-14-W	4	中期中葉	
K218		●			鉢	甕	大型	N-37-E	5	中期後半	
K219		●			壷	甕	大型	N-4-W	7	中期後半	
K220		●			甕	甕	大型	N-10-W	6	中期中葉	
K221	●					甕	中型	N-73-E	15	中期前半	
K222				●	壷	甕	小型	N-18-E	7	中期末	
K223		●			甕	甕	中型	N-29-E	4	中期末	
K224	●				／	甕	中型	N-43-E	14	中期後半	
K225		●			鉢	甕	大型	N-88-W	7	中期中葉	
K226		●			甕	甕	大型	N-42-E	2	中期中葉	
K227		●			鉢	甕	小型	N-45-W	9	中期前半	
K228		●			甕	甕	大型	N-25-W	7	中期中葉	

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期（型式）	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K229											
K230		●			鉢	甕	大型	N-69-E	8	中期後半	
K231		●			鉢	甕	大型	N-88-W	2	中期中葉	
K232		●			鉢	甕	大型	N-8-E	1	中期中葉	
K233		●			甕	甕	大型	N-7-E	0	中期中葉	
K234					甕	甕		N-40-W	6	中期初頭	
K235		●			甕	甕	小型	N-30-E	7.5	中期前半	
K236			●		甕	甕	小型	N-70-E	28	中期前半	
K237		●			甕	甕	中型	N-18-W	2	中期前半	
K238		●			壷	甕	大型	N-36-E	4	中期中葉	
K239		●			鉢	甕	中型	N-15-E	22	中期中葉	K269と墓壙は同一
K240		●			鉢	甕	中型	N-89-W	12	中期中葉	
K241											
K242		●			鉢	甕	小型	N-S	—	中期前半	
K243		●			甕	甕 甕	中型	N-66-E	—	中期後半	3連
K244				●	甕	甕	中型	N-62-E	2	中期前半	
K245		●			鉢	甕	大型	N-47-E	2	中期中葉	
K246		●			甕	甕	大型	N-27-E	5	中期中葉	
K247		●			鉢	甕	中型	N-53-E	2	中期前半	
K248				●	鉢	壷	小型	N-63-E	32	中期中葉	
K249	●				／	甕	中型	N-75-E	−3	中期前半	
K250				●	甕	甕	中型	N-52-E	0	中期前半	
K251	●				／	甕	中型	N-16-E	—	中期後半	
K252		●			壷	甕	大型	N-36-W	17	中期後半	
K253	●				／	甕	大型	N-25-E	17	中期後半	
K254			●		壷	壷	小型	N-60-E	−1	中期前半	
K255	●				／	甕	小型	N-70-E	26	中期末	
K256		●			甕	甕	大型	N-17-E	3	中期中葉	
K257		●			鉢	甕	中型	N-29-W	1	中期後半	
K258		●			甕	甕	小型	N-7-W	—	?	K259と墓壙は同一
K259		●			鉢	甕	大型	N-7-W	—	中期後半	K258と墓壙は同一
K260	●				／	甕	中型	N-28-E	—	中期中葉	
K261	●				／	甕	中型	N-38-E	—	中期中葉	
K262		●			甕	甕	中型	N-63-E	3	中期前半	
K263											
K264											
K265											
K266			●		甕	甕	小型	N-76-E	17	中期前半	
K267			●		壷	甕	小型	N-65-E	−9	中期中葉	K174と墓壙は同一
K268	●				／	壷	小型	N-68-W	—	中期前半	丹塗
K269					／	甕	小型		45		土師器、K239と墓壙は同一
K270	●				／	甕	小型	N-24-W	—	中期中葉	
SX03		●			甕	壷	小型	N-3-E	—	中期末	墓壙不明
SK26	●?				／	壷		N-89-E	—		丹塗、祭祀土壙

小結

ＬＭ地区墓地について個別に説明を加えて来たが、ここでこの墓地の時期別の変遷について触れることにしたい。

〔**中期前半**〕　北東から南北方向に長く帯状に墓地が形成される。墓地内では甕棺墓が特に集中する区域は見られないが、分布が東側にやや膨らむ傾向にある。

〔**中期中頃**〕　東側に分布が膨らんでいく傾向は変わらないが、全体的には北側に片寄って分布しており、収縮している。

〔**中期後半**〕　分布上は前時期の区域を踏襲するが、規模では更に膨張し、全体的に北側に多く分布する傾向となる。

〔**後期**〕　墓地中央に見られる石棺墓・土壙墓は、小規模な後期墓地と考えられる。

ＬＭ地区の墓地は、いわゆる「甕棺ロード」の主要部分となっているが、最大の分布を示す中期後半期の状況から考えると墓地南限は当時の地形変換ラインに一致すると考えることができよう。

3．MN地区墓地

〔甕 棺 墓〕

K 01号甕棺墓(Fig.65)　上棺に小型の甕、下棺小型壷打欠きを使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K 02号甕棺墓(Fig.65)　小型の壷を使用する小児甕棺墓か。削平から複棺の可能性がある。

K 03号甕棺墓(Fig.65)　上棺に小型の壷打欠き、下棺小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K 04号甕棺墓(Fig.65)　上棺に小型の鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 06号甕棺墓(Fig.65)　小型壷を使用する小児甕棺墓か。削平のため複棺の可能性が高い。

K 07号甕棺墓(Fig.65)　小型甕破片を残すのみである。墓壙から小児甕棺墓と考えられる。

K 10号甕棺墓(Fig.65)　上棺は小型壷の打欠き、下棺は小型甕を使用する接口式の小児甕棺である。

K 11号甕棺墓(Fig.65)　中型甕を使用する甕棺墓で、破壊が著しい。

K 12号甕棺墓(Fig.65)　小型甕を使用する小児甕棺墓か。

K 13号甕棺墓(Fig.65)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 14号甕棺墓(Fig.65)　上下棺共に小型の甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K 15号甕棺墓(Fig.65)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 16号甕棺墓(Fig.65)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 17号甕棺墓(Fig.65)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 18号甕棺墓(Fig.65)　小型甕を使用する単式の小児甕棺墓か。木蓋などの施設が推定される。

K 19号甕棺墓(Fig.65)　小型甕を使用する単式の小児甕棺墓か。木蓋などの施設が推定される。

K 20号甕棺墓(Fig.65)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。接口部の下面には黄青灰色の粘土を分厚く敷いており、ほぼ水平に埋置される。

K 21号甕棺墓(Fig.65)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 22号甕棺墓(Fig.66)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 23号甕棺墓(Fig.66)　中型甕を使用する単式の甕棺墓である。

K 24号甕棺墓(Fig.66)　下棺に大型甕・蓋の上棺に中型甕打欠き2個を使用する三連式の成人甕棺墓である。

K 25号甕棺墓(Fig.66)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 26号甕棺墓(Fig.66)　大型甕を使用する単式の成人甕棺墓である。口縁部下には蓋を据えた痕跡が明瞭に残る。

K 27号甕棺墓(Fig.66)　上棺に大型の甕打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 28号甕棺墓(Fig.66)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。

K 29号甕棺墓(Fig.66)　上棺に大型鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 30号甕棺墓(Fig.66)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 31号甕棺墓(Fig.66)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 32号甕棺墓(Fig.66)　小型甕を使用する単式？の小児甕棺墓であろう。

K 33号甕棺墓(Fig.66)　上棺に小型鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K 34号甕棺墓(Fig.66)　中型甕を使用する単式の小児甕棺墓か。

K 35号甕棺墓(Fig.67)　小型壷を使用する小児甕棺墓か。

K 37号甕棺墓(Fig.67)　上棺に小型の甕、下棺に鋤先口縁を有する壷を使用する接口式の小児甕棺

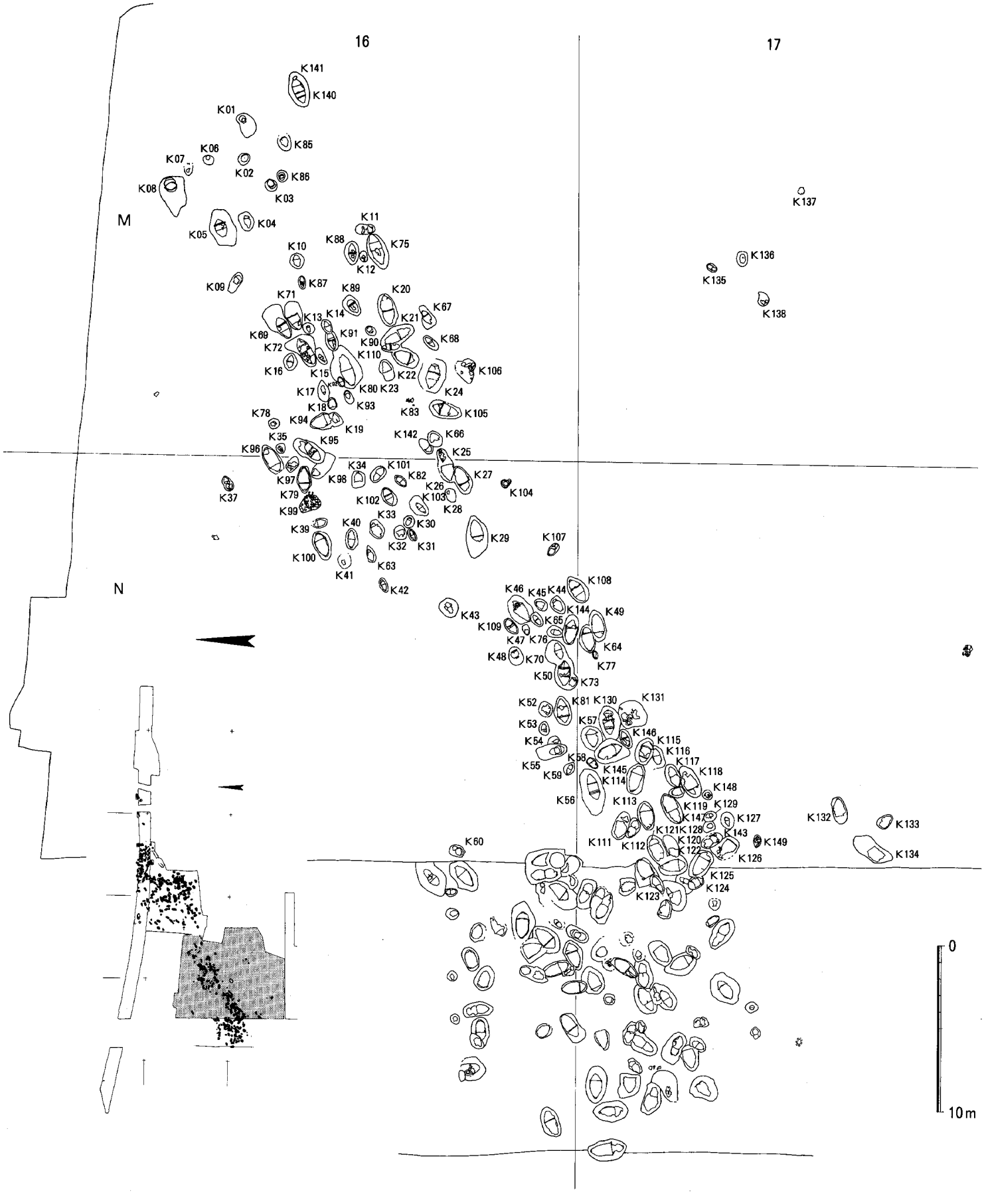


Fig.64　第４次MN地区弥生時代遺構全体図(1/200)

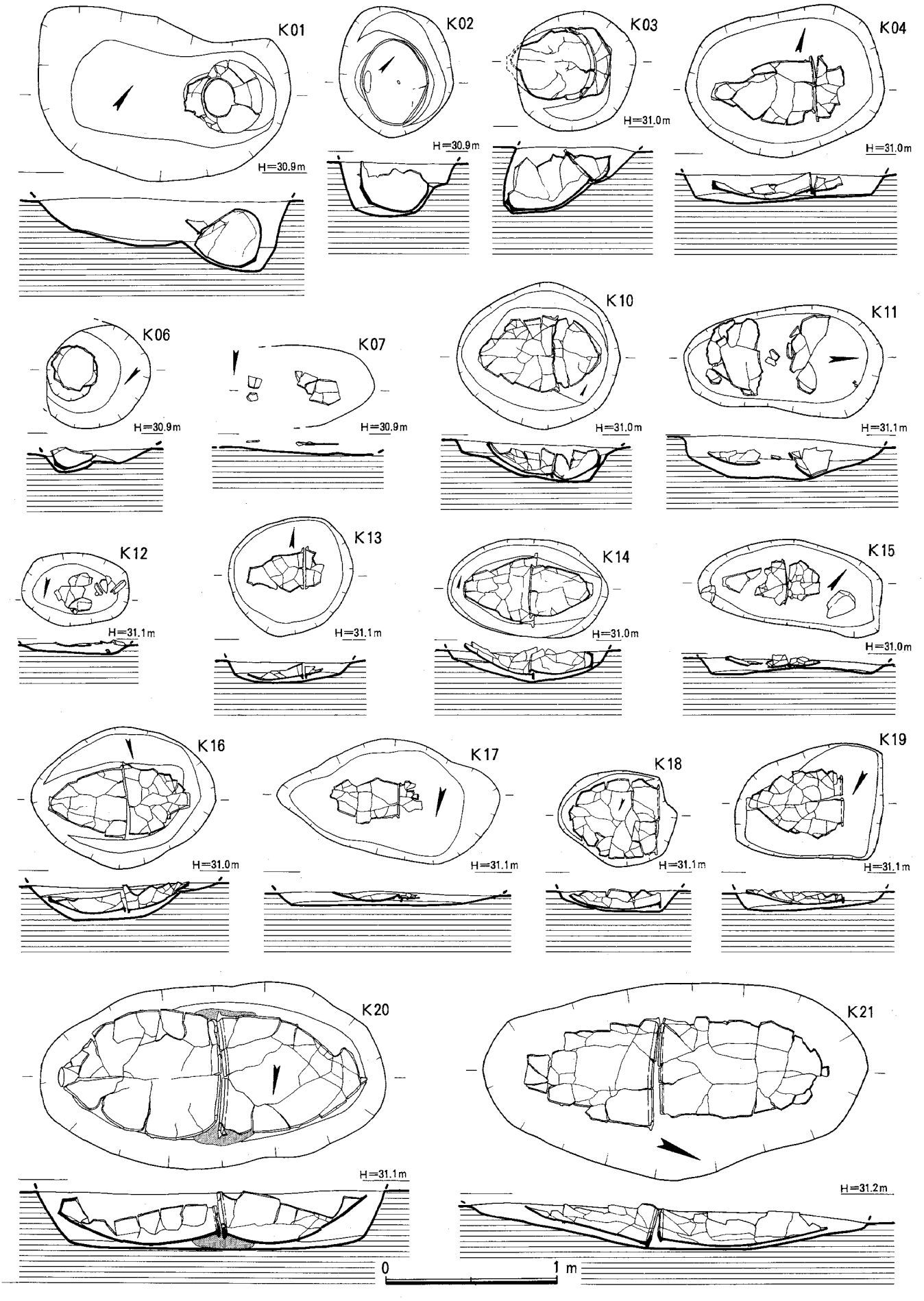


Fig.65　第４次MN地区K01～04・06・07・10～21号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

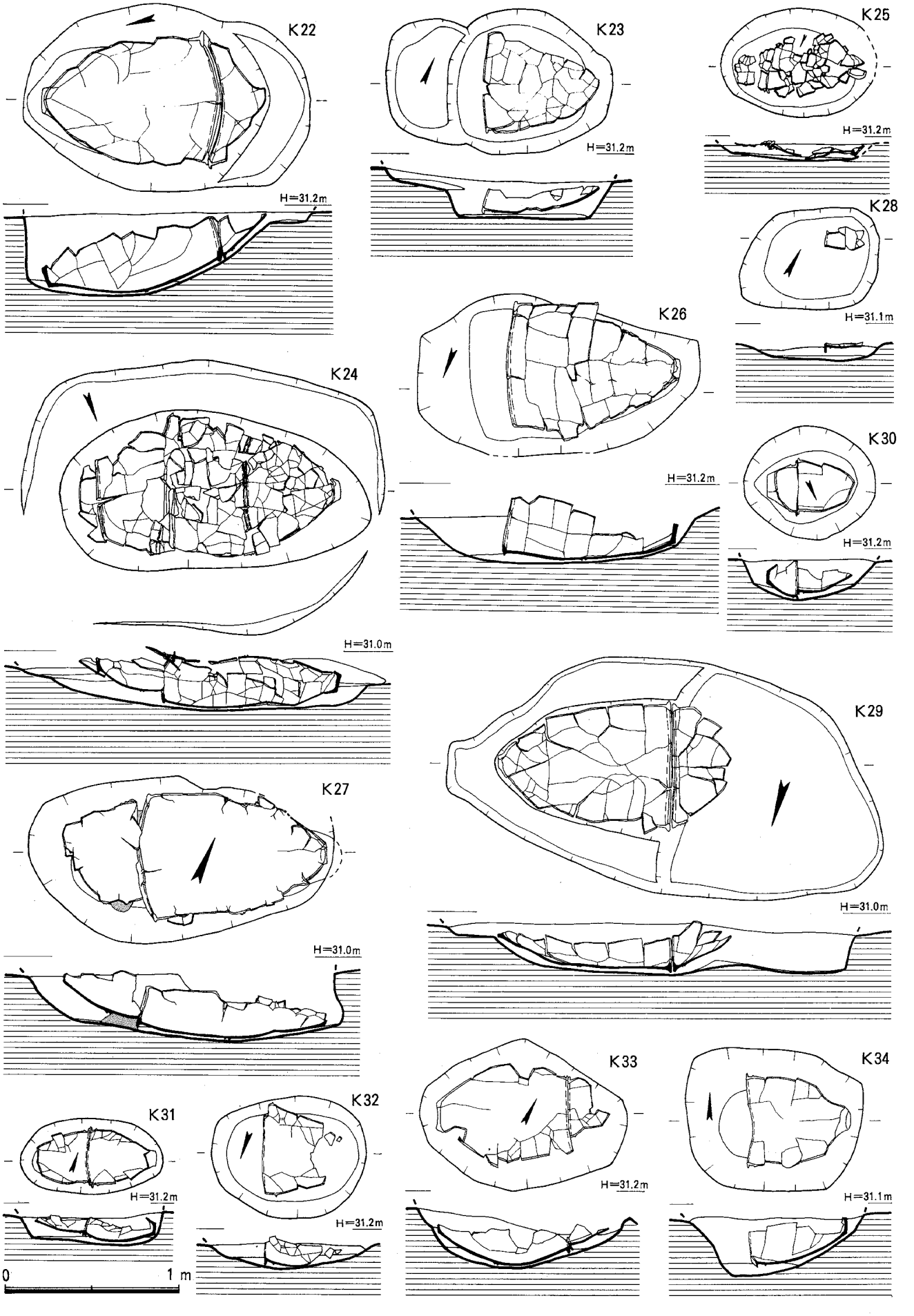


Fig.66　第４次MN地区K22～34号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

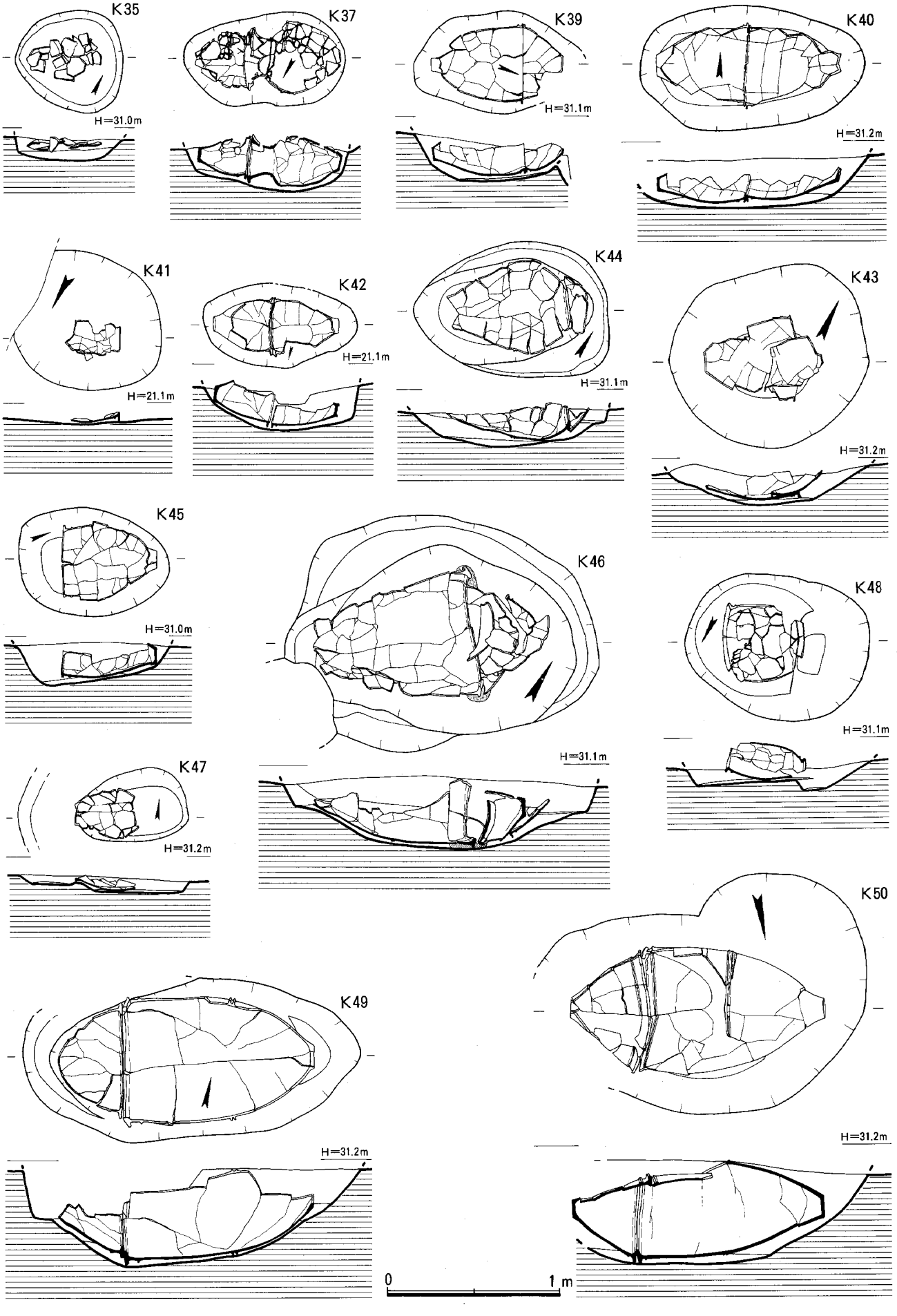


Fig.67　第４次MN地区K35・37・39～50号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

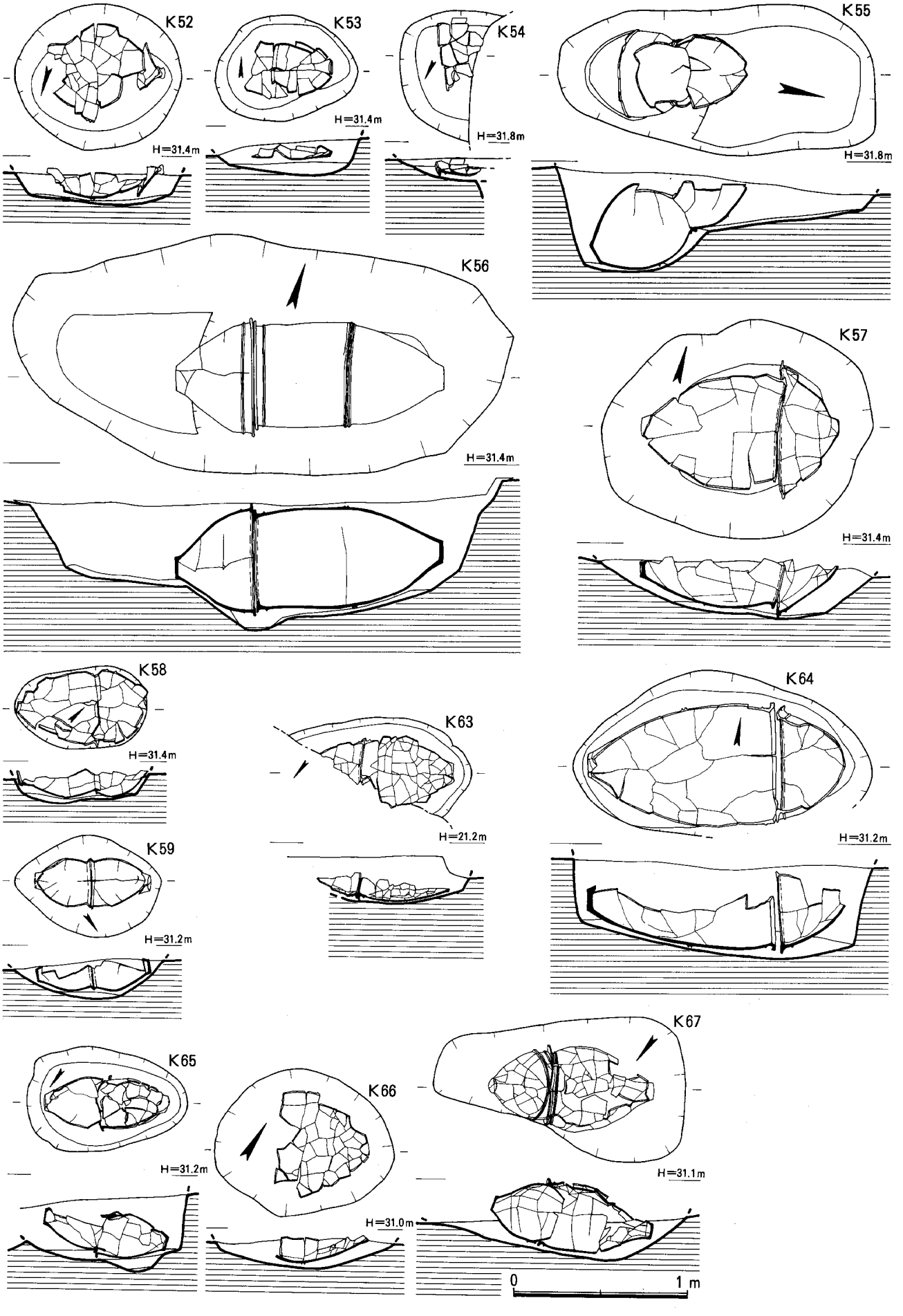


Fig.68　第4次MN地区K52～60・63～67号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

である。

K 39号甕棺墓(Fig.67)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 40号甕棺墓(Fig.67)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 41号甕棺墓(Fig.67)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。

K 42号甕棺墓(Fig.67)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 43号甕棺墓(Fig.67)　上下棺共に小型の甕を使用する顕著な呑口式の小児甕棺墓である。

K 44号甕棺墓(Fig.67)　上棺に中型甕打欠き、下棺に中型甕を使用する覆口式の甕棺墓である。

K 45号甕棺墓(Fig.67)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。単式と考えられる。

K 46号甕棺墓(Fig.67)　下棺に大型甕、蓋の上棺に小型の甕2個を使用する三連式の成人甕棺墓である。

K 47号甕棺墓(Fig.67)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。削平のため複棺の可能性もある。

K 48号甕棺墓(Fig.67)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。

K 49号甕棺墓(Fig.67)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 50号甕棺墓(Fig.67)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 52号甕棺墓(Fig.68)　上棺に小型の傘形蓋、下棺に小型甕打欠きを使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K 53号甕棺墓(Fig.68)　上棺に小型甕の打欠き、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 54号甕棺墓(Fig.68)　小型の甕を使用する小児甕棺墓か。単式の可能性が高い。

K 55号甕棺墓(Fig.68)　上棺に小型甕打欠き、下棺に小型甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K 56号甕棺墓(Fig.68・69)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

上 棺　上端部がややくぼむ平坦口縁直下に低い三角突帯1条を巡らす大型鉢である。器色は、外面赤褐色～暗褐色、内面淡赤褐色を呈し、外面と内面上半が黒塗りである。突帯以下はタテ方向のヘラナデが認められる。焼成は堅緻で、胎土は密である。口縁部径67cm、底部径9.4cm、器高46.8cmを測る。

下 棺　平坦口縁下に低い1条の三角突帯、胴部中位に2条の三角突帯を巡らす大型甕である。器色は、外面淡赤褐色を呈し、突帯上半に大黒斑あり。また、内外面共に黒塗りで、幅約4cm程度のハケで塗っている。突帯下に一部ヨコ方向のハケメを残す以外はヘラナデである。焼成は堅緻で、胎土密である。口縁部径61.5cm、底部径12.6cm、器高108.8cmを測る。

K 57号甕棺墓(Fig.68)　上棺に大型鉢、下棺に中型甕を使用する覆口式の甕棺墓である。

K 58号甕棺墓(Fig.68)　上棺に小型壷打欠き、下甕に小型甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K 59号甕棺墓(Fig.68)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 63号甕棺墓(Fig.68)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 64号甕棺墓(Fig.68)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 65号甕棺墓(Fig.68)　上下棺共に小型の甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K 66号甕棺墓(Fig.68)　中型甕を使用する甕棺墓である。削平のため単式であるかは不詳である。

K 67号甕棺墓(Fig.68)　上棺に小型壷打欠き、下棺に小型甕を使用する呑口式の小児用甕棺墓である。

K 68号甕棺墓(Fig.70)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 69号甕棺墓(Fig.70)　上棺に大型甕打欠き、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

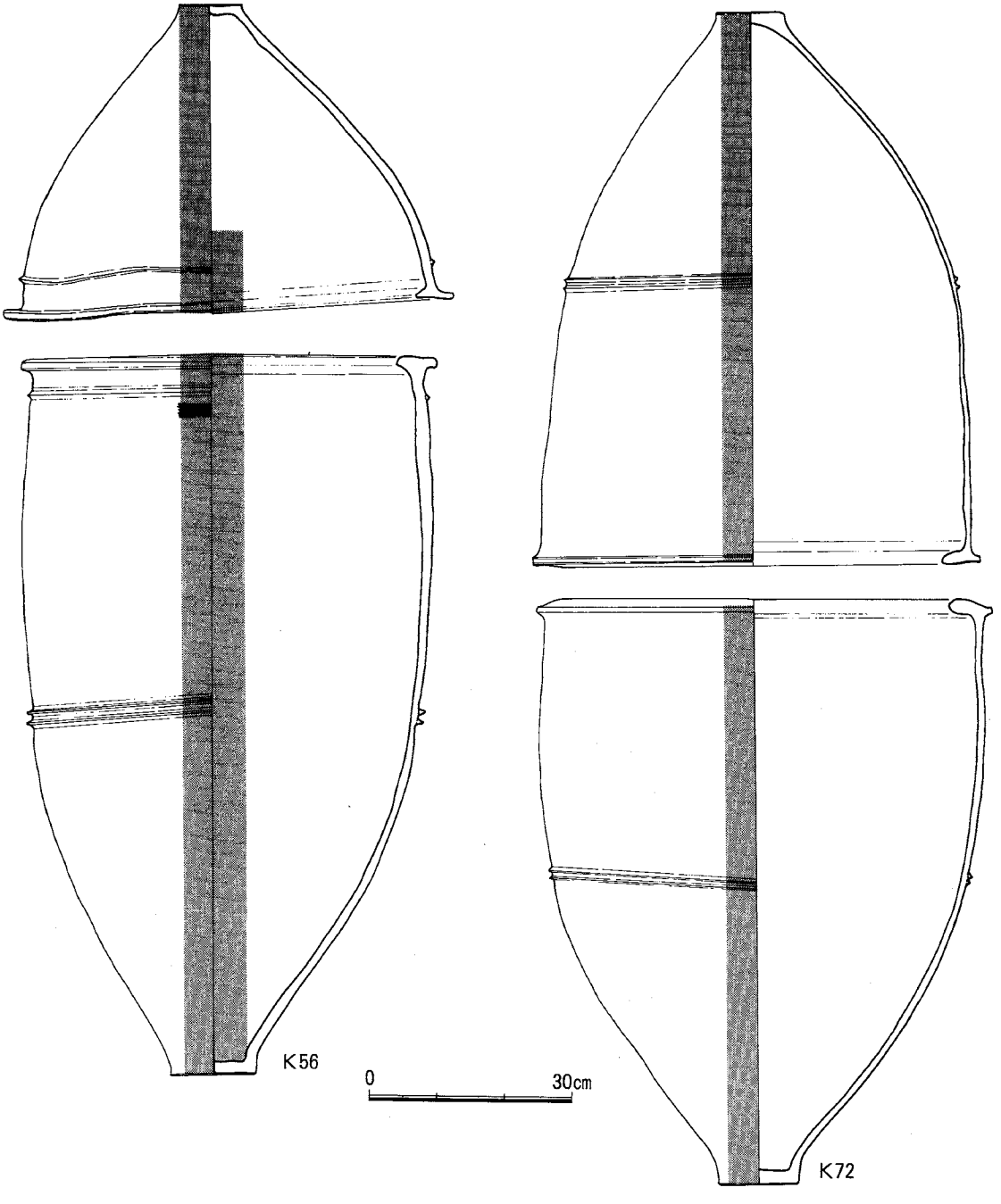


Fig.69　第4次MN地区K56・72号甕棺実測図(1/10)

K70号甕棺墓(Fig.70)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K71号甕棺墓(Fig.70)　大型甕を使用する単式の成人甕棺墓である。口縁部下に黄青白色粘土を敷く。

K72号甕棺墓(Fig.69・70)　上下棺共に規模のほぼ等しい大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。上棺上に扁平礫1個が見られ、盛土から崩落した標石の可能性もある。

上 棺　平坦口縁の内面への張り出しが顕著な大型甕で、胴部中位よりやや下った位置に2条の低い三角突帯を巡らす。器色は、外面突帯以上は淡赤褐色、以下は淡褐色である。内面は殆ど黒斑で占められる。また、外面は全面黒塗りである。器面調整は、外面ヘラナデで、突帯のやや上部に二次穿孔がある。焼成は堅緻で、 胎土密である。口縁部径65.8cm、底部径10cm、器高83cmを測る。

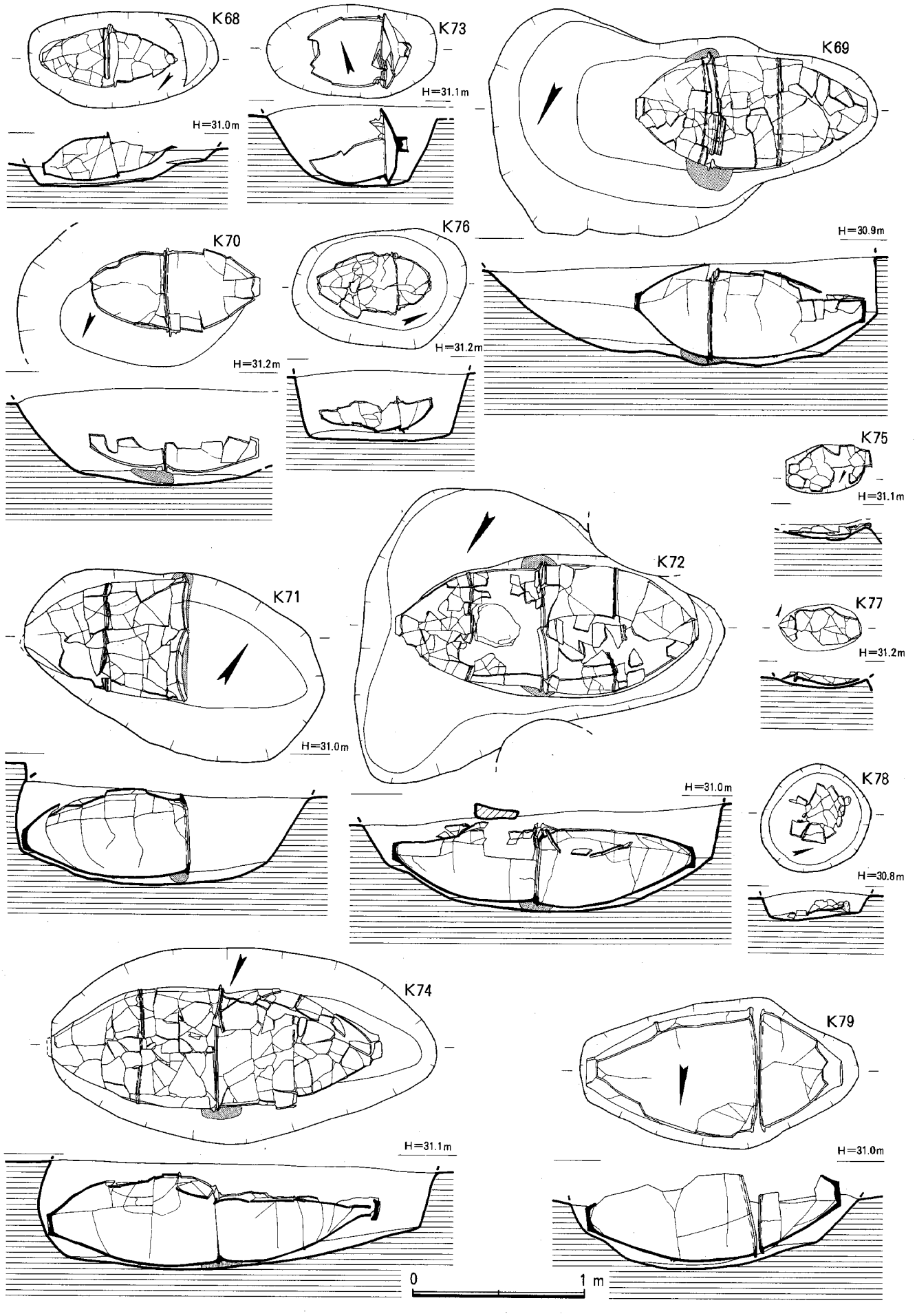


Fig.70　第４次MN地区K68～79号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

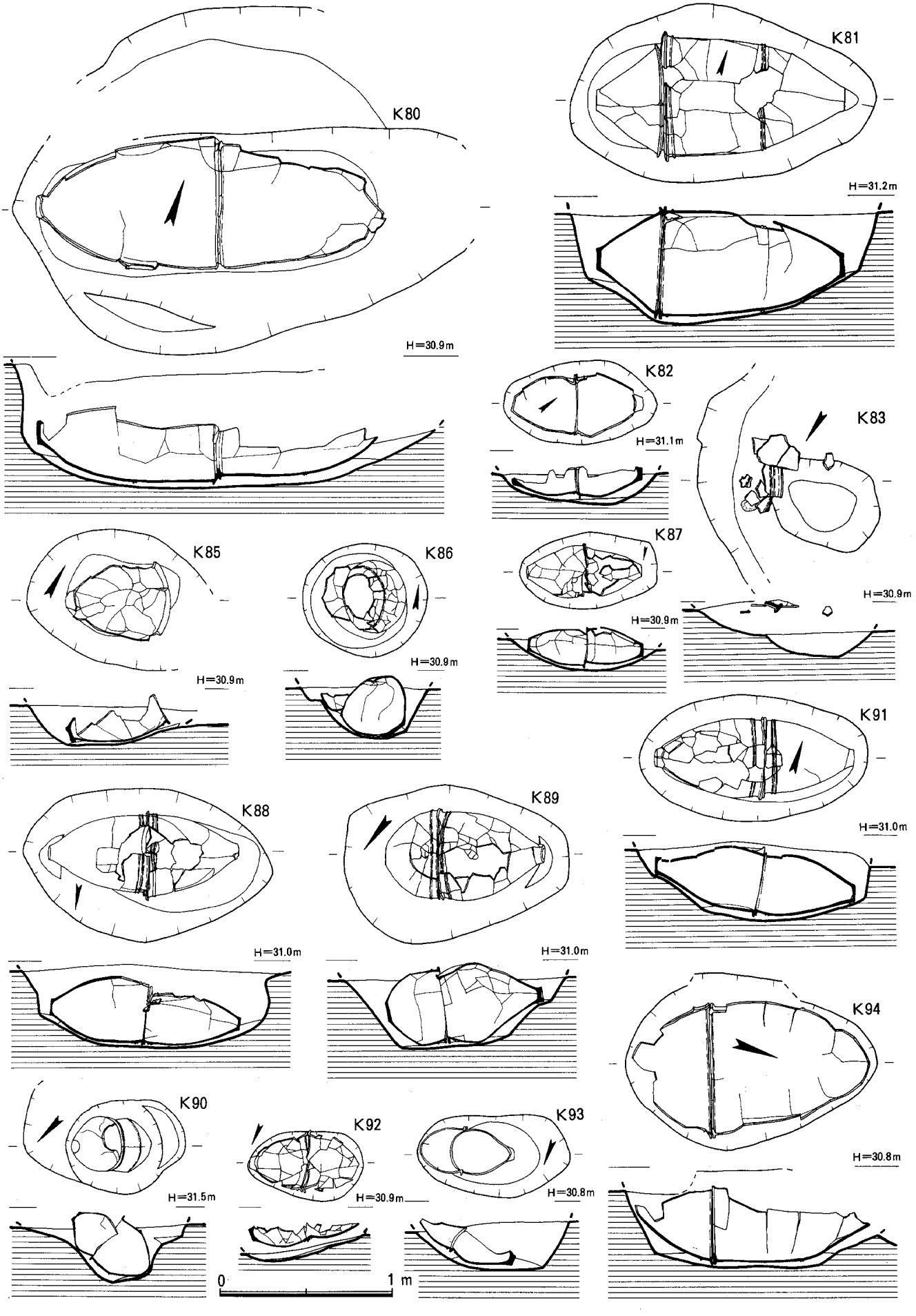


Fig.71　第４次MN地区K80～83・85～94号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

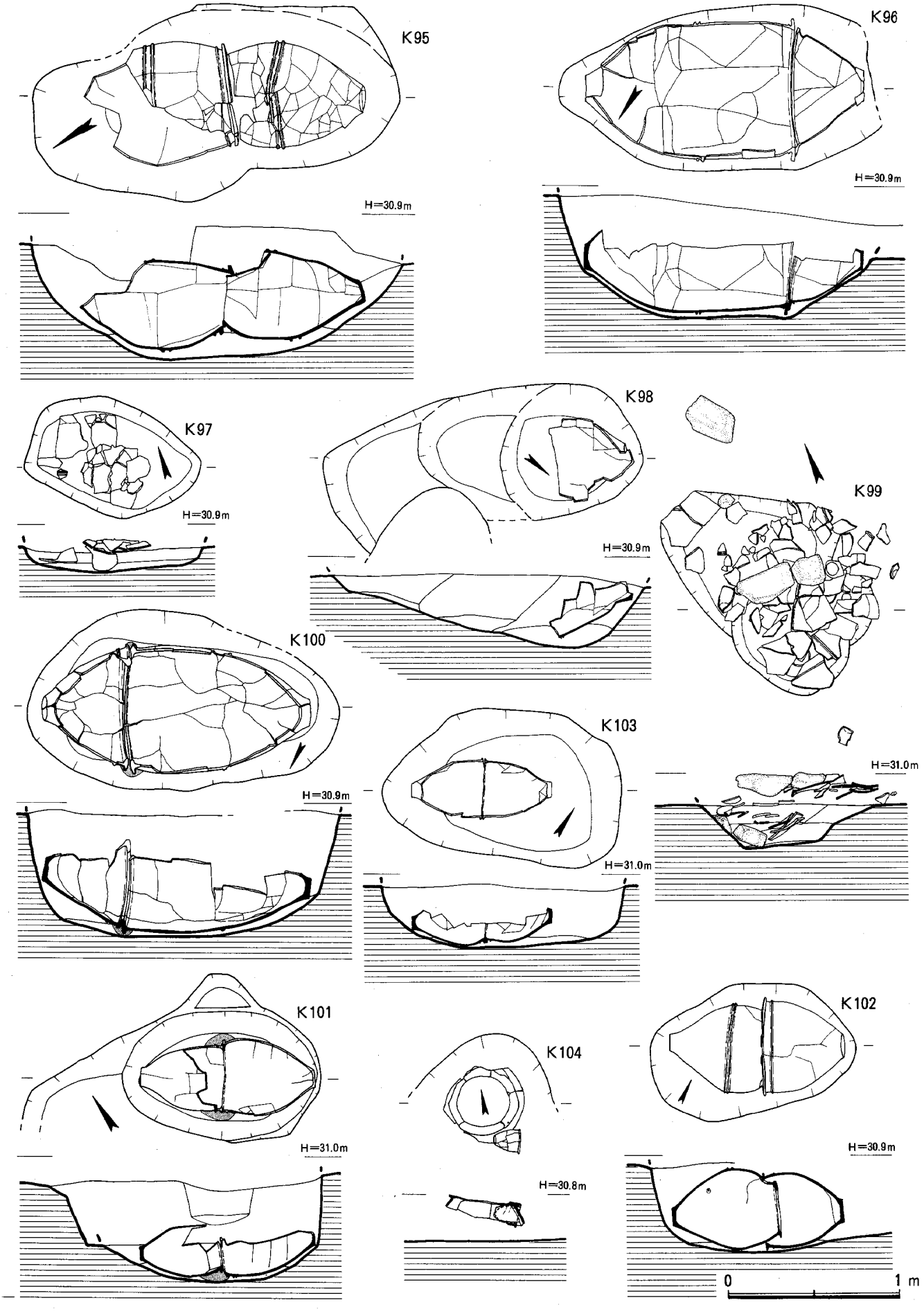


Fig.72　第４次MN地区K95～104号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

下 棺　上棺の甕に比較すると口縁がやや肥厚する大型の甕である。胴部のほぼ中位に低い２条の三角突帯を巡らす。器色は、内外面共に暗赤褐色を呈し、外面は黒塗りである。外面の上部は器面の荒れが著しい。焼成は堅緻で、胎土密で石英粗砂を多量に含む。口縁部径67.5cm、底部径11.6cm、器高83.3cmを測る。

K73号甕棺墓(Fig.70)　上棺に高杯の打欠き、下棺に小型甕を使用する覆口の小児甕棺墓である。

K74号甕棺墓(Fig.70)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K75号甕棺墓(Fig.70)　小型甕を使用する小児甕棺墓であろう。

K76号甕棺墓(Fig.70)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K77号甕棺墓(Fig.70)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K78号甕棺墓(Fig.70)　小型の壷？を使用する小児甕棺か。

K79号甕棺墓(Fig.70)　上棺に中型の鉢、下棺に中型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K80号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K81号甕棺墓(Fig.71)　上棺に大型の鉢、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K82号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K83号甕棺墓(Fig.71)　不整な土壙の埋土上面から大型甕の口縁部破片が出土している。祭祀？。

K85号甕棺墓(Fig.71)　小型甕を使用する単式の小児甕棺墓か。削平が大きく、複棺の可能性がある。

K86号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に小型の壷打欠きを使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K87号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K88号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K89号甕棺墓(Fig.71)　上棺に中型の鉢、下棺に中型甕を使用する覆口式の甕棺墓である。

K90号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に小型の甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。

K91号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に中型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。

K92号甕棺墓(Fig.71)　上下棺共に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K93号甕棺墓(Fig.71)　上棺に小型鉢、下棺に小型甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K94号甕棺墓(Fig.71)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K95号甕棺墓(Fig.72)　上下棺共に大型の甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K96号甕棺墓(Fig.72)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

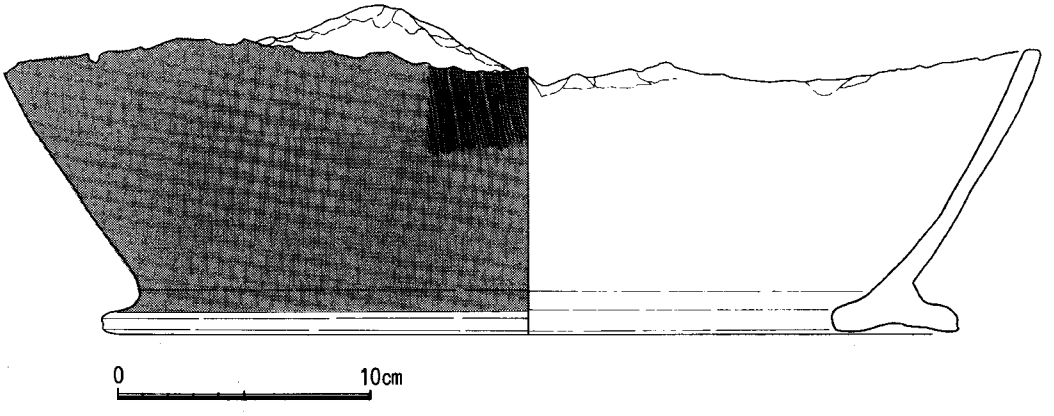


Fig.73　第４次MN地区K104号甕棺実測図(1/3)

K 97号甕棺墓(Fig.72)　不整な長方形土壙に小型の甕破片が残る。小児甕棺墓か。

K 98号甕棺墓(Fig.72)　底面が斜めに上がる長方形土壙の底に大型甕の胴部下半が残る。成人甕棺墓の攪乱されたものか。

K 99号甕棺墓(Fig.72)　長径が1.3m、短径が0.9mを測る不整な土壙に破砕された丹塗壷・甕及び転石が混在して出土した。出土状況から祭祀土壙である可能性が高い。

K 100号甕棺墓(Fig.72)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 101号甕棺墓(Fig.72)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 102号甕棺墓(Fig.72)　上下棺共に小型の甕を使用する覆口式の小児甕棺墓である。

K 103号甕棺墓(Fig.72)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 104号甕棺墓(Fig.72・73・74)　中型甕の胴部下半を打ち欠いて正立の状態で使用する。小児甕棺墓か。墓壙ラインは明確ではない。近接して小型の甕1個を副葬する。

出 土 甕　頸部の良く絞まった中型の甕である。口縁部上端の中央はやや窪む特徴をもつ。口縁部から10cm強の位置で外面から内面への打ち欠きを行っている。器色は、外面暗褐色、内面淡赤褐色を呈し、外面は黒塗りである。器面調整は、外面の一部に細かいタテハケメが残り、他はナデである。焼成は堅緻で、胎土も密である。口縁部径34.2cm、残存高13.1～9.9cmを測る。

副 葬 甕　やや傾斜する小さい平坦口縁を有し、底部径は比較的に大きく安定している。器面調整は外面に細かいタテ方向のハケメ、内面はナデで、内底部には指オサエが残る。器色は、暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に砂粒の混入が多い。口縁部径13cm、底部径5.5cm、器高13.3cmを測る。この小型甕は、かつて吉武高木遺跡(4次調査)で同ナンバーのK104号甕棺墓の副葬土器と錯誤して報告されたことがあった。ここに訂正する。

K 105号甕棺墓(Fig.75)　上棺に大型の鉢、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K 106号甕棺墓(Fig.75)　一辺が1.2m、深さ0.5m程度の不整な土壙内に鋤先状口縁を有する壷形土器破片と共に7個以上の転石が投入されていた。出土した壷は破砕状態であることから、墳墓の可能性は薄く、墓地に伴う祭祀遺構と考えられる。

K 107号甕棺墓(Fig.75)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K 108号甕棺墓(Fig.75)　上棺は大型甕の打欠き、下棺は大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K 109号甕棺墓(Fig.75)　上下棺共に中型の甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。

K 110号甕棺墓(Fig.75)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。接口部の下面に黄青白色の目張り粘土が残る。

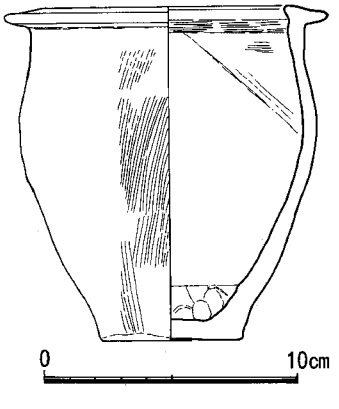


Fig.74　第4次MN地区K104号甕棺墓副葬土器実測図(1/3)

K 111号甕棺墓(Fig.75)　上棺に中型の鉢、下棺には大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓と考えられるが、後世の攪乱によってかなり旧状が改変されている。

K 112号甕棺墓(Fig.75)　上下棺共に小型の甕を使用する接口式の甕棺墓である。上部の削平によって改変が著しい。

K 113号甕棺墓(Fig.75)　上棺に大型の鉢、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置される。

K 114号甕棺墓(Fig.75)　上棺に大型の鉢、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置される。

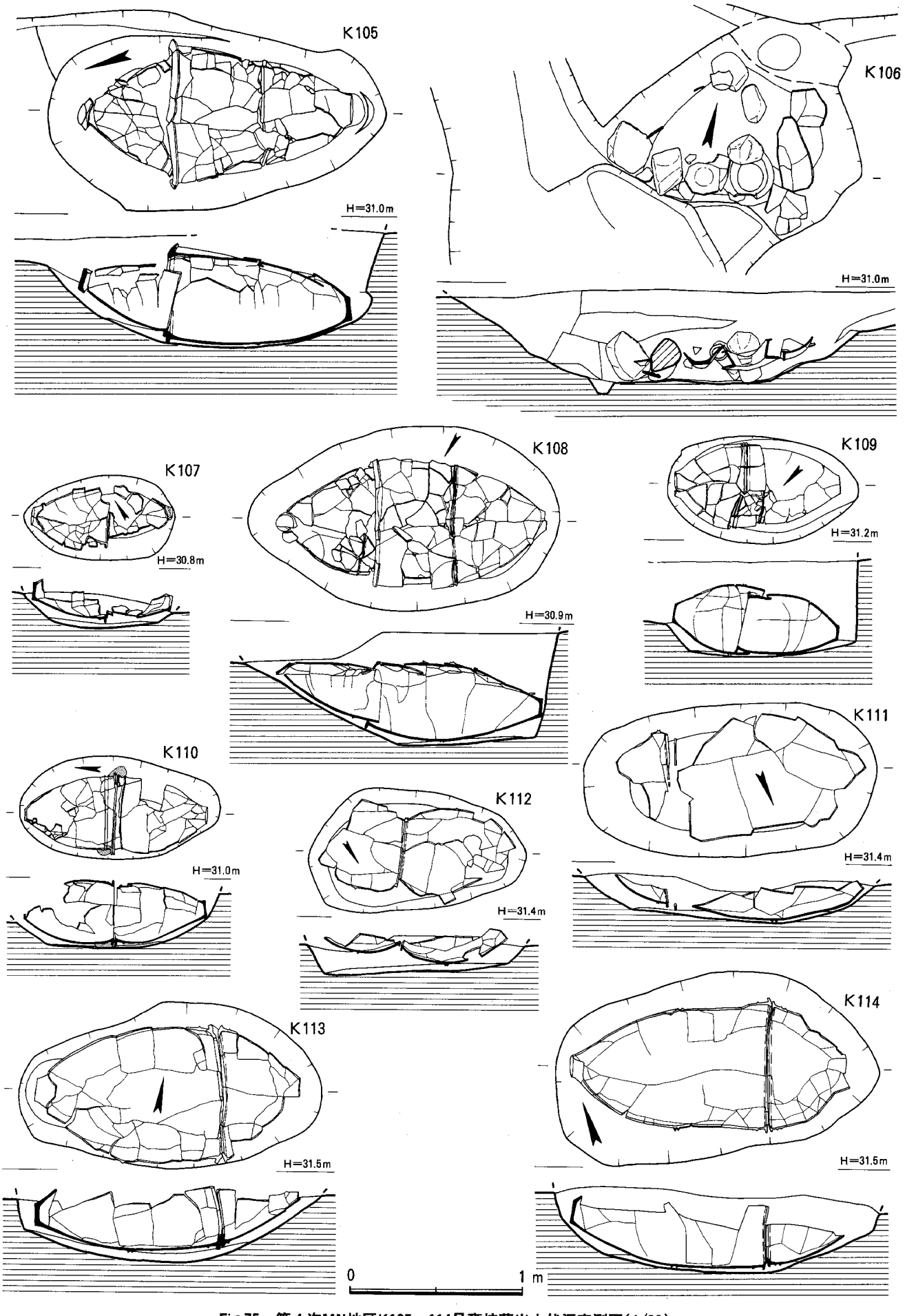


Fig.75　第４次MN地区K105～114号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

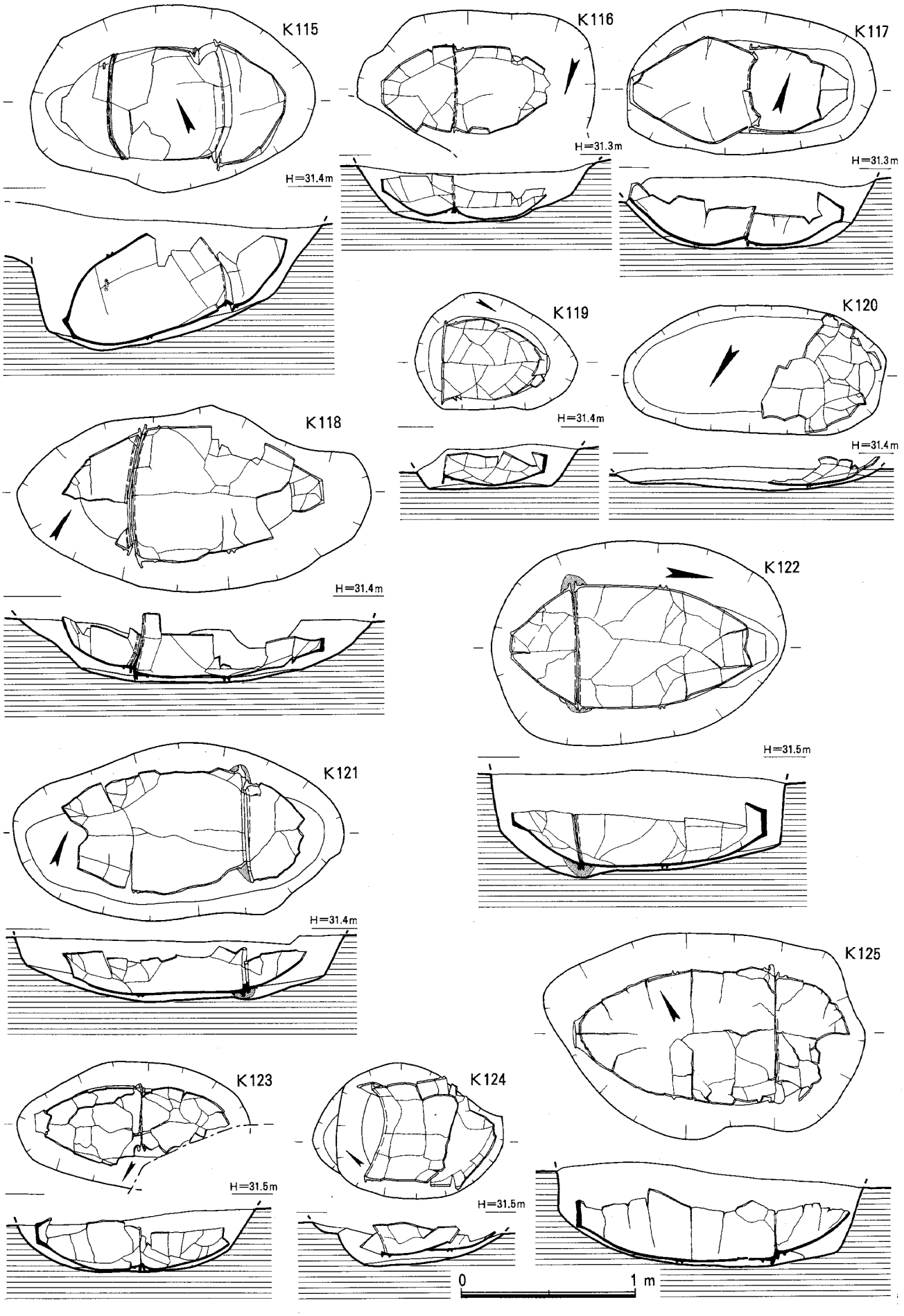


Fig.76　第４次MN地区K115～125号甕棺出土状況実測図(1/30)

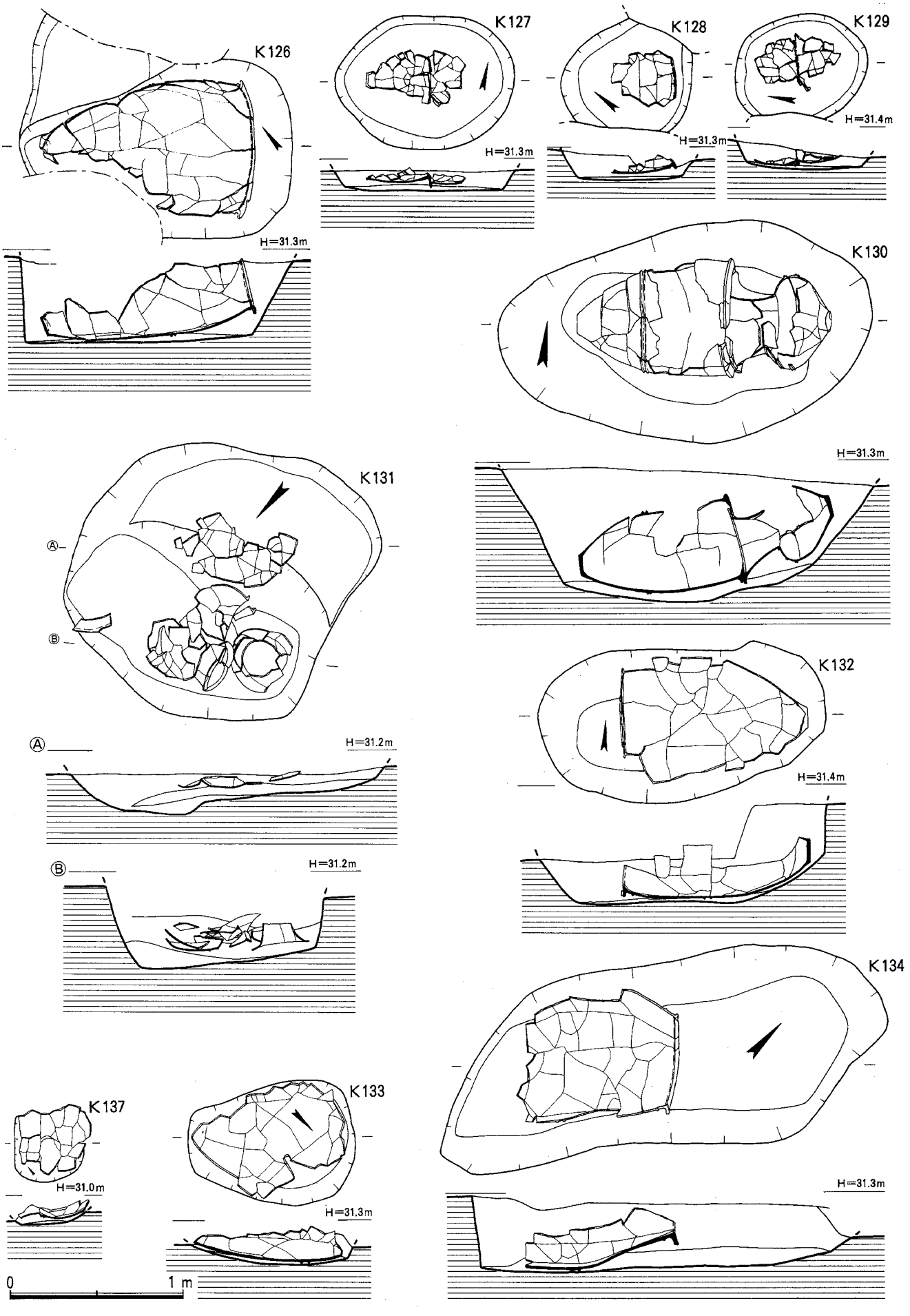


Fig.77　第４次MN地区K126～134・137号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K115号甕棺墓（Fig.76）上棺に大型の鉢、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。上部はかなりの削平をうけているが、埋置法をよく観察する事ができる。

K116号甕棺墓（Fig.76）上棺に小型の鉢、下棺に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。ほぼ水平に埋置されている。

K117号甕棺墓（Fig.76）上棺には中型の鉢、下棺には中型の甕を使用する呑口式の小児甕棺墓である。殆ど水平に埋置されている。

K118号甕棺墓（Fig.76）上棺には大型の鉢、下棺には大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。上部の削平と土圧によってかなりつぶれている。

K119号甕棺墓（Fig.76）小型の甕を使用する単式の小児甕棺墓と考えられる。墓壙掘

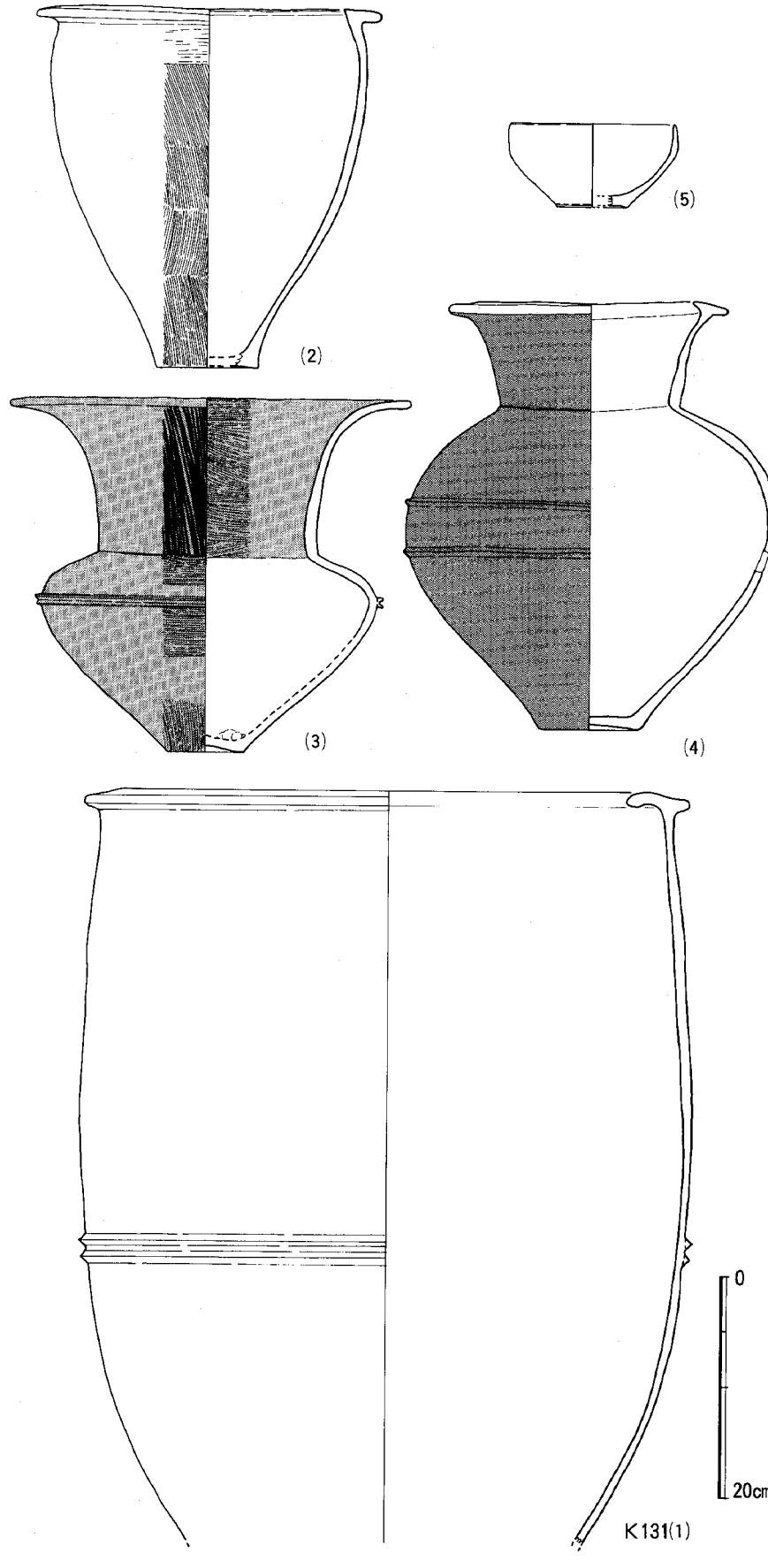


Fig.78　第4次MN地区K131号甕棺実測図(1/6)

り方から木蓋などの施設が想定できる。

K120号甕棺墓(Fig.76)　大幅な削平のために大型甕の胴部破片を残すのみであるが、墓壙は長辺が1.5m、短辺が0.75mを測る隅丸長方形であり、大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓の可能性がある。

K121号甕棺墓(Fig.76)　上棺には大型の鉢、下棺には大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。上部削平による改変が著しい。接口部の下面には目張りの黄青白色粘土が良く残る。

K122号甕棺墓(Fig.76)　上棺には大型の鉢、下棺には大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。棺の埋置はほぼ水平になされ、接口部には黄青白色の目張り粘土が丁寧に巻かれる。

K123号甕棺墓(Fig.76)　全体を上部の削平と上棺側を攪乱によって大きく失っているが、上棺、下棺ともに小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。埋置はほぼ水平で、接口部に厚く黄青白色粘土をおいて丁寧に埋葬している。

K124号甕棺墓(Fig.76)　削平により旧状を大きく失っているが、長辺1.1m、短辺0.8mの土壙内に小型甕２個体が重なって出土している。重複する甕の下側のものは胴部の突帯以上を打ち欠いた中型甕の可能性がある。また、上側のものは底部を抜いた小型甕で、これらを容れ子状に重ねて甕棺墓としたものと考えられる。

K125号甕棺墓(Fig.76)　上棺には大型の鉢、下棺には大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。上半部の削平は著しい。棺の埋置はほぼ水平になされている。

K126号甕棺墓(Fig.77)　大型の甕を使用する単式の成人甕棺墓である。上部をかなり削平されているが、木蓋などを使用したと考えられる。また、墓壙内の埋土に破壊された丹塗土器が出土している。

K127号甕棺墓(Fig.77)　長径が１m強、短径0.8m程度の楕円形の墓壙を持ち、上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。

K128号甕棺墓(Fig.77)　長径が1.2m程の円形墓壙に小型の甕が単体で出土した。上半はかなりの削平をうけていることから複棺であった可能性もある。

K129号甕棺墓(Fig.77)　長径で0.8m、短径で0.6mを測る長円形の墓壙に上下棺共に小型の甕を使用する接口式の小児甕棺墓であろう。

K130号甕棺墓(Fig.77)　長径が2.7m、短径が1.8mの長円形をなす墓壙に、上棺が鋤先状口縁を有する大型壷、下棺に大型甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。

K131号甕棺墓(Fig.77・78)　長径1.7m、短径1.5m、深さ0.25～0.5m以上を測る隅丸の方形土壙である。土壙は南から北側に深くなり、南側で大型甕のほぼ1／4個体、北側の土壙状遺構内で中型の甕、広口壷、鋤先状口縁を有する壷それから小型の鉢の４個体が出土した。北側土壙内の土器はセットとなるものであると考えられる。

出 土 土 器

土器(1)は、大型の甕で、突帯以下の下半部を欠失する。口縁部は内側への張り出しが大きく、上端は隆起する。胴部中位と考えられる位置にしっかりした２条の三角突帯を巡らせる。

器色は、外面暗赤褐色で、内面暗褐～暗赤褐色を呈する。器面は、内外面共に磨滅が著しい。器面調整は、内面の一部に粗いタテハケメが残る。焼成は軟質で、 胎土はやや粗である。復元口径54.8cm、残存高68.8cmを測る。

土器(2)は、口縁断面がＬ字形をなす小型甕である。器色は、内面が暗褐色、外面が暗赤褐色を呈し、外面に広くススが付着する。また、内底部には煮沸による残滓が多く残る。

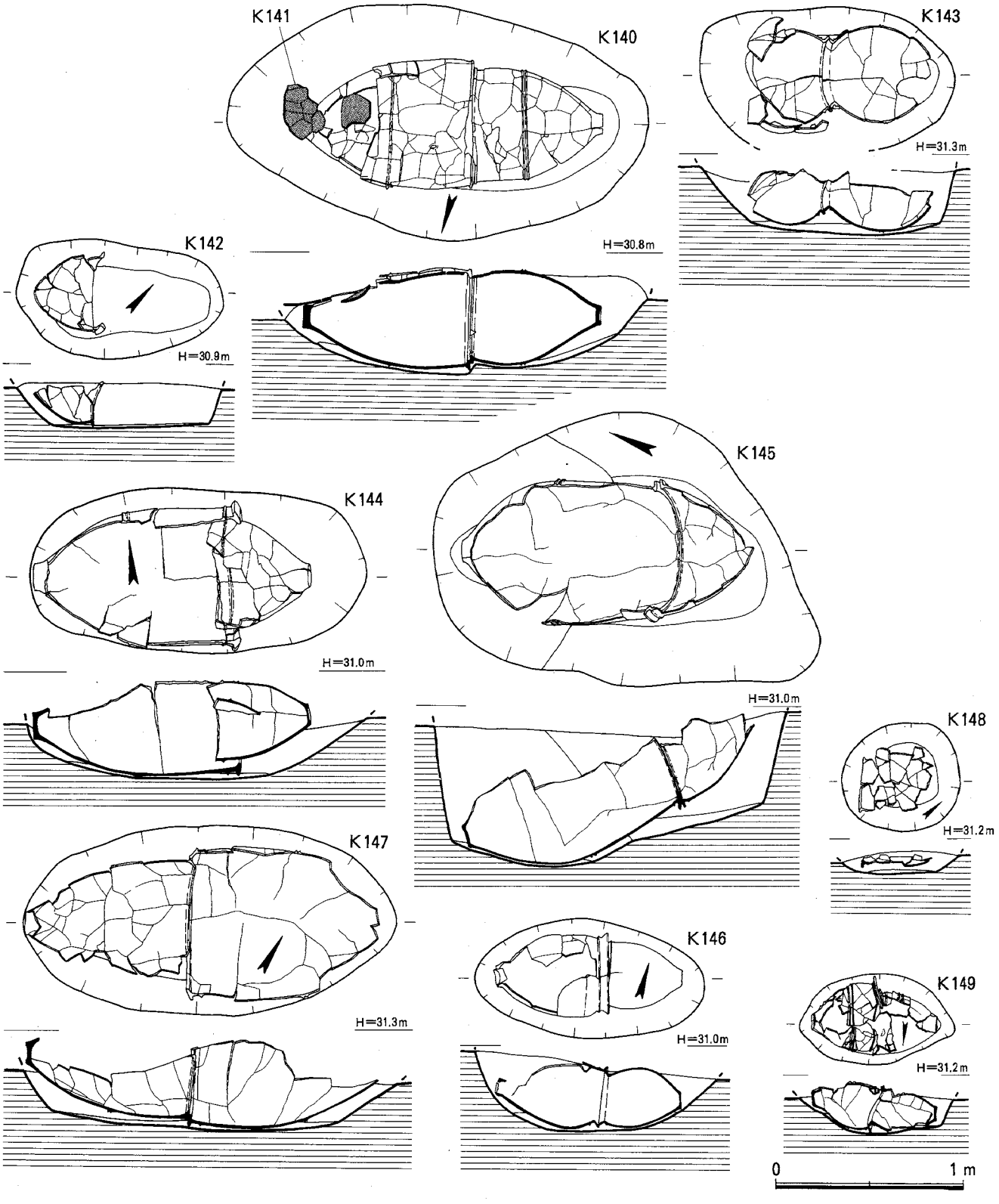


Fig.79　第４次MN地区K140～149号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

器面調整は、外面に細かいタテ方向のハケメが残る。焼成は堅緻で、 胎土はやや粗である。粗砂を大量に混入する。口縁部径31cm、底部径9cm、器高32.5cmを測る。

土器(3)は、 広口壷である。器色は、外面・内面の口縁部分が丹塗で、内面は暗赤褐色を呈する。外面下半はヘラミガキで、外面口縁には平行沈線状の暗文を施す。焼成は堅緻で、 胎土も非常に密である。口縁部径36.2cm、底部径6.9cm、器高31.7cmを測る。

土器(4)は、 鋤先状口縁を有する中型壷である。口縁上端はやや傾斜する。胴部の最大径はかなり

上部にあり、突帯は低く、鈍いつくりである。器色は、外面黒灰～暗褐色で、内面は赤褐～暗褐色を呈する。また、外面の口縁上端部を除いて黒色顔料を塗布する。胴部突帯下に外方向からの二次穿孔が見られる。焼成は、やや不良で、 胎土は密である。細砂を多量に混入している。
口縁部径25.3cm、底部径9cm、器高38.5cmを測る。

土器(5)は、小型鉢である。口縁付近で強く屈曲する特徴をもつ。器色は、内外面共に淡赤褐色を呈し、外面下半に黒斑あり。器面は、内外共に荒れが著しい。焼成は堅緻で、胎土は密である。粗砂を多く混入する。口縁部径15cm、底部径6.5cm、器高7.5cmを測る。

K132号甕棺墓(Fig.77)　長径が1.7m、短径が0.9m、深さ0.5mを測る隅丸長方形の墓壙に大型甕を単体で使用する成人甕棺墓である。口縁部付近の空間から木蓋を利用したものと考えられる。

K133号甕棺墓(Fig.77)　上部の削平が著しく旧状を殆ど窺うことは困難であるが、中型の甕を使用する甕棺墓である。

K134号甕棺墓(Fig.77)　長径が2.7m、短径が1.1m程度のいびつな長方形墓壙に大型の甕を使用した単式の成人甕棺墓である。

K137号甕棺墓(Fig.77)　小型の壷を使用する小児甕棺墓か。上部の非常な削平のために旧状を殆ど明らかに出来ない。

K140号甕棺墓(Fig.79・80)　長径が2.2m、短径が1.2mを測る楕円形の墓壙に、上棺に中型甕、下棺に大型の甕を使用する接口式の成人甕棺墓である。ほぼ水平に埋置され、直上にK141号甕棺墓がのっている。

上 棺　やや肥厚する平坦口縁を有し、胴部突帯部を変換点にして口縁部へ絞まる中型甕である。突帯は、非常に低い2条の三角突帯である。底部は良く絞まり、外底部は上げ底となる。器色は、外面淡赤褐色～暗褐色で、内面暗赤褐色～暗褐色を呈する。外面は黒色顔料を塗布しており、内面もまた可能性がある。焼成は堅緻で、胎土は密である。石英・長石・赤色粒を混入する。口縁部径54.5cm、底部径7.5cm、器高68.3～67.2cmを測る。

下 棺　胴部が突帯を変換点にして緩く絞まる大型甕である。胴部中位には低い1条の三角突帯を巡らす。突帯部には外方からの二次穿孔が見られる。器色は、外面が赤褐色～暗赤褐色で、内面は黒～黒灰色を呈する。外面突帯部には大黒斑があり、内面は殆ど黒斑となる。また、内外面共に黒色顔料を塗布する。外面下半部にはヘラナデ調整が残るが、他は器面の荒れがひどく調整は不明である。焼成は堅緻で、胎土は密である。石英・長石の均一な細砂を多く混入する。口縁部径63.1cm、底部径15cm、器高88.5～89cmを測る。

K141号甕棺墓(Fig.79)　K140号甕棺墓上に墓壙があり、これより後出の所産であるが、破砕状態であり、詳細は不明である。

K142号甕棺墓(Fig.79)　長径が1.1m、短径が0.6mを測る隅丸長方形の土壙内に小型鉢1個体が出土したが、対向する空間からすれば単独棺とは考えにくく、複棺の小児甕棺の可能性が十分に考えられる。

K143号甕棺墓(Fig.79)　長径が1.4m、短径が0.8mを測る長方形土壙に、上下棺共に中型の甕を埋置する接口式の小児甕棺墓であろう。埋置はほぼ水平になされる。上半部の削平はかなり激しいものである。

K144号甕棺墓(Fig.79)　長径が1.75m、短径が0.85mを残す隅丸長方形の土壙に、上棺が中型甕の打欠き、下棺に大型甕を使用する呑口式の成人甕棺墓である。墓壙の遺存の悪さから考えると甕棺墓の残りは比較的に良好である。

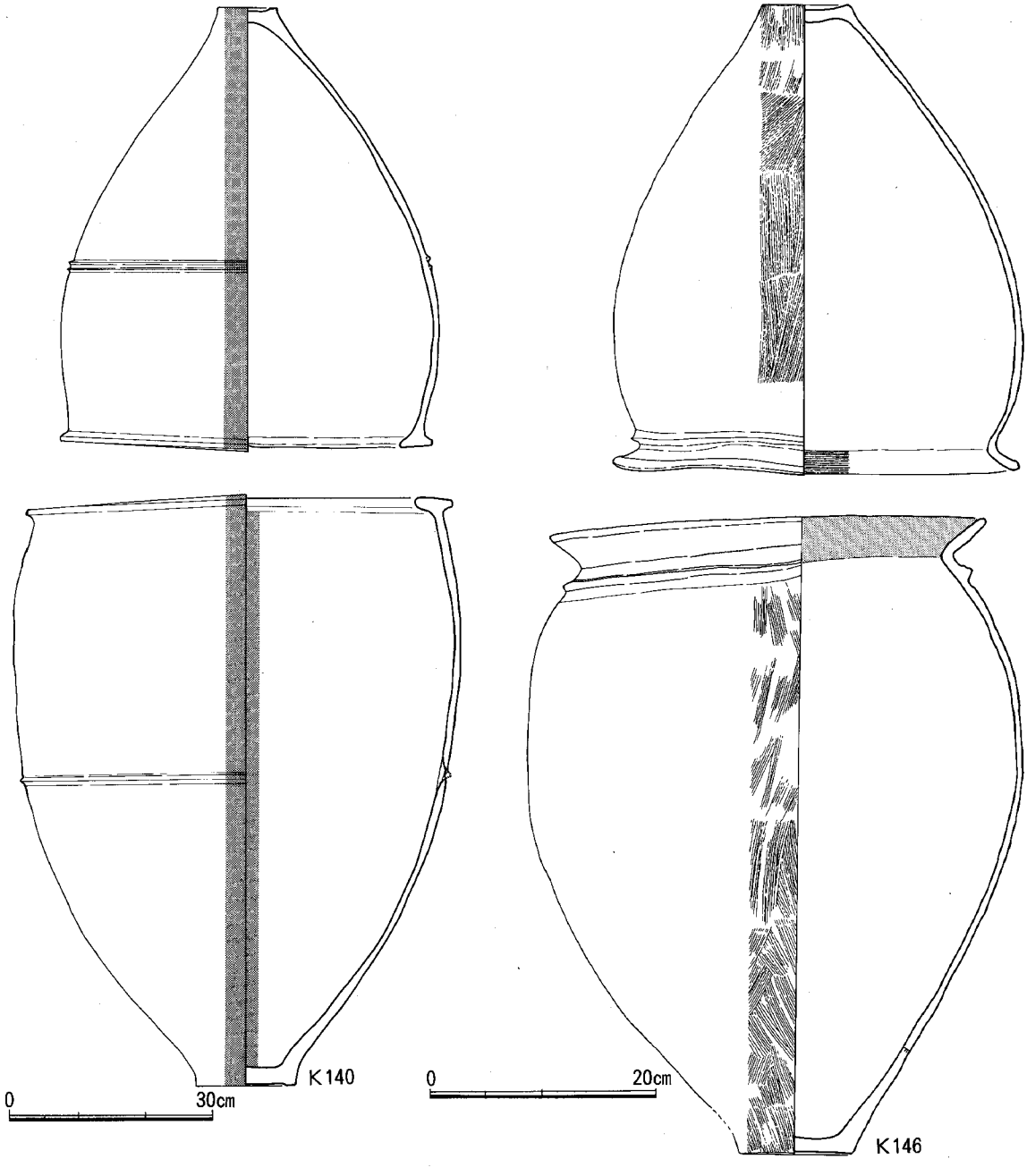


Fig.80　第４次MN地区K140・146号甕棺実測図(1/10,1/6)

K145号甕棺墓(Fig.79)　長径が2.1m、短径が1.3mを測る不整な土壙の長軸に沿って、上棺に大型鉢、下棺に大型甕を接口式に埋置する成人甕棺墓である。

K146号甕棺墓(Fig.79・80)　長径が1.2m、短径が0.6mを測る長円形の墓壙に、上下棺共に小型の甕を接口式に埋置する小児甕棺墓である。棺は、ほぼ水平に埋置される。

上 棺　口縁がく字形に屈曲する小型の甕である。口縁端部は褶曲する。器色は、内外面共に淡黄褐色を呈し、口縁部上端に２カ所黒斑が認められる。

器面調整は、外面及び口縁内面で細かいハケメ、また内面はヘラナデである。焼成は堅緻で、胎土も密である。口縁部径35.6cm、底部径7.7cm、器高42cmを測る。

下 棺　上棺よりやや大型の甕で、く字形に屈曲する口縁部直下にいびつな三角突帯を巡らす。器

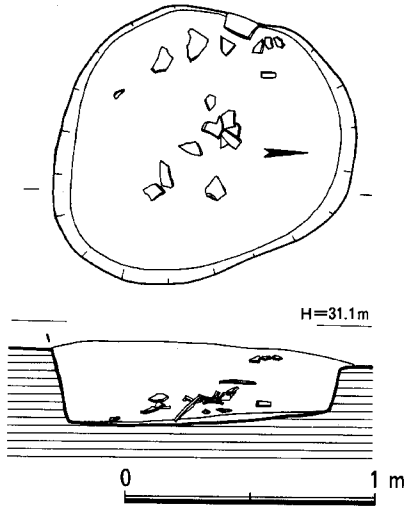


Fig.81　第４次MN地区SK11号土壙出土状況実測図(1/30)

形のゆがみが著しい。器色は内外面共に淡黄褐色を呈し、内面に一部丹塗の痕跡がある。外面もその可能性がある。器面調整は、外面タテハケメで、一部にヘラナデが認められる。

焼成はやや軟質で、胎土は粗である。石英粗砂・褐色粒を多量に混入する。口縁部径38.9cm、底部径10cm、器高59cmを測る。

Ｋ147号甕棺墓(Fig.79)　長径2.0m、短径1.0mを測る墓壙を有し、上下棺共に大型の甕を接口式に埋置する成人甕棺墓である。棺は、殆ど水平に埋置される。

Ｋ148号甕棺墓(Fig.79)　上部の削平によって殆ど旧状を失っているが、小型の甕を使用する小児甕棺墓と考えられる。複棺の可能性も十分に考えられる。

Ｋ149号甕棺墓(Fig.79)　長径が0.8m、短径が0.4mを測る長方形の墓壙を有し、上下棺共に小型の丹塗甕を使用する接口式の小児甕棺墓である。墓壙の遺存状況からすれば、甕棺の残りは良い。

〔 祭 祀 土 壙 〕

ＳＫ11号土壙(Fig.81)　長径が1.25m、短径が1.05m、深さ0.35m程度の不整な円形土壙から丹塗りの鋤先状口縁を有する小型壷の口縁部・胴部破片が投入されている。

小結

これまでＭＮ地区の個別遺構について説明を加えて来たが、以下ではこの地区の墓地の変遷についてドットマップを作成したので(Fig.82)各期について動向を考えてみることにする。マップの西端部はかつて野方・金武線建設に伴って調査された区域である。同一の墓地であるので参考のためにＭＮ区に含めて作成した。

〔**中期前半**〕　この時期ではすでに幅４～５ｍ、延長で20m強の細長いベルト状に墓地が形成されており、あまりいくつものブロック状に広がらない特徴がある。

〔**中期中頃**〕　分布状況は前時期を踏襲するが、西側・南西側でブロック状に固まる区域が出現し、全体的に西側に密度が濃くなる傾向にある。

〔**中期後半**〕　最も甕棺墓が盛行する時期であるが、この地区では該期の甕棺は非常に散発的となり、主要な分布域は西側端の野方・金武線調査区に集中していることが明らかとなった。

〔**後期前半**〕　全体的に墳墓の基数が減少する時期であるが、西側端に集中する傾向は殆ど変わりがない。

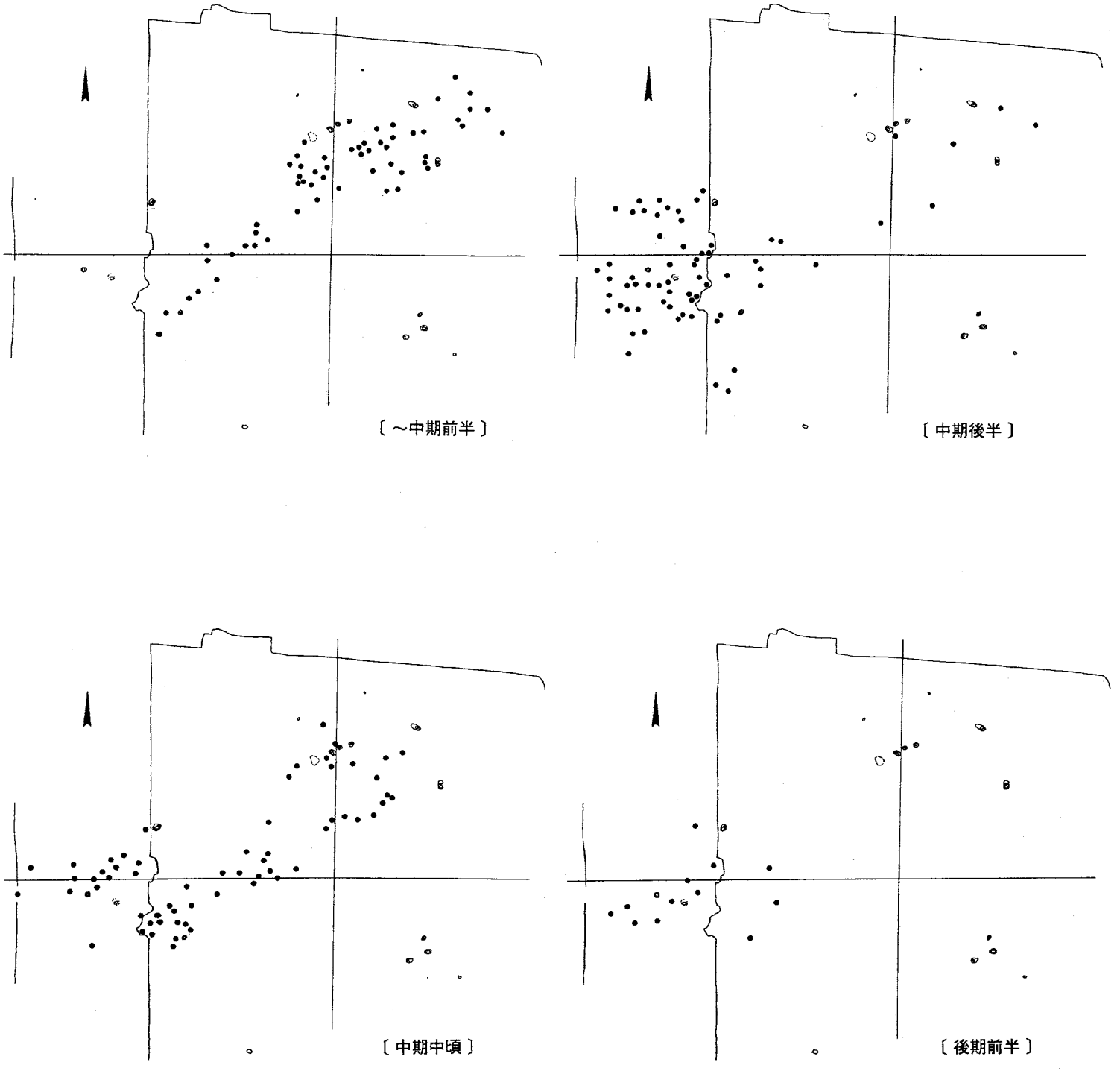


Fig.82　第 4 次MN地区弥生時代遺構変遷図

Tab.5　第４次調査弥生時代墳墓一覧表

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期（型式）	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K01			●		甕	壷	小型	N-53-E	60	中期前半	M・N－16・17
K02	●?				／	壷	小型	N-46-E	30	中期前半	黒塗
K03		●			壷	甕	小型		41	中期前半	
K04		●			鉢	甕	小型	N-75-E	－	中期後半	
K05				●	鉢	甕	大型	N-64-E	－	前期末	
K06	●?				／	壷	小型	N-48-E	62	中期前半	
K07							小型	N-90-W	－	?	
K08	●				鉢	甕	大型	N-70-E	－	中期前半	
K09						壷?		N-58-W	－		盗難
K10		●			壷	甕	小型	N-66-E	15	中期前半	
K11						甕	中型	N-3-E	－	?	破片
K12						甕	小型	N-80-E	－	中期初頭	
K13		●			甕	甕	小型	N-84-E	－	中期前半	
K14				●	甕	甕	小型	N-75-E	10	中期後半	
K15		●			甕	甕	小型	N-48-E	－	中期前半	
K16		●			甕	甕	小型	N-76-W	－	中期前半	
K17		●			甕	甕	小型	N-74-E	－	中期前半	
K18	●				／	甕	小型	N-67-E	－	中期前半	
K19	●				／	甕	小型	N-62-E	－	中期前半	
K20		●			甕	甕	大型	N-83-E	－	中期前半	
K21		●			甕	甕	大型	N-66-E	－	中期中葉	
K22		●			鉢	甕	大型	N-18-E	17	中期中葉	
K23	●				／	甕	中型	N-65-E	－	中期前半	
K24				●	甕	甕 甕	大型	N-69-W	8	中期中葉	3連甕棺
K25		●			甕	甕	小型	N-69-E	－	中期中葉	
K26	●				／	甕	大型	N-69-E	9	中期中葉	
K27		●			甕	甕	大型	N-66-E	18	中期中葉	
K28	●?				／	甕	小型	N-60-E	－	中期前半	
K29		●			鉢	甕	大型	N-74-E	－	中期前半	
K30		●			鉢	甕	小型	N-61-W	－	中期前半	
K31		●			甕	甕	小型	N-69-E	15	中期前半	
K32	●				／	甕	小型	N-71-E	－	中期前半	
K33		●			鉢	甕	大型	N-65-E	－	中期前半	
K34	●				／	甕	小型	N-89-E	0	中期前半	
K35	●?				／	壷	小型	N-63-E	－	?	
K36											
K37		●			甕	壷	小型	N-60-E	4	中期前半	
K38											
K39		●			甕	甕	小型	N-21-W	13	中期前半	
K40		●			甕	甕	小型	N-87-E	4	中期前半	
K41	●?				／	甕	小型	N-64-E	－	中期中葉	
K42		●			甕	甕	小型	N-76-E	10	中期前半	
K43				●	甕	甕	小型	N-67-E	－	中期中葉	
K44		●			甕	甕	中型	N-56-E	－	中期中葉	
K45	●				／	甕	小型	N-22-E	2	中期前半	
K46		●			甕,甕,甕,甕		大型	N-58-E	－	中期中葉	
K47	●				／	甕	小型	N-85-E	－	中期前半	
K48	●?				／	甕	小型	N-63-E	－	中期中葉	
K49		●			鉢	甕	大型	N-82-E	－1	中期後半	
K50		●			鉢	甕	大型	N-80-W	0	中期中葉	
K51											
K52			●		傘蓋	甕	小型	N-77-E	－	中期後半	
K53		●			甕	甕	小型	N-90-E	－	中期後半	
K54	●				／	甕	小型	N-62-E	－	中期前半	
K55				●	甕	甕	小型	N-12-W	25	後期前半	
K56		●			鉢	甕	大型	N-73-E	4	中期中葉	
K57		●			鉢	甕	大型	N-76-E	－	中期前半	
K58		●			壷	甕	小型	N-42.5-E	－	中期後半	
K59		●			甕	甕	小型	N-55-W	6	中期後半	
K60											土師器
K61											
K62											
K63		●			鉢	甕	小型	N-50-E	－	中期前半	

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺									
		接口	覆口	呑口	上棺	下棺					
K64		●			鉢	甕	大型	N-80-E	0	中期中葉	
K65		●			甕	甕	小型	N-54-E	14	中期中葉	
K66	●				／	甕	中型	N-62-E	—	中期中葉	
K67				●	壷	甕	小型	N-54-E	13	中期前半	
K68		●			甕	甕	小型	N-51-E	12	中期前葉	
K69		●			鉢	甕	大型	N-62-E	3	中期前葉	
K70		●			甕	甕	小型	N-70-E	—	中期前半	
K71	●				／	甕	大型	N-55-E	2	中期中葉	
K72		●			甕	甕	大型	N-57-E	0	中期中葉	
K73		●			高杯	甕	小型	N-71-W	—	中期前半	
K74		●			甕	甕	大型	N-70-E	7	中期前半	
K75	●?				／	甕	小型	N-70-E	—	中期前半	
K76		●			鉢	甕	小型	N-18-E	7	中期前葉	
K77		●			鉢	甕	小型	N-72-E	—	中期前半	
K78	●?				／	壷?	小型	N-18-E	—	?	
K79		●			鉢	甕	中型	N-90-E	6	中期中葉	
K80		●			甕	甕	大型	N-70-E	5	中期中葉	
K81		●			鉢	甕	大型	N-78-E	2	中期中葉	
K82		●			甕	甕	小型	N-36-E	2	中期前半	
K83	●?				／	?		N-59-E	—	中期中葉	
K84											
K85	●				／	甕	小型	N-59-E	22	中期後半	
K86			●		壷	壷	小型	N-82-E	46	中期前半	
K87		●			甕	甕	小型	N-82-E	−3	中期前半	
K88		●			甕	甕	中型	N-83-E	7	中期前半	
K89		●			鉢	甕	小型	N-43-E	−7	中期前葉	
K90				●	甕	甕	小型	N-55-E	30	中期前葉	
K91		●			甕	甕	小型	N-76-E	9	中期前半	
K92		●			甕	甕	小型	N-67-E	—	中期前葉	
K93		●			鉢	甕	小型	N-66-E	18	中期前葉	
K94		●			鉢	甕	大型	N-19-W	—	中期中葉	
K95				●	甕	甕	大型	N-35-E	−2	中期後半	
K96		●			鉢	甕	大型	N-59-E	0	中期中葉	
K97	●?				／			N-73-W	—		
K98	●?				／	甕	大型	N-38-W	—	中期中葉	
K99	●?				／	甕?		N-69-W	—		祭祀土壙か
K100		●			鉢	甕	大型	N-66-E	5	中期中葉	
K101		●			甕	甕	小型	N-57-W	−5	中期前半	
K102			●		甕	甕	小型	N-61-E	1	中期前半	
K103		●			甕	甕	小型	N-56-E	5	中期前葉	
K104	●				／	甕		N-80-W	0	中期後半	供献土器あり。
K105		●			鉢	甕	大型	N-19-E	7	中期中葉	
K106	●?				／	壷		N-79-E	—	中期後半	祭祀土器
K107		●			甕	甕	小型	N-53-W	6	中期中葉	
K108				●	甕	甕	大型	N-61-E	14	中期中葉	
K109			●		甕	甕	中型	N-50-E	7	中期前半	
K110		●			甕	甕	小型	N-2-W	3	中期中葉	
K111		●			鉢	甕	大型	N-66-W	—	中期後半	
K112		●			甕	甕	中型	N-56-W	—	中期中葉	
K113		●			鉢	甕	大型	N-80-E	12	中期中葉	
K114		●			鉢	甕	大型	N-70-W	0	中期中葉	
K115		●			鉢	甕	大型	N-66-W	25	中期後半	
K116		●			鉢	甕	小型	N-75-E	—	中期前半	
K117				●	甕	甕	中型	N-72.5-W	5	中期前半	
K118		●			鉢	甕	大型	N-60-E	—	中期中葉	
K119	●				／	甕	小型	N-33-W	7	中期中葉	
K120	●?				／	甕	中型	N-62-E	—	中期中葉	
K121		●			鉢	甕	大型	N-70-E	—	中期中葉	
K122		●			鉢	甕	大型	N-7-W	4	中期中葉	
K123		●			甕	甕	小型	N-64-E	3	中期中葉	
K124				●?	甕	甕	小型	N-38-E	—	中期中葉	
K125		●			鉢	甕	大型	N-61-W	4	中期中葉	
K126	●				／	甕	大型	N-50-W	20	中期後半	
K127		●			甕	甕	小型	N-78-E	—	中期中葉	
K128	●				／	甕	小型	N-38-W	—	中期前半	

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期（型式）	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺					
		接口	覆口	呑口							
K129		●			甕	甕	小型	N-7-W	−	中期中葉	
K130		●			壷	甕	中型	N-84-E	14	中期中葉	
K131	●?				／	甕	中型	N-49-E	−	?	祭祀土壙・副葬土器4個体あり
K132	●				／	甕	大型	N-84-E	0	中期後葉	
K133	●				／	甕	大型	N-43-W	−	中期後半	
K134	●				／	甕	大型	N-46-E	−	中期後半	
K135											土師器
K136											土師器
K137	●				／	壷	小型	N-60-W	−	?	
K138											土師器
K139											土師器
K140		●			甕	甕	大型	N-73-E	−	中期前半	
K141	●?							N-73-E	0	?	K140より新
K142	●?				／	鉢?	小型	N-48-E	−	中期前葉	
K143		●			甕	甕	中型		−	中期後半	
K144				●	甕	甕	大型	N-85-W	2	中期中葉	
K145		●			鉢	甕	大型	N-23-W	23	中期後半	
K146		●			甕	甕	小型	N-72-E	3	後期初頭	
K147		●			甕	甕	大型	N-59-E	0	中期中葉	
K148	●				／	甕	小型	N-40-E	−	中期前半	
K149		●			甕	甕	小型	N-86-E	−5	中期前半	丹塗磨研

3節　第6次調査

2号支線道路

飯盛吉武圃場整備事業の最終年度、昭和60年（1985）の第6次調査では、弥生時代の墓地を大石地区と2号支線道路の2か所で検出し、発掘調査を行ったが、これまでに報告しているのは、大石地区のみである。大石地区は、甕棺墓202基、木棺墓8基、土壙墓12基、祭祀遺構5基からなる共同墓地であるが、「吉武遺跡群Ⅷ」では、青銅器や石剣、石鏃、玉類、土器等の遺物を出土した甕棺墓11基、木棺墓4基、「吉武遺跡Ⅹ」では、弥生時代前期末～中期前半の甕棺47基、「吉武遺跡群Ⅵ」では、中期の甕棺で保存状態のよい甕棺墓11基を報告したにすぎない。甕棺の接合、復元、実測、撮影には、整理作業員の人的配置と並んで、作業スペースの確保が前提となる。しかしながら同時に他の遺跡の整理、報告書作成などの業務を進めている現状では、年間に50個体の甕棺を復元するのが精一杯である。甕棺墓の多くは、2個の大型甕を用いた複棺なので、基数としてはその半数にとどまることになる。

吉武遺跡の今後の整理、報告書発行計画では、今回で弥生時代を一応終了し、平成12年度より旧石器、縄文時代をまとめ、古墳時代から古代、中世と順に報告する計画になっている。このため、本報告書では、未報告となっている2号支線道路と大石地区の弥生時代の墓地とその関連遺物について取り上げることとした。またも不完全という非難を受けることだろうが、先のような事情から、復元できたのは2号支線道路の21基39個体の甕棺と祭祀遺構の土器類、そして大石地区の1基2個体の甕棺のみである。

第6次調査時の圃場整備事業の総面積は、106,000㎡という広大な面積であったことから、保存を前提にして設計変更の協議を重ねた。発掘調査は、どうしても削平される部分に限って行うことにし、南北80m、東西300mの24,000㎡を調査対象地として絞り込んだ。

この調査対象地は、東西方向の長方形であるが、中央に南北方向の幅7mの2号支線道路道路が計画され、これを境にして西を2区、東を3区と呼んだ。また長方形の北辺は、第7号支線道路、南辺は2号排水路、東辺は第1号幹線道路、西辺は県道野方金武線に接している。つまり、北に「弥生墳丘墓」の樋渡地区、南に「早良王墓」の高木地区に挟まれている。これら二つの墓地が営まれた中心時期は、高木地区が弥生前期末、樋渡地区が弥生中期後半であることから、両時期の間隙を埋める墓地が発見できるのではと期待された。

前年の高木地区では、その豊富な副葬品にマスコミ各社は異常なほどの報道合戦を繰り広げた。研究者だけでなく広く市民の関心を呼び、地元の理解と協力を得て、埋め戻し保存という幸いな結果となった。樋渡地区の墳丘墓に引き続いて、高木地区の王墓の発見は、弥生時代の権力者の成長や社会構造の解明を一気に進めるものと思われた。しかし私たち調査担当者にとって、高木地区が脚光を浴びれば浴びるほど、逆に何の遺物も持たない、何も出ない共同墓地の存在を無視できなくなってきた。

高木地区と並行して発掘していた圃場整備事業範囲の南西隅、L～N-15～16グリッドの三十六地区では、500基を超す共同墓地を確認し、さらにこの墓地は、北東方向にのびると予想された。この墓地は、鉄製素環頭刀を持っていたK67以外には、まったく遺物がない。甕棺に埋葬された人間が、どのような階層の人たちであったのかまだ明らかにできないが、何も持たないこの共同墓地こそ、高木地区や樋渡地区の厚葬墓を支えていた人たちであったと考えたからである。

吉武遺跡の地域的な歴史的変遷、そして弥生社会の解明に迫るにために、何も持たない共同墓地の精査と評価が第6次調査の課題として残されていたのである。

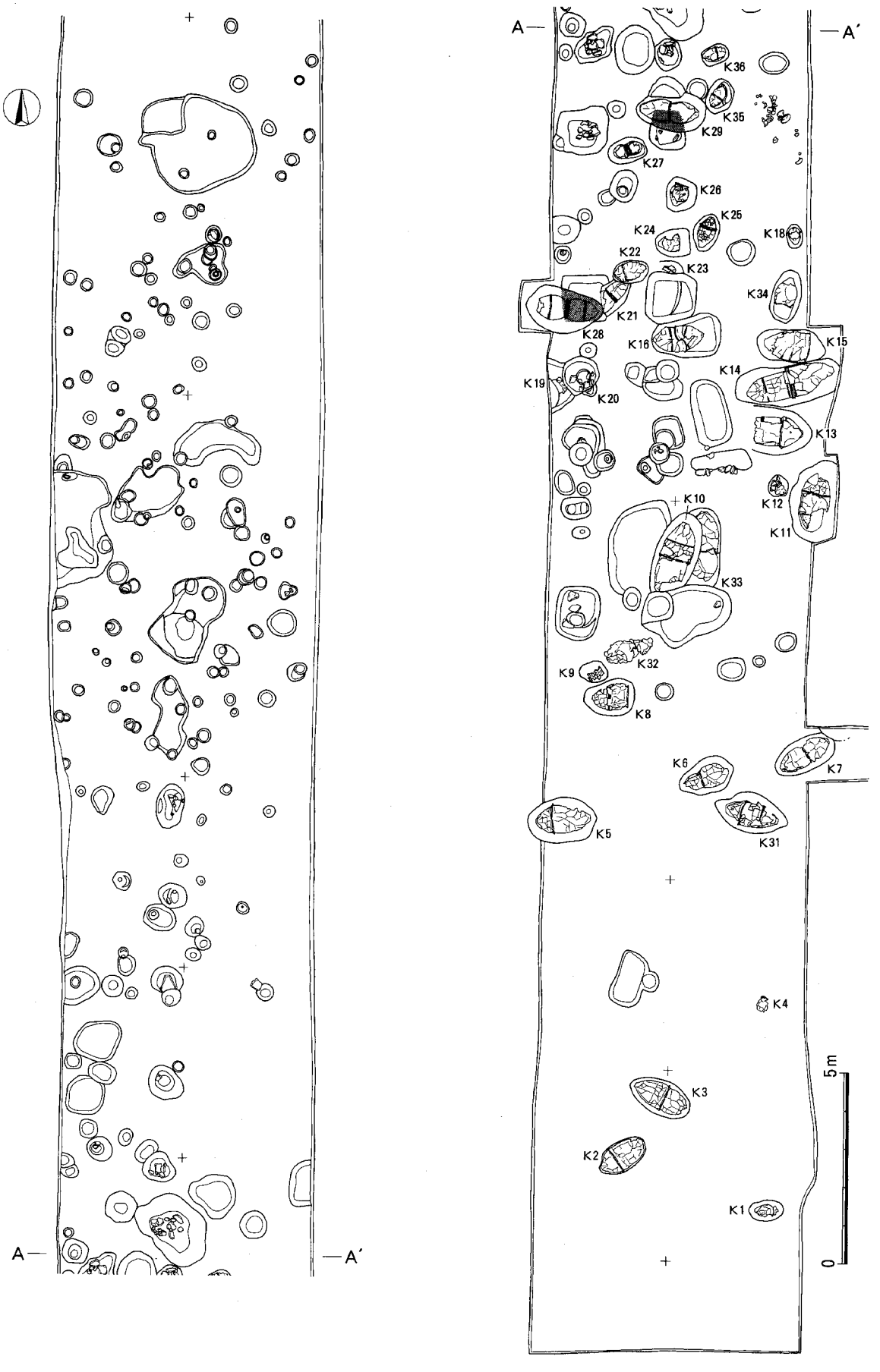


Fig.83　第6次2号支線道路遺構配置図(1/200)

さらにもう一つ重要な課題があった。連日のごとく押し寄せていた見学者の波は、高木地区の発掘終了ともにわずか一月で引き潮のように去り、もとの静かな田園風景がもどった。将来の高木地区の史跡指定、公有地化、保存環境整備に向けて、地元をはじめとする市民の関心をいかに持続、育てていくか、調査成果を風化させず、さらに研究や分析、検討を進め、学術的な質を高めるかが重要である。福岡市博物館の前身である福岡市歴史資料館で昭和61年に企画された「早良王墓展」も、その目的の一つとして開催されたものである。埋蔵文化財課では、調査組織を整備、強化して、力武卓治、下村智、常松幹雄、加藤良彦の４人体制で取り組むことになった。毎月、地元組合との会合を開き、発掘の進捗状況や途中経過を報告するとともに、地元雇用の発掘作業員の皆さんに、掘り出している遺構や遺物を日常的に説明し、吉武遺跡の重要性を理解していただくように努めることにした。

２号支線道路は、幅７ｍ、長さ62ｍあり、その南端は１号幹線道路と直角に交わる。その南北軸が、圃場整備事業の全域に設定したグリッドのJラインより西側20ｍに当たる。発掘調査は、南端から水田耕作土を重機で剥がし、遺構の検出を行った。遺構は、耕作土直下で現れ、南端より中央部にかけて図に示したように35基の甕棺墓と１基の祭祀遺構を確認した。中央部より北側にかけては大小のピットがあり、巻頭図版のようにグリッド軸と並行に規則的に並んでいるものもある。南側で行われた第４次調査の１号幹線道路では、古代末から中世にかけての瓦類、越州窯青磁、円面硯などが発見されていることから、その関連遺構と思われた。さらに２号支線道路に引き続き行った３区では、これらの遺構を方形に取り囲むような溝が確認され、八稜鏡、「寺」の墨書土器などの遺物が発見され、先の予想を補強することになった。

２号支線道路で検出した35基の甕棺墓と１基の祭祀遺構の時期や配置は、南西側130ｍにある三十六地区の共同墓地と大きな違いはない。弥生中期後半立岩式のK28号甕棺墓からは、鉄剣と櫛と思われる遺物が発見されたが、その他は無遺物である。両地区の間が未調査なので断定はできないが、この２地点は繋がって南西から北東方向の細長い共同墓地を形成していたのであろう。この共同墓地は、さらに北東方向にのびる可能性があり、甕棺墓の基数・墓地の面積は、厚葬墓の樋渡・高木地区を遙かに凌駕するものと予想された。私たちは、この共同墓地を親しみと、期待を込めて「甕棺ベルト」、「甕棺ロード」と呼ぶようにした。

２号支線道路出土甕棺墓一覧

No.	単棺	組み合わせ			棺の器種		規模	埋置方位	埋置角度	時期	No.	単棺	組み合わせ			棺の器種		規模	埋置方位	埋置角度	時期
		接口	覆口	挿入	上棺	下棺							接口	覆口	挿入	上棺	下棺				
1		○			鉢	甕	小型	N-88°-W	25°	中期後葉	19	○					甕		N-65°-E	5°	
2		○			鉢	甕	大型	N-56°-E	6°	中期後葉	20	○					甕	小型	N-30°-E	11°	
3		○			甕	甕	大型	N-67°-W	6°	中期中葉	21		○			甕	甕	小型	N-52°-E	9°	中期中葉
4		○			甕	甕	小型	N-21°-E	18°	中期後葉	22		○			壺	甕	小型	N-74°-E	5°	中期中葉
5		○			鉢	甕	大型	N-85°-E	9°	中期中葉	23		○				甕	小型	N-37°-E		
6		○			甕	甕	大型	N-67°-E	3°	中期中葉	24	○					甕	小型	N-85°-E	19°	
7		○			甕	甕	大型	N-59°-E	3°	中期中葉	25		○			鉢	甕	小型	N-20°-E	4°	中期中葉
8	○					甕	大型	N-87°-E	8°	中期後葉	26	○					甕	小型	N-22°-E	7°	中期後葉
9	○					壺	小型	N-58°-E	4°	中期後葉	27		○			壺	壺	小型	N-72°-E	1°	中期後葉
10		○			甕	甕	大型	N-19°-E	1°	中期中葉	28		○			甕	甕	大型	N-83°-W	4°	中期後葉
11		○			鉢	甕	大型	N-12°-E	11°	中期後葉	29		○			甕	甕	大型	N-86°-W	6°	中期後葉
12	○					壺	小型	N-58°-W	42°	中期後葉	31		○			鉢	甕	大型	N-74°-W	3°	中期中葉
13		○			鉢	甕	大型	N-87°-W	2°	中期中葉	32		○			甕	甕	大型	N-71°-E	10°	中期後葉
14		○			甕	甕	大型	N-72°-E	3°	中期中葉	33				○	甕	甕	大型	N-1°-E	4°	中期後葉
15	○					甕	大型	N-82°-W	22°	中期中葉	34	○					甕	小型	N-16°-E	9°	中期中葉
16		○			甕	甕	大型	N-84°-E	1°	中期中葉	35		○			甕	甕	小型	N-31°-E	1°	中期中葉
17	○					甕	小型		1°		36		○			甕	甕	小型	N-74°-W	6°	中期中葉
18		○			高坏	甕	小型	N-9°-W	20°	中期後葉											

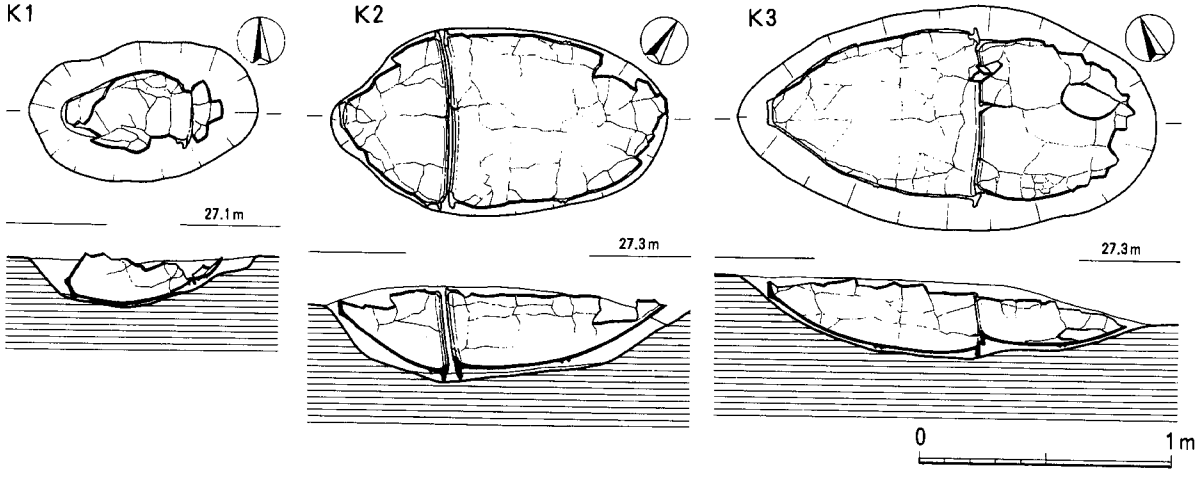


Fig.84　K1～3号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K１号甕棺墓　調査区のもっとも南隅で検出した小児棺で、甕棺ベルトの南縁に当たる。墓壙は東西方向の楕円形で、壙底は西に傾斜している。上棺は壺の頸部を打ち欠き、下棺の小型甕の口縁部に合わせて東側から埋置している。

K２号甕棺墓　墓壙は、上部が削平されている。上棺は、T字形口縁部の鉢。下棺は、高さ90cm前後の甕。本来は接口式だったのであろう。

K３号甕棺墓　上、下棺ともに同じような器形の甕を用い、接口式にして、ほぼ水平に埋置。口径の小さい東棺を、壙底が高いことなどから上棺とした。

上　棺　復元口径50.8cm、胴部最大径56.6cm、残存器高53.7cm。胴部中位よりやや上方に張りがあり、T字形口縁部が付く。外端部は、強く横ナデして口唇状となっている。胴最大径部に２条の三角形凸帯を巡らしているが、背が低く、また接近している。器面の調整は、内外面ともナデ調整。内外面の色調は、黄色味を帯びた褐色である。口縁部を含めて８段の粘土帯が観察でき、その幅は、約７～11cm。

下　棺　復元口径62.4cm、底径11.1cm、器高80.6cm。底部は、やや上げ底気味で、胴部中位まで外反しながら立ち上がり、口縁部近くでわずかに内傾する器形。口縁部は、T字形で、外端部が下方に傾斜している。胴部中位の２条の三角形凸帯は、上棺と同じように、背が低い。底部と、胴上部に小さな黒斑がある。外面の色調は明橙褐色、内面は明黄褐色。底部と口縁部を含めて、粘土帯は９段か。幅は９～12cm程度。外面の調整は、縦、斜めのナデ。

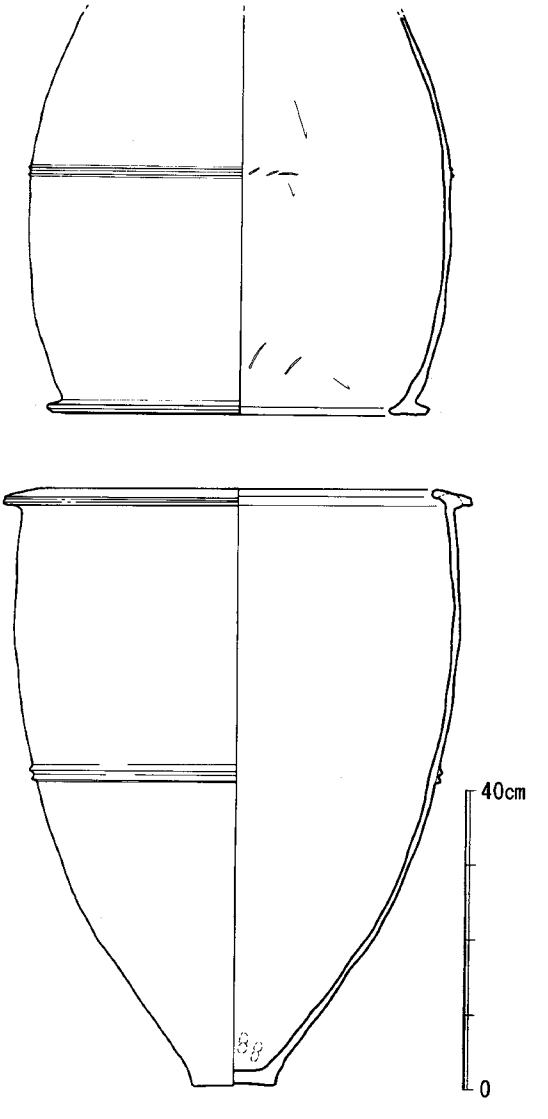
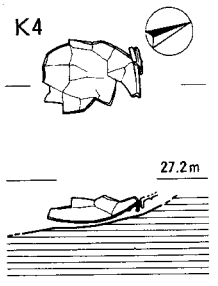


Fig.85　K3号甕棺実測図(1/10)

K４号甕棺墓　Ｋ３の北東約３ｍにある小児棺である。保存状態はきわめて悪く、墓壙の平面形は不明だが、わずかに残ったL字形の口縁部から、接口式の複棺であることがわかる。埋置は南側にやや傾いている。これらK１～４号の４基が、２号支線道路調査区の南の端に偏って分布しており、また各甕棺の埋置間隔も接近，密集していない。



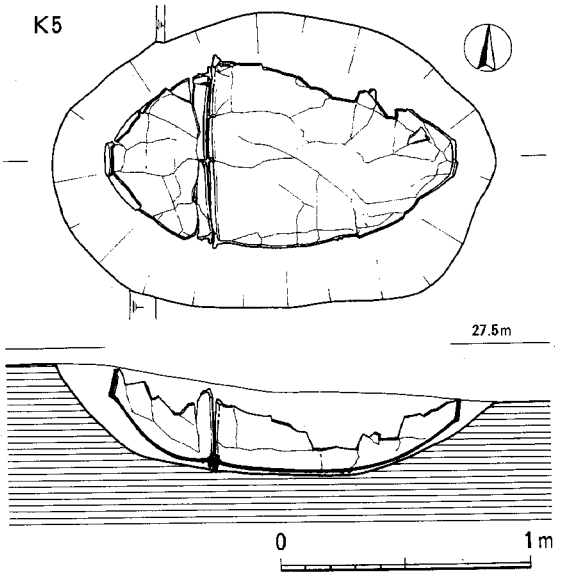


Fig.86　K4・5号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K５号甕棺墓　発掘区南端より北側６ｍにある。一部が発掘区外に出ていたが、小さく拡張して全形を確認した。長軸175cm、短軸117cmの整った楕円形の墓壙に、鉢を上棺に、甕を下棺にして、周囲に十分な余裕を持たせて埋置している。また両棺の口縁部がT字形であるために、つよく密着しており、丁寧な埋葬という印象を受ける。

上　棺　底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる。胴上位から口縁下までは、ほぼ直立した器形の鉢で、全体に丸味がある。口径66cm、底径10.6cm、器高40.2cm。口縁部は両端に強く張りだしてT字形となっている。上面は水平でなく、やや外端に傾く。口縁下に、断面三角形の凸帯が１条巡っている。色調は内外とも黄褐色。器面の調整は、縦、斜めのハケ目を全体に施した後、口縁から突帯下までは、横ナデを加えて消している。内面は、ヘラ様の工具で縦、斜めのナデ。部分的に指押痕が残る。底面中央だけに、小さい黒斑が認められる。粘土帯は、７段か。幅は５～８cmである。

下　棺　復元口径67.8cm、底径12.6cm、器高94.9cm。平底の底部から、胴部中位まで湾曲しながら立ち上がり、胴中位から口縁まではほぼ直立して、砲弾形の器形をしている。T字形の口縁部は、内端が肥厚し、丸味のある断面であるのに対し、外端はシャープな横ナデで、断面方形になっている。胴部中位の三角形凸帯は、貼付後のナデがやや雑で、段差が残っている。器面の調整は、底部付近に一部ハケ目が残るが、全体はナデ仕上げ。内外面とも赤味を帯びた茶褐色を呈し、上甕とやや色調が異なる。

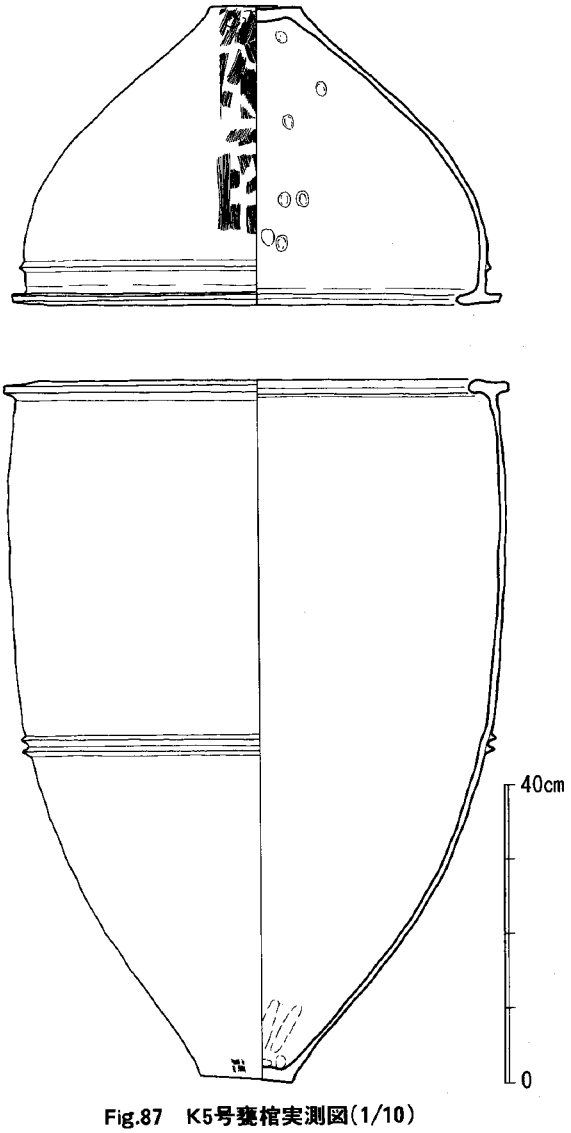


Fig.87　K5号甕棺実測図(1/10)

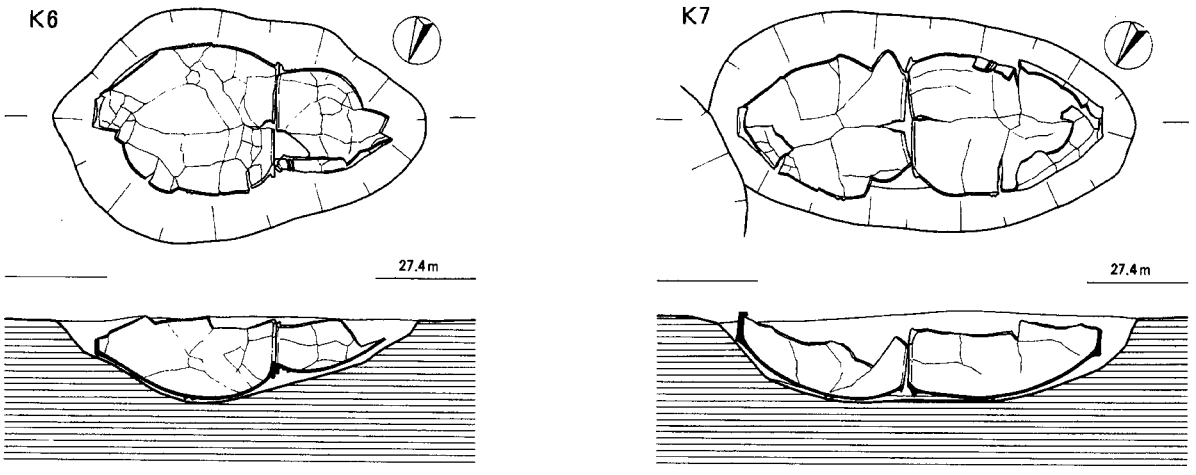


Fig.88　K6・7号甕棺墓出土状況実測図(1/30)　0　1m

K6号甕棺墓　楕円形の墓壙は、東側が膨らんでいる。これは下棺の甕の器形に合わせたものであろう。上下の棺は、器形、器高とも大きく異なる。下棺の胴部上半が、内側に異様に張り出しているために、器高の小さな上棺の口径にちょうど一致し、完全な接口式になっている。

上　棺　胴部上位に、わずかに張りを持つ中型の甕。口径37.9cm、残存器高47.1cm。外面の色調は、赤茶褐色～淡褐色。内面は、淡茶褐色～灰褐色である。口縁下に三角形凸帯2条が巡る。外面の調整は、下から上への縦方向のハケ目を全体に何度も重ねながら丁寧に施している。胎土には、1～5mm大の砂粒を多く含む。

下　棺　胴中位から上半部が、強く内傾し、倒卵形の器形となっている。口縁部も、胴部からそのまま内側に強く張り出している。口径40.2cm、底径11.3cm、最大径56.6cm、器高71.5cm。外面の色調は、褐色。内面は黄褐色。外面には、全体にススのようなものが付着。粘土帯は、10段か。弥生中期後葉の立岩式によく似た器形であるが、口縁部の作りやまだ未発達の胴部凸帯などの特徴は、中期中葉の時期であろう。

K7号甕棺墓　埋置方位は、K6にほぼ同じであるが、頭位が逆となっている。墓壙は、長楕円形で、中央に二つの甕を接口式にして埋置している。墓壙の底面は、傾きがなく水平に近いが、東棺の器形が小さく、またわずかに傾いていることから上棺と判断した。

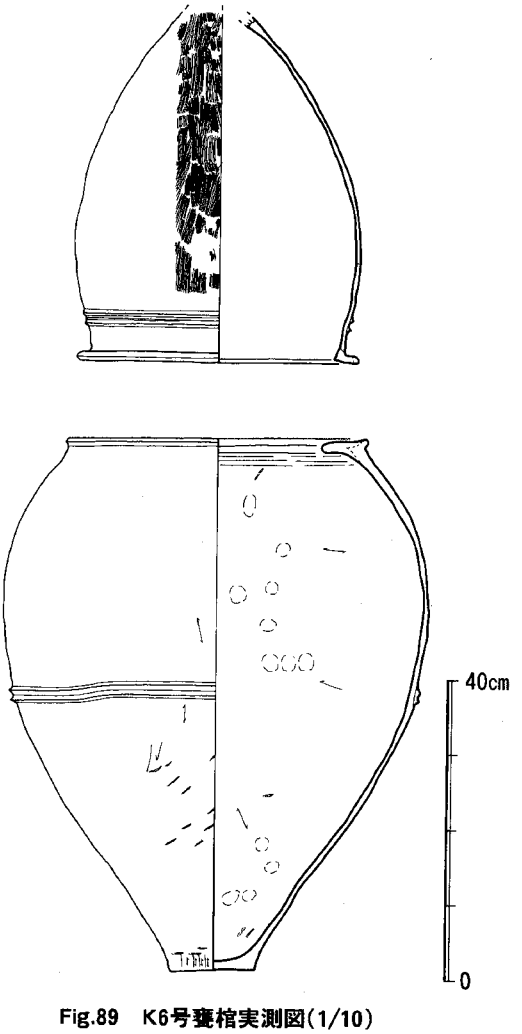


Fig.89　K6号甕棺実測図(1/10)

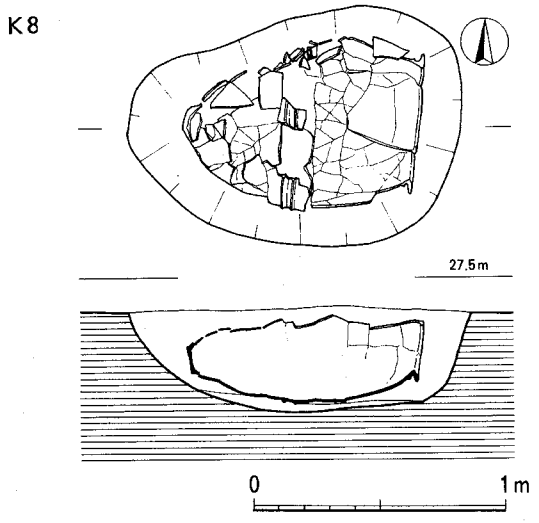


Fig.90　K8号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

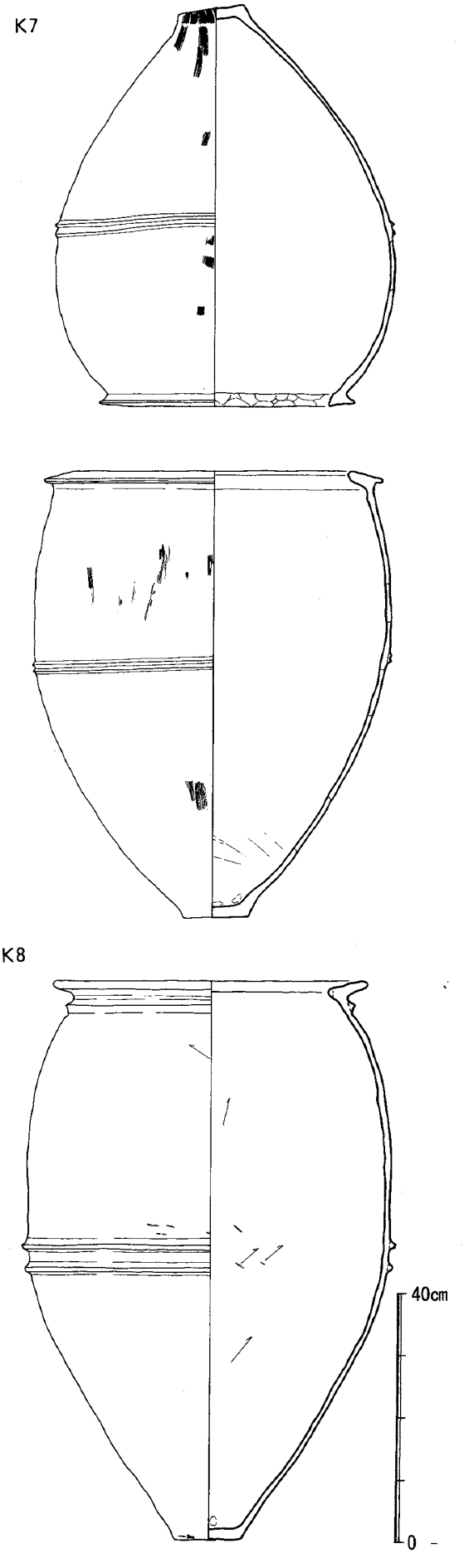


Fig.91　K7・8号甕棺実測図(1/10)▶

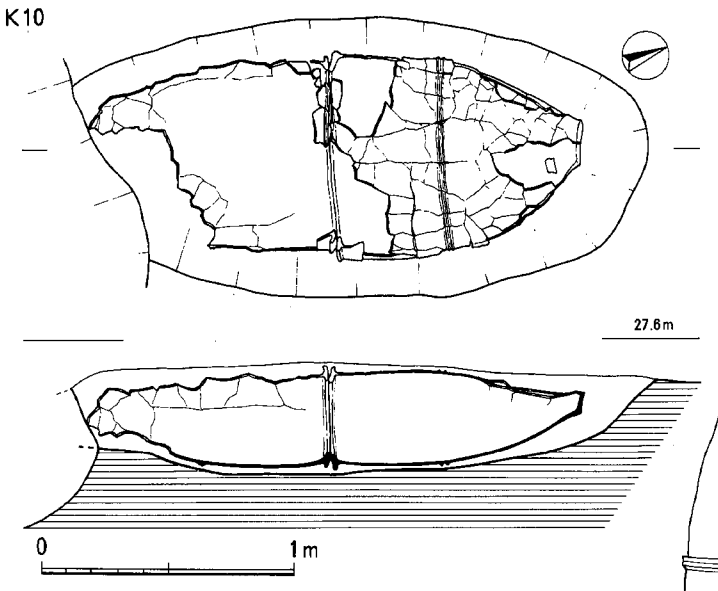
上　棺　復元口径41.5cm、器高65.6cm、底径10.8cm。口縁部がよく締まり、倒卵形をした甕。口縁部の内端は、打ち欠いているが、元は外側に少し摘み出し、内側に大きく張り出すT字形であったのであろう。底部と口縁部は、平行な作りではなく、垂直な軸とならないが、全体的には、整った器形である。器面の調整は、丁寧なナデ。外面には、ナデ消されたハケ目が残っている。外面の色調は、明橙色～薄橙色。内面は、暗灰褐色。

下　棺　口径54.9cm、底径10.7cm、器高72.8cm。口縁の締まりは弱く、最大径は胴部中位にある。内外面の色調は、赤味を帯びた茶褐色。外面の調整は、縦ハケ目の後にナデ、内面はナデ。

K8号甕棺墓　K9の壺棺と並ぶ単棺。墓壙は甕の器形に合わせて、口縁部側を幅広くしている。蓋があったと思われるが、壙底、壁にもその痕跡は認められない。水平に埋置された甕は、上面だけでなく壙底側も同じように激しく割れている。

単　棺　復元口径51.0cm、最大径60.5cm、底径10.5cm、器高90.6cm。背の高い倒卵形の器形。口縁下に三角形凸帯1条、胴中位よりやや下に台形の凸帯を2条巡らす。調整は、外面がハケ目の後にヘラ様工具でナデ。内面は、斜め、縦方向のヘラナデであるが、器壁の凹凸はそのまま残る。

粘土帯は、13段か。その幅は5～12cmを測る。



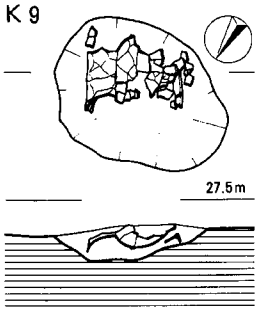


Fig.92　K9・10号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K 9 号甕棺墓　墓壙は浅い不整円形で、小型の広口壺が横たえられ、その底部付近の下方に小型甕の口縁部があった。この甕の口縁部は、広口壺の口縁部と接していたわけではなく、また墓壙の大きさからして、壺と甕の複棺とは考えがたい。祭祀遺構の可能性もあるが、ここでは埋葬遺構とした。

K10号甕棺墓　後世の土壙で切られているが、本来の墓壙の大きさは、長軸260cm、短軸110cm程の長楕円形。この中央に2個の大型甕を接口式にして、ほぼ水平に埋置している。南棺がやや大きいが、水平に埋置されているために、上下の区別は難しい。ここでは南棺を上棺としたが、逆の可能性もある。

上　棺　口径64.2cm、最大径70.0cm、残存器高70.7cm。胴部中位に1条の三角形凸帯を持ち、口縁までは緩やかに内湾しながら立ち上がる器形。口縁部は、内外に強く張り出したT字形である。断面を見ると、内端は丸味があるが、外端は、方形断面で整った作りではない。器面の調整は、内外面ともヘラナデ仕上げである。底部を欠いた残存部の粘土帯は、約9段で、その幅は6～11cm。色調は、黄褐色。

下　棺　復元口径64.1cm、復元底径11.2cm、器高96.7cm。胴部が直線的に立ち上がり、細身で背の高い器形となっている。口縁部は、やや外傾し、特に内側へは、分厚く張り出している。胴部中位から上部にかけて、3か所に黒斑。粘土帯は、16段か。

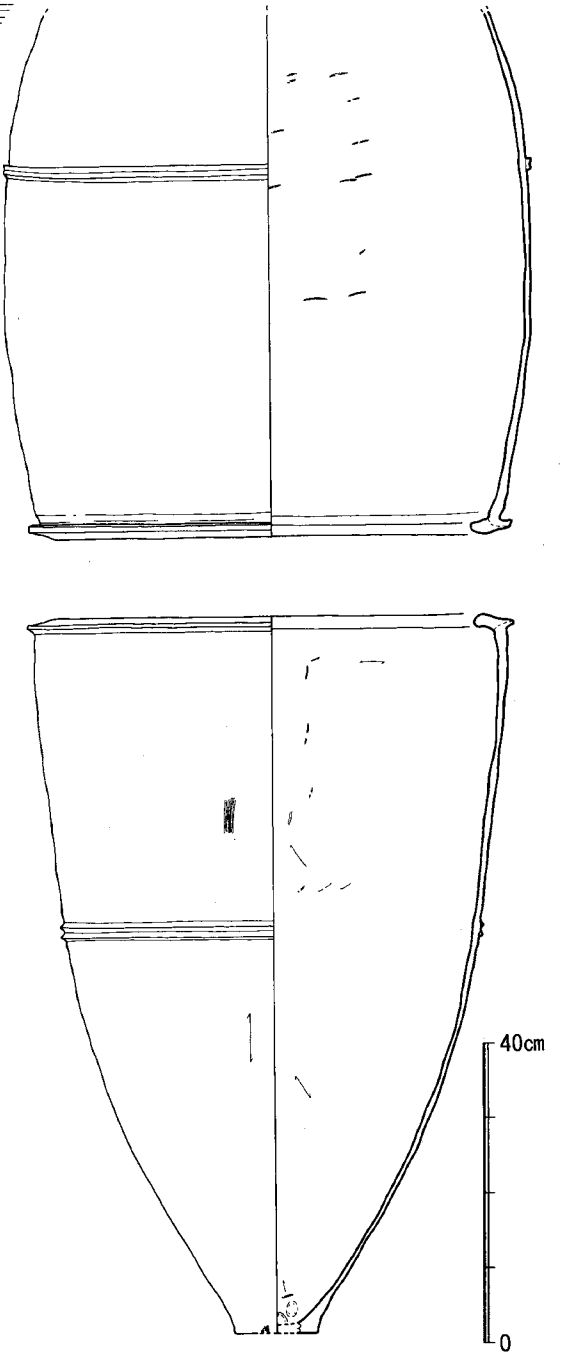


Fig.93　K10号甕棺実測図(1/10)

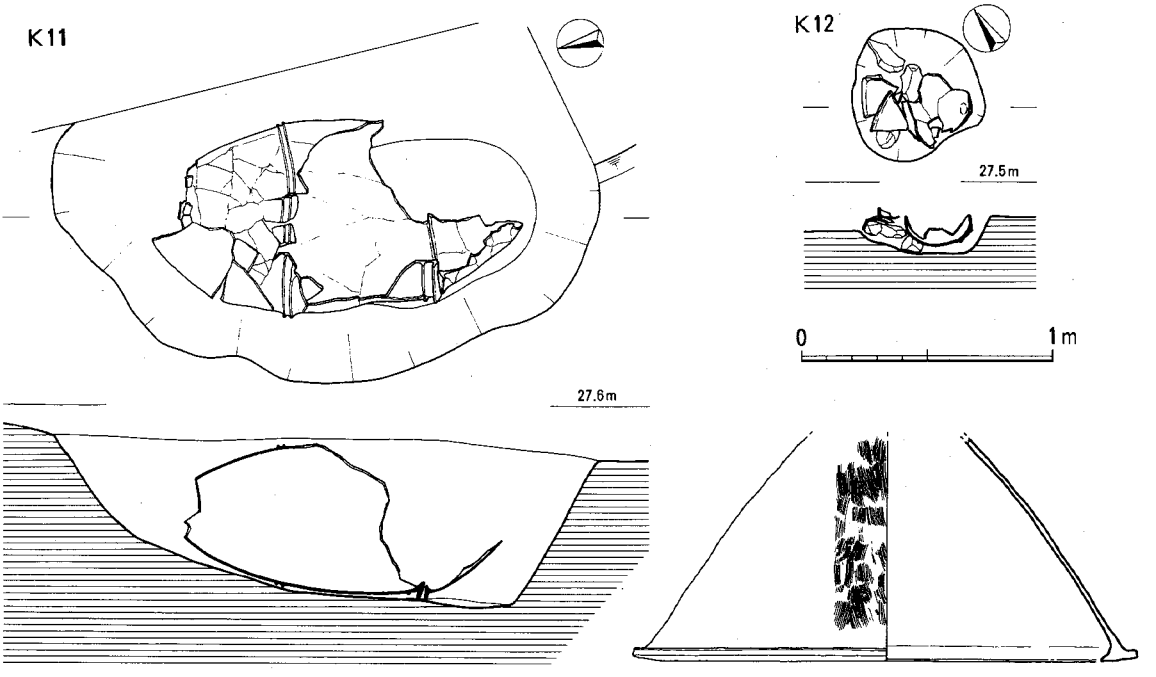
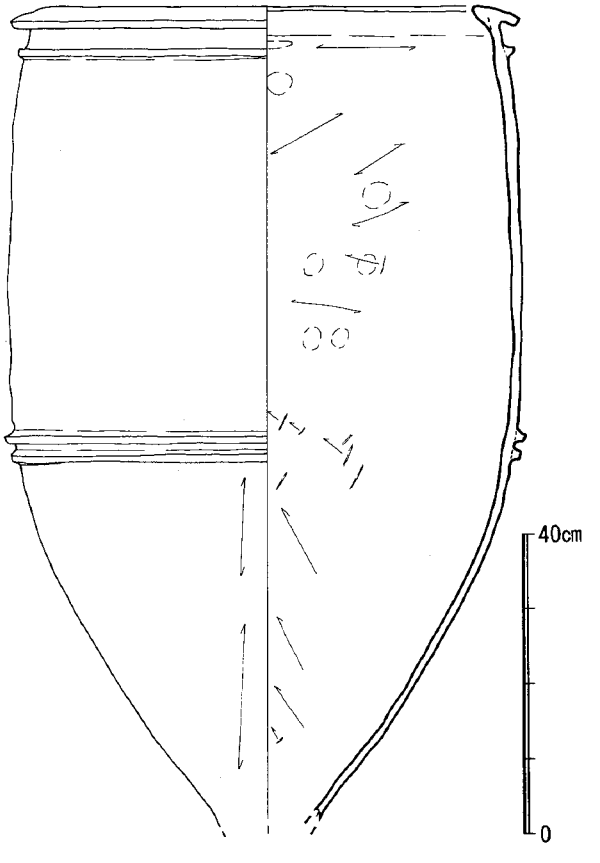


Fig.94　K11・12号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

Fig.95　K11号甕棺実測図(1/10)▶



K11号甕棺墓　複棺の場合、壙底は上棺側から下棺側に傾斜することが多いが、K11は甕の下棺側から鉢の上棺側に向かって逆に傾斜している。上棺側の壁は、通例のように傾斜が急であることから、最初から上棺側の位置は決定していたことになる。

上　棺　ハ字形に直線的に開く器形。T字形の口縁部の上面は、わずかに外に傾いている。復元口径68.0cm、残存器高30.2cm。器面の調整は、内面はナデ、外面はハケ目である。ハケ目は、ストロークが短く、何度も繰り返して重ねている。色調は浅橙色。胎土に砂粒が多い。

下　棺　胴部中位から直立する砲弾形の器形。復元口径68.2cm、復元最大径70.0cm、残存器高110.2cm。口縁下に1条、胴中位下に2条のコ字形凸帯（以下、台形凸帯）。貼り付けのナデはやや雑。器面の調整は、内外面ともヘラナデ。粘土帯は、残存部で約15段。色調は、明黄褐色。

K12号甕棺墓　円形の土壙に広口壺が出土した。大きく割れて、しかも大半は残っていないが、底部と胴部の傾きから、完全な横倒しではなく、斜めに傾斜して置かれたようである。また広口壺の胴部上半から頸部、口縁部辺りの下には、4個の角礫を置いて支えとしている。祭祀遺構の可能性があるが、その積極的な根拠もないので、ここでは埋葬遺構として号数を付けた。

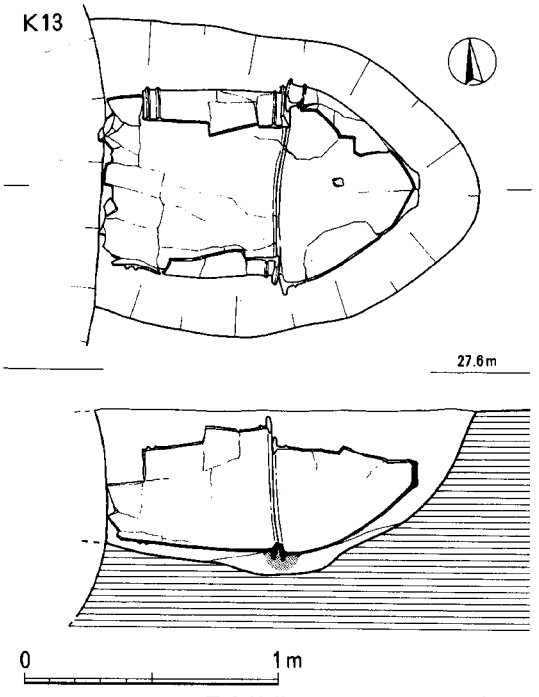


Fig.96　K13号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

上　棺　やや上げ底の底部から、湾曲しながらのび、T字形の口縁部が付く。口径78.5cm、底径12.2cm、器高53.3cm。口縁下の三角形凸帯は、わずかに下方を向き、貼り付け後の横ナデは、シャープさに欠ける。外面の調整は、ハケ目の後にヘラナデを加えている。内面はヘラナデ。口縁部のヨコナデは比較的丁寧である。口縁・底部を含め、12段の粘土帯よりなる。その幅は、4～8cm程度。器面の色調は、内外面とも明赤褐色で、下棺の甕とは、明らかに異なる色調となっている。

下　棺　胴部下半が失われ、底部と接合しないが、本来の器形は、胴部中位から内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや締まる砲弾形であったと思われる。口縁部は、T字形で、外面に強く張りだし、端部の断面は、強いナデにより口唇状になっている。断面で粘土の貼り付け状況がよく観察できる。復元口径70.6cm、底径14.2cm、推定器高 約105cm。器面の調整痕は、底部の内外面によく残っている。胎土には、1mm未満の極小砂粒が多く含まれている。焼成は、特に良好ではないが、器面の色調は、薄橙色となっている。

K13号甕棺墓　南北をK11とK14に挟まれている。墓壙は西側が削平され、原形をとどめていない。元の長軸は2mを超したであろう。下棺は胴部中位の凸帯より下方が失われているが、砲弾形の大型甕で、上棺は大型の鉢を用いている。下棺の底部も土壙内に残っており、図のように復元できた。両棺の口縁部は、外に強く垂れているが、うまく接口式に合わせて、粘土で目張りを施している。上棺には焼成後の小孔が見られる。合口部付近には、古代末から中世にかけての瓦片が多量に出土し、この時期の柱穴が掘り込まれていた可能性がある。

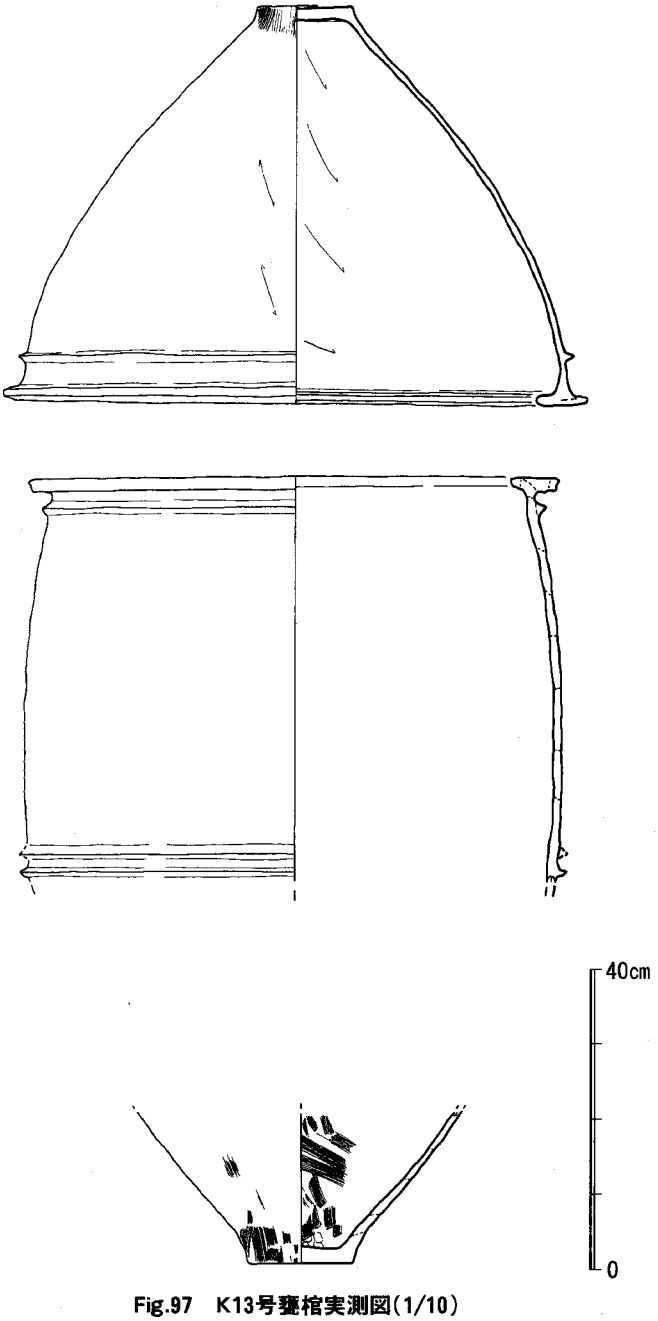


Fig.97　K13号甕棺実測図(1/10)

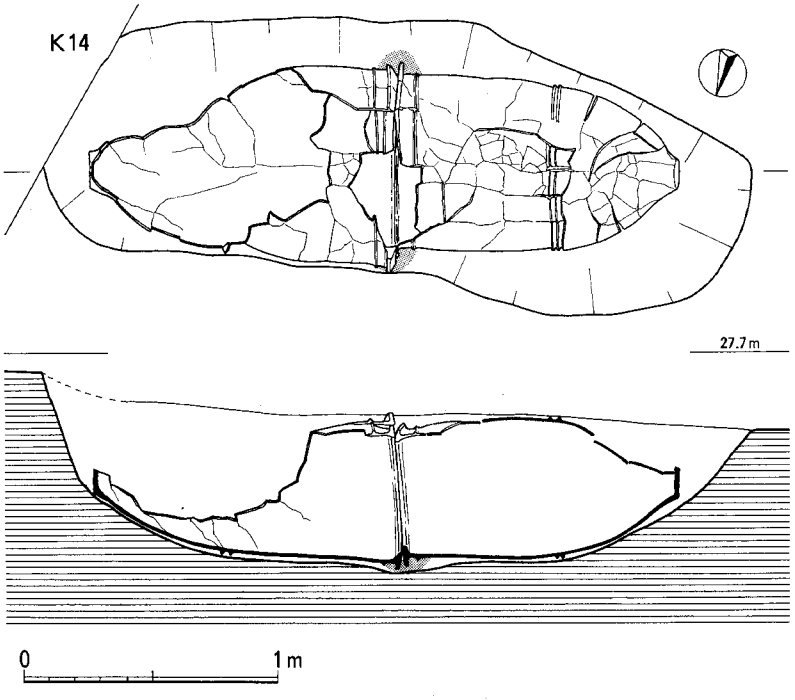


Fig.98　K14号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

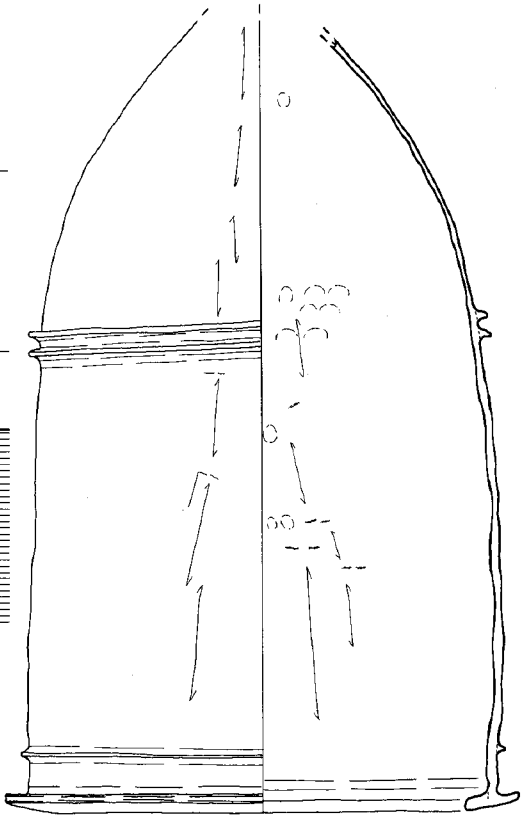
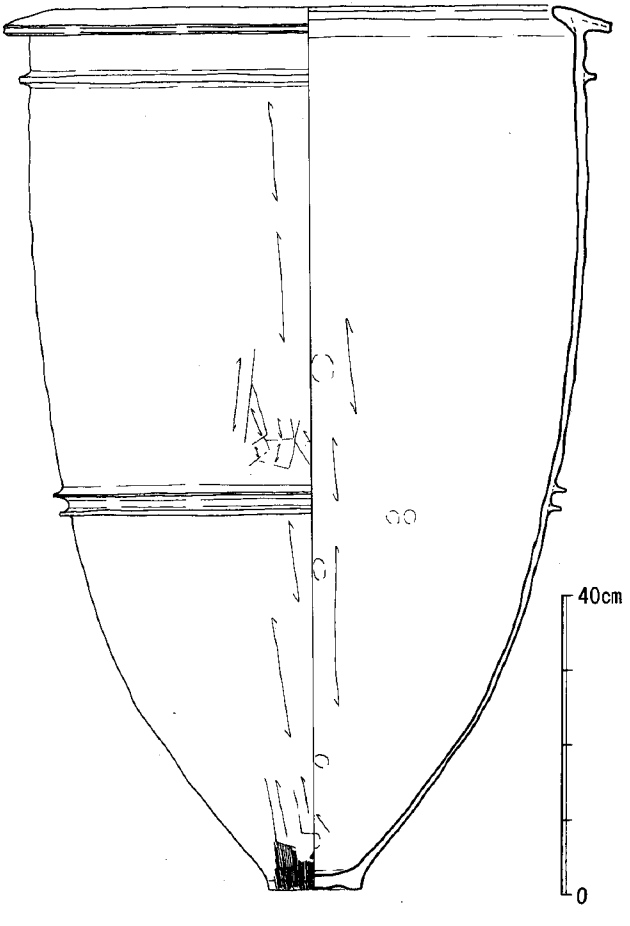


Fig.99　K14号甕棺実測図(1/10)▶



K14号甕棺墓　120cm近い背の高い大型甕を2個体埋葬しているために、2号支線道路ではもっとも大きな墓壙となっている。その長軸は280cm、短軸は108cmである。合口部は黄灰色粘土で目張りをしている。

上　棺　口径69.0cm、残存器高106.7cm。細身で背の高い器形。T字形口縁部は、内外側に強く張り出している。凸帯は、口縁下に1条、胴部中位に2条。断面は、台形に近い三角形。器壁の厚みが胴部の突帯を境に極端に変わり、胴中位以上は胴下部に比べて約2倍の厚さである。また、突帯より上位の内面には器壁の凹凸が明確に残る。外面には、暗灰色～黒灰色の付着物が大きく見られる。また大きな黒斑が、胴部上半に1個。色調は茶褐色。

下　棺　復元口径81.4cm、復元底径12.5cm、器高118.7cm。胴部と口縁部の径が少し大きいが、その他の形状は上甕と良く似ている。内外面とも縦方向のヘラナデ調整で、一部にはヘラの単位が残っている。黒斑は、上甕と異なり、胴下部に大きく1箇所、上部に小さな円形で2か所に付く。色調は茶褐色である。

K15号甕棺墓　K14の北の単棺で、K14の墓壙を切っている。墓壙は長軸181cm、短軸81cmの不整楕円形で、中央部の深さは30cmを測る。壙底は、口縁部側が一段浅く、しかも水平に掘られ、西の底部側に向かって、傾斜するように掘られている。この墓壙のやや西に偏って、大型の甕１個を壙底の傾斜に合わせて埋置している。ただし、甕は壙底よりやや浮いており、部分的にも接していない。口縁部には、蓋の痕跡も、また蓋を安定させるような溝も確認できなかった。

単　棺　原形の約3分の2が残っている。復元口径70.6cm、底径12.6cm、器高113.4cm。器形は、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、胴部中位からは直立してのびるが、口縁部近くで、わずかに内側に傾いて張りを持っている。口縁部は、T字形で、外端の断面は、厚みのある方形。また端部は、強く横ナデされて、口唇状となっている。全体の器形は、図のように、スマートで整っている。外面の調整は、ハケ目の後に縦方向のヘラ様工具でナデを加えている。内面は、斜めから縦方向のヘラナデである。その工具の痕跡が点々と残っている。口縁下に１条と胴部中位に２条の三角形凸帯を巡らしているが、その貼り付けと横ナデは、丁寧な器面調整に比べると、いかにも雑である。胎土には、石英、長石、雲母粒を少し含んでいる。焼成はよい。色調は内外面とも白褐色～明黄褐色。黒斑は、底部の外面に一周している。赤色顔料が、外面全体に撒き散らしたように飛び散っている。この顔料は、黒斑の上にも見られることから、焼成後と分かる。

K16号甕棺墓　墓壙の一部を後世の掘立柱建物の柱掘り方で切られているが、原形は、長軸178cm、短軸112cmの、楕円形というよりも隅丸長方形に近いプラン。墓壙の西に片寄せて、二つの甕を埋置している。低い壙底側の西棺を下棺とした。下棺は、く字形に強く屈曲する口縁の一部を打ち欠いている。上棺は、胴部上半から口縁部にかけて大きく打ち欠き、下棺と合わせている。このため完全な密着とならず、その隙間を埋めるように大型広口壺の破片を被せている。図のように広口部だけしか接合、図示できなかったが、壺の胴部破片も使っている。

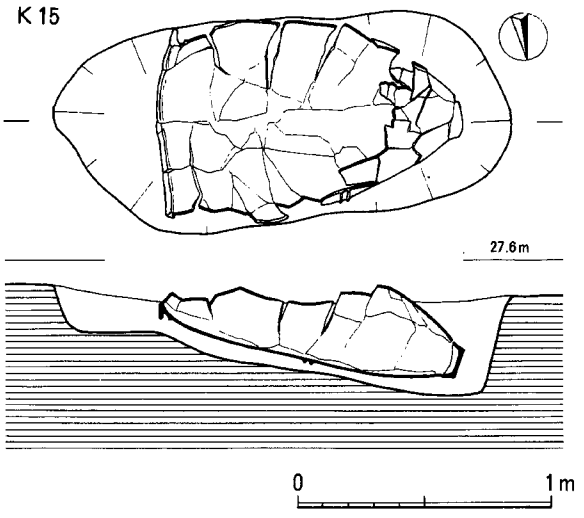


Fig.100　K15号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

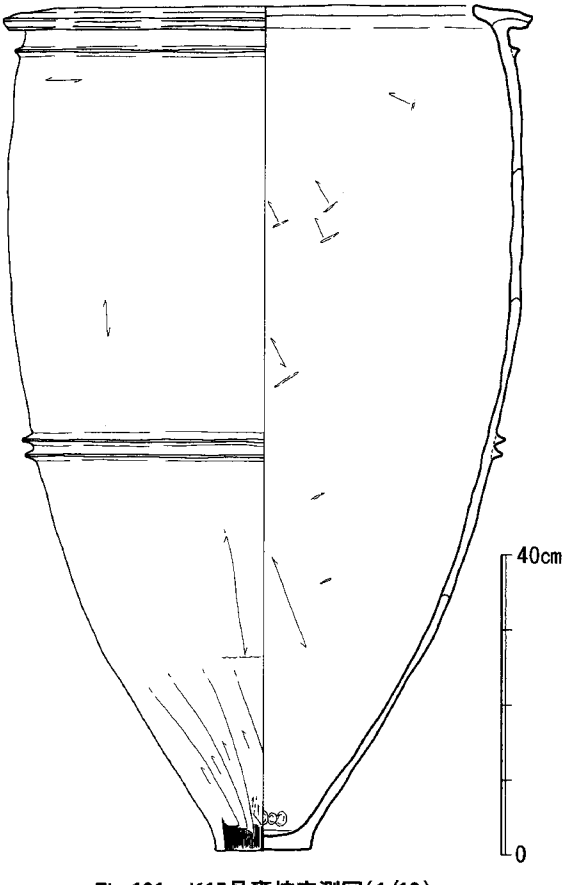
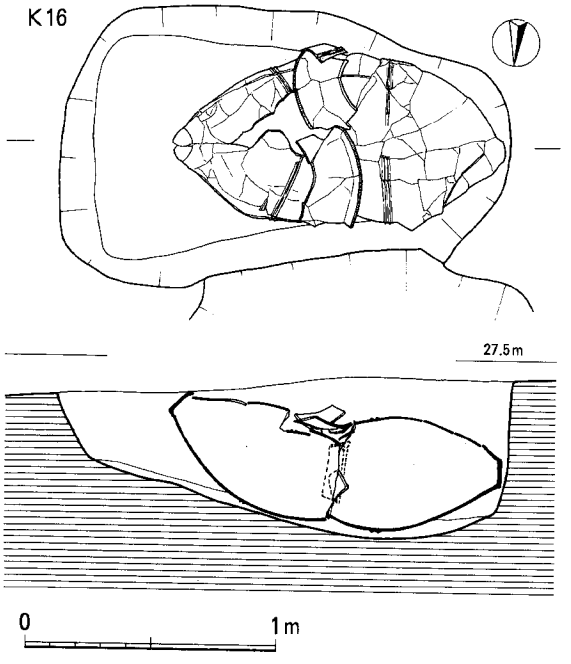


Fig.101　K15号甕棺実測図(1/10)



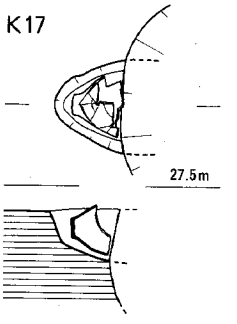


Fig.102　K16・17号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

上　棺　下甕より一回り大きい甕の胴部上半を打ち割って使用している。胴部最大径66.0cm、底径12.2cm、残存器高67.6cm。内外面ともヘラナデ調整であるが、内面には、凹凸が残る。色調は内外面とも黄褐色である。器面の色調は、黄褐色。粘土帯は、11段。

蓋（壺口縁部）　朝顔状に開いており、復元口径51.4cm。鋤先状の口縁外端部は、上下に縦の刻み目を入れる。外面の調整は、ヘラミガキの後に間を開けて縦のミガキを加えており、暗文の効果が出ている。

下　棺　口径39.5cm、胴部最大径60.0cm、底径10.8cm、器高72.1cm。胴部上位に最大径を持ち、口縁部で強く締まった倒卵形の甕である。T字形口縁部は、内端部が細かく打ち欠かれている。凸帯は、胴部中位に2条巡っているが、底部と口縁部とは、平行になっていない。器面の調整は、内外面ともヘラナデ。内面の器壁には、凹凸が目立つ。色調は、やや赤味を帯びた褐色で、胎土とも上甕とよく似ている。胴部中位に大きな黒斑がある。

K17号甕棺墓　掘立柱建物の柱掘り方に切られ、わずかに小型甕の底部だけが残っている。ほぼ水平に埋置されていたことが推測できるが、単棺か複棺は、確かめようがない。

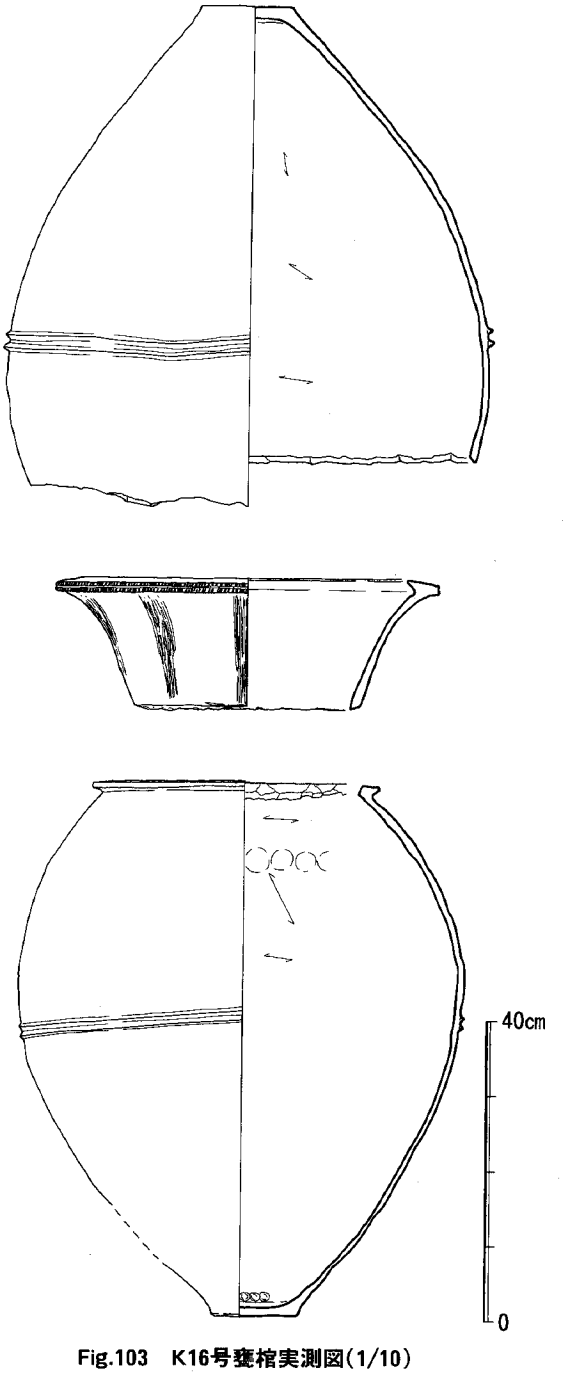


Fig.103　K16号甕棺実測図(1/10)

K18号甕棺墓　墓壙は、長軸62cm、短軸40cmの楕円形で、深さは25cmを測る。下棺は丹塗りの小型甕で、脚部を折った高坏の坏部を被せている。平面図では、割れた状態を示しているが、検出直後は両方とも完全な姿であった。高坏脚部は近くには見当たらなかったが，埋葬時に折ったのだろう。

上　棺　丹塗りされた高坏の坏部。口径38.0cm、坏部の高さ11.8cm。坏部の形状は、扁平な半球状で、鋤先状の口縁部が付く。口縁部は、幅広の作りで、内端側は、小さく三角形状に突き出している。胎土は、黄白色で、わずかに石英や長石などの砂粒を含んでいるが、精良土が用いられている。器面の調整は、口縁部は横ナデ後に、縁に沿った横ミガキ。外面はハケ目、内面は細かな横方向のミガキ。内底部のミガキは、暗文風に六角形を描いている。

下　棺　口径32.5cm、底径7.8cm、器高33.6cm。無花果形の胴部に、L字形の口縁部がつく小型甕。凸帯の断面は、口唇状で、口縁下と胴部中位よりやや上方に各１条巡らせる。丹塗りは、口縁部内面から、外面の全面に塗布している。胎土は、砂粒のきわめて少ない精良土で、明黄褐色となっている。粘土帯は、10段か。器面の調整、仕上げは丁寧である。外面の底部付近は縦のミガキで、上部は、細かな横ミガキを加えている。内面も、丁寧なナデ調整である。焼成もよい。

K19号甕棺墓　発掘区西壁に接して検出したが、東西とも掘立柱建物の柱掘り方で大きく壊され、破片だけが残るにすぎない。その破片には、三角凸帯が一条残っており、甕の胴部であること、ほぼ水平に埋置されていたことがわかる。破片西側の割れ口は、埋葬時の打ち欠きのようにも見えるが、判然としない。

K20号甕棺墓　K19を切っている掘立柱掘り方によって切られているが、埋置方位が異なるので、同一個体ではない。この掘り方は数個の角礫を用いて根石としているが、図ではその１個を示した。K19と同様に小型甕の底部だけなので、単棺、複棺かは判断できないが、もし複棺であれば、K19と切り合っていた可能性が強い。

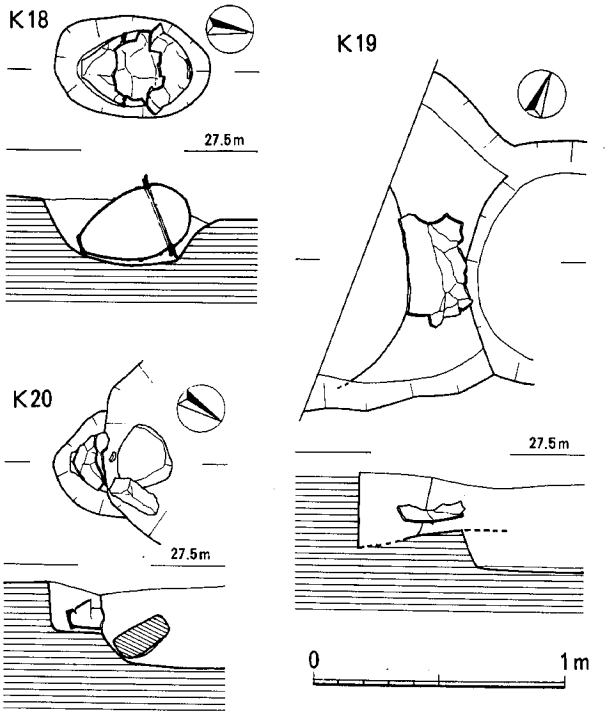


Fig.104　K18～20号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

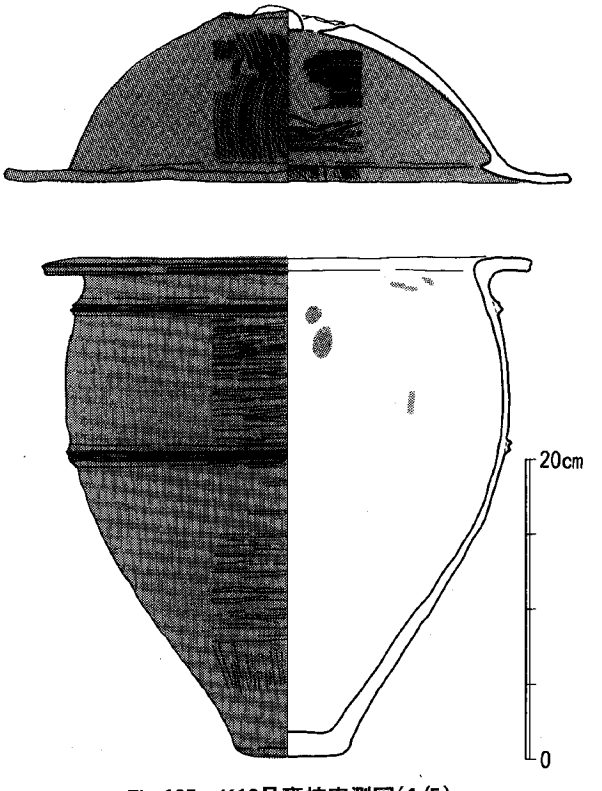


Fig.105　K18号甕棺実測図(1/5)

K21号甕棺墓　K28を切り、K22と掘立柱建物の柱掘り方で切られる。壙底は、わずかに南西に傾き、二つの甕を接口式にして埋置している。墓壙の低い方を下棺としたが、上棺は日常の甕の転用か。

上　棺　口径41.1cm、底径10.3cm、器高53.7cm、最大径41.1cm。ほぼ完形。口縁部下に、シャープな稜を持つ断面三角形の凸帯1条を巡らす。外面は縦のハケ目、内面ヘラナデ調整である。胴部中央に煤のような付着物。色調は内外面とも黄褐色を呈す。

下　棺　口径38.2cm、復元最大径52.0cm、残存器高41.8cm。胴部中位に最大径を持ち、逆L字形の口縁部。内外面とも丁寧にナデ調整され、凹凸も少ない。色調は内外とも黄褐色。

K22号甕棺墓　墓壙は、長軸90cm、短軸60cm。小型甕の下棺に、頸部上半を打ち欠いた壺を合わせ、壺には小孔がある。

上　棺　打ち欠き部径36.0cm、器高27.5cm。胴部には約5cmの間隔で、2条の三角形凸帯を巡らす。内外とも丁寧なナデ調整。色調は明橙色。

下　棺　口径41.6cm、底径8.7cm、器高54.1cm。外面は縦のハケ目、内面はナデ調整。よく整った器形である。色調は、外面が薄橙色、内面が淡橙色である。

K23号甕棺墓　方形の柱掘り

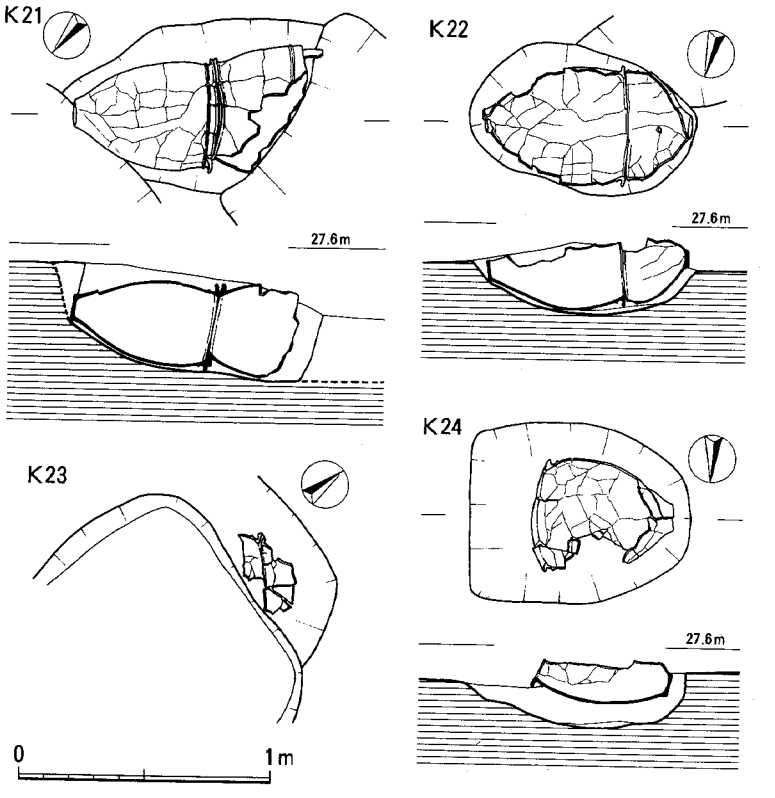


Fig.106　K21～24号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

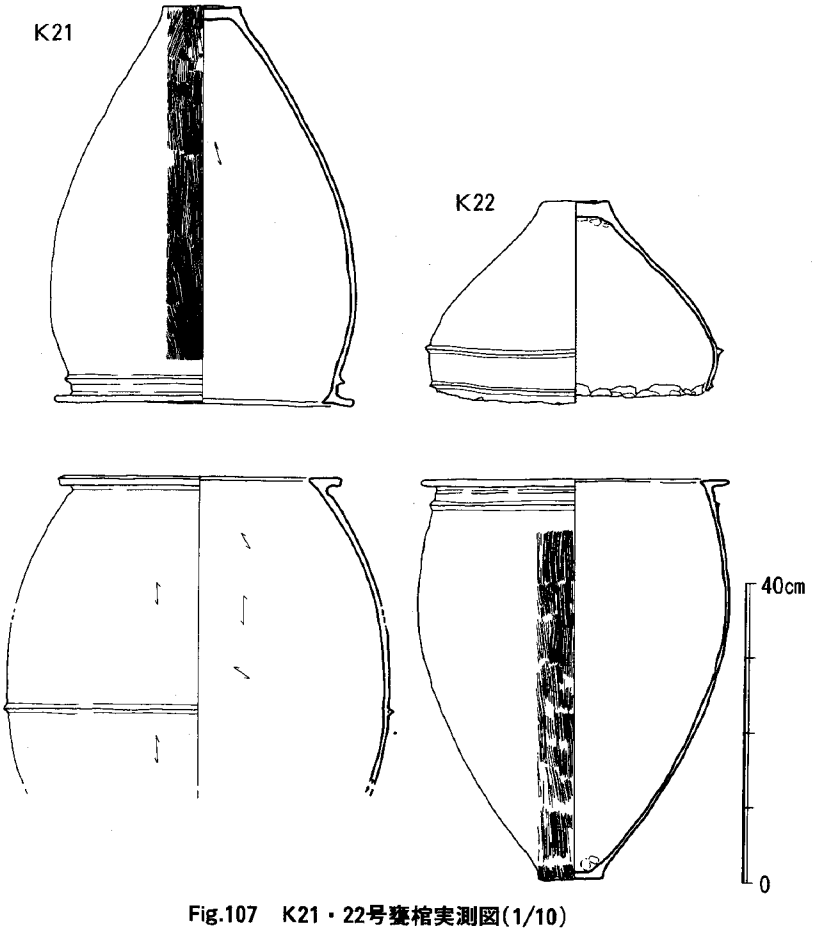


Fig.107　K21・22号甕棺実測図(1/10)

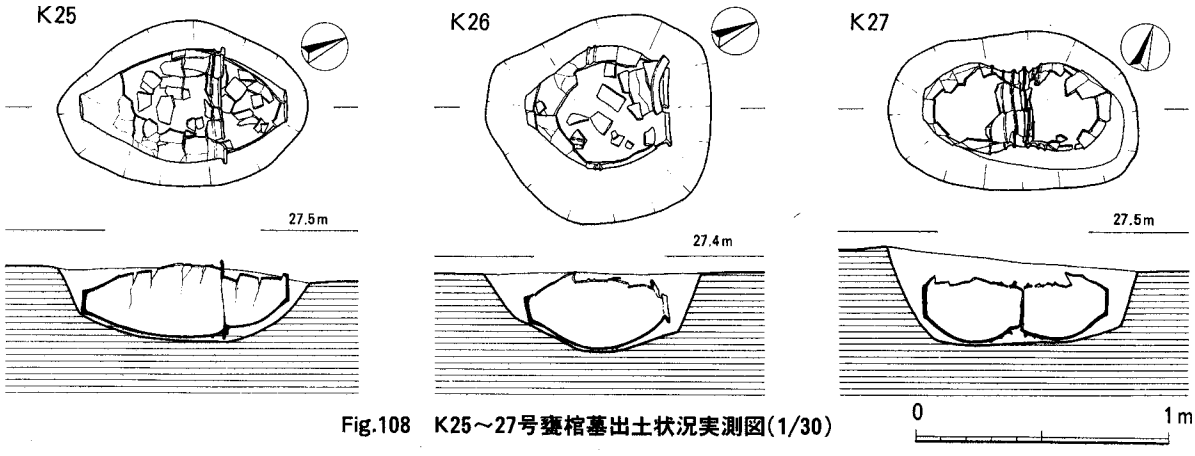


Fig.108　K25～27号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

方によって削られているが、わずかに残った破片から甕棺墓と判断した。破片は、L字形口縁の二つの甕が接口式になっている。北東棺は鉢の可能性がある。

K24号甕棺墓　器高約50cmの甕の単棺で、長軸98cmの墓壙は、楕円形であるが、甕の口縁部側は、直線的な輪郭になっている。当然のことだが、甕の器形に合わせて掘り込まれたことを示している。

K25号甕棺墓　墓壙は、長軸99cm、短軸67cmの楕円形で、深さは30cm。壙底に接して甕と鉢を接口式に水平に埋置している。

上　棺　口径34.2cm、底径11.6cm、器高25.4cmの鉢。あまり外に開かない深みのある器形である。外面の調整は、縦のハケ目、内面はナデ。色調は白っぽい橙色。

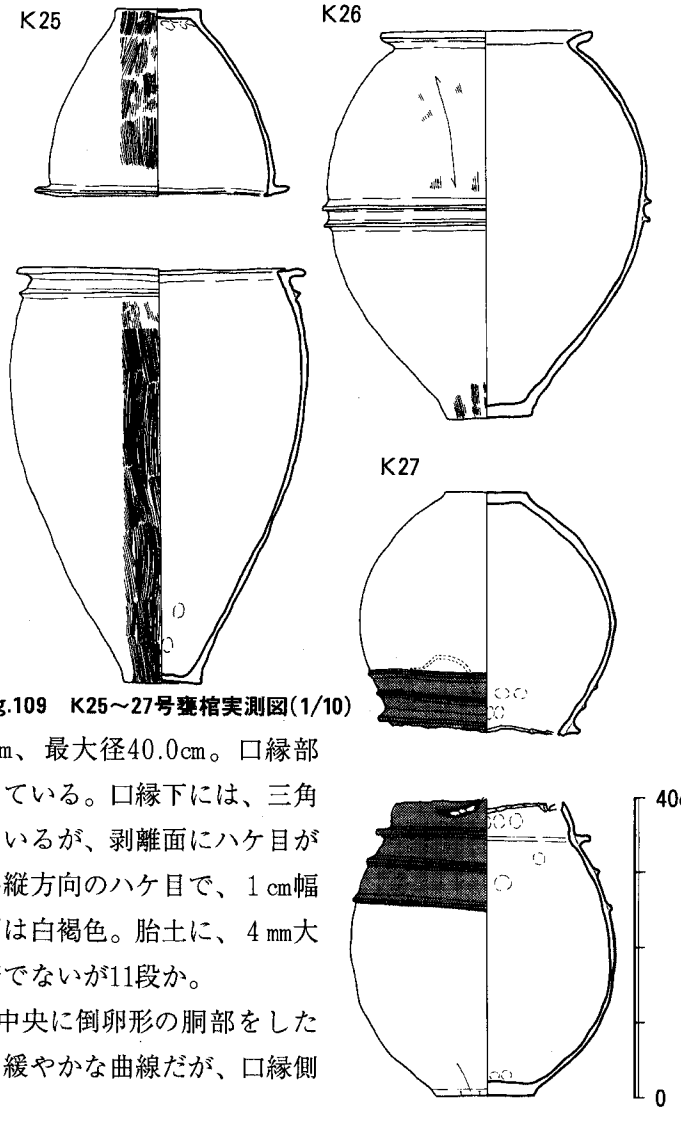


Fig.109　K25～27号甕棺実測図(1/10)

下　棺　口径39.0cm、底径10.6cm、器高56.1cm、最大径40.0cm。口縁部近くで内傾しており、張りを持つ器形となっている。口縁下には、三角形凸帯が1条巡る。部分的に凸帯が剥落しているが、剥離面にハケ目が見られる。外面の調整は、ストロークの長い縦方向のハケ目で、1cm幅に7～8本の細さである。内面はナデ。色調は白褐色。胎土に、4mm大の砂粒を多く含む。粘土帯の接合部は、明瞭でないが11段か。

K26号甕棺墓　単棺の小児棺である。墓壙の中央に倒卵形の胴部をした甕を、ほぼ水平に埋置している。墓壙の壁は緩やかな曲線だが、口縁側は直線的に鋭く掘り込んでいる。

単　棺　口径28.8cm、底径11.4cm、器高52.5cm、胴部最大径43.8cm。胴部中位よりやや上に最大径があり、頸部が強く締まった倒卵形の甕である。口縁部は、く字状を呈し、内側の稜はシャープ。胴部の2条の凸帯は、断面台形で、やや下方に垂れている。内面はナデ調整、外面は縦のハケ目をナデ消している。胴部中位にやや大きい黒斑。色調は明橙色～明黄褐色。

K27号甕棺墓　墓壙は、両端が尖らない楕円形で、中央に瓢形の壺を2個体埋置している。上棺とした東棺は、覆口式にするためか胴部上半の凸帯部から大きく打ち欠いている。

上　棺　他の遺跡から出土する瓢形の壺は、胴部上半に括れがあり、ここに鍔のような背の高い台形凸帯を巡らせる。さらにこの下方に、数条の凸帯を巡らせる。括れより上方は、丸く内湾して膨らむ。頸部は、朝顔状に開き、その上に鋤先状の口縁部が付くことが多い。本例は、括れの鍔より上方を打ち欠いている。胴部の最大径26.8cm、底径11.0cm、残存部器高32.5cm。外面の丹塗りは、下の凸帯まで。胎土には、5mm大の大きめの砂粒が含まれ、特に精良土ということではない。外面の色調は、明黄褐色。底部に黒斑。凸帯の間から、釣り針状に右に蛇行する痕跡がある。何かが貼り付いていたようであるが、下壺のような粘土であったかは、明らかでない。

下　棺　頸部より上を打ち欠いている。胴部最大径34.9cm、底径13.0cm、残存部器高40.0cm。丹塗りは、上壺と同じように、下の凸帯まで。黒斑は、胴部中位の両側にあり、明瞭な輪郭をしている。胎土には、8mm大の砂粒を含んでいる。焼成はよく、外面の色調は、明黄褐色。外面の調整は、縦のハケ目の後に、ヘラナデしている。打ち欠き部には、釣り針状に左方向に湾曲する形で、断面三角形の粘土紐が貼り付けられており、同じような痕跡のある上壺と組み合わさっているのは、何か意味があってのことだろう。

K28号甕棺墓　掘立柱建物の柱掘り方の実測後に検出したもので、墓壙の西側が発掘区の外に出ており、拡張して全形を確認した。墓壙は長軸200cm、短軸120cmの大きな楕円形で、埋置方位はグリッド線にほぼ直交するN-83°-Wである。西棺

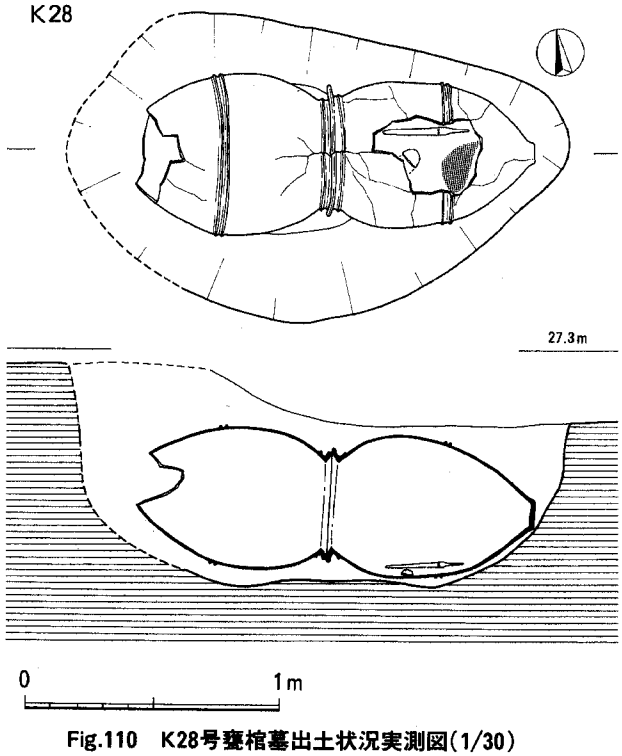


Fig.110　K28号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

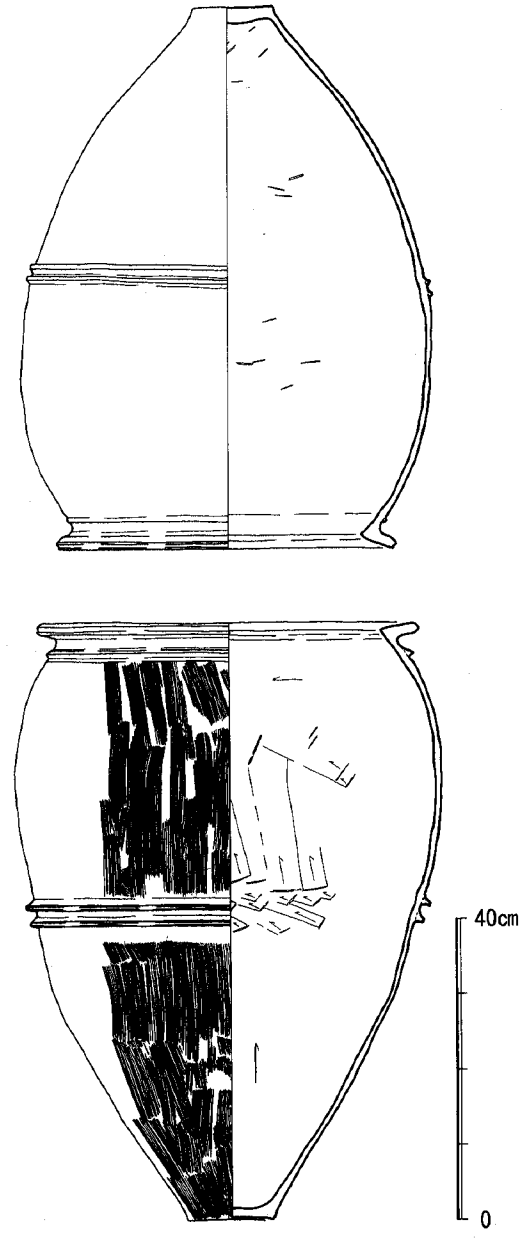


Fig.111　K28号甕棺実測図(1/10)

の底部付近が欠けているが、深い墓壙だったために、ほぼ完全な形状を留めている。壙底は平坦ではなく、微妙な凹凸がある。墓壙のやや東に偏って同じような大きさの甕を接口式にして埋置している。東棺を下棺としたが、これは底部が墓壙の壁に接し、かつ壙底も低いことによる。この下棺には土が流れ込んでいたが、下になるほど黒色の粘土質になり、中央付近には、3～5㎜大の炭化物が散乱していた。さらに掘り下げると、3～5㎜大の粒状化した赤色顔料が見つかり、その周辺で鉄剣と櫛と思われる遺物が出土した。赤色顔料の下にはさらに炭化物が堆積していた。

上　棺　口径45.8㎝、器高73.1㎝、胴部最大径55.6㎝。ほぼ完形。胴部のやや上位に最大径があり、頸部はよく締まっており、倒卵形の器形となっている。底部は、径10.8㎝の平底。口縁部はく字形に外反し、分厚い作りである。外端部は、横ナデで、浅い口唇状となっている。口縁下に三角形凸帯を1条、胴部中位に台形凸帯を2条巡らせている。外面の調整は、ハケ目の後でナデ消し。内面は、ナデ調整。胴部中位の2か所に、やや大きな黒斑がある。全体に作りが丁寧で歪みも少なく、器面も滑らかである。外面の色調は、明黄褐色、内面は、明褐色。胎土に、石英・長石・雲母を少量含む。

下　棺　口径51.2㎝、底径11.7㎝、器高80.6㎝、胴部最大径57.3㎝。胴部の一部を欠くが、完形に近い。上甕に比べて丸みがなく、スリムな器形である。底部は、やや上げ底。く字形の口縁部は、上甕に比べ、屈曲が弱い。口縁下の三角形凸帯は、方に垂れ気味。外面全体にハケ目調整を加えており、その方向は、胴上半は上から下へ、胴下半は下から上への縦方向である。内面は、基本的に縦・斜め方向のヘラナデであるが、底部直上と、胴部中位から口縁部近くまでは、横方向にヘラナデしている。外面底部から胴部中位にかけて、細長い黒斑がある。外面の色調は、明黄褐色、内面は、黄褐色を呈する。胎土は石英・長石をやや多く含み、雲母もわずかに混入している。

鉄　剣　下甕の下部に堆積した粘質土を剥がすように掘り下げて行く過程で発見した。金属部分は、棺内の水分で完全に錆びており、茶色に変化した範囲の形状で、鉄剣と判断した。取り上げには、とても耐えられる状況ではなかったので、発掘現場で図のような略測図を作成した。従って視覚的な観察の結果に基づく形状や法量の記述なので、正確さに欠けることを断っておく。推定全長は、32㎝。剣身は、平行に切っ先に至るのではなく、中程でわずかに狭くなっている。切っ先も、直線的に尖らず丸味がある。関は、明瞭な境がなく、そのまま細くなって茎となる。関の部分が、最も幅広くなっており、3.3㎝を測る。ここに径2～4㎜大の小孔が2個並んでいる。その間隔は、1.4㎝。この小孔から茎端までは、10.2㎝前後。剣身には、わずかに鎬が通っている。

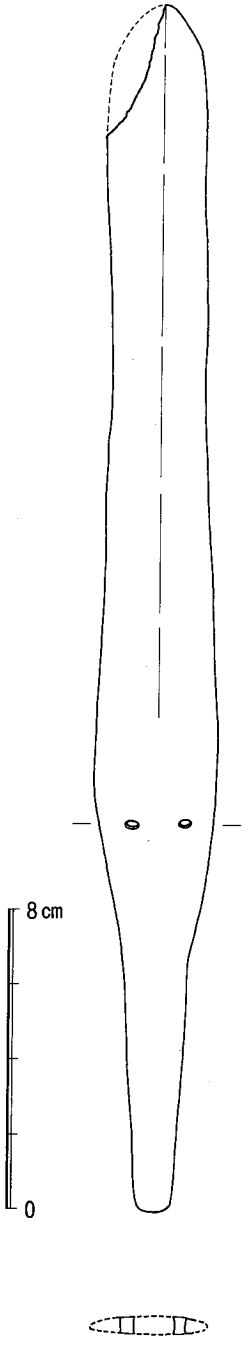


Fig.112　K28号甕棺遺物実測図(1/2)

竪　櫛　鉄剣と同じ深さで、有機質が黒色となった部分がある。対照的に、棺内の水分が保存に役立ったと思われるが、とても脆弱で取り上げは不可能であった。幅5.5㎝、高さ4.0㎝前後。その形状から竪櫛と判断したが、歯はなく、櫛と断定する有力な根拠はない。科学保存処理に期待したい。

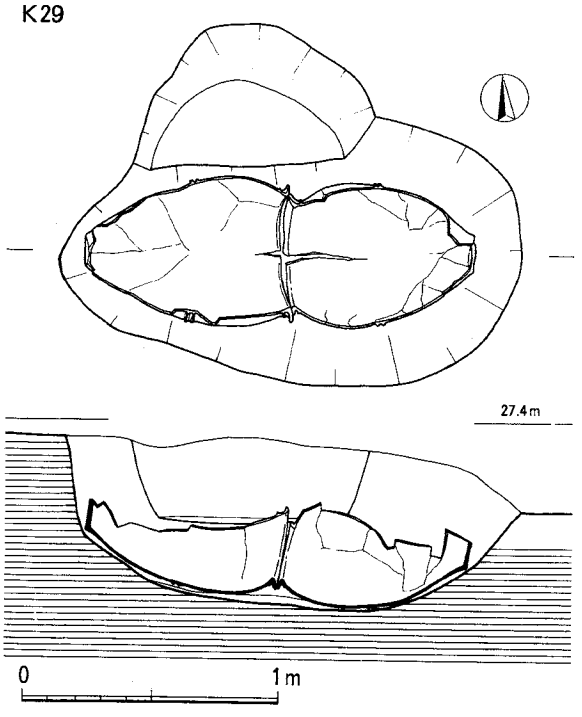


Fig.113　K29号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

上　棺　胴下半から、大きく湾曲して立ち上がるが、胴上位の最大径位置まで径の変化がないので、胴回りが太く、安定感のある器形をしている。口径49.4cm、底径10.0cm、器高83.0cm、最大径57.8cm。く字形の口縁部は、厚みがあり、屈曲部の内面には、鈍い稜が付く。凸帯は、口縁下に三角形凸帯1条、胴部のやや下位に台形凸帯2条を巡らせる。胴部凸帯の内面は、凸帯張り付けの際に内側に凹んだようである。器面の調整は、内外面ともヘラナデ。色調はやや赤味を帯びた明黄褐色。黒斑が、胴部の4ヶ所にある。胎土には、7mm以下の砂粒を含む。粘土帯は、11段か。

下　棺　口径44.2cm、底径11.3cm、器高84.8cm、最大径62.2cm。大きさや形状など、上甕とよく類似しているが、胴部にやや丸味がある。く字形の口縁部は、厚みがなく、直線的に屈曲している。粘土帯は、12～15段、幅は4～10cmを測る。器面の色調は、やや白色がかった明黄褐色で、内外面に暗褐色の付着物がみられる。胴部上半には、大小3個の黒斑がある。

内外面とも主に縦方向のヘラナデ調整である。

K29号甕棺墓　K27の北東1mにある。奈良末～中世の土壙と重なっているが、墓壙の大きさは知ることができる。長軸180cm、短軸105cmの楕円形である。壙底まで65cmと割に深い。埋置角度は6度で、わずかに東に傾斜している。この東棺を下棺としたが、両棺ともよく似た器形の甕で、接口式の口縁部の密着も完全である。粘土の目張りはない。

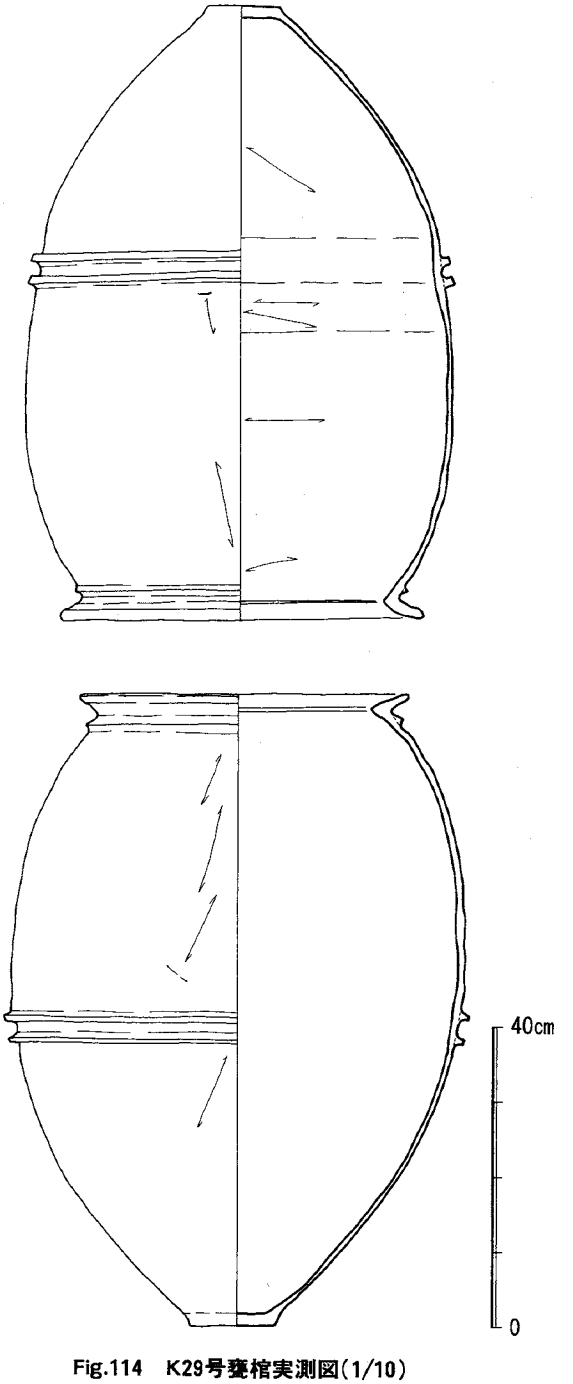


Fig.114　K29号甕棺実測図(1/10)

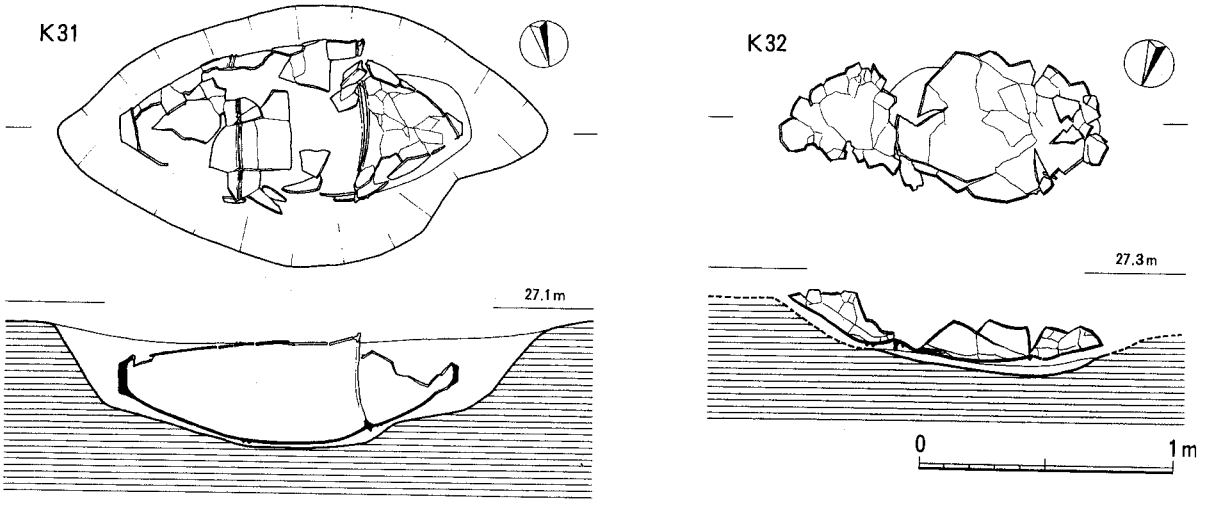


Fig.115　K31・32号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K31号甕棺墓　墓壙は長軸180cm、短軸105cmの長楕円形で、壙底は東側部が一段高くなっいる。これは、上棺の鉢の安定を図る工夫であろう。下棺の甕と接口式にして、水平埋置。

上　棺　平底の底部から緩やかに外湾して、T字形の口縁部へと立ち上がる。大型甕の胴部下半のように丸味のある器形。口径67.0cm、復元底径10.8cm、復元器高42.3cm。粘土帯は、8段、口縁部に向かうほど、幅広くなっている。色調は、黄褐色。器面の調整は、内外面ともヘラナデ。その工具痕が無数に残る。

下　棺　口径72.2cm、底形11.4cm、器高97.4cm。砲弾形の器形で、T字形の口縁部が付く。口縁内端は、強く張り出し、厚みがある。外端の張り出しは弱く、横ナデで断面方形となっている。器面の調整は、内外面ともにヘラナデ。外面全体に黒褐色の付着物がある。

K32号甕棺墓　わずかに残った破片から埋置方位、角度、棺の形状などを推測した。下棺は、L字形口縁の甕で、胴部中位に断面台形の凸帯を1条巡らしている。上棺は口縁部を打ち欠いているので、器種が判然としないが、断面台形の凸帯を2条貼り付けていることから、甕の可能性が強い。なおすぐ東側で、器高25cmの小型広口壺が横倒しになった状態で出土している。K32の供献、副葬品の可能性もある。

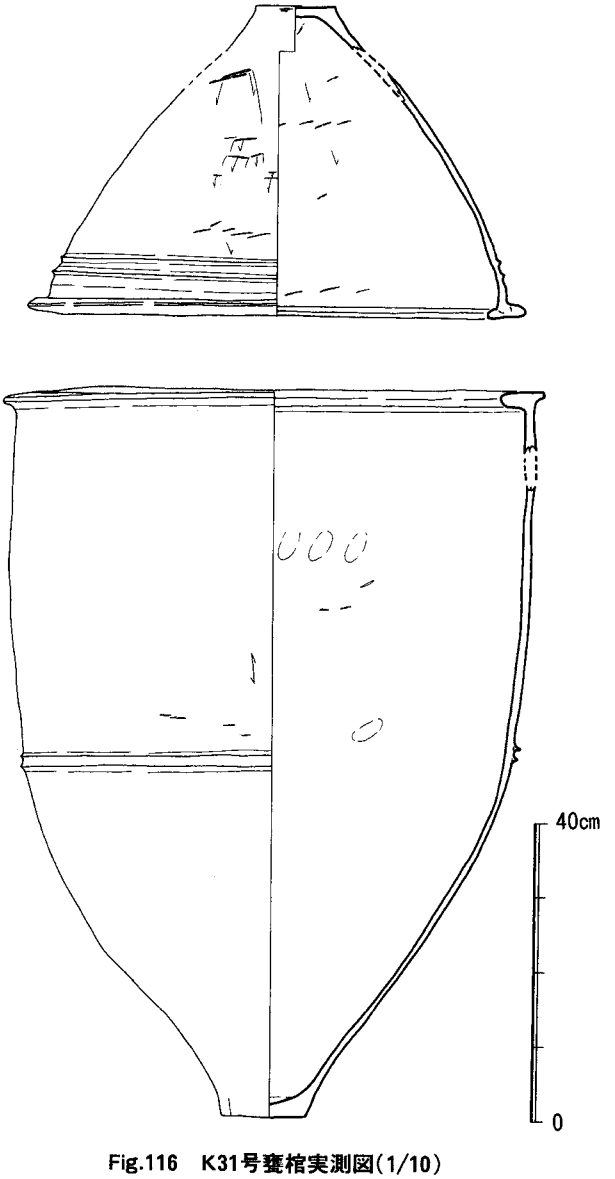


Fig.116　K31号甕棺実測図(1/10)

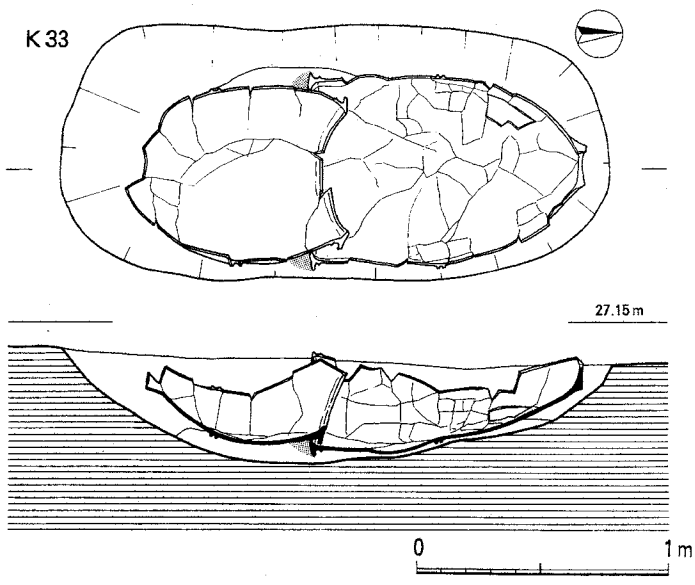


Fig.117　K33～36号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K33号甕棺墓　北棺を下棺としたが、砲弾形の胴部にT字形の口縁部が付く。上棺の甕を挿入している。

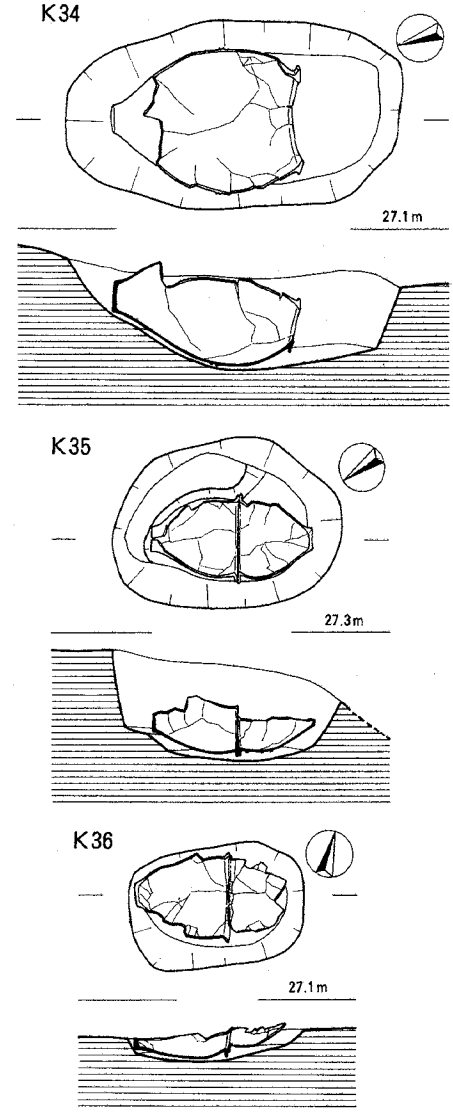
K34号甕棺墓　壙底に接して、口縁を南にして甕を据えている。口縁部側に30cm以上の空間があり、蓋などの装置があったと思われるが、その痕跡は認められなかった。

単　棺　口径39.7cm、底径10.6cm、器高73.3cm。倒卵形の胴部は、大きく内側に張り出す口縁部が付くので、一層丸味が強調されている。口縁下10～15cmに、2列の横ハケを施し、それに接して等間隔に縦のハケを加えている。文様の効果が出ているが、意図的のものか不明。

K35号甕棺墓　調査区の北縁に位置する。長軸91cm、短軸66cm、深さ44cmの墓壙の中央に、小型甕を接口式にして、ほぼ水平に埋置している。やや小さな器形の南棺を上棺としたが、L字形の口縁部で、断面口唇形の凸帯を胴部中位に2条、口縁部直下に1条巡らしている。上棺の器高は、30cmで、凸帯はない。

K36号甕棺墓　K35の北50cmにある小児棺である。L字形口縁の甕を接口式にして、水平に埋置している。残りが悪いが、下棺の器高は35cm前後、上棺は25cm前後と思われる。これより北側には、甕棺は検出できなかった。最南端のK1との距離は30mである。

なお本調査区では、甕棺墓以外の土壙墓、木棺墓など他の埋葬遺構は混在していない。また弥生時代の生活遺構なども見当たらなかった。おそらく弥生時代を通じて、専用の墓域として意識され使用されたのであろう。



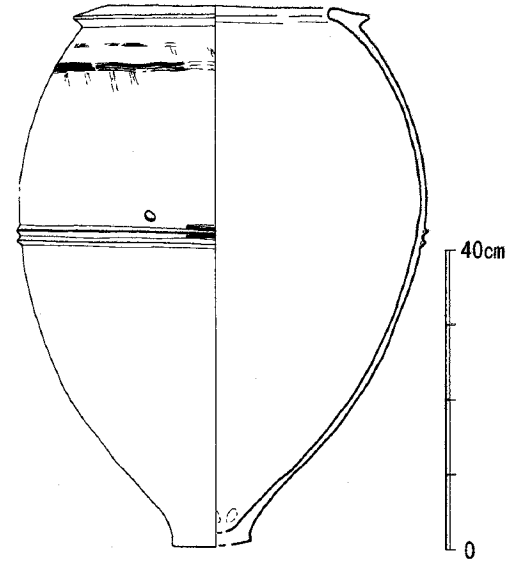


Fig.118　K34号甕棺実測図(1/10)

K30祭祀遺構　墓地に関連すると考えられることから、K30の遺構番号を付したが、埋葬遺構ではなく祭祀遺構である。K18、35、36に取り囲まれた空間の、南北２ｍ、東西１ｍの範囲に土器が散乱していた。本来は浅く掘り込まれた土壙があったと思われるが、輪郭が不明瞭であった。土器は、高坏、袋状口縁壺、広口壺、鉢などの器種があり、このうち大小の高坏２個と広口壺１個を図示した。小型の高坏は、脚部と坏部が離れているが、大きい高坏は、ほぼ完形で出土したことから、すべてが破砕されたとは思えない。甕棺ベルトでは、南西の三十六地区でも北東の大石地区でも、器種の組み合わせ、規模の差はあるが、同じような祭祀遺構が数か所で発見されている。

高坏１　やや浅い半球状の坏部に、ハ字形に広がる脚部が付く。坏部口径29.3cm。脚裾径20.1cm、坏部高12.0cm、脚部高13.0cm、全体の器高25.0cm。坏部の中位には、口唇状の凸帯を巡らせており、各部の大きさや割合が、よく計算された器形となっている。胎土は、砂粒をわずかに含んでいるが精良土。断面の色調は、明黄褐色。坏部は、横の細かいミガキ、脚部は、縦のミガキ、内面にはしぼり痕が見られる。脚部内面以外は、丹塗りが施されている。

高坏２　坏部口径13.1cm。脚裾径9.6cm、坏部高6.1cm、脚部高7.0cm、全体の器高は、13.1cm。全面に丹塗りをした小型の高坏で、シンプルな器形をしている。器面は細かなヘラミガキが加えれられ、全面に丹塗りされている。胎土は、砂粒を含んでいるが精良土が用いられている。焼成もよい。

広口壺　復元口径36.8cm、残存部器高26.1cm、頸部高15.5cm。胴部下半を欠いているが、算盤球のように中位が外に強く張り出す胴部に、朝顔状に異様に大きく開く口縁部が付く。頸部内面から胴部にかけて丹塗り。頸部外面は、縦の暗文風のミガキ。

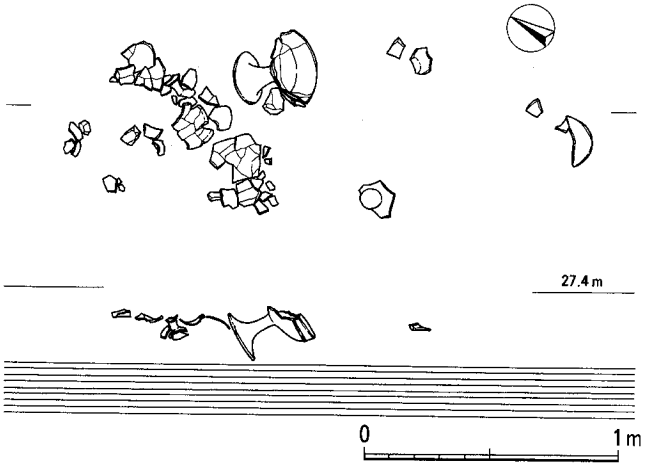


Fig.119　K30祭祀遺構出土状況実測図(1/30)

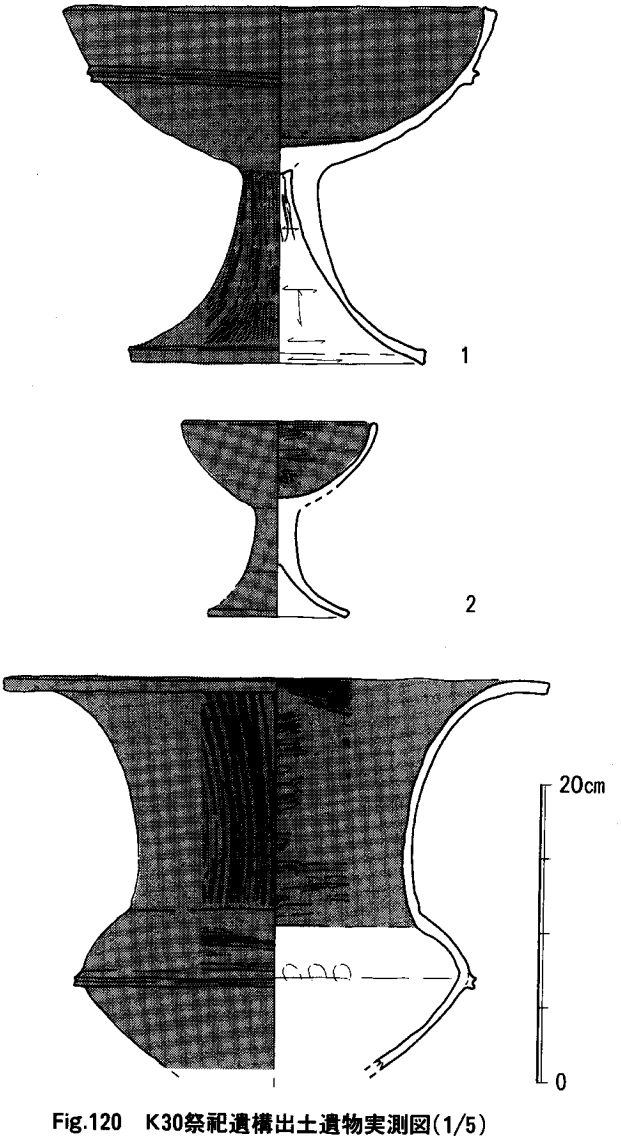


Fig.120　K30祭祀遺構出土遺物実測図(1/5)

大石地区

先に記したように甕棺ベルトの北西端部にあるのが、大石地区である。第1次～5次調査と同じように、発掘調査が完了した部分から順次圃場整備工事側に明け渡し、翌年には田植えが行われるため、耕作土に床土以下の基盤土が混入しないよう慎重な剥ぎ取り作業が求められた。全面を剥ぐには，かなりの時間を要するので、先に2号支線道路の発掘調査に取りかかり、35基の甕棺墓と1基の祭祀遺構を検出した。第4次調査や、野方金武線道路で発掘されている三十六地区は、南西150mに当たるが、その墓域が2号支線道路まで延びていたのである。もしかしたら、「早良王墓」の高木地区と対峙するようにして、「弥生墳丘墓」の樋渡地区までのびる可能性も出てきた。発掘作業員の皆さんに、理解してもらい、また興味深く発掘作業に取り組んでもらえるように、「甕棺ベルト」とか「甕棺ロード」とか、親しみのある言葉で説明するようにした。帯状の墓域になるだろうという予想は、2区の東端に、小字名の由来となった大石が農道の傍にあり、その付近で、かって甕棺が出土した時の写真を地元の方が大事に保管されていたからである。ただ甕棺は、甕棺ベルトの大多数を占めている弥生中期中葉～後葉ではなく、意外にも前期末の金海式のようであった。

三十六地区、そして2号支線道路の甕棺ベルトは、弥生中期の甕棺墓が主となるが、甕棺ベルトでは、弥生時代の前期末に数か所で埋葬がはじまり、それを核にして結果的に一大墓地となったと思われ、大石地区のその金海式甕棺も核の一つにすぎないと軽く考えていた。この時点では、まさか高木地区と同時期の甕棺墓、木棺墓があり、しかも豊富な青銅器類が出土するとは、誰も予想していなかったことであった。

大石地区は、高木地区、樋渡地区の厚葬墓との対比で、遺物を出土した甕棺墓、木棺墓だけが注目されてきたが、発掘担当者の私たちは、本当の歴史的な意味や価値、そしてその解明の鍵こそ、甕棺ベルトという共同墓地の中に秘められていると強く意識してきた。だから何も持たない甕棺こそ、最初に復元し、報告すべきであった。にもかかわらず、今回は唯一K80号甕棺墓の復元、実測だけに終わり甕棺墓121基、木棺墓4基、土壙墓12基、祭祀遺構5基については、遺構図のみの報告となった。遺構図については、これで未報告分はないが、各甕棺墓の時期決定や分布状況など甕棺ベルトの形成や変遷を解明するために、最も重要な甕棺の復元、実測という基本作業を怠っていることを、大いに反省している。また甕棺墓のデーターについては、一覧表にして報告しているが、校正ミスが多々あり、その箇所については、できるだけ今回の文章中で修正を加えている。

甕棺の接合、復元は、整理作業員の池田由美、宮崎まり子、生垣綾子、渡辺敦子さん、実測と作図、そして胎土、調整などの観察、記録は、羽方誠、北村幸子調査員が担当した。発掘調査では、地元の発掘作業員の方々の他に、下記のように調査員や各大学考古学研究室の学生諸君の協力を得た。

調　査　員　田中克子　緒方俊輔　中登志之

九州大学　池田祐司　尹 煥　　**明治大学**　荻村昇二　小川泰樹

早稲田大学　小沢健次郎　佐古田喜博　二子石和成　　**別府大学**　高橋健治

次に未報告の甕棺墓、木棺墓、土壙墓について記すが、大石地区のグリッドは50mと大きいので、出土位置を示すには向いていない。これまでは便宜的に、南西からのびてくる甕棺ベルトの方向と同じ埋置方位をとる南西側の一群をA群とし、北東部で直交する一群をB群と呼び分けたが、今回はさらに図のように細分した。これはその密集状況を視覚的に捉えて分けただけであって、それ自体に特別な意味はない。

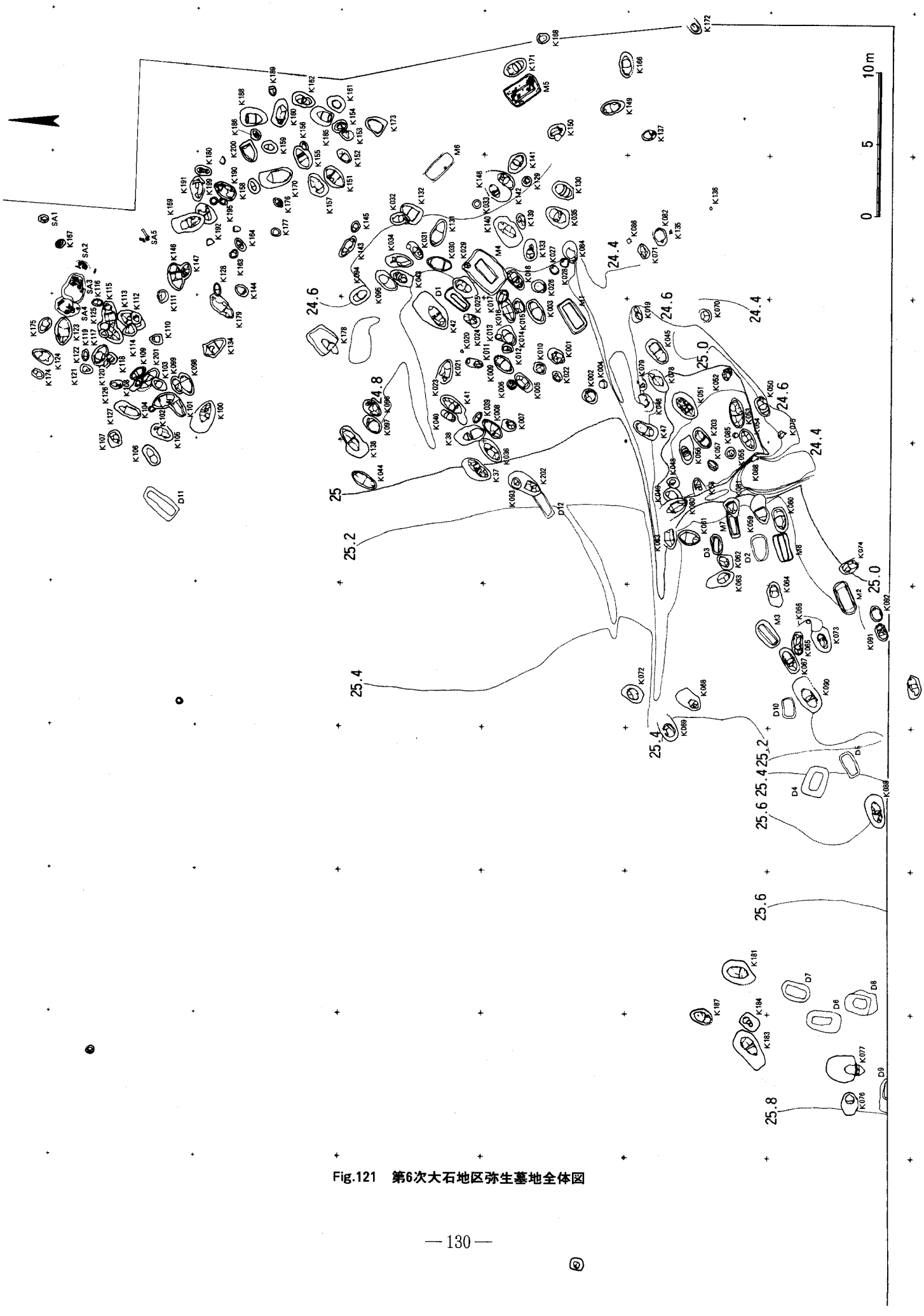


Fig.121　第6次大石地区弥生墓地全体図

甕　棺　墓

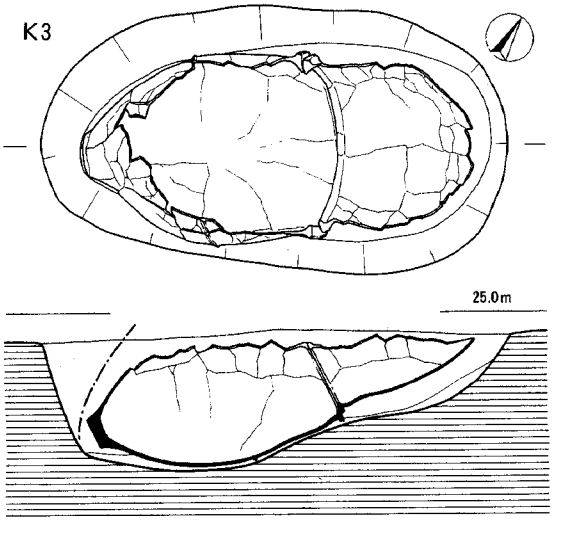
K３号甕棺墓　B群の甕棺墓の分布を細かくみると、北東側から３つの小さな群に分けられる。Ｋ３はその北側のＡ１群の中に属する。墓壙の長軸は、187cmあり、長楕円形の平面プランをしている。壙底は、南西に向かって斜めに掘り込まれており、その傾斜に合わせて二つの大型甕を接口式にして埋置している。下棺は、張りのない胴部に肥厚した口縁部が付き、縦の刻み目を入れている。胴部には沈線はないが、中位よりやや上に背の低い断面三角形の凸帯が１条巡っている。上棺は、下棺と同じような大きさ、器形であるが、胴部に凸帯は見られない。合口部には粘土の目張りはない。

K５号甕棺墓　磨製石鏃を出したK10の北西側に、主軸をほぼ同じくして並んでいる。墓壙は削平されているが、旧形と大きく異ならないだろう。深さは、17cmしか残っていないが、ほぼ水平に埋置されていたために、組み合わせ方がわかる。上棺は、く字形に屈曲する口縁部をもつ鉢で、胴部上位に低い断面三角形の凸帯を２条巡らしている。下棺は大型甕で、接口式に埋置している。L字形の口縁部は、極端に内側に張り出して幅広い平坦面を作るが、わずかに外傾気味で水平ではない。胴部中程に、上棺と同じような低い三角形凸帯を１条巡らしている。

K７号甕棺墓　墓壙は、長軸105cm、短軸76cmを測り、円に近い楕円プランである。墓壙の南東に偏って埋置している。上棺は、鉢が用いられ、半球状の胴部は、口縁部で外反しないで、そのまま納めて特別な口縁部を作らない。下棺は甕で、胴部に断面三角形の凸帯を２条貼り付けている。口縁部は、打ち欠いており、上棺の鉢とは、離れた状態で出土した。下棺の器形がはっきりしないが、胴部の湾曲から、中期後半と推測した。

K８号甕棺墓　Ａ１群に属し、Ｋ７の北西側に隣接している。長軸171cmの長楕円形墓壙は、上棺側が幅広くなっており、壁も下棺の北東側よりも、直線的に掘り込まれている。上甕は、Ｌ字形口縁をした鉢で、口縁部直下に、三角形凸帯を１条巡らせている。下棺は、砲弾形の背の高い胴部に、外傾気味のＴ字形口縁部がつく。凸帯は、断面台形で、口縁部直下と胴部中位に各２条が巡っている。下棺の底部は、墓壙の壁に接するように埋置されており、墓壙の掘り込みは、複棺の大きさに合わせて、余分な空間を作っていない。

K９号甕棺墓　Ｋ５の北東側にあり、ほぼその長軸延長上にある。検出時の墓壙は、楕円形であるが、壙底の傾きからすると、本来は北東から南西方向に斜坑が掘られ、下棺を滑り込ませたと思われる。上、下棺とも、同じような大きさの甕で、接口式にし、合口部に



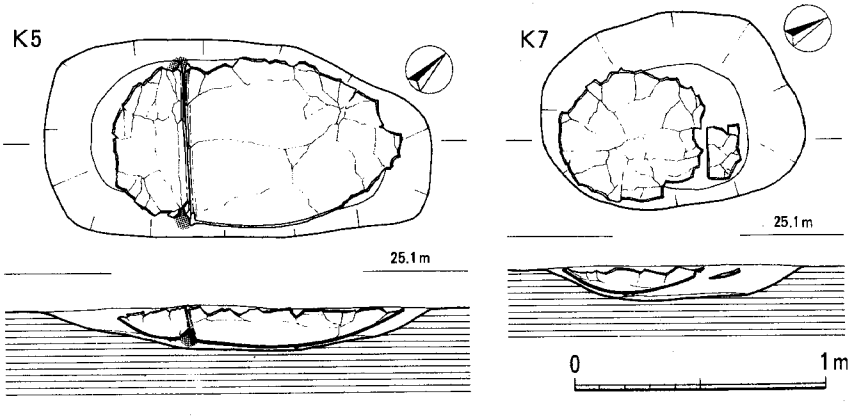


Fig.122　K3・5・7号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

粘土の目張りをして、甕一層密着を強めている。下棺の胴部上半は、わずかに貼りがあり、肥厚気味の口縁部がつく。沈線はなく、胴部中位に小さな三角形凸帯が1条貼りつけている。上棺には凸帯はない。これらの特徴から、弥生中期前半の時期を想定した。合口部に粘土の目張りを施す。

K11号甕棺墓　A1群のK9とK21に南北を挟まれている。長軸120cmと細長い墓壙に、北から壺胴部、広口壺口縁部、甕胴上半部という3つの破片が出土した。断面図でわかるように、削平が激しかったために、3つの破片になったもので、本来は、大型の甕の下棺に、大型の広口壺を接口式にして水平に埋置したものである。壺の頸部は完全に失われているので、破片が遊離したように見える。広口壺は、胴部に断面M字形の凸帯が2条あり、朝顔状に大きく開く頸部に、幅広の水平面をもつ口縁部を乗せている。下棺は、直立した胴部にT字形の口縁部がつく砲弾形の器形をしている。胴部に凸帯があったと思うが、口縁下だけに三角形凸帯が1条残っている。

K12号甕棺墓　弥生前期末の金海式のK14を切っている。墓壙は、長軸83cm、短軸59cmの楕円形で、深さはわずかに10cmを残すにすぎない。壙底は、平坦ではなく凹凸があり、壙底よりわずかに浮かして甕を水平に埋置している。甕の胴部は張りがなく、わずかに肥厚した口縁部がつく。胴部には凸帯はない。

K13号甕棺墓　K12と同じように弥生前期末の金海式金海式のK14を切っているが、K13自体も削平を大きく受け、墓壙の平面プランも不明確である。棺は壺が用いられている。祭祀遺構とも考えられるが、後述する5基の祭祀遺構が、墓域の北東端部に離れて集中していることから、埋葬遺構として取り扱った。

K16号甕棺墓　A1群の中央にあり、M4木棺墓の南西側に近接している。弥生前期末のK15とK17を切っている。墓壙の長軸は、K17との重複部分が明瞭でないが、180cmを超す大きさだったのだろう。下棺に大型甕、上棺に鉢を接口式にした複棺である。下棺は、弥生中期中頃の特徴である背の高い砲弾形の器形で、T字形の口縁部をつけている。合口部には、粘土の目張りはないが、上棺の鉢口縁部とは、つよく接着している。

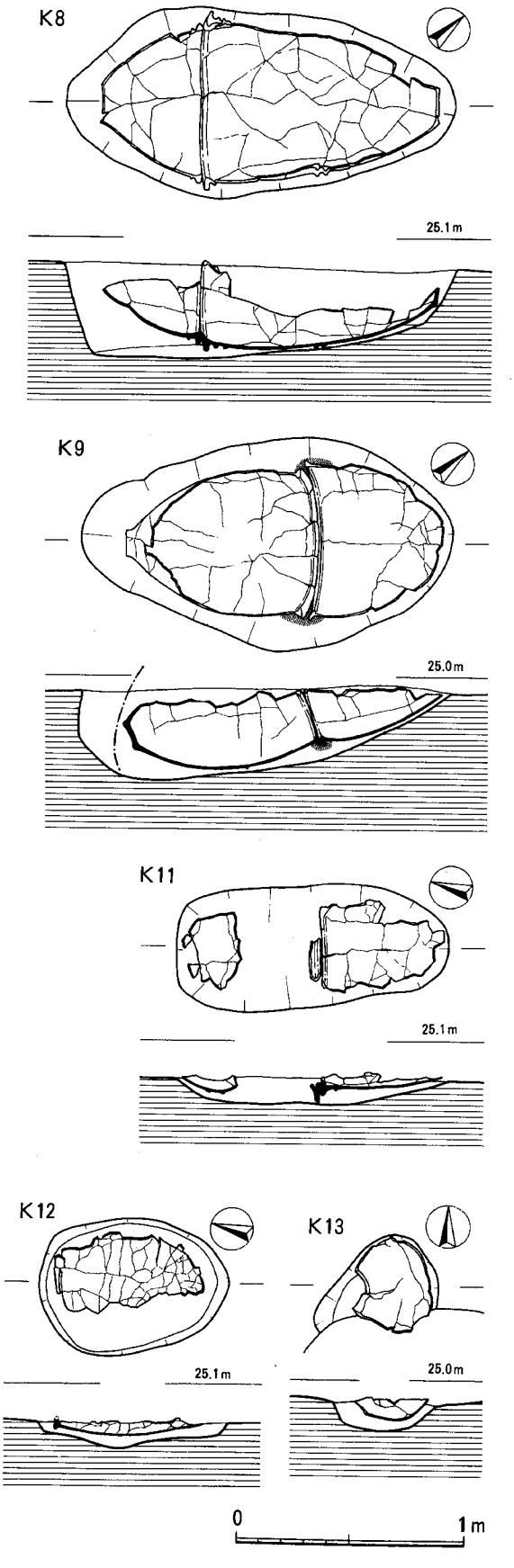


Fig.123　K8・9・11～13号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K19号甕棺墓　A１群とA２群の間に位置している。墓壙は、長軸113cmの不整楕円形で、中心軸よりやや南東に偏って、埋置している。甕の口縁部を留める西棺に対し、東棺は、甕の胴凸帯部より上方を打ち欠いていることから、上棺と考えた。下棺の口縁部は、T字形で、胴部に三角形凸帯を２条巡らしている。合口部は、少し離れており、ここに上、下棺とは、別個体の口縁部が落ち込んでいる。上面の隙間に被せていた可能性がある。

K20号甕棺墓　弥生前期前半汲田式のK42の南西側に位置している。20cm大の破片が残るのみなので、器形、埋置方法など確かめようがない。器壁の厚さや湾曲から、破片の北側部が底部だったことがわかる程度である。

K21号甕棺墓　大型の甕１個体を用いた単棺。墓壙の長軸は、170cmで、口縁部側は、90cmと幅広く、壁も直に近く掘り込まれている。蓋があったと思われるが、その痕跡は認められない。甕は弥生中期須玖式の特徴である砲弾形の胴部に、T字形の内、外側に張り出した口縁部がつく。凸帯は断面台形で、口縁部直下に１条、胴部中位に２条巡り、やや下方に垂れ気味に貼りつけられている。

K22号甕棺墓　大石地区では、最初の青銅器を出したK１と磨製石鏃を出したK10の南側に近接している。不整楕円形の墓壙に、甕の口縁部、底部のない胴部が埋置されている。胴上部の打ち欠きとしても、底部側は墓壙の壁とあまりにも近いことから、普通の埋置方法とは考えにくい。

K23号甕棺墓　A群K21の北西35cmにある。破片だけが残り、墓壙プランの輪郭は不明。破片に凸帯も残っていない。

K24号甕棺墓　M４木棺墓の西2.5mにある。墓壙の平面プランは、楕円形ではなく隅丸長方形に近い。深さは27cmを測り。北東側に向かってわずかに傾斜している。壙底からかなり浮いた状態で、しかもほぼ水平に埋置されていることから、上、下棺の区別が難しいが、南棺の頸部を打ち欠いた壺を上棺とした。下棺は、中型の甕で、壺を挿入している。

K28号甕棺墓　A１群、M１木棺墓の北東2.5mに位置する小児棺である。墓壙の平面プランは明瞭でな

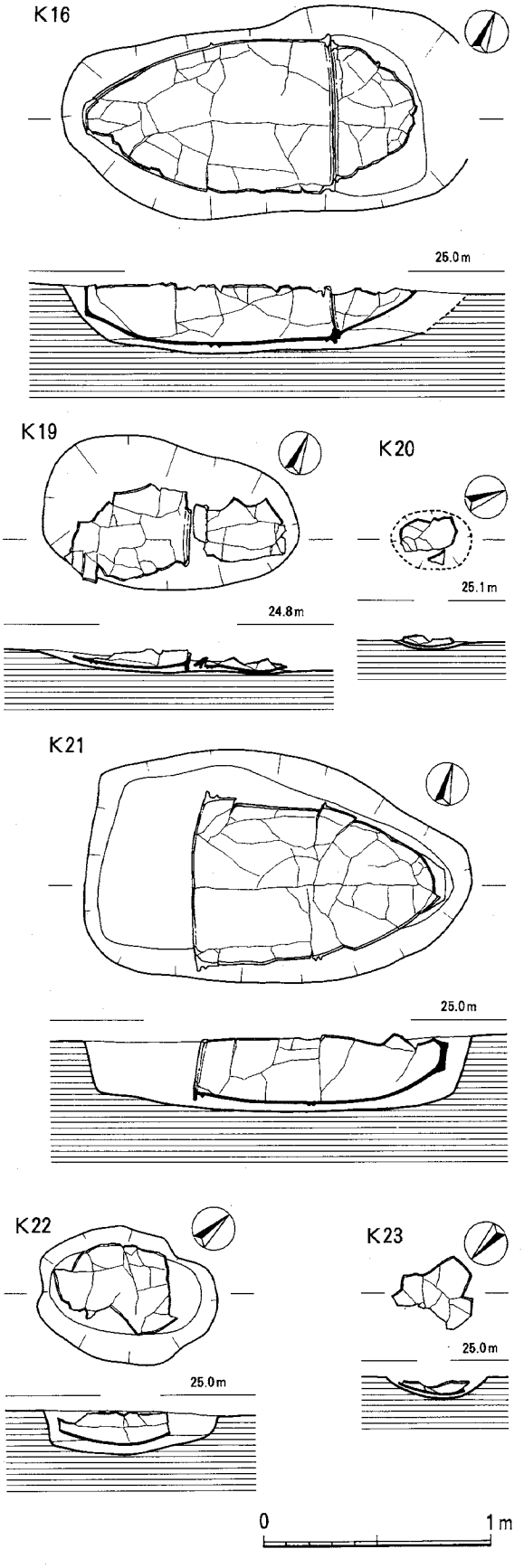


Fig.124　K16・19～23号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

い。下棺は、胴部上半を打ち欠いた壺で、上棺は小型甕である。合口の方法が、破片となっているために判然としないが、口径からすると上棺の挿入式か。下棺の壺には、M字形（口唇状）の凸帯が残っている。上棺の口縁部は、内傾するL字形で、外端部の断面は、凸帯と同じようなM字形で、縦の刻み目を加える。

K29号甕棺墓　M4木棺墓の北西隅にあり、M4を切っている。重複していることもあって、墓壙の輪郭は不鮮明であった。棺は頸部より上部を打ち欠いた壺の単棺である。胴部にはM字形の凸帯2条。

K30号甕棺墓　K29のすぐ北側にある単棺。長軸181cmの墓壙は、口縁部が2段掘りされ、しかも口縁部と接する部分に、蓋を安定させるために垂直に掘り込んでいる。その幅は5cm前後で、蓋自体は木材など有機質だったのか、完全に消失している。甕は、110cmを超す器高で、胴部上半がやや内側に倒れ、丸味を持っている。口縁部はL字形、口縁部直下と胴部中位の凸帯は、断面台形となっている。

K31号甕棺墓　K30とK34の間にあり、A群との境に当たる。墓壙は長軸108cmの楕円形で、壁は斜めではあるが、割に直線的に掘り込み、32cmと深い。下棺はL字形口縁の甕、上棺は頸部を打ち欠いた壺を、接口式にしてほぼ水平に埋置している。壙底より10cmも浮いているが、埋土に特別な変化は認められなかった。

K32号甕棺墓　A群とB群の境にあり、単棺のK132の北西に近接している。長軸142cmの墓壙は、上面が削平されている。接口式の複棺で、上、下棺ともL字形の同じような口縁をしている。器形もよく類似しているが、下棺が胴部の張りがなく、背も高い。

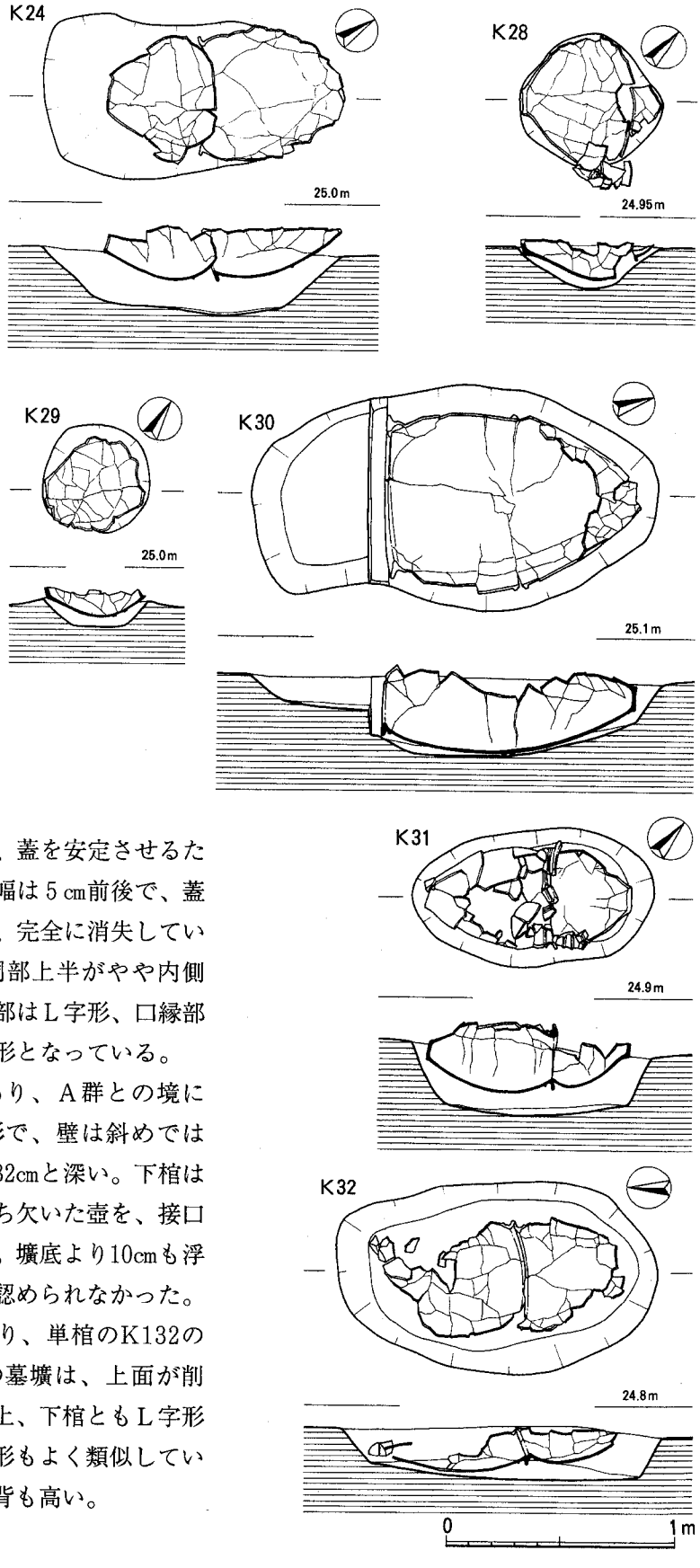


Fig.125　K24・28～32号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K33号甕棺墓　細形銅剣、朱を出土したK140の北東側にある壺棺である。直径64cm、深さ35cmの墓壙に壺1個体を置いている。頸部より上半が失われており、故意に打ち欠かれたものか、後世の削平によるか判断できない。また底部も失われており、埋葬遺構とするのも疑問である。

K34号甕棺墓　A群とB群の境にあり、埋置方位は、K30とほぼ同じだが、上棺の位置が逆になっている。K34は、3個体の甕を連結するという特異な埋置方法をとっている。下棺は、L字形口縁の甕で、器高は100cmを超す甕で、断面台形の凸帯を口縁部直下に1条、胴部中位に2条巡らしている。この下棺の口縁と合口になっているのは、L字形口縁の小型甕で、その胴部中程の下部に、さらにL字形口縁の甕が支えるような位置に置かれている。上棺には、口縁下に三角凸帯があることから、中棺とは明らかに別個体である。

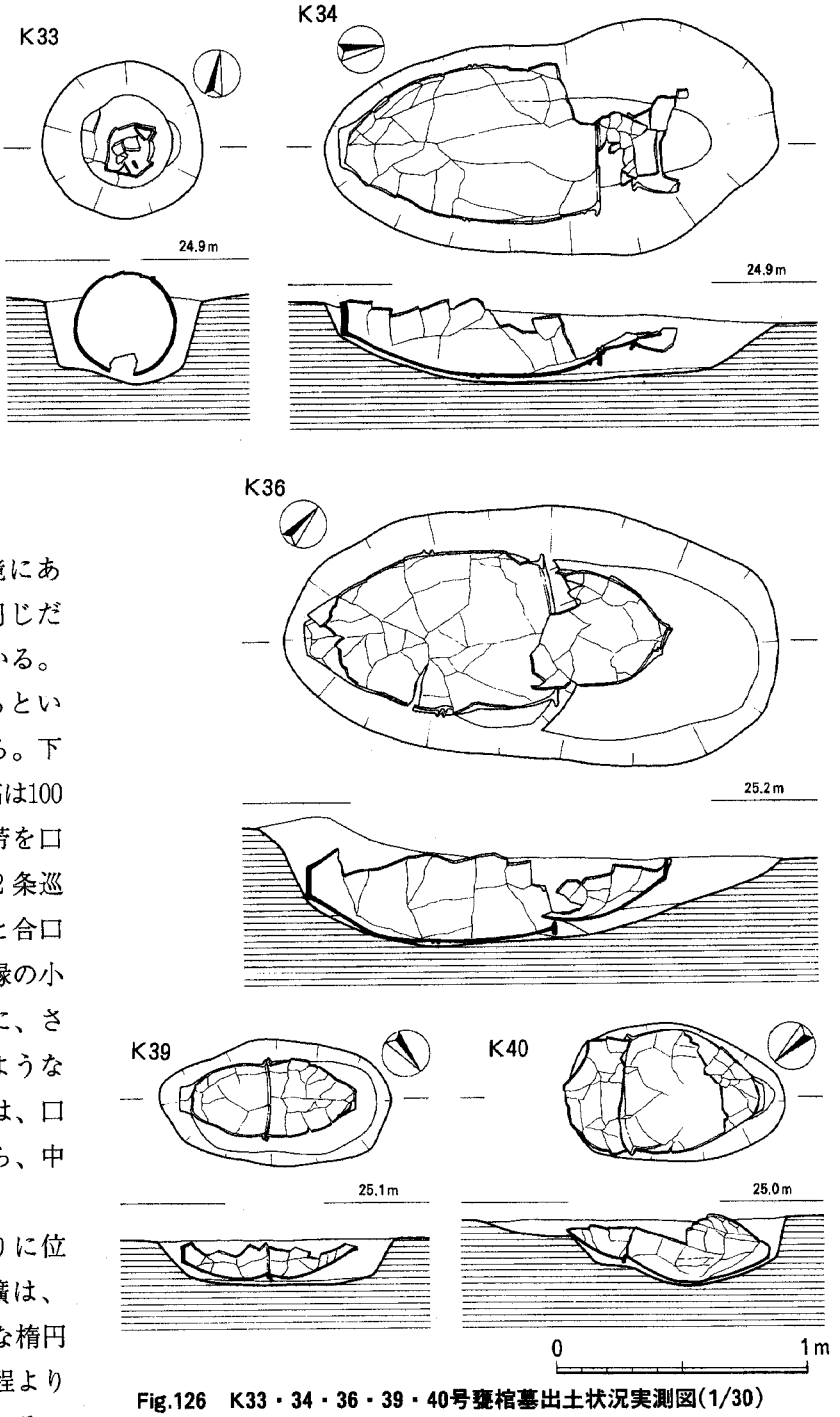


Fig.126　K33・34・36・39・40号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K36号甕棺墓　A1群の西寄りに位置し、K8と並んでいる。墓壙は、長軸198cm、短軸101cmの大きな楕円形で、深さは45cmを測る。中程より下棺側は一段深く掘り込んでいる。ここにT字形口縁の甕を下棺に据え、胴部上半を打ち欠いた中型の甕を挿入している。下棺の凸帯は、胴部中位だけに2条巡っている。

K39号甕棺墓　A群K36の北東2mに位置する小児棺。上、下棺とも、同じような器形に小型甕を使い、接口式にほぼ水平に埋置する。墓壙も両棺の形状に合わせ、整った楕円形に掘り込んでいる。

K40号甕棺墓　弥生中期中頃のK41の大型甕棺と並んだようにして出土した。墓壙は上面がカットされ、輪郭が明確でない。壙底はK41とは逆に南西側に傾斜している。下棺は、L字形口縁の小型甕で、口縁部を打ち欠いた小型甕を接口式にして埋置している。

K44号甕棺墓　A群の中心より北西側に離れて4基の甕棺墓がある。K44は、そのもっとも西端にある。墓壙は長楕円形で、長軸194cm、短軸88cm、深さ60cmである。大型甕を接口式にした複棺で、下棺側

の壙底は、器形に合わせて一段深く掘り込んでいる。器高は、下棺が93cm前後、上棺が83cm前後である。口縁部は、両棺ともT字形で、外に傾いている。凸帯は、胴部に2条巡らしている。

K48号甕棺墓　A群の中間に属する。墓壙の北側半分が削平され、甕も胴部の一部を残しているにすぎない。断面台形の凸帯が2条あることから、中期中頃以降の時期が推定できるが、器形、埋置方法など不明である。

K49号甕棺墓　K48のに接するように並んでおり、西ではK80を切っている。下棺に甕、上棺に鉢を接口式に埋置する。下棺は、胴部上半に張りがあり、倒卵形の形状となっている。上棺の鉢はL字形の口縁部で、口縁直下に背の低い三角形凸帯。

K54号甕棺墓　細形銅戈と磨製石剣切っ先を出土したK53の南西側にある。墓壙は、長軸165cm、短軸88cmの楕円形で、壁はほぼ直に掘り込まれている。下棺の甕は、器高75cm前後で、口縁部はT字形に両端に張り出し、肥厚している。その外端部は、口唇状の断面となっている。上棺の甕は、器高60cm前後で、L字形の口縁部がつく。口縁部直下に2条の三角形凸帯が巡っている。

K55号甕棺墓　K54の北西1mに位置している。墓壙は削平されて、もとの形状をとどめていないが、直径85cm前後の円形だったのだろう。いまは底部のみが残り、器形、埋置方法など不明。底部の作りからすると、弥生前期末か。

K57号甕棺墓　A2群、K54の北西2.5mにある。大部分が削平され、壙底に張り付いた状況で甕を検出した。甕はL字形口縁で、胴部に断面台形の凸帯が2条残っていることから、中期中葉の時期であろう。

K58号甕棺墓　K57の北西側にあり、墓壙の西側は大きく破壊され消失している。壙底

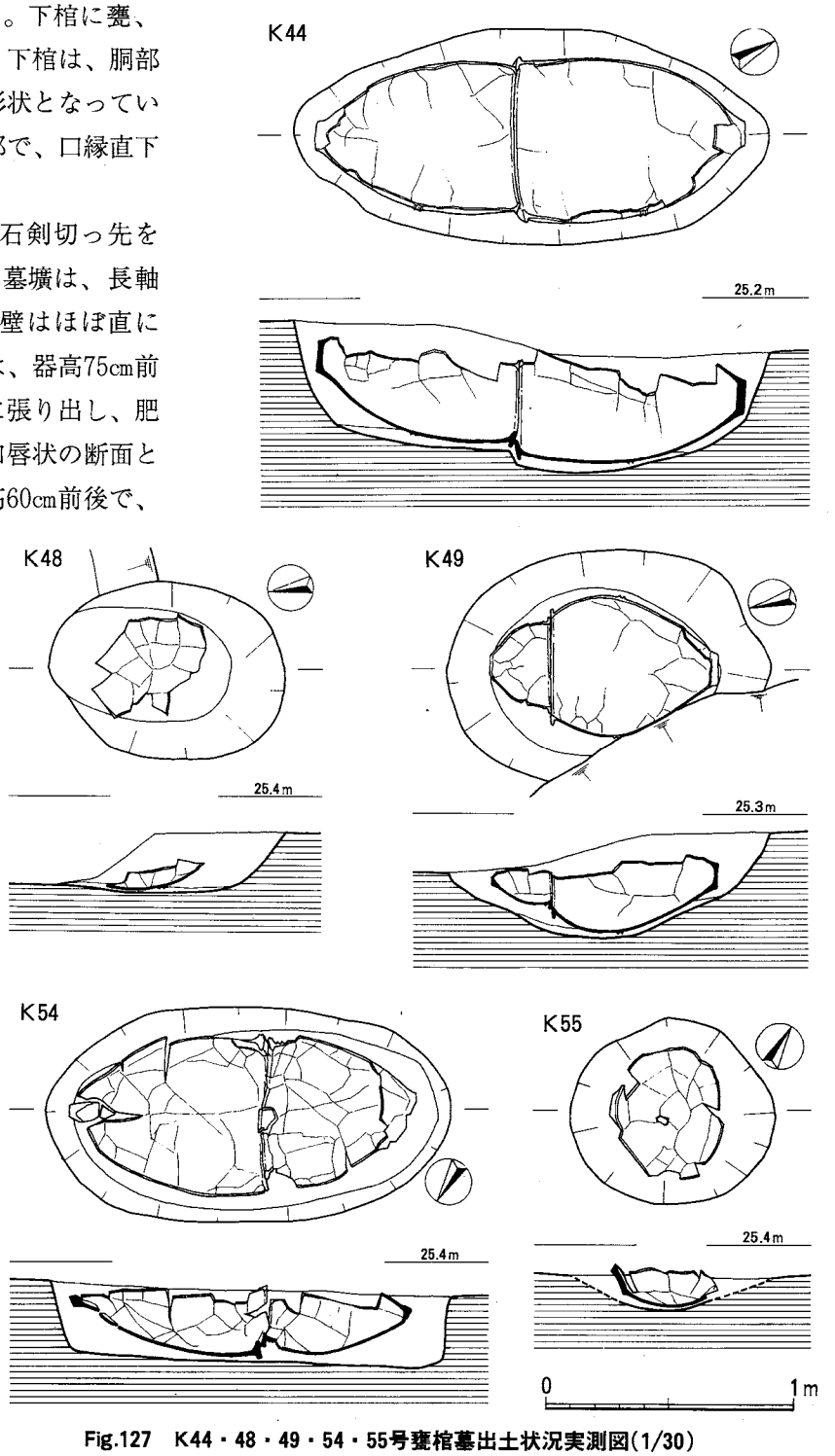


Fig.127　K44・48・49・54・55号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

は、破壊された西に向かって傾斜しており、口縁部の破片が数片残るにすぎないが。これを下棺側とした。下棺の口縁部は、上方にく字形に屈曲し、口縁部直下に三角形凸帯を１条貼りつけている。上棺も同じような形状の口縁部である。大石地区では、新しい時期の一群に属する。

K61号甕棺墓　Ａ２群にあり、南東2.5ｍにＭ７号木棺墓と磨製石剣切っ先、朱が出土したK81がある。長軸161cm、短軸103cmの楕円形墓壙に、大型甕と鉢を接口式にして水平に埋置している。面白いのは、壙底に接する両棺の合口部を、溝状に深く掘り込んでいることである。下棺は砲弾形の胴部にＴ字形口縁がつく。器高は95cm前後。上棺の鉢は、口径78cm、器高40cm前後。

K63号甕棺墓　K61の南西2.5ｍにある。楕円形の墓壙に胴部上半を欠いた大型甕が斜めに埋置されているが、次のような理由から複棺の可能性が強い。単棺にしては墓壙の長軸が209cmと異様に長く、上棺を据えるスペースがあること。また下棺が水平ではなく角度をもって埋置され、先のスペースが上棺を据えやすいように一段浅くなっていることである。

K66号甕棺墓　Ａ２群の南寄りにあるが、30cmに満たない小破片である。墓壙の輪郭も明確ではないが、壙底のようにわずかに窪んでいることから甕棺墓とした。

K69号甕棺墓　Ａ２群の北西端部に位置する。墓壙の南西側上部が削られて、元の姿をとどめていない。墓壙は北東方向に斜めに掘り込み、鉢と大型甕を接口式にして埋置している。下棺は、器高90cm、口径70cm前後で、張りのある胴部に、厚みのある小さなＴ字形口縁部がつく。胴部中位よりやや下方に背の低い三角形凸帯を

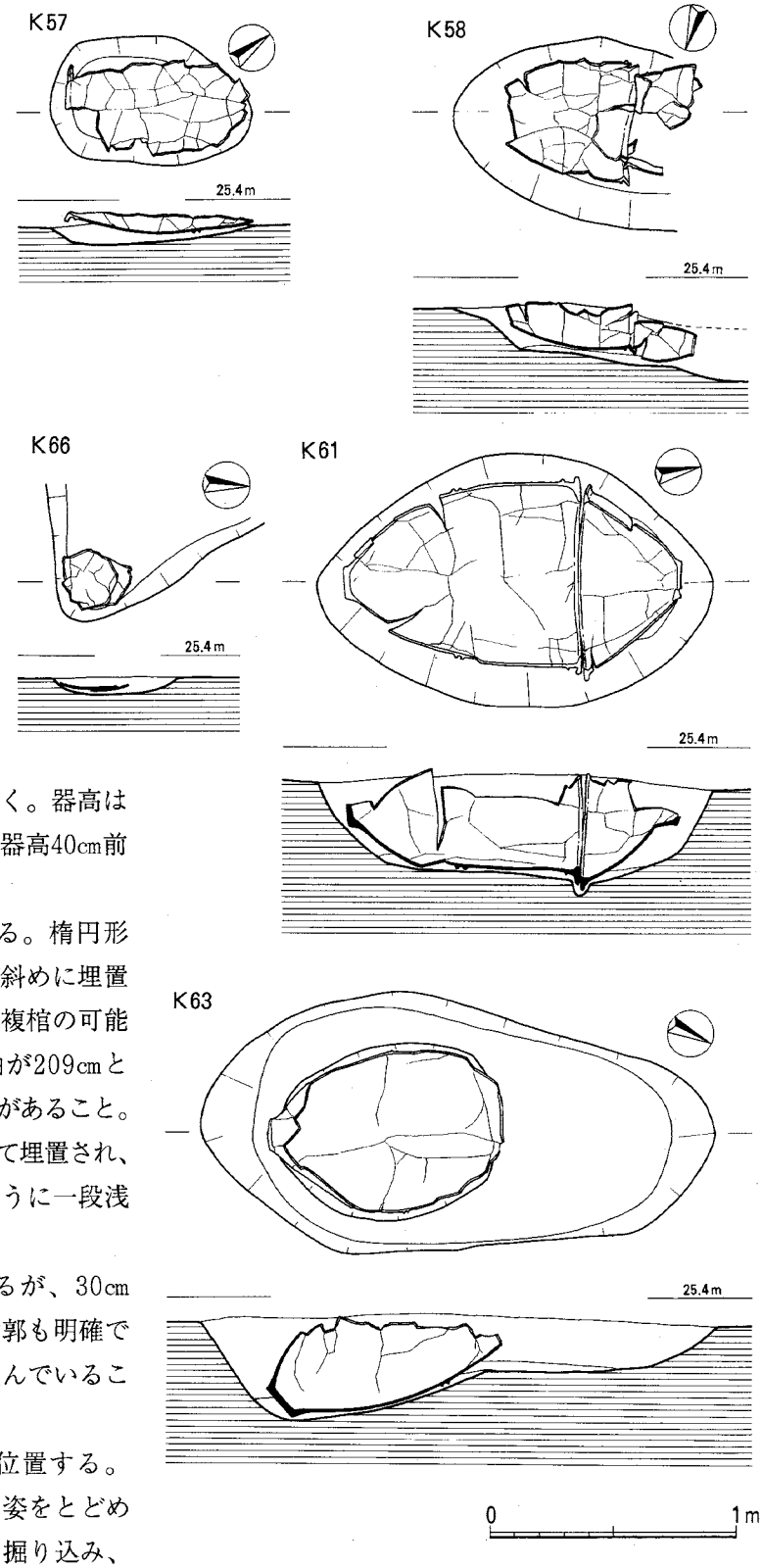
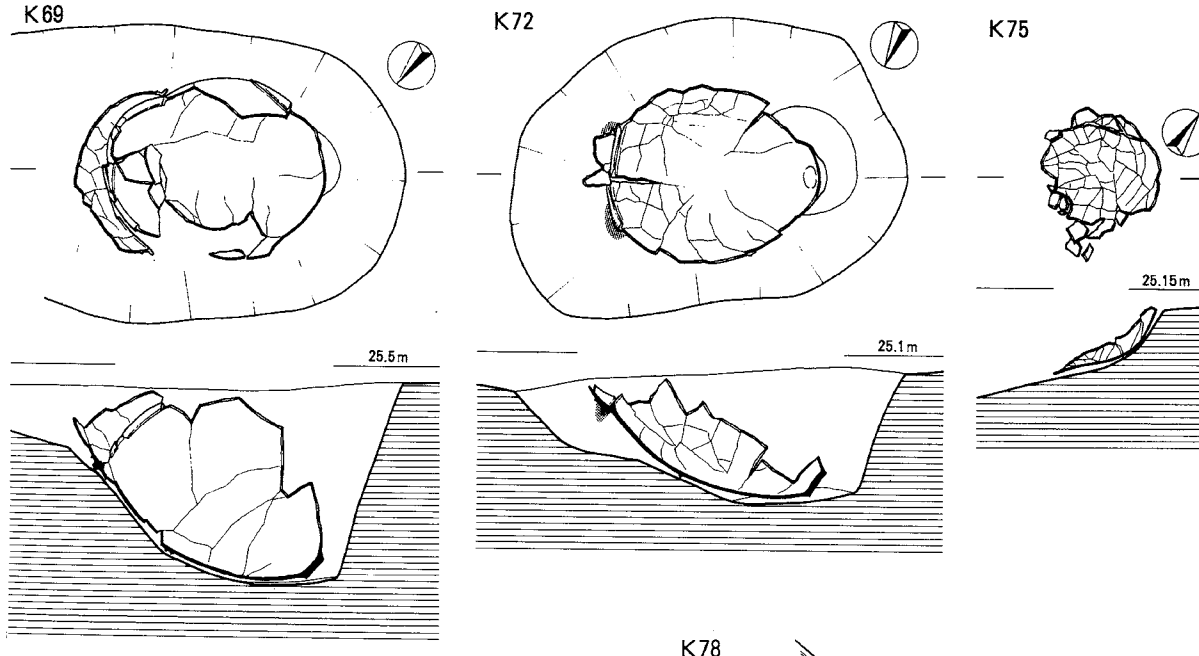
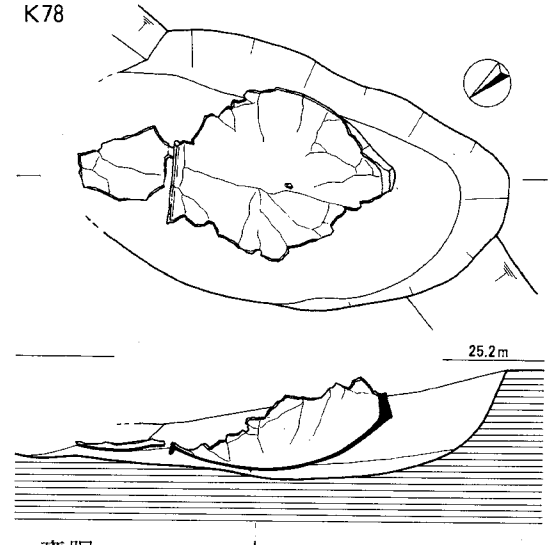


Fig.128　K57・58・61・63・66号甕棺墓
出土状況実測図(1/30)





2条巡らしている。上棺の口縁部は、外側に強く張り出さないL字形で、直下に三角形凸帯を1条貼りつけている。弥生中期前半の時期と判断した。

K72号甕棺墓　K69の北東2mにある複棺。墓壙は、長軸155cmで、不整楕円形。K69と同じように壙底は、斜めに掘り込まれているが、頭位は逆向きである。この壙底に接して、大型甕の下棺に、鉢を接口式にして埋置している。上、下棺ともに、K69とよく似た特徴をもっている。合口部に粘土で目張りをしている。

K75号甕棺墓　A2群の南縁側にある。大部分が壊され、甕胴部の破片が壙底に張り付いた状況で出土した。残った破片の胎土やカーブからすると、弥生前期末の金海式の可能性が強い。

K78号甕棺墓　A2群の北端部に位置し、細形銅剣、細形銅矛を出土したK45と細形銅剣、管玉、朱を出したK51の間にある。大きく削られているが、接口式の口縁部が残っていることから、ほぼ水平に埋置した複棺であることがわかる。下棺は、張りのある胴部に、肥厚気味の口縁部がつく、胴部中位よりやや上方に、背の低い三角形凸帯が1条巡る。下棺の胴部には、焼成後の穿孔がある。弥生中期前半。

K79号甕棺墓　A2群の北端にあるが、上部に農道の溝があり、著しく削平され、破片も移動していることから、埋置方位、形状など不明。日常の土器ではなく、大型甕の破片であることから、甕棺墓とした。

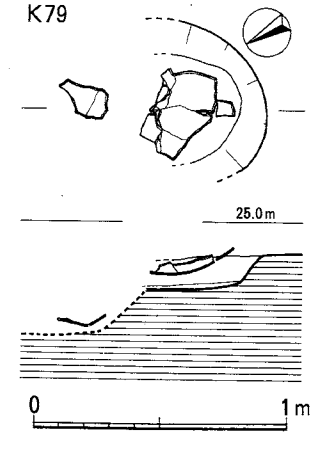


Fig.129　K69・72・75・78・79号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

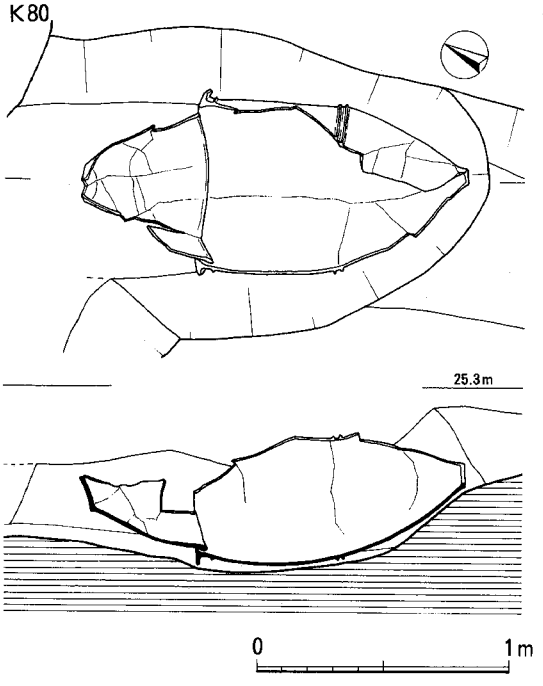


Fig.130　K80号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

底からハ字形に直線的に開き、端部を外側に折り曲げたように肥厚させて口縁部としている。断面観察では、折り曲げたように見えるが、粘土帯を外側に二重に貼り付けたことも考えられる。端部は、丸味を持たせるために、粘土を継ぎ足していることは、間違いない。胎土には、8㎜大以下の砂粒を多く含んでいるが、下甕と大きな違いはない。焼成はよく、色調は、明黄褐色。粘土帯は8段、器面の調整は、内外面ともにヘラナデ。黒斑は、外面の約3分の1程を占める。

下　棺　砲弾形の器形で、分厚い作りのT字形口縁部が付く。口縁部は、断面で粘土の貼り付け方がよく分かる。外端部は、強い横ナデで、浅い口唇状となっている。復元口径70㎝、残存部器高83.8㎝。胎土、色調ともに上棺の鉢とよく似ている。凸帯は、口縁下、胴部とも断面三角形である。

K83号甕棺墓　A2群、K61の北側に位置している。墓壙の東側が壊され、長軸は不明である。おそらく下棺の大型甕の大きさからすると、200㎝を超すものと思われる。

K80号甕棺墓　A2群、磨製石剣、朱を出土したK81の北3mにある。墓壙の一部を農道の溝で切られているが、元の平面プランは、長軸200㎝前後の長楕円形だったと思われる。下棺は、大型甕、上棺は鉢の組み合わせで、上棺の鉢を挿入している。下棺は、壙底に接するようにして埋置している。検出時には、口縁部を略した鉢と考えていたが、西谷正九州大学教授より、無文土器の可能性が強いとの教示を受け、関連資料や文献などをいただいた。ご丁寧な指導を受けたにもかかわらず、その後の類例調査が進んでいないが、どうにか接合復元できたので、下甕と合わせて図示する。

上　棺　復元口径58.1㎝、底径13.9㎝、器高44.9㎝。平

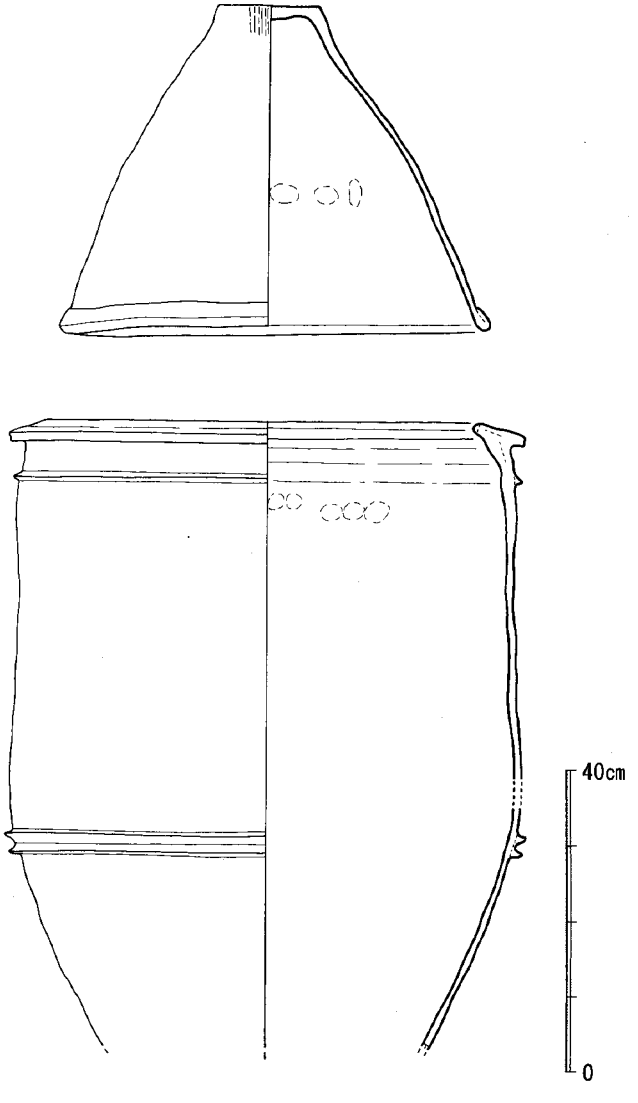


Fig.131　K80号甕棺実測図(1/10)

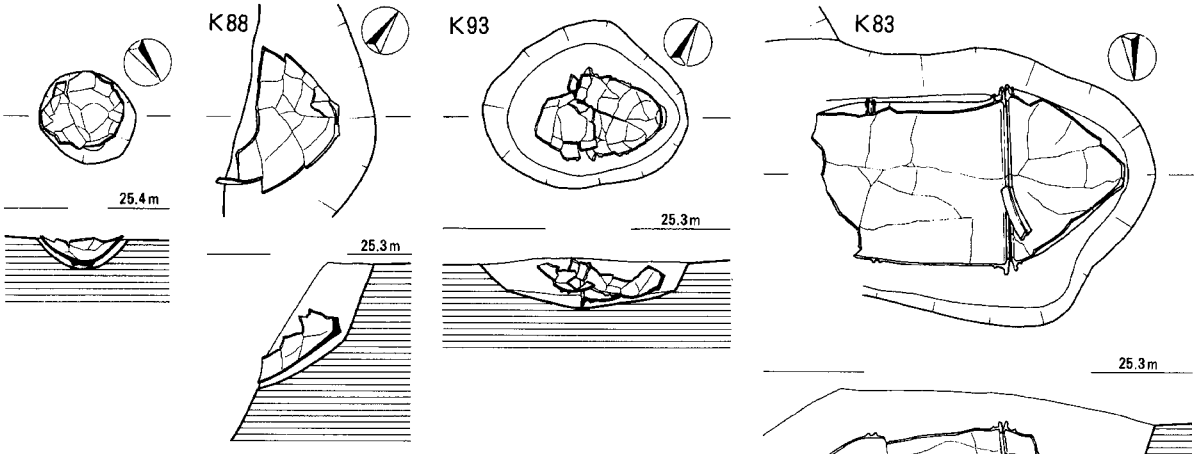


Fig.132　K83・85・88・93～95号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

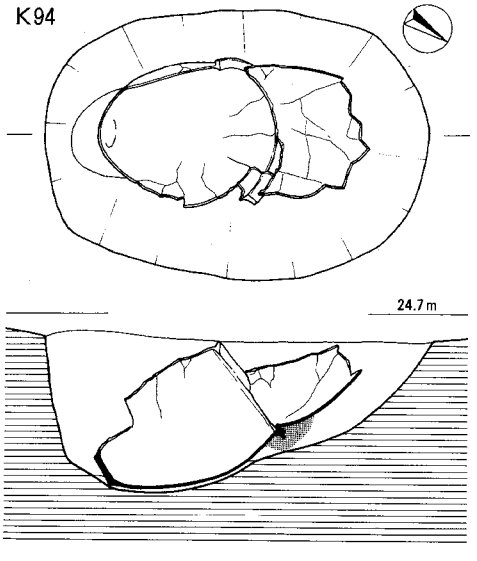
下棺は、T字形口縁で、断面台形の凸帯を、口縁部直下に1条、胴部中位に2条巡らしている。上棺は、下棺とほぼ同じ口径をもつ鉢で、器高は45cm前後であろう。

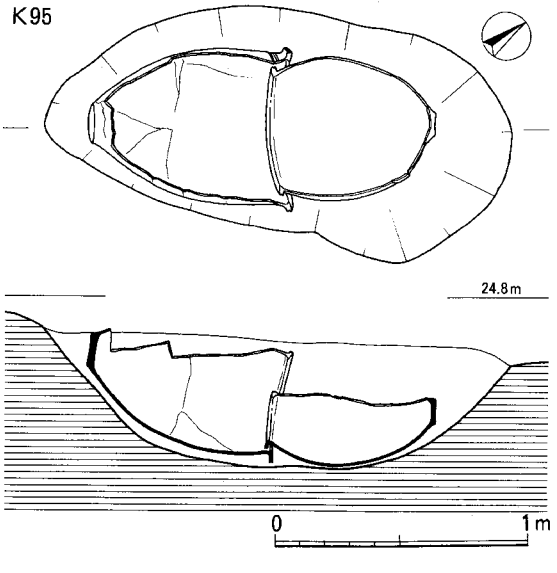
K85号甕棺墓　同じA2群にあり、細形銅剣、磨製石剣切っ先が出土したK51の西側に位置している。円形の土壙に壺の胴部下半だけが残っている。

K88号甕棺墓　A2群K54の南西側にある。後世の溝で墓壙のほとんどが壊されているが、わずかに残った墓壙から、埋置方位や、埋置角度など、おおよその推測はできる。壙底は、西に傾いていることから、残っている底部は上棺と考えられ、外に開く形状から鉢とした。南西側のスペースからすると、下棺は大型甕が用いられたのであろう。

K93号甕棺墓　墓壙は、長軸80cmの楕円形の小児棺である。上、下棺ともに、L字形口縁の小型甕で、上棺は口縁部を打ち欠き、下棺に挿入している。下棺は、外面が丹塗りで、断面M字形の背の低い凸帯を、口縁部直下に1条、胴部に2条貼り付けている。

K94号甕棺墓　A群とB群の境に位置している。B群の中心が北側に離れていることから、B群に属しているように見えるが、その埋置方位が、B群と直交する北西～南東方向であることから、南東隅のK172をとを結ぶラインより東側をA



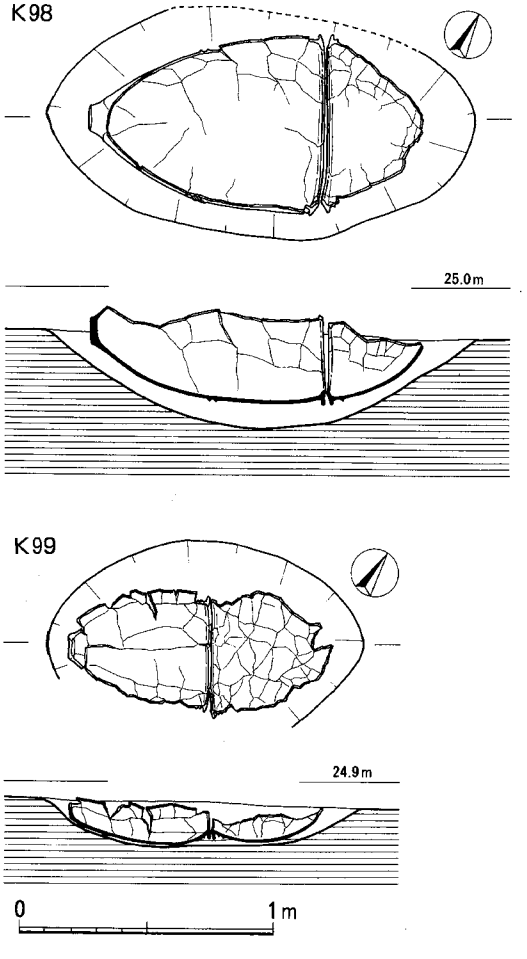


群とすべきか。墓壙は楕円形で、長軸152cm、短軸107cm、深さ61cmをはかる。ほぼ同じような器形の甕を接口式にして、南東方向に傾斜をもたせて接口式に埋置している。上、下棺ともほぼ同じような大きさの甕で、凸帯はない。上棺の口縁端部は、口唇状で、上下に縦の刻み目を加えている。合口部に厚めの粘土目張りがある。

K95号甕棺墓　K94の南東1mにあり、K94と異なり、ほぼ水平に埋置している。器高の異なる甕を使った複棺で、通例では壙底の傾斜した方に下棺を据えるが、本例では、壙底の高い方に大きめの甕、壙底の低い方に小さめの甕と逆になっている。また大きめの甕の方が、墓壙に片寄せて埋置していることからも、小さめの甕が上棺で、挿入式にしたことがわかる。上、下棺ともに胴部に張りがあり、口縁部の断面は、口唇形で、上棺には刻み目が加わっている。下棺の器高は、78cm、上棺は66cm前後である。

K96号甕棺墓　A1群の北西側に位置している。複棺と思われるが、上棺は小破片となり、口縁部が残っていないことから、器種、形状など不明。壙底断面の傾きからすると、鉢の可能性が強い。下棺は、器高82cm前後の砲弾形をした甕で、口縁部は、外側への張り出しが弱く、整ったT字形にはなっていない。胴部に2条の三角凸帯を巡らせている。

K97号甕棺墓　K96の西側に近接しているが、墓壙は切り合ってはいない。楕円形の墓壙は、長軸148cm、短軸95cmを測る。甕と鉢を接口式にして、北東より20度の傾斜で埋置している。下棺は、胴部上半が内湾しており、胴部中位に三角凸帯を1条貼り付けている。上棺は深みのある鉢で、胴部上位に、三角形凸帯2条が巡る。合口部には、粘土の目張りがある。



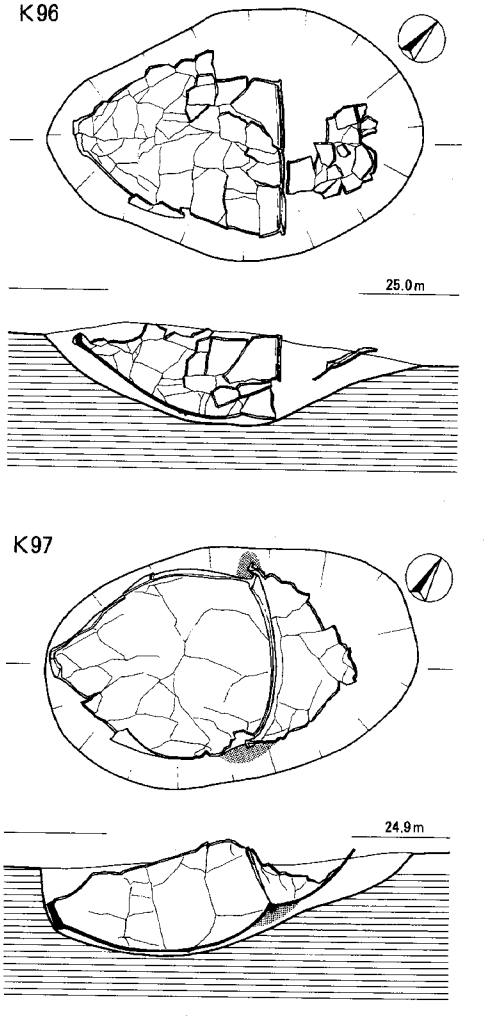


Fig.133　K96～99号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K98号甕棺墓　A群の甕棺墓の多くは、その埋置方位が北西～南東を取るのが多いが、その密集状況から見ると、K146やK179付近を境にして北西の一群と南西の一群に分けられそうである。本例は北西の一群にある。墓壙は、両端が尖り気味の楕円形で、大型甕を下棺に、鉢を上棺にして接口式にしている。壙底は、上、下棺の形状に合わせて掘り込んでいるが、壙底より約10cm浮いて埋置している。下棺の器高は、95cm前後で、T字形口縁部は、上面が水平でなく、外端側に垂れ気味となっている。

K99号甕棺墓　K98の北東側に並んだ接口式の複棺である。楕円形の墓壙は、上部が著しく削平され、16cmの深さを残すだけである。同じような器形の甕が用いられているが、底部が残っている南西側を下棺とした。両棺の口縁部直下には、断面三角形の凸帯２条巡っている。下棺の器高は、56cm前後である。

K100号甕棺墓　Ａ１群の南西縁に位置する複棺。墓壙の長軸は240cmと長大で、北西の上棺側は、一段浅く掘り込まれ、両棺が南東側に偏って埋置しているので、十分な空間を残している。下棺は、100cmを超す大型甕で、胴部上半はわずかに内湾して口縁部へと続いているので、口縁部は内側に強く張り出した作りとなっている。凸帯は、胴部に２条。上棺の鉢は底部から直線的に外反し、下棺と同じような口縁部が付く。口縁部直下に２条の凸帯。上棺の口縁部側だけに、粘土の目張。

K101号甕棺墓　K100の北側に方位を直交するように埋置され、K102に切られているので墓壙の北東側は不明である。26cmの深さに残った墓壙に、水平に埋置された大型甕が残っている。砲弾形の形状で、口縁部近くでわずかに内湾している。口縁部は、整ったT字形となっている、胴部中位に２条の三角凸帯が巡る。

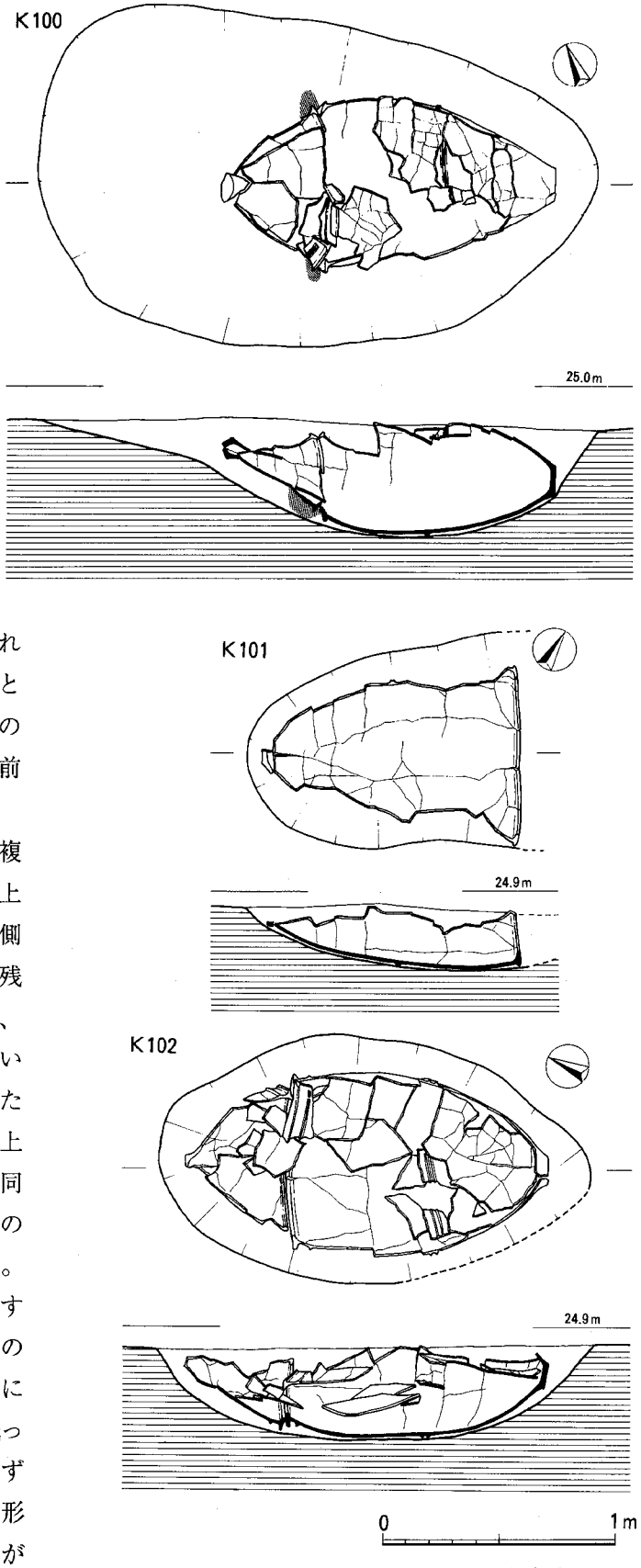


Fig.134　K100～102号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

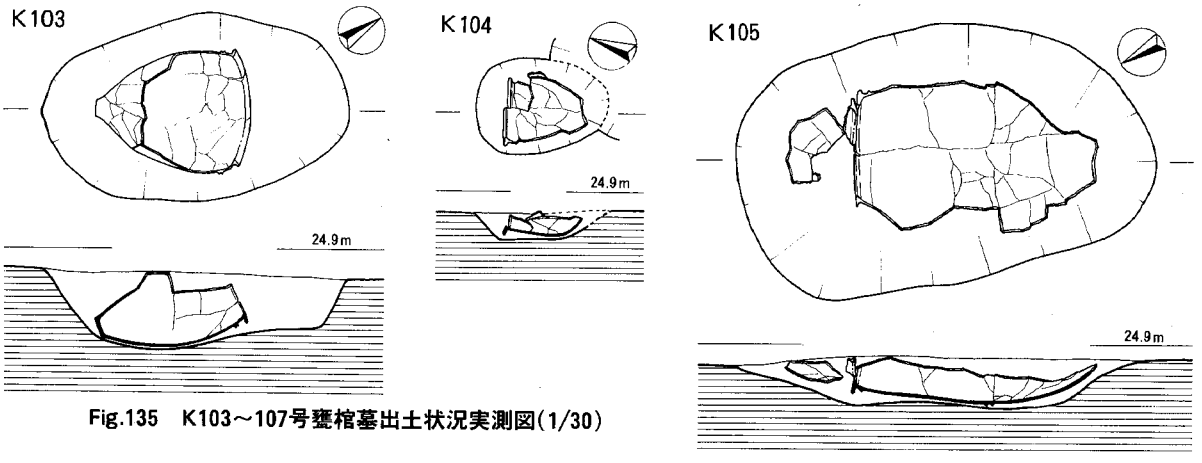
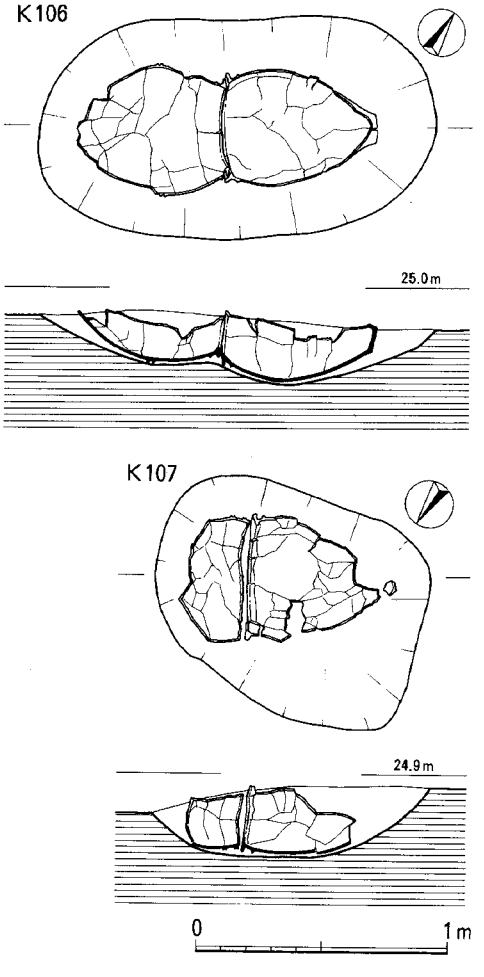


Fig.135　K103～107号甕棺墓出土状況実測図(1/30)



K102号甕棺墓　南西側のK101を切っている。長軸185cmの長楕円形の墓壙の中央に、鉢を上棺に、大型甕を下棺に接口式にして、水平に埋置している。下棺は、砲弾形の器形で、115cm前後と背が高い。その分、器壁も厚めで、口縁部の作りもがっしりしている。三角形凸帯が、口縁部直下に1条、胴部中位に2条巡っている。上棺の鉢は、直線的に外反し、逆三角形の器形となっている。口縁部は、T字形で、直下に三角形凸帯が1条巡っている。粘土の目張りはない。

K103号甕棺墓　A群の北西側にあるK98～109は、大石地区の中でも特に密集している一群であるが、K103はK201を切っている。長軸120cmの中央に中型の甕を、やや角度をもたせて埋置している、口縁はL字形で、直下にM字形の凸帯1条を巡らせている。器高は、55cm前後。墓壙に余裕があることから、複棺の可能性もあるが、上棺と思われる破片は残っていない。

K104号甕棺墓　K102の北西側の小児棺。K102で切られている。墓壙の長軸は、55cm前後で、やや南東側に偏って小型甕を埋置している。甕の口縁部は、L字形で、凸帯はない。

K105号甕棺墓　B1群にある鉢と大型甕を用いた複棺である。墓壙は、長軸166cm、短軸102cmの不整楕円形で、壙底は平坦ではなく微妙な凹凸がある。下棺は、T字形口縁をもつ砲弾形の器形で、口縁部直下に1条、胴部に2条の三角形凸帯を巡らせている。上棺は、残っている破片から、T字形口縁部をもつ鉢であることがわかる。合口部に粘土の目張りはない。

K106号甕棺墓　B1群の中で、もっとも西端にある。長軸157cmの楕円形墓壙に、中型の甕を接口式にして、ほぼ水平に据えている。面白いのは、安定するように2個の形状に合わせて壙底を掘り込ん

でいることである。下棺は、器高61cm前後で、倒卵形の胴部となっている。上棺は、底部を欠いているので器高は不明だが、一回り小さいようである。下甕には、凸帯は口縁下に１条のみだが、上棺には、胴部中位にも２条の凸帯が巡っている。

K107号甕棺墓　K106の北側７ｍにある小児棺。墓壙は、いびつな平面プランで、壁も緩やかで、鋭利な掘り込みではない。下棺はＬ字形口縁の中型甕。口縁下に三角形凸帯を１条巡らせている。上棺は、口縁部打ち欠きで、胴部にM字形の凸帯が２条巡る。

K108号甕棺墓　Ｂ１群の密集した甕棺墓の中にある。削平だけでなく、攪乱も受けたのか、破片の位置が動いているものが多く、K201の下甕底部が落ち込んでいる。、下棺は、Ｌ字形口縁をもつ甕で、口縁下に１条の三角形凸帯がある。上棺は、胴部の凸帯より上部を打ち欠いた甕で、接口式の合わせ方をしている。

K109号甕棺墓　Ｂ１群に属し、K108の東に並んでいる。墓壙は、長軸121cm、短軸61cmの楕円形。深さは、26cmを測る。同じような器形の甕を水平に据えているので、上、下棺の区別が難しいが、墓壙に偏って埋置している南東側を先に埋置したと考えて、下棺とした。両棺ともに、口縁下に三角形凸帯を１条巡らしている。合口部は、壙底より７cm浮いているが、粘土の目張りなどは認められない。

K110号甕棺墓　Ｂ１群の中央部南縁にある。器高50cm前後の甕だけの単棺。楕円形の墓壙は、甕の器形に合わせて口縁部側が幅広くなっている。甕は、胴部の最大径が胴部中位よりやや上にあり、口縁部下で締まっていない。三角形凸帯は、口縁下に１条巡る。

K111号甕棺墓　B群の北西の一群と南東の一群の中間に位置し、K110より2.5ｍ東側に離れている。K110の墓壙が、甕の器形に合わせて掘り込んでいるのに対し、本例の墓壙は、甕の形状とは関係なく、87cm×80cmと円形に近い平面プランとなっている。甕は、器高65cm前後で、器壁は薄手の作りで、堅く焼き締まっている。

K112号甕棺墓　Ｂ１群は、その密集状況から見ると、さらに北東と南西の小群に分かれるが、K112は、北東側の南西隅に位置している。K113の墓壙と接して

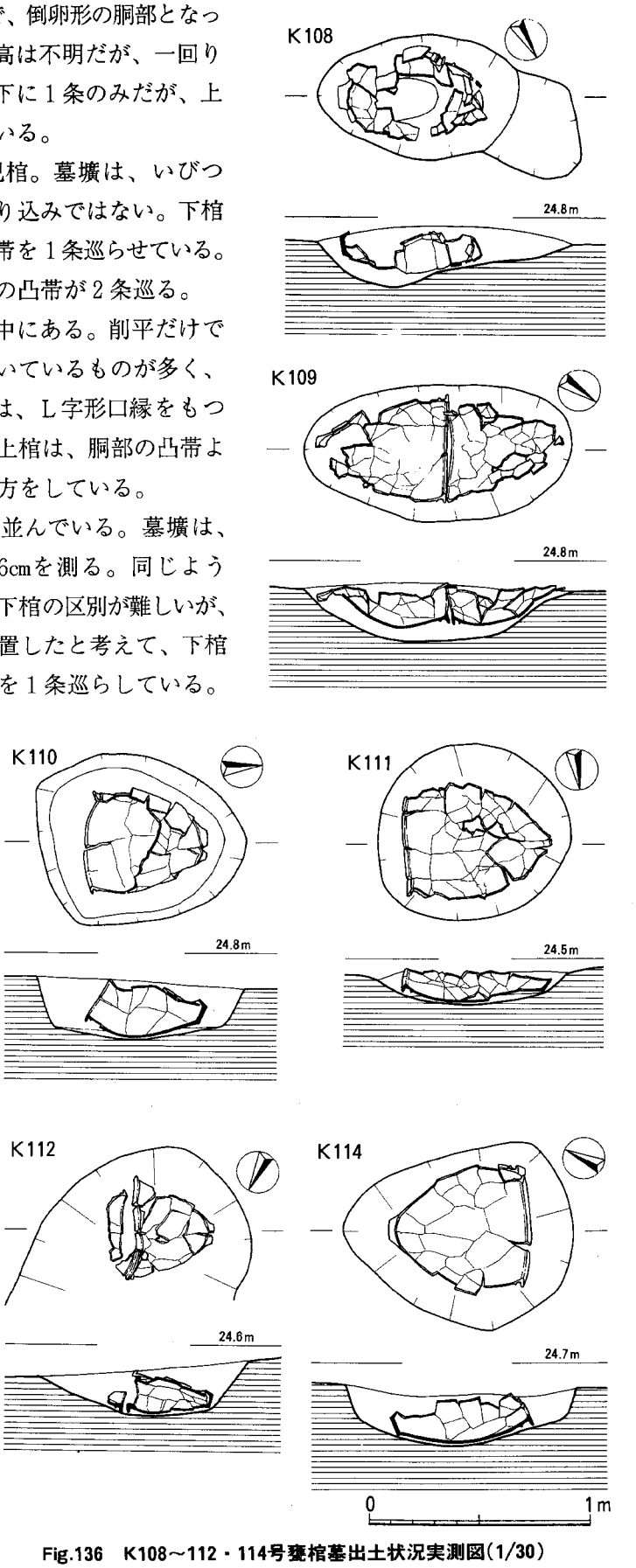


Fig.136　K108～112・114号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

いるが、切り合いは、平面的には確認できなかった。墓壙の長軸は、95cm。後世の削平で、合口部が離れているが、元は接口式だったのであろう。土圧で潰れている下棺は、器高35cm前後の小型甕。口縁部は、L字形で、凸帯はない。上棺も小型甕で、L字形口縁は、内側に小さく突出する特徴をもっている。

K114号甕棺墓　K112のすぐ北西側にある単棺で、K113を切っている。墓壙は、甕の形状に合わせて、隅丸三角形の平面プランで、壁は割合に直に近く鋭く掘り込まれている。甕は、60cmに足りない器高で、中央に埋置している。L字形口縁の上面は、丸く膨らみ、内側へ小さく突き出している。凸帯は口縁部下に1条だけで、胴部にはない。

K116号甕棺墓　B1群の中の北東寄りにある小児棺である。墓壙は、長軸78cmの小さな楕円プランで、器高35cm前後の小型甕を接口式にして埋置している。墓壙壁に接している南側の甕を下棺とした。下棺は、短いL字形口縁で、胴部中位にわずかな張りがある。上棺は、一回り器高が低い甕で、口縁下に三角形凸帯を1条巡らしている。

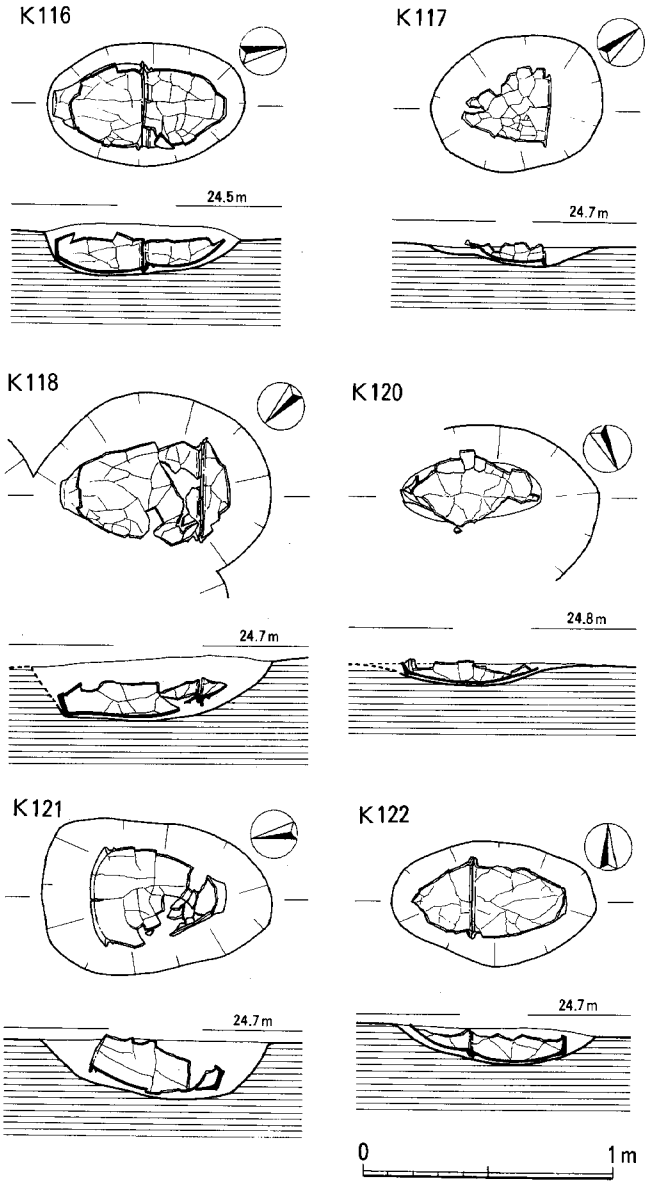


Fig.137　K116～118・120～122号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K117号甕棺墓　K116 の南西側にあり、K125の上部にあることから、埋置時期はK125より新しいことになる。墓壙は、長軸68cm、短軸53cmと円形に近いプランをしている。その中央に小型甕が横倒しに据えられている。別個体の破片もないことから、複棺の可能性はない。甕は、器高30cm前後で、L字形の口縁部となっている。

K118号甕棺墓　K117と同じB1群の中の北東寄りの中にある。K119を切る小児棺で、鉢を上棺に、甕を下棺した複棺である。両棺とも上部を大きく削平されているが、埋置方位や器形は知ることができる。下棺の甕は、L字形口縁で、内側への突出は、断面三角形に尖り気味である。器高は55cm前後か。上棺の鉢の口縁部も、同じような特徴をもっている。ともに口縁下に三角形凸帯を1条巡らしている。

K120号甕棺墓　K118の北西側に接近している。K116～118の小児棺が、大型甕棺に寄り添うように埋葬されていることから、出産時の死亡など母子、親子関係を想像しながら発掘作業を行ったが、むろん根拠があってのことではない。墓壙の深さは、10cmもなく、甕の胴部がわずかに残っているにす

ぎない。おそらく器高60cm前後の中型甕だったのであろう。複棺か単棺かは、不明。

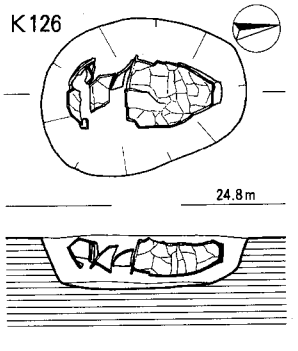
K121号甕棺墓　K120の北側にある小児棺である。器高50cmを超す中型甕の単棺である。甕の器形に合わせて墓壙を掘り込み、水平ではなくやや角度を持たせて埋置している。甕は、張りのある胴部に、L字形の口縁部がつく。

K122号甕棺墓　長軸81cmの楕円形墓壙に、小型甕と鉢を接口式にして埋置している。下甕の器高は、38cm前後で、小さなL字形口縁がつく。上棺の鉢は、わずかにく字形に開いている。

K123号甕棺墓　墓壙は、長軸201cm、短軸123cmの長楕円形で、両端が丸味のない平面プランである。壙底は、緩やかに東に向かって下がり、ここに下棺の大型甕を据えている。口縁部は、厚みのあるL字形で、胴部は背の高い砲弾形となっている。器高は、120cmを超す。上棺の鉢は、底部から内湾気味に立ち上がり、やや上方に開くL字形口縁となっている。口径は、下棺と等しく、密着した合口となっている。鉢の器高は、55cm程か。

K124号甕棺墓　B1群の北西端部近くにある。下棺に大型甕を、上棺に中型甕を挿入しているが、下棺の胴下半分が完全にない。これは埋葬時の打ち欠きではなく、後世の柱穴で壊され、消失したものである。胴部の形状は、典型的な倒卵形ではないが、上半部に張りがある。L字形口縁は、外傾し、口縁下に三角形凸帯が1条、胴部中位に台形凸帯が2条巡っている。上棺の器高は、55cm前後で、口縁部はく字形で、その屈曲部下に三角形凸帯が巡っている。

K126号甕棺墓　B1群の中央部に位置する小児棺である。長軸82cmの楕円形墓壙に、3個の小型甕を連ねて埋置している。下棺は、器高35cm前後で、小さなL字形口縁である。上棺は、破片となっているので、元の位置から動いているおそれもあるが、



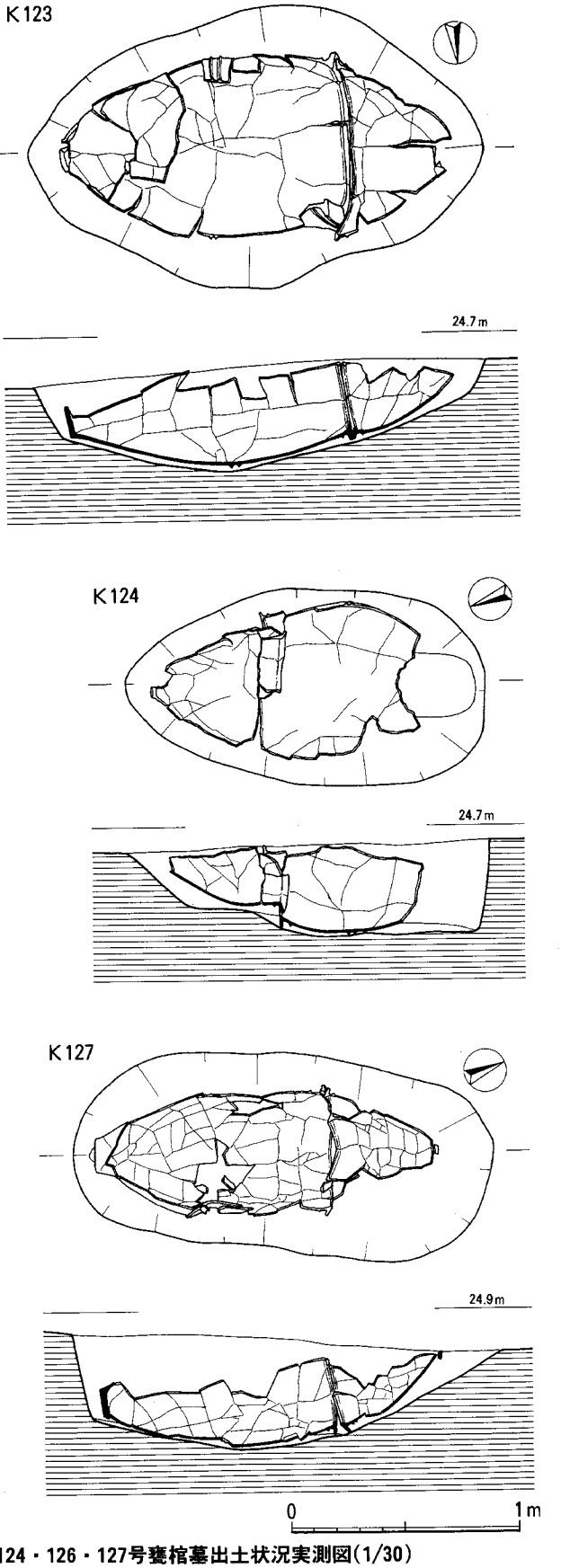


Fig.138　K123・124・126・127号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

胴下半部を打ち欠いた小型甕を、下棺の口縁とは逆にして置き、さらに胴部の破片で覆うような埋置方法である。上棺の２個は、別個体と判断した。

K127号甕棺墓　Ｂ１群の南西寄りの一群にある大型甕棺墓。長軸184cm、短軸89cmの墓壙は、両側辺が並行する楕円形である。下棺は、器高100cm前後で、細長い砲弾形の器形となっている。口縁部は、Ｔ字形であるが内側への突出は弱い。口縁下と胴部の凸帯は、断面三角形である。上棺の鉢は、器高50cm前後と深みがある。口縁部は、Ｔ字形で、口縁下に２条の三角形凸帯を巡らせている。

K128号甕棺墓　Ｂ群の北西と南東の小群の中間に位置している。長軸90cmの整った小さな墓壙で、ほぼ同形の小型甕２個を接口式にして埋置している。ほぼ水平に据えられている西棺を下棺としたが、器高は37cm前後。上棺の器高は、40cm前後なので、わずかに大きい。

K129号甕棺墓　Ｂ群との境界ライン上に位置する小児棺である。墓壙は、71cm×68cmと円に近い平面プランで、頸部を打ち欠いた大小の壺を組み合わせている。下壺の胴部は、中位に最大径があり、38cm前後、底部から頸部までの高さは、28cm前後で、横に張りのある器形である。上壺は、小破片となっているので、形状は不明。胴部のカーブからすると、下壺に比べかなり小型である。

K131号甕棺墓　Ｍ４号木棺墓の北東側にあり、Ａ、Ｂ群の境界ライン上に当たる。墓壙は、長軸198cm、短軸100cmで上棺側に狭まる楕円形をしている。下棺は、器高100cm前後の大型甕で、胴部上半に強い張りのある倒卵形の器形である。口縁下と胴部中位よりやや下方に三角形凸帯を巡らせている。上棺は、器高84cm前後の中型甕で、接口式にして、ほぼ水平に埋置している。凸帯は、胴部にはないが口縁下に１条巡る。

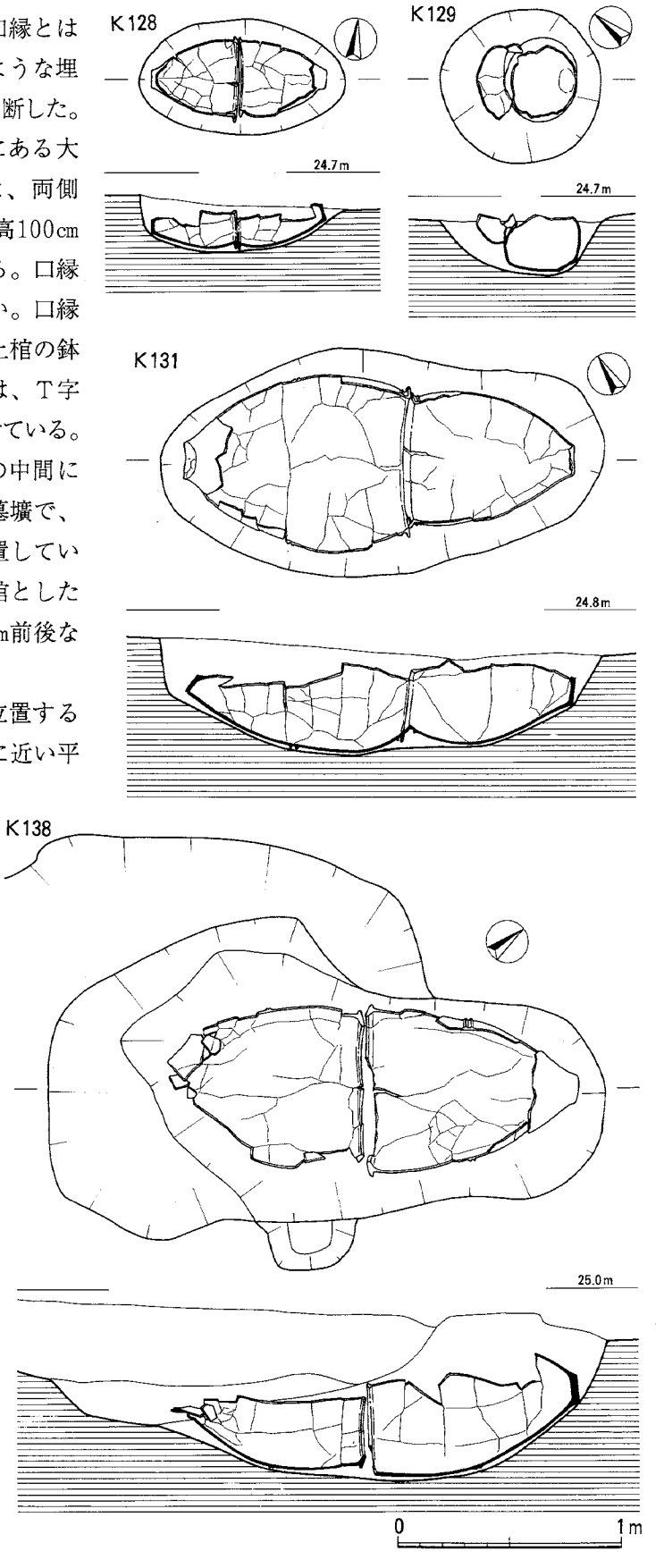


Fig.139　K128・129・131・138号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

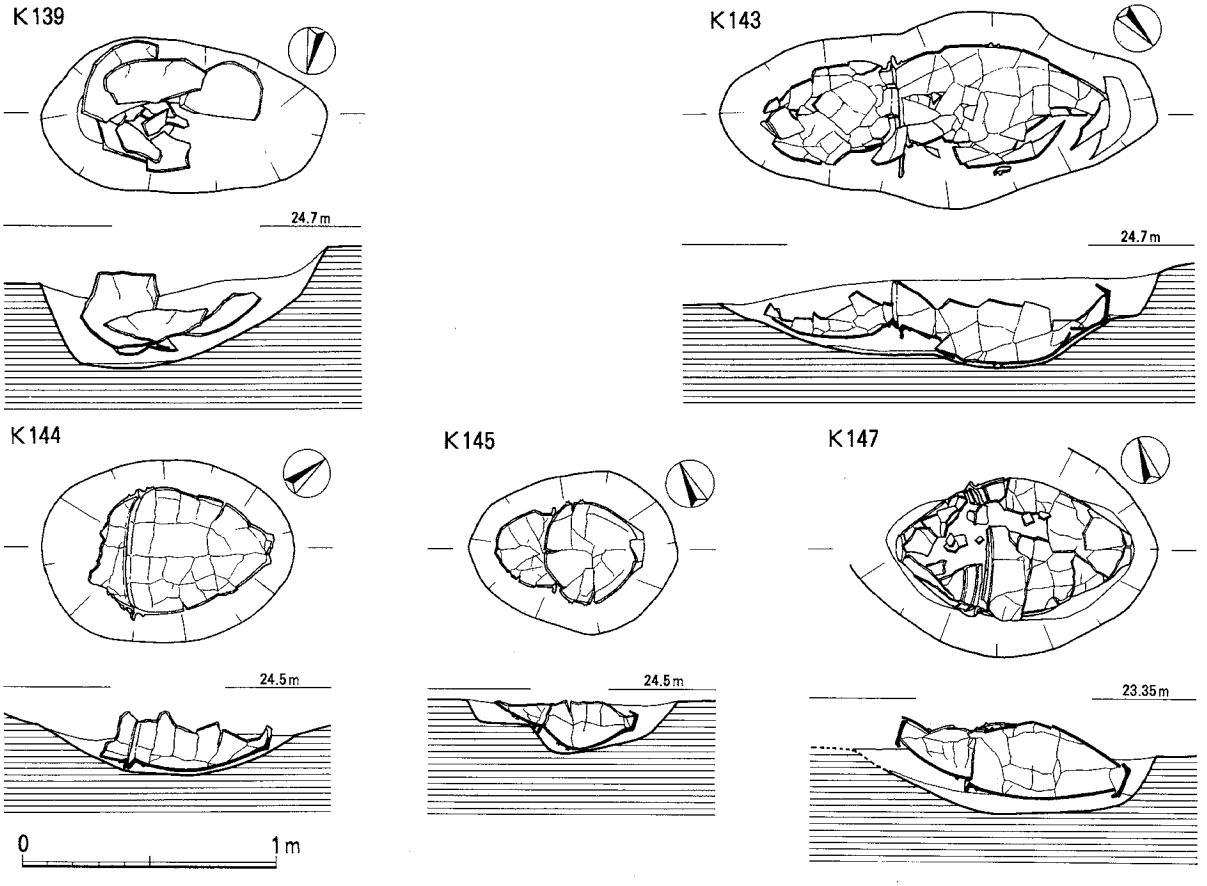


Fig.140　K139・143～145・147号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K138号甕棺墓　K44、96、97とともに、A1群の北西側にやや離れた位置にある。墓壙の南西側は、他の遺構と切り合っているために不整形になっているが、本来のプランは長軸245cm、短軸100cm前後の長楕円形だったと思われる。下棺は、器高93cm、口径70cm前後の大型甕で、口縁部は、内側に張り出し、厚みがある。胴部中位には、背の低い三角形凸帯が2条巡っている。一回り小振りの甕を上棺としたが、器高は90cm前後で、同じような特徴の口縁部がつく。凸帯も胴部に2条見られる。

K139号甕棺墓　細形銅剣を出したK140の南東側に並んでいる。割れた胴部の破片が、長軸113cm、短軸60cmの楕円形墓壙に入っているが、底部や口縁部が失われており、埋置方位や形状など不明。掘り込んだ墓壙があることから、甕棺墓としておく。

K143号甕棺墓　A、B群を区切るラインより北東側にある。墓壙は、70cmの短軸に対して長軸は173cmもあり、異様に細長い平面プランとなっている。下棺は、器高90cm近い甕で、L字形の口縁部がつく。口縁下に三角形凸帯を1条、胴部に台形凸帯を2条巡らせている。上棺は中型甕で、口縁部は、く字形に外反し、屈曲部近くに三角形凸帯。

K144号甕棺墓　B群のほぼ中央部にある小児棺。長軸101cmの楕円形墓壙に、2個の甕を接口式にして埋置している。下甕は、器高58cm前後で、L字形の口縁部は、やや上方に傾いている。上甕の口縁部は、直角に曲がったL字形で、内端は尖り気味となっている。

K145号甕棺墓　A群とB群の間に挟まれた部分にある。長軸85cmの楕円形墓壙は、複棺の形状に合わせて二段掘りされている。上棺は、L字形口縁部をもつ小型甕で、胴部に2条、口縁下に1条のM字形凸帯がある。下棺は、頸部を打ち欠いた壺で、胴部の器高は35cm前後である。胴部の張りは、中位よりやや上方にあり、倒卵形の器形となっている。M字形の凸帯2条が、中位より上に巡る。

K147号甕棺墓　B群の１群と２群の間に位置する複棺の小児棺である。K146の大型甕棺墓から切られているが、棺自体はよく残っている。下棺は、器高65cm前後の中型甕で、L字形口縁部の上面は、丸みがある。上棺は鉢で、口縁部を打ち欠いている。

K152号甕棺墓　B１群にある。長軸96cmの楕円形墓壙に、１個の甕を埋置した単棺墓である。口縁部は、く字形に屈曲し、その上面は、直線ではなく浅く凹んでいる。器高は62cm前後か。

K153号甕棺墓　K152のすぐ東隣に位置している。K154より切られ、また上部のほとんどが削平されている。墓壙は、楕円形の平面プランを想定したが、輪郭は明瞭でない。壙底は、南側に傾斜し、高い方に甕の底部側を据えていることからすると、上棺であった可能性も考えられる。

K155号甕棺墓　B１群に位置する大型甕棺墓で、K156 を切っている。墓壙は、長軸177cm、短軸115cmの大きな楕円形。深さも55cmあることから、甕棺がほぼ完全な形で残っていた。下棺は、胴上半部が締まり倒卵形の器形をしている。器高86cm前後、口径は65cm前後。上棺は、同じような器形の甕で、口縁部を打ち欠いて挿入している。器高は65cm程。

K156号甕棺墓　K155の東に隣接する小児棺である。楕円形の浅い墓壙に、わずかに破片として残っており、墓壙の大きさかすると、甕の単棺であろう。甕の口縁部は、く字形であるが、屈曲は緩やかで丸味がある。器高は50cm前後か。焼成はよく、赤みを帯びた黄灰色となっている。

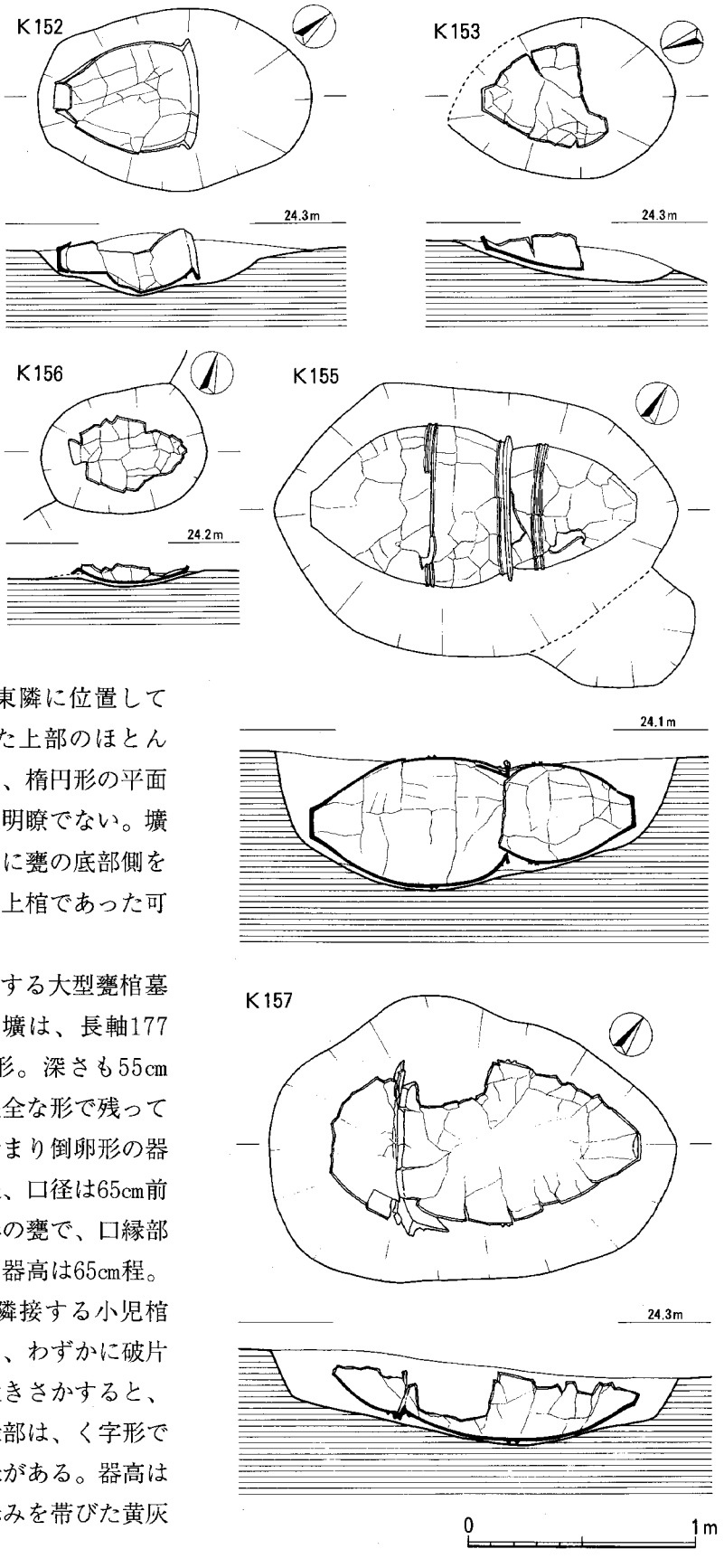


Fig.141　K152・153・155～157号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

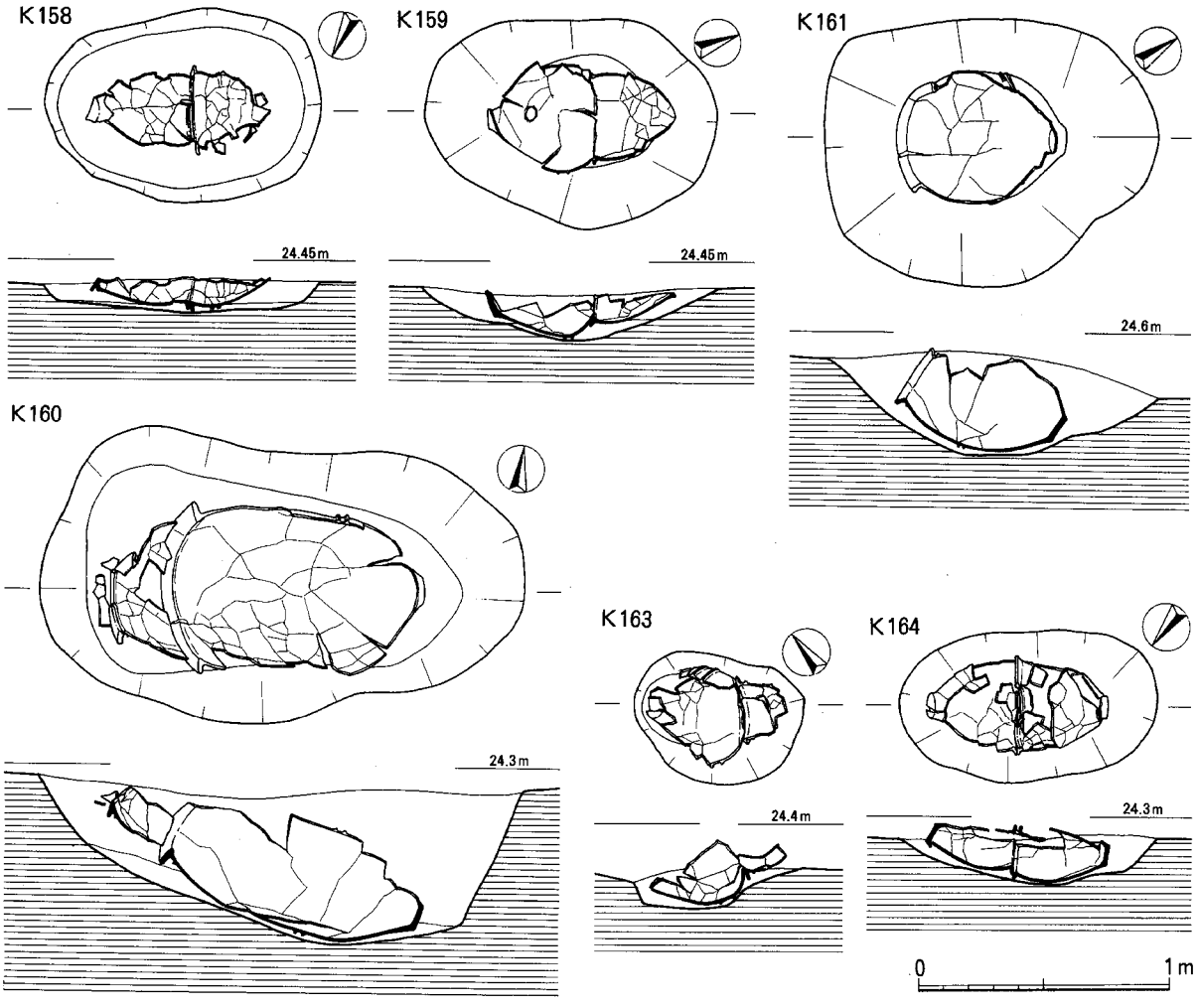


Fig.142　K158～161・163・164号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K157号甕棺墓　B1群のK151の北側に並んでいる大型の甕棺墓である。墓壙は、不整楕円形であるが、長軸179cm、短軸127cmと大きい。下棺は、器高100cm前後の背の高い器形で、しっかりした作りのL字形口縁部がつく。堅く焼き締まった焼成で、赤味を帯びた黄灰色をしている。上棺は、口径が同じような鉢で、L字形の口縁部は、小さく屈曲し、すぐ下に断面台形の凸帯1条が巡っている。

K158号甕棺墓　B1群、K170の北側にある小児棺。浅い楕円形の墓壙に2個の小型甕を接口式にして埋置している。胴部に張りがなく、背の高い東棺が、先に据えられたと考えて下棺とした。器高は、40cm程か。上棺は、胴部にM字形の凸帯を2条巡らしている。

K159号甕棺墓　B1群のほぼ中央にある小児棺である。墓壙は、長軸116cm、短軸84cmの幅広の楕円形である。壺の下棺に、小型甕を覆口式にして墓壙の中央に埋置している。下壺は、胴部の最大径が上方にある無花果形で、その位置にM字形の凸帯2条が巡っている。頸部は打ち欠かれている。
頸部までの器高は、42cm前後を測る。上棺は、L字形口縁部をもつ小型甕で、器高は、40cm弱。

K160号甕棺墓　B2群の北縁沿いに位置する。長軸194cm、短軸108の墓壙は、中程でくびれた長楕円形。3個の甕をつないだ複棺。下棺は、L字形口縁の大型甕、中棺は、下棺よりも一回り小さな甕の胴部より下半部を打ち欠いている。上棺は破片なので、形状不明。おそらく口縁部を打ち欠いて、被せたのだろう。

K161号甕棺墓　B２群の東南端にある。墓壙は、長軸133cm、短軸107cm。やや深めの墓壙に、器高62cm前後の中型甕を、やや傾斜を持たせて埋置している。墓壙の上部は、削平されてはいるが、複棺の可能性は薄い。口縁部は、く字形に外反し、口縁下に１条、胴部に２条の凸帯を巡らせている。

K163号甕棺墓　B１群とB２群の中間に位置する小児棺。墓壙は、激しく削平され、いまは長軸67cm、短軸52cmを測る。下棺は、頸部を打ち欠いた壺で、丹塗りの小型甕を被せている。甕の口縁部は、L字形で、口縁下の凸帯は、口唇形の断面となっている。

K164号甕棺墓　K163の南東側に並ぶ。小型甕を２個、接口式にした小児棺である。墓壙の長軸は、103cm。両棺とも、口縁部はL字形で、上部がやや内傾している。凸帯はない。

K167号甕棺墓　墓壙の端がピットと重なっているので、墓壙のプランは落花生状だが、本来の長軸は、75cm前後だろう。やや大きさの異なる小型甕２個を接口式にした小児棺。両棺とも丹塗りで、しかも胴部には、M字形断面の凸帯を、２～３条巡らした装飾性の高い甕を用いている。下棺の器高は、33cm前後。上棺の器高は、25cm前後だろう。

K169号甕棺墓　B群の中間に位置する大型甕棺墓。墓壙は、長軸235cm、短軸128cm、深さ１ｍを測る。大小２個の甕を水平にして埋置しているが、挿入している小型の甕を、上棺と考えた。下棺は、器高98cm前後の大型甕。上棺は、胴下半部が後世の土壙でカットされているが、80cm前後の器高だろう。

K170号甕棺墓　B２群のほぼ中央にあり、墓壙や甕棺自体の大きさからもB２群の中心的な印象を与える。墓壙は、長軸237cm、短軸122cmで、プランは長楕円形というよりも隅丸

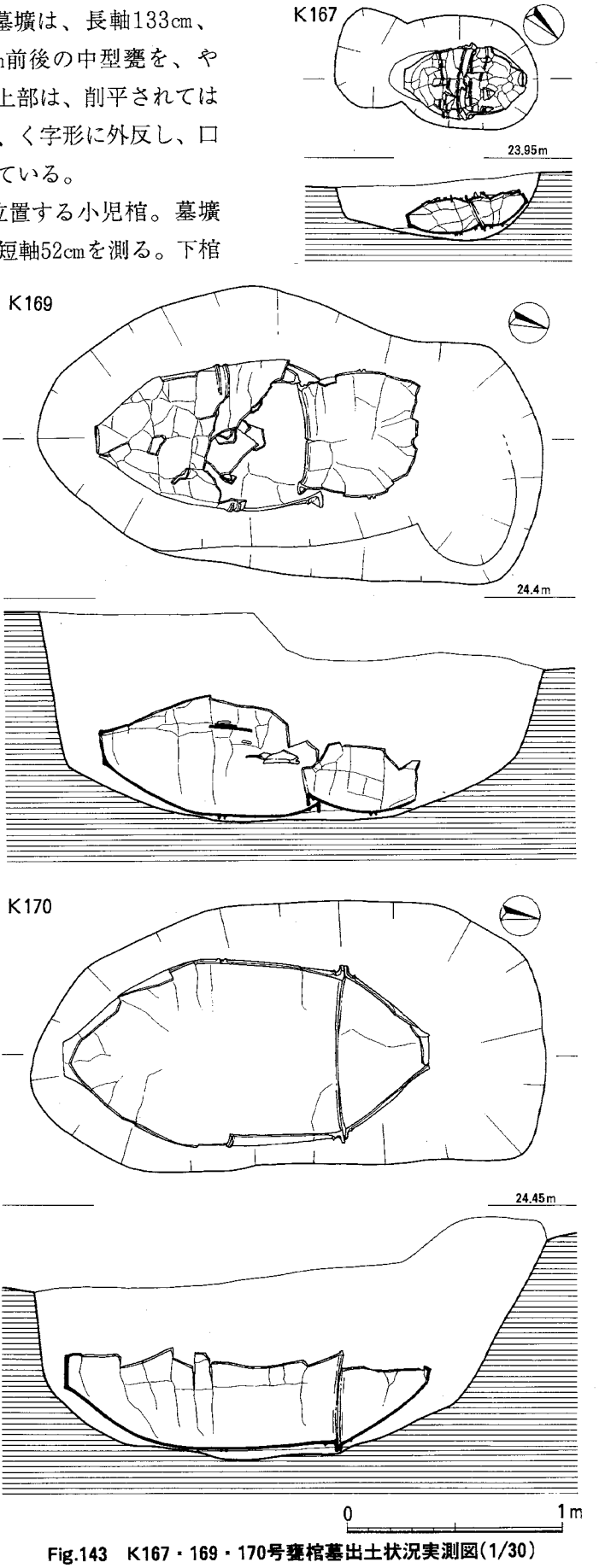


Fig.143　K167・169・170号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

長方形の方が的確か。深さは、1mを超し、四側の壁は、ほぼ直に掘り込まれている。墓壙は、平坦ではなく、微妙な凹凸がある。下棺は、器高130cm前後の大型甕、上棺は、器高42cm前後の大型鉢で、接口式にして水平に埋置している。合口部は、完全に密着しており、粘土の目張りを必要としていない。下棺は、よく整った形状をした砲弾形で、口縁部の作りや、凸帯の貼り付けも確かである。上棺の鉢は、胴部から緩やかに外反して、そのまま口縁部としており、その屈曲部下に三角形凸帯を1条巡らしている。

K173号甕棺墓　B2群の最東南端部に位置する単棺である。墓壙は、甕の形状に合わせて隅丸三角形に掘られており、また壙底も、安定を図って、口縁部側を2段掘りにしている。甕は、器高112cm前後のL字形口縁部をもつ大型甕である。口縁部の上面は、やや内側に傾いており、その端部断面は、三角形状に尖り気味である。胴部の凸帯は、中位よりやや下方に2条巡らせている。断面は台形で、下方にやや垂れ気味に貼り付けられている。その凸帯より下方に、埋葬時に開けられたと思われる小孔がある。

K174号甕棺墓　B1群の最北西端部にある小児棺。墓壙は、長軸88cm、短軸57cmの楕円形。壙底は、中央に向かって円錐状に掘り込まれている。これは下棺の壺の形状に一致させたもので、巧みに上棺の小型甕と接口式にして埋置している。下棺の壺は、頸部を打ち欠いている。現在の器高は、38cm前後。胴部の張りが、上方にあって無花果状の器形をしている。胴部最大径の位置より、やや上方に2条の三角形凸帯を巡らせている。上棺の甕は、端部が丸く肥厚したL字形口縁部がつく。

K175号甕棺墓　B1群K174の東側にある。墓壙は楕円形で、長軸123cm、短軸82cm、深さ38cm。下棺に中型の甕、上棺に頸部を打ち欠いた壺を接口式にして埋置している。甕の器高は、63cm前後。下棺は胴部上半が内湾し、頸部が締まった、倒卵形の器形となる。凸帯は、口縁下になく、胴部に2条のみ。上棺の壺も、胴部上半が強く張る器形で、その最大径の位置に2条の凸帯が巡っている。

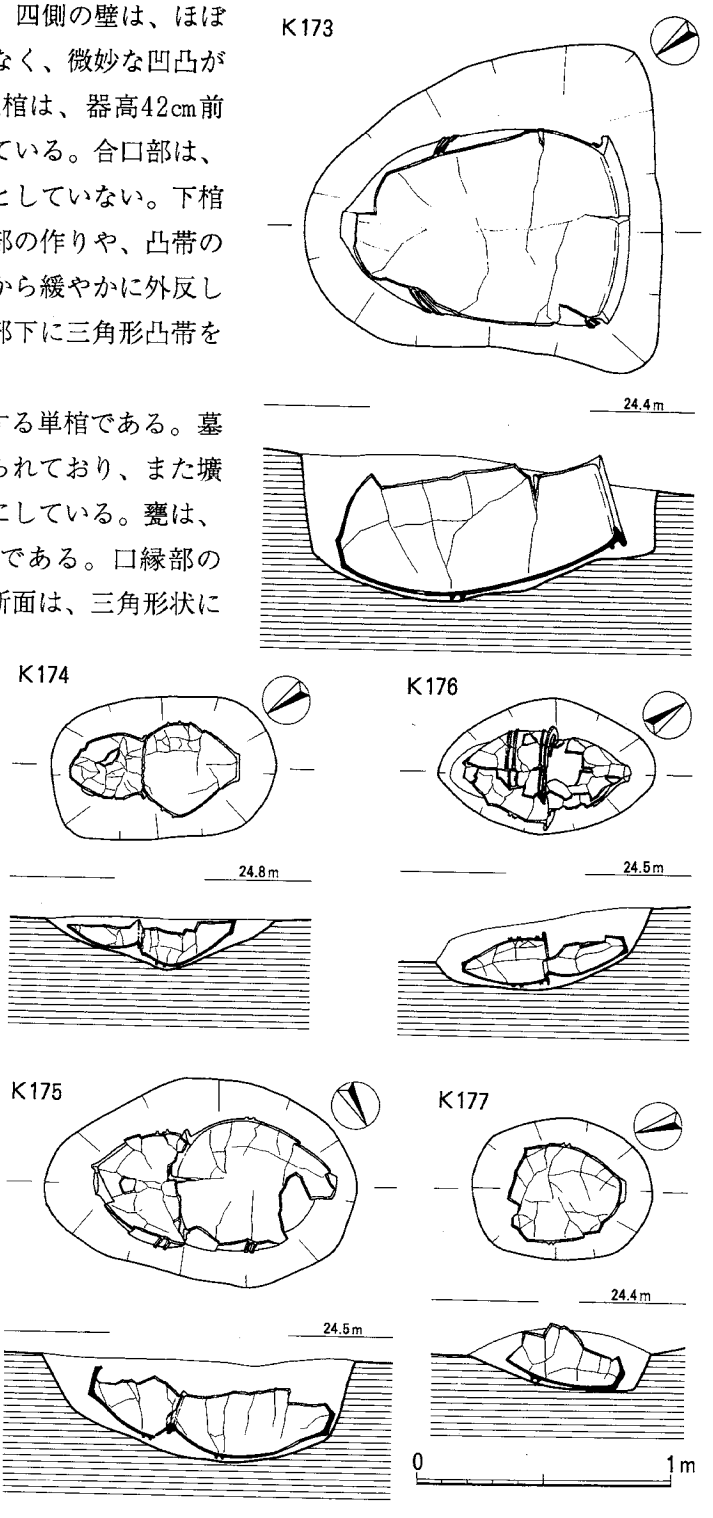


Fig.144　K173～177号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K176号甕棺墓　B2群K170の西側に並んでいる。長軸85cm、短軸56cmの小さな楕円形の墓壙に、ほぼ同じような大きさの小型甕が埋置されている。合口の方法は、上棺の口縁部が下棺に一部入り込ん

でいることから、挿入式とした。下棺の甕は、丹塗りで器高35cm前後。L字形口縁部の内側は、丸く屈曲しており、外側の端部には、刻み目を施している。断面M字形凸帯が、口縁下に1条、胴部に2条巡っている。上棺の器高は、35cm前後。装飾的な下棺に比べ、凸帯も、口縁部の刻み目もない。

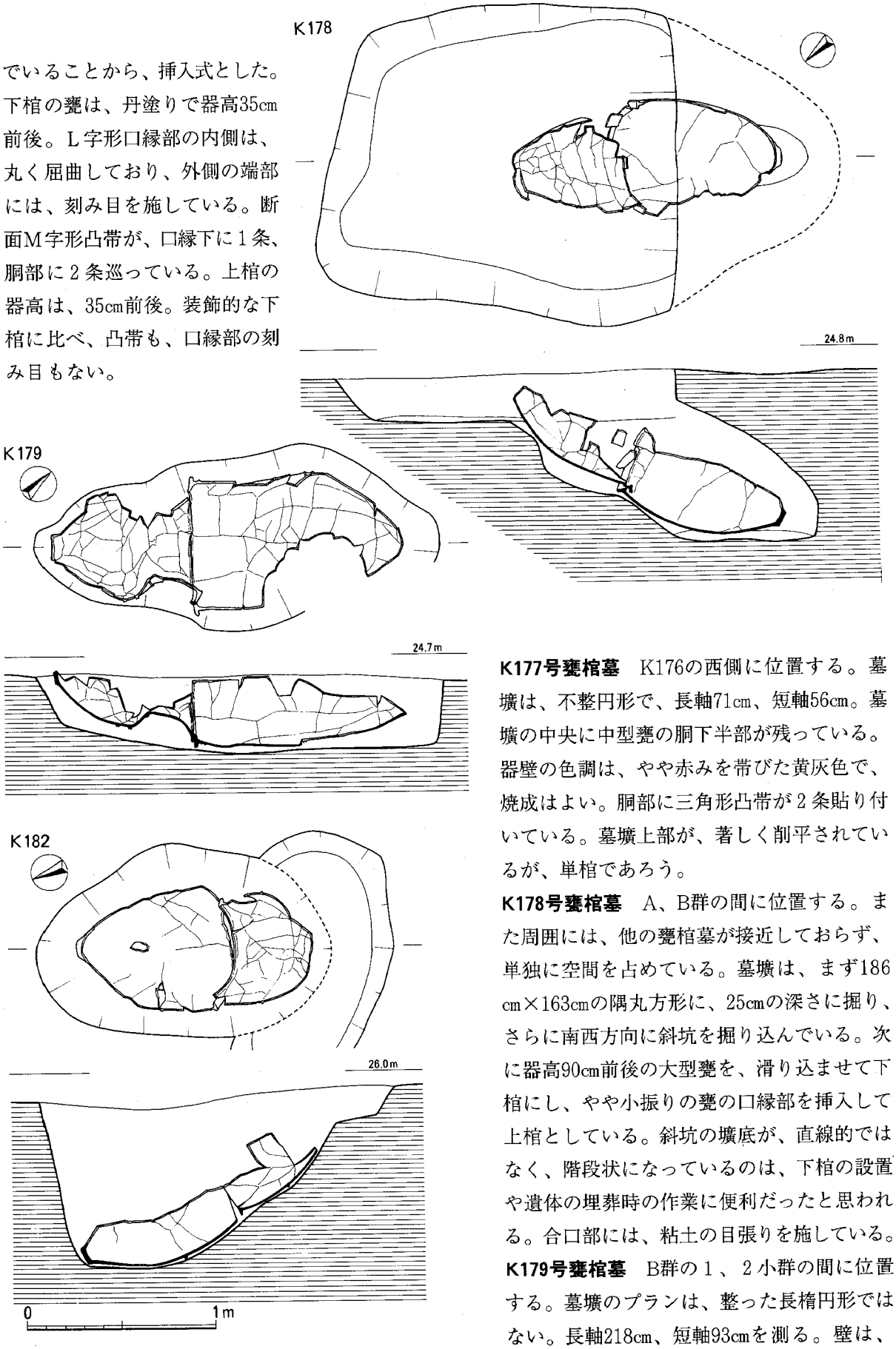


Fig.145　K178・179・182号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K177号甕棺墓　K176の西側に位置する。墓壙は、不整円形で、長軸71cm、短軸56cm。墓壙の中央に中型甕の胴下半部が残っている。器壁の色調は、やや赤みを帯びた黄灰色で、焼成はよい。胴部に三角形凸帯が2条貼り付いている。墓壙上部が、著しく削平されているが、単棺であろう。

K178号甕棺墓　A、B群の間に位置する。また周囲には、他の甕棺墓が接近しておらず、単独に空間を占めている。墓壙は、まず186cm×163cmの隅丸方形に、25cmの深さに掘り、さらに南西方向に斜坑を掘り込んでいる。次に器高90cm前後の大型甕を、滑り込ませて下棺にし、やや小振りの甕の口縁部を挿入して上棺としている。斜坑の壙底が、直線的ではなく、階段状になっているのは、下棺の設置や遺体の埋葬時の作業に便利だったと思われる。合口部には、粘土の目張りを施している。

K179号甕棺墓　B群の1、2小群の間に位置する。墓壙のプランは、整った長楕円形ではない。長軸218cm、短軸93cmを測る。壁は、ほぼ直に掘り込まれ、壙底も水平に近い。下

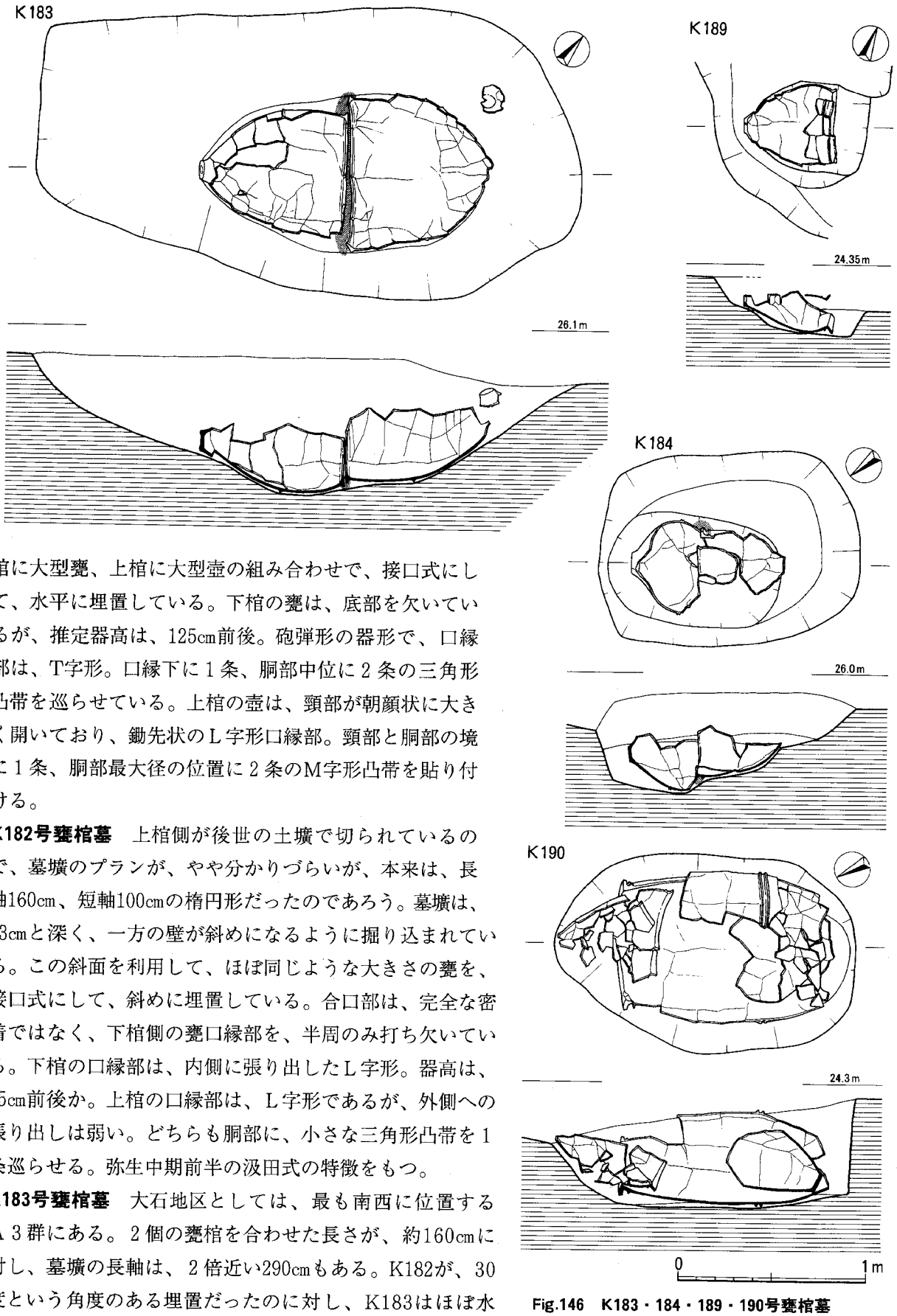


Fig.146　K183・184・189・190号甕棺墓
出土状況実測図(1/30)

棺に大型甕、上棺に大型壺の組み合わせで、接口式にして、水平に埋置している。下棺の甕は、底部を欠いているが、推定器高は、125cm前後。砲弾形の器形で、口縁部は、T字形。口縁下に1条、胴部中位に2条の三角形凸帯を巡らせている。上棺の壺は、頸部が朝顔状に大きく開いており、鋤先状のL字形口縁部。頸部と胴部の境に1条、胴部最大径の位置に2条のM字形凸帯を貼り付ける。

K182号甕棺墓　上棺側が後世の土壙で切られているので、墓壙のプランが、やや分かりづらいが、本来は、長軸160cm、短軸100cmの楕円形だったのであろう。墓壙は、83cmと深く、一方の壁が斜めになるように掘り込まれている。この斜面を利用して、ほぼ同じような大きさの甕を、接口式にして、斜めに埋置している。合口部は、完全な密着ではなく、下棺側の甕口縁部を、半周のみ打ち欠いている。下棺の口縁部は、内側に張り出したL字形。器高は、85cm前後か。上棺の口縁部は、L字形であるが、外側への張り出しは弱い。どちらも胴部に、小さな三角形凸帯を1条巡らせる。弥生中期前半の汲田式の特徴をもつ。

K183号甕棺墓　大石地区としては、最も南西に位置するA3群にある。2個の甕棺を合わせた長さが、約160cmに対し、墓壙の長軸は、2倍近い290cmもある。K182が、30度という角度のある埋置だったのに対し、K183はほぼ水

平に埋置されている。壙底の低い方の南西側を下棺としたが、甕の大きさからすると、上棺よりも小さい。墓壙内の南西側が余裕があることからすると、後で据えられた可能性もあり、上、下棺が逆になる可能性もある。器高は、下棺が77cm前後、上棺が85cm前後であろう。口縁部の作りや器形から、弥生中期前半。

K184号甕棺墓　K183のすぐ東側に並んでいる。墓壙は、楕円形ではなく、138cm×103cmの隅丸長方形のプランである。ただし、壙底は、棺を設置する場所だけ、階段状に掘り込まれている。下棺は、頸部を打ち欠いた壺で、上棺は、器高50cm前後の甕である。接口式であるが、一部は口縁部を入れ込んでいる。上棺の甕は、L字形口縁で、口縁下に三角形凸帯を巡らせている。

K190号甕棺墓　B2群の北西寄りに位置する。長軸160cm、短軸104cmの楕円形の墓壙は、下棺側の壁が、直に掘り込まれている。下棺に大型甕、上棺に中型甕を用いているが、埋置使用とする両棺の長さに対して、墓壙の大きさが合わず、無理やり入れ込もうとして、胴部下方で打ち欠いて、そのまま二重に入れ込んでいる。また、上棺も挿入して、長さを調整しているようだが、遺体に影響はなかったのか、余計な心配もしたくなる。下棺は、分厚いL字形口縁をもつ砲弾形の器形。上棺の口縁部は、く字形に屈曲し、口縁下に三角形凸帯を1条巡らせる。

K191号甕棺墓　B2群北西寄りにある複棺。長軸170cmの墓壙は、上棺側が幅広くなっている。下棺が、器高103cm前後の大型甕。上棺が、器高40cm前後の鉢との組み合わせである。残った破片からは、接口式。下棺のL字形口縁部は、外側に強く張り出しており、内端部は、小さく横ナデされ、小さく尖り気味。上棺の鉢は、底部から直線的に大きく開く形状で、T字形の口縁部が付く。

K192号甕棺墓　B2群、K191の西側に接近している。墓壙は、幅広の楕円形で、深さは73cmである。やや北東に寄って、大型甕を単独で埋置している。蓋があったと思われるが、その痕跡はない。甕の器高は、104cm前後、器形は砲弾形で、L字形の口縁部が付く。

K193号甕棺墓　同じような大きさの甕2個を接口式にした小児棺。墓壙は、両棺の形状に合わせて掘り込まれており、長軸102cm、短軸83cmの楕円形である。ほぼ水平に埋置しているので、上下の判断が難しいが、底部の位置が高い北東側を上棺とした。この上棺の底部は、壁を掘り込んで段を作り、この上に底部を据えている。器高は、上棺の甕が43cm前後。下棺は、40cm前後。

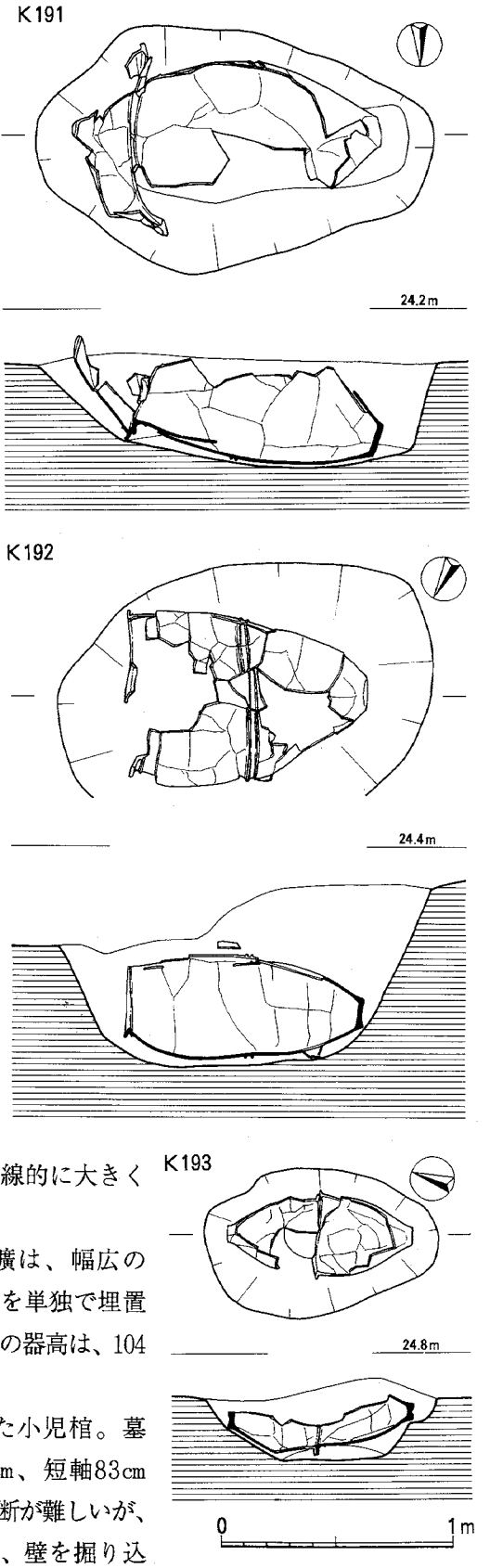


Fig.147　K191～193号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

K194号甕棺墓　墓壙の深さは65cmもあり、その壙底に接するようにして、甕を下棺に、頸部を打ち欠いた壺を上棺にして埋置している。下棺の甕は、小さなL字形口縁部で、胴部に三角形凸帯を2条巡らしている。上棺の壺は、破片のために、形状不明。合口部には、目張り。

K195号甕棺墓　K119の南に位置し、K190の墓壙を切っている。口縁部の上に別の破片が重なって複棺のようにみえるが、同一個体の破片なので単棺である。墓壙は、長軸56cm、短軸40cmの楕円形で、甕の形状に合わせて口縁部側をやや幅広く、直線的に掘っている。甕の口縁部は、く字形。器高は、約30cmである。

K196号甕棺墓　墓壙は、47cm×44cmの円形に近い。下棺に、頸部を打ち欠いた小型壺、上棺に鉢を被せている。壺は、胴部最大径35cm前後で、やや上部に丸味のある器形。上棺の鉢は、小さく水平に屈曲するL字形の口縁部が付く。

K197号甕棺墓　円形の墓壙に、胴下半部の壺が残るのみ。その角度からすると、上部は削平されたのではなく、もともと打ち欠きであったとも考えられる。

K198号甕棺墓　墓壙のプランは、96cm×98cmの不整円形。34cmの深さで、さらに中央を50cm×55cmの円形に2段掘りしている。中央に埋置された壺は、胴部に2条の三角形凸帯が巡っている。

K199号甕棺墓　B2群のK192とK190の間に挟まれている。墓壙は、54cm×57cmの不整円形。小児棺であるが、上部が大きく削平されて、甕の破片が残るのみ。形状不明。

K200号甕棺墓　B2群のほぼ中央に位置する大型甕の単棺。墓壙は、甕の器形に合わせて、無駄なく掘り込んでいる。深さは1m近くもあり、十分な深さを保っている。壁は、直に近く、口縁部の位置には溝状に深く切り込み、安定を図っている。壁との間に隙間がなく、蓋をしていた可能性はない。蓋の有無に関わらず、甕を据えてから遺体を納めることもできないので、地上で遺体を納めて、甕ごと埋置したことになる。

K201号甕棺墓　長軸205cm、短軸83cmの長楕円形

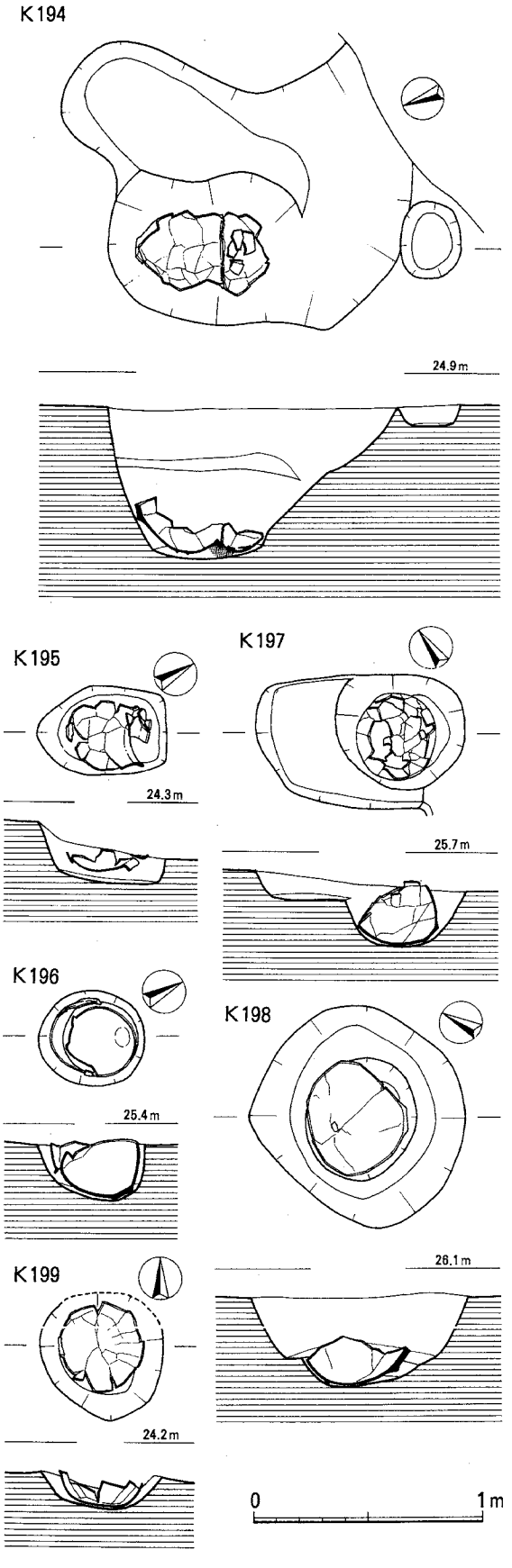


Fig.148　K194～199号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

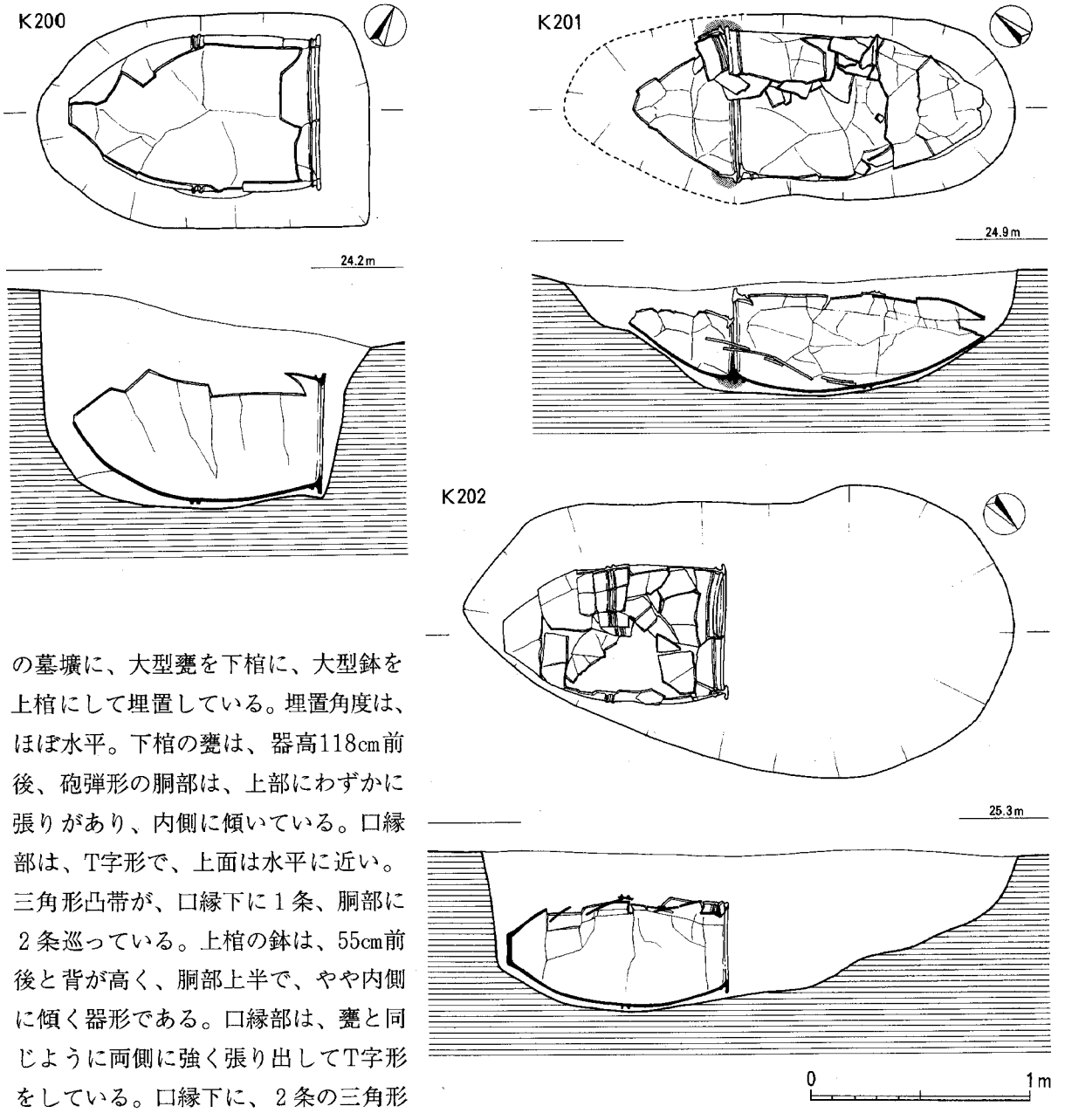


Fig.149　K200～202号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

の墓壙に、大型甕を下棺に、大型鉢を上棺にして埋置している。埋置角度は、ほぼ水平。下棺の甕は、器高118cm前後、砲弾形の胴部は、上部にわずかに張りがあり、内側に傾いている。口縁部は、T字形で、上面は水平に近い。三角形凸帯が、口縁下に1条、胴部に2条巡っている。上棺の鉢は、55cm前後と背が高く、胴部上半で、やや内側に傾く器形である。口縁部は、甕と同じように両側に強く張り出してT字形をしている。口縁下に、2条の三角形凸帯。目張りの粘土は、上棺側により多く巻いている。

K202号甕棺墓　A1群の最西端に位置し、大型甕を用いた単棺。D12号土壙墓を切っている。単棺にしては、墓壙の長軸が249cmと異様に長い。甕は、器高100cm前後の大型で、胴部径は、65cm前後と幅広い。胴上半部は、やや内湾気味に口縁部に続き、全体的に丸味のある器形となっている。口縁下の凸帯は、断面が三角形、胴部の凸帯は、断面台形である。

祭祀遺構

これまで未報告になっていた甕棺墓について簡単に記述してきたが、これらの中には、壺や甕などを単独に据えただけの遺構や、大きく削平されて元の姿を留めないものなどもあり、埋葬施設と断定するのが困難なものも含んでいる。発掘現場で、それらの検出作業や実測、取り上げに際して、できるだけ検討をして判断するように努めたが、墓地の構成や変遷など、細かな検討も経た上で決定する必要があることから、不確かなものについては、一応、甕棺墓として遺構番号を与えている。

これらとは別に、あきらかに埋葬施設とは考えられない土壙が、５基ある。これらの土壙から出土している土器には、筒形器台のように非日常的な土器が含まれ、立て並べられていた形跡も見かけられることなどから、埋葬遺構ではなく祭祀遺構と判断した。これらはＢ１群の北東寄りに集中している。この位置は、南西からのびてきた甕棺ベルトの北東端部に当たっており、またこの付近で、甕棺ベルトが途切れることから、祭祀土壙の、対象が墓地全体なのか、個別甕棺墓なのかは、すぐに明らかにできないものの、墓域を区切るような意味を持たせていたのではなかったかと考えられた。もちろん、墓地の周縁部で行ったものが、結果的に北東端部に当たったということもありえる。ただ、

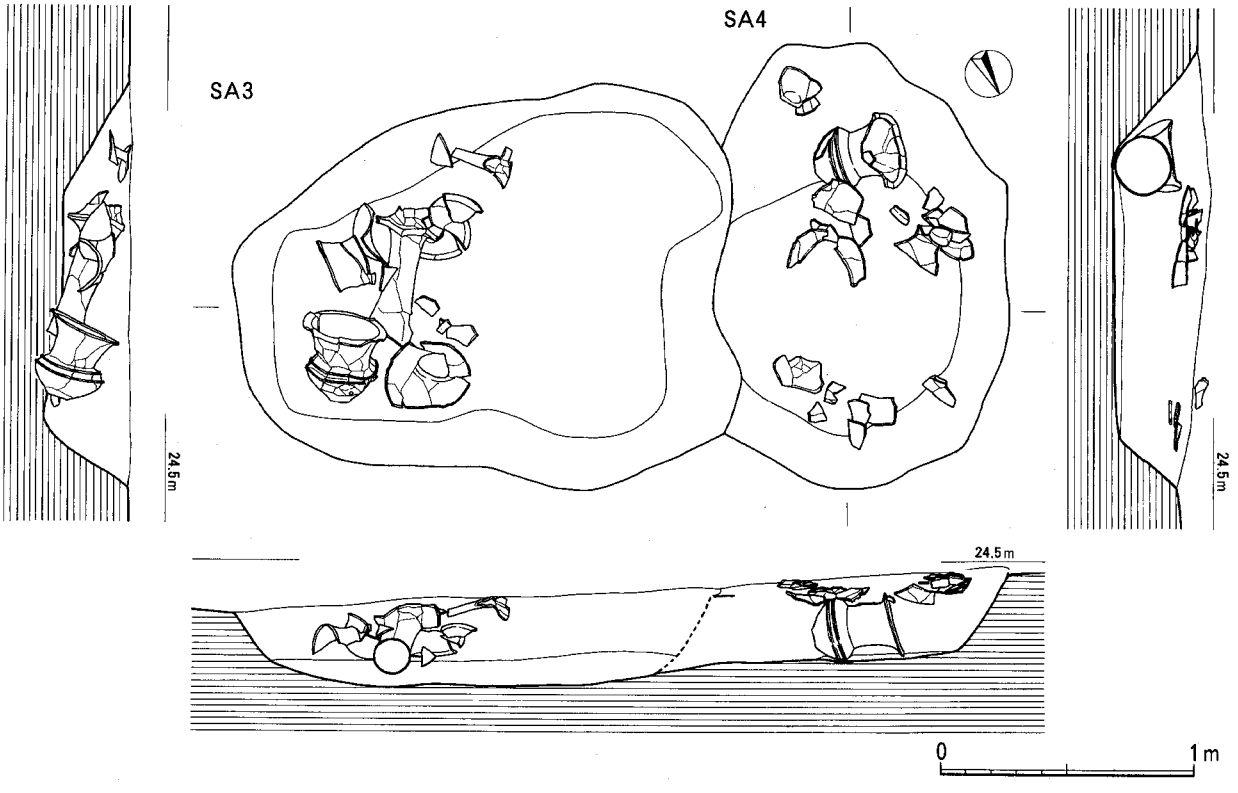


Fig.150　SA1～4号祭祀土壙(1/30)

同じような祭祀土壙は、甕棺ベルト南西部の三十六地区、中間地の２号支線道路で確認されているが、甕棺墓の数、つまり埋葬行為に比べると、１％にも達しない数である。数字的には、ありふれた行為というよりも、きわめて特殊な行為だったことを伺わせる。

甕棺ベルトの変遷や性格など解明する上で、祭祀遺構の持つ意味は大きい。しかし、その重要性にもかかわらず、担当者の力量不足から、甕棺墓と同じように、遺構図を掲載するだけで、簡単な説明にとどまった。

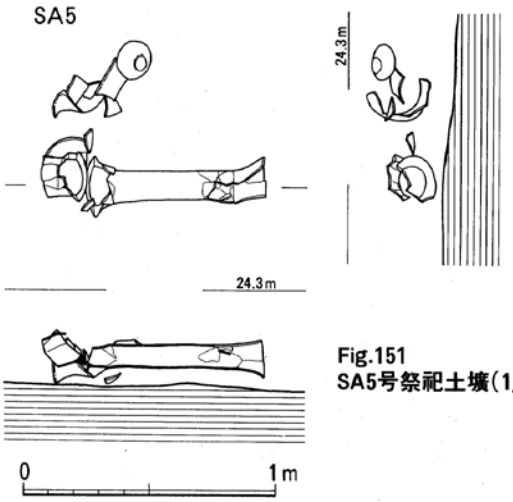


Fig.151
SA5号祭祀土壙(1/30)

SA１号祭祀土壙　Ｂ１群の最北東端部に位置している。長軸69㎝、短軸58㎝の円形に近いプランの土壙に壺を横たえている。土壙に壺や小型甕を据えた例は、他にも数例あったが、他の祭祀遺構が密集する場所の一角にあることから、祭祀土壙とした。壺は、器高43㎝前後。球状の胴部は、全面に丹塗りされ、上部に張りがある器形をしている。頸部は、緩く外湾して開き、鋤先状の口縁部が付く。M字形の小さな凸帯が、頸部に１条、胴部に２条巡っている。

SA２号祭祀土壙　SA１の南西側に位置している。土壙の輪郭は、不明瞭でプランはつかめなかった。こぶし大の円礫12個の横に、破片となった土器が、折り重なっている。土器は壺で、広く散乱していないことから、投げつけたというよりも、この場で押し潰れた状況を示している。なお、これらの土器より南60㎝離れて、長さ33㎝の煉瓦状の石が図のように横たわっているが、その関連は不明。

SA３号祭祀土壙　Ｂ１群K123の東側に位置する。SA４と接し、壁の切り合いからすると、先後関係は、SA４が古い。土壙の平面プランは、不整形。大きさは、長軸185㎝×148㎝、深さ36㎝。この土壙の、東に片寄って壺、高坏、筒形器台などの土器がある。すべて割れて原形を留めていないが、ほとんどは接合復元できそうである。破砕された可能性は薄く、おそらく立て並べられていたのであろう。 筒形器台は、上部に鍔状の作りをした大型品で、裾は大きく開いている。器高は１ｍ近いか。壺は、広口の頸部に鋤先状の口縁部が付く器形で、２個体ある。高坏は、細い円柱状の脚裾部で、杯部の接合部より取れている。

SA４号祭祀土壙　土壙のプランは、不整楕円形。主軸は、SA３に直交しており、長軸175㎝、短軸115㎝の大きさ。深さは、SA３と、ほぼ同じで、壙底に接して広口壺が横たわっている。この他に破片が、２か所に分かれて出土し、そのレベルが壺の上方にあることから、ある程度の時間的な経過を想定する必要があろう。しかし壺の器形は、SA３出土の壺によく類似しており、時間的な差はあまりない。

SA５号祭祀土壙　Ｂ１群とＢ２群のちょうど中間に位置し、甕棺墓群から離れた空間地にある。地山に接して、大型の筒形器台と壺の破片が出土した。土壙の輪郭が不鮮明なのは、もともと掘り込まれていないのかも知れない。二つの土器とも、丹塗り。筒形器台は、裾部が失われているが、器高は１ｍ前後か。鍔の接合部で剥脱している。

Fig.152　筒形器台の出土状況

木棺墓

大石地区では、計８基の木棺墓が検出された。このうち細形銅剣、細形銅戈を出したＭ１号木棺墓、小壺が副葬されていたＭ４号木棺墓、鞘に入った細形銅剣が出土したＭ５号木棺墓、小壺副葬のＭ６号木棺墓については、「吉武遺跡群Ⅷ」において報告している。今回は残り４基の何も持たない木棺墓について、遺構実測図を示し、簡単に説明を加える。

Ｍ２号木棺墓　Ａ２群の南西寄りにあり、甕棺ベルトの南縁に当たっている。平面形は、四隅が丸味のある長方形で、長軸236㎝、中程の幅は、110㎝、壙底までの深さは、42㎝である。主軸方位は、N-70°-Eで、甕棺ベルトの方向とほぼ一致している。図では素掘りの土壙のように見えるが、小口部を掘りすぎたためで、土層観察用のベルトで、その位置を確認している。それによると、木棺の板材は、四隅の組み合わせ法が明確でないが、土壙の中央に160㎝×76㎝の長方形に組んで、板材と墓壙壁との間には、掘り土を充填している。土壙、および棺内からは、遺物の出土はなかった。

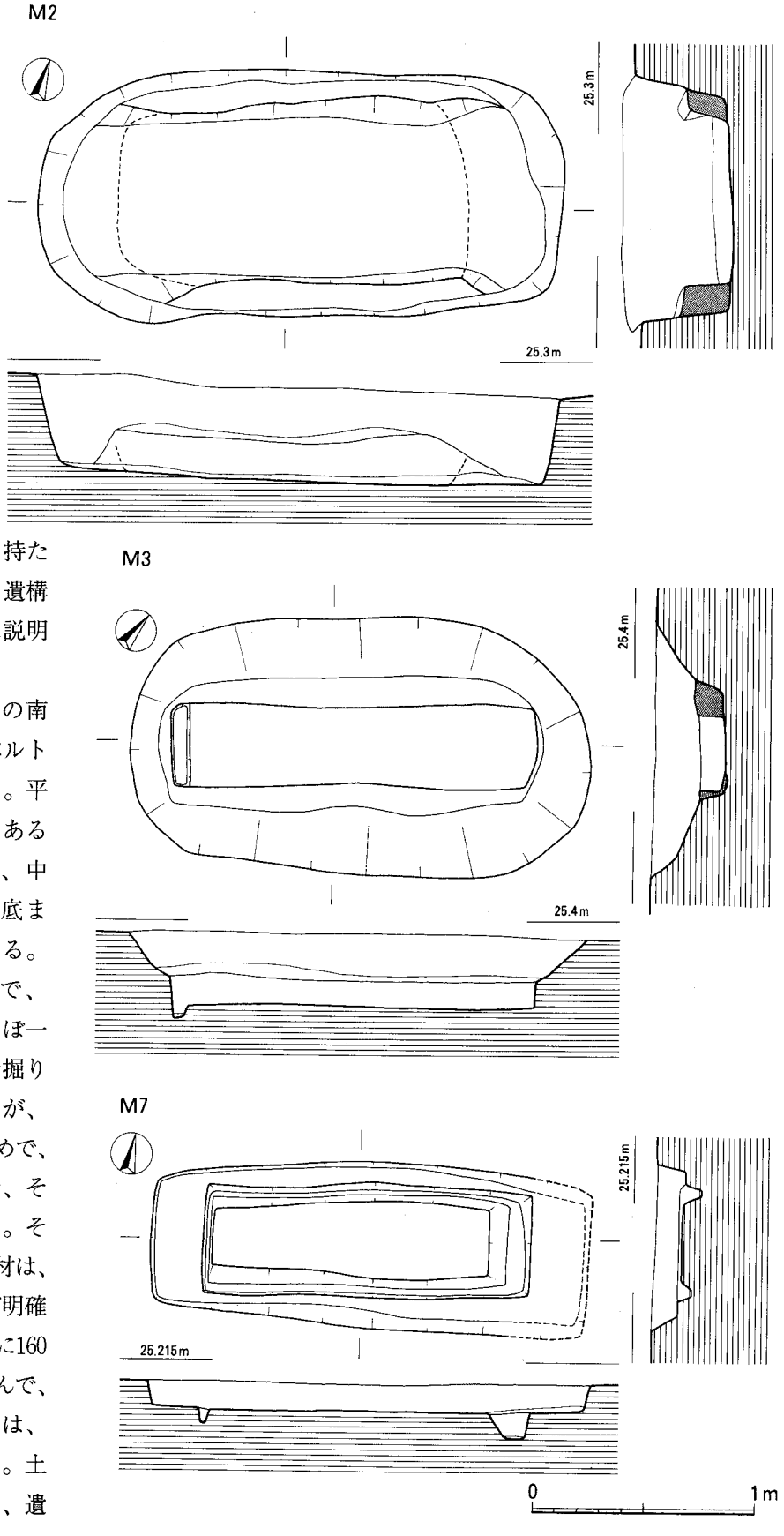


Fig.153　M2・3・7号木棺墓実測図(1/30)

M３号木棺墓　同じようにＡ２群であるが、逆に甕棺ベルトの北縁に相対する位置にある。主軸方位は、N-50°-E。Ｍ２の土壙が一段掘りだったのに対し、Ｍ３は、２段掘りに近い断面をしている。まず長軸207cm、短軸116cmの大きさの隅丸長方形で、皿状に深さ20cm程掘り込む。次に172cm、幅53cmの長方形を、深さ11cmまで、今度はほぼ直に掘り込む。南西側の小口部には、板材を安定させる溝を掘る。この後板材を組み合わせているが、棺の大きさは、長さ165cm、幅34cm前後である。棺の幅は、両端とも大きな差はなく、頭の位置は決めがたいが、小口板の溝がある南西側と考えておく。

M７号木棺墓　Ａ２群のほぼ中央にあり、石剣切っ先が出土したK81に切られている。主軸方位は、N-77°-E。K81で壊された部分を復元すると、長さ196cm、最大幅75cmを測る。平面形は、四隅が鋭角な長方形で、北東側の小口部が、やや幅広くなっている。上部はおそらく削平されており、いまは、12cmの深さしか残っていない。壙底の４側には、棺材を立てる細い溝が掘り込まれている。溝の断面は、逆台形であるが、幅や深さは一様ではない。北東小口部は、幅18cmで12cmと深い。南西小口部は、幅５cmと幅狭くなっている。この溝から推定する棺の大きさは、長さ150cm、幅53cm前後である。

M８号木棺墓　Ａ２群、K60と主軸方位を同じくして列状に並んでいる。主軸方位は、N-76°-Eで、わずかに幅広くなっている北東側を、頭位と考えた。平面形は、よく整った隅丸長方形で、長さ190cm、最大幅106cmである。８cmの深さで２段掘りされており、２段目の大きさは、長さ185cm、幅47cmを測

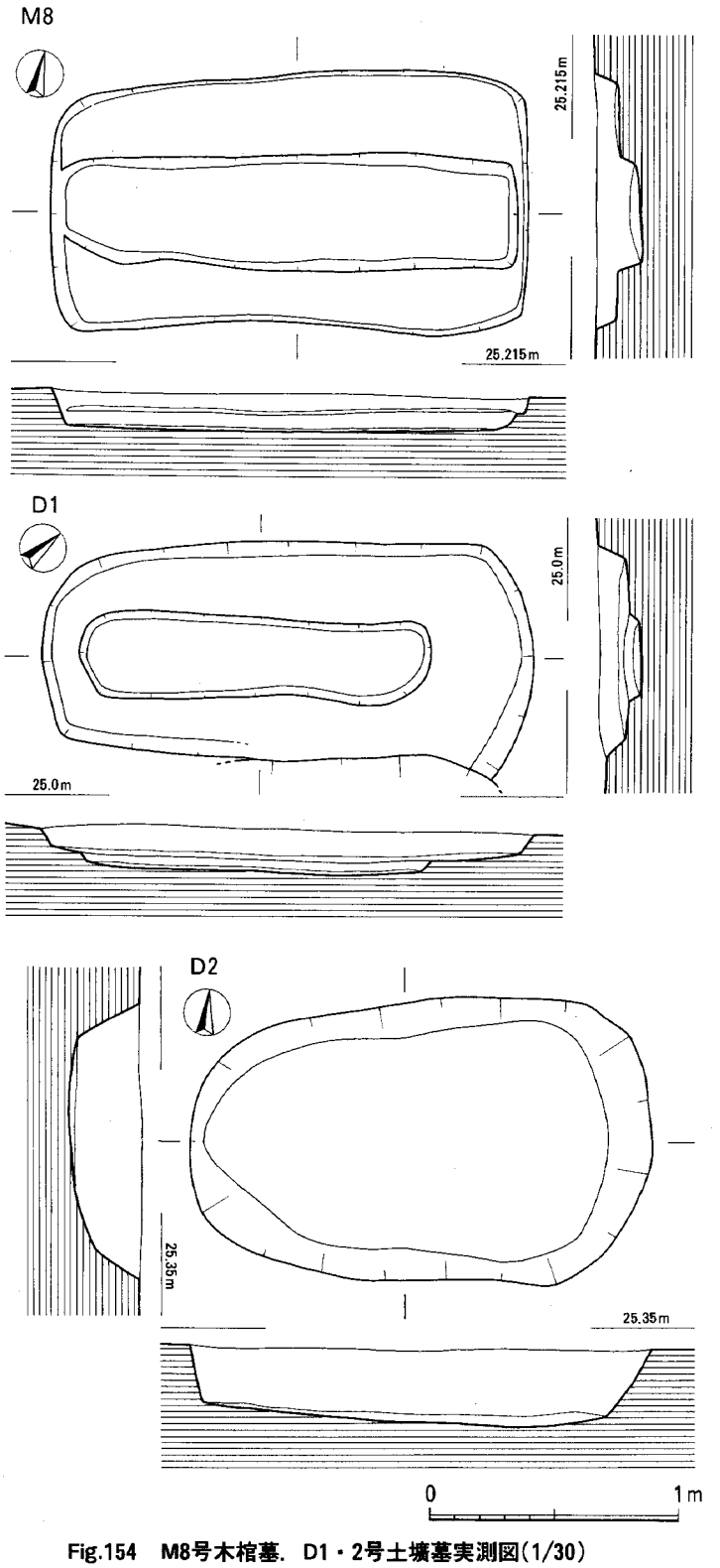


Fig.154　M8号木棺墓．D1・2号土壙墓実測図(1/30)

る。土壙墓の可能性もあるが、2段目掘り込みが、シャープで棺材を立てる目的に適していることから、ここでは木棺墓とした。

土壙墓

大石地区では、計12基の土壙墓がある。これらは木棺墓と同じようにB群の各小群に分散しており、部分的に密集していない。またすべての土壙墓からは、何の遺物も出土しなかったが、甕棺墓から切られている土壙墓が2基あり、おおよその時期が推定できる。

D1号土壙墓　A1群にあり、主軸方位は、N-40°-E。南西側の壁がK25号甕棺墓より切られているが、いかにも並んで埋葬されたような印象を受ける。2段掘りされており、1段目の大きさは、長軸196cm、最大幅98cmの隅丸長方形である。深さは11cm。この中央に、長さ140cm、最大幅36cmで2段目を掘り込んでいる。その深さは、5cmときわめて浅く、遺体を納めるには適していない。

D2号土壙墓　A2群の南西寄りに位置し、M8と並んでいる。甕棺墓との切り合いはない。主軸方位は、N-82°-E。甕棺ベルトの方向と、ほぼ一致する。長軸185cm、中央部の幅は、112cmで、北東側の小口部が幅広く、楕円形の平面プランである。壁は、斜めに掘り込まれているが、深さは29cmあり、壙底は、南東側にわずかに傾斜している。頭

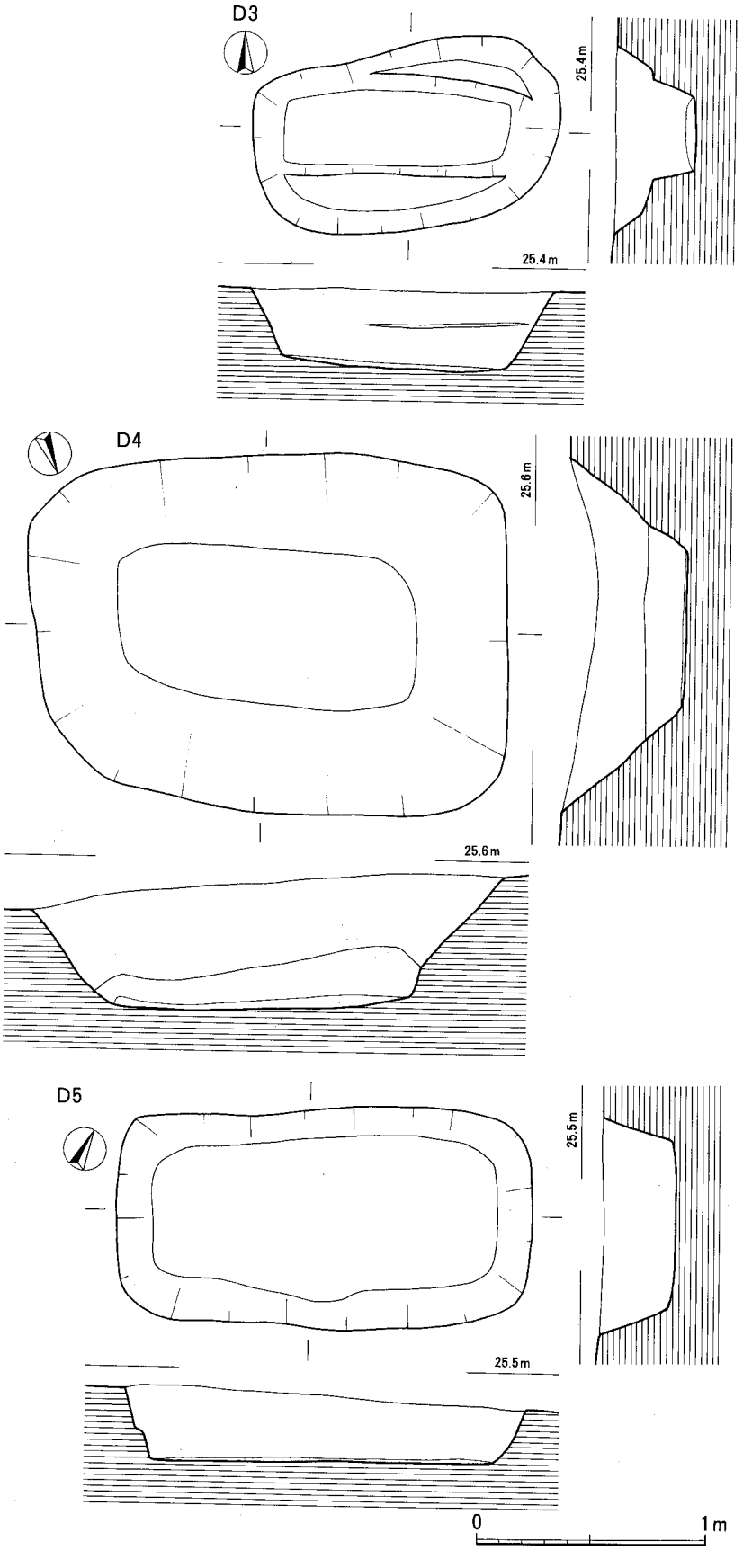
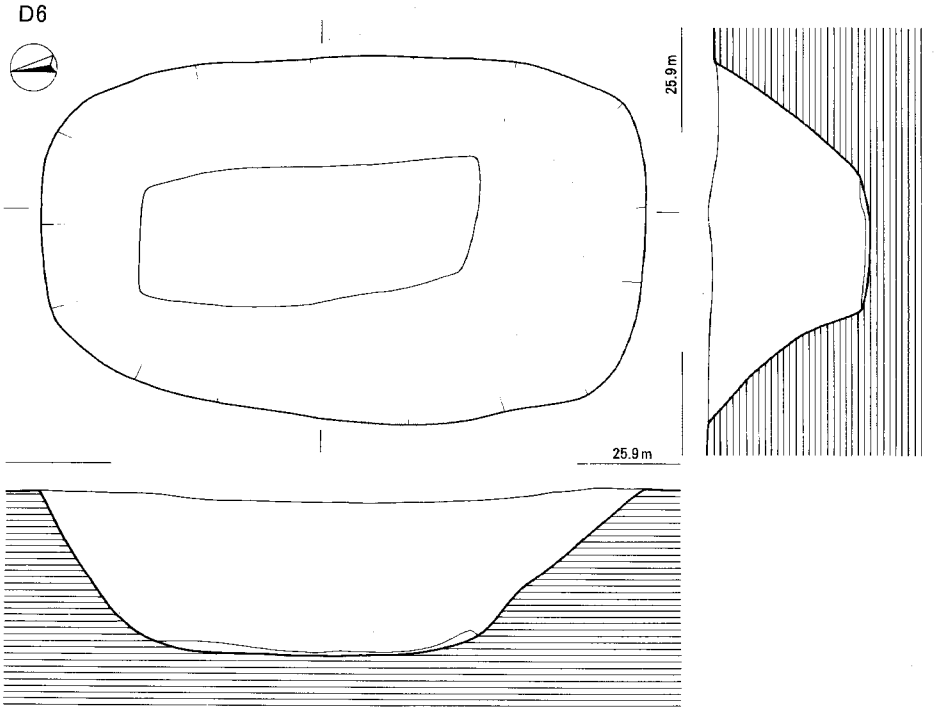


Fig.155　D3・4・5号土壙墓実測図(1/30)



位は、この北東側か。

D３号土壙墓　Ａ２群のほぼ中央に位置する。主軸方位は、N-90°-E。２段掘りの墓壙であるが、１段目の平面プランが、２段目の主軸とずれている。１段目の大きさは、長軸136cm、中央部の幅80cm。２段目は、両小口部はそのままの傾斜で掘り込み、両長側だけに段を設けている。２段目の幅は、44cm、深さは18cmである。

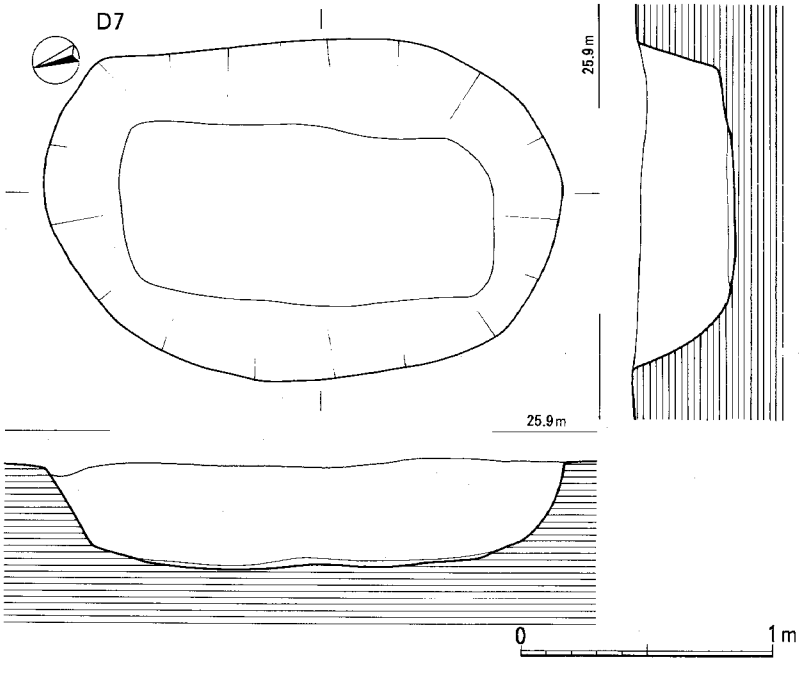


Fig.156　D6・7号土壙墓実測図(1/30)

D４号土壙墓　Ａ２群とＡ３群の間に位置する。主軸方位は、N-69°-Wで、甕棺ベルトの方向より、ずれている。素掘りで、平面プランは。隅丸長方形。長軸208cm、中央部幅157cm、深さ57cm。西小口部が、やや幅広いことから、頭位としたが、この部分の壁は、遺体埋葬部で傾斜を変えて掘り込んでいる。

D５号土壙墓　Ａ２群の南西端部に位置する素掘りの土壙墓である。主軸方位は、N-63°-E。長軸183cm、中央部幅98cm、深さ29cmで、隅丸長方形プランである。壙底は、ほぼ水平となっている。頭位が決めがたいが、幅がわずかに広いことから、北東側とした。

D６号土壙墓　Ａ３群にある。この小群は、甕棺墓６基、土壙墓4基から構成されるが、そのほとんどの方位が甕棺ベルトと一致していない。Ｄ６の主軸方位は、N-９°-E。隅丸長方形の墓壙は、長軸239

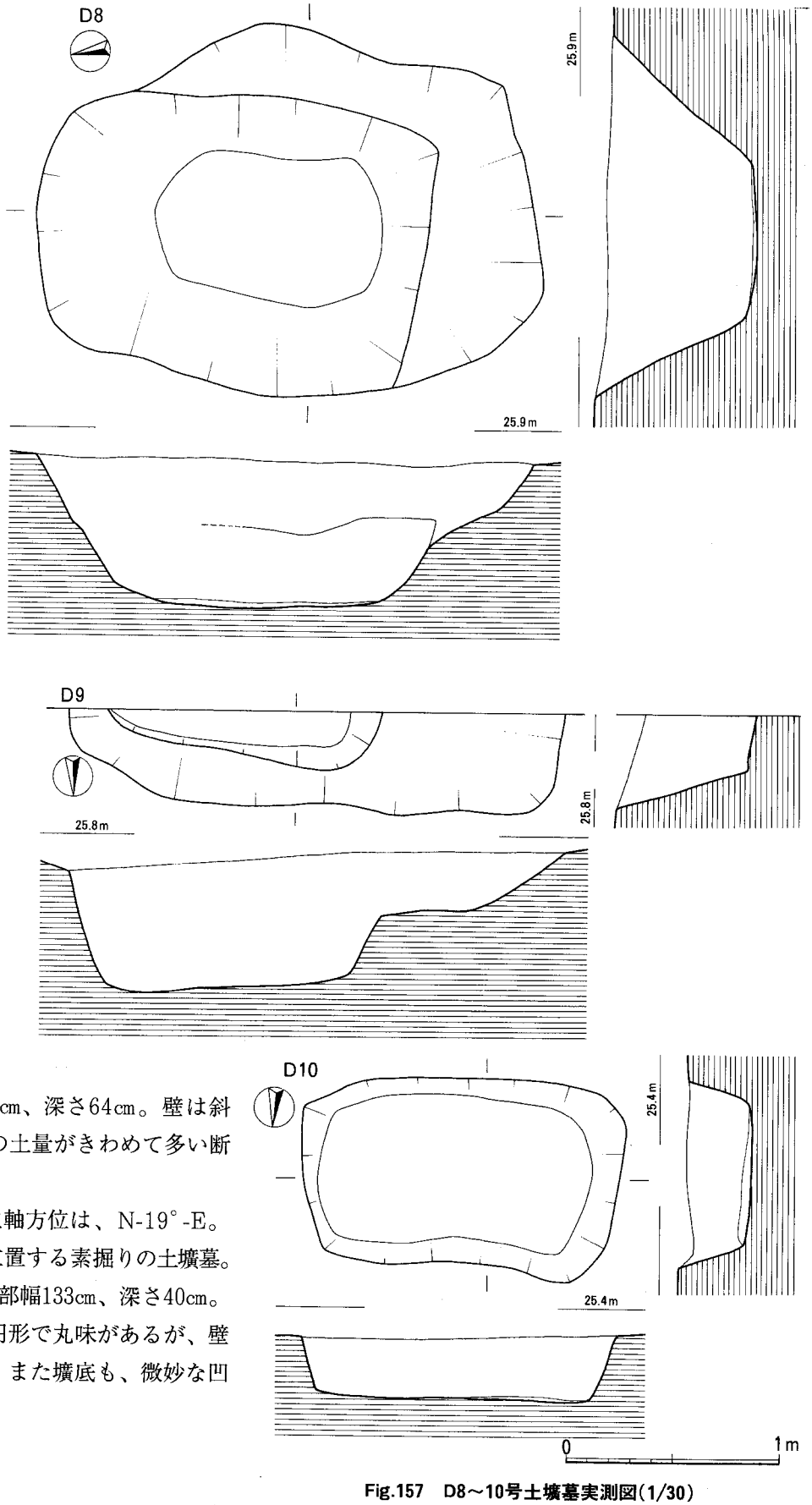


Fig.157　D8～10号土壙墓実測図(1/30)

cm、中央部幅142cm、深さ64cm。壁は斜めで、掘り上げの土量がきわめて多い断面となっている。

D7号土壙墓　主軸方位は、N-19°-E。D6の北東側に位置する素掘りの土壙墓。長軸204cm、中央部幅133cm、深さ40cm。平面プランも楕円形で丸味があるが、壁も直線ではない。また壙底も、微妙な凹凸がある。

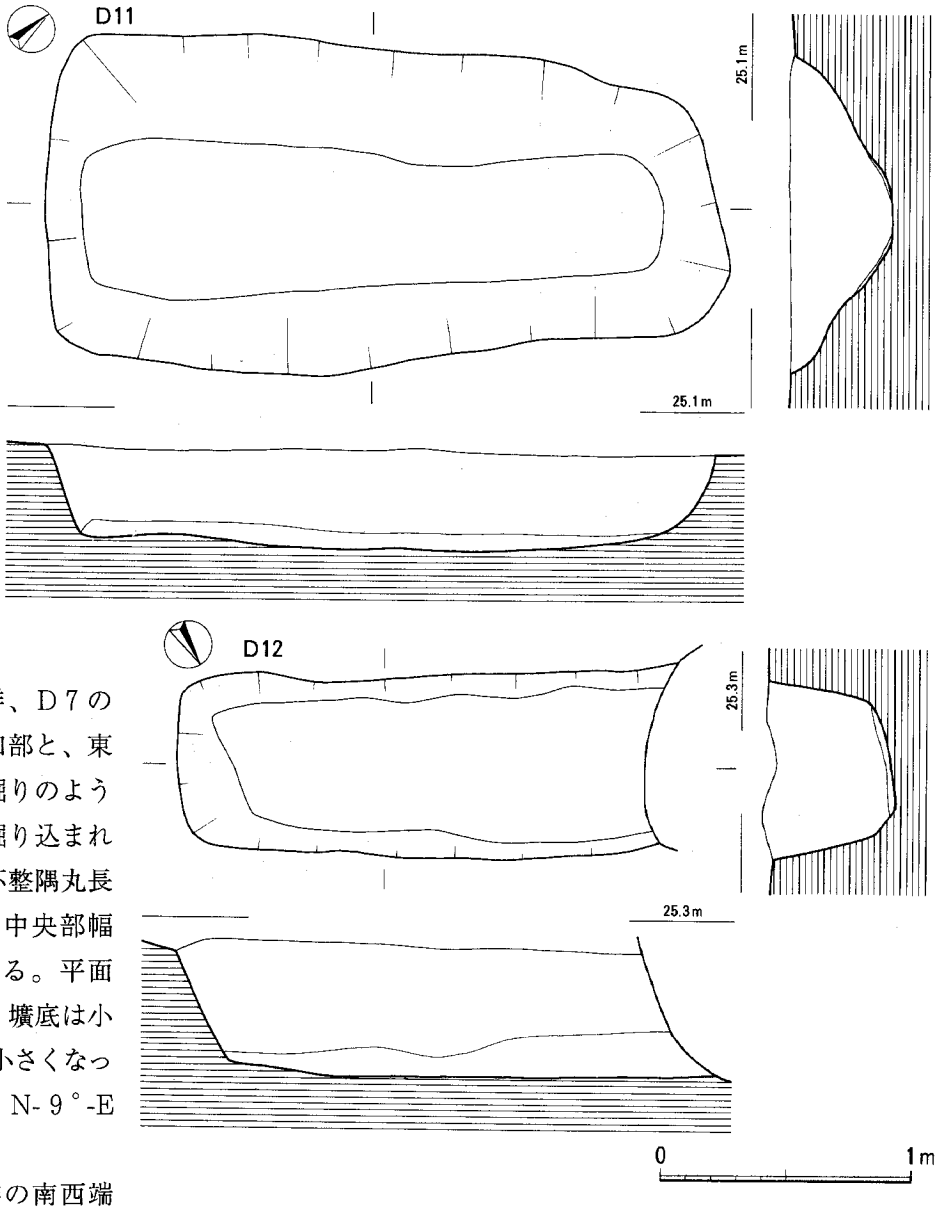


Fig.158　D11・12号土壙墓実測図(1/30)

D8号土壙墓　A3群、D7の南側にある。南側小口部と、東長側壁の一部が2段掘りのように、途中で屈曲して掘り込まれている。平面形は、不整隅丸長方形で、長軸233cm、中央部幅173cm、深さ69cmを測る。平面形の大きさに対して、壙底は小さく、106cm×66cmと小さくなっている。主軸方位は、N-9°-Eである。

D9号土壙墓　A3群の南西端にあり、主軸方位は、N-88°-W。ほとんどが発掘区の外側に出ているので、全形は不明。現在の長さは、232cm、深さ66cm。西側小口部の壁は、2段掘りで、東に片寄って埋葬部を掘り込んでいる。その長さは140cmである。

D10号土壙墓　A2群の南西よりにあり、K90の北西側に並んでいる。主軸方位は、N-82°-E。長軸147cm、中央部幅87cm、深さ28cm。平面形は、ややいびつだが、壁は直線的に鋭く掘り込まれている。頭位は、わずかに幅広い南西側か。

D11号土壙墓　この1基だけがB群にある。長軸265cm、中央部幅127cm、深さ40cm。横断面は、図のように2段掘りのような壁となっているが、鋭利さがなく、長大さも手伝って、間延びした印象を受ける。主軸方位は、N-40°-E。

D12号土壙墓　A1群の北西寄りにあり、K202より切られている。細長い平面形で、現在長183cm、中央幅73cm、深さ53cm。主軸方位は、N-58°-E。

Fig.159　第6次大石地区全景　北東より

第四章　おわりに

吉武遺跡群の飯盛・吉武地区圃場整備に伴う弥生時代の調査成果については、これまで５ケ年度にわたって遺構の種別毎に報告を行ってきた。

それは、平成６年度(埋文報告第437集)が弥生時代中期初頭期の大型建物を初めとする弥生時代掘立柱建物群についての報告である。また、平成７年度(埋文報告第461集)では、特に副葬品を豊富に伴って出土した吉武高木・吉武大石それに樋渡墳丘墓の３地点の弥生時代墳墓の報告である。また、平成８年度(埋文報告第514集)では竪穴住居跡・土壙・溝など、掘立柱建物を除く生活遺構についての報告である。また、平成９年度(埋文報告第580集)では、弥生時代墓地のうち、前期から中期初頭までの甕棺墓を主とする報告である。ここでは第１次調査及び第４次調査(吉武高木遺跡)、第６次調査(吉武大石遺跡)の副葬品を持たない甕棺墓についてであった。更に、平成10年度(埋文報告第600集)では、第１～６次調査にかかる中期前半から後期前半までの甕棺墓を主とする報告である。ここでは特に樋渡墳丘墓の副葬品を持たない甕棺墓などについて復元・実測を行い、実測図を掲載したところである。

そして今回(埋文報告第650集)は、主に樋渡墳丘墓から北西方向に総延長約450mほどに連なっている所謂「甕棺ロード」を構成する複数の墓地群内から選択した甕棺墓などについて報告を行った。

ところで、これらの報告によって、不十分ながら吉武遺跡群の弥生時代の生活・墓地遺構についてのおぼろげな全体像が明らかになったのではないかと考えている。しかし、圧倒的な墓地遺構の展開に比較すると生活遺構については不詳な点が多く、調査区域の偏りもあって墓地と生活跡の関係を十分に把握できていないことも事実である。因みに、吉武遺跡群は全体で約40haの面積あり、このうちの約1／4にあたる10haがこれまで調査されたことになる。

以下では、これまでの限られた成果ではあるが、吉武遺跡群の弥生時代の舞台がどのように展開していったのか、前期後半から後期前半までの各期について箇条的に書き留めると共に、墓地での副葬品の共伴関係や副葬品についての若干の考察を行うこととしたい。

１．各期における遺構の移り変わり　遺跡群内の弥生時代の生活遺構・墓地を前期後半、前期末、中期前半、中期中頃、中期後半、後期前半の時期に区別して記述する。

〈前期後半〉　この時期は、遺跡群北端に近いＣＤ－１・２地区とこれの西側約100m地点にあたるＧＨ－２・３地区を中心に集落が開始される。この他に南側のＦ－５地区、Ｆ－10地区などに小規模な生活遺構が確認され、遊離した遺物の上では更に南側の地点でも該期の土器が採集されているが、これらは確実に遺構を伴ってはいない。

ＣＤ－１・２地区では、中央東寄りに小型の方形～長方形遺構(竪穴住居か)が散漫に見られ、これらの北側20～30mに２群の甕棺墓地が認められる。また、ＧＨ－２・３地区でも長辺が３～５ｍを測る長方形の竪穴住居群が、ほぼ２群に区別できる。竪穴住居は15～30m程度の緩い間隔で分布しており、西側の一群で切り合いがあり、時間差のある住居もあるが、他については全て建て替えなどは認められない単独のものである。

これら２地点の集落は同一のものと考えられ、墓地の規模・貯蔵施設の場所など不明な点も多いが、比較的小規模な集落として出発したものであろう。

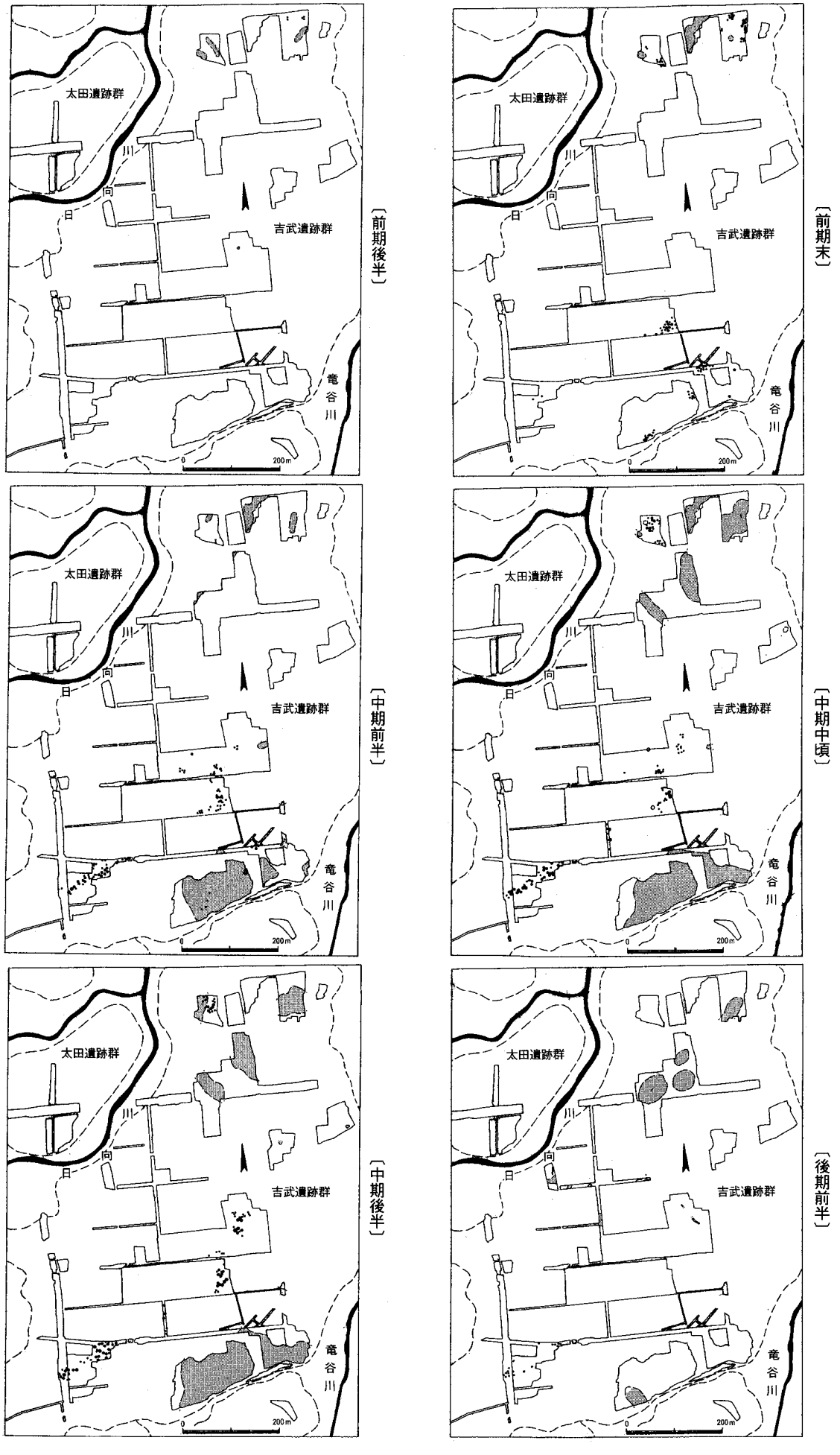


Fig.160　吉武遺跡群弥生時代遺構変遷図

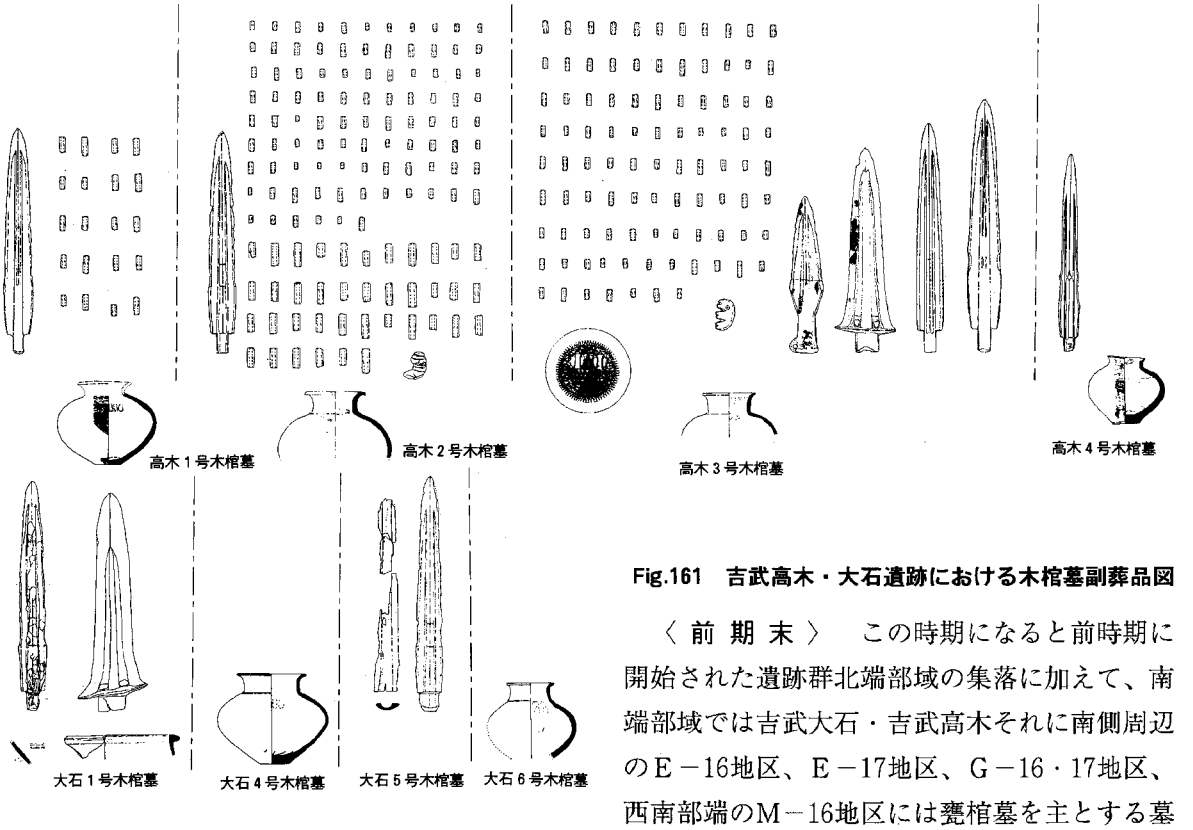


Fig.161　吉武高木・大石遺跡における木棺墓副葬品図

〈 前 期 末 〉　この時期になると前時期に開始された遺跡群北端部域の集落に加えて、南端部域では吉武大石・吉武高木それに南側周辺のＥ－16地区、Ｅ－17地区、Ｇ－16・17地区、西南部端のＭ－16地区には甕棺墓を主とする墓地が出現してくるが、これらのうち吉武大石・吉武高木の両地点では青銅器の副葬が開始される。

北端部域のＣＤ－１・２地区では、円形竪穴住居とこの北側約40mにまとまった甕棺墓地が２群、東・西側約30mに小規模の甕棺墓地２群が認められる。これらは墓地は前期後半期のそれに継続している。また、ＧＨ－２・３地区では、西側隅に梁・桁行きが１×２間規模の高床倉庫と考えられる掘建柱建物群があり、北側と東側に甕棺墓地が形成され、特に東側の１群はまとまった墓地となる。

更にこの時期には両地区を分けるように北東から南西方向へ自然の流路が形成されており、両地区はムラの単位として分化した可能性もある。

ついで南端部域に近い吉武大石・吉武高木ではこれから中期初頭にかけて木棺墓・金海式甕棺墓からなる墓地が形成され、青銅製武器、銅鏡、銅釧・翡翠製勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉などの装身具を副葬した厚葬墓が見られるようになる。また、吉武高木の南側のＥ－17地区・Ｇ－16・17地区などでは副葬品を持たない10基前後の小規模な墓地がつくられる。両地点間は200m以上の距離がある。更に、後に「甕棺ロード」と呼んだ甕棺墓群の南西端にあたるＭ－16地区でも金海式甕棺に始まる墓地が開始される。しかしながら、これらの墓地が出現した南端部域には確かな生活遺構は見られない。

〈 中 期 前 半 〉　この時期には、前時期からの北端部集落は竪穴住居・自然流路などが継続しているが、甕棺墓地は西側のＧＨ－２・３地区に小規模墓地が１群残る。

そして、吉武大石の北側には３群の小規模な甕棺墓地、土壙などの生活遺構が新たに確認できるようになる。また、南端側の吉武高木及びその南側周辺の墓地は初頭期まで継続するが、この時期になって掘立柱建物群・土壙・円形竪穴住居跡などの生活遺構が確実に墓地周辺に伴うようになる。吉武高木では墓地から東側50mの扇状地縁に梁・桁規模が４×５間の大型建物を始めとして南東側や南側に１×２間規模の掘立柱建物がまとまって見つかり、倉庫群と考えられる。これらは竪穴住居跡とは混ざらない。

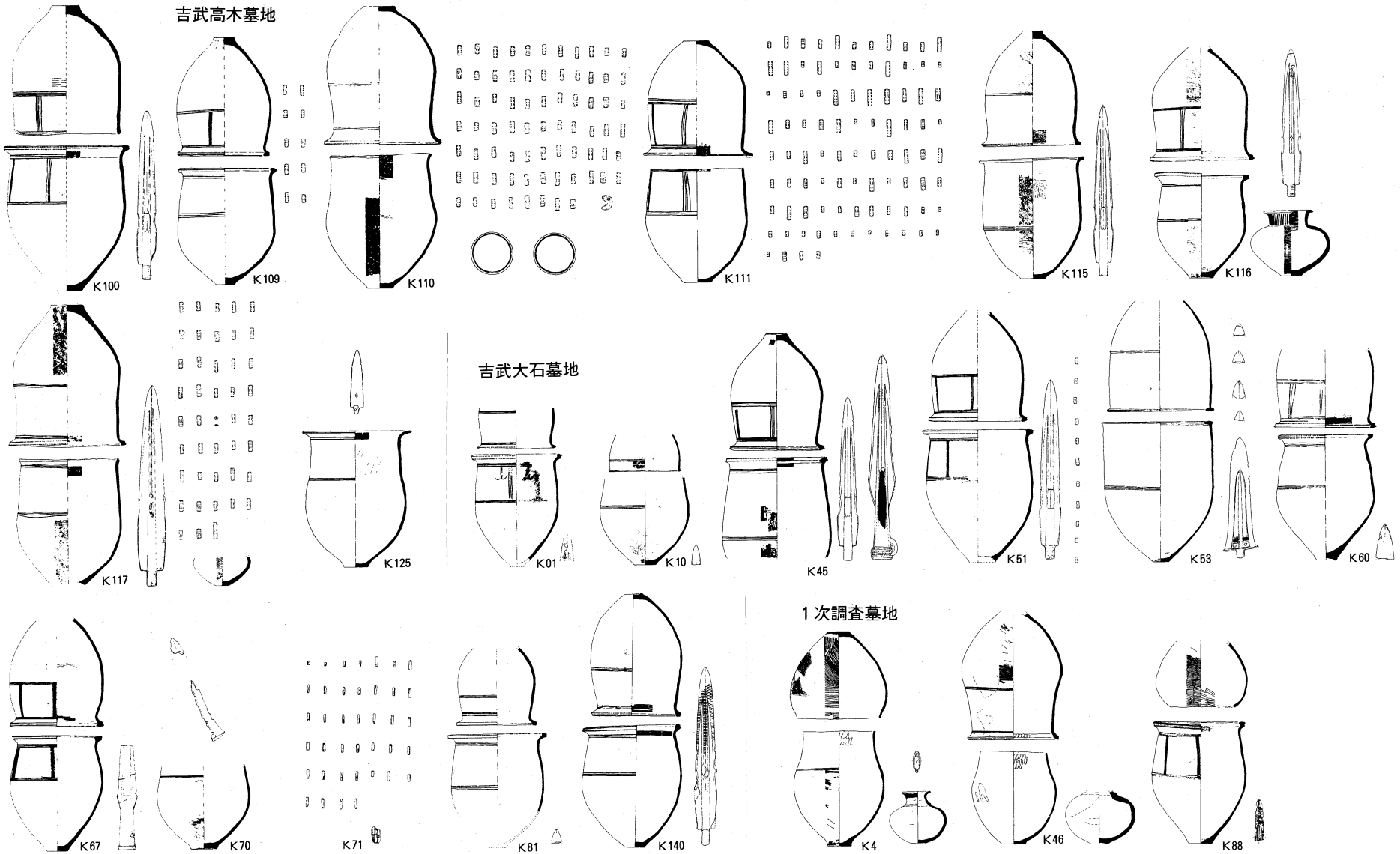


Fig.162　吉武遺跡群における甕棺副葬品図（吉武高木・大石、第1次調査）

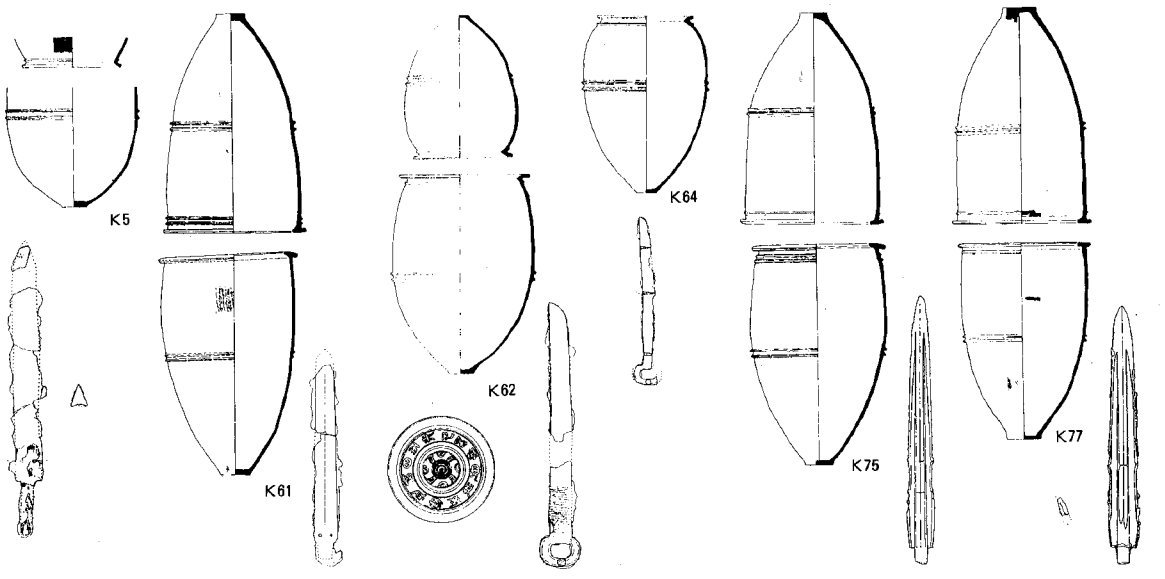


Fig.163　樋渡墳丘墓における甕棺副葬品図

そして、「甕棺ロード」西端部では前期末に始まったM－16地区の甕棺墓地がこの時期になって北東、南西方向に長い墓地を形成し、延長130m以上・幅10～20mの規模となった。しかし、この地区にも明らかな生活遺構は見つかっていない。

〈中期中頃〉　この時期では、前時期からの北端部集落はさらに継続すると共に、やや集落範囲を拡大したように考えられる。ＣＤ－１～３地区では大・小型の円形竪穴住居と掘立柱建物群が顕著となる。これらは一部で平面的に重複するところから時間差があるのは確実であるが、建物の中には通常タイプの１×２間規模のものや２×３間規模の総柱型のタイプが見られ、住居に近接するまとまった倉庫群と考えられる。また、墓地はこれらの東側と北西側に近接して小規模な２群の甕棺墓地が認められる。

また、西側のＧＨ－２・３地区も大型の円形竪穴住居に掘立柱建物の倉庫が伴っており、ＣＤ－１～３地区に類似した構成であるが、この地区の墓地は前期末期の墓地に重複して営まれており、全時期を通して最大のものとなっており、２群が確認出来る。また、南側のＤＥ－７～９地区、ＥＦ－３～５地区、Ｈ－５・６地区でも自然流路に挟まれた台地上に小型の倉庫群が認められる。

また、中期前半期に吉武大石の北側に形成された３群の甕棺墓地は継続するが、この時期新たにこれらの北端側に墳丘墓(樋渡墳丘墓)が造営される。規模は、東西約25m、南北27m、高さ約２ｍ程度の長方形墳と推定され、初期に埋葬される甕棺墓は墳丘の中心部の最も良好な場所を占めており、副葬品を伴っている。周辺には同時期の土壙などの生活遺構が僅かに確認される。

吉武大石の墓地はさらに継続する。しかし、これに伴なう生活遺構は少なく、墓地の西側で竪穴住居跡１棟が見つかっているに過ぎない。

「甕棺ロード」の南西端墓地は、中期前半期の墓域に重複しながら、さらに北側・西側に分布を広げ、吉武大石墓地と連なった。

南端部域の吉武高木墓地及びこの南側に中期前半期まであった甕棺墓地が終焉をつげ、東南側、南側、南西側に倉庫と考えられる掘立柱建物群・土壙などが分布する生活域となった。

〈中期後半〉　この時期では、北端部域の集落はさらに継続するが、ＣＤ－1～３地区とＧＨ－２・３地区で中期中頃には顕著であった円形竪穴住居跡と掘立柱建物の倉庫の組み合わせが無くなり、両地区共に大・小型の円形竪穴住居のみの構成に変わった。また、墓地は西側のＧＨ－２・３地区を主に前時期の墓域に重複するようである。

また、樋渡墳丘墓には墳丘縁辺部からの甕棺埋置が行われ、副葬品が青銅製武器から鉄器、前漢鏡などの漢式遺物へと変化している。墳丘墓に隣接するＦＧ－１１地区墓地は、この時期に最大規模となる。

吉武大石墓地は、さらに継続し、北側端に密集する傾向が見られる。また、南西方向へ連続する「甕棺ロード」は途絶することはなく、地区によって分布の粗・密は見られるものの西南端部付近では全時期を通じて最大の分布を示す墓地となる。特にＬＭ－１６地区やＮ－１６・１７地区では非常に密集度が高い。

吉武高木墓地の南側集落は、この時期も継続し、全時期を通じて最大の規模となったと考えられる。高木墓地の西側や東南側で円形(直径５ｍ)・方形竪穴住居跡、規模が１×２間の掘立柱建物、床面積がやや大きい２×５間規模で床中央に棟持ち柱掘り方かと考えられる小土壙を持つ掘立柱建物、土壙群などがまとまって分布する。また、南側のＦＧ－１６・１７地区でも１×２間規模を主に１×３間規模や梁間の狭い３×３間規模の建物、ほぼ方形に近い３×５間の側柱建物、不整形な土壙群を伴って分布する。さらに、南西部隅でも倉庫と考えられる建物群と不整形な土壙が散発的に認められる。

〈後期前半〉

この時期には北端部域の集落は、ＣＤ－１～３地区に数棟の建物群が見られ、これの南西側100m付近(Ｆ～Ｈ－４～６地区)ではまとまった倉庫と考えられる掘立柱建物群が知られるが、墓地は全く認められなくなる。

また、遺跡群中央の西半にあたるＨＬ－８～１１地区では自然流路を含む溝遺が顕著に見られるが、ここにも墓地の痕跡が見当たらない。

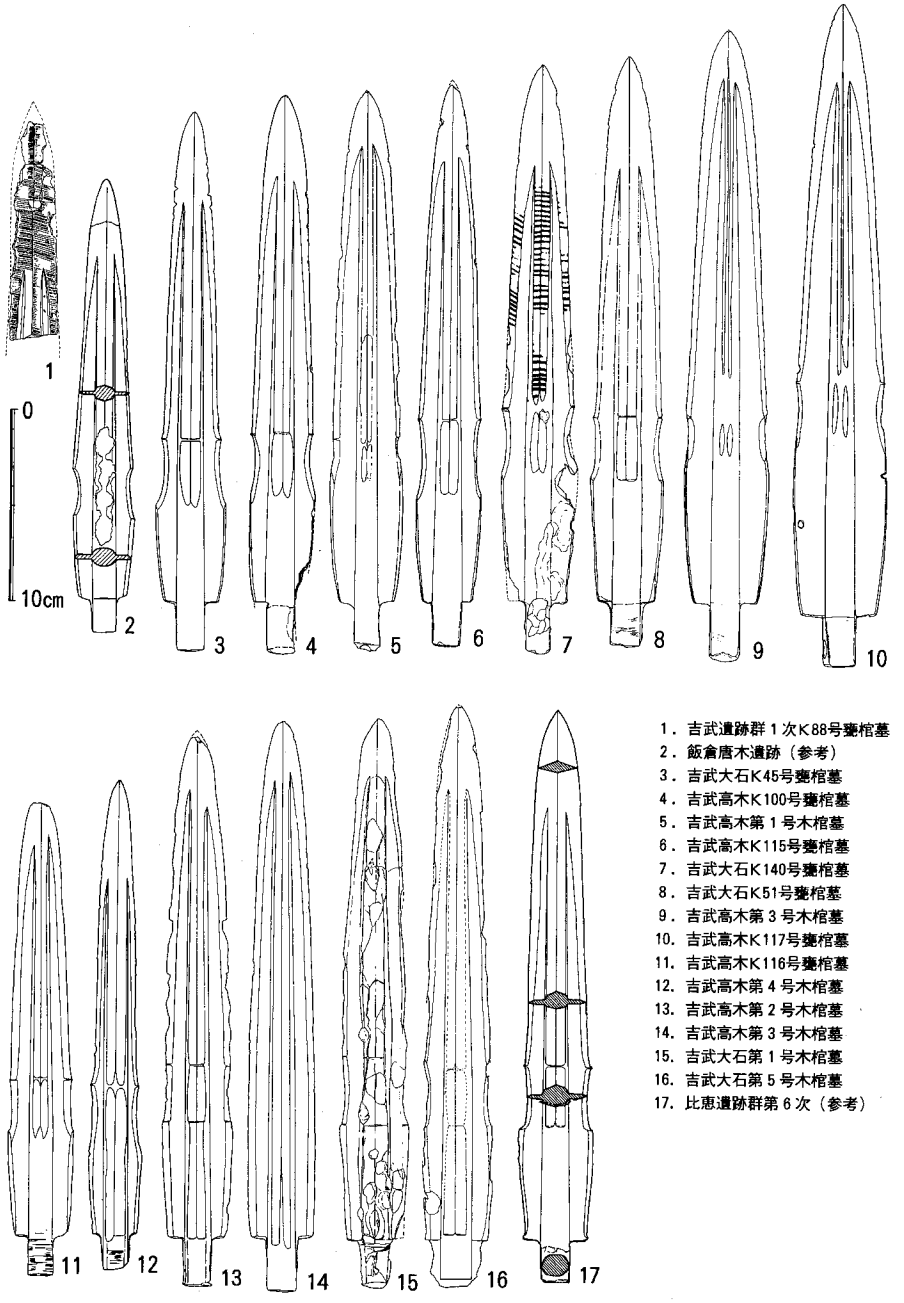


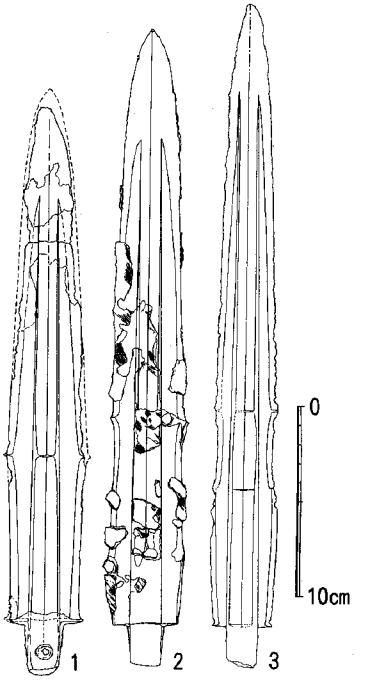
Fig.164　吉武高木・大石遺跡、飯倉唐木遺跡、比恵遺跡６次出土細形銅剣図(1/4)

吉武高木墓地の南西部にあたるＩ－18地区では、主柱穴が４本の長方形竪穴住居跡２棟、１×２間規模の掘立柱建物３棟、不定形土壙１基などが見つかっているが、墓地は見られない。

この時期の本格墓地は、「甕棺ロード」の南西端に２群が認められ、その１群は、Ｌ－１６地区、他の１群は、これの50m程南西にあたるＮ－１７地区のものである。

これまで吉武遺跡群の弥生時代遺構を前期後半から後期前半までの五時期に分けて変遷を追ってきたが、ここで再度略記する。

最も初期の集落は、前期後半期に先ず北端部に現れる。竪穴住居とこの周辺に小規模の墓地群を形成する。この状況は前期末まで変わらないが、南端部には生活遺構を伴わない厚葬墓群である吉武大石・高木墓地が出現する。そして中期前半期になると吉武大石・高木墓地の周辺に小規模の甕棺墓地群が形成されるのと同時に、後の「甕棺ロード」の西端部に帯状にまとまった墓地が形成される。また、該期の生活遺構が南端部で確実に確認できるようになる。続く中期中頃には新たに遺跡群のほぼ中央に樋渡墳丘墓が造営されると共に、大きな変化は吉武高木墓地が終焉し、南端部域は生活遺構のみとなることである。また、「甕棺ロード」に接する北東側には新たに墓地が形成され、全体に線として連続するようになる。続く中期後半期は、墓地・生活遺構ともに全時期を通じて最も盛んに遺構が展開するもので、安定した集落が形成されていたと考えることができよう。



1．単独発見（遊離）　2．K77号甕棺墓
3．K75号甕棺墓

Fig.165　樋渡墳丘墓出土銅剣図(1/4)

２．遺跡群出土の副葬遺物について　副葬遺物の組み合わせ図を作成したので、以下に吉武高木・大石両墓地の木棺墓、甕棺墓及び樋渡墳丘墓甕棺墓について概記する。

（１）**吉武高木墓地１号木棺墓**(Fig.161・164)　**細形銅剣**　先端を若干欠失する。背部の鎬は節帯下部までで、これ以下では断面形が円棒状となる。全長29.8cmを測るＢＩ式銅剣である。

碧玉製管玉　濃い緑色の良質な石材を使用する。長さは7.5～12.5mmを測るが、平均長・幅が10×3.96mm前後が多い。20個が環状に出土し、首飾りと考えられる。全長19cmを測る。

小壷　やや上げ底の全面黒塗りの小壷で、器面調整はヘラミガキを施す。口縁部を欠く。

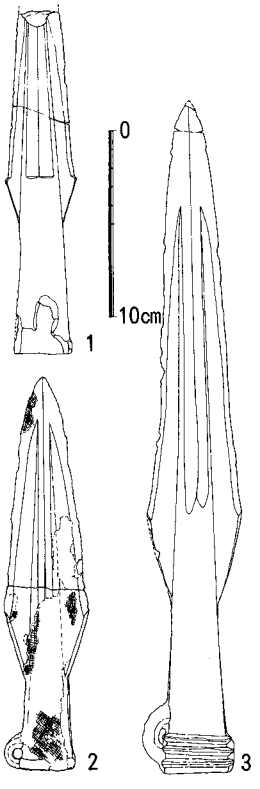
（２）**吉武高木墓地２号木棺墓**(Fig.161・164)　**細形銅剣**　切先・側辺部破損が著しい。身部は節帯以下も研ぎ出され、背部には関まで鎬が通る。全長29.1cmを測るＢⅡ式銅剣である。

翡翠製勾玉・碧玉製管玉　このうち管玉は、使用法に二種ある。その一は、94個出土し、全長4.8～10.4mm、最大幅3.0～3.7mmを測るやや小型のもので、通常の孔以外に頭部から尾部へ穿孔する異形の勾玉と一連となり首飾りと考えられる。82.6cmを測る。その二は、側辺で出土し、やや大型で、全長8.6～16.6mm、最大幅4.7～4.9mmを測り、39個出土した。全長61.3cmを測る。出土位置から腕飾りか。何れも濃い緑色の良質材を使用する。**小壷**　胴部下半を欠き、半球形の胴部から反転する口縁部は外端部がやや垂れて、内面は跳ね上げ状となる。頸部に三角突帯１条を巡らす。器面調整は、外面ヘラナデを施している。

（３）**吉武高木墓地３号木棺墓**(Fig.161,164,166,167,168,169)　**細形銅剣**　２型式のものがそれぞれ出土した。その一は、刳方幅が2.6cmと比較的小さく、節帯下部以下は研ぎが無い。全長33.5cm

を測るＢＩ式銅剣である。その二は、刳方を持たず、関まで刃付けがなされるタイプで、佐賀県汲田遺跡等に類例がみられる。片面に細かい研ぎ分けを行うＣ式銅剣である。**細形銅戈**　造りは全体に重厚で、片面に絹布が付着する。全長27cmを測るＢ式銅戈である。**細形銅矛**　全体にしっかりした造りで、袋部端に扁平な片耳をもつ。また片面に絹布が付着する。全長20.7cmを測るＡ式銅矛である。**多鈕細紋鏡**　文様の特徴は、外区には鋸歯文、中区に２個単位の同心円紋を上下・左右に4カ所配置、内区は細かい方形に区画し、これをさらに三角形に区画して細線で埋めている。内区にブリッジ状の鈕2個をもつ。面径11.2cmを測る。

翡翠製勾玉・碧玉製管玉　一連をなす玉類である。勾玉は、所謂「獣形勾玉」と呼ばれる種類で、内側に大小５カ所のノッチを刻む。全長4.1cm、厚さ2.2cmを測る。色調は、白色部分の多い緑色を呈する。管玉は、95個伴っており、全長5.3～11.2cm、最大幅3～3.35mmを測る。また、全長は73cmを測る。**小壷**　直立気味に外反する口縁を有し、頸部に断面三角形の段状突帯を巡らす小壷である。外面と内面一部に黒塗りをほどこす。器面調整は、幅広いヘラ状工具による横方向のナデを施す。



1．吉武大石K67号甕棺墓
2．吉武高木第３号木棺墓
3．吉武大石K45号甕棺墓

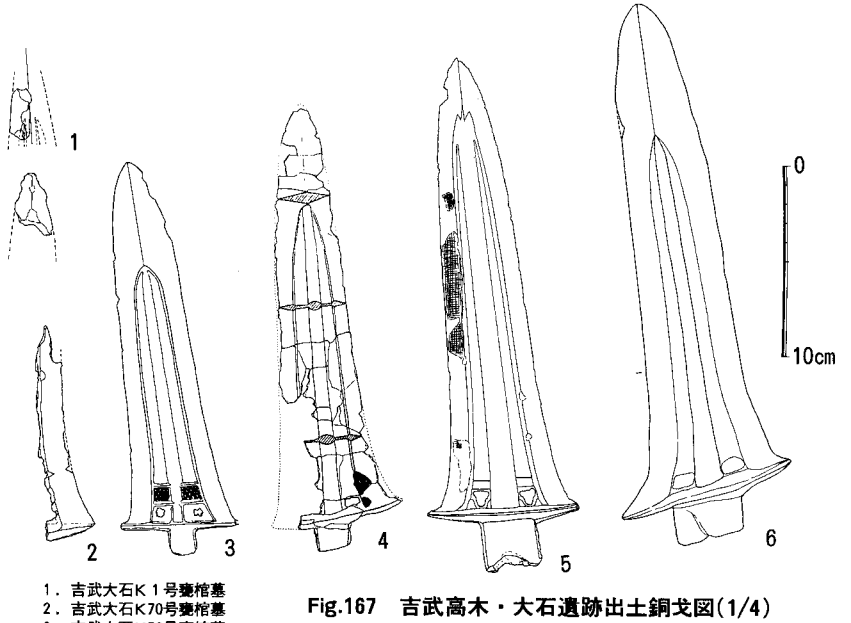
Fig.166　吉武高木・大石遺跡出土銅矛図(1/4)

（４）吉武高木墓地４号木棺墓(Fig.161,164)　**細形銅剣**　研ぎ減りによるものか全体に細身である。また樋から切先までの長さが他のものに比較して長い特徴をもつ。背部の研ぎは関まで及ぶ。全長26cmを測るＢⅡ式の銅剣である。**小壷**　短く、外反する口縁部を有する小壷で、器面調整は、横方向の丁寧なヘラミガキを施す。

（５）吉武大石墓地１号木棺墓(Fig.161,164,167)　**細形銅剣**　錆化が著しいが刃部が関まで研ぎ出された全長30.2cmを測るＢⅡ式銅剣である。

細形銅戈　同様に錆化が著しいＢ式銅戈である。全長26.6cmを測る。

（６）吉武大石墓地５号木棺墓(Fig.161,164)　**細形銅剣**　錆化が著しく、刃部の研ぎが関まで及ぶ。全長30.4cmを測るＢⅡ式銅剣である。この銅剣には木製鞘が伴っている。



1．吉武大石Ｋ１号甕棺墓
2．吉武大石K70号甕棺墓
3．吉武大石K53号甕棺墓
4．有田遺跡（参考）
5．吉武高木第３号木棺墓
6．吉武大石第１号木棺墓

Fig.167　吉武高木・大石遺跡出土銅戈図(1/4)

（７）吉武高木墓地100号甕棺墓(Fig.162,164)　**細形銅剣**　関の一部を欠失するが、刃部の研ぎが節帯下部より下に及ばない型式で、全長29.5cmを測るＢＩ式銅剣である。

（８）吉武高木墓地109号甕棺墓(Fig.162)　**碧玉製管玉**　10個が出土しており、全長6.4～9.2mm、最大幅3.3～3.4mmのサイズ幅がある。個数から

失われたものが多くあると思われる。

(9)吉武高木墓地110号甕棺墓(Fig.162)　**銅釧**　2個が出土しており、断面形が半円形をなし、それぞれの外径・重量が7.35～7.60cm・37.85g、7.45～7.4cm・35.8gを測る素環の製品である。**翡翠製勾玉・碧玉製管玉**　管玉74個とともに一連となる。勾玉は、明るい緑色を呈し、通常の孔の他に頭部より背部端に抜ける1孔を穿つ。全長2.4cmを測る。また管玉は、全て濃緑色の良質材を使用し、全長7.3～11.7mm、最大幅3.2～4.1mmのサイズ幅をもつ。全長は、96.8cmを測る。

(10)吉武高木墓地111号甕棺墓(Fig.162)　**碧玉製管玉**　92個が出土しており、全長・最大幅のサイズから二類に区別される。それは12.9mm・4.1mmのタイプと7.7mm・3.6mmのタイプとである。出土状況からこの二タイプの管玉は棺底に混在しており、小型のタイプは2号木棺墓の腰部から見つかった一群と類似することから、腕飾りと首飾りとが混じりあった状況とも考えられる。

(11)吉武高木墓地115号甕棺墓(Fig.162,164)　**細形銅剣**　先端部を僅かに失う。刃部の研ぎ出しは節帯下端より下には及んでいない。全長29.9cmを測るＢＩ式の銅剣である。

(12)吉武高木墓地116号甕棺墓(Fig.162,164)　**細形銅剣**　先端部を欠損する。刃部の研ぎは刳方下端より下方に及ばない。現存全長25.2cmを測るＢＩ式銅剣である。**小壷**　やや上げ底気味の底部に半球形の胴部を有し、頸部に1条の突帯を巡らす。

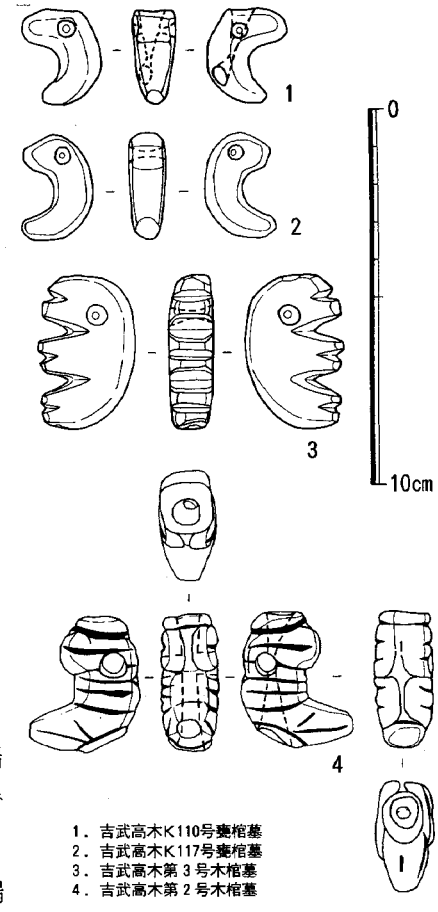


Fig.168　吉武高木遺跡出土勾玉図(1/2)

口縁部は外半気味に立ち上がり、上端部は平坦となり、やや下方に垂れる。器面調整は、丁寧なヘラミガキを施す。器形上で非常に特徴のある副葬土器である。

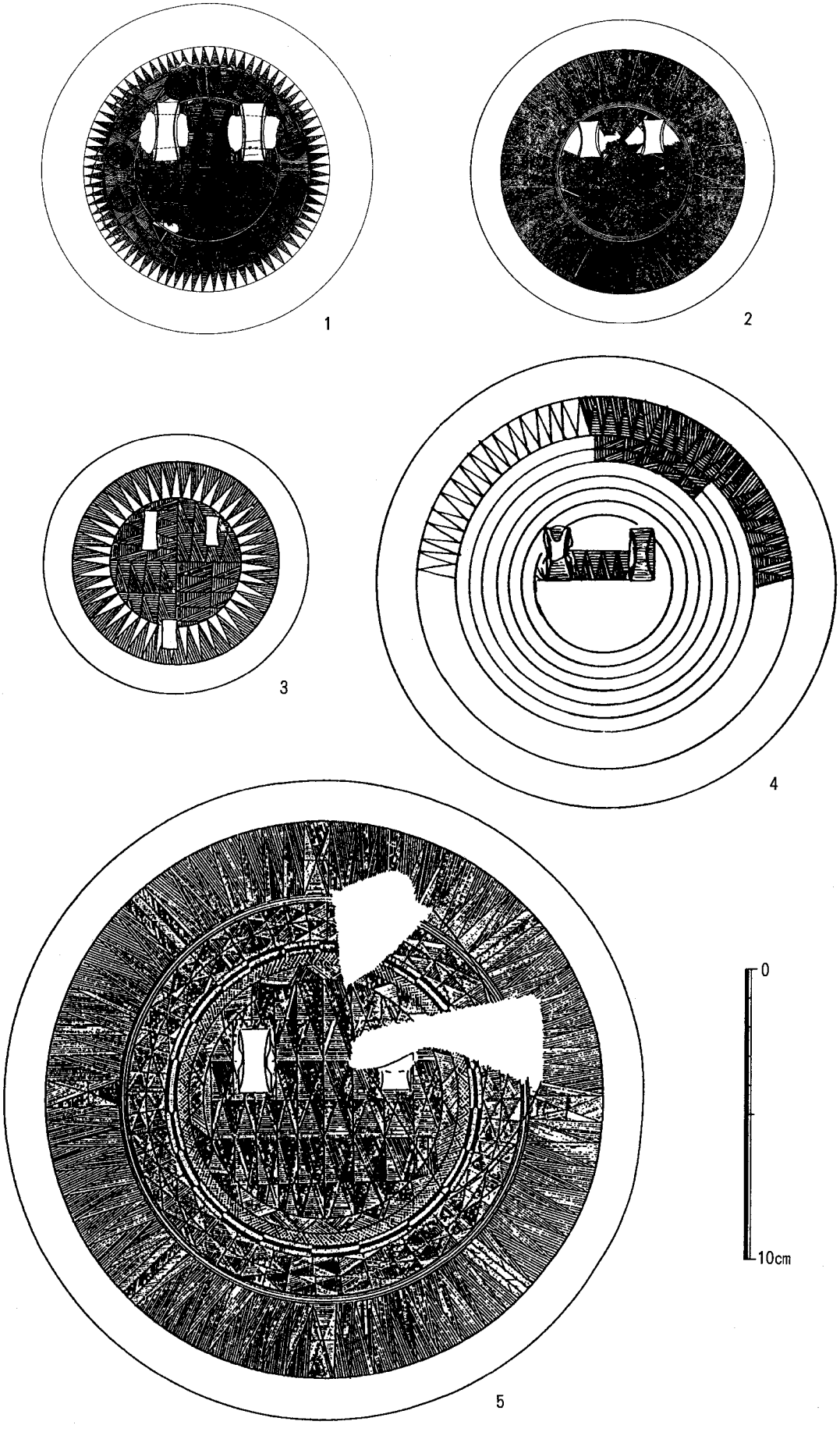
(13)吉武高木墓地117号甕棺墓(Fig.162,164,168)　**細形銅剣**　樋先端から切先を除くと全体に研ぎ出しが進んでいない。刳方は浅く、節帯の形成が弱く、下部には見られない。全長35.3cmを測るＢＩ式の銅剣である。**翡翠製勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉**　管玉を親玉として管玉42個、小玉1個で一連となる首飾りである。勾玉は、濃い緑色を呈する良品で、全長2.75cmを測る。また、管玉は、全長6.5～14.5mm、最大幅3.4～3.8mmの幅を持つが、全体にサイズが揃っていると言える。全長37.5cmとなる。また、ガラス小玉は、紫紺色を帯び、径3mm、厚さ1.8mmを測る。時期的には非常に希少な資料である。

(14)吉武高木墓地125号甕棺墓(Fig.162)　**柳葉形有柄磨製石鏃**　粘板岩使用の磨製鏃で、完器であることと破損が殆ど観察されない点で副葬品と考えられよう。全長11.25cm、最大幅2.35cmを測る。

(15)吉武大石墓地1号甕棺墓(Fig.162,167)　**細形銅矛**　小破片であるが先端部付近か。わずかに樋の部分が観察される。残存長27mm。戦闘時に体内に打ち込まれた可能性もある。

(16)吉武大石墓地10号甕棺墓(Fig.162)　**磨製石鏃**　長い三角形の磨製鏃で、全長37mm、厚さ2mmの完形品である。基部は研磨によって面取りされており、石剣を転用した可能性もある。

(17)吉武大石墓地45号甕棺墓(Fig.162,164,166)　**細形銅剣**　先端付近に細かな刃部の欠落があるが、全体に保存は良い製品である。刳方の下端より下方は刃部の研ぎ出しが行われておらず、茎断面は円



1．吉武高木遺跡第３号木棺墓　2．宇木汲田遺跡第12号甕棺墓　3．梶栗浜石棺墓　4．御所市名柄　5．柏原市大県

Fig.169　吉武高木・宇木汲田・梶栗浜・名柄・大県遺跡出土多鈕細紋鏡図(1/2)

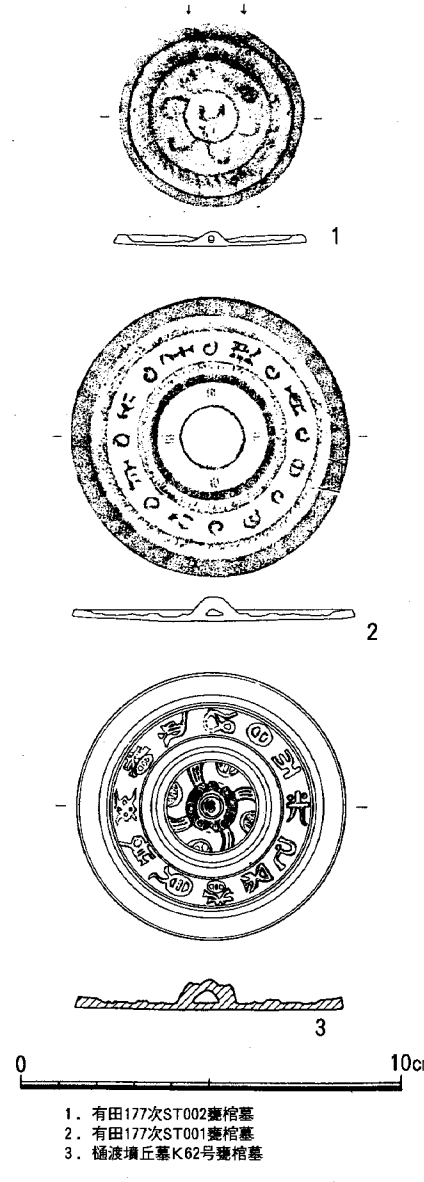
に近い。全長28.3cmを測るＢＩ式の銅剣である。

細形銅矛　ほぼ完器に近く、全長35.7cmを測る大型の矛である。鋒と両側の刃部に細かい欠損が見られる。袋部断面は、36×30mmの楕円形をなし、全長88mmを測る。また端部には３本の節帯があり、半円形の片耳が付いている。また、袋部内には木柄の一部が遺存しており、残存長が10cmある。これが着柄のまま副葬されたとすれば、柄の長さは180cm以内のものが想定される。

(18)吉武大石墓地51号甕棺墓(Fig.162,164)　**細形銅剣**　やや身幅が広いが、45号甕棺墓副葬の銅剣とよく似た特徴を持っている。背部の鎬は下部節帯までで、これ以下には刃付けがなされていない。また、関は背部に直交しているが、鋳造の時の甲張りが残る。全長31.6cmを測るＢＩ式銅剣である。**碧玉製管玉**　11個が出土しており、サイズの上では良く揃っていると言える。全長4.2～6.5mm、最大幅2.4～3.0mmの幅を持っている。吉武大石墓地では数少ない装身具である。

(19)吉武大石墓地53号甕棺墓(Fig.162,167)　**細形銅戈**　鋒部付近の刃部が細かく欠けるが、完形品である。極めて薄い造りの製品であり、最も厚い関部で4mmの薄さで、全長が21.2cmを測るＡ式銅戈である。類例は佐賀県唐津市宇木汲田遺跡などで知られるが、実用武器としての機能を果たし得るかは疑問であろう。**磨製石剣**　４点が出土しており、いずれも粘板岩質の石材が用いられている。全て切先部分のもので、折損している。これらは被葬者の腰部付近に刺さっていたものではないかと推定されている。種類としては石鏃の可能性もある。

(20)吉武大石墓地60号甕棺墓(Fig.162)　**磨製石剣**　粘板岩質の石材を使用する。折損しており、切先に近い刃部には損傷部が見られる。残存全長6.1cmを測る。



1．有田177次ST002甕棺墓
2．有田177次ST001甕棺墓
3．樋渡墳丘墓K62号甕棺墓

Fig.170　有田遺跡177次・樋渡墳丘墓出土銅鏡図(1/2)

(21)吉武大石墓地67号甕棺墓(Fig.162,166)　**細形銅矛**　器は、樋以上の先端部が折れ、袋部の基部が破損している。これらは何れも何らかの一時的な力が加わったために破損が起こったと考えられている。現存長18.4cmであるが、4cm程度の鋒部を想定すると全長22cmのサイズとなろう。

(22)吉武大石墓地70号甕棺墓(Fig.162,167)　**細形銅戈**　同一個体と考えられる破片４点が出土しているが、鋒部の形状などから細身の銅戈と想定されるよう。また、関部に近い刃部の残る破片には細かい研ぎ分けが残っている。

(23)吉武大石墓地71号甕棺墓(Fig.162)　**青銅製品**　全長29mmで、断面径16mmの円形をなす製品であるが、器種を特定できない。**石製品**　碧玉製品で、39点が出土している。サイズは、長さ3.5～9.2mmと幅がある。断面形は、薄い蒲鉾形をなす。佐賀県柚比本村遺跡で知られた銅剣鞘の表面に張り付けて飾りとする石製品と同一のものではないかと推定されている。

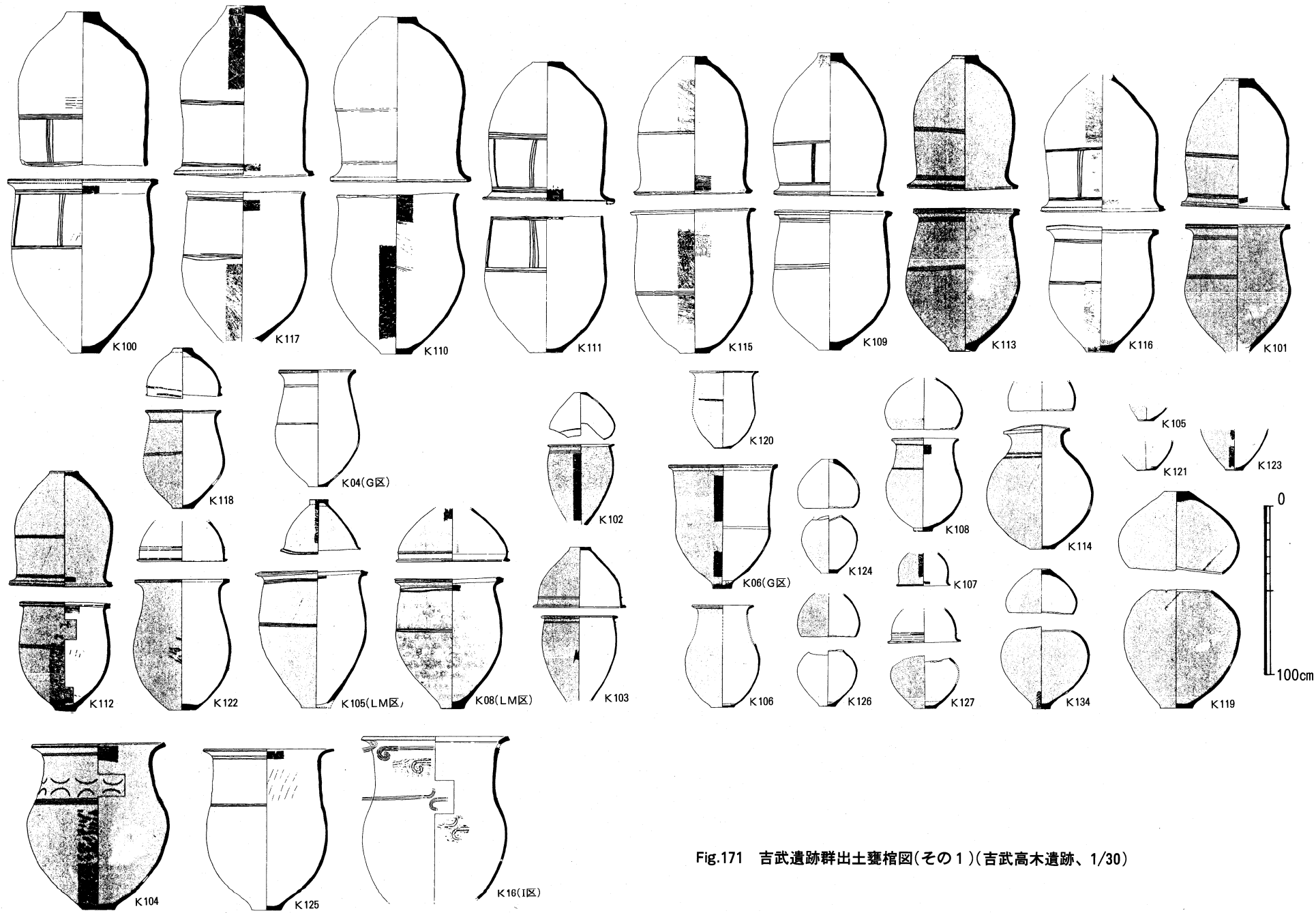


Fig.171　吉武遺跡群出土甕棺図(その１)(吉武高木遺跡、1/30)

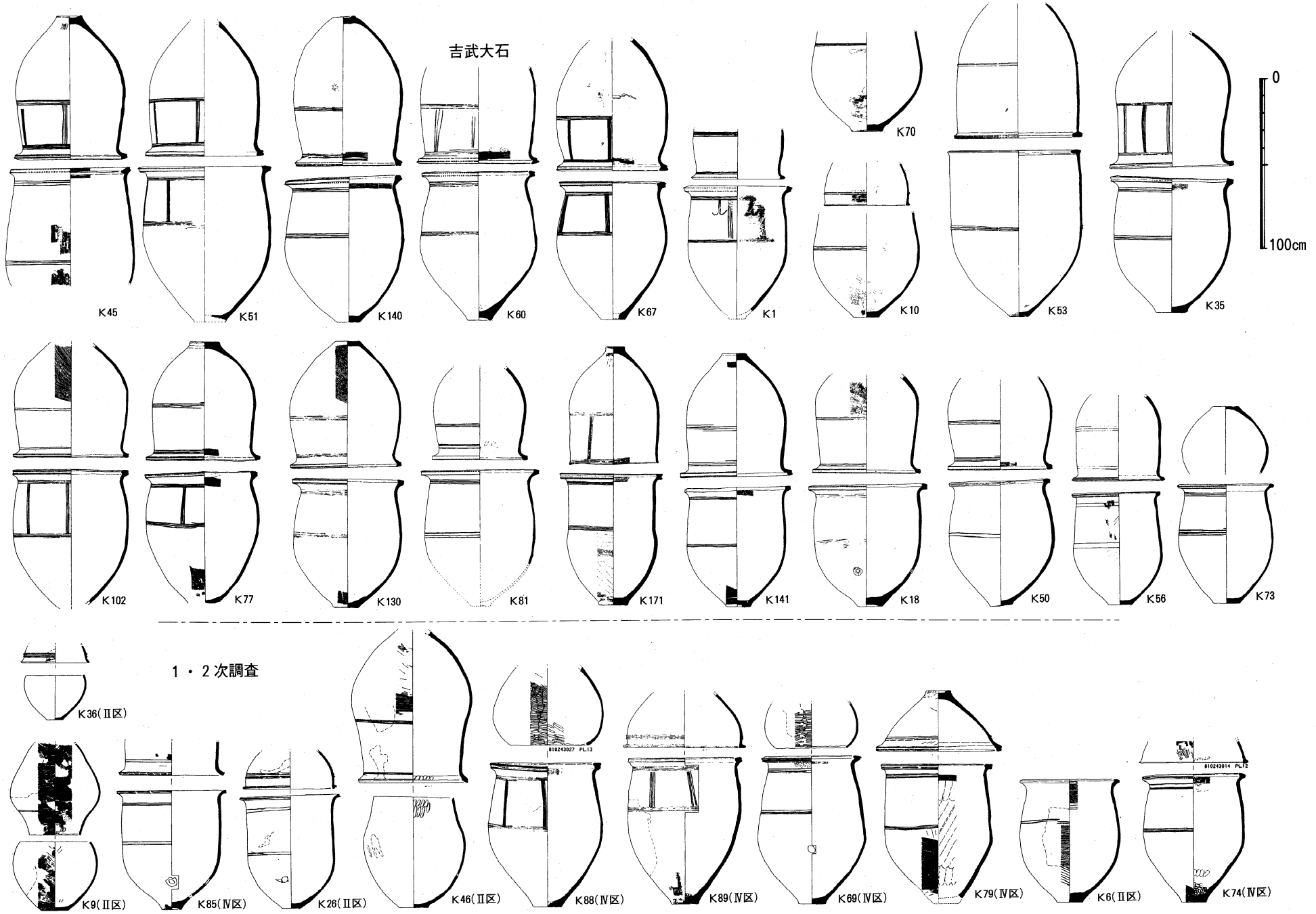


Fig.172　吉武遺跡群出土甕棺図(その2)(吉武大石遺跡・第1～2次調査、1/30)

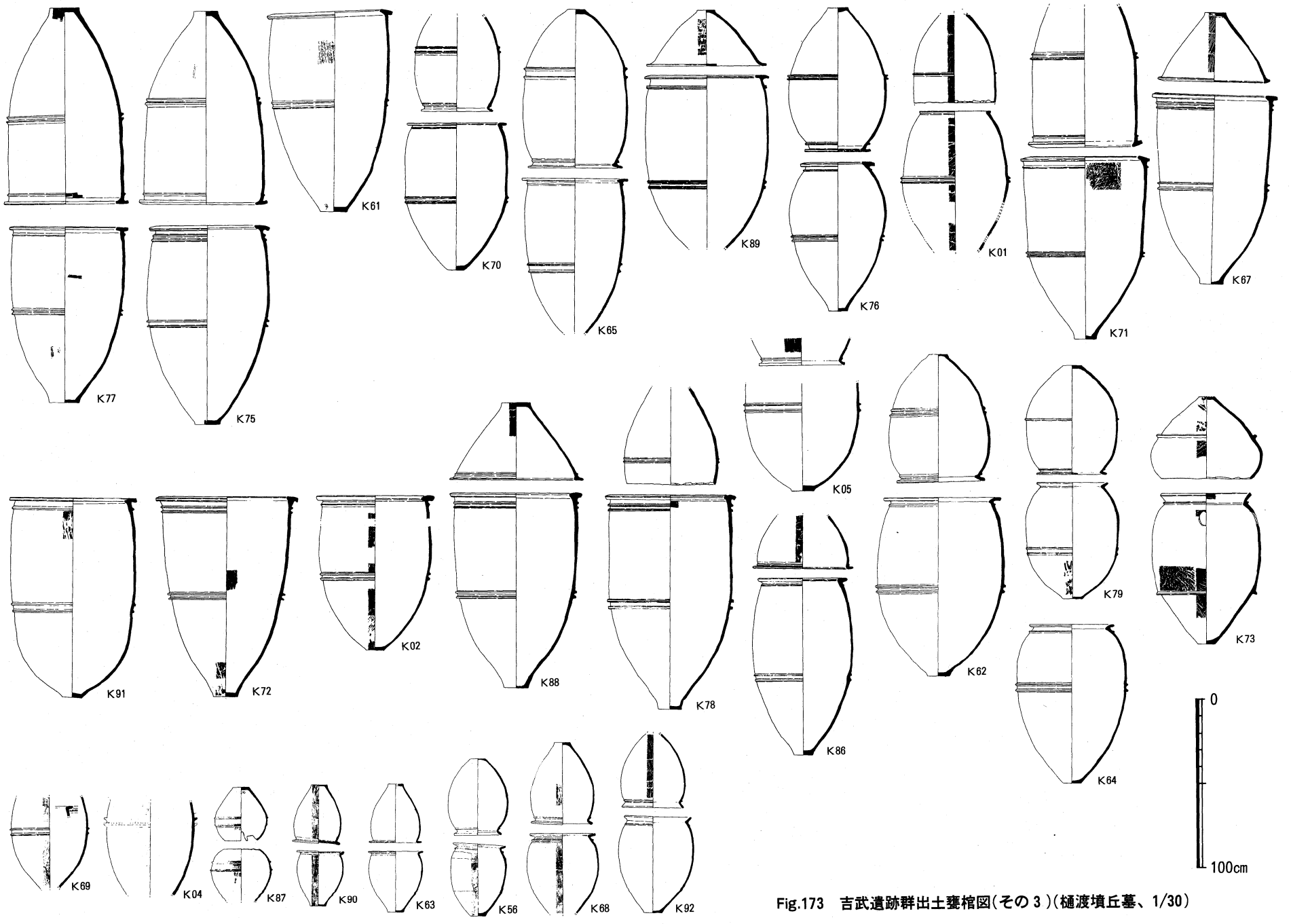


Fig.173　吉武遺跡群出土甕棺図（その３）（樋渡墳丘墓、1/30）

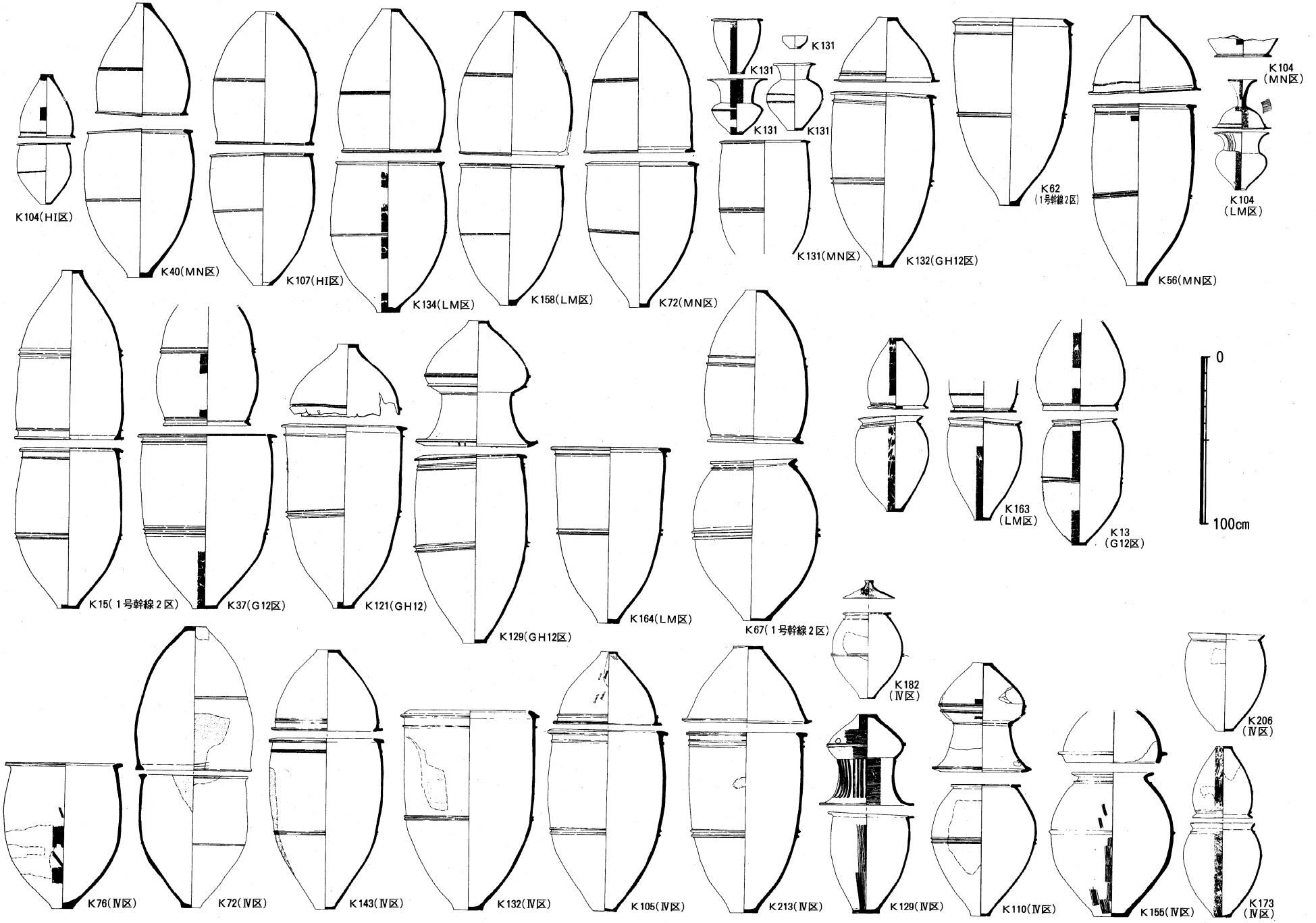


Fig.174　吉武遺跡群出土甕棺図(その4)(第1・3・4次調査、1/30)

(24)吉武大石墓地81号甕棺墓(Fig.162)　**磨製石剣**　先端部で折損した破片で、残存長25mmを測る。粘板岩質の石材を使用する。

(25)吉武大石墓地140号甕棺墓(Fig.162,164)　**細形銅剣**　刳方付近の錆化と変形が著しい。刳方下部より下方は刃部の研ぎ出しは行われていない。刳方から鋒部にかけては幅1.5mmの細かい研ぎ分けが背部・刃部共に施されている。全長31.3cmを測るＢⅡ式銅剣である。

(26)吉武遺跡群第１次調査88号甕棺墓(Fig.162,164)　**細形銅剣**　樋の先端部を残す鋒部破片である。使用によって折損しているものと考えられる。全体に細身で、樋先端から鋒部までが比較的長い特徴をもつ。残存全長11.4cmを測る。

(27)樋渡墳丘墓５号甕棺墓(Fig.163)　**鉄剣**　錆化が著しく、また破断部分も見られるが、推定全長は、39.2cm程度と考えられる。関端より2.8cm程上がった位置に径3mmの小孔が２個穿たれている。茎は7.2cmで、関との間には一部に木質が付着する。**鉄鏃**　基部が緩くカーブする無茎式鉄鏃である。全長3cm、基部最大幅2.2cmを測る。

(28)樋渡墳丘墓61号甕棺墓(Fig.163) **鉄剣**　錆化が著しく先端を欠失するが、現存長25.6cmを測り、復元全長は27.6cm前後となろう。先端付近は良く研ぎ出され、断面は偏菱形となる。また、関部から１cm程上がった位置に径3mmの小孔２個を穿っている。

(29)樋渡墳丘墓62号甕棺墓(Fig.163,170) **素環頭太刀**　全体に重厚な造りで、刃部は全く反りをもたず直線的である。また、環頭端も身部と接した造りで、身部端から6.4cmの部分まで幅3mm程度の素材が巻かれる。全長35.2cmを測る。**重圏文星雲鏡**　面径6.9cmを測る平縁の前漢鏡である。鈕は、所謂「博山炉」型のもので、中央に１個その周辺に８個の円形突起を配置する。また、内区には４個の半円文と捩文が交互に配置される。外区は、銘帯となり「見日之光　久不相見　長母相忘」の12文字が配される。

(30)樋渡墳丘墓64号甕棺墓(Fig.163) **素環頭刀子**　環頭の一部を失うが、全長22.4cmを測る。錆化が進んでおり、このために変形し、やせ細って見えるが、使用時の研ぎ減りもかなりあるかも知れない。環頭端は身部と接する形態であろうと思われる。

(31)樋渡墳丘墓75号甕棺墓(Fig.163,165) **細形銅剣**　全体に細身の銅剣で、刃部の研ぎ出しが関部まで及び、端部の両端は棘状に尖っている。全長が35.4cmを測るＢⅡ式銅剣である。**把頭飾**　所謂十字形把頭飾である。基部には緊縛用の紐が残る。

(32)樋渡墳丘墓77号甕棺墓(Fig.163,165)　**細形銅剣**　先端を僅かに欠くが、重厚な造りの銅剣である。刳方は非常に長く、下端部では不規則な研ぎ出しが行われたため両面とも非対称な形状となる。刃部の研ぎ出しは関部までは及んでいない。全長が33.9cmを測るＢⅠ式銅剣である。**鍔金具**　銅剣に伴う鍔金具破片で、幅1cm、長さ2.2cmを残す。

参考文献

森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』
（金関丈夫博士古稀記念委員会編）

図　版

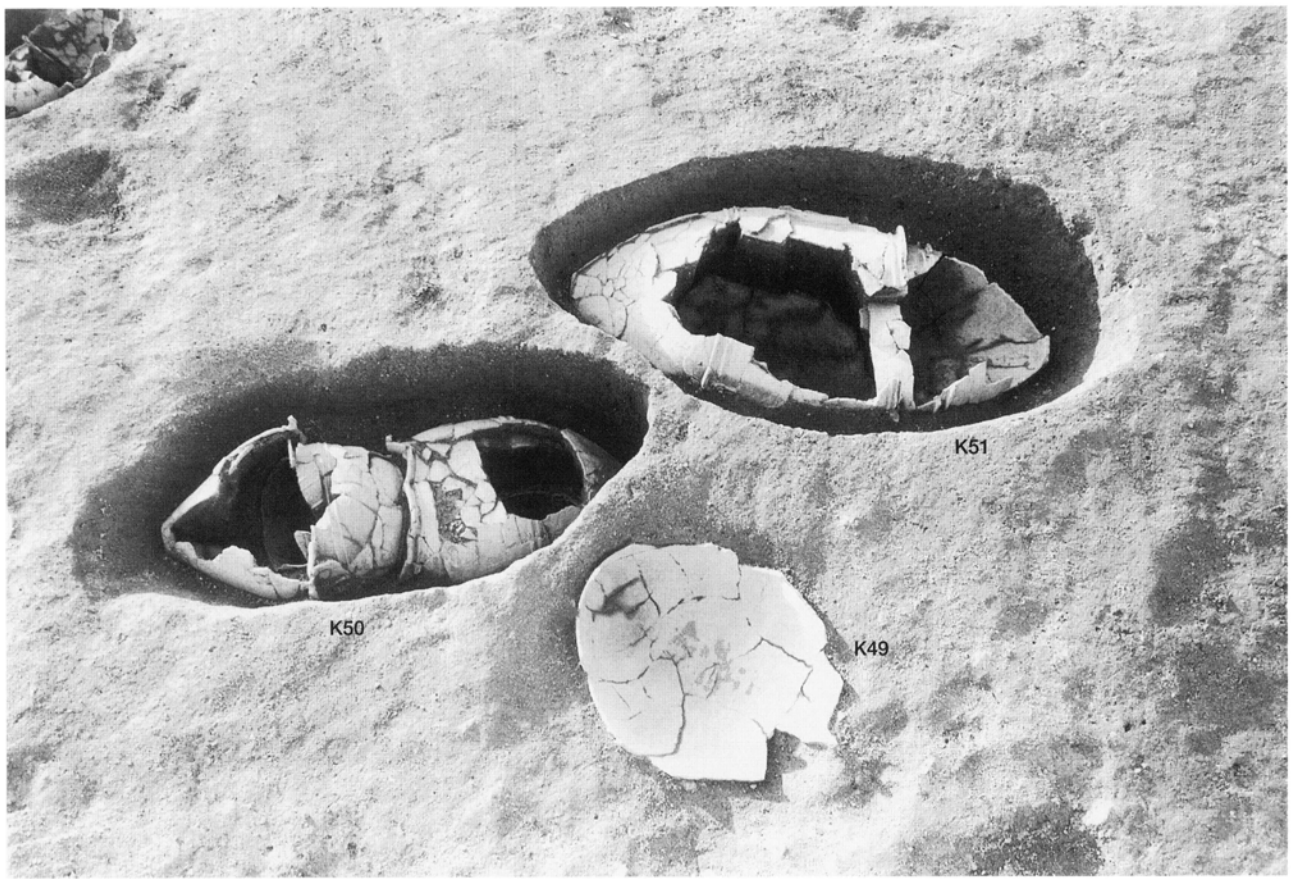
PLATES

第3次調査地区全景（航空写真、南から）

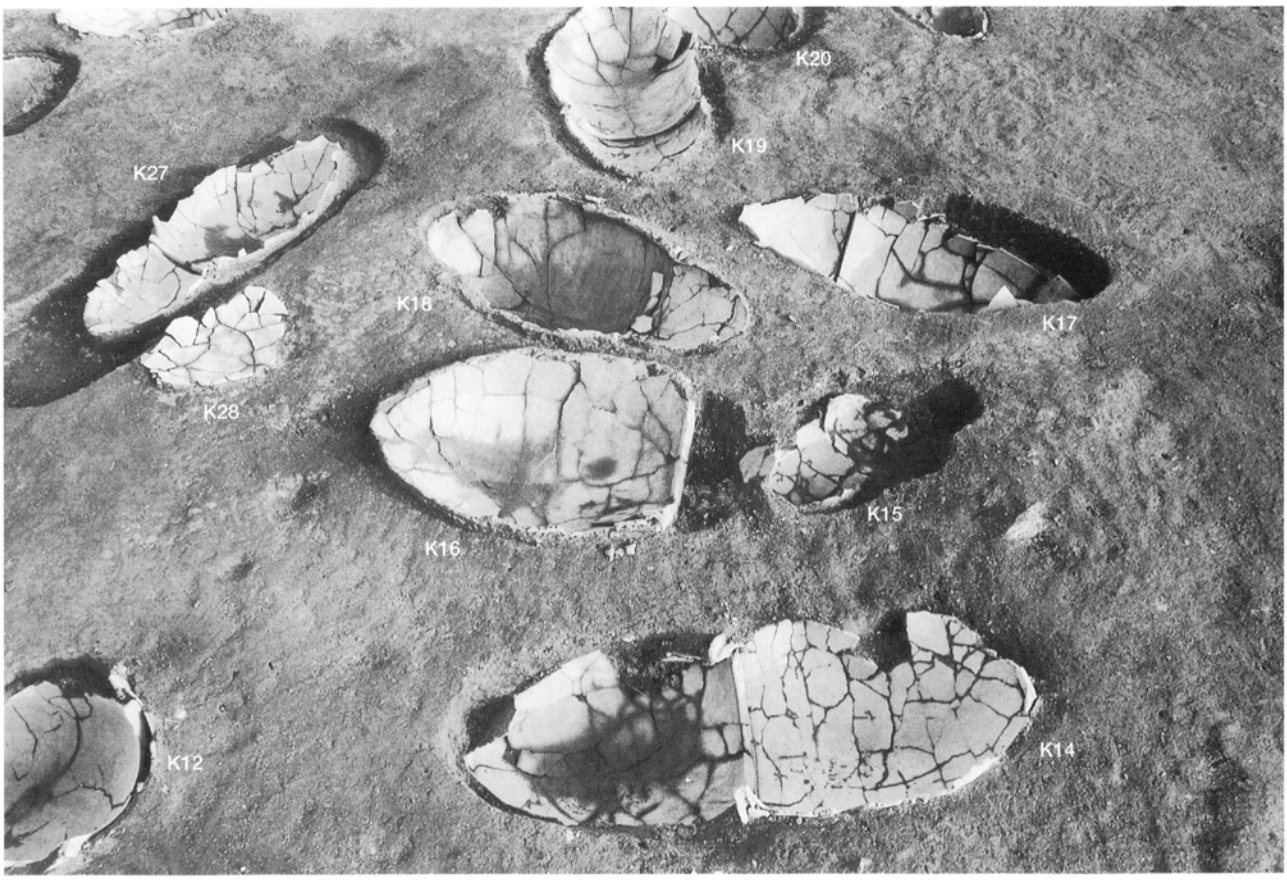
第3次調査G12地区全景（西から）

第3次調査G12地区全景（西から）

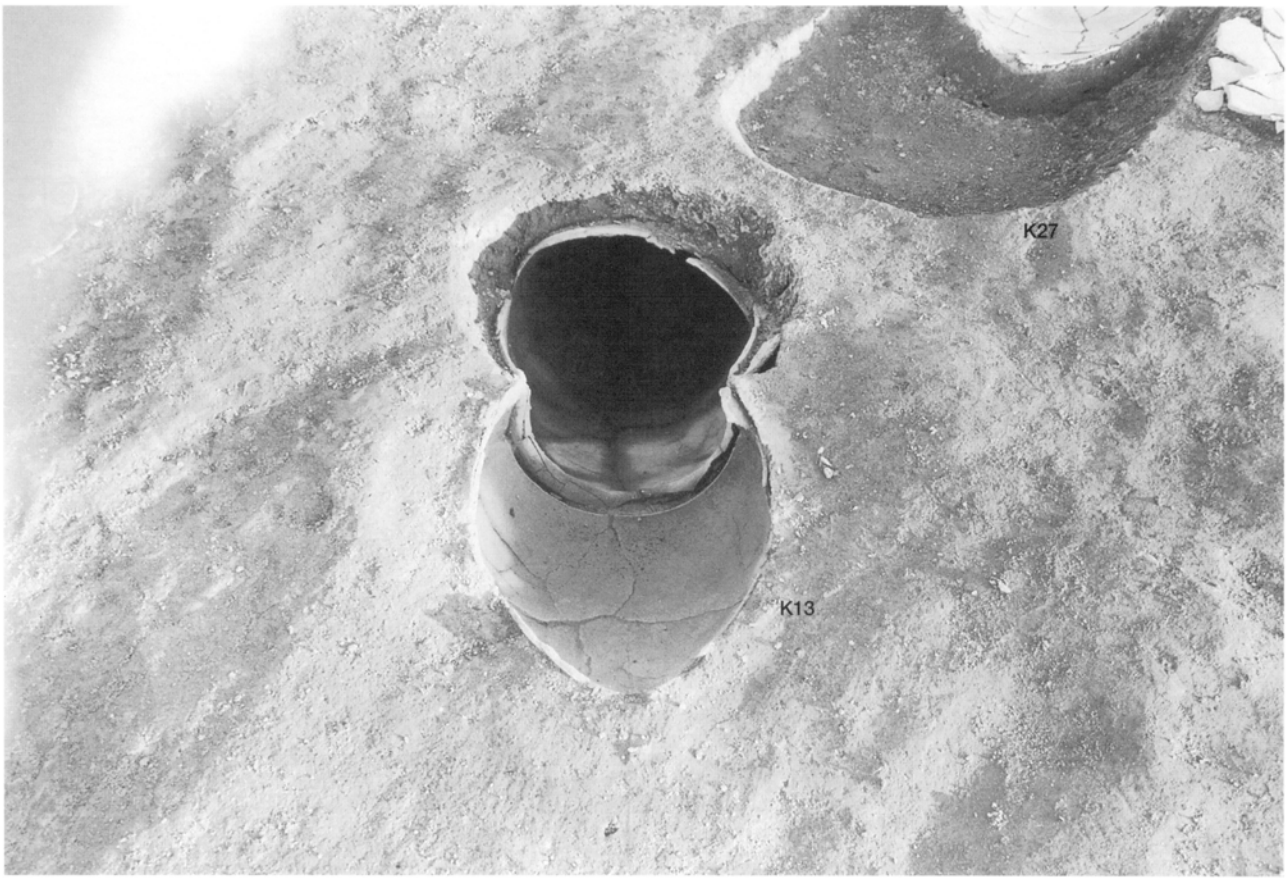
第3次調査G12地区K15～21・26～30・32～40・51号甕棺墓出土状況（西から）



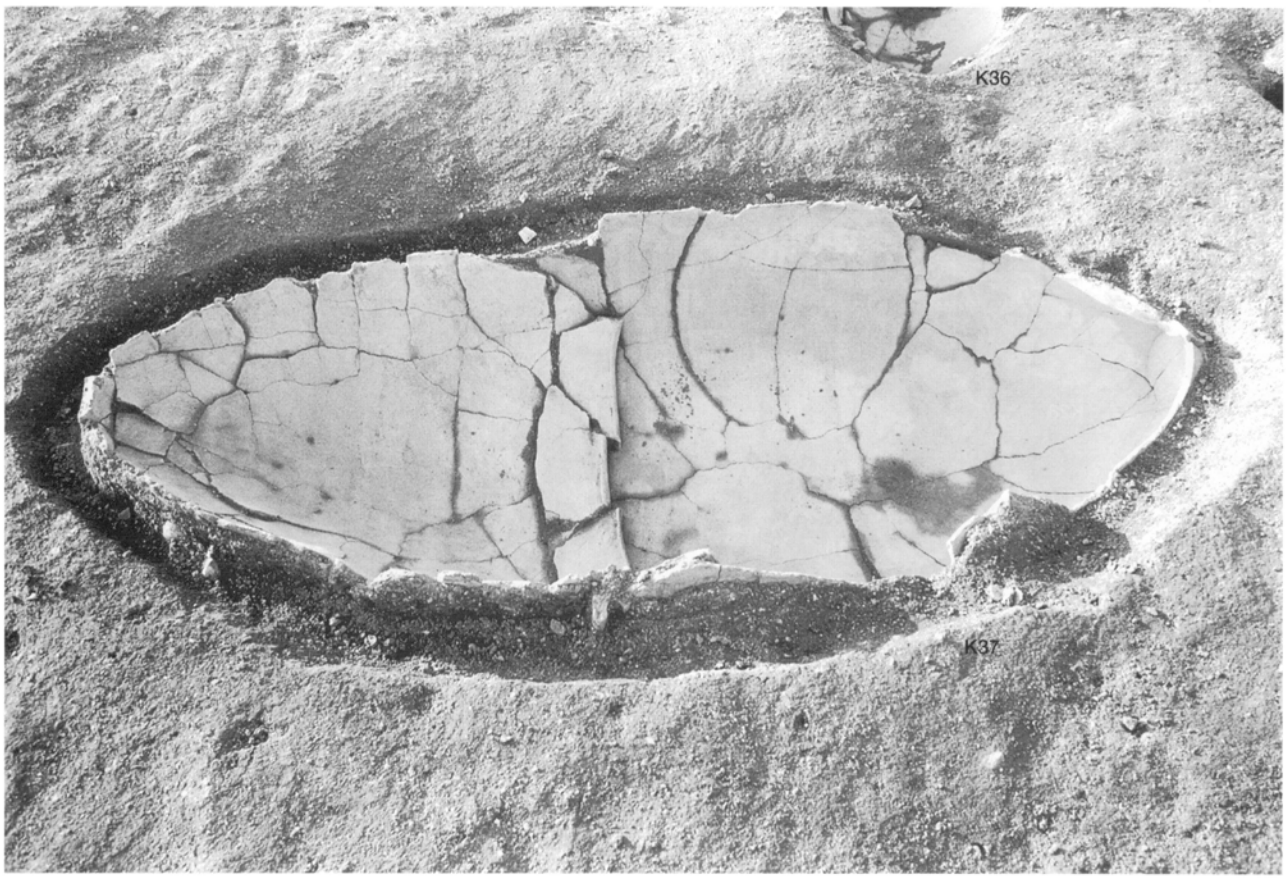
第3次調査G12地区K49～51号甕棺墓出土状況（東から）



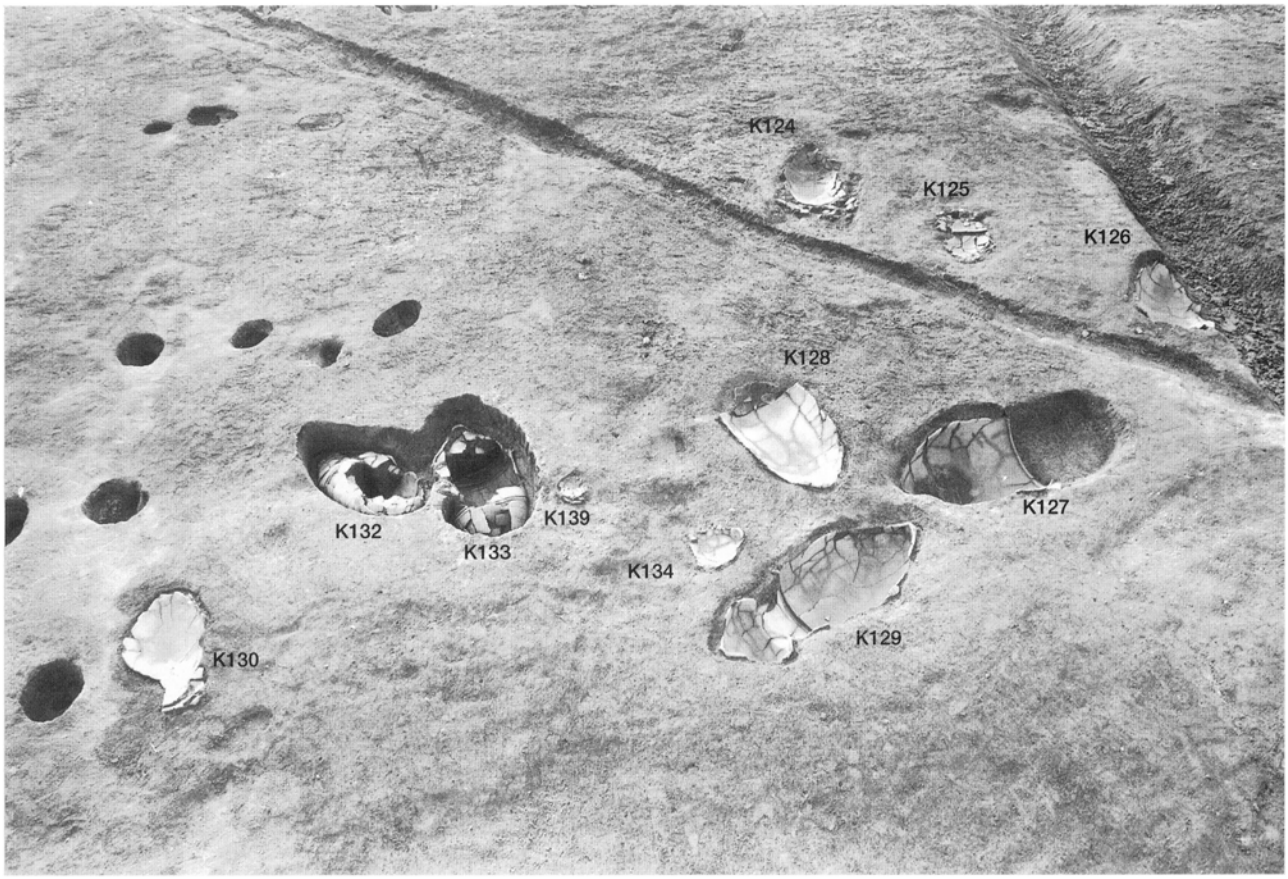
第3次調査G12地区K12・14～20・27・28号甕棺墓出土状況（西から）



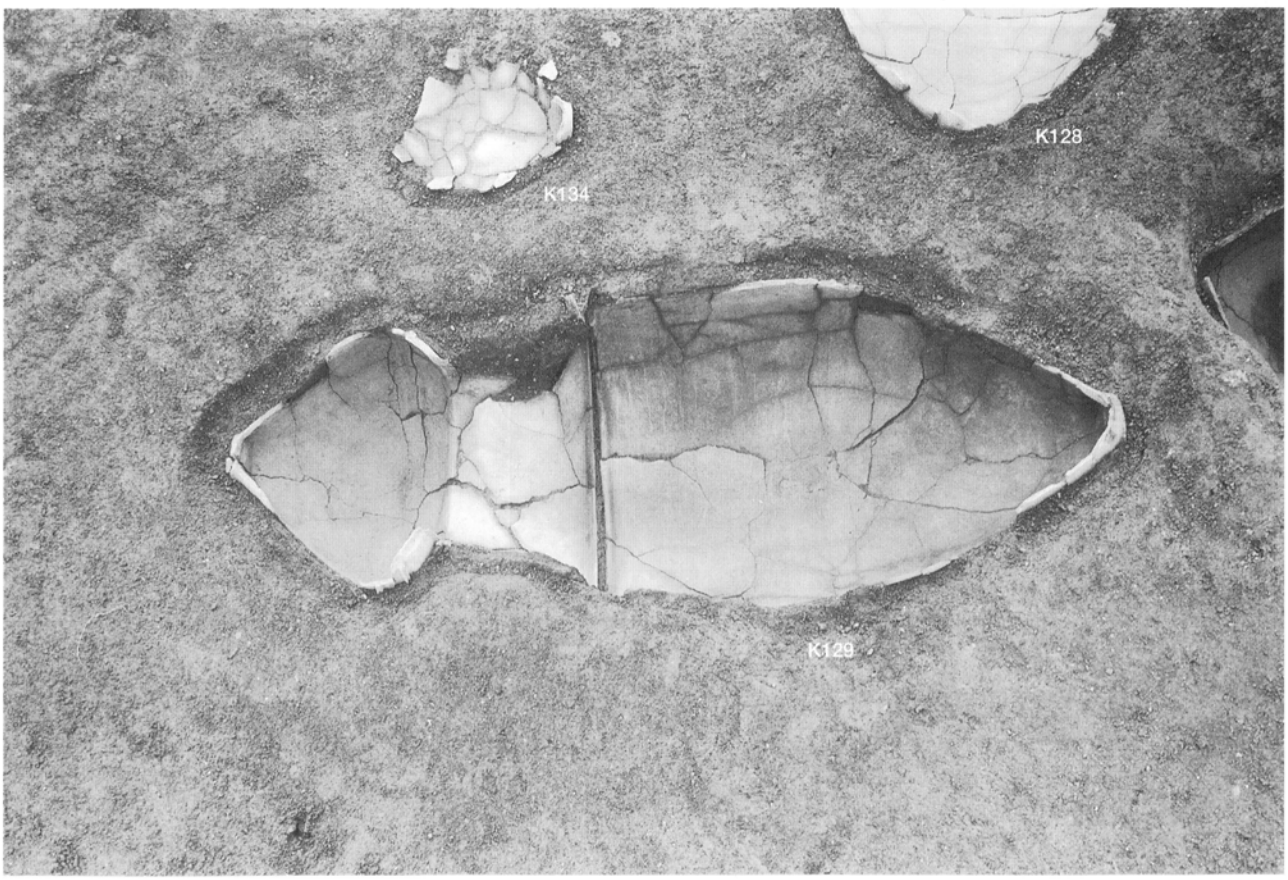
第3次調査G12地区K13・27号甕棺墓出土状況（北から）



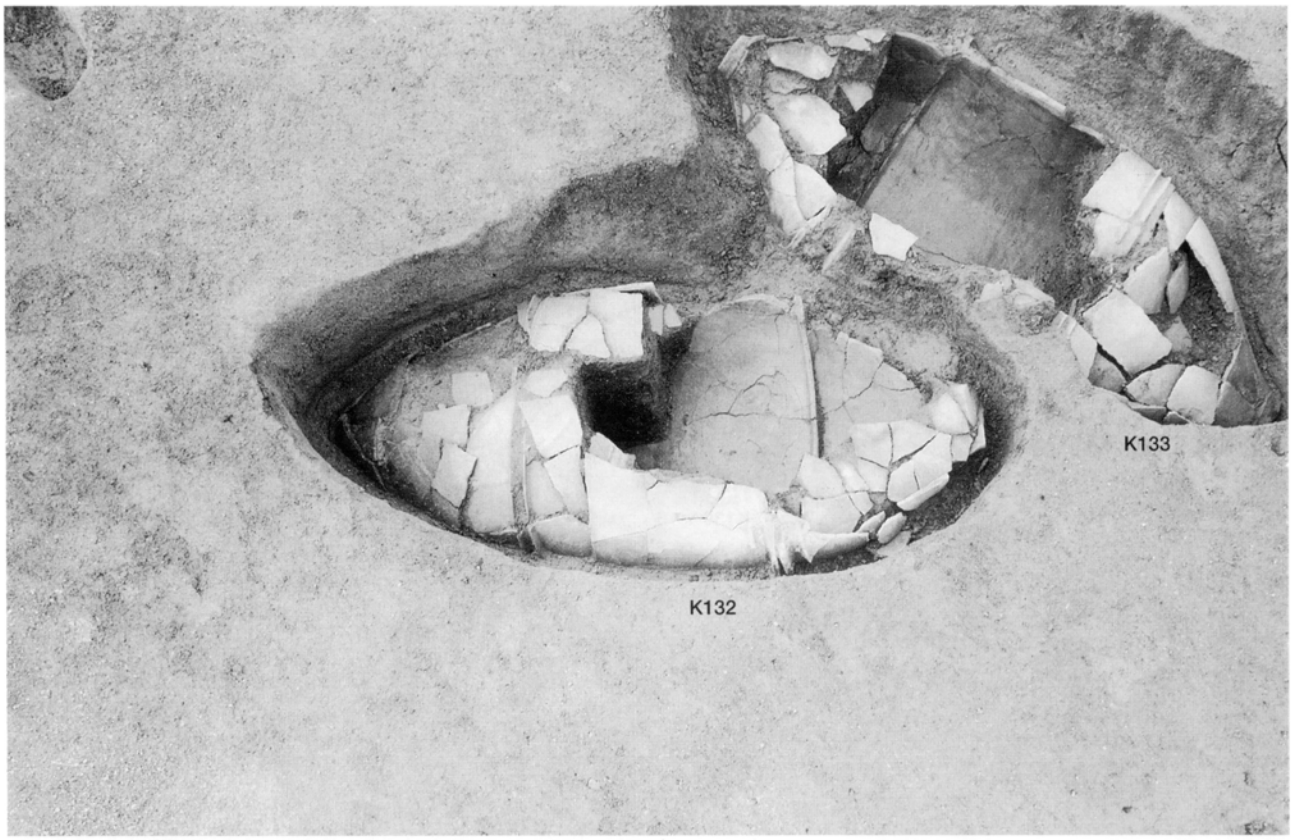
第3次調査G12地区K36・37号甕棺墓出土状況（南から）



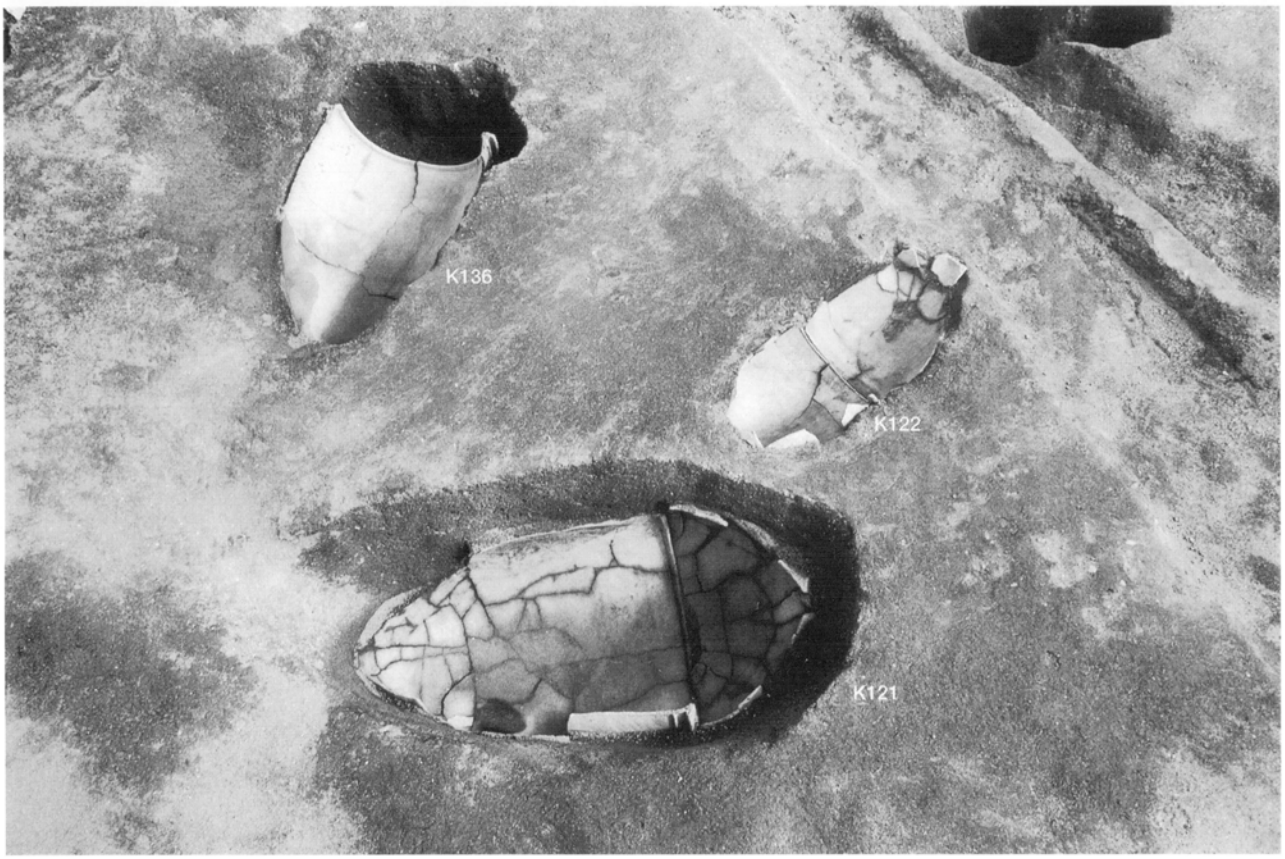
第3次調査G・H12地区全景（東から）



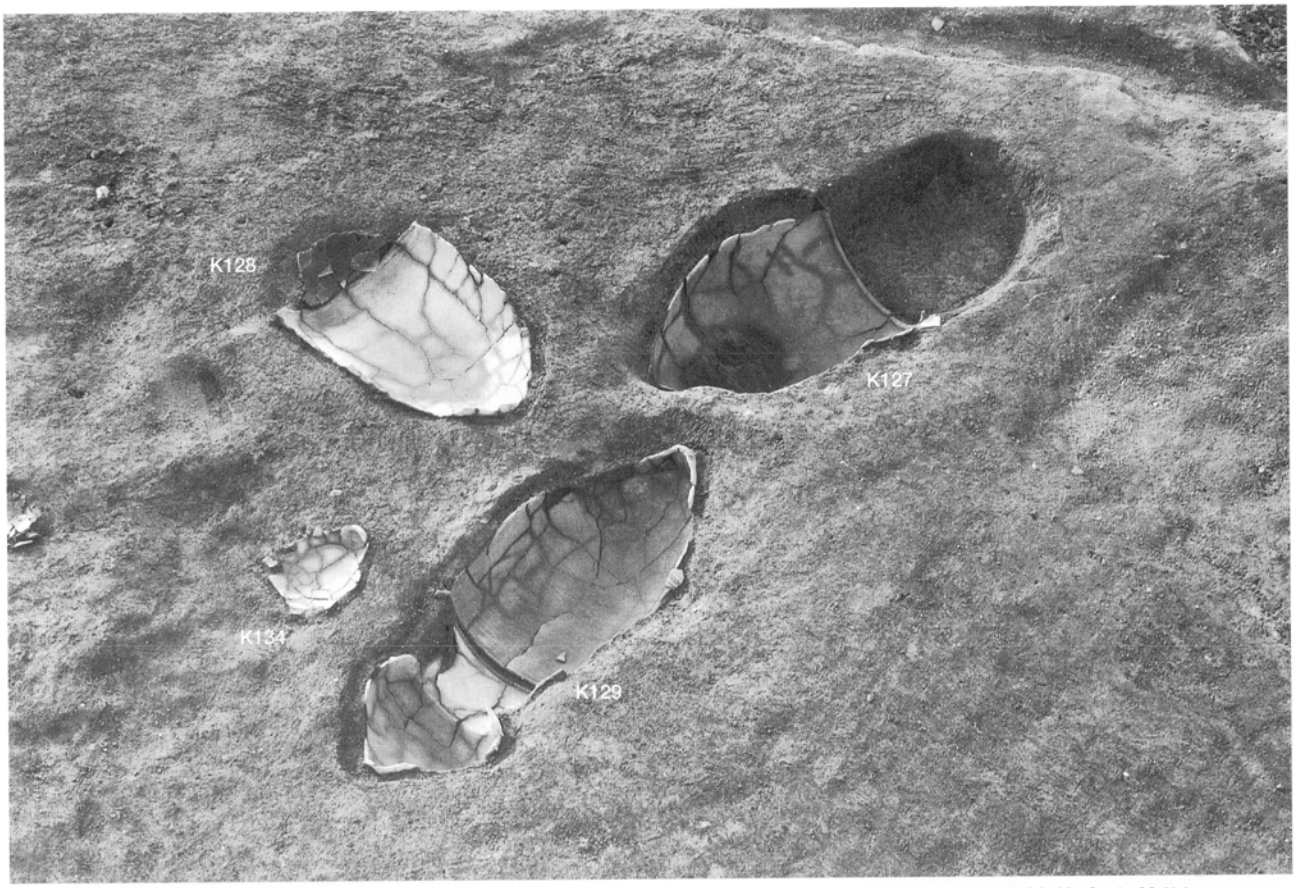
第3次調査G・H12地区K128・129・134号甕棺墓出土状況（北東から）



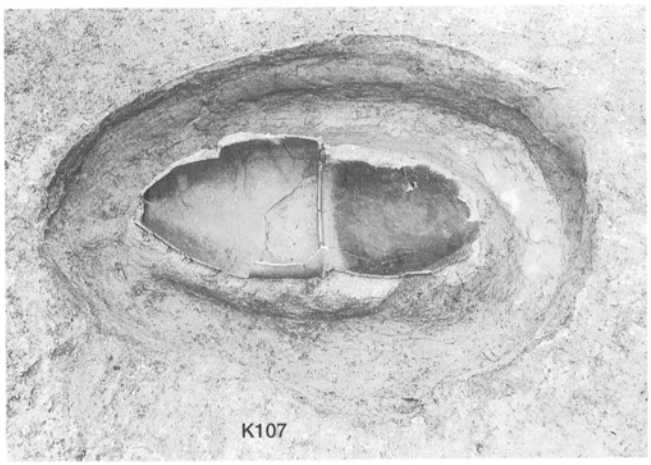
第3次調査G・H12地区K132・133号甕棺墓出土状況（東から）

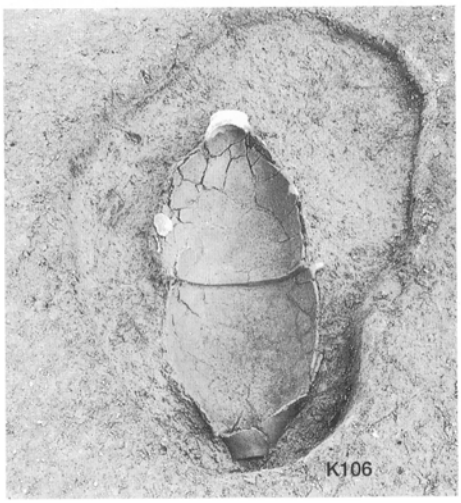


第3次調査G・H12地区K121・122・136号甕棺墓出土状況（西から）



第3次調査G・H12地区K127～129・134号甕棺墓出土状況
（南東から）

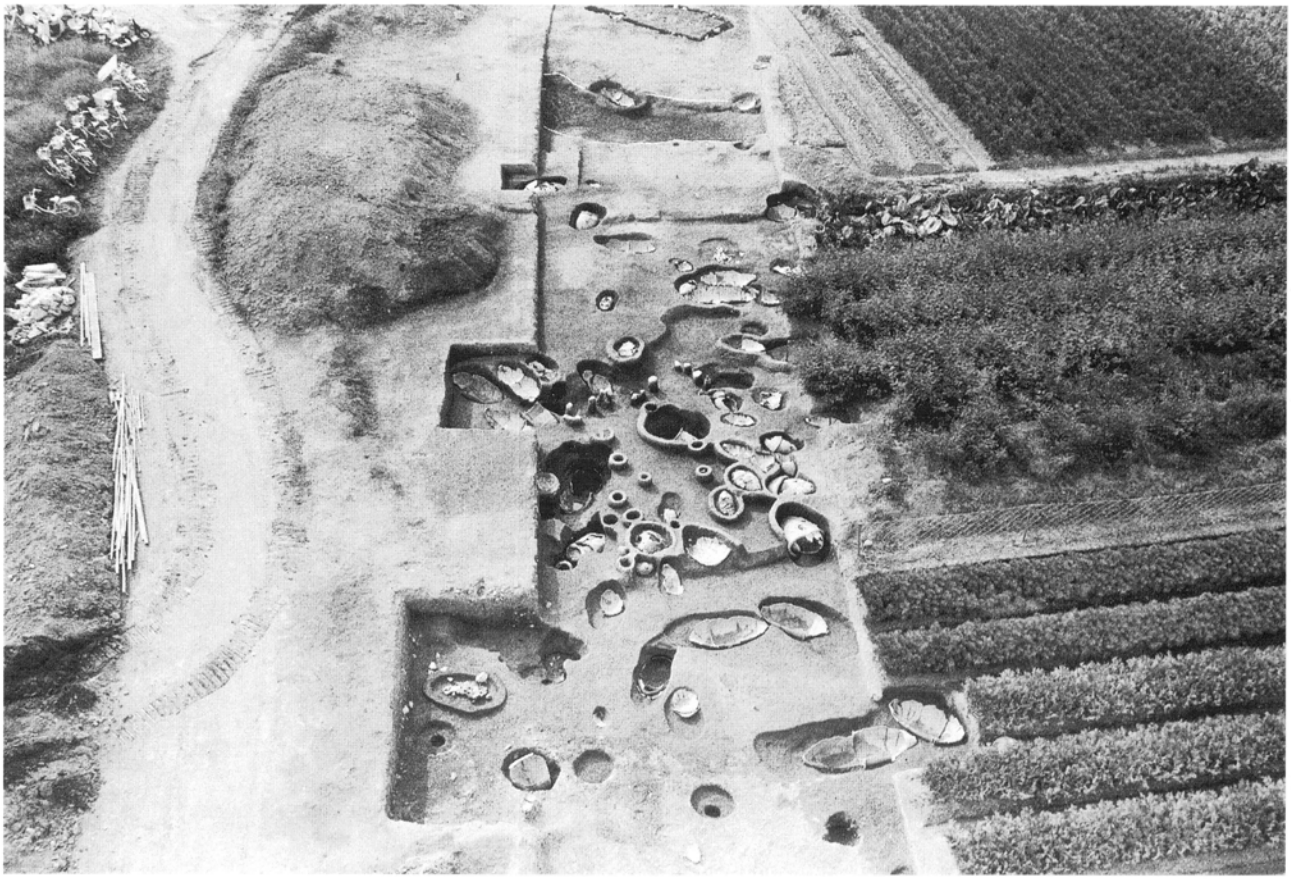




第3次調査I 12地区K104・106・107号甕棺墓出土状況

PL.8

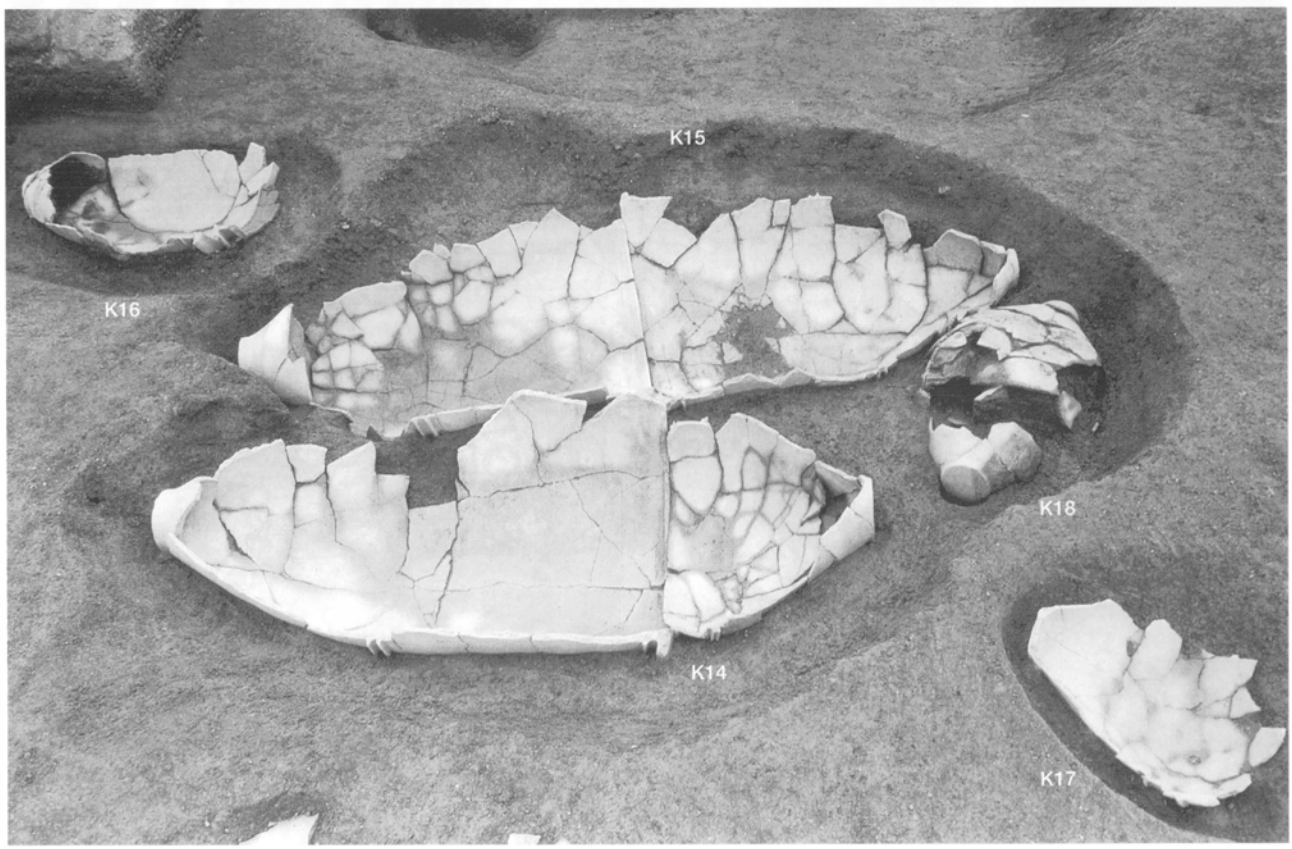
第4次調査地区1号幹線道路2区全景（南西から）



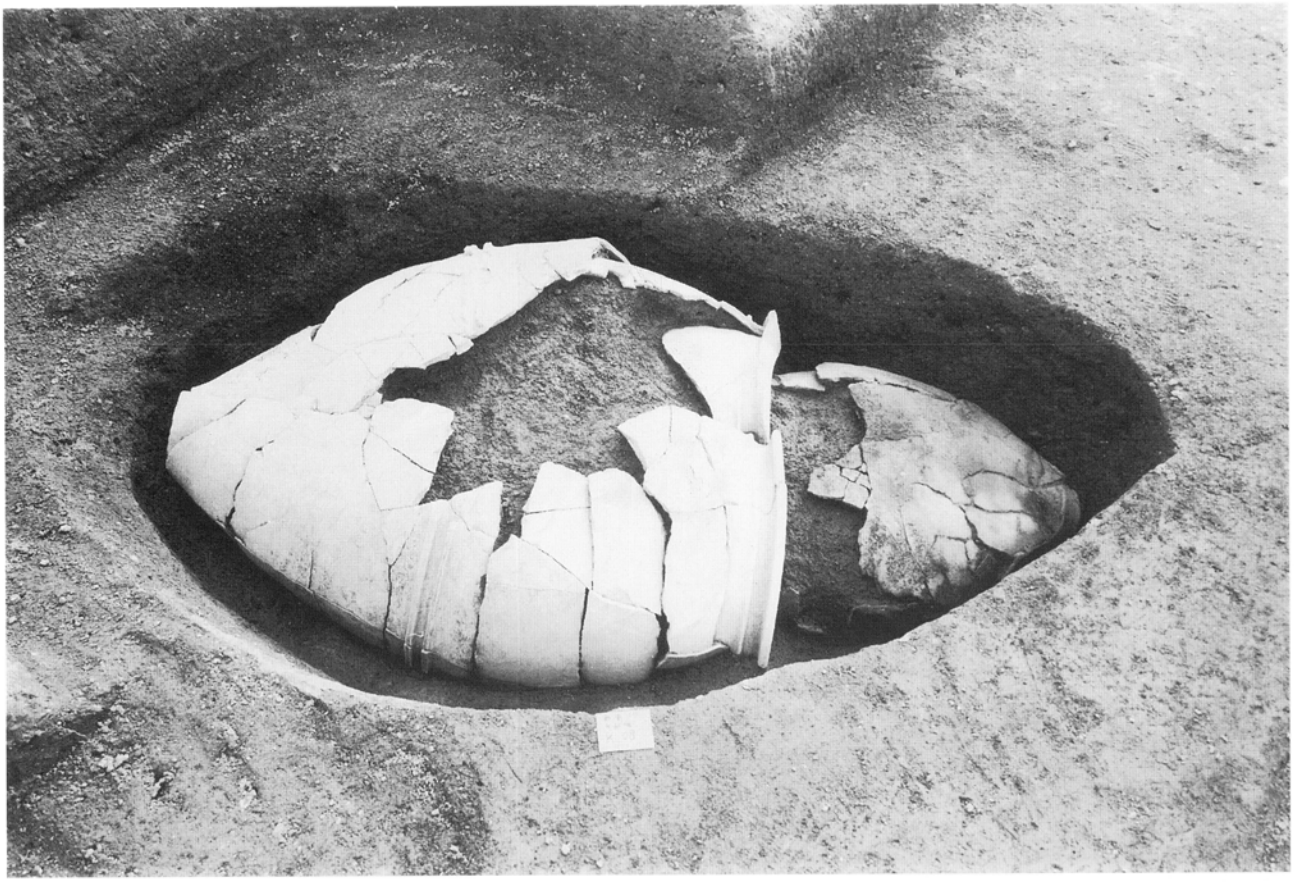
第4次調査1号幹線道路2区全景（東から）

第4次調査1号幹線道路2区全景（南から）

第4次調査1号幹線道路2区近景（南から）



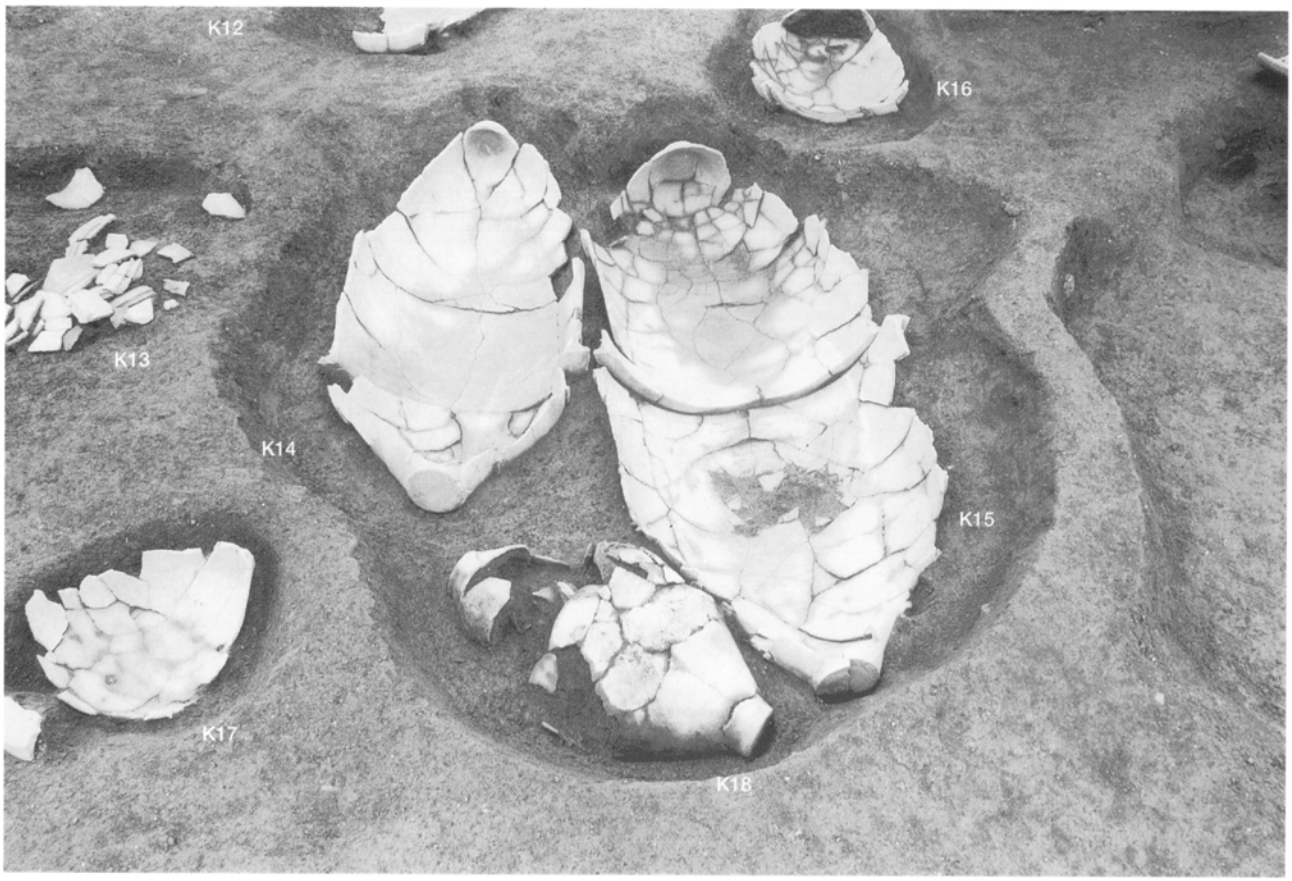
第4次調査1号幹線道路2区K14～18号甕棺墓出土状況（西から）



第4次調査1号幹線道路2区K08号甕棺墓出土状況（南から）

第4次調査1号幹線道路2区K20・62号甕棺墓出土状況（南から）

第4次調査1号幹線道路2区K09号甕棺墓出土状況（北東から）



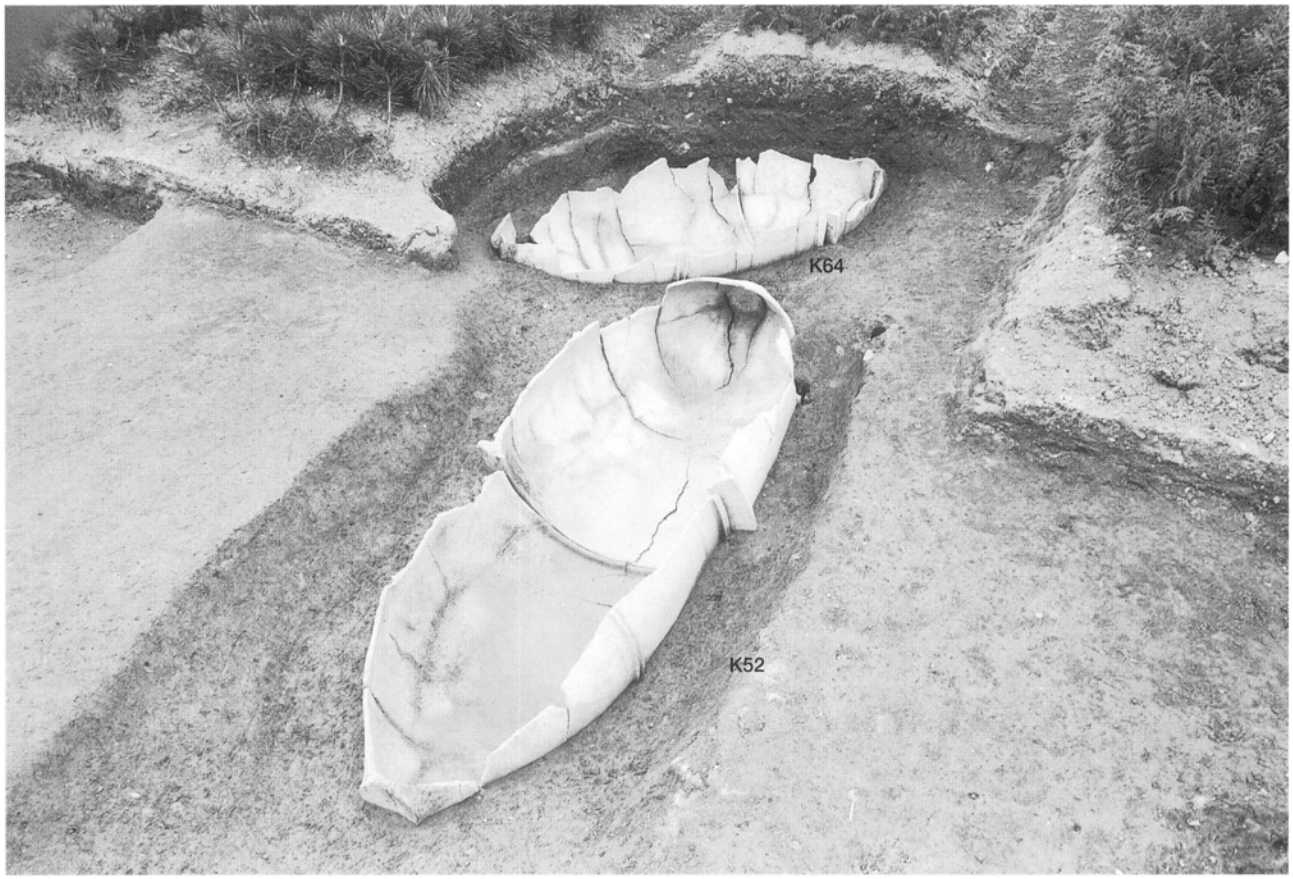
第4次調査1号幹線道路2区K12～18号甕棺墓出土状況（南から）

第4次調査1号幹線道路2区K29～31・34号甕棺墓出土状況（北から）

第4次調査1号幹線道路2区K47号甕棺墓出土状況（南東から）

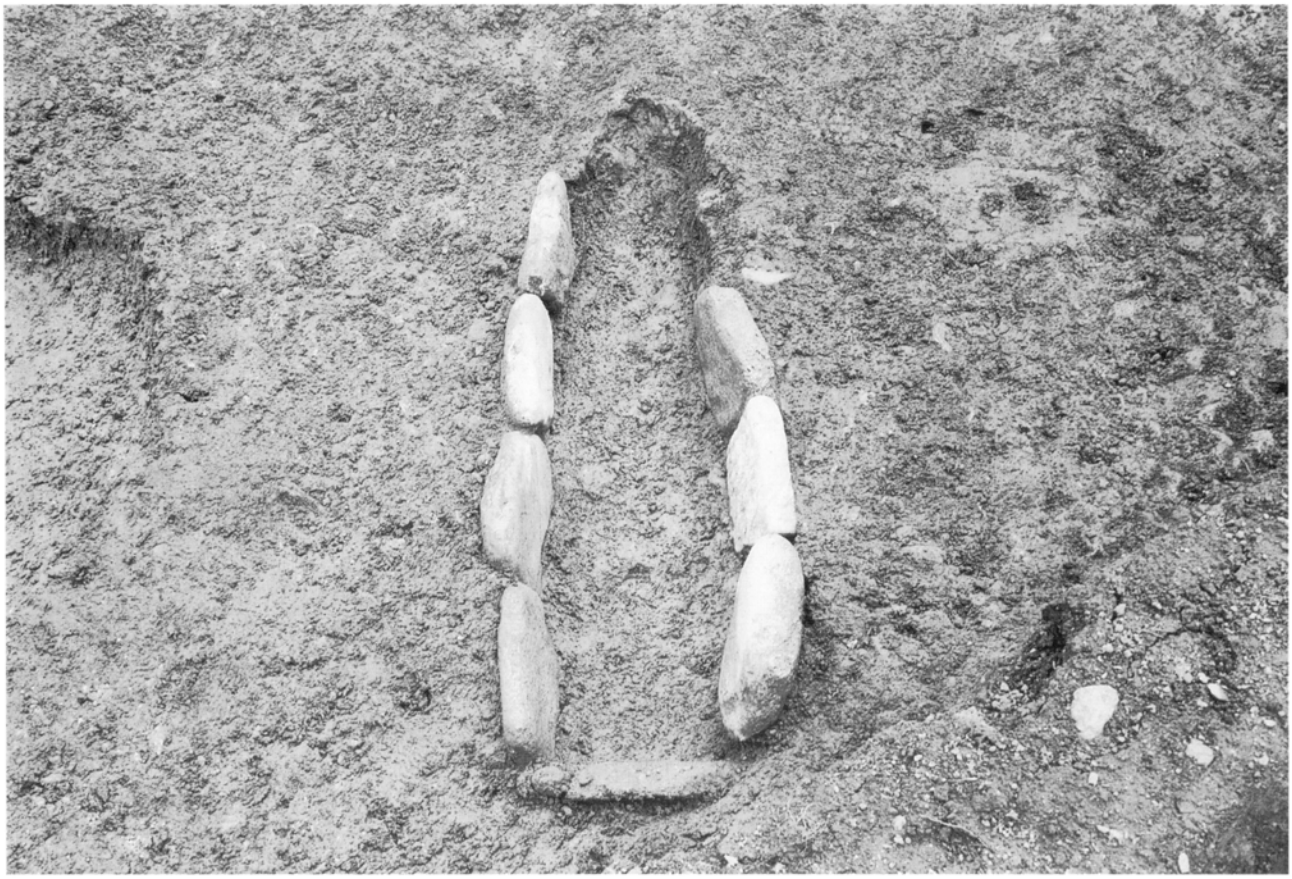
第4次調査1号幹線道路2区K55号甕棺墓出土状況（北から）

第4次調査1号幹線道路2区K22・23・42・57～60・63号甕棺墓出土状況（東から）



第4次調査1号幹線道路2区K52・64号甕棺墓出土状況（南東から）

第4次調査1号幹線道路2区K36・67～69号甕棺墓出土状況（東から）



第4次調査1号幹線道路2区SS01石棺墓出土状況（北から）

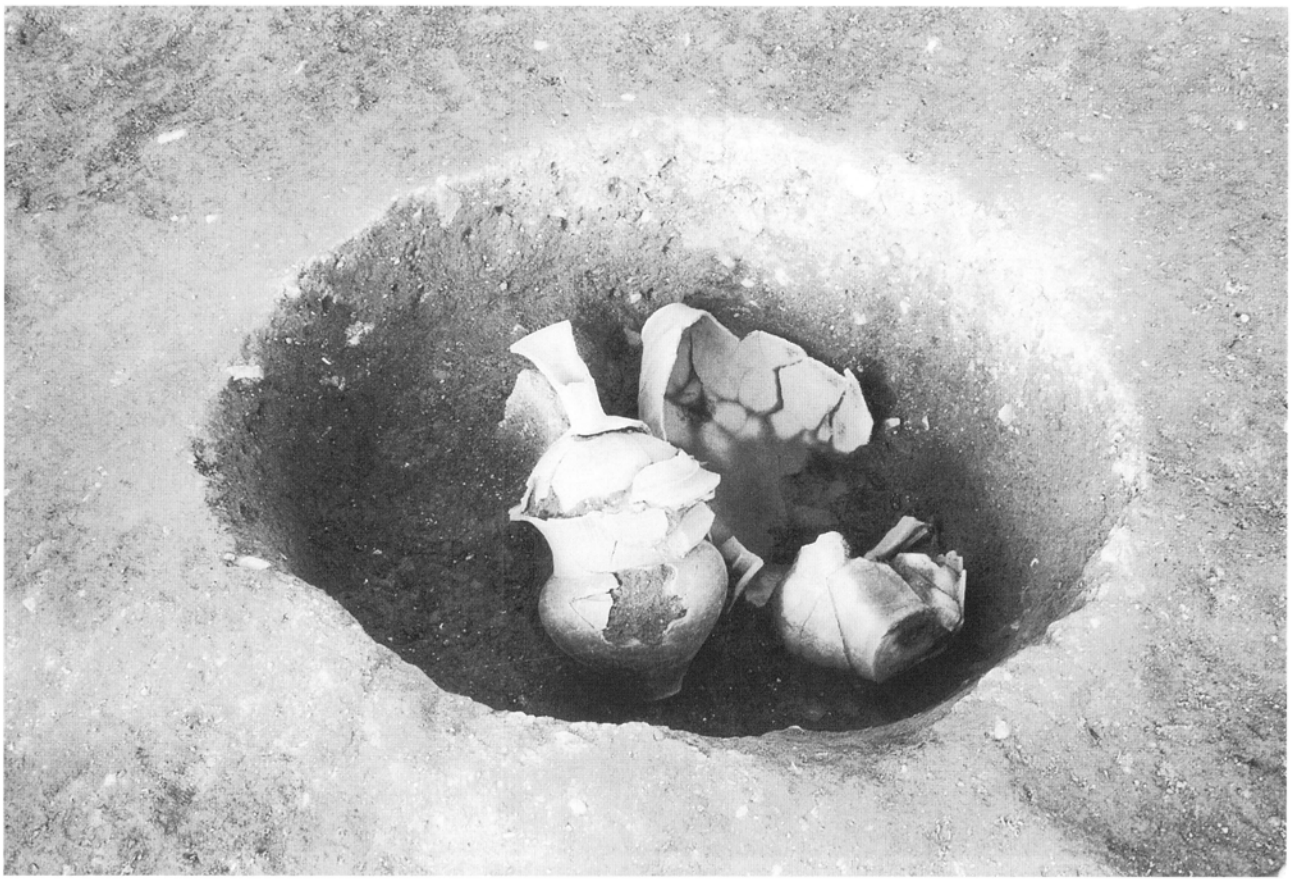
第4次調査1号幹線道路2区SS02石棺墓出土状況（北西から）

第4次調査LM地区全景（西から）

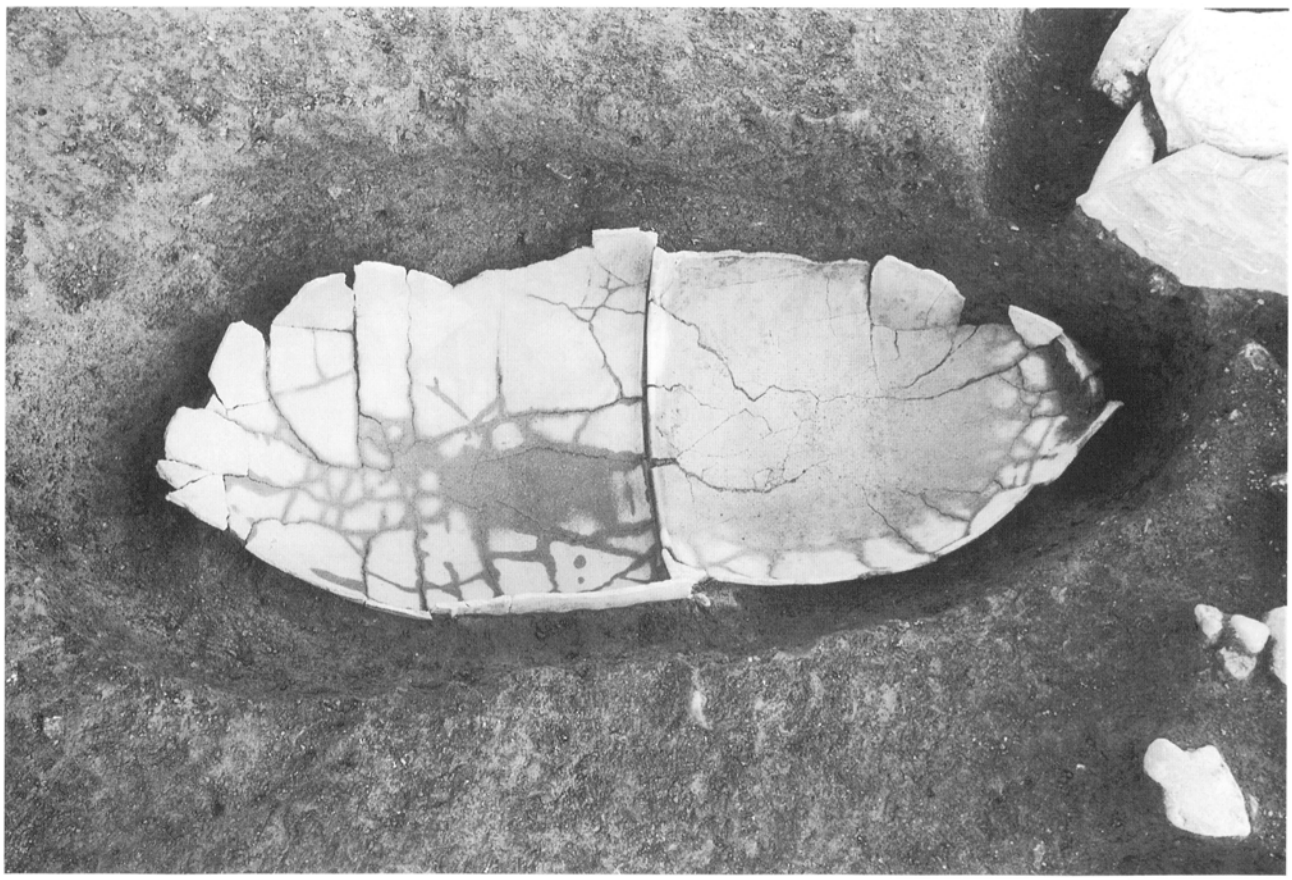
第4次調査LM地区全景（北から）

第4次調査LM地区全景（北から）

第4次調査LM地区全景（西から）

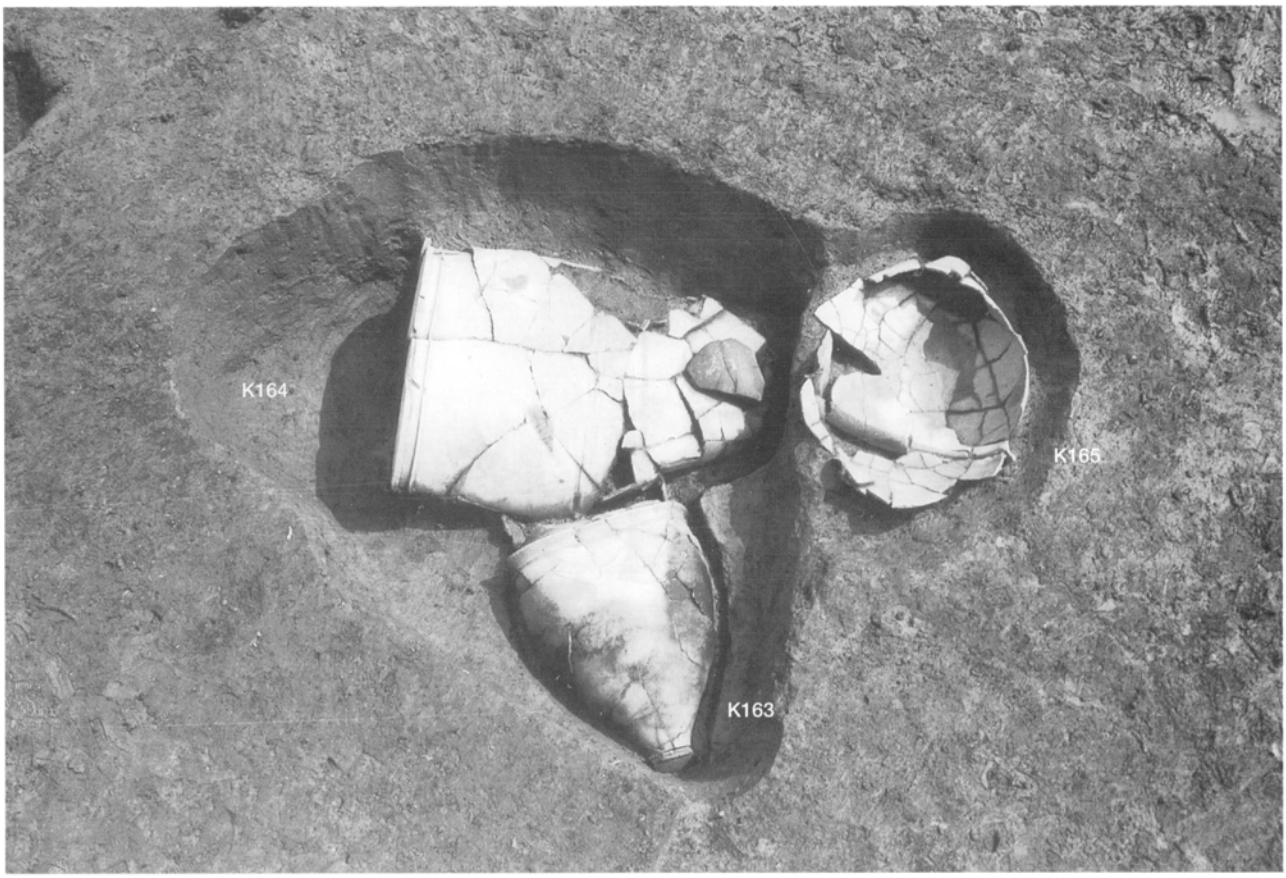


第4次調査LM地区K104号甕棺墓出土状況（南から）



第4次調査LM地区K134号甕棺墓出土状況（北から）

第4次調査LM地区K154・157・158号甕棺墓出土状況（北から）



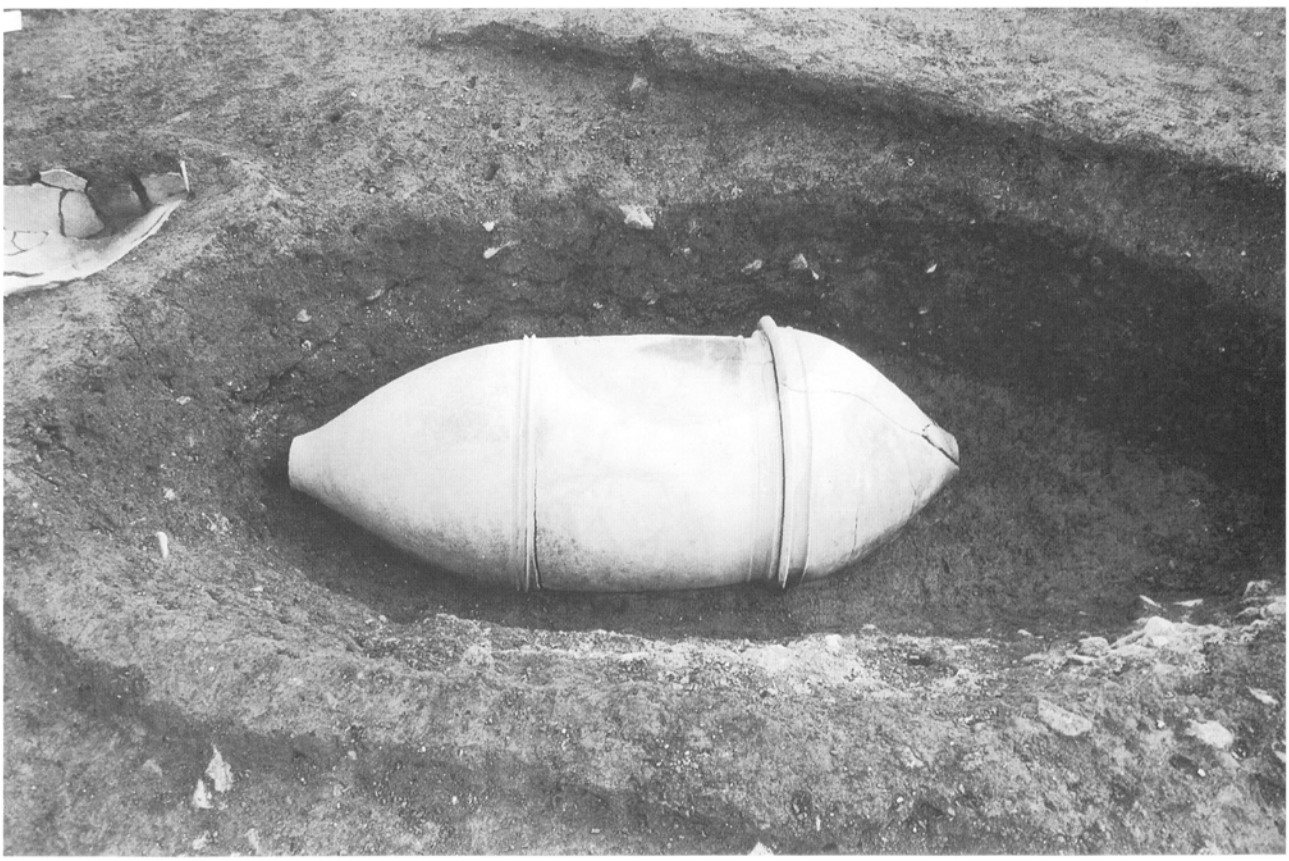
第4次調査LM地区K163～165号甕棺墓出土状況（西から）

第4次調査LM地区調査状況（昼間作業）

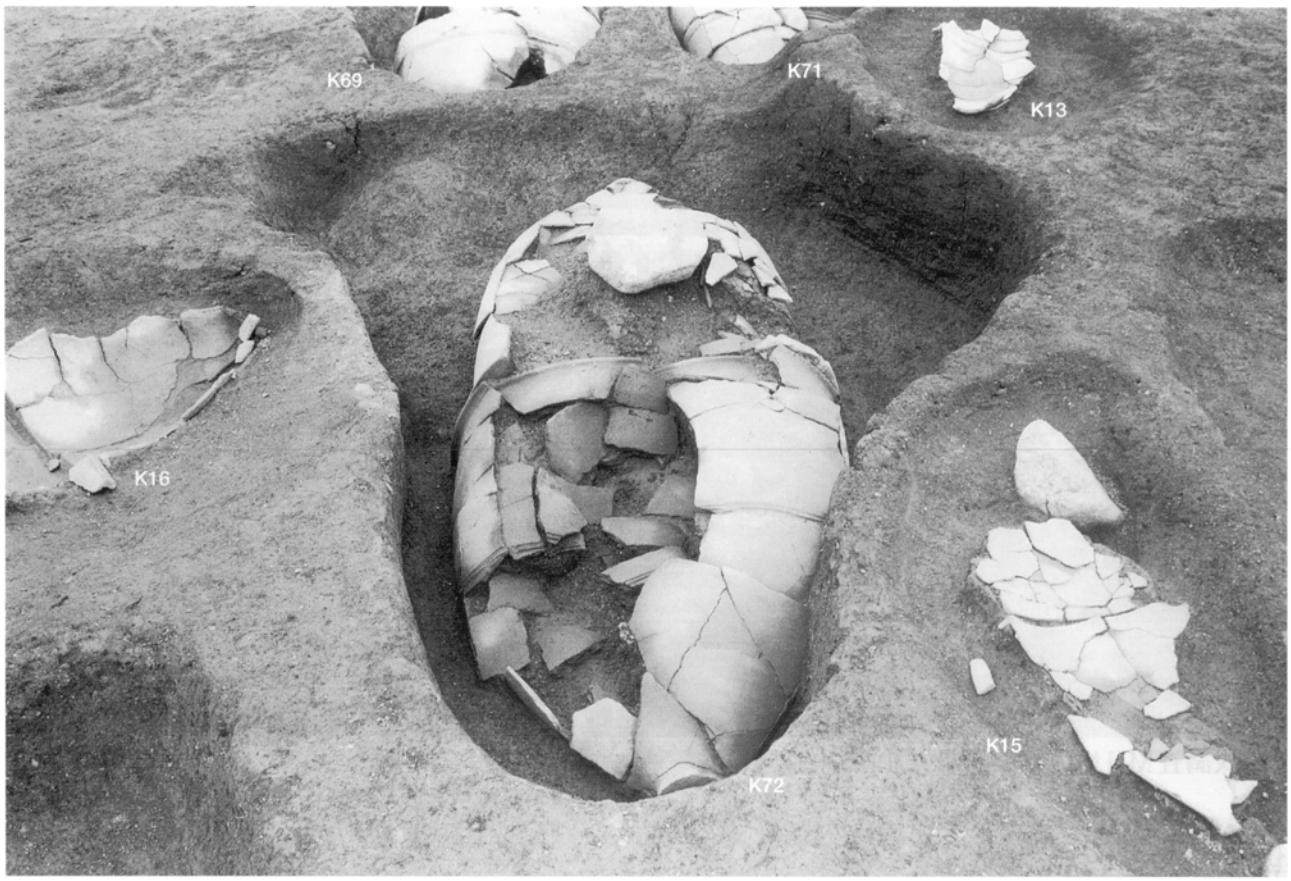
第4次調査LM地区調査状況（夜間作業）

第4次調査MN地区全景（東から）

第4次調査MN地区作業風景（北西から）

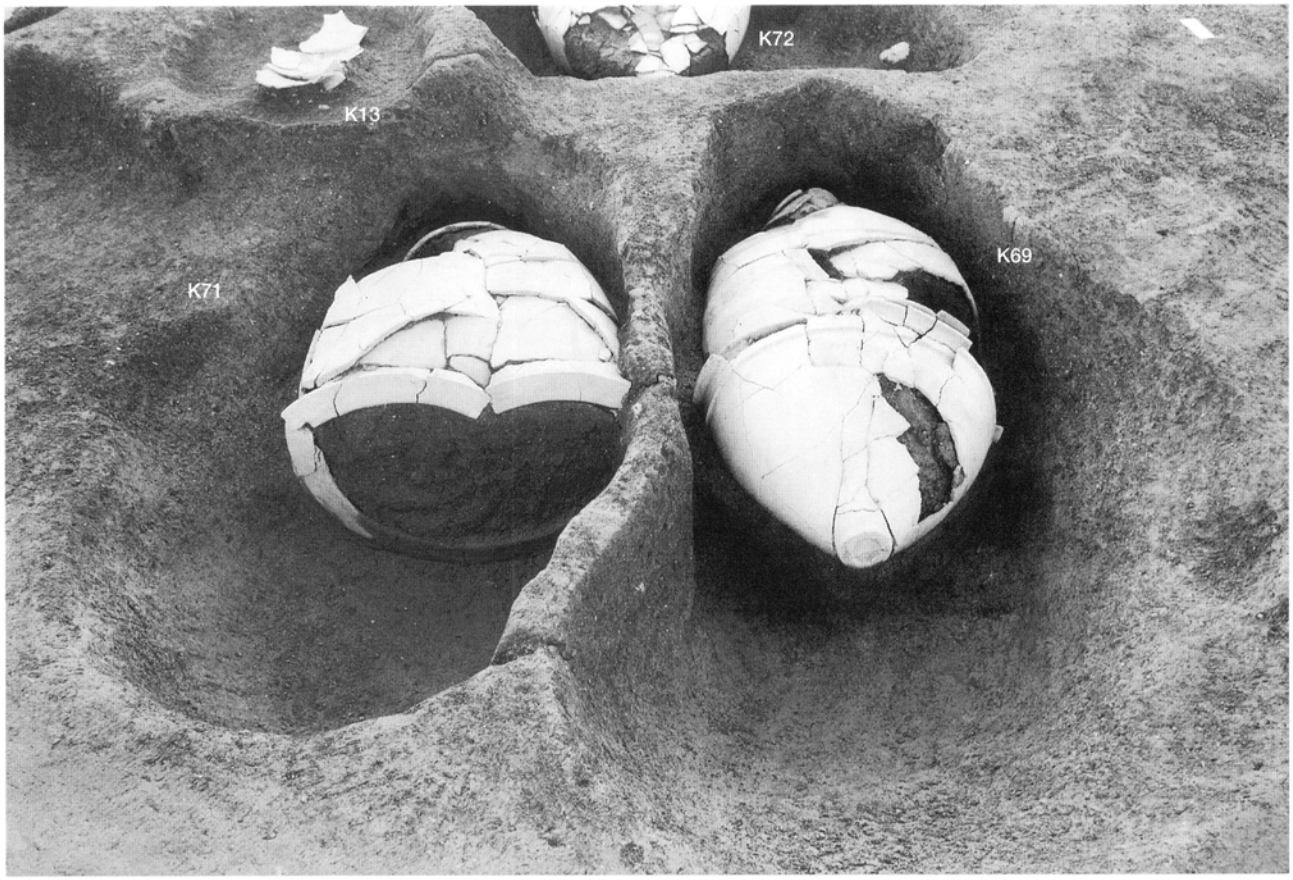


第4次調査MN地区K56号甕棺墓出土状況（北から）



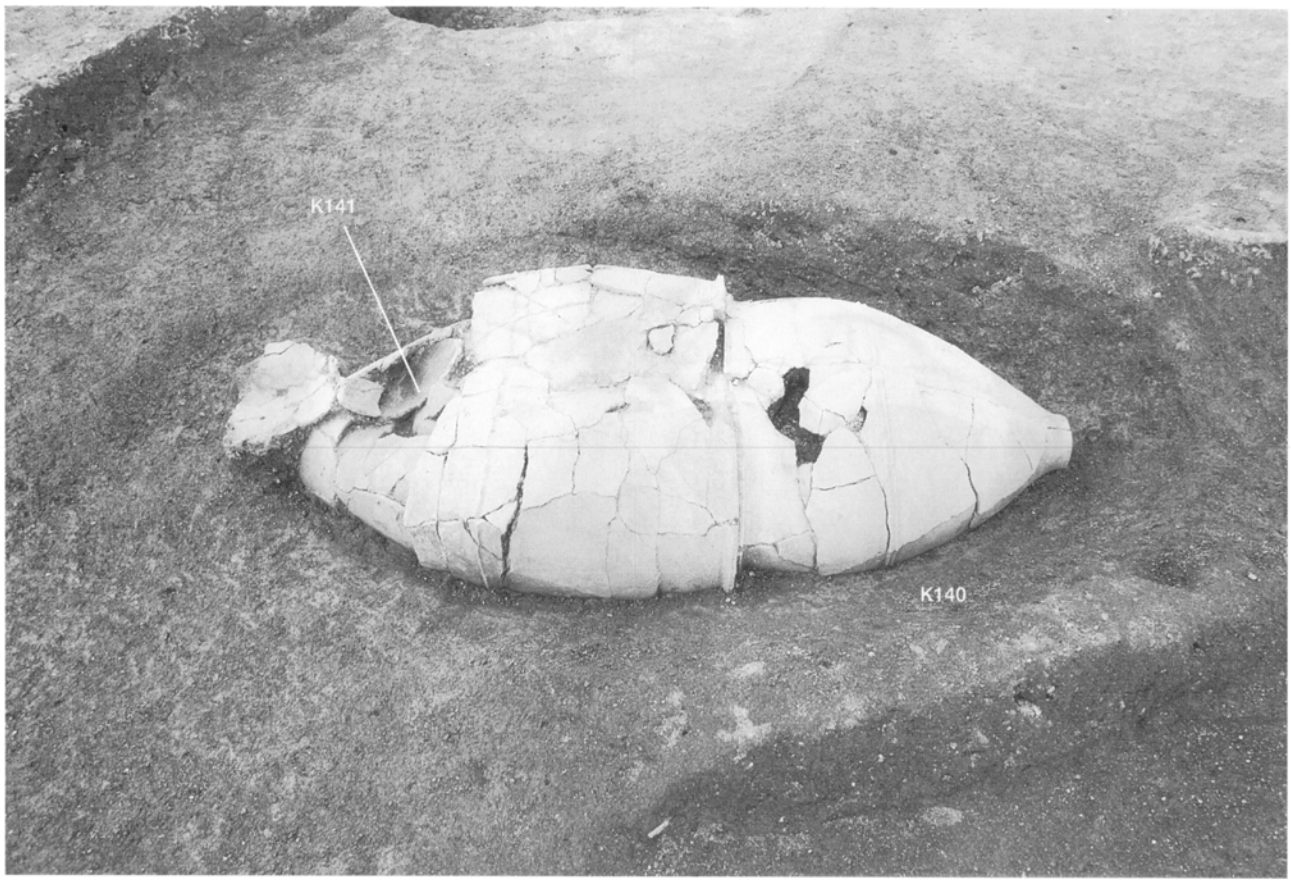
第4次調査MN地区K13・15・16・69・71・72号甕棺墓出土状況（南西から）

第4次調査MN地区K104号甕棺墓出土状況（南から）

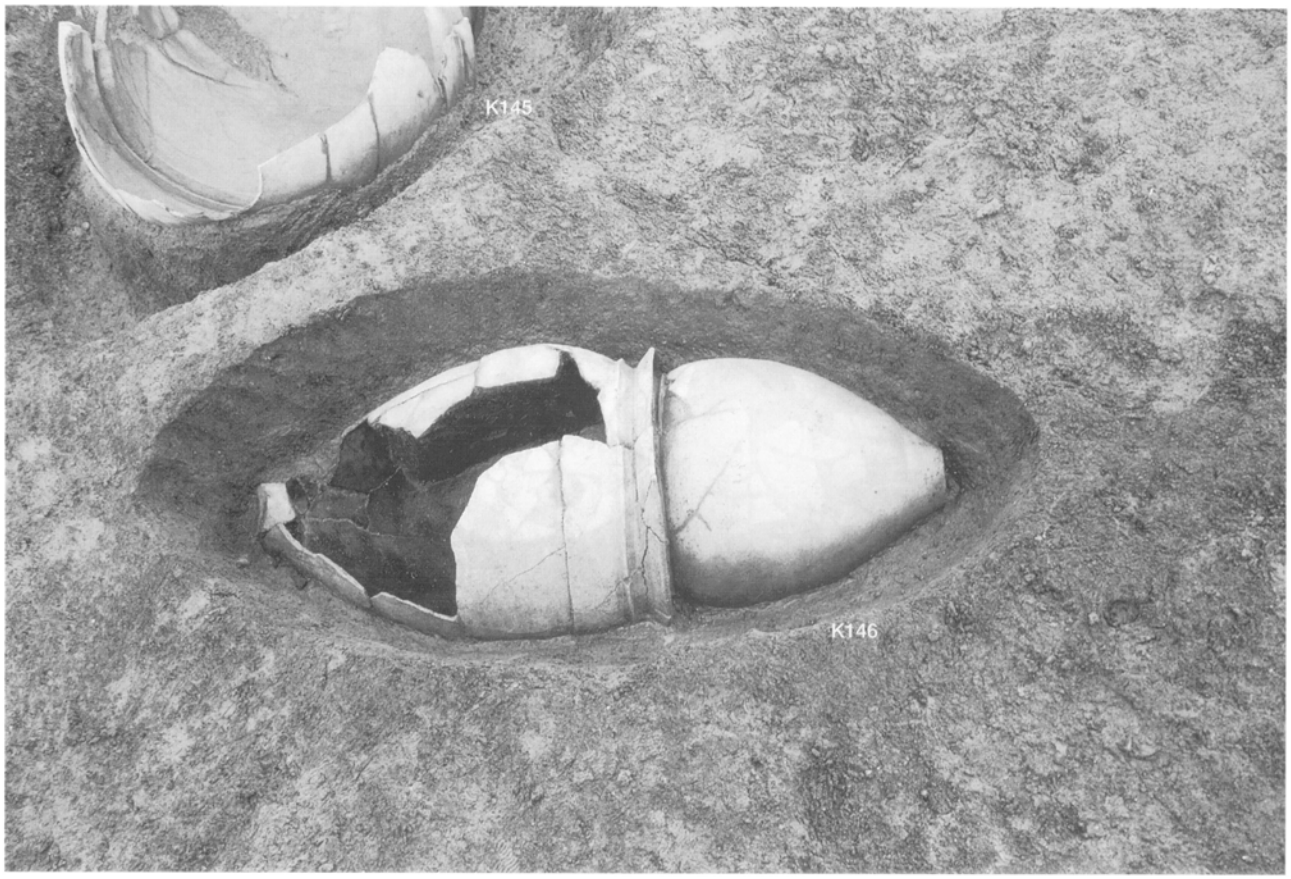


第4次調査MN地区K13・69・71・72号甕棺墓出土状況（北東から）

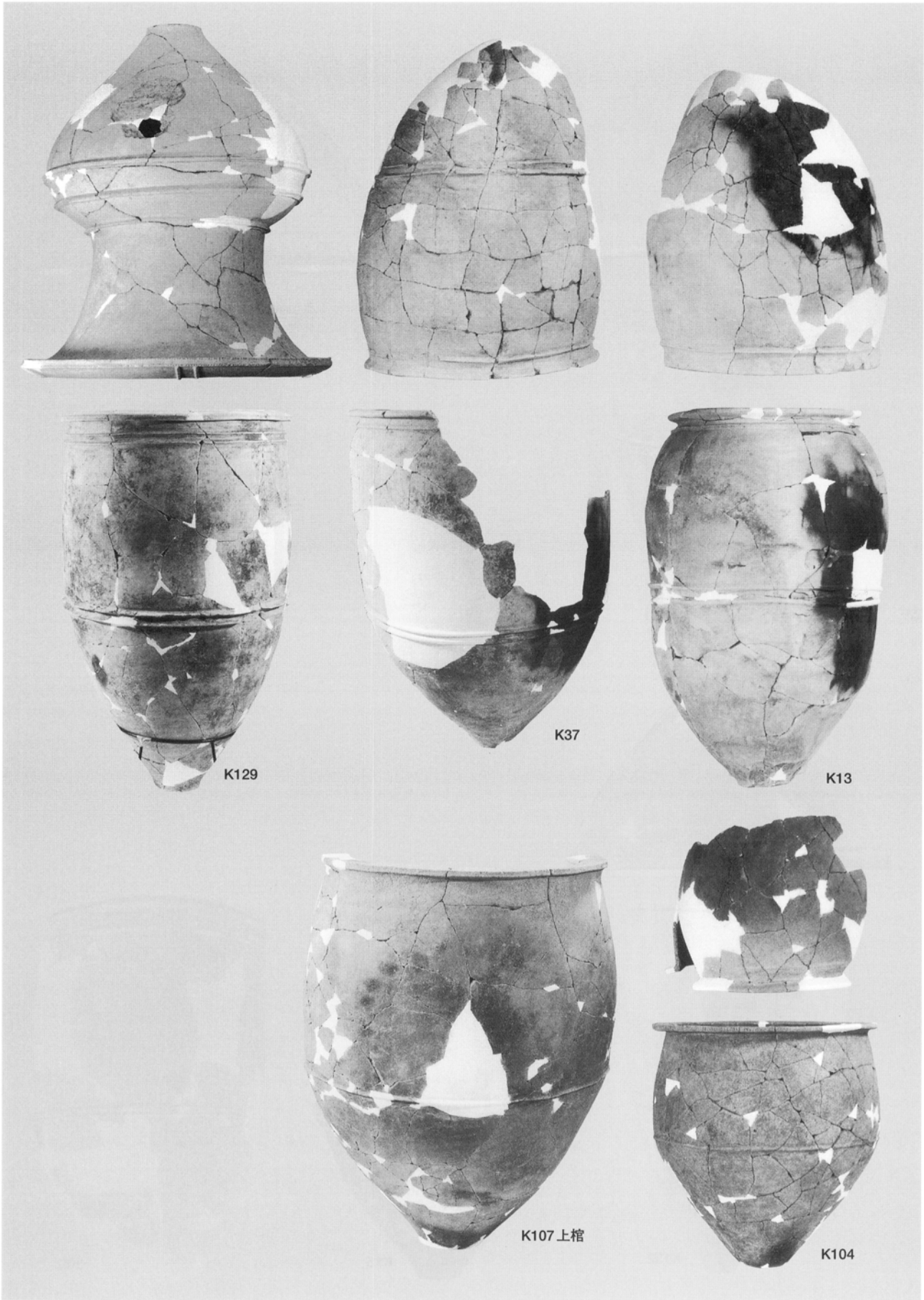
第4次調査MN地区K130・131号甕棺墓出土状況（西から）



第4次調査MN地区K140・141号甕棺墓出土状況（北から）

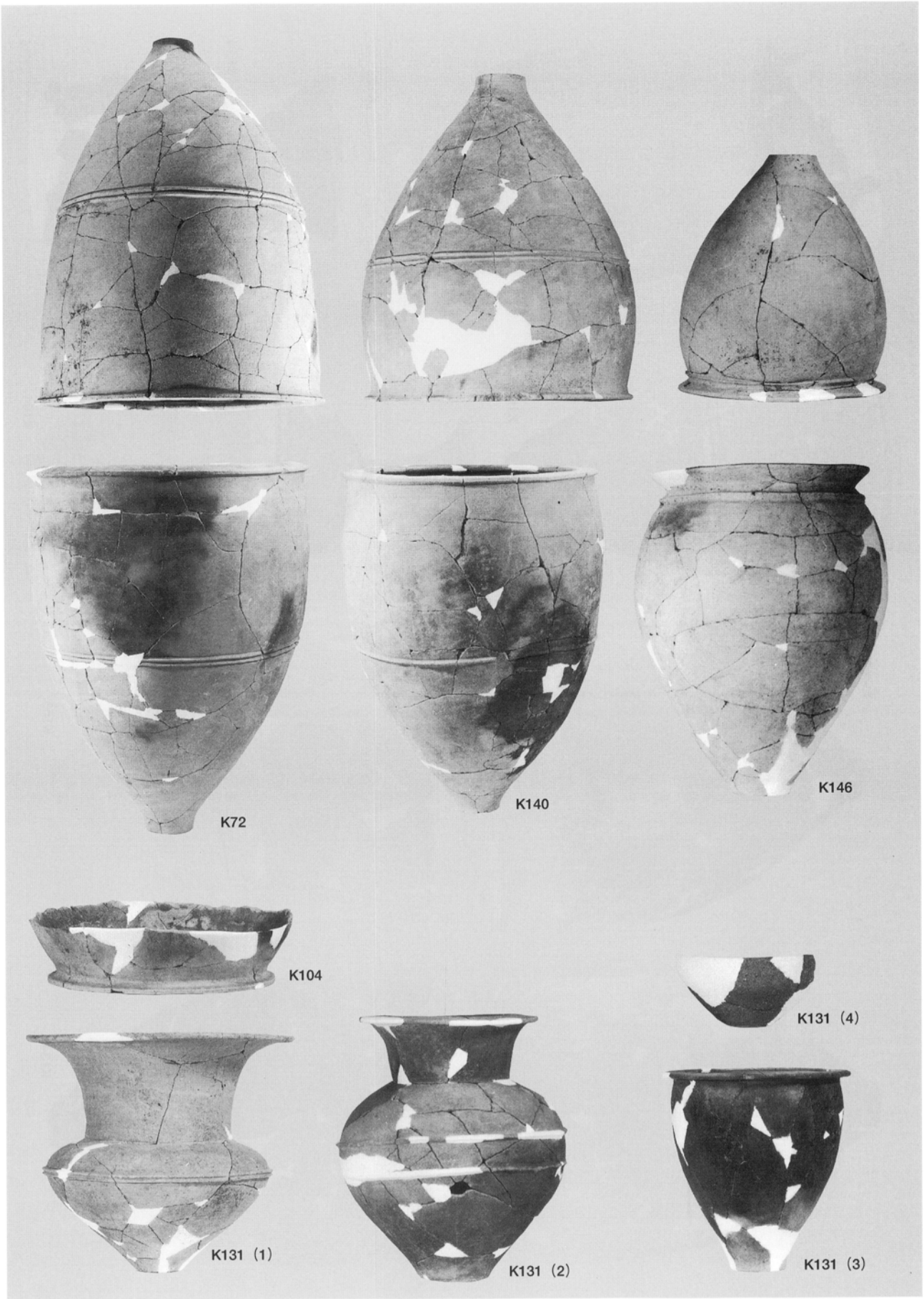


第4次調査MN地区K145・146号甕棺墓出土状況（南から）

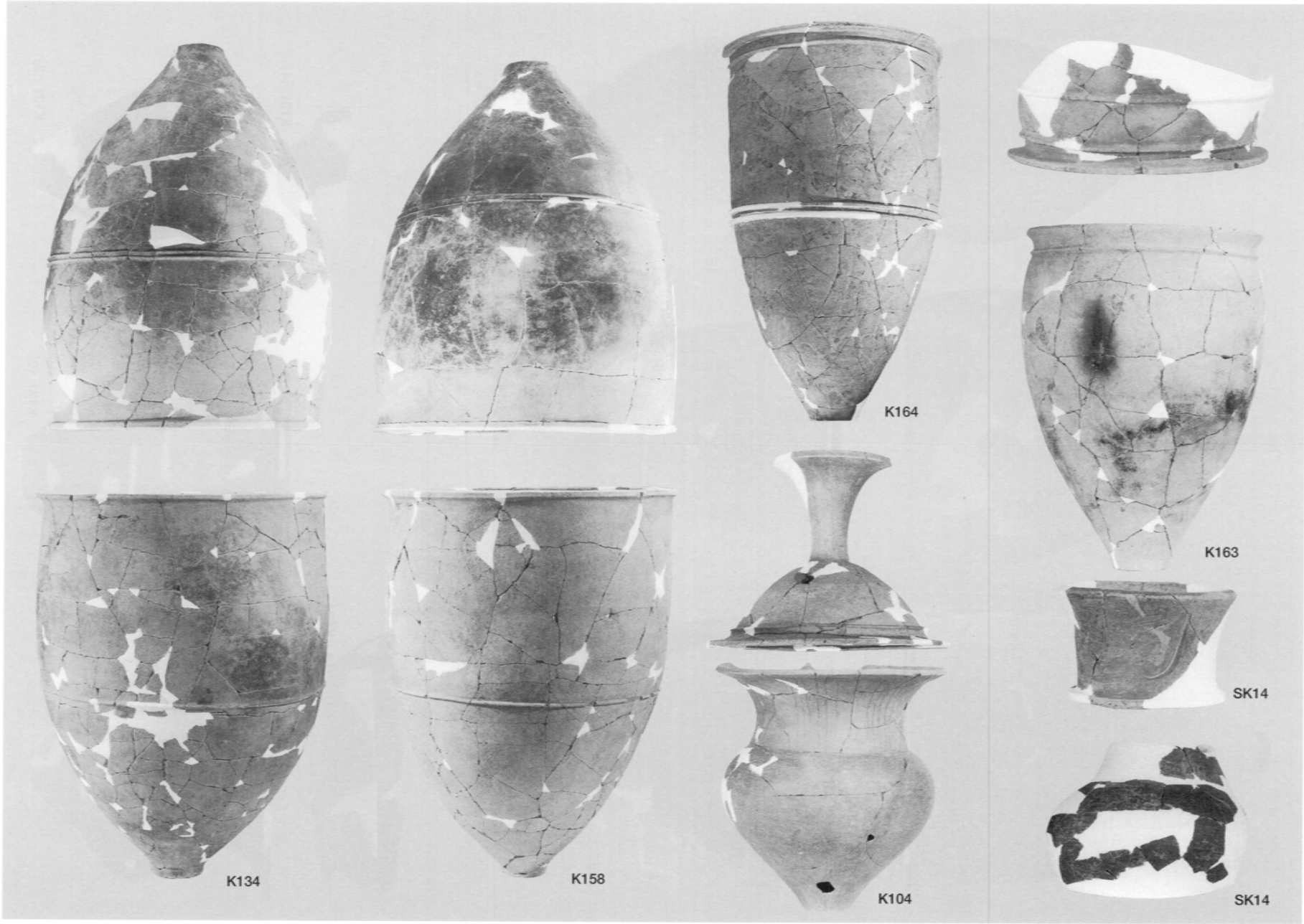


第3次調査K13・37・104・107上棺・129号甕棺

第3次調査K121・132号甕棺・第4次調査K15・56・62号甕棺



第4次調査K72・104・131・140・146号甕棺

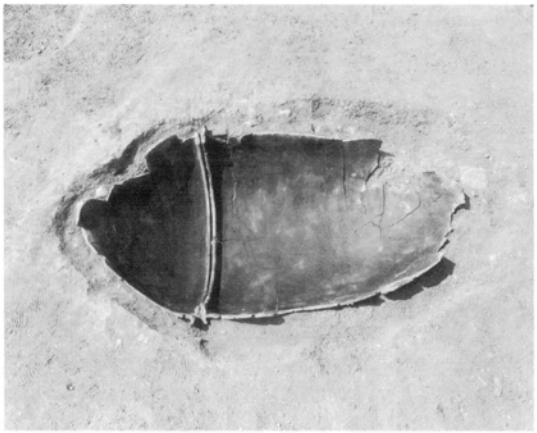


第4次調査K104・134・158・163・164号甕棺・SK14土壙出土土器

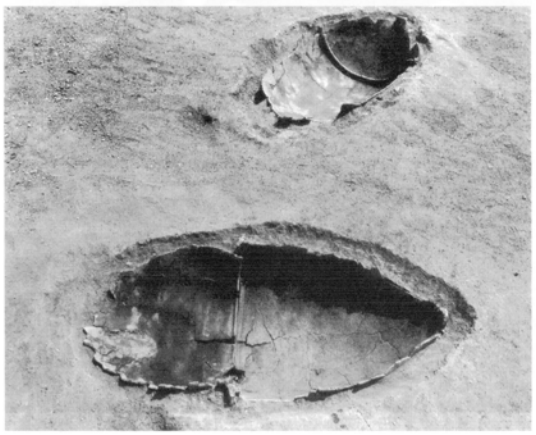
2号支線道路発掘作業風景

2号支線道路発掘作業風景

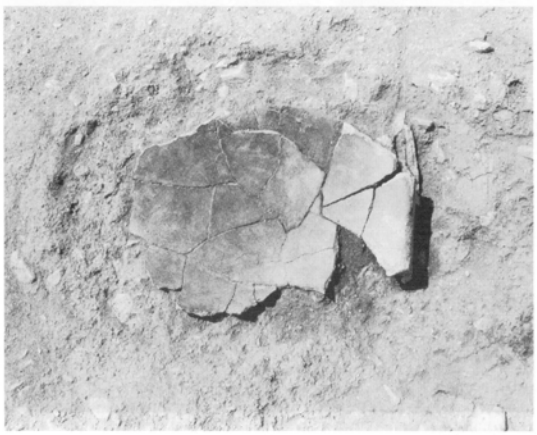
K1



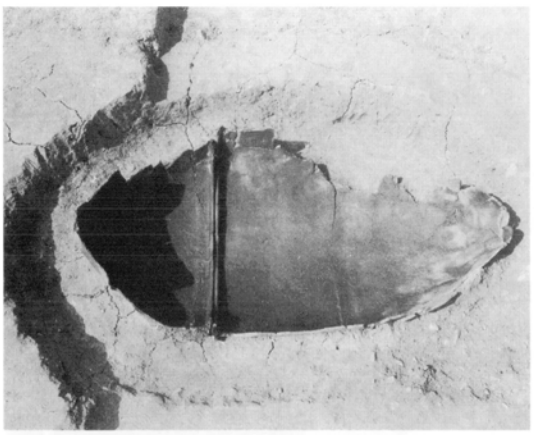
K2



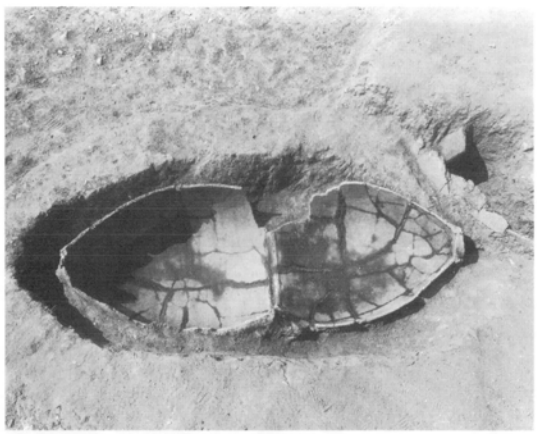
K3



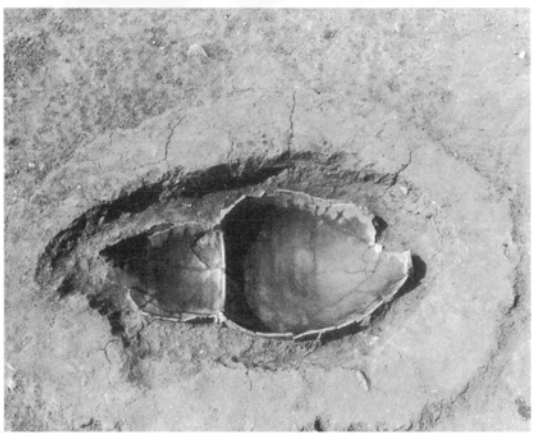
K4



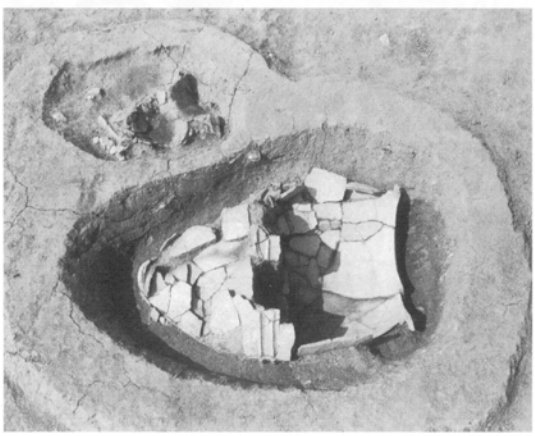
K5



K6



K7

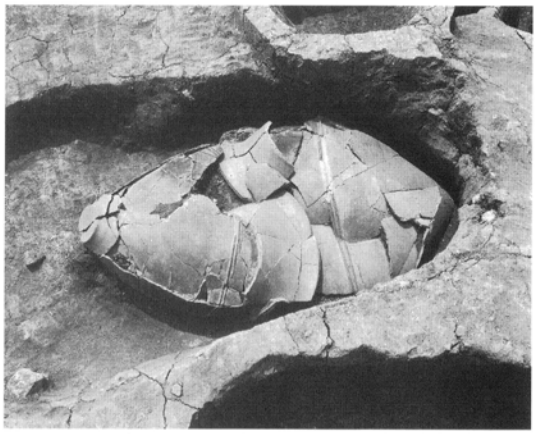


K8・9

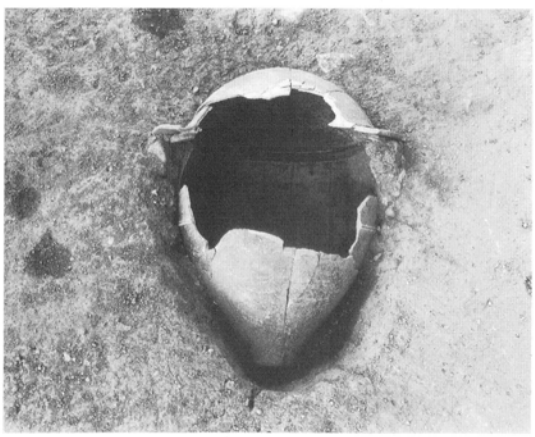
2号支線道路甕棺墓出土状況①

K14・15

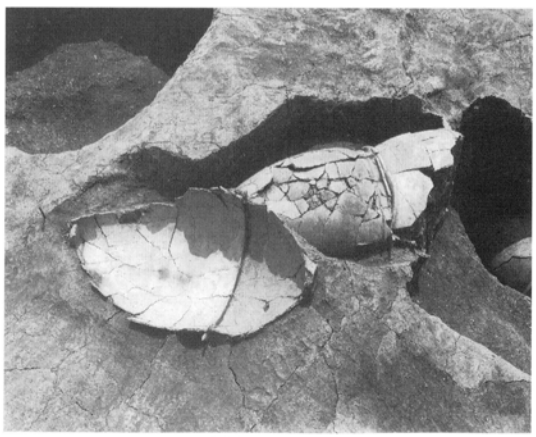
K11



K16

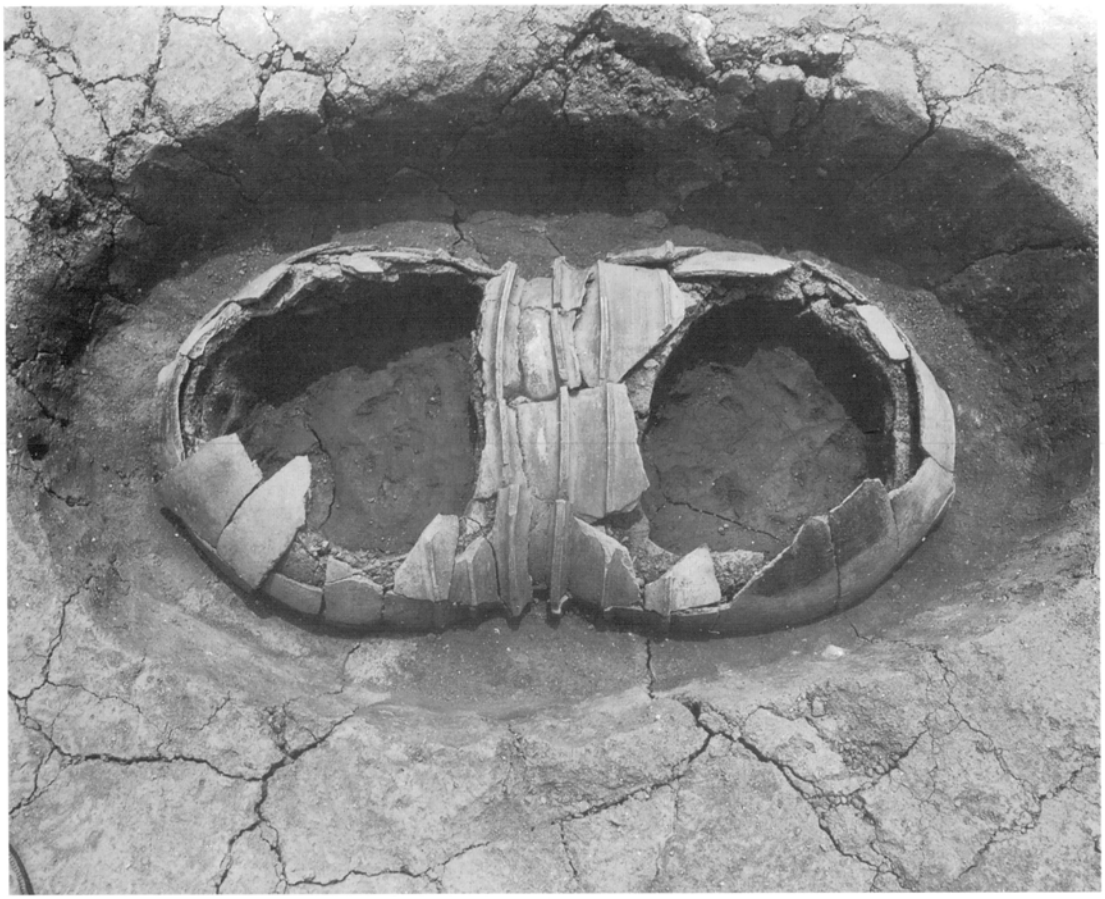


K18

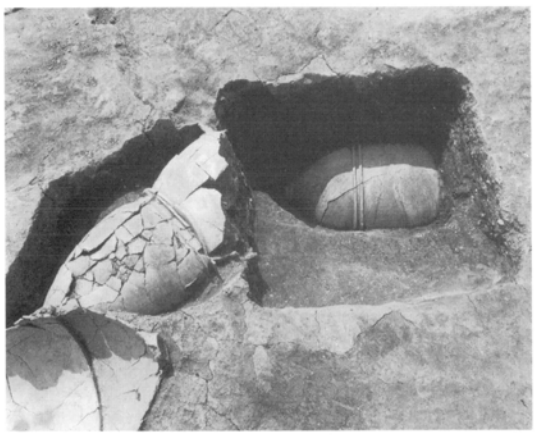


K21・22

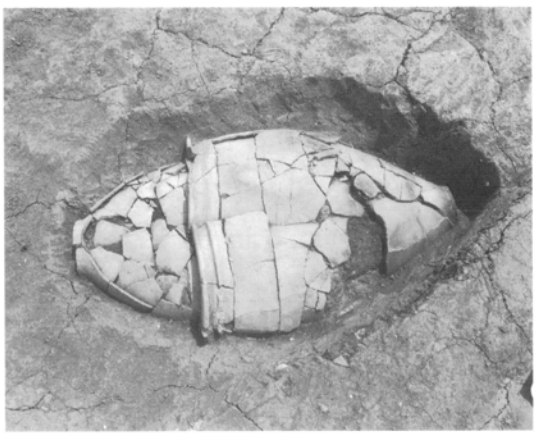
2号支線道路甕棺墓出土状況②



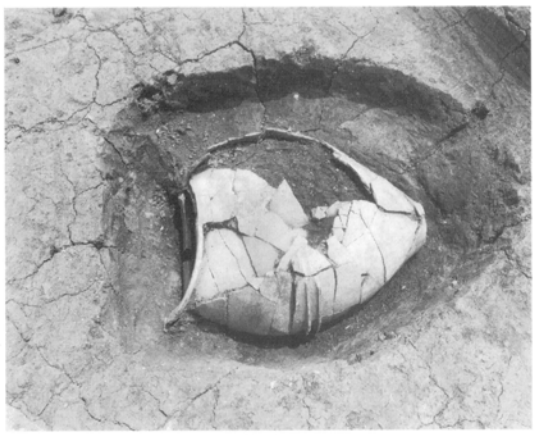
K27



K21・22・28

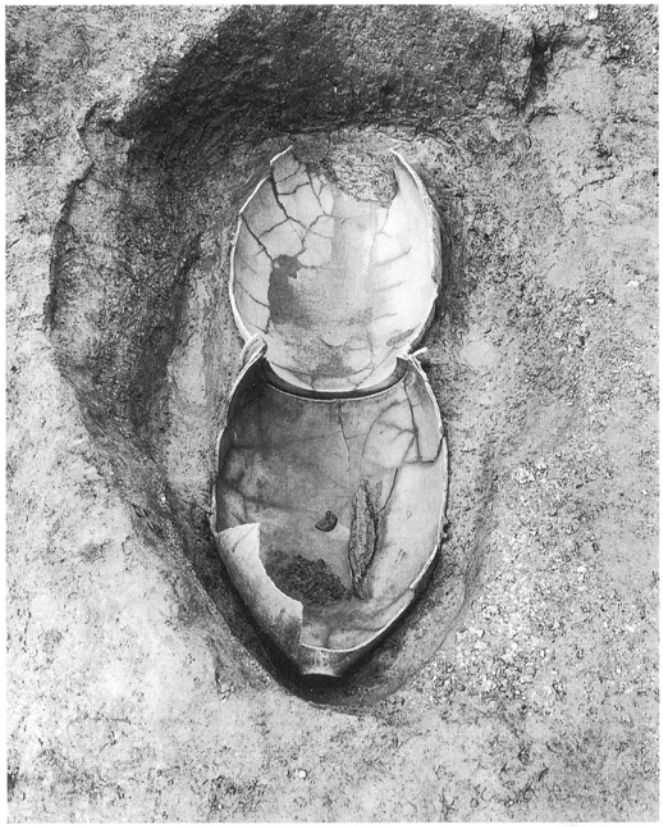


K25



K26

2号支線道路甕棺墓出土状況③

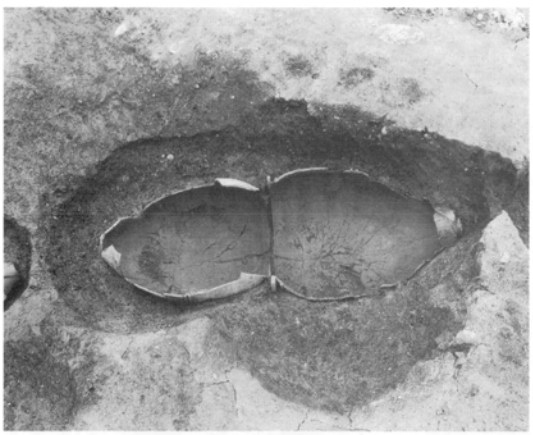


K28

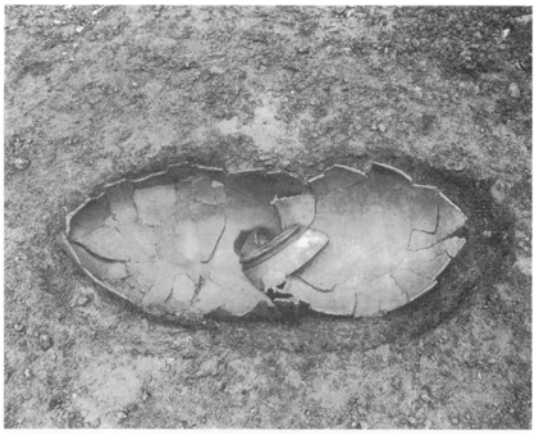
K28

2号支線道路甕棺墓出土状況④

K30 祭祀遺構

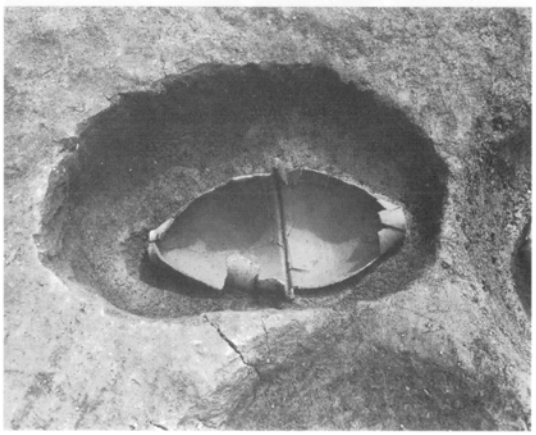


K29



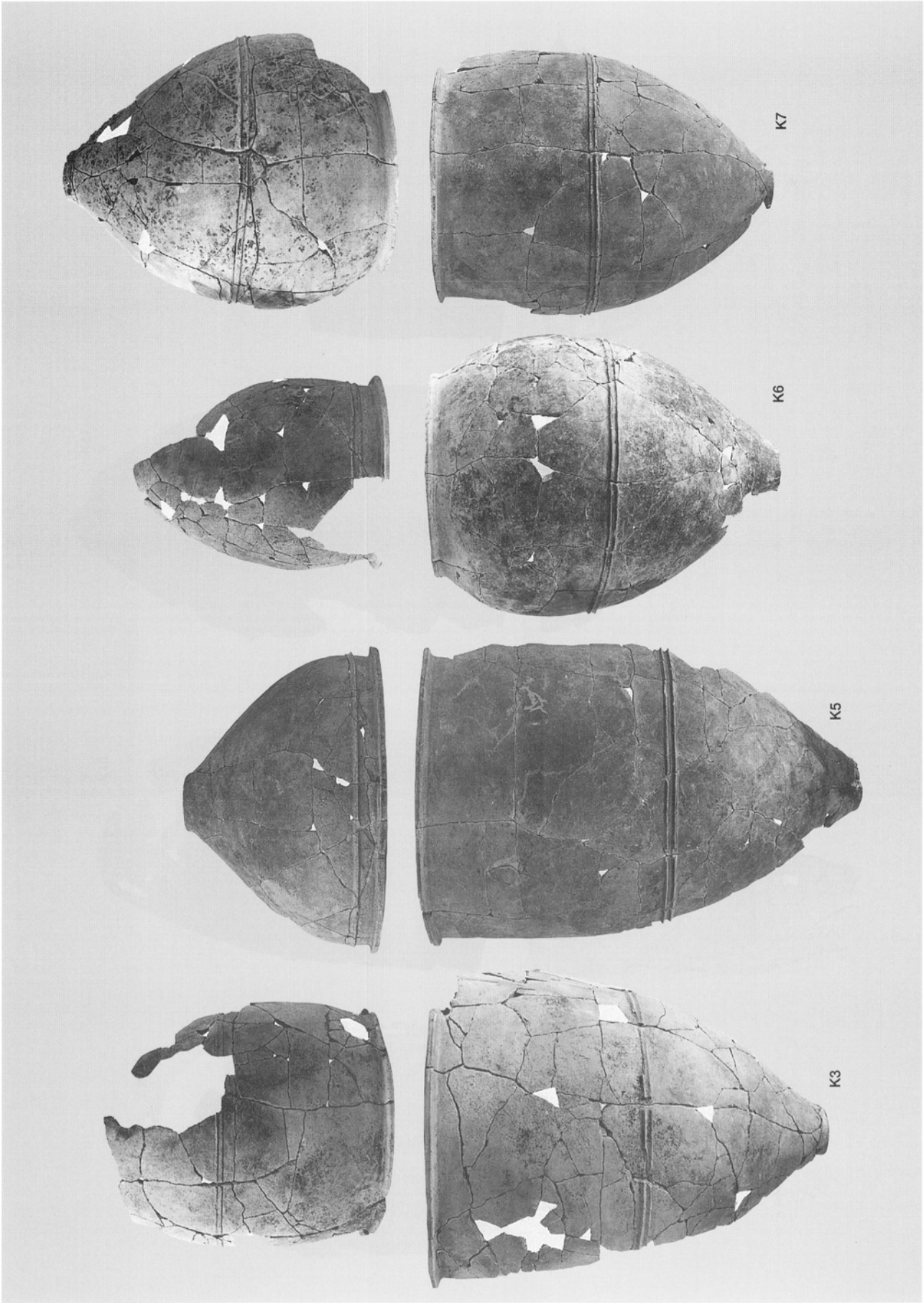
K33

K34

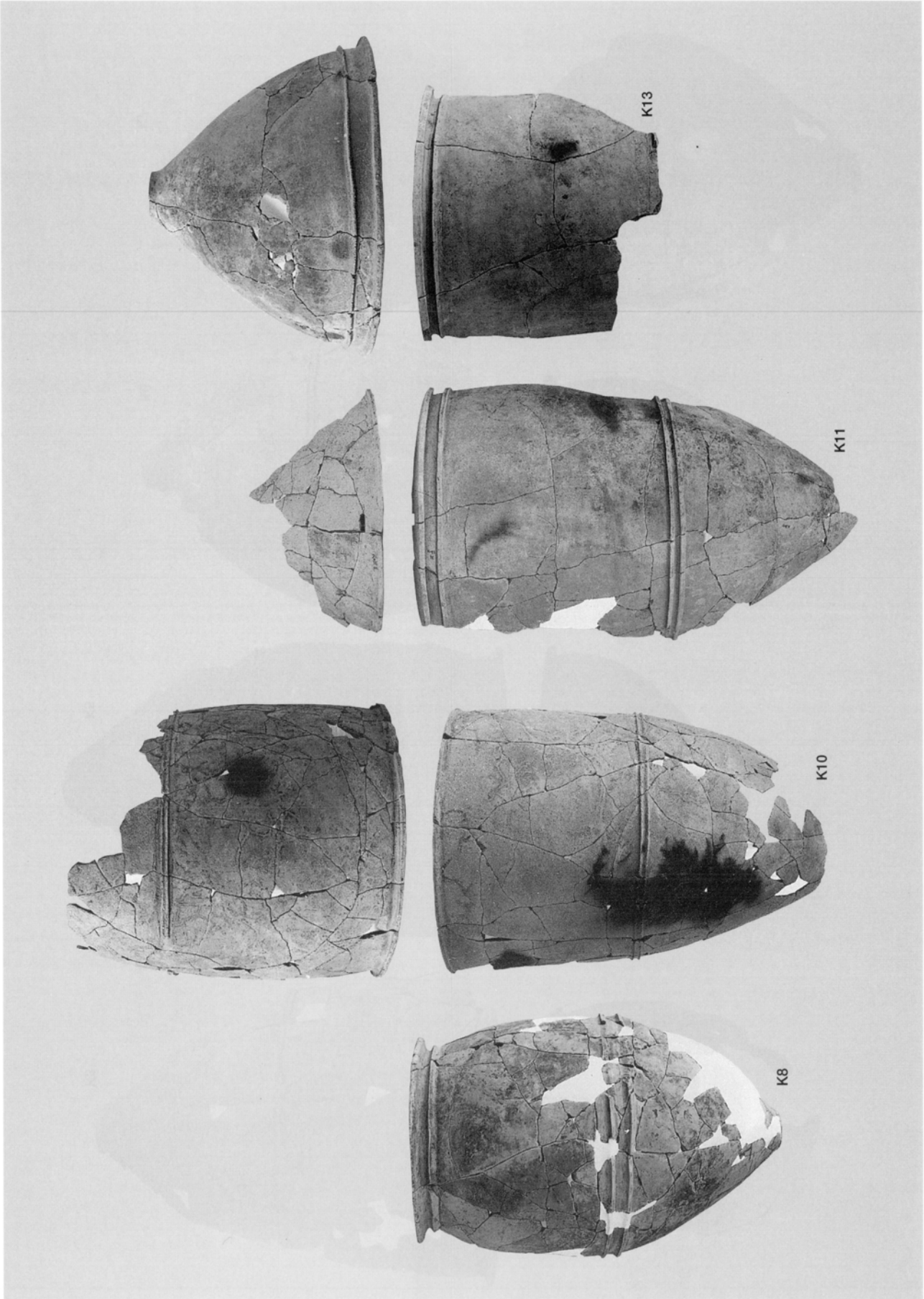


K35

2 号支線道路甕棺墓出土状況⑤

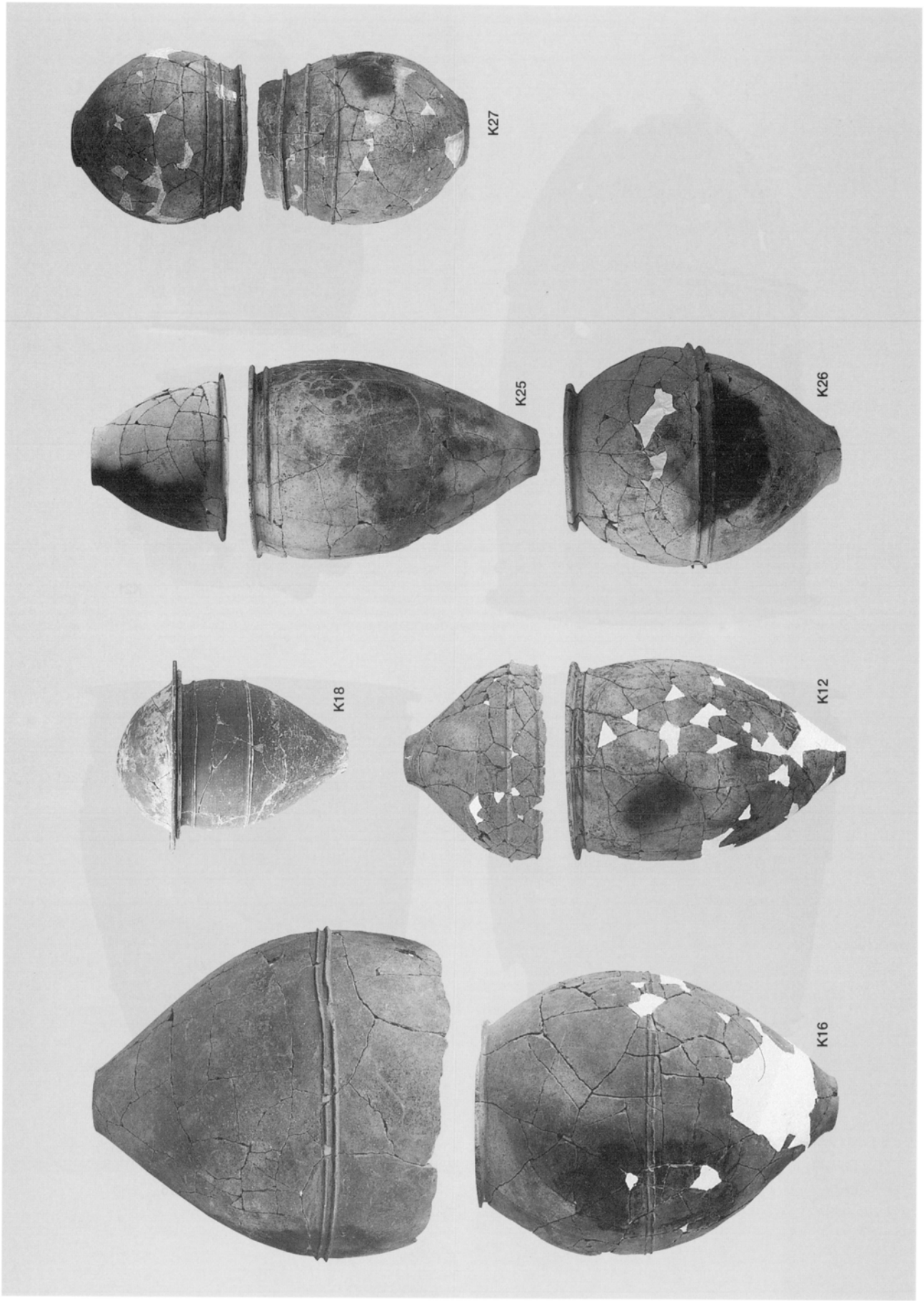


2号支線道路出土甕棺①

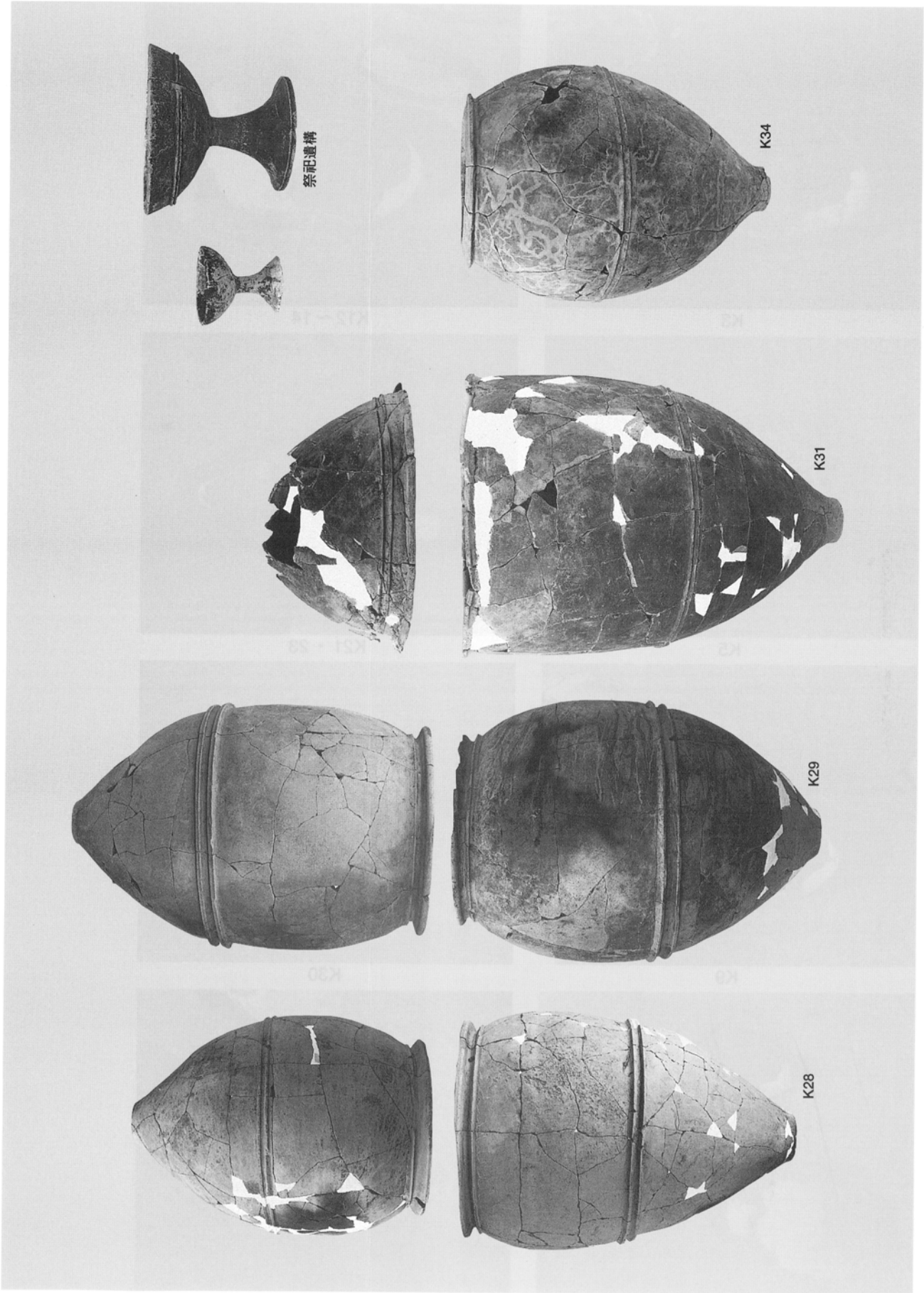


2号支線道路出土甕棺②

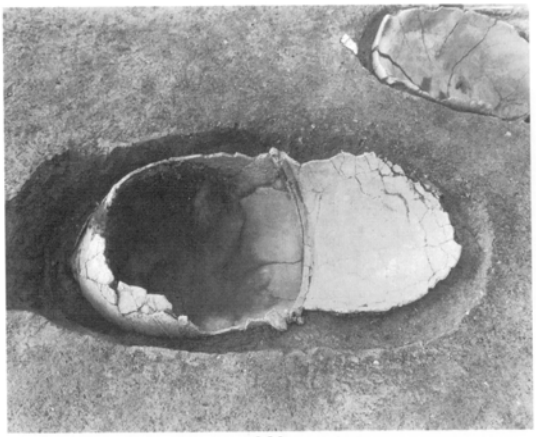
2号支線道路出土甕棺③



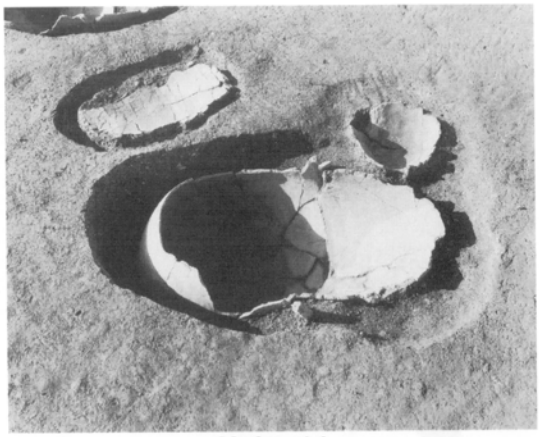
2号支線道路出土甕棺④



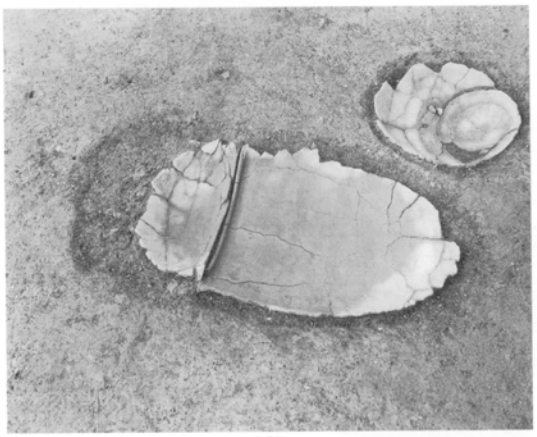
2号支線道路出土甕棺⑤



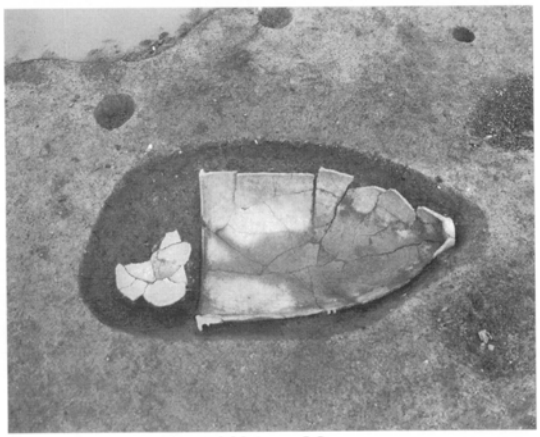
K3



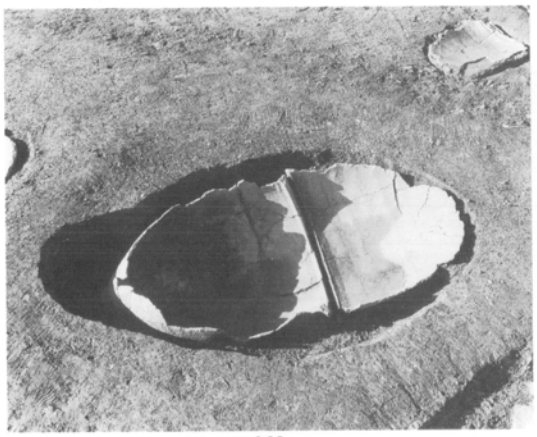
K12～14



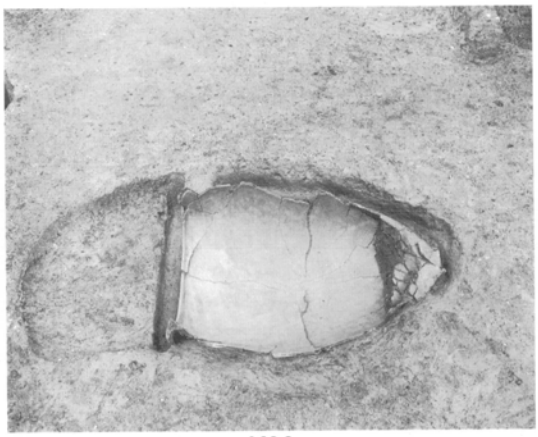
K5



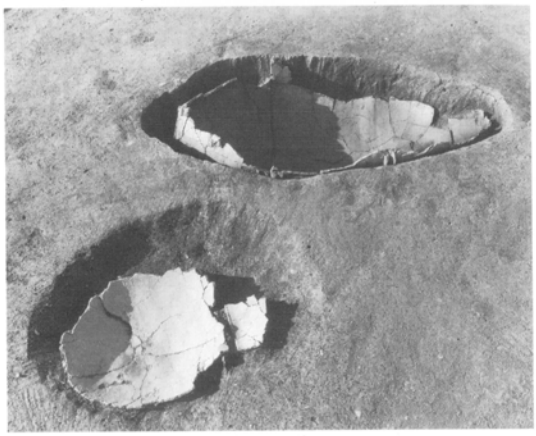
K21・23



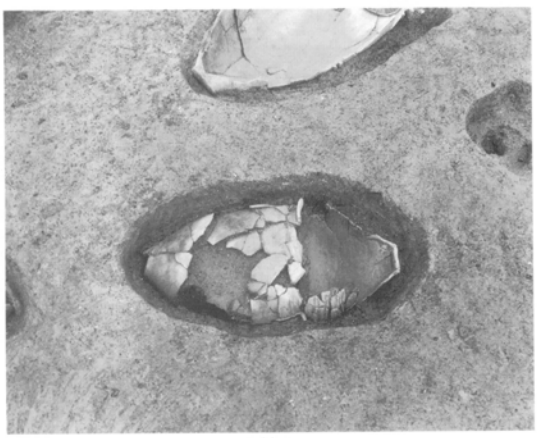
K9



K30

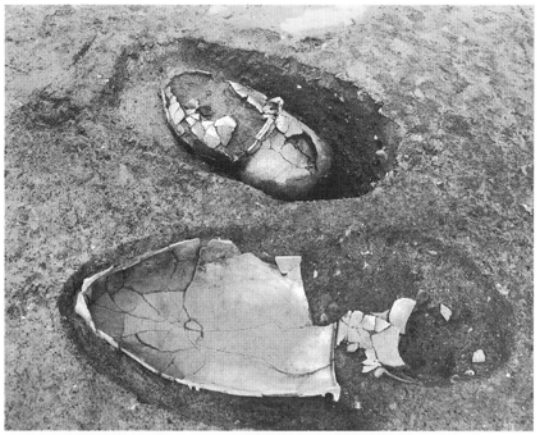


K7・8

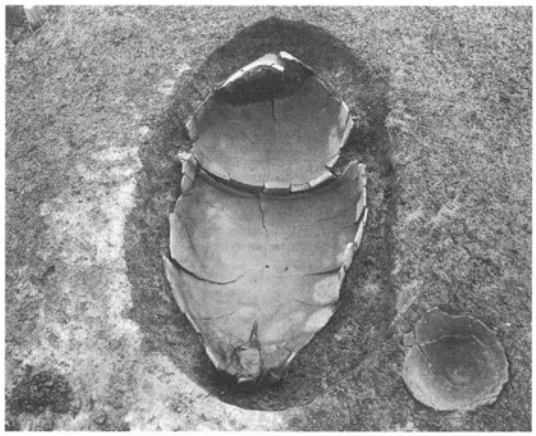


K31

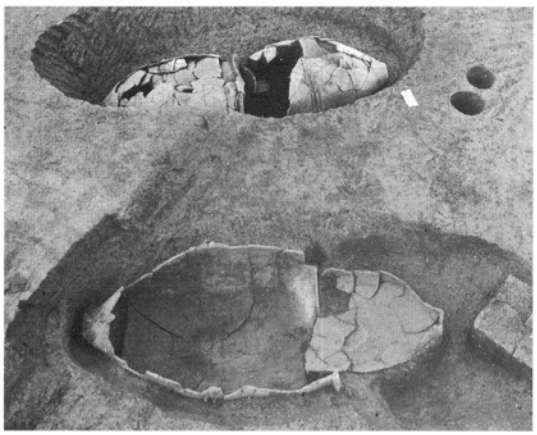
大石地区甕棺墓出土状況①



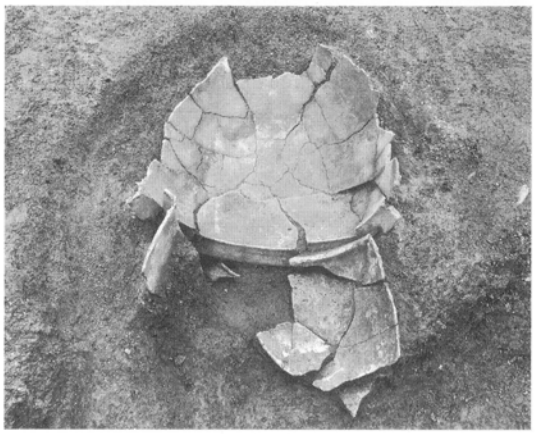
K34



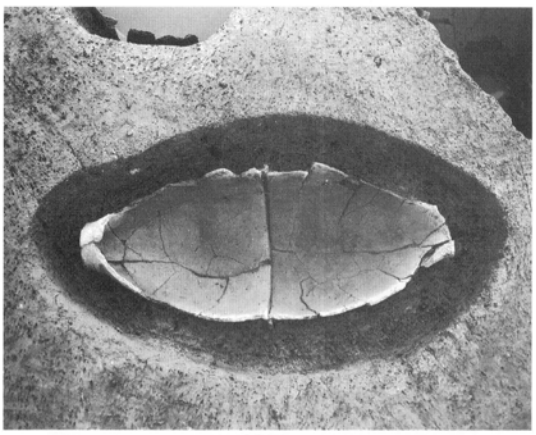
K54



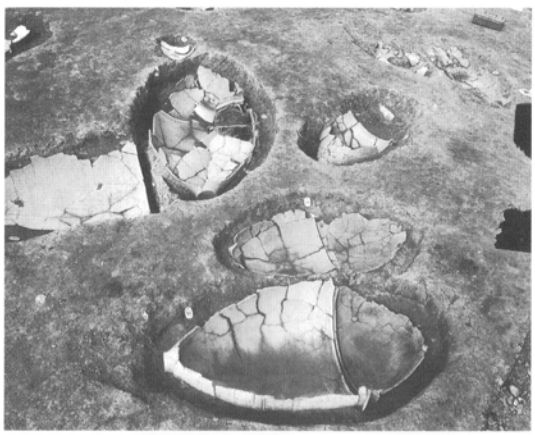
K36・37



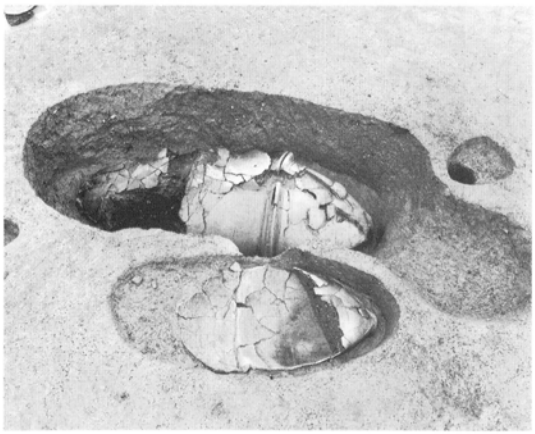
K58



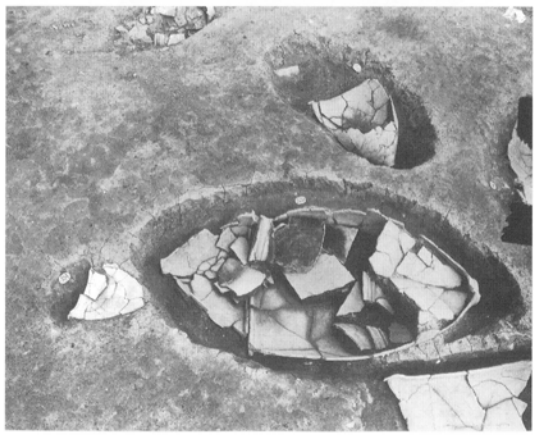
K39



K98

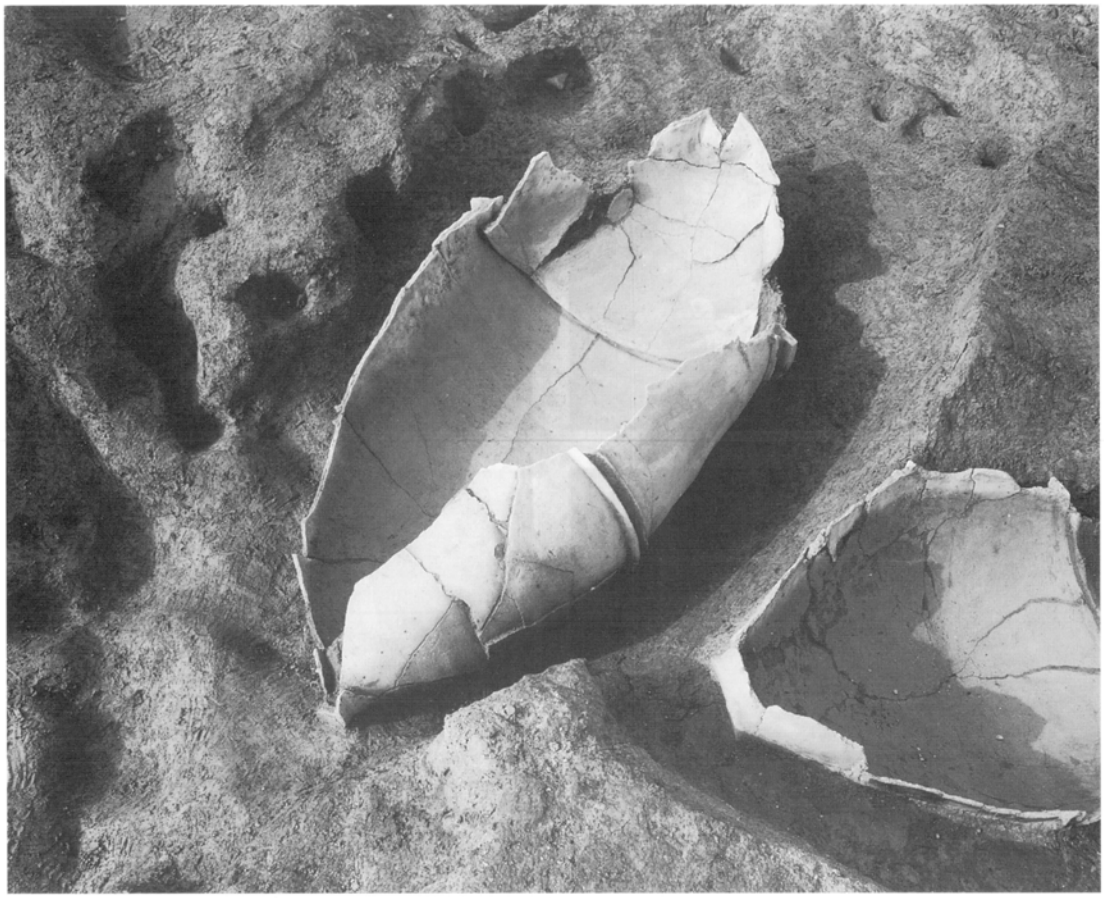


K40

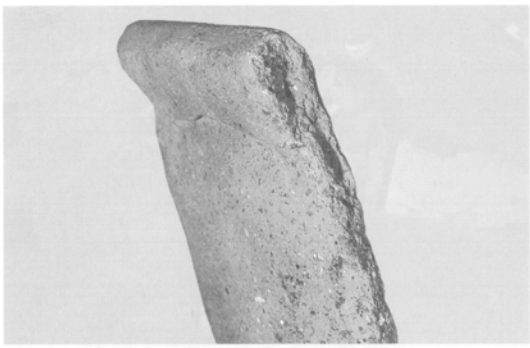


K102

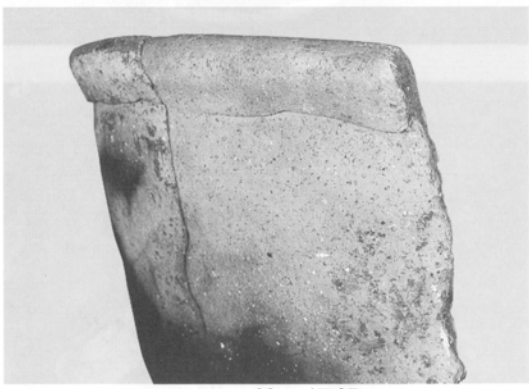
大石地区甕棺墓出土状況②



K80



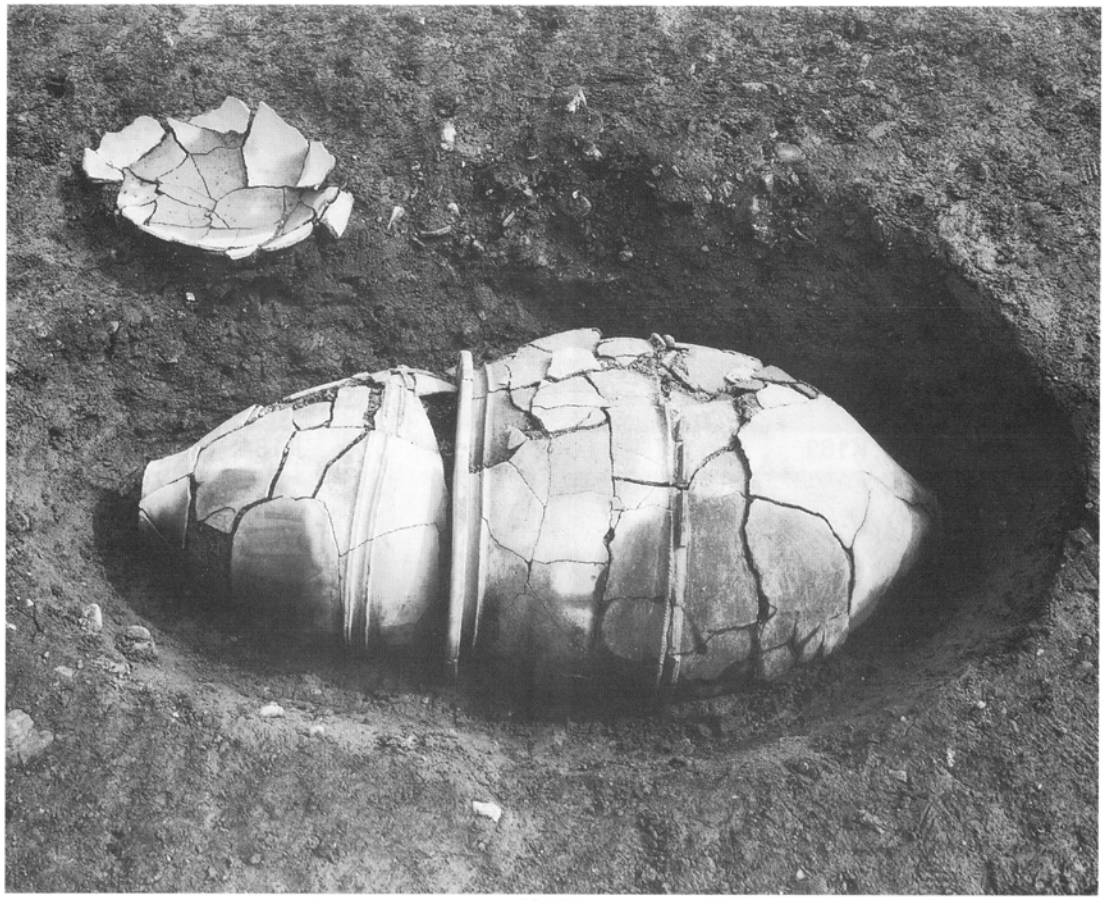
K80上棺口縁部



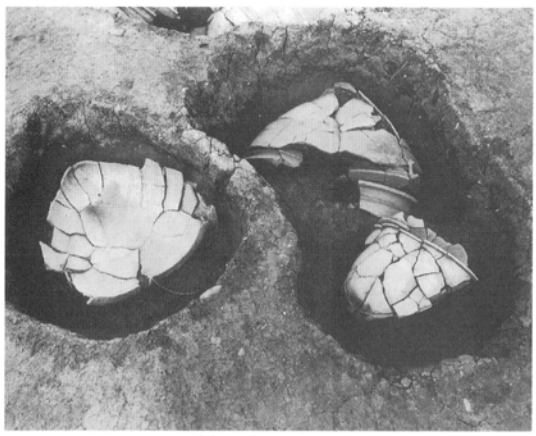
K80上棺口縁部

K80

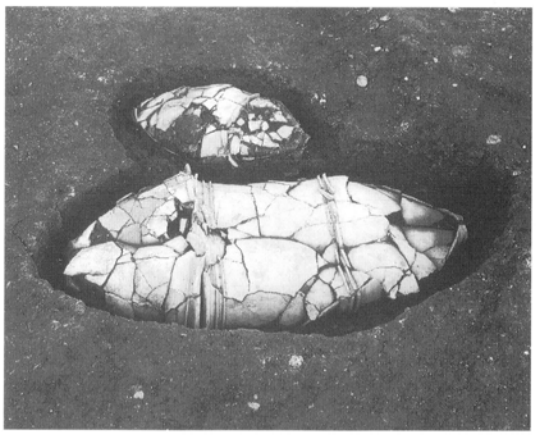
大石地区甕棺墓出土状況③



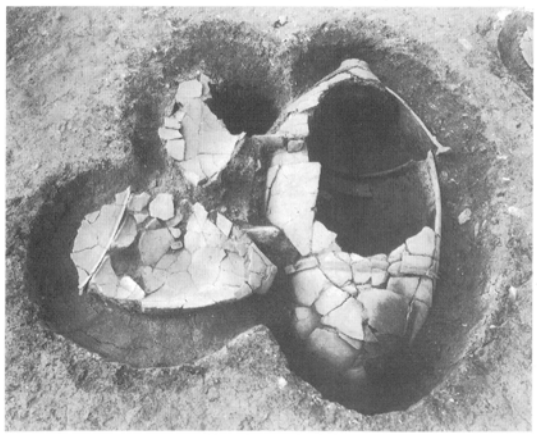
K155



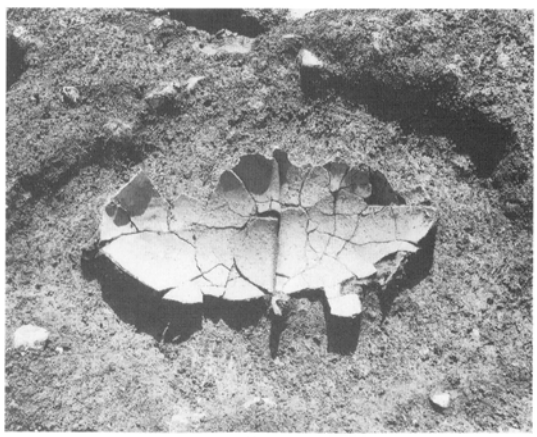
K112～114



K146・147

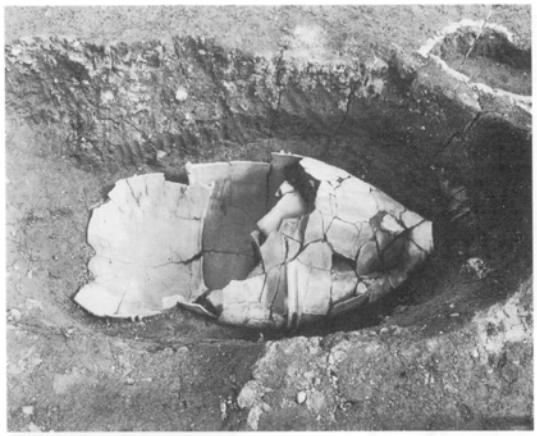


K118～120

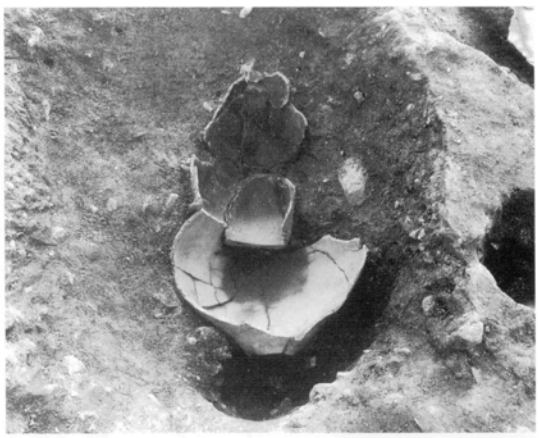


K158

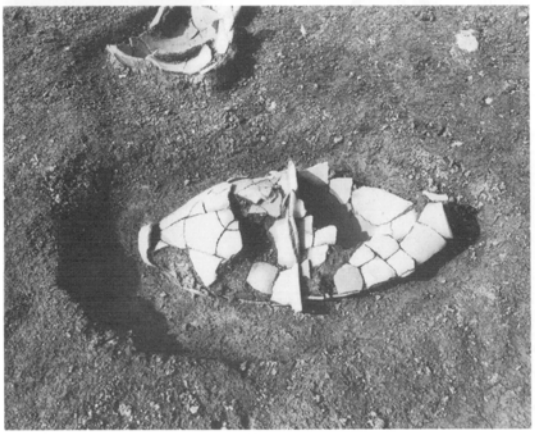
大石地区甕棺墓出土状況④



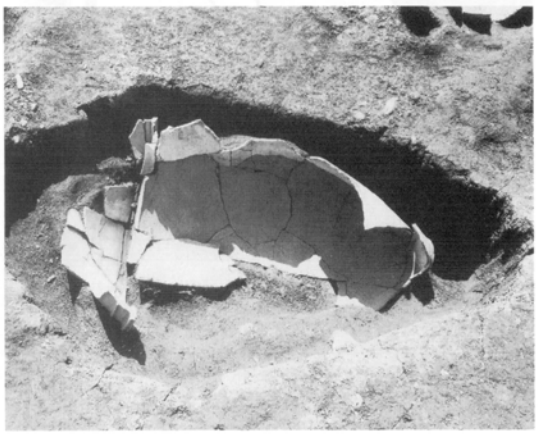
K169



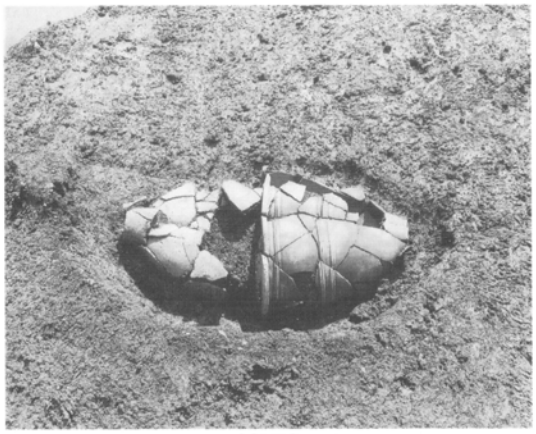
K184



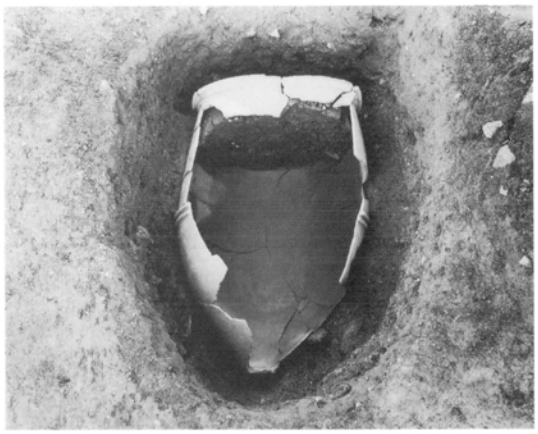
K164



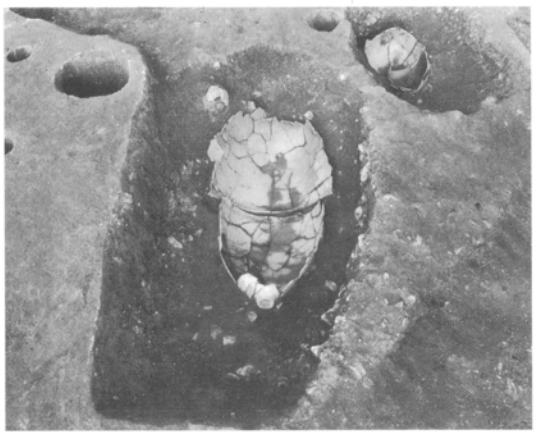
K191



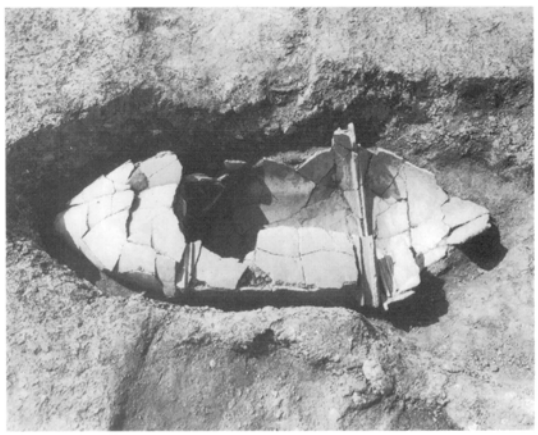
K176



K200

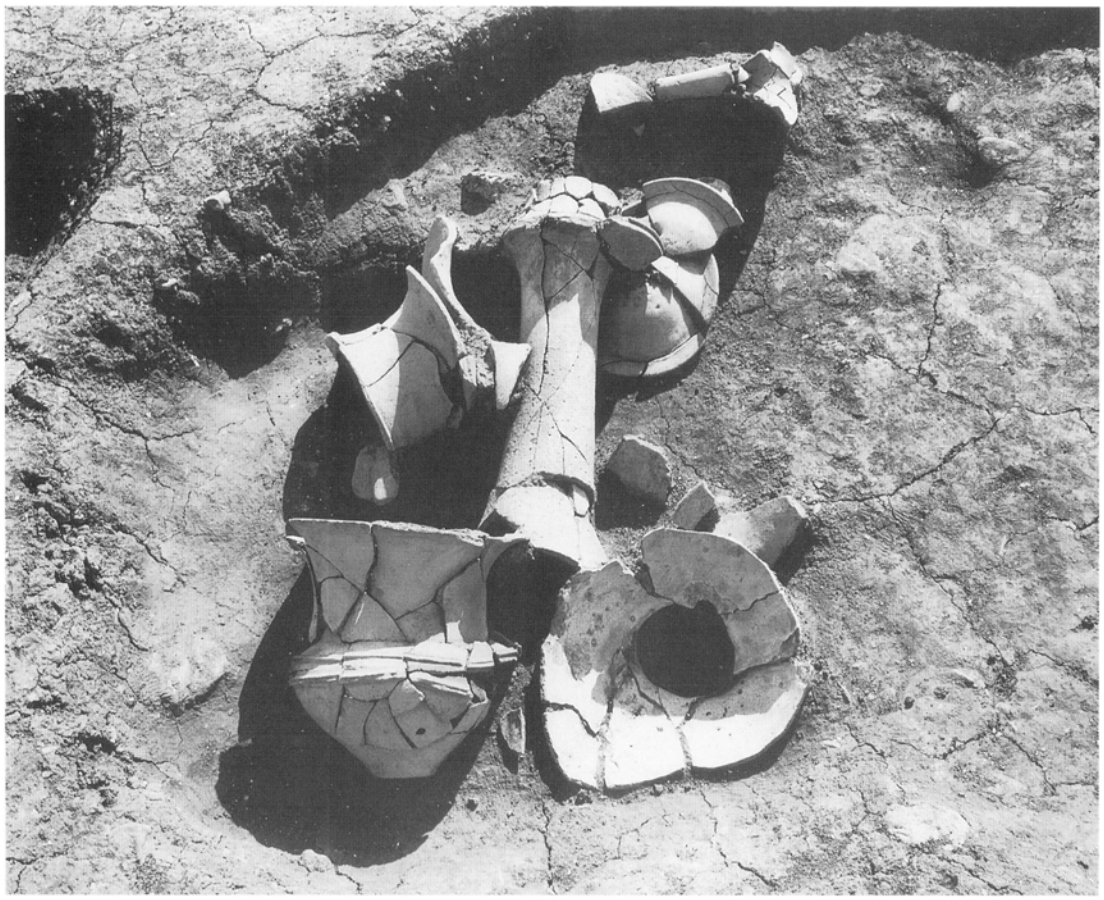


K183

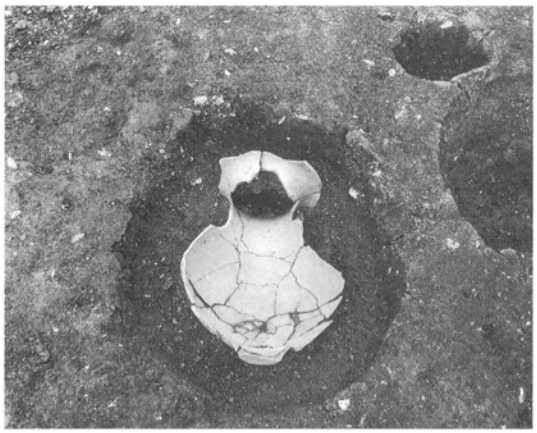


K201

大石地区甕棺墓出土状況⑤

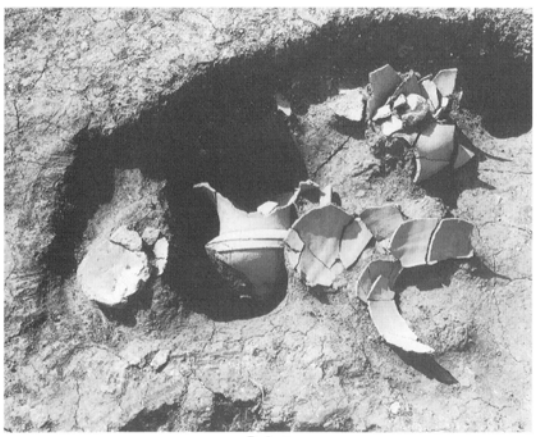


SA3

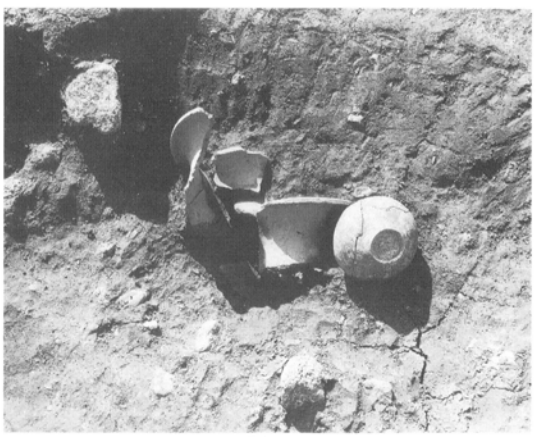


SA1

SA2

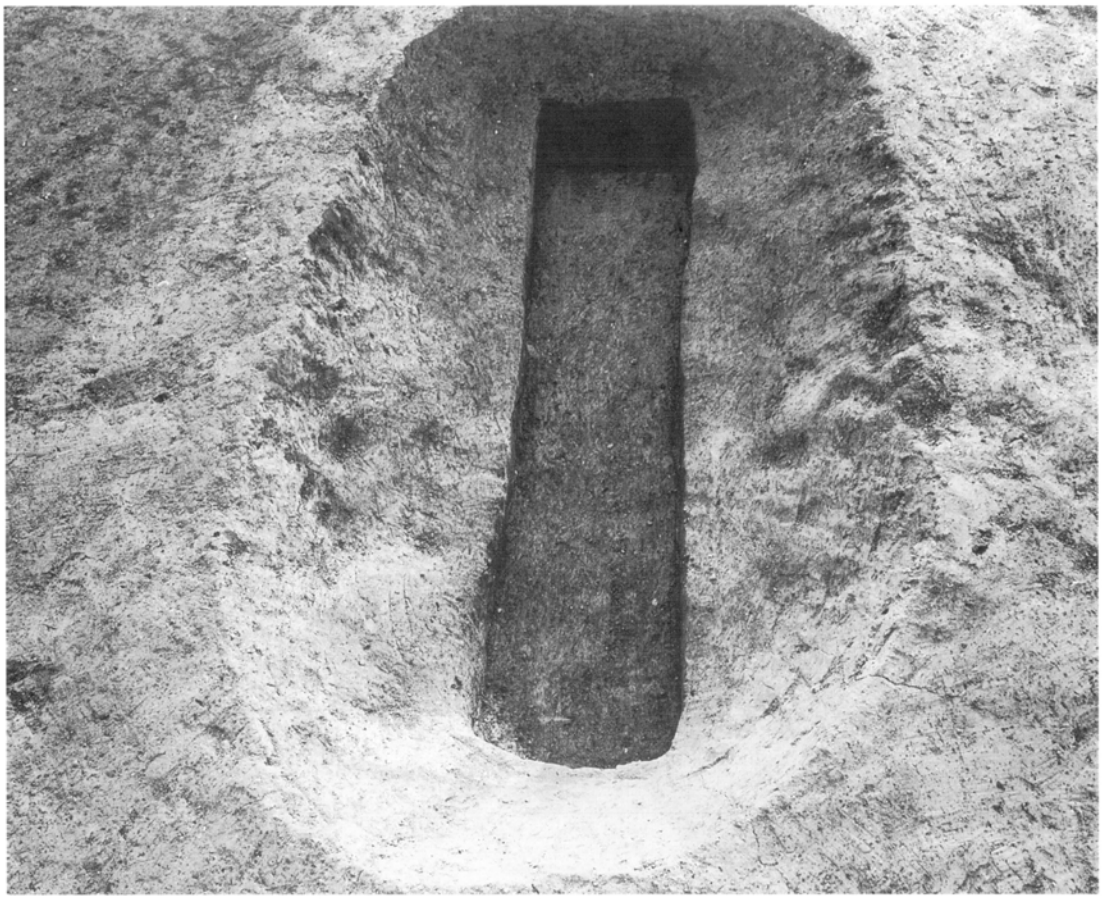


SA4

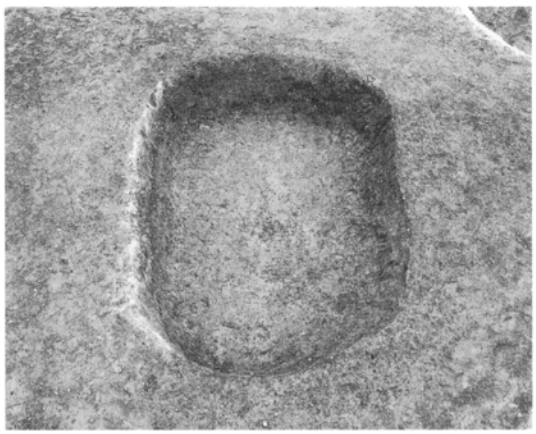


SA5

大石地区祭祀土壙出土状況

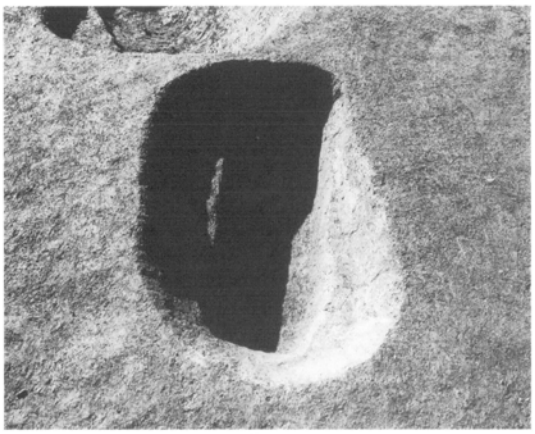


M3

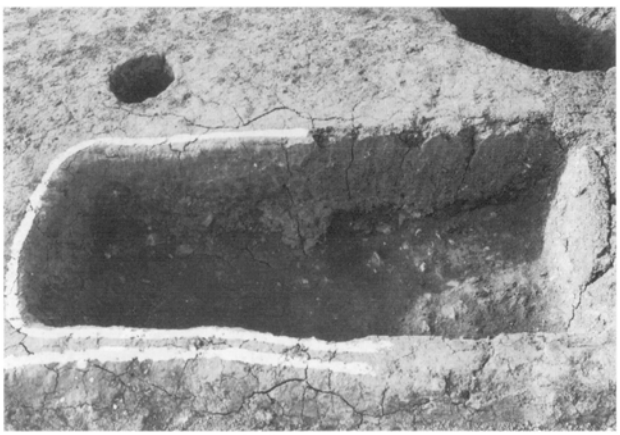


D2

D6



D3



D12

大石地区木棺墓・土壙墓出土状況

吉　武　遺　跡　群　XII

－弥生時代墓地の調査報告３－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集

2000年３月30日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８番１号
印　刷　栄光印刷株式会社
　　福岡市東区松田１丁目９番30号

吉武遺跡群 XII

付　図